

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 28

平成23年度発掘調査報告 (第1分冊)

若宮大路周辺遺跡群

極楽寺旧境内遺跡

宝 蓮 寺 跡

覚園寺旧境内遺跡

若宮大路周辺遺跡群

由比ガ浜中世集団墓地遺跡

平成24年3月

鎌倉市教育委員会



宝蓮寺跡 第6面全景



覺園寺旧境内遺跡 I区3d面全景

ご あ い さ つ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和59年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ6割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成16～19及び21年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅等の建築に伴う発掘調査の記録として12ヶ所の調査成果を掲載しています。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。

平成24年3月30日
鎌倉市教育委員会

例 言

- 1 本書は平成23年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書（第1分冊及び第2分冊）である。
- 2 本書所収の調査地点及び所収分冊は別表・別図のとおりである。
- 3 現地調査及び出土資料の整理は、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
- 4 出土遺物及び調査に関する図面及び写真等は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。
- 5 各調査の成果は、それぞれの報告を参照されたい。

総目次

(第1分冊)

ごあいさつ	I
例言	II
目次	III
本誌掲載の平成16～19・21年度発掘調査地点一覧	VI
平成23年度調査の概観	VII
調査地点位置図	X
1 若宮大路周辺遺跡群 (No.242) 小町三丁目425番1の一部外地点	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	5
第二章 調査の概要	9
第三章 検出遺構と出土遺物	12
第四章 まとめ	28
2 極楽寺旧境内遺跡 (No.291) 極楽寺二丁目948番8地点	
第一章 調査地点の概観	43
第二章 調査の概要	49
第三章 調査結果	50
第四章 まとめと考察	73
3 宝蓮寺跡 (No.374) 佐助二丁目905番3地点	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	93
第二章 調査の概要	98
第三章 検出遺構と出土遺物	103
第四章 まとめ	137
4 覚園寺旧境内遺跡 (No.435) 二階堂字会下351番1地点	
第一章 調査地点の概観	165
第二章 調査の概略	174
第三章 調査結果	176
第四章 まとめと考察	205

5 若宮大路周辺遺跡群 (No.242) 小町二丁目 1 1 番 2 地点	
第一章 調査の経緯	239
第二章 遺跡の位置と歴史的環境	239
第三章 調査経過	247
第四章 検出遺構と出土遺物	250
第五章 まとめ	296

6 由比ガ浜中世集団墓地遺跡 (No.372) 由比ガ浜四丁目 1 1 0 7 番 3 2 地点	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	329
第二章 調査経過	334
第三章 検出遺構と出土遺物	338
第四章 まとめ	357

(第 2 分冊)

例言	Ⅱ
目次	Ⅲ

7 清涼寺跡 (No.183) 扇ガ谷四丁目 5 5 6 番 4 外地点	
第一章 調査の概要	5
第二章 発見した遺構と遺物	10
第三章 まとめ	49

8 今小路西遺跡 (No.201) 由比ガ浜一丁目 1 5 7 番 7 外地点	
第一章 調査地点概観	90
第二章 調査の概要	102
第三章 調査結果	104
第四章 まとめと考察	148

9 西御門遺跡 (No.325) 西御門一丁目 5 5 番 5 地点	
第一章 本調査地点の位置と歴史的環境	181
第二章 調査の概要	184
第三章 検出遺構と出土遺物	188
第四章 まとめ	209

10 今小路西遺跡 (No.201) 由比ガ浜一丁目213番12地点	
第一章 調査の概観	232
第二章 検出された遺構と遺物	237
第三章 まとめ	250
11 名越ヶ谷遺跡 (No.231) 大町四丁目1888番の一部地点	
第一章 遺跡の位置と環境	265
第二章 調査の概要	271
第三章 検出遺構と出土遺物	276
第四章 まとめ	301
12 田楽辻子周辺遺跡 (No.33) 浄明寺一丁目556番6外地点	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	328
第二章 調査の方法と経過	339
第三章 基本土層	340
第四章 発見された遺構と遺物	341
第五章 調査成果のまとめ	349

本誌掲載の平成16～19・21年度発掘調査地点一覧

第1分冊

	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
① ★	若宮大路周辺遺跡群 (NO,242)	小町三丁目 425 番 1 の一部外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	28㎡	平成 17 年 1 月 25 日 ～平成 17 年 2 月 9 日
② ◎	極楽寺旧境内遺跡 (NO,291)	極楽寺二丁目 948 番 8	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	社寺	50.5㎡	平成 17 年 4 月 7 日 ～平成 17 年 5 月 20 日
③ ◎	宝蓮寺跡 (NO,374)	佐助二丁目 905 番 3	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	社寺	72.99㎡	平成 17 年 4 月 7 日 ～平成 17 年 7 月 8 日
④ ◎	覚園寺旧境内遺跡 (NO,435)	二階堂字会下 3 5 1 番 1	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	社寺	30㎡	平成 17 年 6 月 22 日 ～平成 17 年 8 月 31 日
⑤ ◎	若宮大路周辺遺跡群 (NO,242)	小町二丁目 1 1 番 2	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	都市	44㎡	平成 17 年 7 月 12 日 ～平成 17 年 8 月 31 日
⑥ ◎	由比ガ浜中世集団墓地遺跡 (NO,372)	由比ガ浜四丁目 1107 番 32	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	都市	73.5㎡	平成 17 年 9 月 16 日 ～平成 17 年 10 月 25 日

第2分冊

	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
⑦ ◎	清涼寺跡 (NO,183)	扇ガ谷四丁目 556 番 4 外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	社寺	60.00㎡	平成 17 年 7 月 21 日 ～平成 17 年 9 月 30 日
⑧ ◎	今小路西遺跡 (NO,201)	由比ガ浜一丁目 157 番 7 外	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	都市	63.75㎡	平成 17 年 10 月 31 日 ～平成 18 年 1 月 18 日
⑨ ▲	西御門遺跡 (NO,325)	西御門一丁目 5 5 番 5	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	30.00㎡	平成 18 年 4 月 4 日 ～平成 18 年 5 月 29 日
⑩ ▲	今小路西遺跡 (NO,201)	由比ガ浜一丁目 2 1 3 番 1 2	個人専用住宅 (地下室・鋼管杭構造)	都市	10.50㎡	平成 19 年 3 月 12 日 ～平成 19 年 3 月 30 日
⑪ ◇	名越ヶ谷遺跡 (NO,231)	大町四丁目 1888 番の一部	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	24.00㎡	平成 19 年 7 月 2 日 ～平成 19 年 7 月 26 日
⑫ ■	田楽辻子周辺遺跡 (NO, 33)	浄明寺一丁目 5 5 6 番 6 外	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	都市	39.00㎡	平成 21 年 4 月 22 日 ～平成 21 年 5 月 19 日

★印は平成16年度実施の発掘調査
◎印は平成17年度実施の発掘調査
▲印は平成18年度実施の発掘調査
◇印は平成19年度実施の発掘調査
■印は平成21年度実施の発掘調査

平成23年度調査の概観

平成23年度の緊急調査実施件数は、前年度からの継続調査1件を含む8件であり、調査面積は711.5㎡であった。これを前年度の14件、746㎡と比較してみると件数は6件の減少となり、調査面積も34.5㎡の減少となった。しかし調査面積は平均で1件あたり約88.94㎡（前年度は53.29㎡）であり、1件あたりの面積は前年度より大きく増加している。

調査原因は個人専用住宅の建設が5件、店舗等併用住宅の建設が3件である。これらの工種別内訳は、鋼管杭打ち工事が2件（25%）、地盤改良工事が6件（75%）となっている。今年度も鋼管杭打ち工事や地盤改良工事が発掘調査の主体的な原因になっている傾向が顕著にみられた。以下、各地点の調査成果の概要を紹介する。（調査面積及び調査期間等については「平成23年度調査地点一覧」を参照。）

1 桑ヶ谷療病院跡 (No.294)

長谷三丁目に位置する。長谷寺の北側に存在する谷戸の中ほどに位置する。宅地の地盤面は谷戸中央を通る道路よりも1.5mほど上にあるが、遺構は道路より50cmほど上で確認される。地盤の表層改良工事を行う店舗併用個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査の結果、泥岩による整地層が数層、土留めの痕跡等が確認でき、整地層上面では建物跡など生活痕跡を確認した。

2 米町遺跡 (No.245)

大町二丁目に位置する。県道鎌倉・葉山線の南側、名越ヶ谷と呼ばれる大規模な谷戸の入り口にある。地盤の柱状改良を行う個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀から14世紀代の整地層、井戸等が出土した。過去に近隣で実施した発掘調査成果とあわせ、当時の都市民の土地利用状況を明らかにする上で貴重な資料となった。

3 報国寺遺跡 (No.306)

浄明寺二丁目に位置する。報国寺の存する谷戸内にあり、地盤の柱状改良を行う個人住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀半ばに岩盤を削平して作りだした平場の痕跡や、14世紀代の礎板を伴う柱穴、囲炉裏、面取り柱の一部などが出土した。絵図等から、報国寺の旧境内であることが明らかになっており、境内地の土地利用状況やその変遷を復元するうえで重要な資料となった。

4 名越ヶ谷遺跡 (No.231)

大町三丁目に位置する。県道鎌倉・葉山線の北側、名越ヶ谷と呼ばれる大規模な谷戸の入り口にある。地盤の表層改良工事を内容とする個人専用住宅の建築にともなって発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀から14世紀にかけての整地層を確認し、その上面で井戸数基と柱穴など建物・生活の痕跡を検出した。

5 今小路西遺跡 (No.201)

扇ガ谷一丁目に位置する。今小路の西側に少し入った場所にある。鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする店舗併用個人住宅の建築にともない発掘調査を実施した。

調査の結果、近現代のゴミ穴に壊されてはいたものの、中世では13世紀代から14世紀にかけての泥岩による整地層が数層存在し、礎板を伴う柱穴など建物の痕跡が残されていることが明らかとなった。地下水位も高く、木製品の残存状況も良好である。武家地と想定される場所での調査であり、当時の生活を知る上で貴重な資料である。

6 円覚寺門前遺跡 (No.287)

山ノ内に位置し、県道を挟んで円覚寺の南西側向かいにある。地盤の柱状改良工事を内容とする集合住宅併用個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、中世は14世紀代の整地層、泥岩で護岸を施した溝等が出土している。

7 若宮大路周辺遺跡群 (No.242)

小町二丁目に位置する。JR鎌倉駅の北東側にある。地盤の柱状改良工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の整地層、かわらけ集中土坑が出土している。

8 若宮大路周辺遺跡群 (No.242)

小町二丁目に位置する。大巧寺の西側参道と、小町大路の接する南側角に存する。地盤の柱状改良工事を内容とする個人専用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。

調査の結果、旧小町大路の一部が出土した。中世鎌倉の都市計画のあり方を検討するうえで重要な発見であった。

平成23年度発掘調査地点一覧

	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
1 ★	桑ヶ谷療病院跡 (No. 294)	長谷三丁目 630 番 1	店舗併用住宅 (鋼管杭構造)	病院跡 遺物散布地	107.00㎡	平成 23 年 1 月 28 日 ～平成 23 年 4 月 28 日
2	米町遺跡 (No. 245)	大町二丁目 9 番 10	個人専用住宅 (柱状改良工事)	都 市	72.00㎡	平成 23 年 4 月 25 日 ～平成 23 年 7 月 8 日
3	報国寺遺跡 (No. 306)	浄明寺二丁目 474-8,9	個人専用住宅 (柱状改良工事)	寺 院	72.50㎡	平成 23 年 6 月 6 日 ～平成 23 年 8 月 26 日
4	名越ヶ谷遺跡 (No. 231)	大町三丁目 2354 番 1	個人専用住宅 (表層改良工事)	屋敷跡	58.00㎡	平成 23 年 7 月 22 日 ～平成 23 年 10 月 3 日
5	今小路西遺跡 (No. 201)	扇ガ谷一丁目 145 番 3、146 番 2	店舗併用住宅 (鋼管杭構造)	都 市	120.00㎡	平成 23 年 9 月 26 日 ～平成 24 年 1 月 23 日
6 ◎	円覚寺門前遺跡 (No. 287)	山ノ内 1338 番	賃貸併用住宅 (柱状改良工事)	都 市	120.00㎡	平成 24 年 1 月 12 日 平成 24 年 3 月 31 日～
7 ◎	若宮大路周辺遺跡群 (No. 242)	小町二丁目 281 番 2	個人専用住宅 (柱状改良工事)	都 市	104.00㎡	平成 24 年 1 月 23 日 ～平成 24 年 3 月 31 日
8 ◎	若宮大路周辺遺跡群 (No. 242)	小町一丁目 331 番 1	個人専用住宅 (柱状改良工事)	都 市	58.00㎡	平成 24 年 3 月 26 日 ～平成 24 年 3 月 31 日

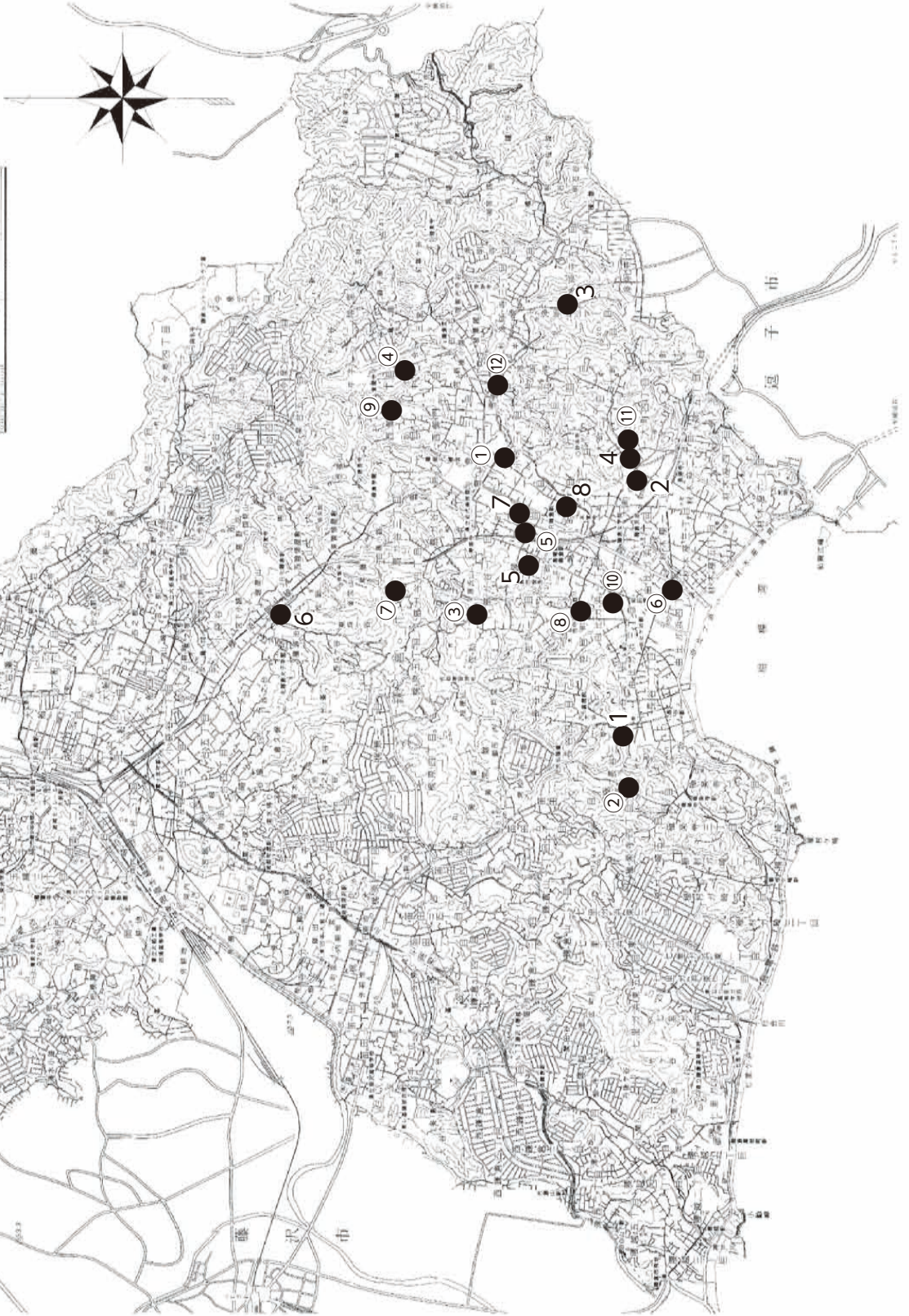
★印は平成 22 年度からの継続調査を示す。

◎印は平成 24 年度への継続調査を示す。

鎌倉市全図

平成23年度の緊急発掘調査地点(1~8)
本書掲載の平成16~19・21年度発掘調査地点(①~⑫)
※遺跡名は一覧表を参照

1 : 50,000



若宮大路周辺遺跡群 (No.242)

小町三丁目 425 番 1 の一部外

例 言

1. 本報は「若宮大路周辺遺跡群 (No.242)」内の一部、小町三丁目 425 番 1 一部外地点 (略称 WA0425) における個人専用住宅の建築にともなう埋蔵文化財発掘調査報告である。

2. 調査期間：平成 17 年 (2005) 1 月 25 日～同年 2 月 9 日 調査面積：28.00m²
現地調査・整理作業の体制は以下の通りである。

調査担当者：原 廣志

調 査 員：後藤健吾・須佐直子・太田美智子・宇都洋平・小野夏菜・梶岡溪音・赤堀祐子

調査補助員：橋本和之・銘苅春也・平山千絵・大塚悠介

作 業 員：秋田公佑・中須洋二・堀住 稔 (鎌倉市シルバー人材センター)

協力機関名：(社) 鎌倉市シルバー人材センター・鎌倉考古学研究所

4. 本報執筆は、原・宇都が稿を草した。

本報の挿図・写真図版の作成には、小野・赤堀・原が行った。

本報の掲載写真は、遺構の全景・個別を宇都・原があたり、出土遺物を須佐 (仁) が撮影した。

発掘調査における出土遺物、図面・写真などは鎌倉市教育委員会が保管している。

5. 本報の凡例は、以下の通りである。

・挿図縮尺 全側図：1/50 遺構図 1/40 遺物図 1/3

・遺物図 —・—・— は釉薬の釉際を示し、黒塗りは主にかわらけの墨書痕や灯明皿付着の油煤煙を表現している。さらに遺物観察表において手づくねかわらけは外底径の計測値は外底指頭痕と口縁部下位との稜部の数値を表わした。

・使用名称 本書で使用する用語のうち、「土丹 (どたん)」は泥岩、「鎌倉石」は池子層に顕著な凝灰岩質砂岩、「伊豆石」は相模川以西の河川・海浜に産する建物礎石に利用可能な扁平円礫を指す。

6. 本遺跡の現地調査及び資料整理に際して多くの方々からご助言とご協力を戴いた。記して感謝の意を表したい (敬称略、五十音順)。

秋山哲夫・鍛冶屋勝二・菊川 泉・菊川英政・古田戸俊一・五味文彦・汐見一夫・宗臺秀明・宗臺富貴子・玉林美男・中野晴久・松尾宣方・馬淵和雄

目次

本文目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	5
1. 遺跡の位置と地形	
2. 遺跡の歴史的環境	
第二章 調査の概要	9
1. 調査の経過	
2. 測量軸の設定	
3. 層序	
第三章 検出遺構と出土遺物	12
1. 上層の遺構と遺物	
2. 下層の遺構と遺物	
第四章 まとめ	28

挿 図 目 次

図1 調査地点位置図	5	図8 溝1	15
図2 調査地点と周辺遺跡	6	図9 溝2	16
図3 国土座標と調査区位置	9	図10 溝3 ab土層断面図	17
図4 調査区壁土層断面	11	図11 上・下層遺構各ピット	18
図5 上層遺構全測図	12	図12 各土坑・ピット出土遺物	19
図6 下層遺構全測図	13	図13 溝1・2出土遺物	20
図7 上・下層遺構各土坑	14	図14 溝3・遺構外出土遺物	21

表 目 次

表1 遺跡周辺の調査地点一覧表	7	表6 遺物観察表(5)	27
表2 遺物観察表(1)	23	表7 遺物分類別出土数量・比率表	29
表3 遺物観察表(2)	24	表8 溝1かわらけ型式別出土点数	29
表4 遺物観察表(3)	25	表9 溝1かわらけ器種別出土点数	29
表5 遺物観察表(4)	26		

図 版 目 次

図版 1	1～3 上層遺構全景・各遺構 ……	30	図版 6	溝2出土遺物(1) ……	35
図版 2	1～3 上層遺構土坑・ピット ……	31	図版 7	溝2出土遺物(2) ……	36
図版 3	1～3 下層遺構全景・各遺構 ……	32	図版 8	溝3a出土遺物 ……	37
図版 4	1～7 遺構、調査区壁土層断面 ……	33	図版 9	溝3b出土遺物 ……	38
図版 5	土坑・ピット出土遺物 ……	34			

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置と地形

若宮大路周辺遺跡群(県遺跡台帳No.242)は、鎌倉市中央部低地の北西部を占めており、鶴岡八幡宮から由比ヶ浜に至る鎌倉市基幹道路の若宮大路を中軸として、その東西両側を含んだ範囲を指した遺跡名称である。本遺跡地の範囲は若宮大路の東側で若宮大路御所を包括する「北条小町邸跡(同台帳No.282)」と「宇津宮辻子幕府跡(同台帳No.239)」を除く地域、また若宮大路の西側で鶴岡八幡宮寄りに位置した「北条時房・顕時邸跡(同台帳No.278)」を除いた範囲であり、北辺は鶴岡八幡宮社頭の東西路と「北条高時邸跡(同台帳No.281)」、西辺は今小路、東辺は滑川・小町大路の一部、南辺は大町大路(下馬四角で交差する東西路)に囲まれ南北約500～700mの広範囲に及んでいる。調査地点は、JR鎌倉駅から北東方向へ約500mで、若宮大路社頭から東方215mほど進んだ横大路と小町大路の交差点(塔ノ辻)に近い鎌倉市小町三丁目425番1の一部外に所在している。

現地表の海拔高をみると、本調査地点は10.20～40mほどである。周辺の地形は小町大路沿いでは日蓮辻説法碑辺りで海拔高約7.9mと北に向かって高くなり、また若宮大路社頭辺りで海拔高9.8mを測り、横大路沿いに東へ向かい緩やかに上がった地形を呈している。次に中世基盤層(中世地山)とされる黒褐色粘質土(暗茶褐色粘質土も同類の中世地山)の上面海拔高を比較してみると、小町大路を約150m南方の地点23(北条小町邸跡:雪ノ下一丁目935番地点・賀茂歯科用地)では海拔8.3m前後を計り、本調査地点へ向かい上っている。若宮大路東辺沿いに位置した地点28(同遺跡内:雪ノ下一丁目377番7地点・紅谷ビル用地)が約8.1mを測り、東へ向かって緩やかな傾斜を持ちながら高くなっている。従って本調査地点周辺は滑川右岸に形成された微高地の一角を占めていたことがわかる。



図1 調査地点位置図



図2 調査地点と周辺遺跡

2. 遺跡の歴史的環境

本遺跡は、鶴岡八幡宮の社頭より若宮大路を中軸にして東辺の小町大路周辺、西辺の今小路（武蔵大路）、南辺の大町大路を含んだ広範囲の地域である。本調査地点はその北東隅、小町大路北端で宝戒寺門前の「塔ノ辻」南隣した位置である。本調査地点前を南北に走る小町大路については、『吾妻鏡』建久二年（1191）三月四日の条に南風が烈しく丑の刻に小町大路の辺が失火し、北条義時・時房などの邸以下人屋数十軒が焼亡、鶴岡八幡宮、大蔵幕府も炎上したとあるのが記事の初見である。また嘉禎元年（1235）六月二十九日の条には、明王院供養で將軍頼経が宇津宮辻子御所の南門を出て小町大路を北に行き、塔ノ辻を東に向かったとの記事がある。さらに小町大路の「小町」の名は、『吾妻鏡』建長三年（1251）十二月三日条と、文永二年（1265）三月五日条の二度にわたり経済統制を目的とする何箇所かの町屋免許地を規定した鎌倉幕府法令に登場している。免許地は小町の他に大町、米町（穀町）、魚町、和賀江、亀谷辻、気和飛坂（化粧坂）山上、大倉辻などに与えられ、そこで日常的商品売買が行われていたという。従って塔ノ辻に近いこの付近は鎌倉幕府の中核域であるとともに、小町大路で町屋の多くと連なり和賀江津へ至り、さらに六浦道から朝比奈超えで外港六浦津へと繋がる経済的な動脈であったと想像され、小町大路は人や物資が盛んに往来し、集散した中世都市鎌倉の中では繁華な地域であったと思われる。

宝戒寺はもと上野寛永寺末の天台宗、金竜山釈満院円頓と号す。開山は円観慧鎮、開基は後醍醐天皇である。元弘三年（1333）東勝寺で自刃した北条高時の菩提を弔うために高時の邸跡に後醍醐天皇が建立したと伝える。同寺に所蔵する江戸末期所作（18世紀中葉の嘉永頃）の『宝戒寺境内領地図』には諸堂の位置とともに、その周囲に門前屋敷や島を、背後の谷地には土地所有者及び永高が明示され、近世末の寺容が描かれている。この絵図の門前屋敷に記された人名から察すると、本調査地点は宝戒寺惣門の南側に位

置した恐らく四郎衛門または吉蔵の屋敷の一部であった可能性が考えられる。

なお、調査地点周辺の発掘調査事例については「表1 周辺遺跡の調査地点一覧表」を参照されたい。

【参考文献】

- 白井永二編 1986 『鎌倉事典』東京堂出版
貫 達人 1971 「北条氏亭址考」『金沢文庫研究紀要』第8号
貫 達人・川副武胤 1980 『鎌倉廃寺事典』
三浦勝男 1992『鎌倉の古絵図』Ⅲ(再版) 鎌倉国宝館

表1 周辺遺跡の調査地点一覧表(図2)

◎若宮大路周辺遺跡群(No.242)

1.小町2-373-1の一部(原 1998 未報告)
2.小町2-409-9外(馬淵・伊丹 2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23(第2分冊)』)
3.小町2-402-5(手塚・野本 2000)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17(第1分冊)』
4.小町2-345-2(馬淵 1985『小町二丁目345番2地点遺跡』)
5.小町1-325-イ(佐藤・原 1994『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10(第3分冊)』)
6.小町1-322-2(菊川 1987 未報告)
7.小町1-321-1(宮田 1996『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』同発掘調査団)
8.小町1-322-1(宮田 1997『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』)
9.小町1-319-2(松尾ほか 1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』)
10.小町1-309-5(齋木 1983『小町一丁目309番5地点発掘調査報告書』)
11.小町1-309-4(松尾ほか 1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』)

◎北条高時邸跡(No.281)

12.小町3-426-3(原・佐藤 1996『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12(第2分冊)』)
13.小町3-451-1(菊川・森 2004『小町三丁目451番1地点』)

◎政所跡(No.247)

14.雪ノ下3-965(手塚・瀬田 1992『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告書8』)
15.雪ノ下3-966-1(手塚・瀬田 1992『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告書8』)
16.雪ノ下3-986-4(宗臺・馬瀬 2001『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
17(第1分冊)』) 17.雪ノ下3-988(手塚・田畑 1993『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9(第3分冊)』)
18.雪ノ下3-987-1・2(手塚・宮田 1991『政所跡』同発掘調査団)
19.雪ノ下3-970-2外(野本 1999『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15(第2分冊)』)

◎北条小町邸跡 (No.281)

20.雪ノ下1-407-3の一部(原ほか 2005『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21(第2分冊)』)
21.雪ノ下1-440の一部(馬淵・鍛冶屋・松原 2010『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書26(第1分冊)』)
22.雪ノ下1-432-2(菊川 1988『鎌倉市埋蔵文化財近調査報告書5』)
23.雪ノ下1-432-1(松尾ほか 1983『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報I』)
24.雪ノ下1-400-1(馬淵・鍛冶屋・松原 2002『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18(第2冊)』)
25.雪ノ下1-401-5外(馬淵・鍛冶屋・松原 2003『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19』)
26.雪ノ下1-395(菊川 1988『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5』)
27.雪ノ下1-374-2(玉林ほか 1985『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書2』)
28.雪ノ下1-377-6・7(馬淵・岡・秋山 1996『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12(第2分冊)』)
29.雪ノ下1-372-7(馬淵 1984『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1』)
30.雪ノ下1-371-1(馬淵 1985『北条泰時・時頼邸跡』同遺跡発掘調査団)
31.雪ノ下1-369外(田代 1989 未報告)
32.雪ノ下1-370-1(土屋・宗臺 1998『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14(第1分冊)』)
33.雪ノ下1-369外(瀬田 1990『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7』)
34.雪ノ下1-369-1(原・秋山・須佐 1998『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14(第2分冊)』)
35.雪ノ下1-419-3(玉林 1987『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書3』)
36.雪ノ下1-367-1・368-1(諸星・富田・森 2000『北条小町邸跡(泰時・時頼邸)』同遺跡発掘調査団)

◎宇津宮辻子幕府跡 (No.239)

37.小町2-390-2外(宇都 2010『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書26』)
38.小町2-374-1(原 1998『第22回神奈川県遺跡調査・研究会一発表要旨一』「鎌倉市宇津宮辻子幕府跡」)
39.小町2-361-1(手塚 1990 未報告)
40.小町2-361-1(原・小林・須佐 1996『宇津宮辻子幕府跡発掘調査報告書』同遺跡発掘調査団、『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13(第2分冊)』)
41.小町2-354-2(松尾 1997 未報告)
42.小町2-354-12(熊谷・浜野・佐藤 1993『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9(第3分冊)』)
43.小町2-354-2(継 1993『第3回鎌倉市遺跡調査・研究発表会』「宇津宮辻子幕府跡遺跡の調査一発表要旨一」)
44.小町2-389-1(原・佐藤 1996『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12(第1分冊)』)

◎北条時房・顕時邸跡 (No.278)

45.雪ノ下1-274-2(原・福田 1988『北条時房・顕時邸跡』同遺跡発掘調査団)
46.雪ノ下1-273-口(原 1988『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書4』)
47.雪ノ下1-272(宗臺・宗臺 1998『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書4』)
48.雪ノ下1-271-1(原・田代 1989『北条時房・顕時邸跡』同遺跡発掘調査団)
49.雪ノ下1-265-3(田代・原 1989『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6』及び宗臺・宗臺 1999『北条時房・顕時邸跡一中世都市鎌倉中心域の調査』同遺跡発掘調査団)

第二章 調査の概要

1. 調査の経過

本調査地点は個人専用住宅の建設に先立つ発掘調査である。基礎工事に際して地盤の柱状改良工事とするものであったため、埋蔵文化財に影響を及ぼすと判断されたので鎌倉市教育委員会による遺構確認の試掘調査が行われた。その結果、現地下15～40cmまで表土が確認され、その直下は中世遺物包含層をほとんど含まずに上・下層遺構面(生活面)の存在が確認された。中世前期の遺構・遺物が明らかになり、建築工事による埋蔵文化財への影響が避けられないと判断され、発掘調査を実施する運びとなった。

現地調査は平成17年1月25日に機材を搬入して、重機により試掘データに基づいて遺構面を傷つけないように地表下20cm程までの表土層を除去した後、以下を人力により掘り下げての遺構検出をおこなった。調査面積は28.0㎡が対象である。調査の結果、土坑、溝、柱穴列、ピットなどにより構成された遺構群が検出され、それに伴い12世紀末葉～13世紀後葉にかけての所産遺物のかわらけ・陶磁器類・金属製品などが検出された。同年2月9日までの間に必要な記録作業を行い、同日に機材撤収して現地調査を終了した。調査の経過については、以下に主な作業内容を日誌抜粋で記しておく。

【日誌抄】

1月25日(火) 調査区を設定して地表下20cmまで表土掘削。機材搬入とテント設営。

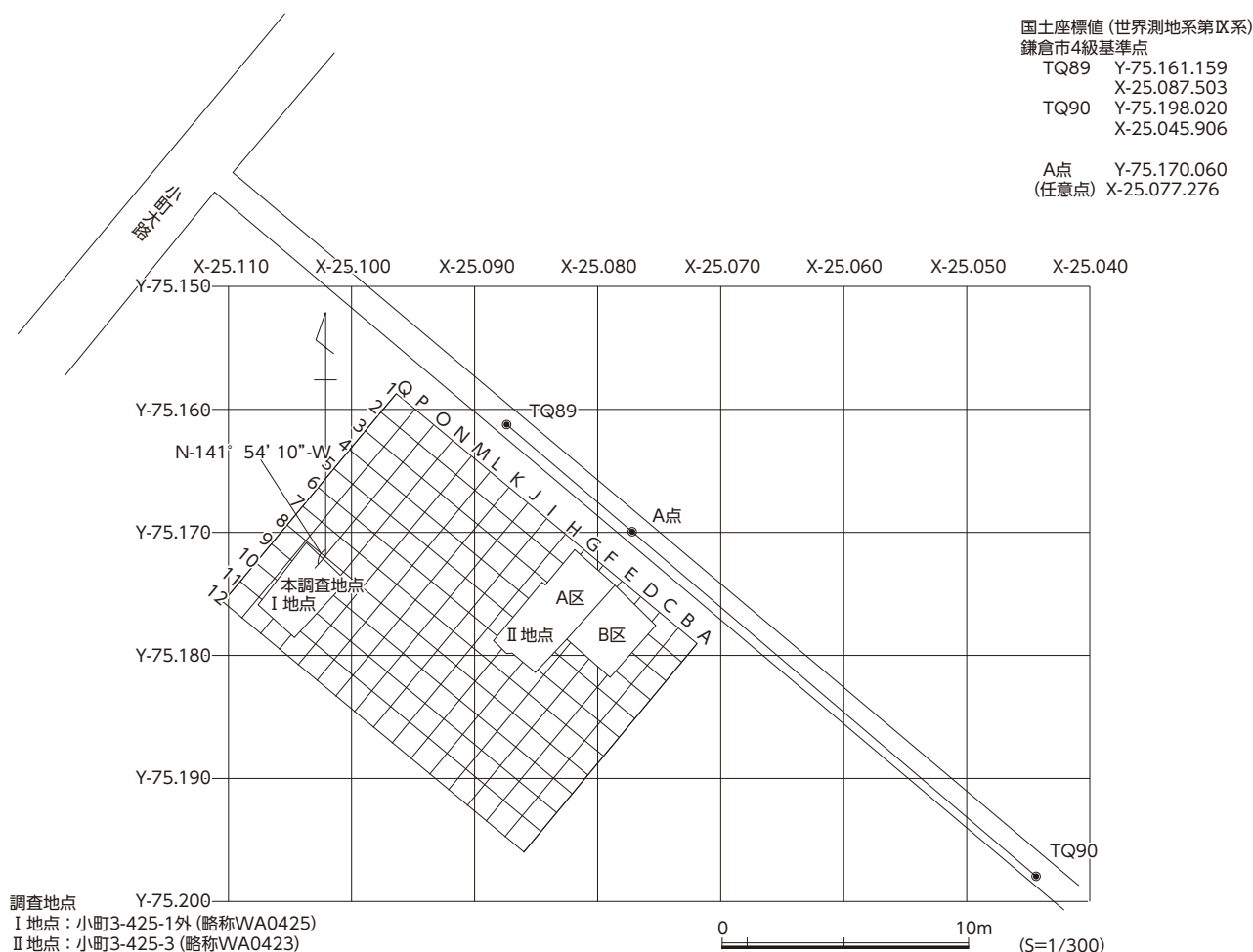


図3 国土座標と調査区位置

- 27日(木) 上層遺構の遺構確認作業。鎌倉市4級基準点を基として測量用方眼の設定。
28日(金) 測量用水準点の原点レベルを移動。
2月 1日(火) 上層遺構の全景・個別遺構の写真撮影及び平面図作成。
3日(木) 下層遺構の全景及び溝3・柱列など個別遺構、調査区各壁の写真撮影。
5日(水) 下層遺構の平面図作成。
7日(月) 調査区東壁・西壁・北壁土層堆積の断面図を作成。拡張トレンチの調査実施。
9日(水) 現地調査終了。調査関係各方面に発掘調査終了の旨を連絡して機材撤収。

2. 測量軸の設定

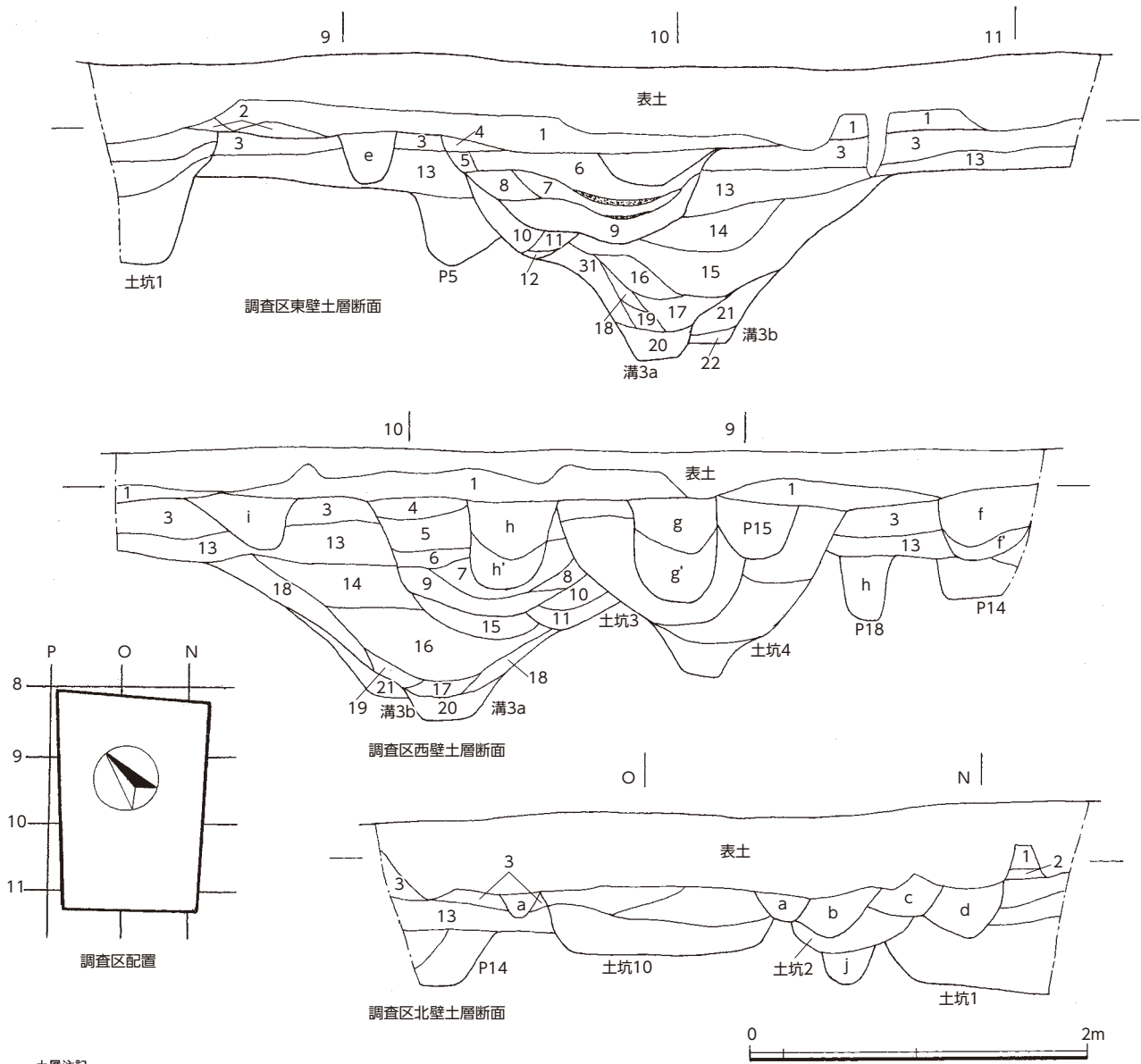
調査にあたって使用した測量軸の設定には、図3に示したように国土座標の数値(世界測地系第IV系)を用いており、測量グリットは調査区の軸方向にほぼ平行して南北の基準軸を設けI地点として調査を実施した。また図3の東に隣接したII地点(小町三丁目425番3地点・略称WA0423)は今回報告していないが、重複した調査期間(平成16年12月10～平成17年2月21日)で実施され、近接した地点から考えて同一敷地内の遺構検出も予想されたので測量方眼を統一して設定することにした。両地点の測量軸は調査地北側で宝戒寺南堀沿いを東西に走る路地面上に鎌倉市道路管理課が設定したTQ89・TQ90の市4級基準点(第IV座標系)を基準としている。この4級基準2点の関係から開放トラバース測量により算出して測量基準点にあたるグリット杭を設置している。さらに測量軸は東西軸と南北軸を2m方眼による軸線を配し、南北軸はA～Qのアルファベットの名称、東西軸に1～12の算用数字をそれぞれ付してグリット設定を行った。

現地調査で使用した国土座標は、日本測地系(座標AREA9)の国土座標数値であった。そこで整理作業の段階で国土地理院が公開する座標変換ソフト『web版TKY2JGD』によって世界測地系第IX系の座標数値に準じて算出し直した数値を図3に示した。また海拔高の原点移動については、本調査地点北方で宝戒寺惣門の道路を挟んだ向かい側の地点に設置されている鎌倉市3級水準点(No.53210＝海拔標高9.951m)から調査地点のグリットO-12杭上(L=10.387m)とQ-11杭上(L=10.415m)へ仮水準点を移設した。なおグリットの南北軸方位はN-141°54'10"-Wである。

3. 層序

現地表の海拔高は10.20～40mを計り、調査地は南から北へ向かって緩やかに上っていく宅地を形成している。鎌倉市教育委員会が実施した試掘調査の結果を基に、現地表下10～40cmまで堆積していた近現代客土や攪乱を含んだ表土を人力で掘り下げて中世遺構の検出を実施した。図4のように調査区各壁面の土層堆積は遺構覆土を除くと、表土から中世地山面(中世基盤層=黒褐色粘質土)まで概ね4層(1～3・13層)から構成され、3層及び13層の上面で確認したものを上層遺構(図5)、13層除去して表出した中世地山の上面で確認した遺構を下層遺構(図6)としてそれぞれ捉えてここに提示することにした。

表土を除去すると、調査区全体には1層にあたる厚さ10～20cmで茶褐色砂質土の締まりのない土層が観察された。この遺物包含層を取り除くと、やや締まりのある暗茶褐色粘質土の3層が海拔高約9.95m前後で現れた。この層の上面で確認できたのが上層遺構である。次に第3・13層にあたる厚さ30cm前後の暗茶褐色土を掘り下げると、中世基盤層を構成した黒褐色粘質土の平坦な面を確認することができた。これが下層遺構の確認面で海拔高9.60～70m付近であり、遺構には土坑、ピットに伴って屋敷を区画するような薬研堀の外郭溝が検出されている。



土層注記

1. 茶褐色砂質土：土丹粒、かわらけ片中量、小石、炭粒少量含む。粘性無し。締まりやや有り。
2. 暗灰色砂質土：貝砂を含み、かわらけ片、土丹塊・粒を少量含む。粘性無し。締まりやや有り。
3. 暗茶褐色弱粘質土：かわらけ片を中量、炭粒を少量含む。粘性僅かに有り。締まり有り。

〈溝1〉

4. 暗茶褐色砂質土：かわらけ片を中量、土丹粒を少量含む。粘性無し。締まりやや有り。
5. 暗灰色砂質土：かわらけ片、土丹粒を少量含む。粘性無し。締まり僅かに有り。
6. 暗灰色砂質土：土丹塊を中量、かわらけ片、炭粒を少量含む。粘性無し。締まり有り。
7. 茶褐色弱粘質土：土丹塊・粒を含む。粘性有り。締まり有り。
8. 黒灰色砂質土：拳大の土丹塊を多量、かわらけ片、炭粒を少量含む。粘性僅かに有り。締まりやや有り。
9. 茶褐色弱粘質土：土丹塊・粒を中量、かわらけ片を少量含む。粘性やや有り。締まりやや有り。

〈溝2〉

10. 暗茶褐色弱粘質土：土丹粒、炭粒を少量含む。粘性やや有り。締まり有り。
11. 暗灰色弱粘質土：土丹塊、炭粒を中量含む。粘性有り。締まり有り。
12. 暗茶褐色弱粘質土：土丹粒、かわらけ片を僅かに含む。粘性やや有り。締まり有り。
13. 暗茶褐色弱粘質土：かわらけ片、土丹粒を中量含む。粘性僅かに有り。締まり有り。

〈溝3a〉

14. 暗灰色粘質土：土丹粒、炭粒を少量含む。粘性やや有り。締まり有り。
15. 暗灰色弱粘質土：かわらけ片、小石、土丹粒、炭粒を少量含む。粘性無し。締まり無し。
16. 暗灰色弱粘質土：かわらけ片、土丹粒、炭粒、小石を少量含む。粘性無し。締まり無し。
17. 暗灰色粘質土：明黄褐色の地山の土がブロック状に中量混じる、炭粒を少量含む。粘性有り。締まり有り。
18. 暗灰色粘質土：土丹塊、かわらけ片、炭粒を僅かに含む。
19. 暗灰色粘質土：土丹粒を中量含む、地山の土が混じる。粘性やや有り。締まりやや有り。
20. 黒褐色粘質土：地山の土がブロック状に混じる。粘性有り。締まり有り。

〈溝3b〉

21. 黒褐色粘質土：砂が中量混じり、地山の土をブロック状に含む。粘性有り。締まり有り。
22. 明黄褐色粘質土：地山の土に似るが、暗灰色粘質土の土がブロック状に混じる。粘性僅かに有り。締まりやや有り。

土層注記 (主にpit)

- a. 暗茶褐色砂質土：土丹塊、かわらけ片、小石、炭粒を中量含む。粘性無し。締まりやや有り。
- b. 暗灰色砂質土：土丹粒、かわらけ片、炭粒を中量含む。粘性無し。締まり有り。
- c. 暗茶褐色砂質土：土丹塊粒を中量含む。粘性無し。締まり有り。
- d. 暗茶褐色砂質土：土丹塊粒を中量、かわらけ片、炭粒を少量含む。粘性無し。締まりやや有り。
- e. 茶褐色砂質土：かわらけ片、貝砂を多量、土丹塊・粒を中量、小石、炭粒を少量含む。粘性僅かに有り。締まり有り。
- f. 茶褐色砂質土：土丹粒、かわらけ片、炭粒少量含む。粘性僅かに有り。締まり無し。
- f'. 茶褐色砂質土：土丹粒を中量含む。粘性無し。締まり無し。
- g. 茶褐色砂質土：土丹粒中量、かわらけ片、炭粒少量含む。粘性無し。締まりやや有り。
- g'. 暗茶褐色砂質土：貝砂多量、土丹粒、かわらけ片中量、炭粒少量含む。粘性無し。締まりやや有り。
- h. 茶褐色砂質土：かわらけ片を中量、土丹塊、炭粒を少量含む。粘性無し。締まりやや有り。
- h'. 暗灰色砂質土：かわらけ片、土丹粒を少量含む。下層は薄い炭層。粘性無し。締まりやや有り。
- i. 暗茶褐色砂質土：土丹粒中量、かわらけ片、小石、炭粒少量含む。粘性無し。締まり有り。
- j. 暗茶褐色弱粘質土：土丹粒を少量含む。粘性有り。締まり有り。
- k. 暗茶褐色砂質土：土丹粒、炭粒を中量含む。粘性無し。締まりやや有り。

図4 調査区壁土層断面

第三章 検出遺構と出土遺物

1. 上層の遺構と遺物

調査地点は、近世以降の削平や関東大震災後の後片付けなどによる整地で明瞭な地業層などの生活面を検出することはできておらず、上層の遺構は中世地山上に堆積した3層及び13層を掘り込んだ遺構から構成されている。従って、発見した遺構は上層から掘り込まれた可能性の高いものや、重複して新旧関係

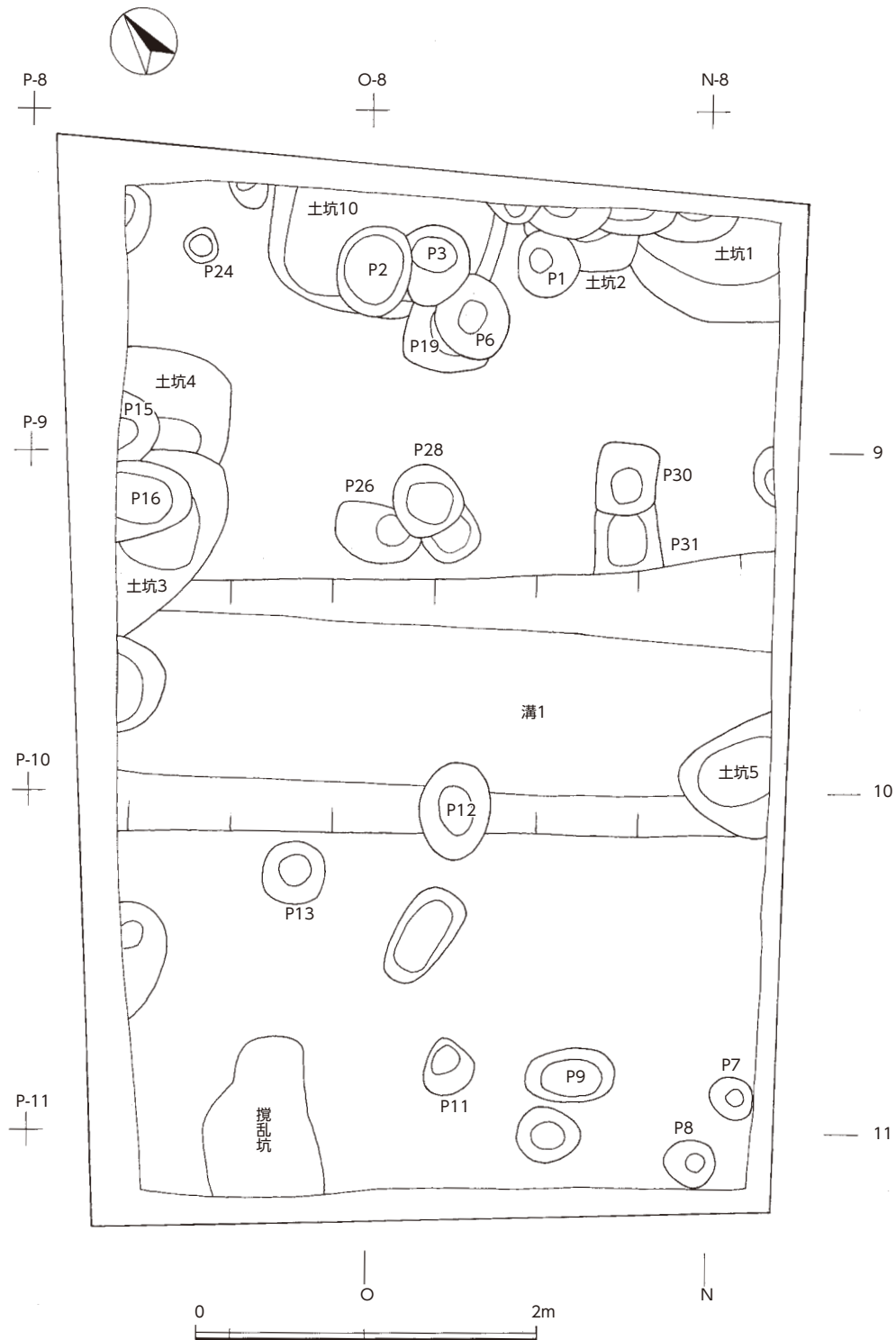


図5 上層遺構全測図

にあるものなど必ずしも同一層や生活面で確認した遺構はすべて同じ時期のものとは言えない。遺構は土坑、溝、ピットなどが認められ、それに伴う遺物はかわらけ、青磁・白磁の貿易陶磁器、瀬戸・常滑・渥美窯の国産陶器、瓦器・瓦質製品、金属製品などが出土している。

土坑1 (図7・12)：調査区北東隅の位置で土坑2やピットなどの掘り込みに壊されて検出され、さらに遺構の大半が調査区外に拡がり、全容は不明である。確認できた規模は東西軸95cm・南北軸65cm以上、深さ68cmで底面が平らな掘り方である。覆土は3層から構成されており、上・中層が茶褐色砂質土の薄い堆積、下層は粘性をもつ暗茶褐色土の厚手の堆積が認められた。出土遺物は図12-1がロクロ成形のかわらけ小皿、2が手づくね成形のかわらけ小皿で薄手器壁の粉質気味胎土である。3は龍泉窯青磁鎗蓮

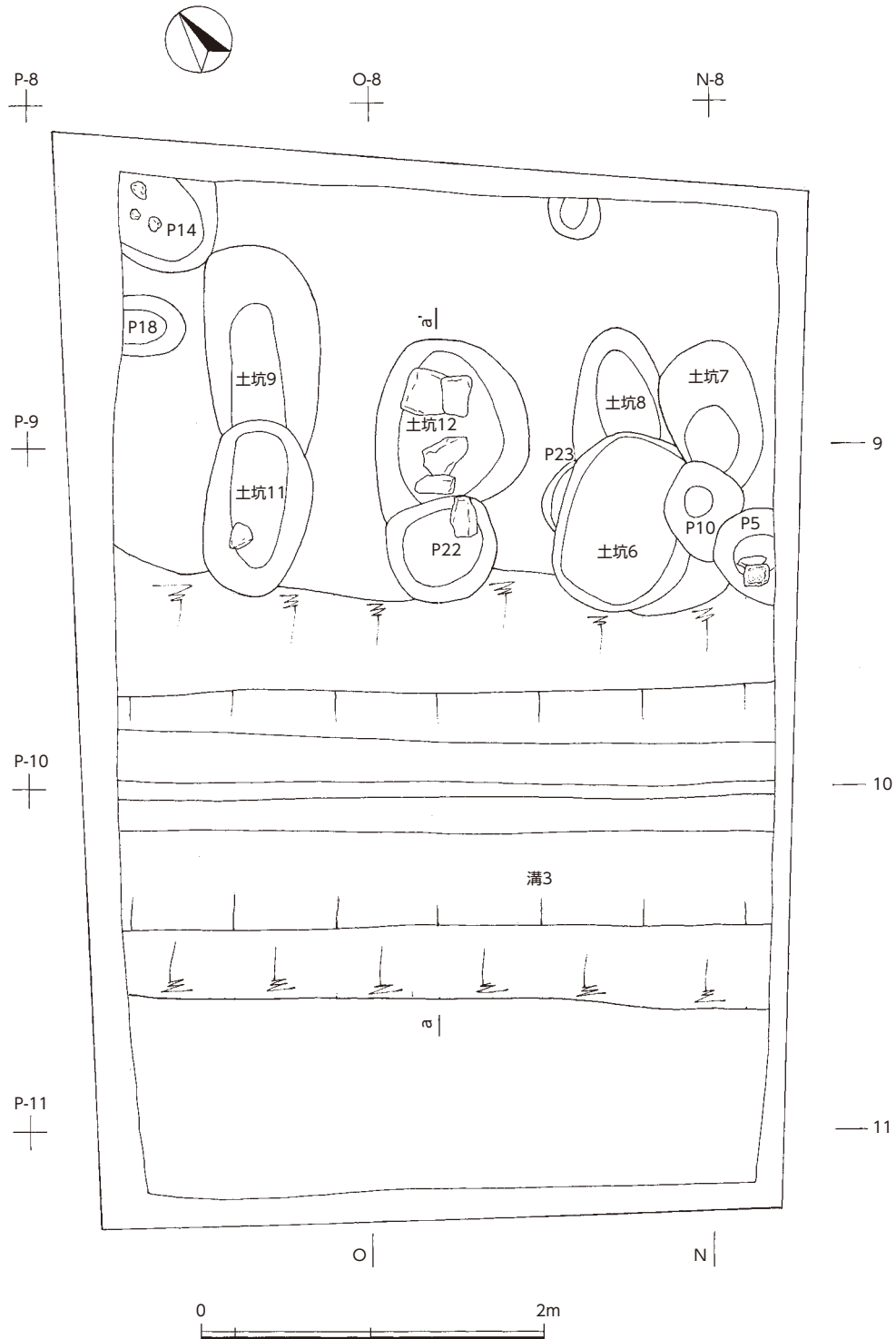
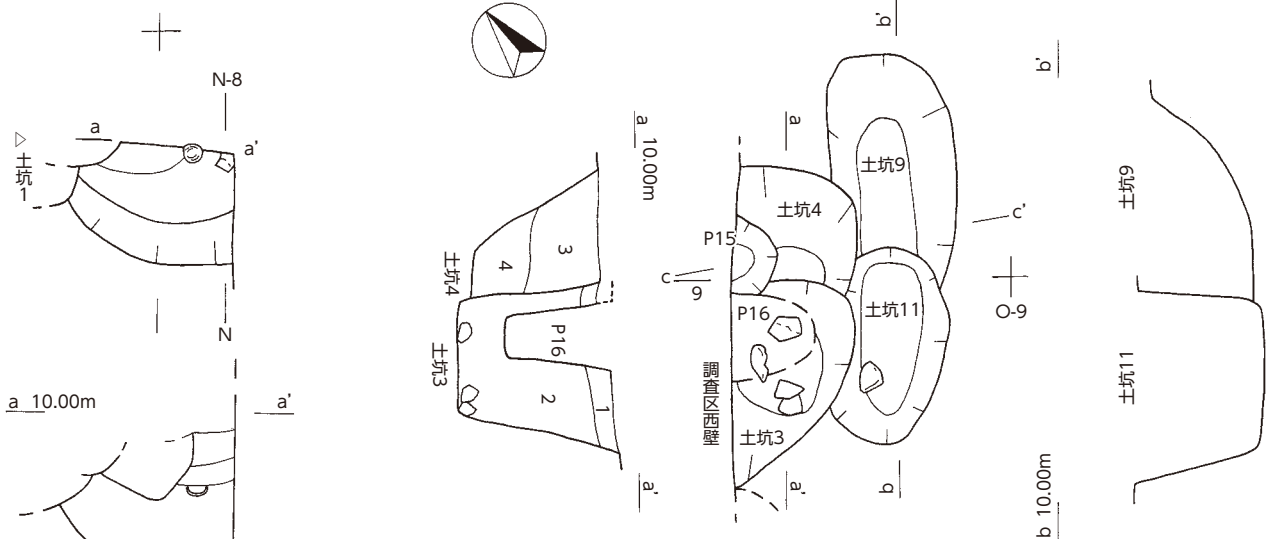


図6 下層遺構全測図



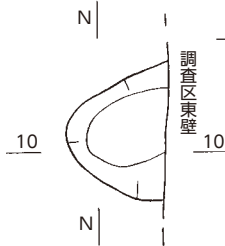
土坑1 土層注記

1. 茶褐色砂質土：土丹粒、かわらけ片、炭粒を中量含む。粘性無し。締まりやや有り。
2. 茶褐色砂質土：土丹塊、粒多量に含む。
3. 暗茶褐色弱粘質土：土丹粒、かわらけ片を少量含む。粘性やや有り。締まり有り。

土坑3・4 土層注記

1. 暗茶褐色弱粘質土：土丹粒、かわらけ片を中量、炭粒を少量含む。粘性わずかに有り。締まり有り。
2. 暗褐色砂質土：土丹粒を多量、かわらけ片を中量土丹塊、炭粒、小石を少量含む。粘性無し。締まりやや有り。
3. 暗茶褐色砂質土：貝砂、土丹粒、かわらけ片、炭粒を中量含む。粘性無し。締まり有り。
4. 暗茶褐色砂質土：土丹粒、かわらけ片、炭粒を中量含む。粘性無し。締まり有り。

土坑5



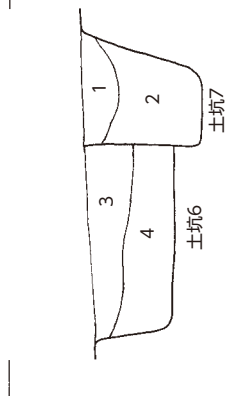
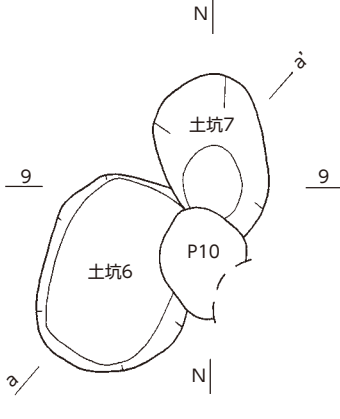
東壁土層断面



土坑5 土層注記

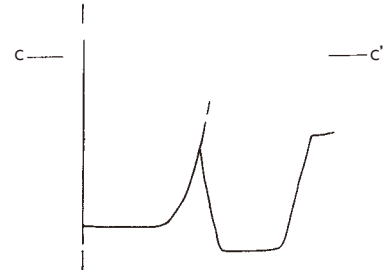
1. 暗茶褐色砂質土：かわらけ片を多量、小石、土丹粒、炭粒を少量含む。粘性無し。締まりやや有り。

土坑6・7



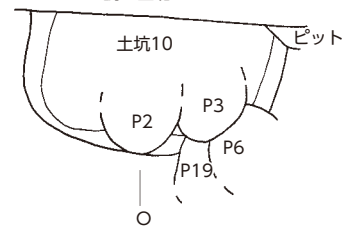
土坑6・7 土層注記

1. 茶褐色粘質土：土丹粒多量、かわらけ片、炭化物少量含む。締まり無し。
2. 暗茶褐色粘質土：土丹粒、かわらけ片、貝砂粒、炭化物を少量含む。締まり有り。
3. 茶褐色弱粘質土：土丹塊・粒を多く含む。締まり無し。
4. 暗茶褐色粘質土：土丹粒、かわらけ片、貝砂粒を少量含む。締まりやや有り。

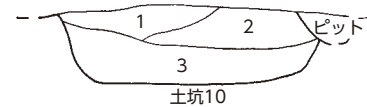


土坑3・4・9・11

調査区北壁



土坑10



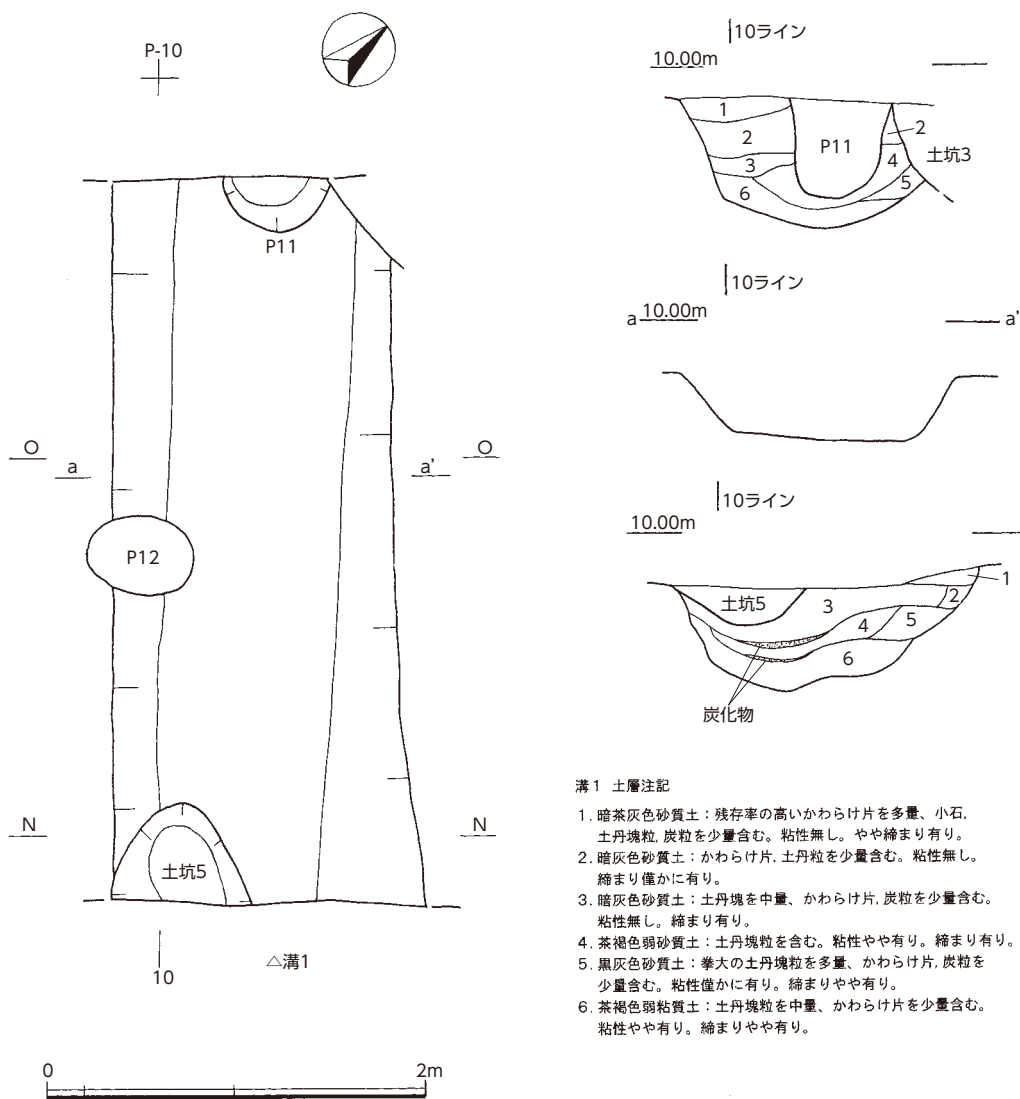
土坑10

土坑10 土層注記

1. 茶褐色砂質土：かわらけ片を中量含む。粘性無し、締まりわずかに有り。
2. 茶褐色砂質土：かわらけ片、土丹粒、炭粒を中量含む。粘性有り。締まりやや有り。
3. 茶褐色砂質土：かわらけ片、土丹粒を少量含む。粘性無し。締まり有り。



図7 上・下層遺構各土坑



- 溝1 土層注記
1. 暗茶灰色砂質土：残存率の高いかわらけ片を多量、小石、土丹塊粒、炭粒を少量含む。粘性無し。やや締まり有り。
 2. 暗灰色砂質土：かわらけ片、土丹塊粒を少量含む。粘性無し。締まり僅かに有り。
 3. 暗灰色砂質土：土丹塊粒を中量、かわらけ片、炭粒を少量含む。粘性無し。締まり有り。
 4. 茶褐色弱砂質土：土丹塊粒を含む。粘性やや有り。締まり有り。
 5. 黒灰色砂質土：拳大の土丹塊粒を多量、かわらけ片、炭粒を少量含む。粘性僅かに有り。締まりやや有り。
 6. 茶褐色弱粘質土：土丹塊粒を中量、かわらけ片を少量含む。粘性やや有り。締まりやや有り。

図8 溝1

弁文碗、内外面に多数の使用痕の傷がある。

土坑3 (図7・12)：P-9杭東側に位置し、遺構の大半は土坑4やP15・16で掘削され、さらに調査区外にかかるため全容は不明である。掘り方は断面楕円形を呈し、底面の海拔高9.12mを測る。覆土は締まりのある暗茶褐色砂質土の2層で構成され、遺物は4の手づくね成形のかわらけ大皿が出土した。

土坑4 (図7・12)：土坑11・P16などと重複して確認され、新旧関係は前者の土坑より新しく、ピットよりも古い。南北径98cm・東西径70cm以上、確認面からの深さ95cm程、平坦な底面には小土丹塊(長径18cm)3個が認められた。覆土の主体は暗褐色砂質土で上層に暗茶褐色土の薄い堆積がみられた。出土遺物は図12-5の回転糸切底のかわらけ大皿である。

土坑5 (図7・12)：N-10杭に位置し、溝1を壊して掘り込んだ土坑である。一部が調査区東壁に架架かるが、南北径72cm・東西径53cm以上、深さ20cmで浅めの楕円形を呈する土坑と考えられる。覆土はやや締まりのある暗茶褐色砂質土の単層で、遺物は図12-6がロクロ成形のかわらけ大皿、7が手づくねのかわらけ小皿、8が常滑窯山皿である

土坑10 (図7・12)：O-8杭南側に位置し、遺構の一部はP2・3・6・19で掘削され、さらに調査区外へ広がるため全容は不明である。確認された規模は南北径75cm・東西径140cm以上、深さ40cm測り、隅丸方形を呈すると考えられる。覆土は3層のやや締まりのある茶褐色砂質土に分層され、遺物は図

12-23の手づくね成形のかわらけ小皿である。

溝1 (図8・13)：調査区中央、10ラインに沿って検出された東西方向の。主軸方位はN-40°40'-Eを測る。溝の南側は調査区外へ展開するが、確認された長さは380cm以上、上幅145~157cm、下幅95cm前後、深さ45~60cm程である。溝底面の海拔高は南端が9.25m、北端が9.12前後を計ることから、南から北へ向かって緩やかな傾斜を示していた。土坑3・5やP12と重複関係にあり、一部が掘削され壊されている。覆土は6層から構成され、上層の1~3層からはかわらけ完形品を多く含む暗茶灰色砂質土がみられ、下層にあたる4~6層は炭化物層や土丹細片を多くまじえた茶褐色土が堆積していた。

出土遺物は図13-10~44は外底が回転糸切底でロクロ成形のかわらけ大・小皿、45~51は手づくね成形のかわらけ大・小皿である。本遺構に伴うかわらけは表8・9のように個体数で625点が出土した。型式別の出土点数をみると、ロクロ成形(425点)と手づくね成形(225点)の出土比率はほぼ7:3の割合を示している。52は手づくね成形の白かわらけ、53が同安窯系青磁櫛描文碗、54~56が龍泉窯青磁の劃花文碗と無文碗、57が白磁端反碗である。58~60は常滑窯の甕・片口鉢(I類)、61・62は鋳造関係の製品でかわらけ小皿を用いた埴塙と、土製品の鞆の羽口である。

ピット (図11・12)：調査区のほぼ全域に掘られたピットの多くは重複関係や覆土の特徴、深さの浅い掘り方からみて大半は上層遺構を確認した土層よりも上面からの新しい掘り込みが主体と考えられる。またピット21穴を検出したが、掘立柱建物や柵列などの柱穴列などの配置を示すような遺構との関連性は明確でなかった。各ピットは楕円形または隅丸方形を呈し、径20~50cm、深さ10~20cmの浅いものである。以下には出土遺物を伴うピットについて簡単に触れる。

P2：0-8グリッドで土坑10やP3と重複しているが本ピットが新しい。長径55cm×短径45cmで楕円形を呈し、深さ36cmで底面が平らな掘り方である。覆土は土丹細片、炭化物を少量含む明茶褐色粘質土、図12-27の精良緻密で薄手素地の青白磁碗である。

P26・P28：両ピットは0-9杭に南隣した位置で新旧関係はP28がP26を壊して掘り込んでいる。P28は径40cm×深さ58cmの円形を呈した深い掘り方、P26は長径50cm×短径34cm×深さ23cm長円形の浅い皿状を呈する。遺物はP26が52・53の手づくねかわらけ小皿と常滑窯甕、P28が54・55が手づくねかわらけの大小皿である。

2. 下層の遺構と遺物

下層遺構面は調査区北側で海拔高9.60m前後、南端で海拔高約9.70mでほぼ平坦な生活面が確認できた。検出した遺構は土坑7基・溝2条・ピット7穴などである。遺物かかわらけ皿の他に青磁・白磁の貿易

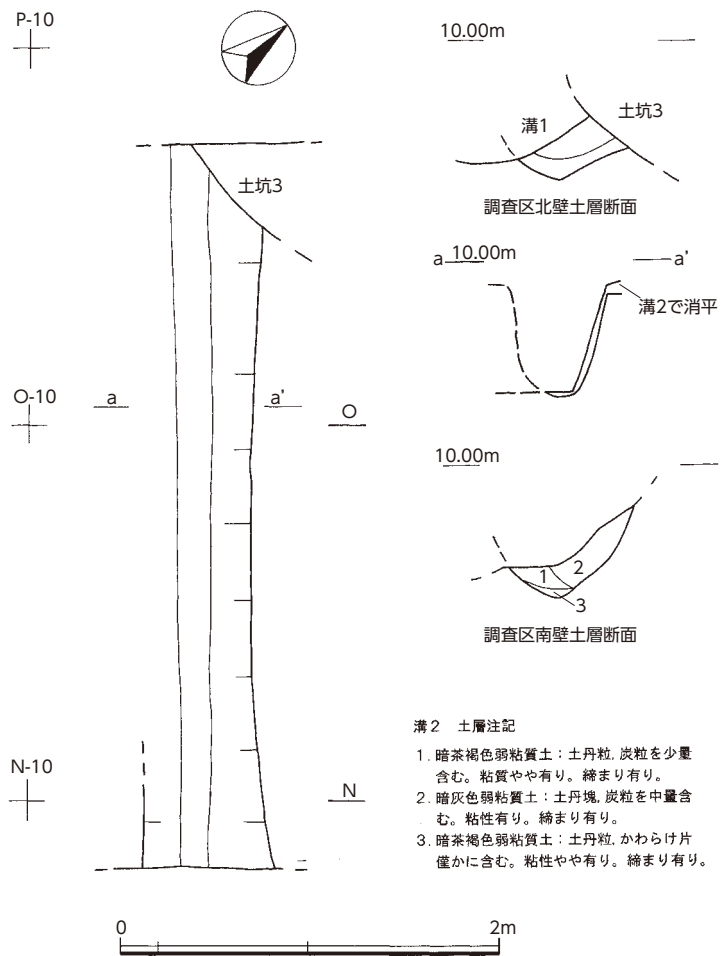
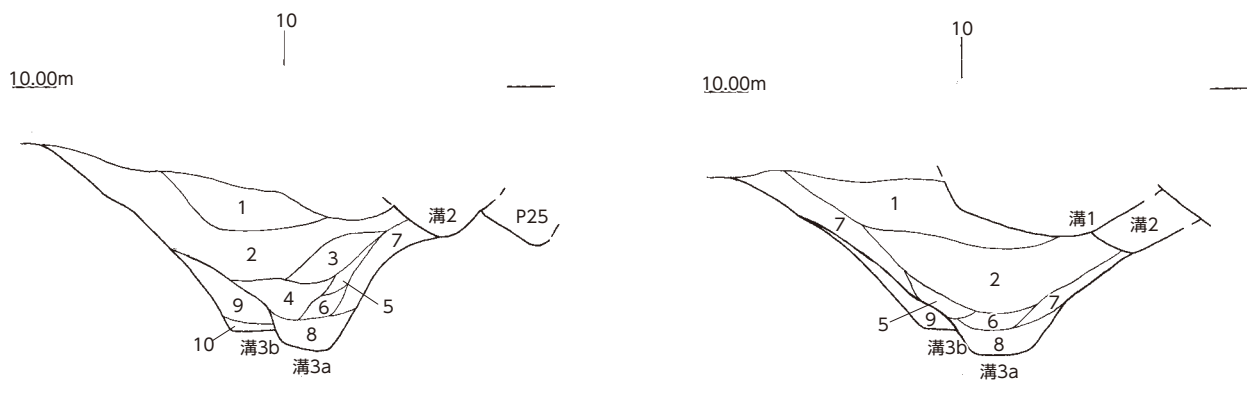


図9 溝2



溝3 a 土層注記

1. 暗灰色粘質土：かわらけ片, 土丹粒, 炭粒を少量含む。粘性有り。締まり有り。
2. 暗灰色弱粘質土：かわらけ片, 土丹粒, 炭粒, 小石を少量含む。粘性無し。締まり無し。
3. 暗灰色弱粘質土：炭粒を中量, かわらけ片, 土丹粒, 小石粒を少量含む。粘性無し。締まり無し。
4. 暗灰色粘質土：明黄褐色の地山の土がブロック状に中量含む。炭粒少量混じる。粘性有り。締まり有り。
5. 暗灰色粘質土：砂を中量, かわらけ片, 土丹粒, 炭粒を僅かに含む。粘性有り。締まり有り。
6. 暗灰色粘質土：砂, 地山の土, 土丹粒を中量, 下層に黒褐色粘質土がまだらに混じる。粘性有り。締まり有り。
7. 黒褐色粘質土：砂中量, 地山の土がブロック状に中量混じる。粘性有り。締まり有り。
8. 黒褐色粘質土：地山の土がブロック状に混じる。粘性有り。締まり有り。

溝3 b 土層注記

9. 暗灰色粘質土：砂を中量, 土丹粒, 炭粒少量が上層に混じる。粘性やや有り。締まりやや有り。
10. 明黄褐色粘質土：地山の土に似るが, 暗灰色粘質土をブロック状に中量含む。粘性僅かに有り。締まりやや有り。

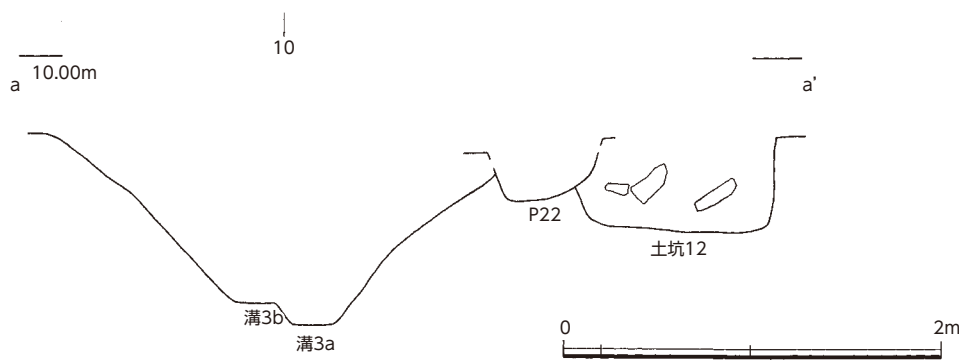


図10 溝3 ab土層断面図

陶磁器、国産陶器の常滑・渥美窯製品などが出土した。

土坑6 (図7・12)：調査区北東、N-9杭付近に位置し、一部をP10と土坑7に掘削されて検出した。短辺106cm×長辺80cm×深さ47cmを測り、隅丸長方形で底面が平らな掘り方である。覆土は上層が土丹小塊の多い茶褐色土と、下層がかわらけ片や貝砂粒を少量含む暗茶褐色土である。遺物は図12-9～14がロクロ成形のかわらけ大小皿、15・16が手捏ねかわらけ小皿、17が常滑窯の甃片である。

土坑7 (図7・12)：N-9杭で検出した土坑である。規模は長径92cm×短径57cm×深さ64cm、楕円形を呈する。覆土は土丹細片を多量に含む茶褐色粘質土と、その下の貝砂粒混りの暗茶褐色土に分層される。遺物は18～21がかわらけで糸切底と手捏ねの大小型品、22が鉄釘である。

土坑8 (図6)：土坑6・7に大半を壊された検出した土坑である。確認した規模は南北径80cm・東西径55cm以上、深さ25cm程で断面皿状の掘り方をもつ。覆土は土丹粒、炭化物を含む茶褐色土、実測可能な遺物は出土していない。

土坑9 (図7・12)：調査区南西域の位置で土坑11の掘り方で南端が削平されている。確認した規模は南北径125cm以上、東西径68cm、深さ63cmの皿状断面で長楕円形を呈すると思われる。覆土は上層に厚さ10cm程の貝砂粒・炭化物混りの砂質土、下層に締まりのある茶褐色粘質土が厚めに堆積する。遺物

は23で高い器高の手捏ねかわらけ大皿である。

土坑11 (図7・12)：重複関係を観察すると、土坑3・4により西側一部が壊されているが、平面形状は楕円形を呈すると思われ、確認された規模は長辺105cm、短辺58cm以上、深さ70cmで断面逆台形で底面平坦な掘り方を呈し、覆土は概ね2層に分かれ上層は土丹粒、炭化物を含む茶褐色土、下層が炭化物を多めに含んだ締まりのある暗茶褐粘質土である。遺物はすべて覆土上層からで図12-25・26がロクロ成形のかわらけ小皿と27の手捏ねかわらけ小皿である。

土坑12 (図6)：0-9杭に位置し、P22により南端一部が削平を受けている。確認された規模は長辺110cm以上、短辺92cm、深さ55cmで掘り方は断面播鉢状を呈する。覆土は炭化物、かわらけ片を含む締まりのある茶褐色粘質土の単層、覆土中位から底面にかけて長辺30cm程の土丹塊4個が認められた。良好な遺物の出土はない。

溝2 (図6・9・13)：調査区中央、グリッド10ラインの北側に沿って東西方向に走る溝で調査区外に延びている。本溝は上層遺構の溝1や土坑・ピットなどにより大半が掘削を受けており、特に溝1の構築時の削平が著しく溝壁面や底部の一部が確認できただけで全貌はつかめていない。主軸方位はN-39°40'-Eを測る。確認された規模は長さ380cm・幅70cm以上、確認面からの深さ55cmを測り、掘り方は断面U字型に近いものと考えられる。溝底の海拔高は9.30m前後である。覆土はやや粘性をもち、締まりがある暗茶褐色土と暗灰色土の3層の堆積が確認できた。出土遺物は図13-1がロクロ成形のかわらけ小皿、2～6が手捏ね成形のかわらけ小皿である。7・8は同安窯の青磁櫛描文碗、9が常滑窯甕の肩部片瀬戸窯折縁皿である。

溝3 (図6・9・14)：調査区中央、グリッド10ラインに沿って東西方向に走る溝で調査区外に延びた葉研形の大溝である。溝3は調査区東・西壁の土層観察と溝底の様相から浚渫または再開削が施された可能性が高く、浚渫・開削の重複関係からa・bに分別した。主軸方位はa・b共にN-40°-Eを測る。溝1・2、土坑3・4、P5と重複関係にあり、本溝址が一番古く上辺を削平されているため、現状で確認されたa・bの規模は、長さがa・b約390cm以上、幅がa:215cm・b:125cm以上、確認面からの深さがa:105cm・b:90cm前後となっている。しかしa・bの削平部分を下層遺構面(中世地山面)の高さまで復元した場合、掘り方は両者ともおそらく上幅が2.4m近くに及ぶ規模が予想される。溝底の海拔高は東端・西端ともに

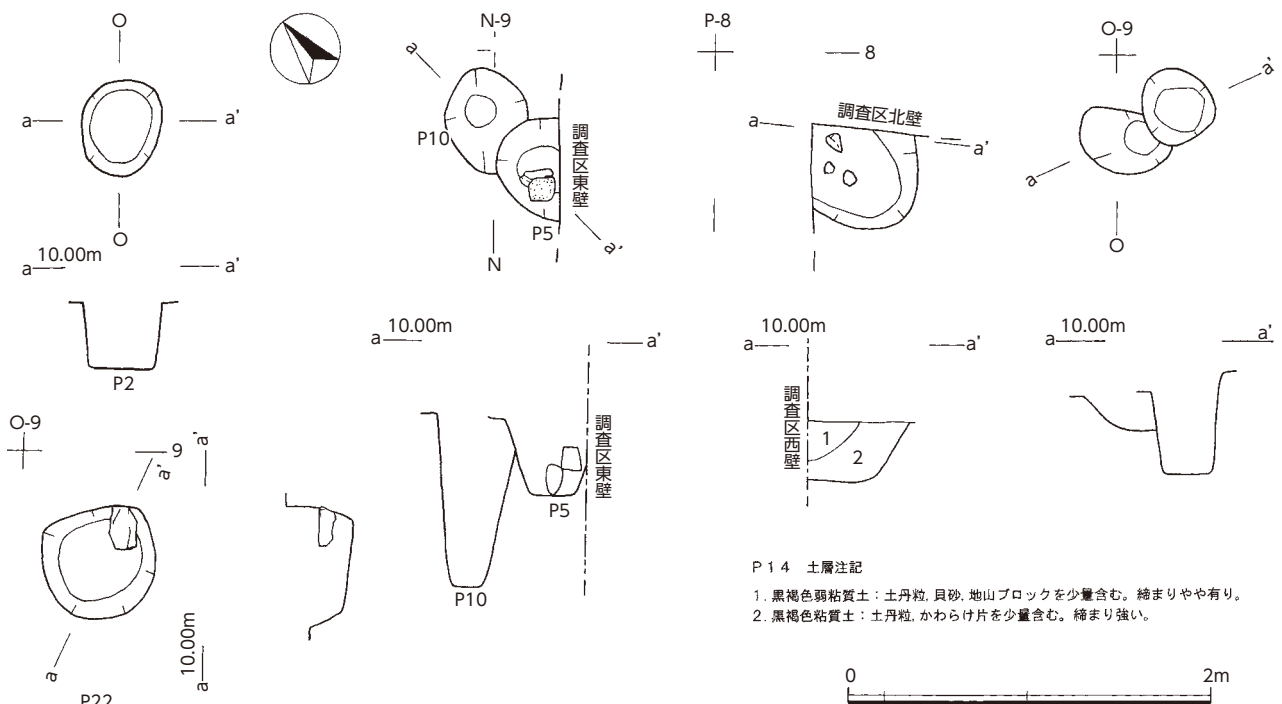


図11 上・下層遺構各ピット

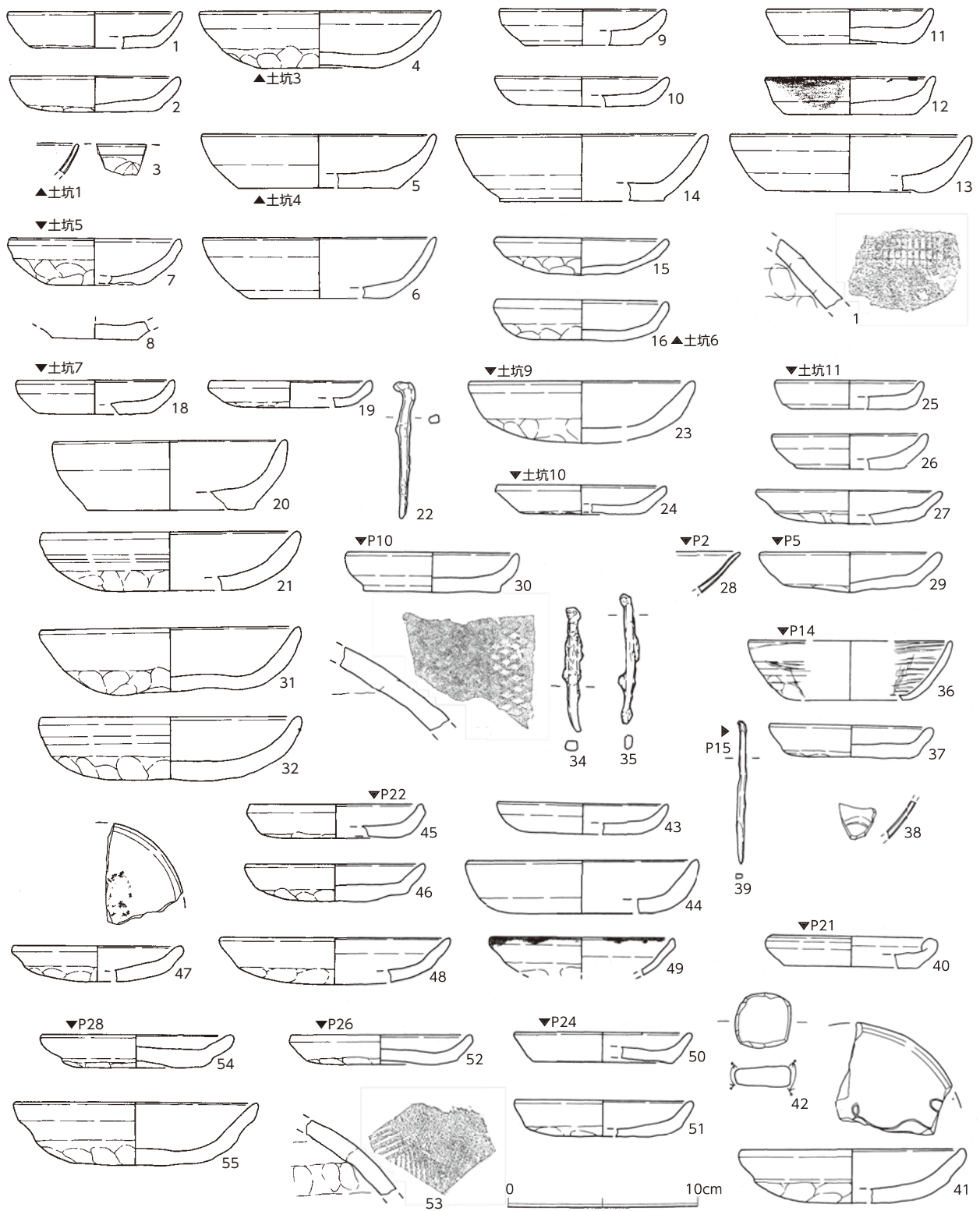


図12 各土坑・ピット出土遺物

比高差は殆んどなく、aが8.60m前後、bが8.75m前後の底面標高が確認された。当地点の溝3a・bは層位的にみて中世最初期に位置づけられる古さであり、その実年代は鎌倉時代初期から前期に属することは遺構の新旧関係や出土遺物からも間違いないと思われる。形状は良く整ったV字型を呈し、壁面の傾斜は急なところでは60°程もある。覆土はaが7・8層の地山ブロックが混入した締まりのある黒褐色粘質土が堆積し、一度浚渫されたあと埋め戻されたものと考えられる。その埋土は砂層に黒・茶褐色粘質土プロ

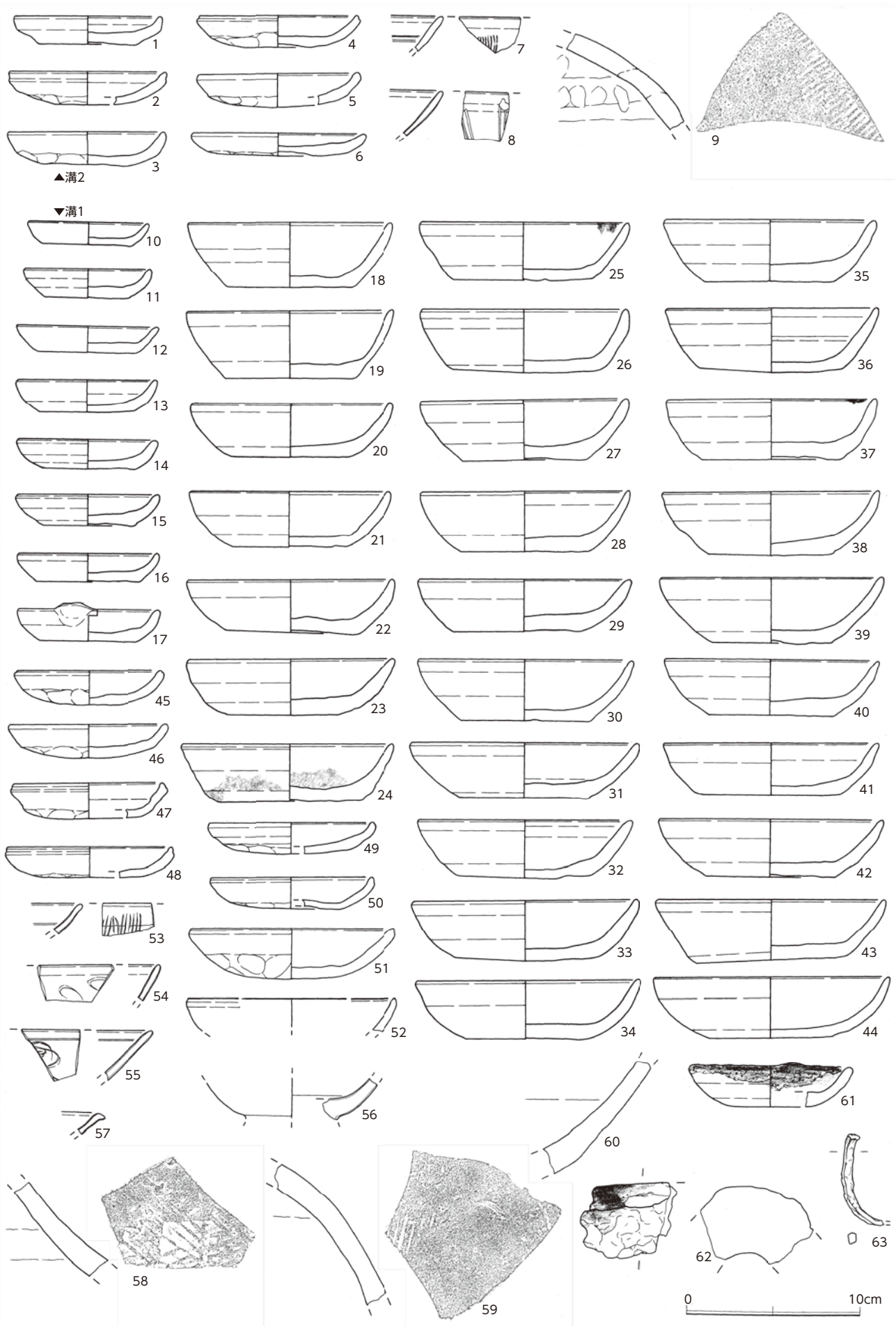


图13 溝1·2出土遺物

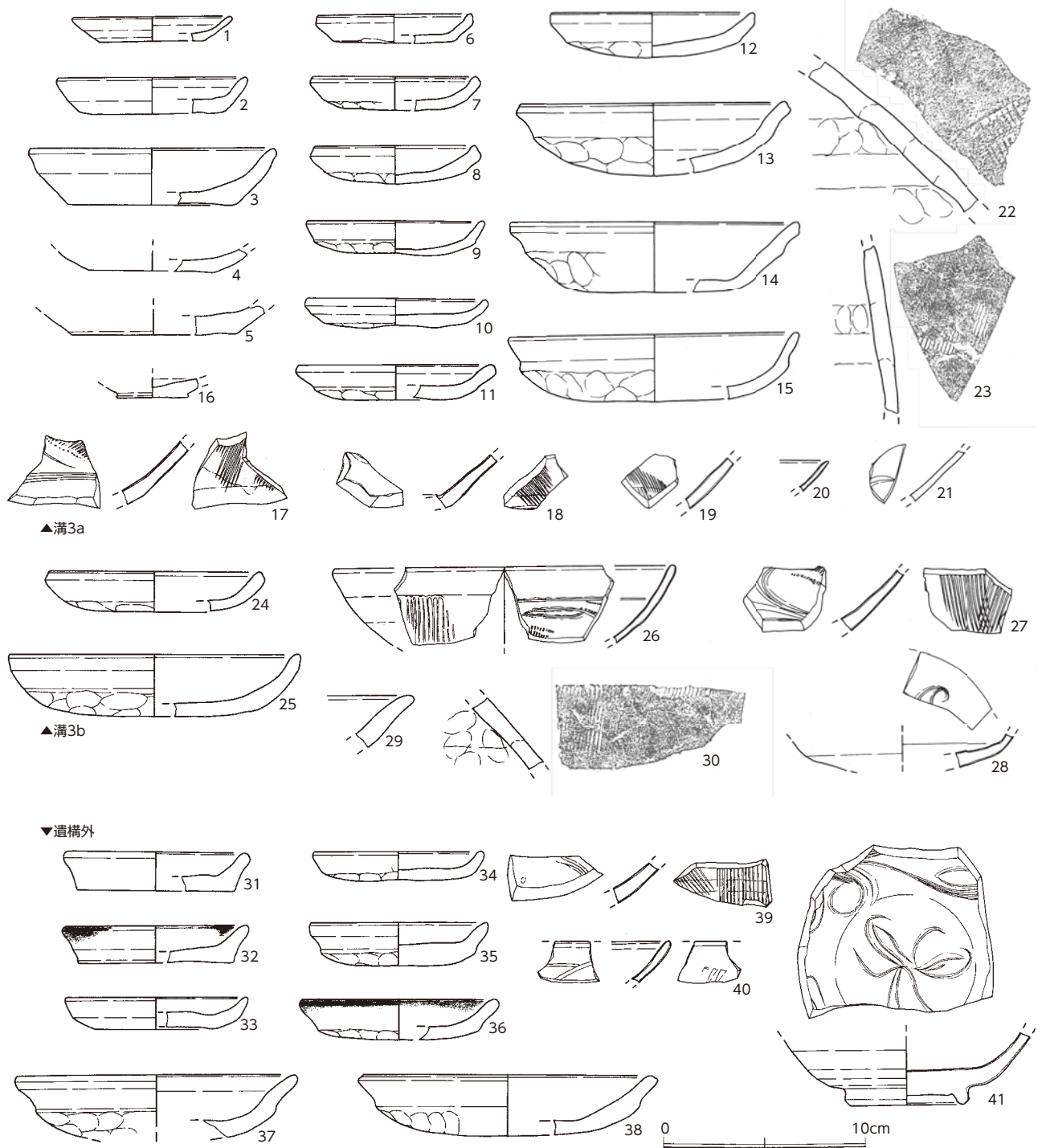


図14 溝3・遺構外出土遺物

ツクが多量に混じったもので、おそらく溝付け替えに伴う地山開削によって発生した残土を用いたものと推測される。bの覆土はaの削平で殆んど残存していないが、中世地山の砂層や黒褐～暗灰色の小塊が混じった9・10層（暗灰色・明黄褐色粘質土）が認められた。溝3a・b覆土中からの遺物は以下の資料がみられた。

溝3aは1～15がロクロ成形と手捏ね成形のかわらけ大小皿、16がロクロ成形の白かわらけである。17～19は同安窯系青磁碗で内外面に櫛描文と劃花文を施文、20・21は白磁の端反碗・劃花文碗である。22・23は常滑窯甕の肩部片と胴部片で外面に格子目叩きを施す。

溝3bは24・25が手捏ね成形のかわらけ大小皿、26・27が同安窯系の櫛描文青磁碗、28が白磁劃花文皿、29が渥美窯片口鉢、30が常滑窯甕の体部片である。

ピット(図6・11・12)：下層遺構に伴って検出したピットは7穴であるが、ここでは遺物の出土したピットのP5・10・14・22について簡単に触れる。

P5：径58cm×深さ42cmの楕円形を呈し、覆土は茶褐色粘質土の単層で土丹小塊2個がみられ、図12-29の手捏ねかわらけ小皿が出土した。

P10：P5に一部削平されているが、径48～60cmの楕円形を呈し、深さ96cmを測る。覆土中からは30～32のロクロと手捏ね成形のかわらけ大小皿、33の常滑窯甕片、34・35の鉄釘が出土した。

P14：調査区北西隅で大半が調査区外にかかり、確認した大きさは径65cm以上、深さ35cm、覆土は黒褐色粘質土の中世地山に類似しもので、遺物は37の手捏ねかわらけ小皿、36の京都楠葉産の瓦器碗、38が白磁碗である。

P22：調査区中央で土坑12を壊して掘り込む。径65cmの円形を呈し、深さ38cmと浅い掘り方である。遺物は43～48のロクロと手捏ね成形のかわらけ大小皿で47が内底面に墨書が認められた。49は手捏ね成形による白かわらけである。

遺構外出土遺物(図14)：遺構外とした遺物は上層遺物包含層や上・下層遺構の確認に伴った精査作業において出土した遺構外の資料を一括している。図14-31～33は糸切底のかわらけ小皿、34～38が手捏ね成形の大小皿である。39～41は同安窯の青磁櫛搔文碗の破片である。

表2 遺物観察表(1)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
12- 1	土坑 1	かわらけ	(9.4)	(7.2)	1.6	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質良土 c.橙色 e.良好
12- 2	"	かわらけ	9.2	7.1	1.9	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質良土 c.橙色 e.良好
12- 3	"	龍泉窯系 青磁鎗蓮弁文碗	口縁部小片			b.明灰白色 精良堅緻 d.不透明な青灰色をやや厚めに施釉
12- 4	土坑 3	かわらけ	(13.0)	(10.6)	3.0	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粉質気味やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12- 5	土坑 4	かわらけ	(12.6)	(8.6)	2.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 や やや粗土 c.橙色 e.良好
12- 6	土坑 5	かわらけ	(12.6)	(7.4)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質粗土 c.橙色 e.良好
12- 7	"	かわらけ	(9.0)	(8.8)	(2.45)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 粗土 c.橙色 e.良好
12- 8	"	常滑 山皿	—	(4.6)	—	a.外底糸切痕 b.灰色で砂粒 黒色粒 c.灰色 e.良好
12- 9	土坑 6	かわらけ	(9.0)	(6.2)	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 粗土 c.黄橙色 e.破 損後に火を被るため焼成状態不明
12-10	"	かわらけ	(9.4)	(6.8)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
12-11	"	かわらけ	(9.0)	(6.8)	1.85	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂 質粗土 c.黄橙色 e.やや甘い
12-12	"	かわらけ	(9.2)	(7.2)	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂 質粗土 c.黄橙色 e.やや甘い f.灯明皿
12-13	"	かわらけ	(13.0)	(9.0)	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗 土 c.橙色 e.良好
12-14	"	かわらけ	(13.6)	(8.8)	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗 土 c.橙色 e.良好
12-15	"	かわらけ	(9.4)	(8.2)	1.95	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質良土 c.灰黄色 e.良好
12-16	"	かわらけ	9.4	8.4	2.1	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 粗土 c.黄橙色 e.やや甘い
12-17	"	常滑 甕	肩部片			a.輪積技法 b.灰褐色 砂粒 黒色粒 長石 小石粒やや多め c.灰褐色 e.硬質
12-18	土坑 7	かわらけ	(8.6)	(6.1)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄灰色 e.良好
12-19	"	かわらけ	(8.8)	(7.2)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.橙色 e.良好
12-20	"	かわらけ	(12.8)	(8.7)	3.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.やや 甘い
12-21	"	かわらけ	(14.0)	(11.4)	3.3	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄灰色 e.良好
12-22	"	鉄製品 釘	残存長7.35×0.55×0.4			a.鍛造の角釘
12-23	土坑 9	かわらけ	(12.0)	(10.4)	1.6	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.橙色 e.良好 f.口 縁煤付着 灯明皿
12-24	土坑10	かわらけ	(9.2)	(6.6)	1.6	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.橙色 e.良好
12-25	土坑11	かわらけ	(7.8)	(6.2)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 粉質気味やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-26	"	かわらけ	(8.4)	(5.8)	1.85	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粉質気味やや 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
12-27	"	かわらけ	(9.9)	(7.4)	1.9	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 やや砂質土 c.黄灰色 e.不良
12-28	P 2	青白磁碗	口縁部小片			a.ロクロ b.白色 黒色粒少なめ 精良堅緻 d.青灰色半透明 薄手施釉
12-29	P 5	かわらけ	(9.8)	(7.1)	2.1	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.橙色 e.良好
12-30	P10	かわらけ	(9.4)	(7.4)	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂 質やや粗土 c.黄橙色 e.やや甘い
12-31	"	かわらけ	14.0	11.7	3.4	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 粉質気味やや粗土 c.橙色 e.良好
12-32	"	かわらけ	14.1	12.45	3.35	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-33	"	常滑 甕	肩部片			a.輪積技法 b.淡灰色砂粒 白色粒 黒色粒 小石粒 全て少量 c.褐色 外面 降灰により暗灰緑色
12-34	"	鉄製品 釘	残存長6.6×0.65×0.55			f.錆の付着が激しい
12-35	"	鉄製品 釘	残存長6.9×0.5×0.7			f.錆の付着が激しい
12-36	P14	瓦器碗	—	—	3.2	b.灰白色 水箆した砂粒のあまり残らない緻密土 c.黒色(内外面ともに みがきを施し炭素吸着しているため) f.ヘラによる押し込みが2か所 底部欠損のため内底面の文様確認できず
12-37	"	かわらけ	(8.7)	(7.4)	(1.7)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 赤色粒 やや粉質良土 c.橙色 e.やや甘い
12-38	"	青白磁碗	胴部片			a.ロクロ 内面劃花文 b.黒色砂粒 茶色砂粒 白色で緻密 d.不透明な青味 があった白色を薄く施す
12-39	P15	鉄製品 釘	残存長7.6×3.5×2.5			f.錆の付着が激しい
12-40	P21	内折れかわらけ	(9.2)	(7.2)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い

表3 遺物観察表(2)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
12-41	"	かわらけ	(12.2)	(10.4)	2.85	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.内底面に線刻文様
12-42	"	円盤状土製品	径3.0×厚さ1.1			b.微砂 赤色粒 土丹粒 砂質粗土 c.黄橙色 f.かわらけ底部を転用 両面をスリ加工されており内底面の区別つかず
12-43	P22	かわらけ	(9.2)	(7.4)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
12-44	"	かわらけ	(12.6)	(9.0)	(1.85)	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 砂質やや粗土 c.橙色 e.甘い
12-45	"	かわらけ	(9.6)	(7.7)	1.8	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
12-46	"	かわらけ	(9.7)	(8.0)	1.95	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.黄橙色 e.良好
12-47	"	墨書かわらけ	(9.2)	(7.9)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.橙色 e.良好 f.墨書が何を表現しているかは不明
12-48	"	かわらけ	(12.4)	(10.2)	2.5	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.橙色 e.良好
12-49	"	白かわらけ	(9.7)	(8.3)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 全て少量 粉質良土 c.淡肌色を帯びた白色 e.良好
12-50	P24	かわらけ	(9.8)	(7.1)	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-51	"	かわらけ	(9.6)	(8.4)	1.9	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
12-52	P26	かわらけ	(9.8)	(8.0)	(1.6)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
12-53	"	常滑 甕	肩部小片			a.輪積技法 b.灰色 砂粒 白色粒 小石粒 c.外面:灰色 内面:暗赤褐色 e.硬質
12-54	P28	かわらけ	(10.4)	(8.0)	(1.8)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い f.破損後に火を受ける
12-55	"	かわらけ	(13.2)	(10.4)	(3.35)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 砂質粗土 c.橙色 e.良好
13- 1	溝2	かわらけ	8.5	5.8	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 良土 c.黄橙色 e.良好
13- 2	"	かわらけ	(9.0)	(7.4)	1.9	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.黄灰色 e.やや甘い
13- 3	"	かわらけ	9.1	8.3	1.9	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.黄灰色 e.やや甘い
13- 4	"	かわらけ	9.2	8.2	1.85	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.黄灰色 e.やや甘い
13- 5	"	かわらけ	(9.3)	(8.2)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
13- 6	"	かわらけ	(10.0)	(8.2)	(1.3)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.橙色~黄橙色 焼成の際の色ムラあり e.やや甘い
13- 7	"	同安窯青磁碗	口縁部小片			b.淡灰色 d.不透明な灰緑色を薄く施釉 f.気泡あり キズあり 外面片刀か片彫風の櫛刀で縦線
13- 8	"	同安窯青磁碗	口縁部小片			a.ロクロ 内面:片切彫劃花文 外面:縦位の櫛目文(中込め) b.灰色 微砂少量 精良堅緻 d.半透明な暗灰緑色を薄く施釉 貫入多い f.12C中~後半頃か キズあり
13- 9	"	常滑 甕	肩部小片			a.輪積技法 b.灰黄色 長石 黒色粒 小石粒 やや多め c.胎土と共に灰黄色 e.硬質 f.肩部に降灰による自然釉
13-10	溝1	かわらけ	(6.8)	(5.1)	1.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質良土 c.橙色 e.良好
13-11	"	かわらけ	7.2	5.0	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 赤色粒 土丹粒 粉質良土 c.黄橙色 e.良好
13-12	"	かわらけ	(8.0)	(5.6)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや砂質やや粗土 c.橙色 e.良好
13-13	"	かわらけ	8.0	5.4	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄橙色 e.良好
13-14	"	かわらけ	7.8	5.3	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄橙色 e.良好
13-15	"	かわらけ	8.0	5.3	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄橙色 e.良好
13-16	"	かわらけ	8.0	5.9	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質気味良土 c.黄橙色 e.良好
13-17	"	かわらけ	8.0	5.6	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄橙色 e.良好
13-18	"	かわらけ	(11.8)	(7.6)	3.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質良土 c.橙色 e.やや甘い
13-19	"	かわらけ	(12.0)	7.4	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粉質粗土 c.黄橙色 e.良好
13-20	"	かわらけ	(11.2)	(6.8)	3.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒多め やや砂質やや粗土 c.橙色 e.良好
13-21	"	かわらけ	(11.3)	(6.2)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒多め 小石粒 砂質粗土 c.橙色 e.やや甘い

表4 遺物観察表(3)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
13-22	"	かわらけ	11.7	7.4	3.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄橙色 e.良好
13-23	"	かわらけ	(11.7)	(6.5)	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂少なめ 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 砂質粗土 c.黄橙色 e.良好
13-24	溝1	かわらけ	(12.1)	(8.4)	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質粗土 c.黄橙色 e.良好
13-25	"	かわらけ	11.8	8.5	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 やや砂質やや粗土 c.橙色 e.良好 f.灯明皿
13-26	"	かわらけ	11.7	8.4	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粉質良土 c.粉質良土 e.良好
13-27	"	かわらけ	(12.0)	7.2	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
13-28	"	かわらけ	(11.7)	(8.0)	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粉質やや粗土 c.橙色 e.良好 f.横ナデ痕強し
13-29	"	かわらけ	(11.9)	(7.2)	3.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄橙色 e.良好
13-30	"	かわらけ	(12.4)	(7.6)	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
13-31	"	かわらけ	(13.2)	(7.6)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒多め 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
13-32	"	かわらけ	(12.4)	(8.0)	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
13-33	"	かわらけ	(12.8)	(8.0)	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄橙色 e.良好
13-34	"	かわらけ	(12.7)	(7.0)	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄橙色 e.良好
13-35	"	かわらけ	(12.2)	(7.4)	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
13-36	"	かわらけ	12.2	8.3	3.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄橙色 e.良好
13-37	"	かわらけ	(12.2)	(8.4)	3.55	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.やや甘い f.灯明皿
13-38	"	かわらけ	(12.4)	(7.0)	3.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質良土 c.橙色 e.良好
13-39	"	かわらけ	12.6	7.4	3.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.橙色 e.良好
13-40	"	かわらけ	(12.4)	(7.2)	(3.3)	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.橙色 e.やや甘い
13-41	"	かわらけ	12.4	8.6	3.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.やや不良
13-42	"	かわらけ	(13.0)	(7.6)	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.淡橙色 e.良好
13-43	"	かわらけ	13.0	8.6	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒少量 やや砂質やや粗土 c.橙色 e.良好
13-44	"	かわらけ	(13.3)	(7.0)	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 土丹粒 やや粉質良土 c.黄橙色 e.良好
13-45	"	かわらけ	(8.4)	(7.8)	2.0	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 赤色粒 粉質気味良土 c.橙色 e.やや甘い
13-46	"	かわらけ	(9.2)	(7.8)	1.9	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 粉質気味やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
13-47	"	かわらけ	(8.6)	(7.6)	(2.0)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 土丹粒 粉質気味やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
13-48	"	かわらけ	(9.6)	(6.6)	(1.75)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 粉質気味良土 c.黄橙色 e.良好
13-49	"	かわらけ	(9.6)	(8.0)	(1.8)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.黄橙色 e.やや甘い
13-50	"	かわらけ	(9.3)	(7.8)	(1.85)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粉質良土 c.黄橙色 e.良好
13-51	"	かわらけ	(11.8)	(10.2)	2.9	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質気味やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
13-52	"	白かわらけ	(12.4)	—	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂少なめ 良土 c.淡肌色を帯びた白色 e.良好
13-53	"	同安窯系 青磁擲搔文碗	口縁部片			a.ロクロ 外面:縦位の櫛目文 b.灰黄色 微砂 緻密 d.半透明な灰黄緑色を薄く施釉 f.キズあり
13-54	"	龍泉窯系 青磁劃花文碗	口縁部片			a.ロクロ 内面:劃花文 b.灰黄色 微砂少量 緻密 d.半透明な暗灰緑色 貫入多い f.碗I類 キズあり
13-55	"	龍泉窯系 青磁劃花文碗	口縁部片			a.ロクロ 内面:劃花文 b.灰色 微砂 白色粒少量 緻密 d.半透明な灰緑色 大きめの貫入あり f.碗I類 キズあり
13-56	"	龍泉窯系 青磁無文碗	口縁部小片			a.ロクロ b.灰白色 微砂 緻密 d.透明な青水色 f.キズあり
13-57	"	白磁端反碗	口縁部小片			a.ロクロ b.黄白色 微砂 緻密 d.不透明な乳白色 貫入あり f.碗V-4類
13-58	"	常滑 甕	頸部片			a.輪積技法 b.灰褐色 長石 黒色粒 砂粒 石英 c.茶褐色 e.硬質

表5 遺物観察表(4)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
13-59	"	常滑 甗	肩部片			a.輪積技法 b.灰褐色 黒色粒 砂粒 白色粒 小石粒少量 c.暗茶褐色 e.硬質
13-60	"	常滑 捏鉢Ⅰ類	体部小片			a.輪積技法 b.灰色 砂粒 白色粒少量 やや良土 c.灰色 e.硬質
13-61	"	かわらけ 坩堝	(7.2)	(5.0)	2.35	b.微砂 砂質粗土 c.灰黒色 e.不良 f.鑄造品の坩堝に転用の為器表に熔融物が付着し全体的に灰色に変色している
13-62	"	鞆の羽口	—	—	—	b.砂粒 赤色粒 土丹粒少量 粗土 c.橙褐色 f.先端部に気泡・鉍物融着している箇所あり
13-63	"	鉄製品 釘	残存長 (5.7)			
14- 1	溝3a	かわらけ	(7.8)	(5.2)	1.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 粉質気味良土 c.黄褐色 e.良好
14- 2	"	かわらけ	(9.4)	(7.2)	1.85	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質気味やや粗土 c.橙色 e.やや甘い
14- 3	"	かわらけ	(12.2)	(8.4)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.やや甘い
14- 4	"	かわらけ	—	(6.4)	—	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質良土 非常に粉っぽい c.黄褐色 e.良好
14- 5	"	かわらけ	—	(5.2)	—	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 赤色粒 やや粗土 c.橙色 e.やや甘い
14- 6	"	かわらけ	(7.6)	(6.0)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.橙色 e.やや甘い
14- 7	"	かわらけ	(8.2)	(7.0)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.橙色 e.やや甘い
14- 8	"	かわらけ	(8.0)	(7.0)	1.9	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.黄褐色 e.良好
14- 9	"	かわらけ	8.6	8.1	1.55	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.黄褐色 e.良好
14-10	"	かわらけ	8.9	7.2	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好
14-11	"	かわらけ	(8.6)	(7.0)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
14-12	"	かわらけ	(12.0)	(8.6)	2.2	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.黄灰色 e.やや甘い f.外底面に火を受ける
14-13	"	かわらけ	(13.2)	(12.0)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c.黄灰色 全体的に火を受けた為黒く変色 e.良好 f.古手の手捏ねタイプ
14-14	"	かわらけ	(14.4)	(13.0)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質良土 c.橙色 焼きムラあり部分的に黄褐色 e.良好
14-15	"	かわらけ	(14.4)	(13.4)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.黄褐色 e.やや甘い
14-16	"	白かわらけ	—	(3.6)	—	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 赤色粒 粉質気味良土 c.黄白色 e.良好
14-17	"	同安窯系 青磁櫛搔文碗	体部下位片			a.ロクロ 内面:櫛搔+劃花文 外面:縦位の櫛目文 b.灰色 微砂少量 緻密 やや粘性あり d.半透明な灰緑色 貫入多い
14-18	"	同安窯系 青磁櫛搔文碗	体部下位片			a.ロクロ 内面:片切彫の劃花文 外面:縦位の櫛目文 b.灰色 微砂少量 緻密 やや粘性あり d.透明な灰緑色 貫入多い
14-19	"	同安窯系青磁 櫛搔劃花文碗	口縁部小片			a.ロクロ 内面:櫛搔劃花文 b.灰色 黒色粒 緻密 d.半透明な灰緑色薄く施釉 f.キズあり
14-20	"	白磁端反碗	口縁部小片			a.ロクロ b.白色 黒色粒・茶色粒少量 精良堅緻 d.透明な薄い水色をやや薄く施釉 気泡あり f.器表面キズあり
14-21	"	白磁碗	体部片			a.ロクロ 内面:劃花文 b.白色 黒色粒少量 精良堅緻 d.半透明の青味を帯びた白色を薄く施釉 気泡あり
14-22	"	常滑 甗	肩部片			a.輪積技法 外面:縦長の格子目叩き文 b.灰色 小石粒 黒色粒 白色粒 石英 長石多め c.灰色 e.硬質
14-23	"	常滑 甗	胴部片			a.輪積技法 外面:縦長の格子目叩き文 b.淡褐色 白色粒 長石 黒色粒多め c.暗褐色 e.硬質
14-24	溝3b	かわらけ	(10.5)	(9.0)	(2.0)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 赤色粒 粉質気味良土 c.黄灰色 e.やや甘い
14-25	"	かわらけ	(14.6)	(12.8)	(3.1)	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 赤色粒 粉質気味良土 c.黄灰色 e.やや甘い
14-26	"	同安窯系 青磁櫛搔文碗	口縁部片			a.ロクロ 内面:櫛搔劃花文 外面:縦位の櫛目文 b.灰色 微砂 精良堅緻 d.不透明な灰緑色を薄く施釉 貫入・気泡あり f.内外面に融着物あり
14-27	"	同安窯系 青磁櫛搔文碗	胴部片			a.ロクロ 内面:櫛搔劃花文 外面:縦位の櫛目文 b.灰色 微砂少量 緻密 精良堅緻 d.半透明な暗灰緑色 貫入あり 気泡あり f.キズあり
14-28	"	白磁皿	底部片			a.ロクロ 内面見込みに劃花文 b.黄灰色 微砂 緻密 d.不透明な黄色味を帯びた白色をやや厚く施す 貫入あり 気泡あり f.VⅢ-1 b
14-29	"	渥美 捏鉢	口縁部小片			a.輪積技法 b.砂粒 石英 白色粒少なめ c.胎土・器表共に暗灰色 e.硬質
14-30	"	常滑 甗	肩部小片			a.輪積技法 b.灰色 砂粒 白色粒少なめ 小石粒多め c.黒褐色 e.硬質
14-31	遺構外	かわらけ	(9.0)	(8.0)	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 赤色粒 良土 c.黄灰色 e.やや甘い
14-32	"	かわらけ	(9.0)	(7.8)	1.85	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 赤色粒 土丹粒 c.橙色 e.やや甘い f.灯明皿
14-33	"	かわらけ	(8.0)	(6.0)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好
14-34	"	かわらけ	(8.4)	(7.4)	1.4	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.橙色 e.良好

表6 遺物観察表(5)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
14-35	"	かわらけ	(8.8)	(7.8)	2.1	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
14-36	"	かわらけ	(9.6)	(8.0)	1.55	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 赤色粒 良土 c.黄灰色 e.良好 f.灯明皿
14-37	"	かわらけ	(14.0)	(12.0)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
14-38	"	かわらけ	(14.4)	(13.2)	—	a.手捏ね 外底指頭痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.黄灰色 e.やや甘い
14-39	"	同安窯系 青磁櫛搔文碗	胴部片			a.ロクロ 内面:櫛搔劃花文 外面:縦位の櫛目文 b.灰色 精良堅緻 d.不透明な灰緑色をやや薄めに施す 気泡あり f.二次焼成
14-40	遺構外	同安窯系 青磁櫛搔文碗	口縁部片			a.ロクロ 内面:櫛搔劃花文 外面:縦位の櫛目文 b.灰色 微砂少量 精良堅緻 d.半透明な黄緑色を薄く施釉 細かい貫入あり 気泡あり f.キズあり
14-41	"	同安窯系 青磁劃花文碗	胴部～底部片			a.ロクロ 内面:櫛搔劃花文 外面:無文 b.灰色 微砂少量 精良堅緻 d.半透明な青味を帯びた緑色を高台畳付けおよびその内部を除き平均的にしっかり施釉 f.キズあり

第四章 まとめ

本調査地点は、鎌倉市街地の中心部で「若宮大路周辺遺跡群」の北東最端にあたり、周辺は北隣に鎌倉幕府最後の執権北条高時の菩提を弔うために後醍醐天皇が建立した宝戒寺、西沿いを南北に走る小町大路は鎌倉時代からの幹線道路で鎌倉幕府が定めた「町屋」の多くと結ばれた幹線道路、さらに小町大路を挟んで西側域が若宮大路御所とされる「北条小町邸跡」、北側域の「政所跡」などと隣接するところに位置している。

今回の発掘調査では、遺構を上層と下層に分けて報告したが、表土層下に明瞭な地形層による生活面は見つかっておらず、遺構の殆んどは中世基盤となる地山で発見され、その上面は後世の攪乱や削平に遭っていたことが確認された。本調査地点と重複した調査期間で実施され東隣に位置したⅡ地点（小町三丁目425番3地点：図3参照）では、土丹地形層で整地された4時期の生活面に伴い多数の遺構・遺物が発見された。また平成6年に調査が実施された宝戒寺門前の発掘調査（図2-12 北条高時邸跡：『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12 第1分冊』）では、中世地山上に少なくとも3時期の生活面が確認され、さらに表土層下には近世遺構も見つかったことを考えると、今回の調査地点に残る遺構密度はあまり高いとは言えない状態であった。

下層遺構で確認された溝3は東西方向に伸びる大型の溝遺構で、排水を兼ねた屋敷を区画するような薬研堀形の溝と想定できる。確認面からの深さは100cm前後、溝肩が削平を受けているが215cm以上の幅をもつと推定でき、土層観察からは少なくとも数度の掘り直しや浚渫が行われた可能性が高く、出土遺物から開削年代は12世紀末～13世紀前葉頃まで機能していたと考えられる。ところで同様の年代時期と規模をもつ溝は、若宮大路・小町大路など中世鎌倉中枢域を走る大路側溝や、大倉幕府周辺の鎌倉初期時期に遡る中世地山に類似した覆土の溝にその事例を求めることができる。本溝も開削時期や規模からみて屋敷の外郭溝としての機能していた可能性が強い。

次に出土遺物についてみると、今回の調査で遺物は分類困難な小破片を除き接合後の破片数で1,801点が得られた。このうち大多数を占めているのがかわらけで、ロクロ成形726点・手捏ね成形931点・白かわらけ14点の合計1,671点と全体出土量の約92%にも上っている。次に多く認められたものが国産陶器62点（約3.5%）、貿易磁器は30点で出土比率が僅か1.7%程であった（表7・8）。かわらけ型式別構成の内訳は手捏ね成形が約56%、ロクロ成形が約44%の割合が確認され、出土かわらけの半数以上が手捏ね成形の資料で占められていたのに比べて溝1の型式別組成をみると、出土かわらけの約66%がロクロ成形の製品で占められており、上・下層遺構に伴うかわらけが手捏ねとロクロ製品の占める出土比率の割合が逆転した傾向が認められた。

なお、周辺地域を含めた検出遺構の傾向や考察については本調査地点と重複した期間で調査を実施したⅡ地点の調査成果と合わせて次年度に報告することにしたい。

表7 遺物分類別出土数量・比率表

出土面・遺構	種類	上・下層(溝1以外)	溝1	個数	比率(%)
かわらけ	ロクロ	299	427	726	40.3
	手捏ね	706	225	931	51.68
	白	12	2	14	0.78
舶載陶磁器	青磁	12	11	23	1.28
	白磁	5	1	6	0.33
	青白磁	1	0	1	0.06
国産陶磁器	瀬戸	1	0	1	0.06
	常滑	26	25	51	2.83
	渥美	5	3	8	0.44
	山茶碗(南部)	1	0	1	0.06
	山茶碗(北部)	1	0	1	0.06
土製品	瓦	1	2	3	0.17
	瓦器	2	0	2	0.11
	その他	0	1	1	0.06
石製品	その他	0	1	1	0.06
金属製品	釘	8	1	9	0.5
	その他	0	3	3	0.17
自然遺物	骨	8	3	11	0.61
	貝	7	0	7	0.39
古代	須恵器	1	0	1	0.06
合計		1096	705	1801	100%
比率		60.86	39.14	100%	

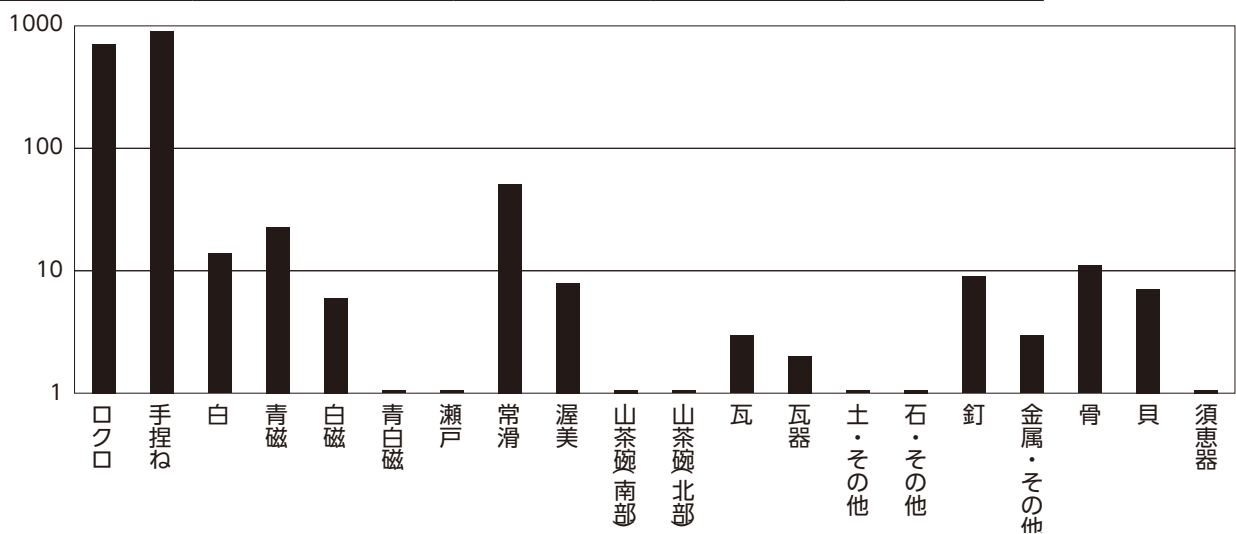


表8 溝1 かわらけ型式別出土点数

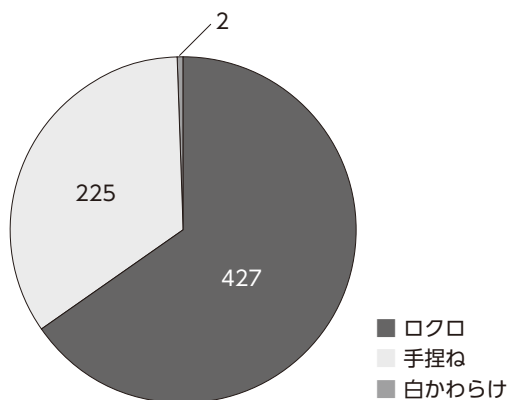
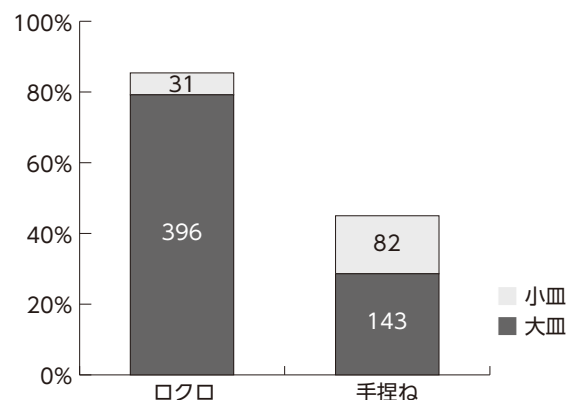


表9 溝1 かわらけ器種別出土点数





◁ 1 上層遺構全景(南から)

▷ 2 土坑4、P15・16



◁ 3 土坑6、P5・10(北から)



◁ 1
土坑12・P22(南から)



▷ 2
土坑9・11上層検出状況



◁ 3
土坑1(北から)



◁ 1 下層遺構全景(北から)



▷ 2 下層遺構(南から)



◁ 3 下層遺構全景(東から)



△1 溝3 (西から)



△2 溝3土層断面 (東壁面)



△3 溝3土層断面 (西壁面)



△4 調査区東壁面土層断面



△5 調査区北壁面土層断面



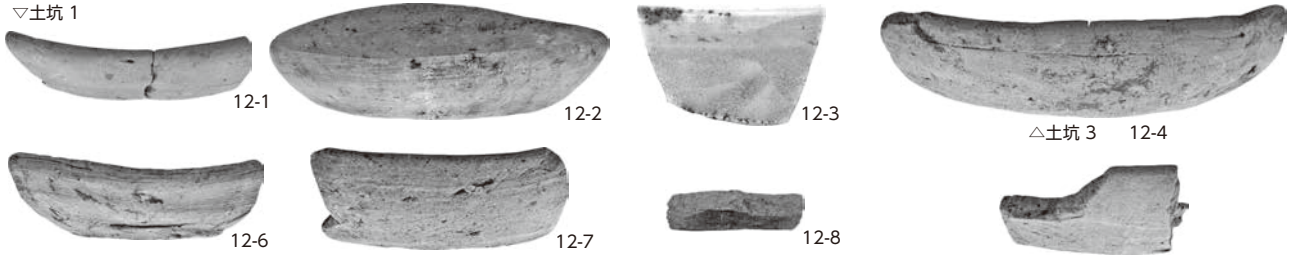
△6 調査区西壁北側土層断面



△7 調査区南西拡張トレンチ

図版5

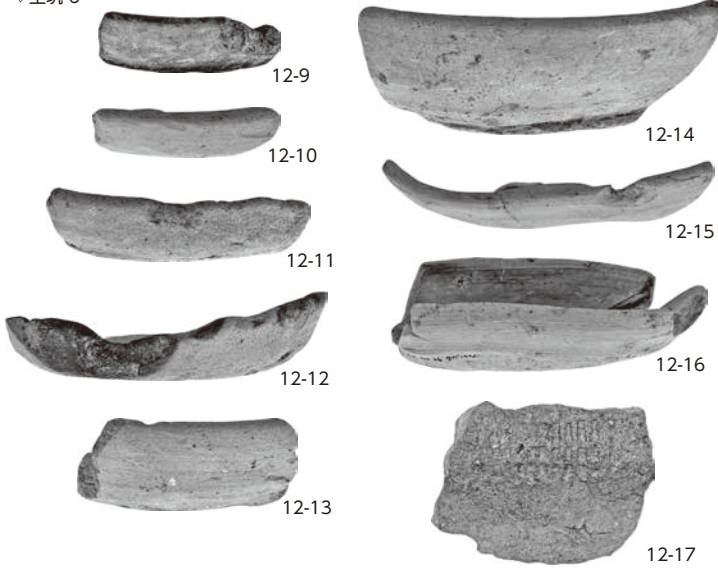
▽土坑 1



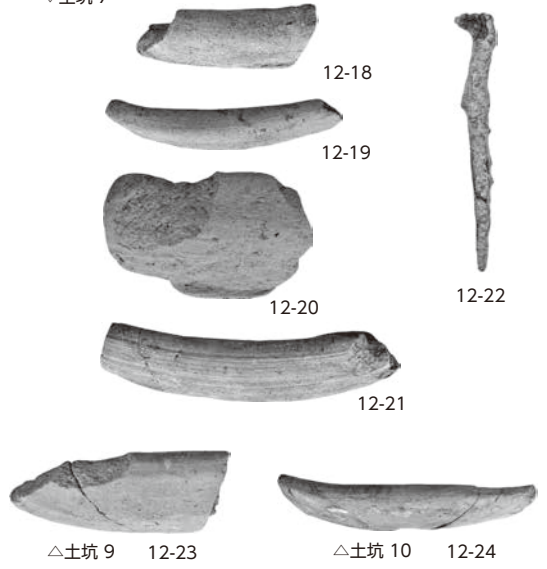
△土坑 3 12-4

△土坑 4 12-5

▽土坑 6



▽土坑 7



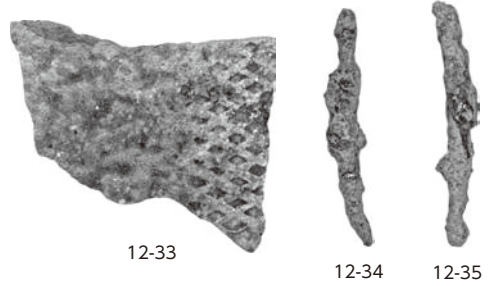
▽土坑 11



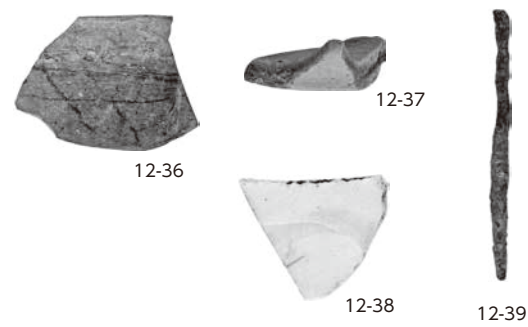
△P2 12-28



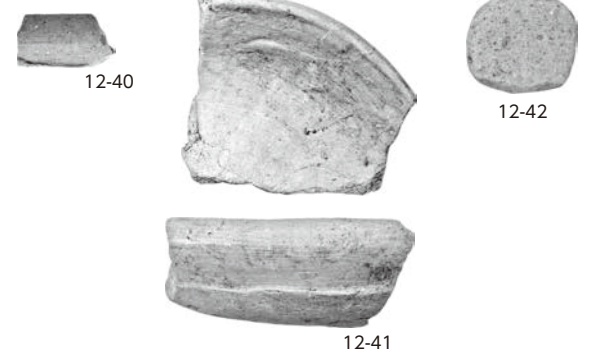
▽P10



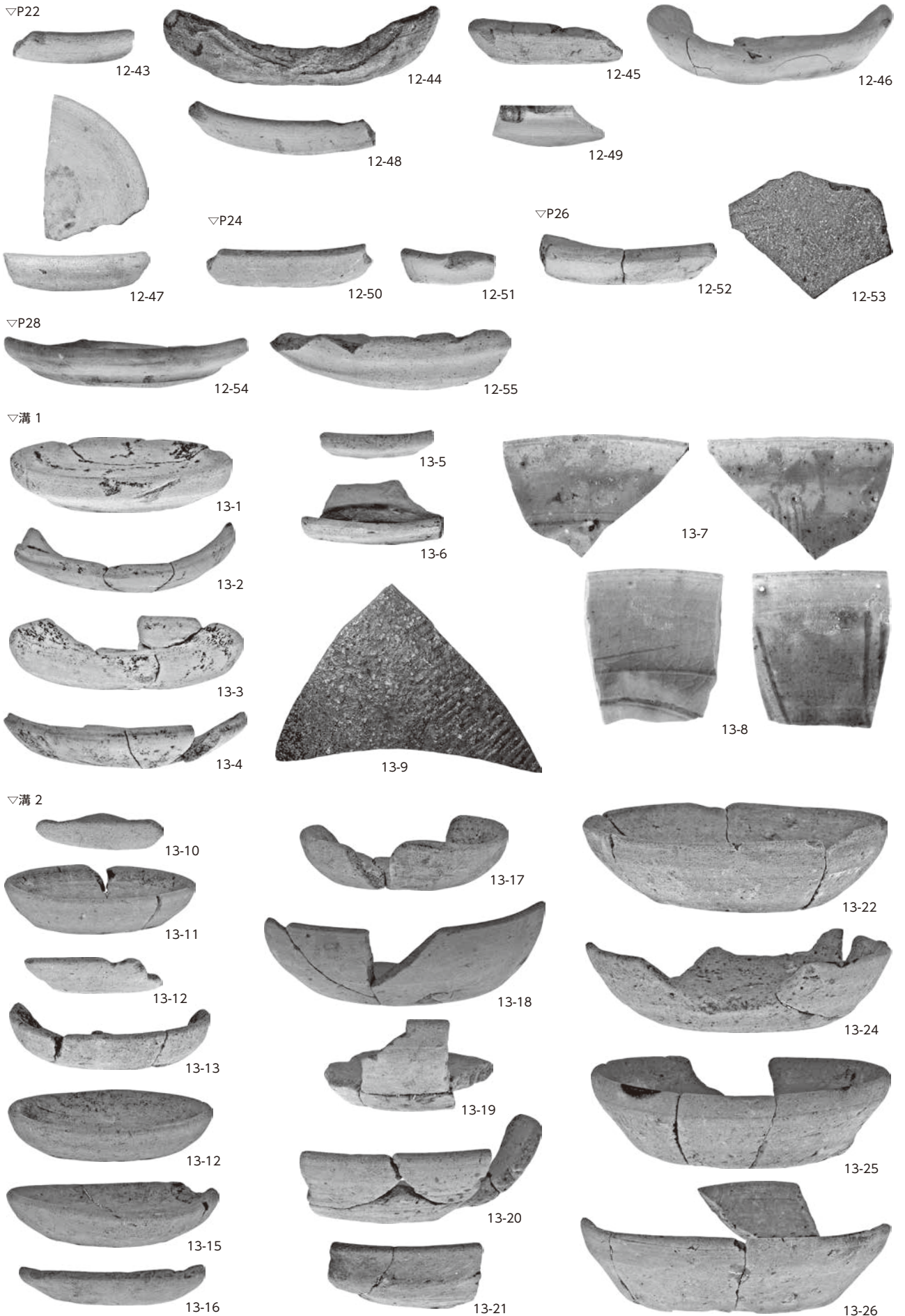
▽P14



▽P21



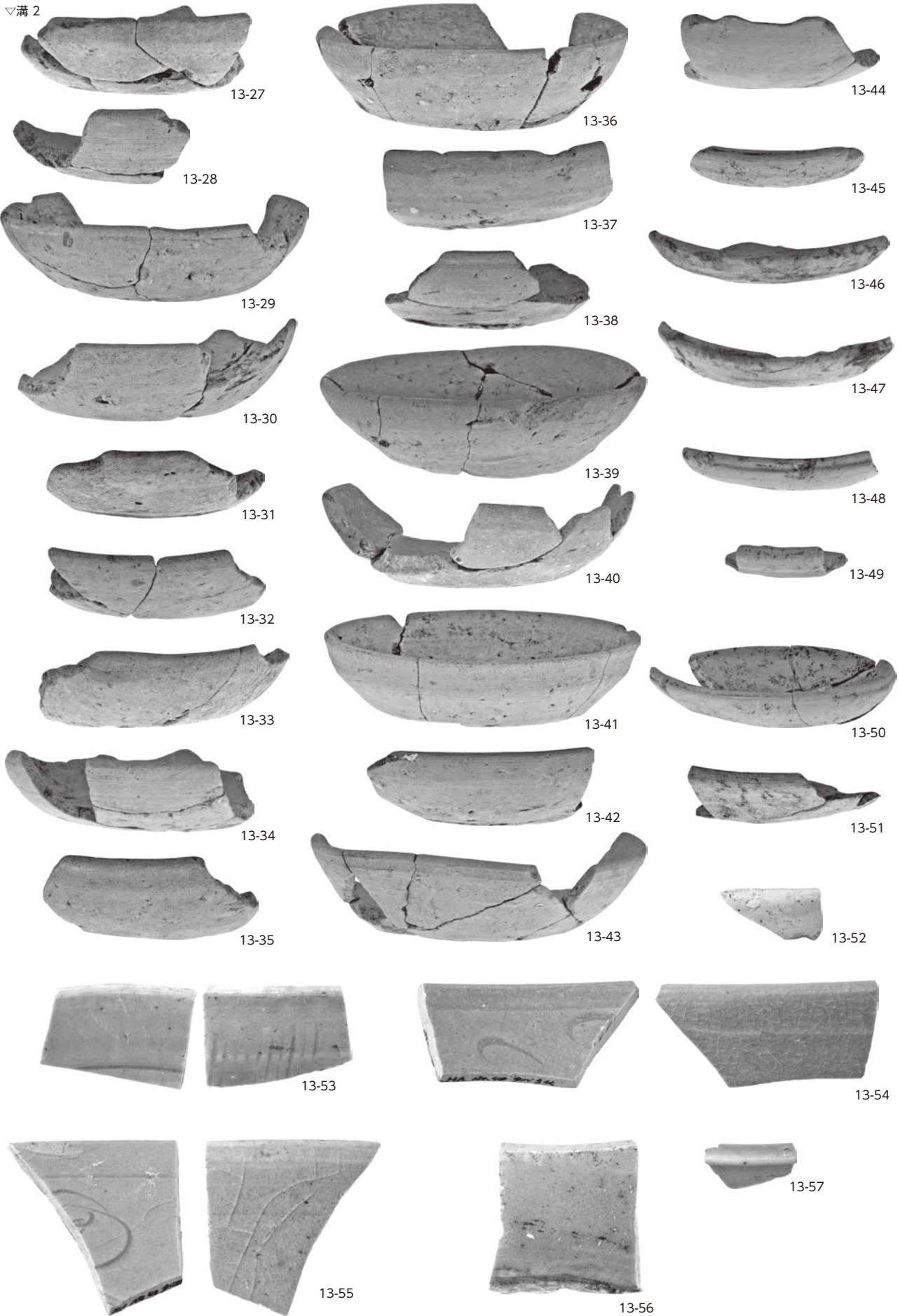
土坑・ピット出土遺物



溝2出土遺物(1)

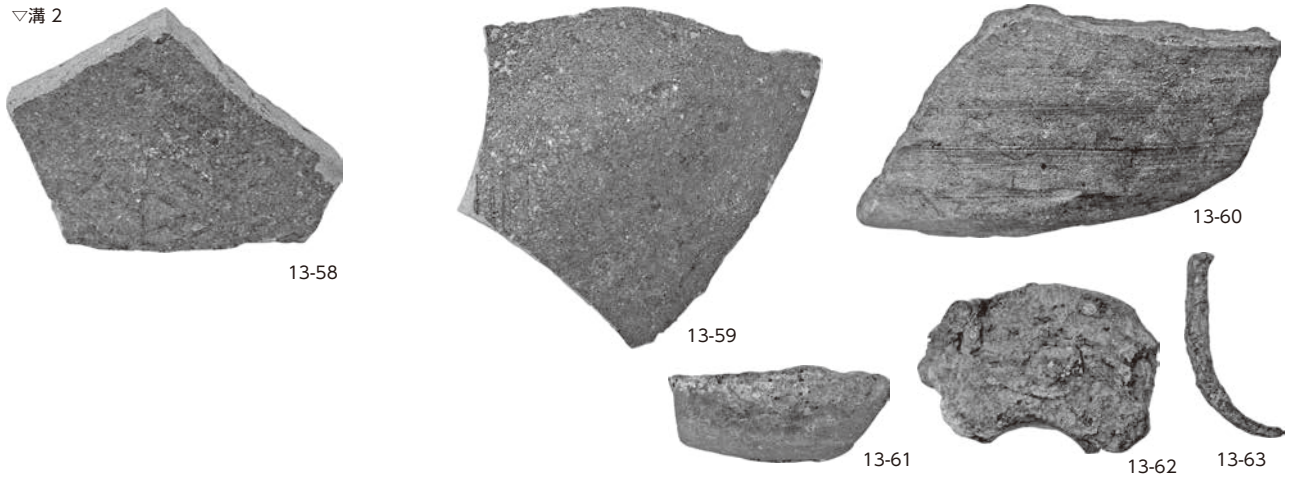
图版 7

▽溝 2

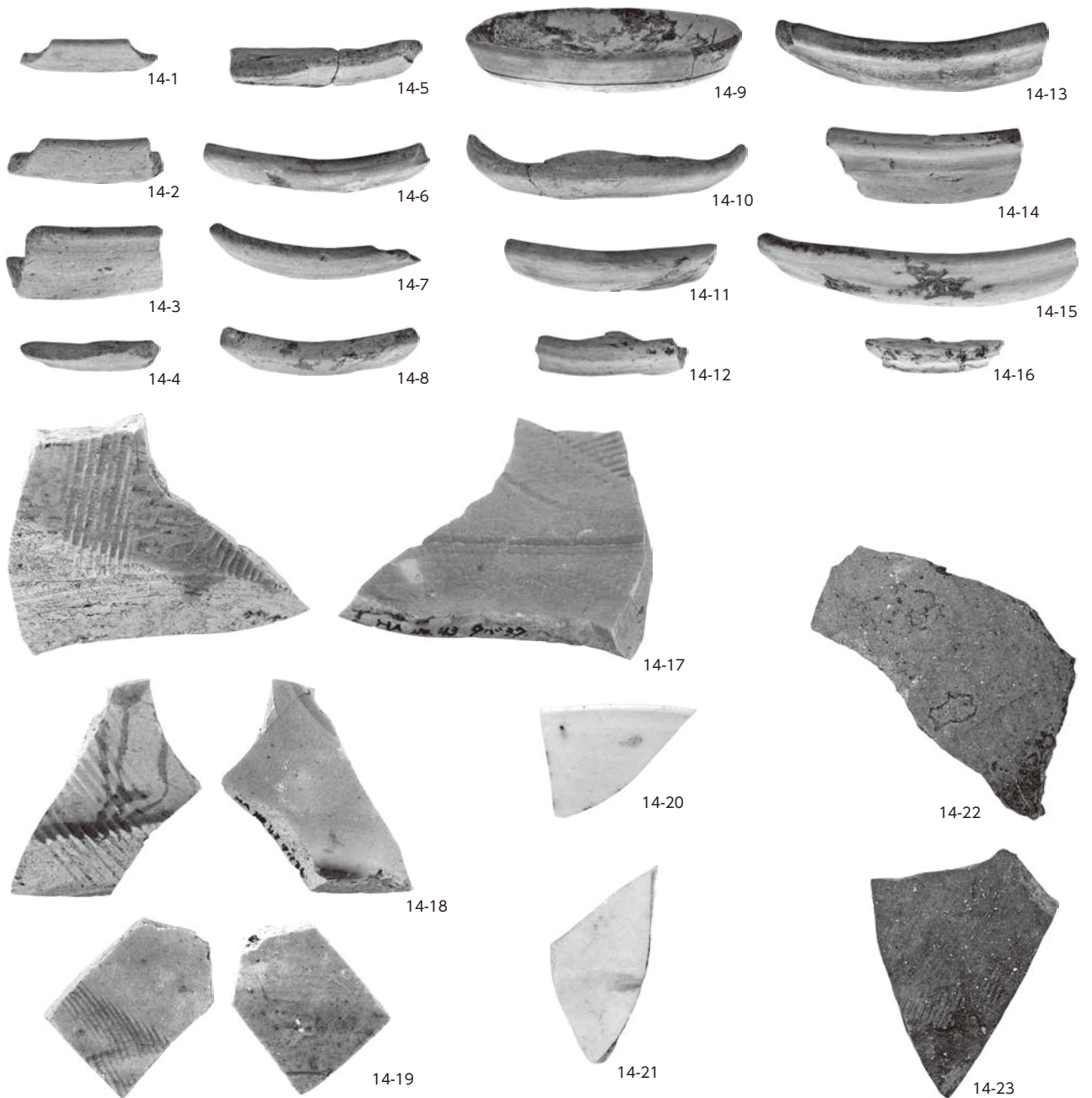


溝 2 出土遺物 (2)

▽溝 2



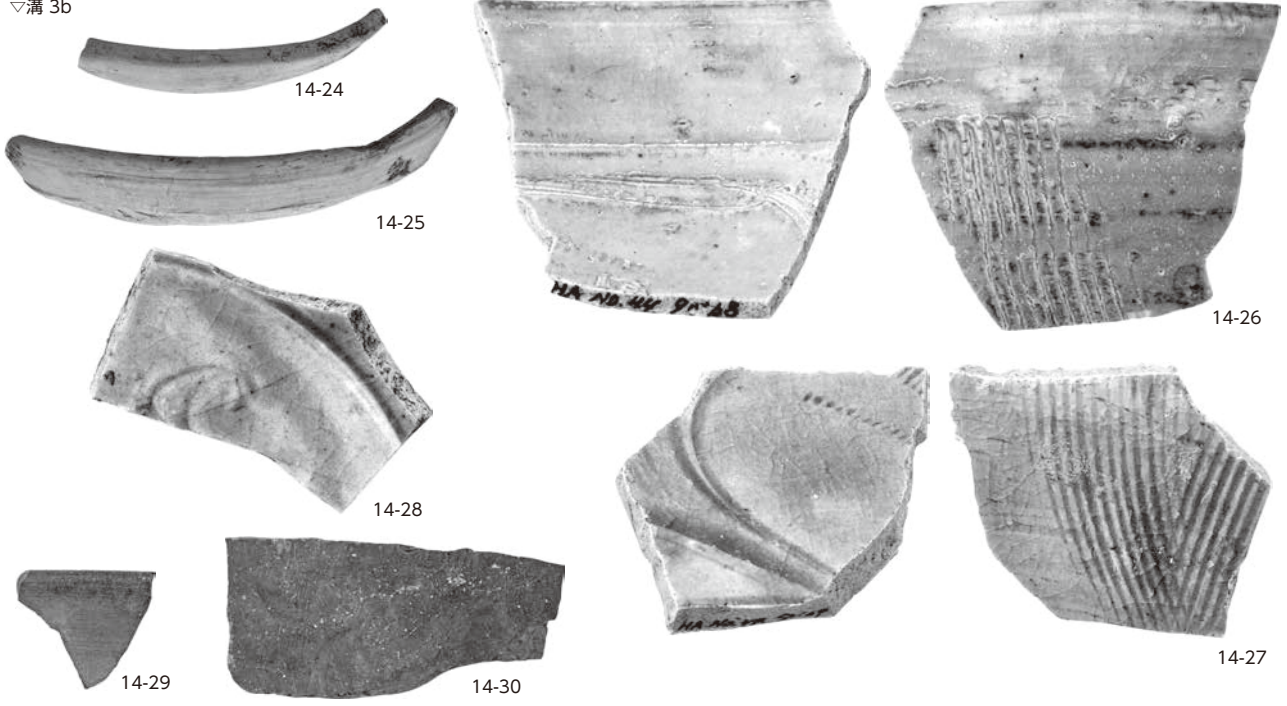
▽溝 3a



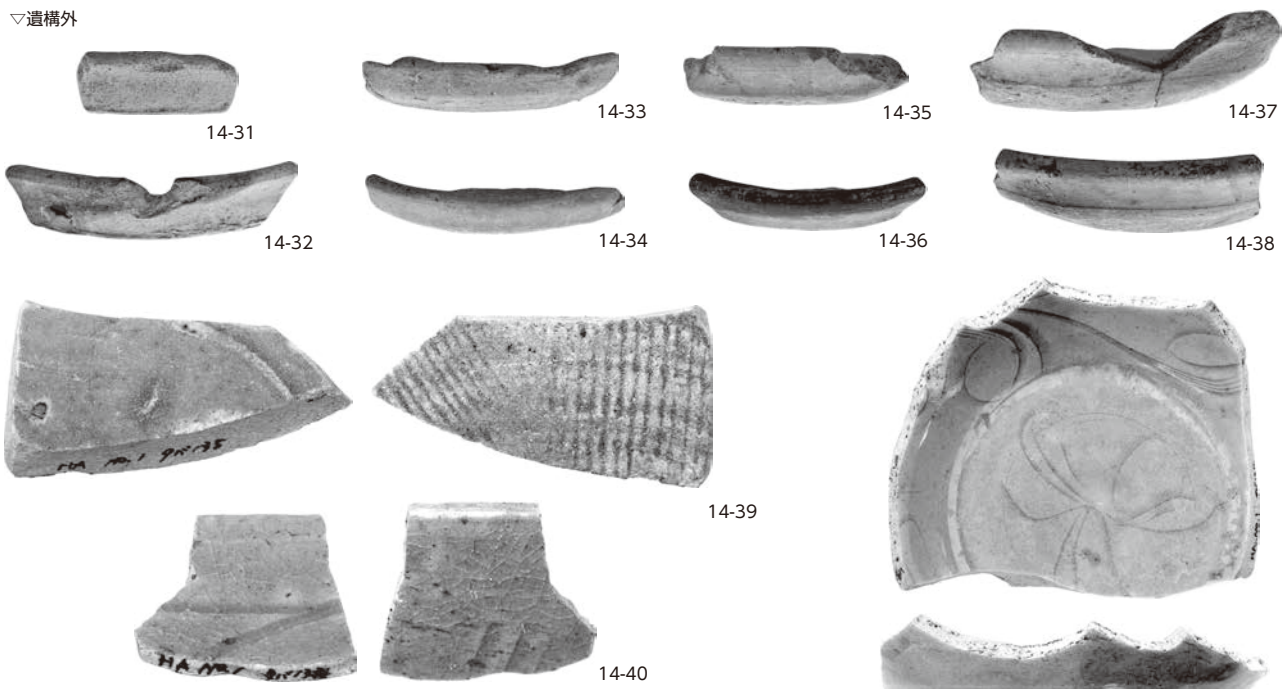
溝 3a 出土遺物

図版9

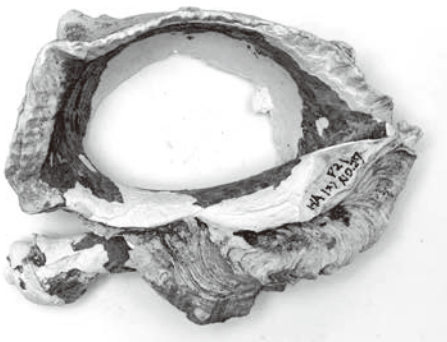
▽溝 3b



▽遺構外



▽P21 貝



溝 3b 出土遺物

極楽寺旧境内遺跡 (No. 291)

極楽寺二丁目 948 番 8

例 言

1. 本報は「極楽寺旧境内遺跡」内、極楽寺二丁目948番8における埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査期間 2005年4月7日～同年5月23日
調査面積 50.50㎡
3. 本調査地点の略称はGK2948とした。
4. 調査体制
担 当 者 馬淵和雄
調 査 員 松原康子(資料整理)・鍛冶屋勝二・松葉崇・根本志保(資料整理)・沖元道(資料整理)
調査補助員 鈴木弘太・岩崎卓治(資料整理)
作 業 員 天野隆男・牛嶋道夫・宝珠山秀雄(社団法人鎌倉シルバー人材センター)
5. 本報作成分担
遺構図整理 沖元
遺物実測 松原・根本・岩崎
同墨入れ 松原・根本・岩崎
同観察表 松原
原稿執筆 馬淵・沖元(担当部分末尾に執筆者名を記す)
編集・総括 馬淵

目 次

本 文 目 次

第一章 調査地点の概観	43
1. 位置と立地	43
2. 歴史的環境	43
第二章 調査の概要	49
1. 調査にいたる経緯	49
2. 調査方法	49
3. 調査経過	49
第三章 調査結果	50
第1節 概要	50
1. 層序と面の概要	50
第2節 各説	53
1. I面	53
2. II面上層面	53
3. II面下層面	56
4. III面上層面	63
5. III面	66
第四章 まとめと考察	73
1. 遺構の変遷と年代	73
2. まとめ	73

挿 図 目 次

図1 調査地点と周辺の遺跡・旧跡	44	図11 溝1・2・土坑3・4、同出土遺物	58
図2 明治15年ごろの遺跡周辺地図	46	図12 土坑6・8・9、同出土遺物、	
図3 極楽寺境内絵図	48	小穴・II面下層面出土遺物	59
図4 調査区設定図	50	図13 III面上層面遺構全図、溝3、	
図5 調査区土層図(1)、調査区壁出土遺物	51	同出土遺物	60
図6 調査区土層図(2)	52	図14 建物1、同出土遺物	61
図7 I面遺構全図・溝状遺構・小穴列	54	図15 建物2、同出土遺物	62
図8 II面上層面遺構全図・土坑7・		図16 方形土坑、同出土遺物	63
P22出土遺物	55	図17 III面上層面小穴、III面上層面出土遺物	64
図9 II面上層面出土遺物	56	図18 III面遺構全図、小穴・III面出土遺物	65
図10 II面下層面遺構全図	57	図19 遺構変遷図	72

表 目 次

表1 出土遺物観察表(1) ……………	67	表4 出土遺物観察表(4) ……………	70
表2 出土遺物観察表(2) ……………	68	表5 出土遺物計量表 ……………	71
表3 出土遺物観察表(3) ……………	69		

図 版 目 次

図版1 ……………	75	図版7 ……………	81
1-1. 東南山麓から調査区をのぞむ		7-1. 方形土坑(北から)	
1-2. 調査地点近景		7-2. 溝3(北から)	
図版2 ……………	76	7-3. II区III面上層面全景(東から)	
2-1. I区I面全景		図版8 ……………	82
2-2. II区II面上層面全景(東から)		8-1. II区III面上層面(南から)	
2-3. II区II面上層面全景(南から)		8-2. I区南壁土層断面	
図版3 ……………	77	8-3. I区東壁土層断面	
3-1. 土坑2(北から)		図版9 ……………	83
3-2. 砥石・滑石印判出土状況(西から)		9-1. I区北壁土層断面	
3-3. II区II面下層面全景(北から)		9-2. I区深掘り(南から)	
図版4 ……………	78	9-3. II区東壁土層断面	
4-1. I区II面下層面全景(東から)		図版10 ……………	84
4-2. II区II面下層面全景(東から)		出土遺物1	
4-3. II区II面下層面全景(南から)		図版11 ……………	85
図版5 ……………	79	出土遺物2	
5-1. 溝1(南から)		図版12 ……………	86
5-2. 溝2(南から)		出土遺物3	
5-3. 土師器皿出土状況(南から)		図版13 ……………	87
図版6 ……………	80	出土遺物4	
6-1. 土坑3・4(北から)		図版14 ……………	88
6-2. I区III面上層面全景(東から)		出土遺物5	
6-3. I区III面上層面全景(北から)			

第一章 調査地点の概観

1. 位置と立地

鎌倉市極楽寺地区は、鎌倉旧市街地が広がる滑川流域の低地を圍繞する丘陵地帯の南西端に位置する。極楽寺川沿いの谷と、そこから伸びる支谷で構成される南北に長い地区である。近世には相模国鎌倉郡極楽寺村と称し、その四至は明治時代初期の『相模国鎌倉郡村誌』（『皇国地誌』）によれば、東は山上で長谷村、坂ノ下村と、西は山上で津村、腰越村と、北は山上で笛田村と境を接し、南は相模灘に浜すとある。極楽寺地区には極楽寺が所在し、これが地名の由来となっている。

調査地点は鎌倉市極楽寺二丁目948番8に所在する。極楽寺川を海から1kmほど遡上すると極楽寺がある。現在の極楽寺と西北に隣接する稲村ガ崎小学校が往時の極楽寺中心伽藍と考えられている（玉林ほか1980）。極楽寺境内絵図によれば、この極楽寺中心伽藍から四方に伸びる支谷内にも極楽寺の伽藍範囲は及んでいる。これらの支谷のうち、稲村ガ崎小学校から北北東に伸びる馬場ヶ谷と呼ばれる谷戸を300mほど進んだ谷戸のなかほどに本調査地点は所在する。

2. 歴史的環境

縄文時代

鎌倉市内では、荏柄天神社前や横浜国大付属小学校内などの山裾で、諸磯b式や称名寺式の縄文土器が採集されている（赤星1959）。本調査地点周辺では、極楽寺字金山（現在の稲村ヶ崎1丁目内、金山橋に遺称がみられる）にて、石杵ないし敲石とされる石器が採取されている（赤星1941 / 1959）。

弥生時代

鎌倉旧市街地内では、滑川と二階堂川が合流する市街地北東域一帯に弥生中期～後期にかけての集落址が確認されている（馬淵1998 / 1999 / 斎木ほか2007）。本調査地点周辺では、本地点西北200mの中世枅形遺構（「一升枅」）の北側の尾根の頂部付近で弥生時代末期～古墳時代初頭の竪穴住居址が確認され（地点34-8）、地点34-10では弥生時代末期の壺型土器が出土している（鈴木ほか2001）。

古墳時代

極楽寺の東方の長谷小路周辺では明確に遺構に伴うものはないものの、弥生後期～古墳後期にかけての土器が採取されている（斎木ほか1992 / 瀬田1994 / 木村・佐藤1995など）。また、和田塚周辺には古墳時代後期と思われる円墳群があったとされ（「向原古墳群」）、このうちの采女塚からは人物埴輪像などが出土している（須藤1896 / 八木1897 / 坪井1909 / 赤星1959）。

鎌倉市内に現存する古墳でもっとも多いのが横穴古墳である。このうち稲村ヶ崎駅周辺から北方に伸びる正福寺谷内に、姥ヶ谷横穴群29穴（三上1948 / 赤星1959）・陣鐘山横穴（三上1948 / 赤星1959）・一ノ谷横穴群3穴（原1951 / 赤星1959）・二ノ谷横穴群10穴（三上1948 / 赤星1959 / 田代ほか2002）がある。また、現在、鎌倉文学館のあるあたりに、直刀・金環を出土した長楽寺山横穴（赤星1959）・長楽寺谷横穴群3穴（赤星1959）が知られ、光則寺裏に光則寺谷横穴（赤星1959）がある。このように、極楽寺の所在する谷の東西に、横穴の存在が確認される一方で、地点17及び地点15に横穴転用のやぐらが1基ずつある（田代ほか1995・1996）以外には、地点13のやぐらを「一般やぐら形でなく末期横穴を利用したものらしい形」（赤星1959）とされる程度で、極楽寺周辺では他に横穴の存在が確認されていない。しかし、地点17や地点15の事例にもあるように、横穴転用やぐらの存在や、極楽寺造



図1 調査地点と周辺の遺跡・旧跡

図1 調査地点名(遺跡名)・地点番号・地番・(担当者と調査年度)・「調査報告書」(編集者と発行年度)

(No.291 極楽寺旧境内遺跡)

本調査地点 極楽寺2-948-7 2. 極楽寺3-298-1外(1994 齋木)「極楽寺旧境内遺跡」(齋木1998) 3. 極楽寺2-994(赤星1973)「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報1」(1983 赤星) 4. 極楽寺4-885-1付近(大三輪・手塚1973)「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報1」(1983) 6. 極楽寺3-320-1(田代1995)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13第1分冊」(田代・継1997) 7. 極楽寺3-335-3(田代1995)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13第2分冊」(田代1997) 8. 極楽寺3-348-2(田代1996)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14第1分冊」(継1998) 10. 稲村ヶ崎2-398-イほか地点(馬淵1997)「極楽寺旧境内遺跡」(馬淵1999) 11. 極楽寺3-358・359(原2002~2003)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22第2分冊」(原ほか2006) 12. 極楽寺3-359-8の一部地点(宮田2007)「極楽寺旧境内遺跡」(宮田2009) 13. 極楽寺3-340-5(田代1990)「平成2年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」(継1992) 14. 極楽寺4-986-1先市道(1972)「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報1」(1983) 16. 極楽寺4丁目地内(1994~1995田代)「東国歴史考古学研究所調査研究報告第7集」(田代他1996) 18. 極楽寺4丁目地内(宮田1996)「極楽寺旧境内遺跡内やぐら」(宮田1997) 20. 極楽寺4-920(汐見1998)「鎌倉の埋蔵文化財3」(1999 汐見) 27. 極楽寺2-950・953-2・954・955・993-1・993-2・14-13先(2005~2008 松葉・汐見・鈴木他)「かながわ考古学財団調査報告240」(2009 柏木・鈴木他) 29. 極楽寺2-27-1(2006 新聞・田代)「かながわ考古学財団調査報告209」(2007 新聞・田代) 33. 極楽寺1-123-1他(2005 齋木)「極楽寺旧境内遺跡発掘調査報告書」(2006 齋木)

(No.290 極楽寺中心伽藍跡)

1. 極楽寺2-10-6・3-2-3(1977~1979 齋木ほか)「極楽寺旧境内遺跡」(1980 玉林) 5. 極楽寺3-298-1外(田代1992)「東国歴史考古学研究所調査研究報告第25集」(田代1992) 9. 極楽寺3-1028-1の一部地点(汐見2003)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23第2分冊」(汐見・小泉

2007)

(No.128 極楽寺やぐら群)

21: 極楽寺2-56(長谷川・大塚1998)「かながわ考古学財団調査報告72」(長谷川他1999) 23. 極楽寺2-56(鈴木・井関1999)「かながわ考古学財団調査報告90」(鈴木2000) 24. 極楽寺2-56(鈴木・井関1999)「かながわ考古学財団調査報告93」(鈴木2000)

(No.293 一升枡遺跡)

22. 極楽寺4-855-1(長谷川1999)「かながわ考古学財団調査報告73」(長谷川他1999) 25. 極楽寺4-855-1(鈴木・木村1999)「かながわ考古学財団調査報告100」(鈴木2000)

(No.464 西方寺北やぐら)

28. 極楽寺2-11・11-2・14-4・16・17・20-2(松葉・柏木2007)「かながわ考古学財団調査報告229」(松葉他2008)

(No.141 真言院北やぐら群)

26. 極楽寺2-943(穴戸・宮坂2002)「かながわ考古学財団調査報告156」(宮坂他2003) 30. 極楽寺2-946・943(汐見・井関2004)「かながわ考古学財団調査報告194」(井関他2006)

(No.292 五合枡遺跡)

19. 極楽寺1丁目(田代1997)「東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集」(田代・宗臺1998) 31. (2002 原・福田)「五合枡遺跡(仏法寺跡)発掘調査報告書」(福田2003)

(No.219 西方寺跡)

32. 極楽寺2-18外地点(1998 齋木)「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16第1分冊」(糸2000)

(No.129 極楽寺前やぐら)

15. 極楽寺1丁目地内(1995 田代)「平成6年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」(田代他1996) 17. 極楽寺1丁目地内(田代1995)「東国歴史考古学研究所調査研究報告第7集」(田代他1996)

(その他)

34. 極楽寺坂地区(鈴木・菊川2000)「『古都鎌倉』を取り巻く山稜部の調査」(鈴木他2001)

営などの事業により、中世以降横穴が削平された可能性も考慮にいれるべきであろう。

古代

鎌倉旧市街地は古代相模国鎌倉郡に属しており、現在の御成小学校付近に鎌倉評もしくは郡家が比定されている(河野ほか1990)。宝亀二年(771年)の五畿七道制再編まで、古東海道は鎌倉を通過しており、この経路に関しては、二通りの指摘がなされている。一つは深沢から大仏坂を抜け、現在の長谷小路を通り、六地藏交差点に至る経路(木下ほか1997)。もう一つは、稲村ヶ崎の辺から市内に入り、浜堤上を通り、稲瀬川の河口付近から六地藏交差点に向かって北上する経路であり(馬淵1994/2004)、後者の場合は極楽寺近辺を通ることになる。

古東海道の経路に近いと考えられる、長谷小路周辺の砂丘上では8世紀~9世紀にかけての集落址や土壙墓が検出されている(齋木ほか1992/大河内ほか1997/大河内1997など)。本調査地点周辺では、



図2 明治15年ごろの遺跡周辺地図 (迅速測図)

地点6において遺構は検出されていないものの、8世紀後半から9世紀後半を中心とした、土師器や須恵器が多量に出土している。

中世

極楽寺は靈鷲山感応院と号し、真言律宗を宗旨とする。開基は北条重時、開山は忍性とされる。元徳元年(1329)の年紀をもつ『極楽寺縁起』によれば、「正永和尚」が深沢谷に丈六の阿弥陀如来像を安置し、極楽寺を造営していたが、完成する前の正嘉二年(1258)に亡くなっている。正元元年(1259)に、以前からあった極楽寺が狭小なため、北条重時が当時常陸の三村寺(三村山清涼院極楽寺)にいた忍性を招き寄せ、相談したところ、当時地獄谷と称されていた地に龍池があり、そこがよいとって、念誦したところ感応があったのでここに定めた。重時没後、その子の長時・業時兄弟が造営したという。

一方、『極楽寺由緒沿革書』によると永久年中(1113-1118)勝覚の創建と伝えるなど、建立当初のことは詳しくはわからない。『吾妻鏡』には弘長元年(1261)4月21日「奥州禪門極楽寺亭」に入御とあるのが初出である。ついで24日に「極楽寺新造山荘」とあり、同年11月3日「極楽寺別業」で重時が没し、同三年10月26日重時の三回忌を極楽寺で執行、導師は宗観房とある。『忍性菩薩行状略頌』によれば、忍性は文永四年(1267)8月に極楽寺に移住したとあり、寺蔵の十大弟子立像の銘にも、「文永五年辰戌年造立畢、願主忍性」とあることから、忍性の入寺は文永四年であろうとしている(川副・貫1959)。

前述したように忍性の極楽寺入寺が文永四年と考えられることや、重時三回忌の導師が宗観房であることから、当初念仏寺院であったものが律院化していったものと考えられている(上横手1992・馬淵1998)。

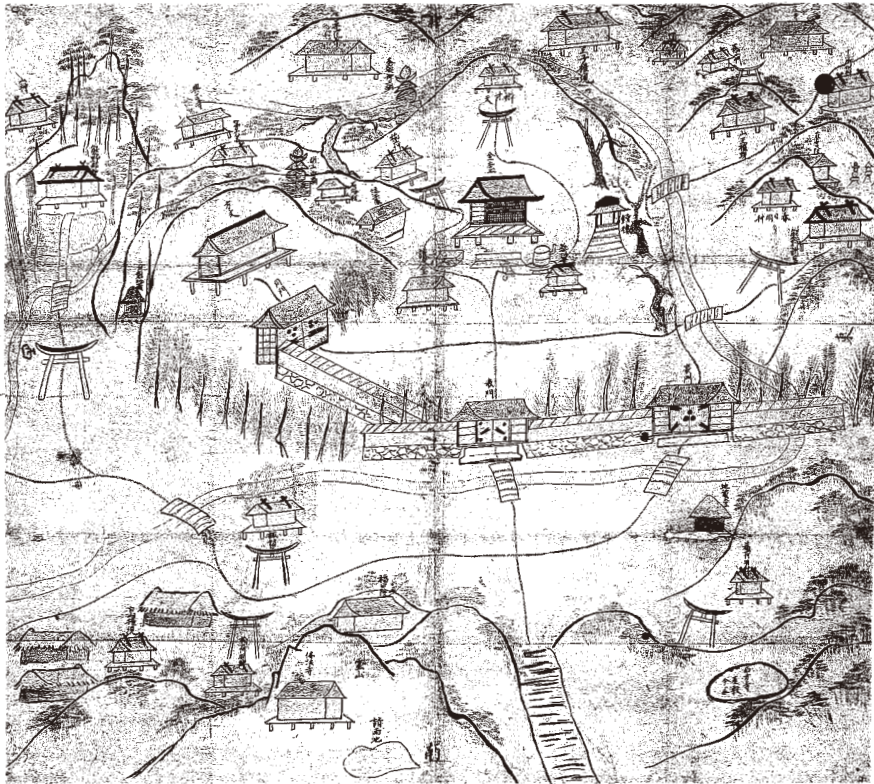
また、境の地の小堂から、重時の氏寺としての念仏寺になり、そして、忍性入寺以降律院化した、という考えも示されている。(小野塚1984)。

現在、極楽寺のある平地部は「極楽寺中心伽藍跡(No.290)」とされている。周辺の谷戸には支院や関連施設があったとされ、「尼寺跡(No.214)」・「浄土院跡(No.215)」・「真言院跡(No.216)」・「西方寺跡(No.219)」・「福田院跡(No.220)」・「稻荷社跡(No.221)」が周知の遺跡として登録されている。また長谷寺の北の谷戸で馬場谷の東方にあたる場所は「桑ヶ谷療病院跡(No.294)」とされている。

地点1では多量の搬入陶磁器とともに、方丈華嚴院址と推定される位置から、凝灰岩切石による壇正積基壇が検出されている(玉林ほか1980)。地点2・5からも多量の瓦が出土しているが、地点1では「鎌倉系」瓦が約3/4、「壬生寺系」瓦が約1/4に対し、地点2では出土瓦のほぼすべてが「壬生寺系」瓦であり、地点5でも9割近くが「壬生寺系」瓦となっている(原2006)。地点2から出土した瓦については、大阪四天王寺、京都壬生寺、堺市家原寺町遺跡、河内若江寺、横須賀近殿神社に同范、京都法勝寺金堂のものと類似するとされ、年代は中世Ⅰ期(1180-1210)あるいはそれ以前の11世紀代のものと、中世Ⅱ期(1210-1260)のものがあると指摘されている(山崎2000)。

地点2では、これらの瓦との関連が指摘されている時期不詳の基壇が存在し(齋木1998)、ここで出土した瓦と同范のものが畿内や、三浦氏の本願地と目される横須賀近殿神社から出土している。またこれらの中世Ⅰ期・中世Ⅱ期の瓦に関しては、小野塚氏の指摘する律院化する前の小堂の存在との関わりを考える上で重要な資料といえよう(小野塚1984)。

本調査地点の所在する谷は馬場ヶ谷という。馬場ヶ谷は『相州鎌倉極楽寺村絵図』や『皇国地誌』にその名が見られ、近世では極楽寺村に含まれていた。馬場ヶ谷には馬場に関わる伝承が残されており、「忍性が病気の治った馬の調教のためにつくったといわれ、武士が馬術の稽古もした」(鎌倉市教育センター2009)というものである。江戸時代の成立と考えられる『相模国極楽寺境内絵図』には、馬場ヶ谷と考えられる谷に稲荷・浄土院・尼寺・観智院・山王窟・普賢院・精進院・十二所権現が記されている。この



うち本調査地点の西側道路対面の小谷戸に「尼寺跡 (No.214)」、本調査地点の南西 100m ほどの小谷戸に「浄土院跡 (No.215)」が登録されている。このうち尼寺に関しては、「金沢文庫文書」年未詳十一月一日付金沢貞顕書状にみられる法花寺があたるのではないか、という指摘がされている (細川 1989)。

これまで、馬場ヶ谷内では谷内で 4 箇所、やぐらが 10 基、「一升枡」を含む馬場ヶ谷の東西の山稜部が調査されている。地点 3 では泥岩地行と遺構らしき窪みが遺物とともに検出されている。地点 27 ではやぐらとともに崖裾部の調査が行われており、溝や礎石建物の一部が検出されている。

(沖元)



図3 極楽寺境内絵図 (右上方の黒丸印付近が調査地点 鎌倉国宝館図録第 15 集を改変)

第二章 調査の概要

1. 調査にいたる経緯

鎌倉市中心部西南の山稜を超えたところにある極楽寺二丁目に、鋼管杭打ち込みによる基礎工事をともなう個人住宅の建設が計画された。場所は鎌倉時代後期に大きな勢力を持っていた律院・極楽寺の旧寺域に相当する谷間の一角にあたり、工事による遺構の損傷を免れないのは明らかであった。協議の結果、耐震を意図した工法から設計変更は困難と判断され、国庫補助事業として発掘調査が実施されることとなった。調査は2005年4月6日に始められた。

2. 調査方法

掘削方法

残土処理の関係上、調査対象地を南半部と北半部の2区に分割し、それぞれ「1区」「2区」と名付けた。排土に当たっては地表下70cmまでを重機ですき取り、以下を人力でおこなった。

測量基準杭の設定

西側前面の道路方位を概念上の基本軸とし、測量はこれに直交または平行する軸線を5m間隔で設定しておこなった。のち資料整理の際、世界測地系の数値を導入した。調査区はX-76 13240～76 14120 Y-27 60830～27 61910の間にある。

3. 調査経過

調査は2005年4月6日に始まり、5月23日に終了した。その間の経過は次の通り。

4月6日	機材搬入、並行して重機によりI区表土掘削	5月6日	重機により2区表土掘削
4月12日	I面全景写真撮影と平面実測	5月10日	II面上層全景写真撮影と平面実測
4月15日	II面上層平面実測	5月12日	II面下層全景写真撮影と平面実測
4月18日	II面下層平面実測	5月16日	III面全景写真撮影と平面実測
4月19日	II面下層全景写真撮影	5月17日	III面下層全景写真撮影と平面実測
4月22日	III面全景写真撮影と平面実測	5月20日	調査終了、機材片付け
4月25日	III面下層掘り	5月23日	撤収

(馬淵)

第三章 調査結果

第1節 概要

1. 層序と面の概要

I面 (図7)

厚さ約60～70cmの表土を除くと灰褐色砂質土層が現れる。この層は、東壁際で27.95m、西壁際で27.70mと東の山際から西方向、すなわち谷中心部に向かって落ちていることがわかる。北半部では上面がほとんど削られて遺構は検出されなかったが、南半部では溝状遺構と小穴の3つ並んだ列が検出された。全体に遺構は少ないが「I」面とした。

II面上層面 (図8)

I面を構成する厚さ約20cm～25cmほどの灰褐色砂質土層を排除すると、泥岩粒と遺物片を含んだ灰褐色粘質土層が現れる。この層は北東隅で27.80m、南西隅で27.45mと、I面同様谷中心部に向かって落ちている。検出された遺構は、土坑3基、小穴2口と少ないが、北壁際に泥岩地行が検出されたこともあり、「II」面上層とした。

II面下層面 (図10)

II面上層構成土である厚さ約15cm～20cmほどの灰褐色粘質土層を排除すると、灰褐色粘質土の層が

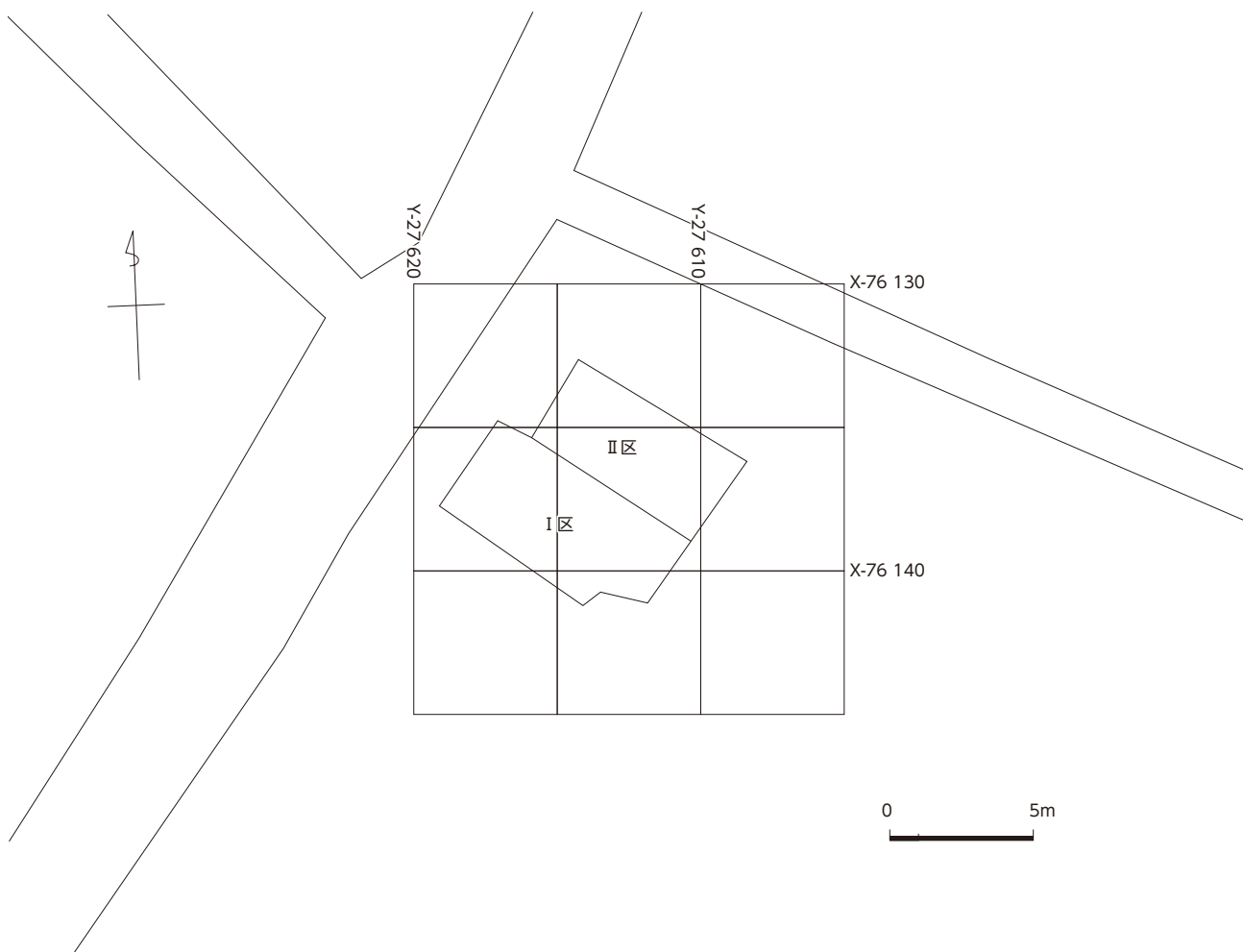


図4 調査区設定図

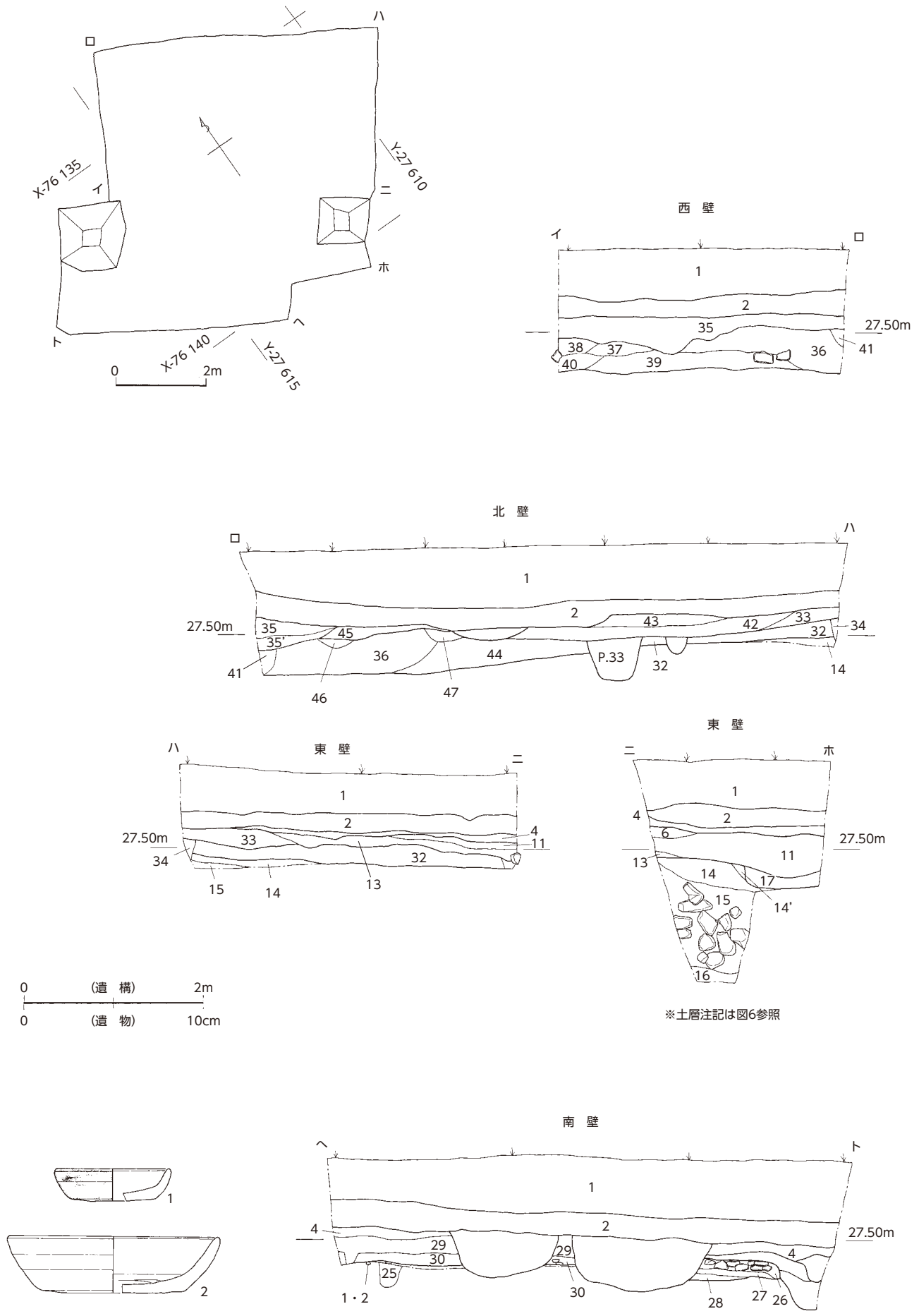
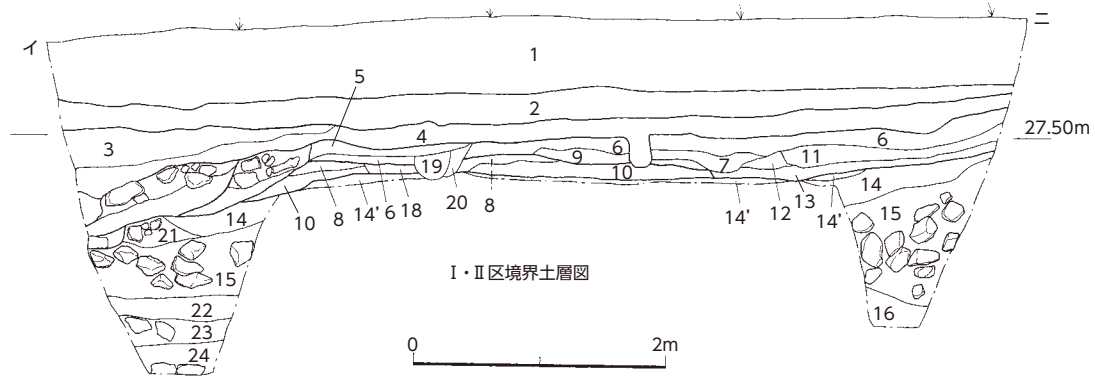


図5 調査区土層図(1)、調査区壁出土遺物



- | | |
|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 近代泥岩地行 2. 灰褐色砂質土 3. 灰褐色弱粘質土 4. 灰褐色粘質土 5. 灰褐色粘質土 6. 灰褐色粘質土 7. 暗灰褐色砂質土 8. 明灰褐色泥岩層 9. 暗灰褐色砂質土 10. 明灰褐色泥岩層 11. 暗灰褐色砂質土 12. 暗灰褐色砂質土 13. 暗灰褐色粘質土 14. 黄褐色泥岩層 15. 人頭大泥岩地行層 16. 黄褐色泥岩層 17. 灰褐色砂質土 18. 灰褐色弱粘質土 19. 灰褐色粘質土 20. 灰褐色粘質土 21. 灰褐色弱粘質土 22. 黄褐色泥岩層 23. 茶褐色粘質土 24. 茶褐色粘質土 25. 暗灰褐色弱粘質土 26. 灰褐色粘質土 27. 灰褐色粘質土 28. 灰褐色粘質土 29. 灰褐色粘質土 30. 灰褐色粘質土 31. 暗灰褐色粘質土 32. 人頭大泥岩版築層 33. 拳大～人頭大泥岩版築層 34. 灰褐色弱粘質土 35. 灰茶褐色粘質土 36. 暗灰褐色粘質土 37. 灰褐色粘質土 38. 半人頭大泥岩層 39. 人頭大泥岩版築層 40. 灰褐色弱粘質土 41. 明灰褐色弱粘質土 42. 暗灰褐色粘質土 43. 暗灰褐色粘質土 44. 半人頭大泥岩層 45. 明茶褐色粘質土 46. 明灰褐色弱粘質土 47. 暗茶褐色粘質土 | <p>耕作土、上面がI面
少量の泥岩粒子土器片含む</p> <p>泥岩粒子、遺物含む、上面にII面上層</p> <p>泥岩小塊・遺物含む、上面にII面下層</p> <p>泥岩小塊・遺物含む</p> <p>泥岩小塊・遺物含む</p> <p>上面にIII面上層</p> <p>泥岩小塊・遺物含む</p> <p>半拳大泥岩多く含む</p> <p>泥岩は11より細かい</p> <p>泥岩小塊・遺物片含む</p> <p>破碎泥岩版築層、上面がIII面</p> <p>破碎泥岩版築層</p> <p>方形土坑1充填土</p> <p>しまりやや弱い、たまご大泥岩つまる、炭化物含む</p> <p>半拳大泥岩・遺物片・炭化物含む</p> <p>1～2cmの泥岩粒多く含む、炭化物少量含む</p> <p>拳大～人頭大泥岩つまる、炭化物・土師器皿片含む</p> <p>16に似る</p> <p>しまりやや弱い、人頭大泥岩含む</p> <p>23よりしまり良い、泥岩粒・炭化物・土師器皿片含む</p> <p>3cm大の泥岩を多く含む</p> <p>半人頭大泥岩つまる</p> <p>1～2cmの泥岩粒含む、炭化物少量含む、14'に似る</p> <p>27に似る、炭化物やや多く含む</p> <p>1cm～こぶし大の泥岩、炭化物多く含む</p> <p>29に似る、29より大きめの泥岩つまる</p> <p>2～3cm大の泥含む</p> <p>32と14の間に灰褐色粘質土が薄く挟まる 上面にIII面上層</p> <p>間に灰褐色粘質土がつまる、炭化物・土師器皿小片少々含む</p> <p>泥岩細片多量に含む</p> <p>0.5～1cmの泥岩粒全体に多く含む、炭化物・土師器皿小片含む</p> <p>1cm位の泥岩粒多量に含む、炭化物・土師器皿小片やや多く含む、しまり良い</p> <p>しまり強、破碎泥岩粒～3cm大泥岩多く含む、炭化物・土師器皿小片含む</p> <p>間に炭化物・泥岩粒まじりの暗灰褐色粘質土がつまる</p> <p>32と同じか</p> <p>破碎泥岩粒多量に含む、たまご大泥岩・炭化物・土師器皿小片含む</p> <p>しまりやや弱い、泥岩粒～2～3cm大の泥岩多く含む、炭化物・土師器皿小片含む</p> <p>2～3cmの泥岩粒多く含む、炭化物・土師器皿片含む</p> <p>42に似る、土師器皿片やや多い</p> <p>すきま多い</p> <p>1～3cm泥岩非常に多く含む、炭化物・土師器皿片少量含む</p> <p>45よりさらに泥岩粒多い、炭化物・土師器皿片少量含む</p> <p>土坑7覆土に似るが、泥岩粒より多い</p> |
|---|--|

図6 調査区土層図(2)

現れる。これを「II」面下層とした。面の標高は27.40m～27.80mとなっている。北壁際では、II面上層と面を共有している。ここでも北東から南西方向へ傾斜している。

検出された遺構は、溝2条と土坑5基、小穴12穴。

Ⅲ面上層面 (図13)

Ⅱ面下層構成土である灰褐色粘質土を排除すると約5～10cmほどで泥岩地行の広がる面が現れる。これを「Ⅲ」面上層とした。標高は27.10m～27.70mでやはり北東から南西に傾斜している。

検出された遺構は、溝1条、掘立柱建物2棟を含む小穴39穴。

Ⅲ面 (図18)

厚さ約5～10cmほどのⅢ面上層の泥岩地行の直下に暗茶褐色粘質土や炭化層を挟んで泥岩地行が広がる。これを「Ⅲ」面とした。標高は27.25m～27.50m。調査区内の一部でⅢ面上層と面を共有する。また北壁際では下層の15層と思われる大型泥岩地行層が露頭している。検出遺構は小穴10穴と少ない。

(馬淵)

第2節 各説

1. I面

溝状遺構

位置：X - 76 137.83 ～ - 76 139.72 Y - 27 614.58 ～ - 27 616.92 規模：東西293cm × 南北47cm以上 × 深さ7cm (底面高27.47m) 平面形：直線 断面形：浅い皿形 主軸方位：N-51° -W 重複関係：なし 出土遺物：図化可能なものなし 特記事項：東側でなだらかに始まり、西側は面自体が東側に比べて30cmほど落ちているので、その傾斜に吸収されて消滅する。長さは上述の通りだが、本址東側の延長線上に浅いすり鉢状の小穴が2個つながったものがあり、これを同一遺構とすれば355cmになる。南側の小穴列が礎石抜き穴であれば、建物周囲の雨落ち溝のような機能が想定できよう。

小穴列

位置：X - 76 137.82 ～ - 76 139.44 Y - 27 615.79 ～ - 27 617.84 規模：東西250cm × 南北不明 × 深さ平均2.5cm (底面高27.47m) 平面形：直線 断面形：浅い皿形 主軸方位：N-51° -W 重複関係：なし 出土遺物：図化可能なものなし 特記事項：上記溝にほぼ平行して、南側に3個の浅い穴が直線状に並ぶ。礎石の抜き痕の可能性があろう。

2. II面上層面

土坑2 (図8)

位置：X - 76 137.98 ～ (- 76 139.15) Y - 27 616.15 ～ (- 27 617.66) 規模：東西164cm × 南北58cm以上 (南側は調査区外) × 深さ60cm (底面高26.81m) 平面形：楕円形 断面形：深皿形 主軸方位：N-55° -W 重複関係：炭下層を切る 出土遺物：図化可能なものなし 特記事項：大きめの穴だが、性格不明。東側の土坑5も似た形をしており、充填土も共通する。同類か。

土坑5 (図8)

位置：X - 76 139.12 ～ (- 76 139.87) Y - 27 615.11 ～ (- 27 616.15) 規模：東西112cm × 南北33cm以上 (南側は調査区外) × 深さ54cm (底面高26.95m) 平面形：不定楕円形 断面形：深皿形 主軸方位：N-55° -W 重複関係：なし 出土遺物：図化可能なものなし 特記事項：土坑2と形態・充填土共に共通しており、併存していた可能性がある。

土坑7 (図8)

位置：X (- 76 133.90) ～ - 76 135.44 Y (- 27 611.49) ～ - 27 612.97 規模：東西95cm × 南北151cm以上 (北側は調査区外) × 深さ13cm (底面高27.44m) 平面形：隅丸長方形もしくは長楕円形 断面形：皿形 主軸方位：N-35° -E 重複関係：泥岩地形(じぎょう)を切る 出土遺物：瀬戸縁釉小皿(1)・

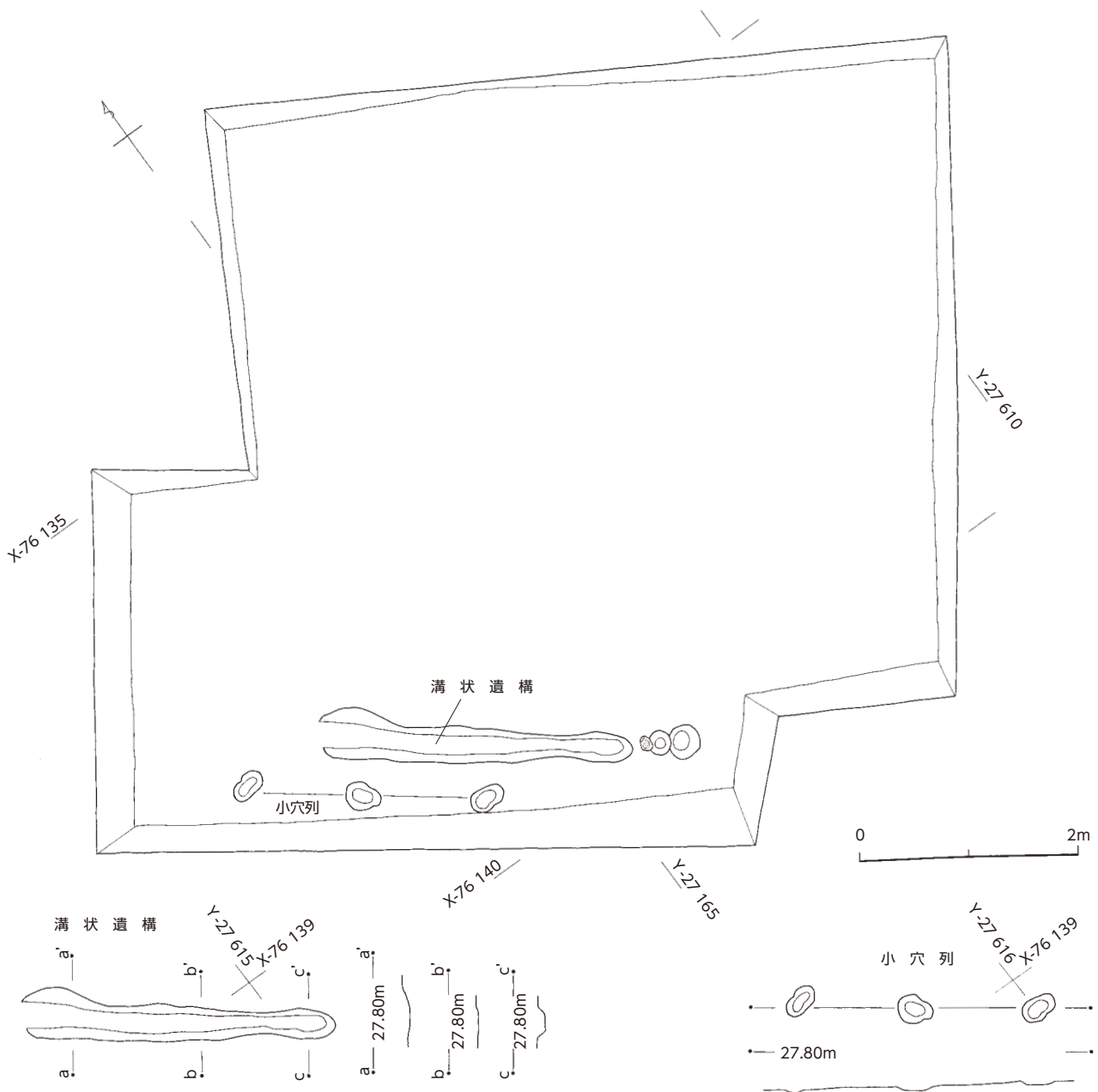


図7 I面遺構全図・溝状遺構・小穴列

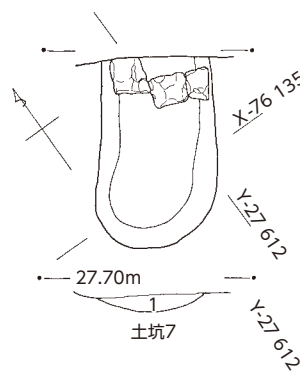
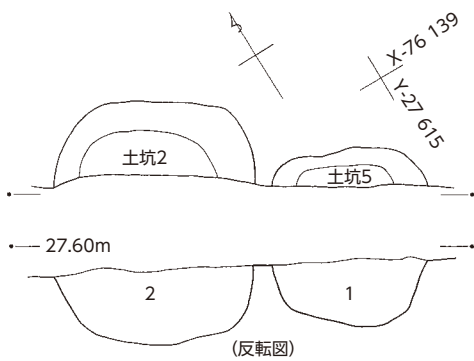
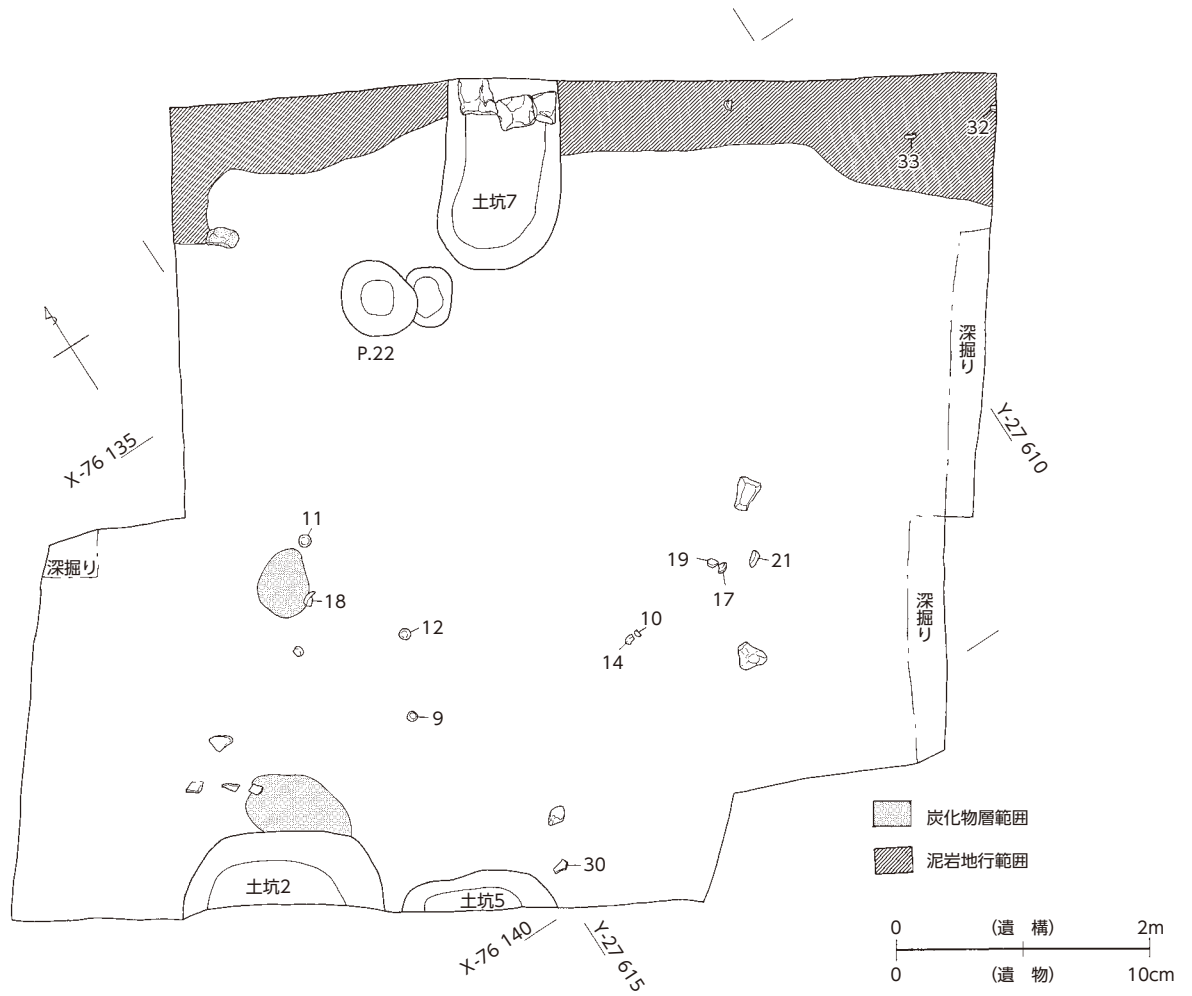
丸瓦(2)・磨耗陶片(3・4) **特記事項**：浅い皿形の断面で、充填土中に1辺30～40cmの泥岩を含む。性格不明。年代の主体は層全体では次述の通り鎌倉時代後期～末期であろうが、古瀬戸後期ⅠまたはⅡ期の1を指標にすれば、14世紀末～15世紀前半の、中世期極楽寺の終末近くまで含まれる。3・4は磨耗陶片とはしたが、擦過ではなく細かい敲打によって縁が減ったもの。

P.22出土遺物(図8)

瀬戸折縁深皿(5)・常滑片口鉢Ⅰ類(6)・敲打痕ある石(7) **特記事項**：遺物年代は13世紀中葉～後半の6から、14世紀第4四半期～15世紀前半の5におよぶ。鎌倉時代後期以降面の更新がなかった可能性も視野に入れておくべきだろう。7は手に持って使用したものか。

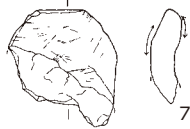
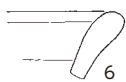
Ⅱ面上層面出土遺物(図9)

土師器皿R種小型(8～14)・同大型(15～21)・瓦器火鉢(22)・常滑片口鉢Ⅰ類(23)・瀬戸輪花入子(24)・磨耗陶片(25～30)・擦石(31)・滑石印判(32)・鳴滝仕上砥(33) **特記事項**：年代は土師器皿の全体

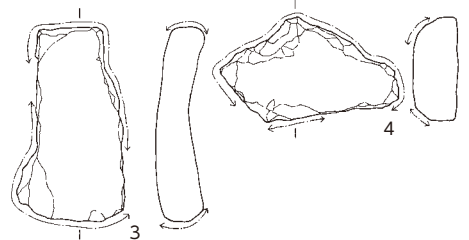


- 1. 暗茶褐色粘質土
小泥岩粒多く含む、炭化物・土師器皿片やや多く含む

- 1. 暗灰褐色粘質土 1~3cm大の泥岩・炭化物・土師器皿片含む
土坑5充填土
- 2. 暗灰褐色粘質土 1に類似、1よりやや混入物少ない
土坑2充填土



5~7 P22出土



1~4 土坑7出土

図8 II面上層面遺構全図・土坑7・P22出土遺物

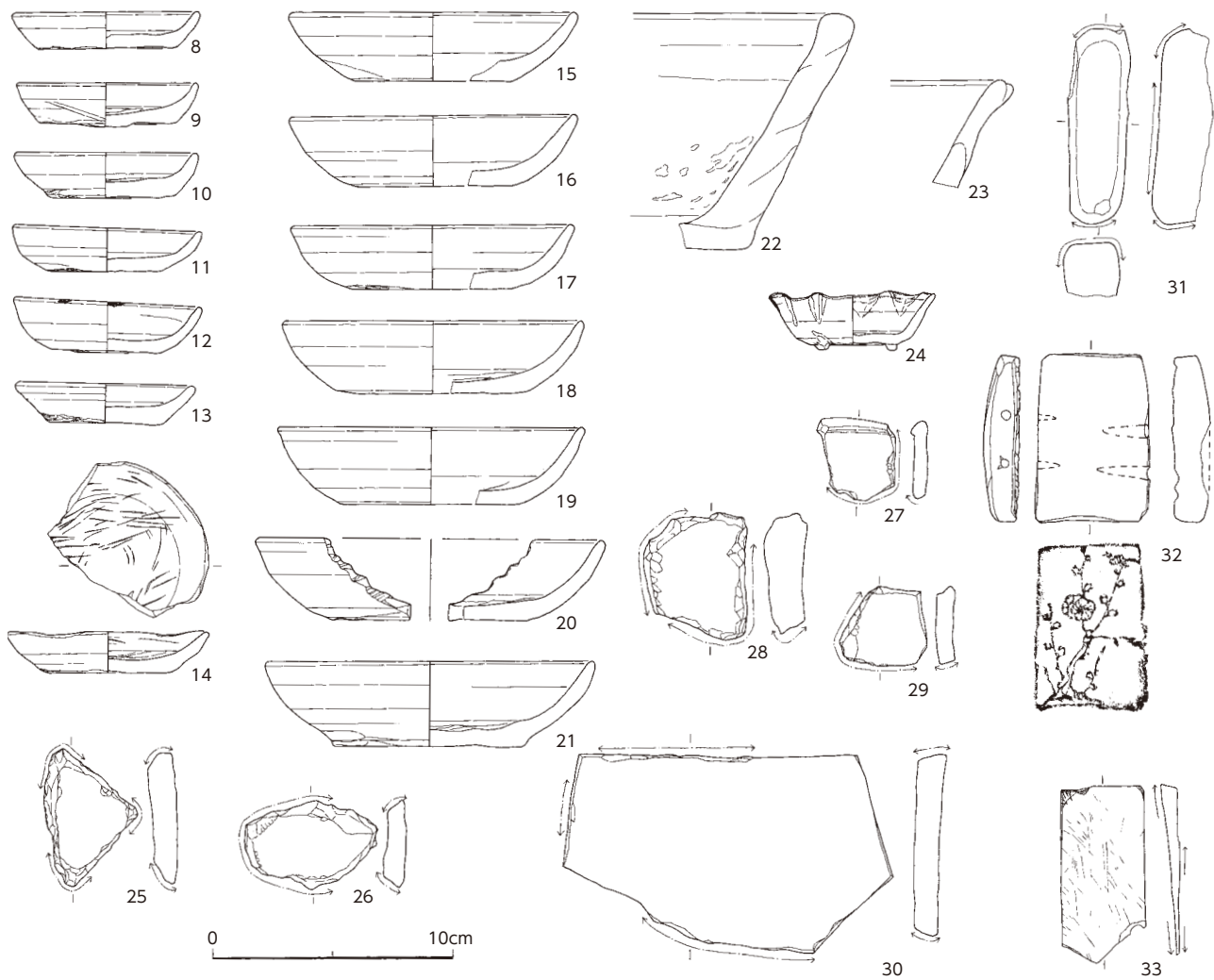


図9 II面上層面出土遺物

的傾向や瀬戸24・常滑片口鉢I類23などから大きくみて13世紀後半としたい。土師器皿R種大型20の破断面には、何か細かいものを研いだ痕跡のようなギザギザがある。ここで磨耗陶片とした25～30は、図8の3・4と同じく、擦過よりも細かい打突によって縁の角が取れたもの。31は粗粒凝灰岩円礫を使ったもの。持ち砥石か。

3. II面下層面

溝1 (図11)

位置：X (-76 135.16) ~ (-76 137.90) Y (-27 616.72) ~ (-27 618.82) 規模：幅(東西) 80cm × 深さ 30cm (底面高 27.03 m ~ 26.79 m) 断面形：逆台形 流下方向：北→南 主軸方位：(N-35° -E) 重複関係：溝2を切る 出土遺物：土師器皿R種小型(1・2) 特記事項：調査区西壁際に前面の道路に平行して通じる。側溝の可能性があろう。出土遺物の年代は13世紀中葉～同第3四半期だが、遺構年代については前後の関係を考慮して、大きく13世紀後半～14世紀前半、すなわちほぼ鎌倉時代後期とっておきたい。

溝2 (図11)

位置：X ((-76 133.85) ~ (-76 137.84) Y (-27 613.35) ~ (-27 618.80) 規模：幅(東西) 200cm以上 × 深さ 50cm (底面高 27.29 m ~ 26.77 m) 断面形：皿形 流下方向：北→南 主軸方位：(N-

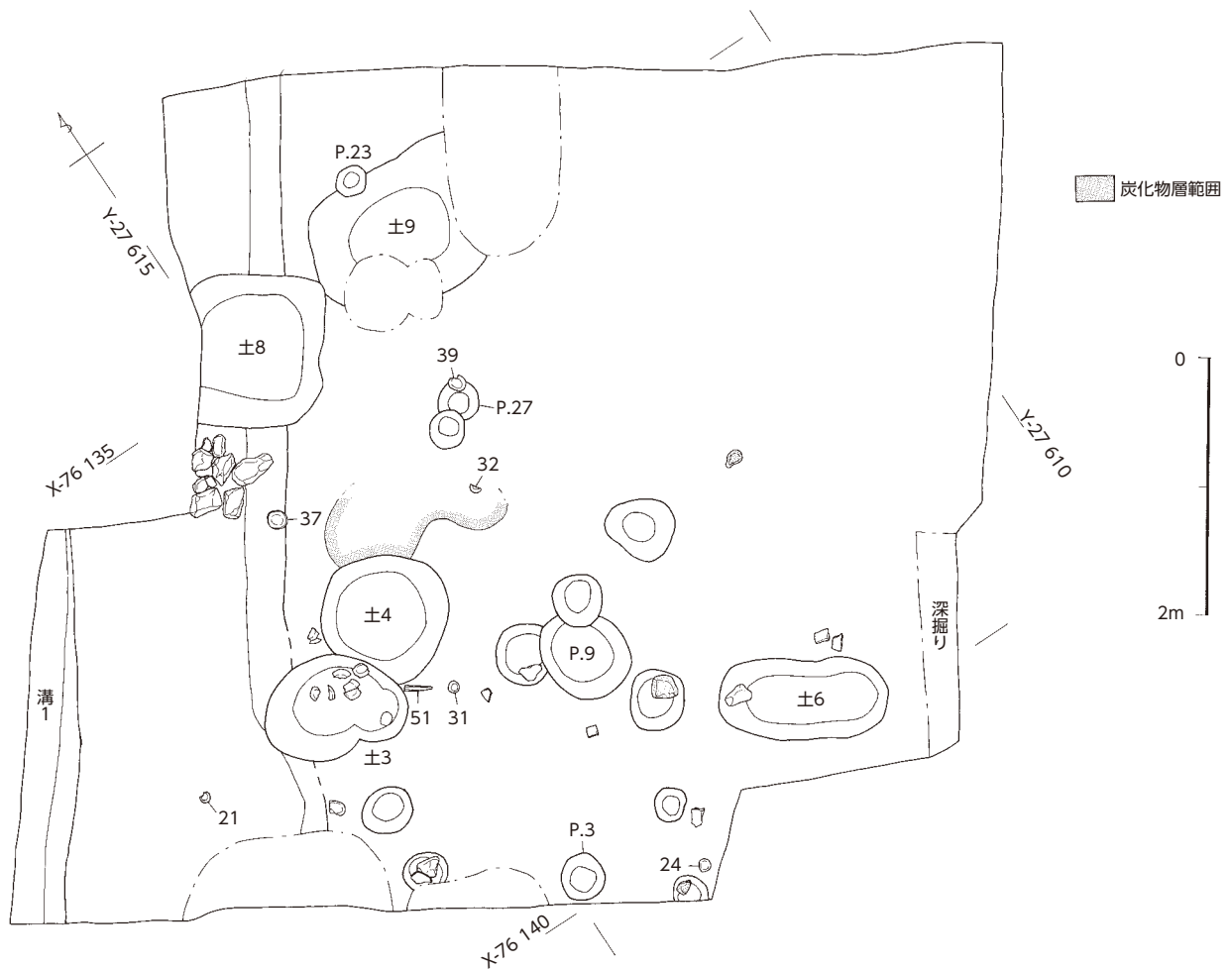


図10 II面下層面遺構全図

35° -E) 重複関係：溝1、土坑3・8に切られる 出土遺物：熙寧元寶(3) 特記事項：年代は、遺物を欠くため決めづらいが、溝1および下層の溝3との相対関係から、これも13世紀後半～14世紀前半代を充てたい。

溝1・2深掘り出土遺物(図11)

土師器皿R種小型(4) 特記事項：高台は厚く、器壁は楔形に近い。溝2の下にある一段階古い遺構からの遺物。13世紀第2四半期～同中葉前後か。

土坑3(図11)

位置：X-76 137.13～-76 138.03 Y-27 615.25～-27 616.33 規模：東西105cm×南北79cm×深さ20cm(底面高27.15m) 平面形：楕円形 断面形：深皿形 主軸方位：N-79°-W 重複関係：溝2・土坑4を切る 出土遺物：土師器皿R種中型(5)・同大型(6～8) 特記事項：溝2の肩部にかかる円形土坑。土師器が数点投げ込まれている。遺物年代は13世紀後半～14世紀初頭。

土坑4(図11)

位置：X-76 136.18～-76 137.22 Y-27 614.47～-27 615.50 規模：東西103cm×南北104cm×深さ25cm(底面高27.10m) 平面形：円形 断面形：深皿形 主軸方位：N-85°-W 重複関係：土坑3に切られる 出土遺物：土師器皿R種小型(9・10)・青白磁梅瓶(11) 特記事項：土師器皿2点・青白磁梅瓶(11)とも13世紀中葉～後半を示す。直径約1mの浅い円形土坑だが、性格はわからない。土坑3と同類か。

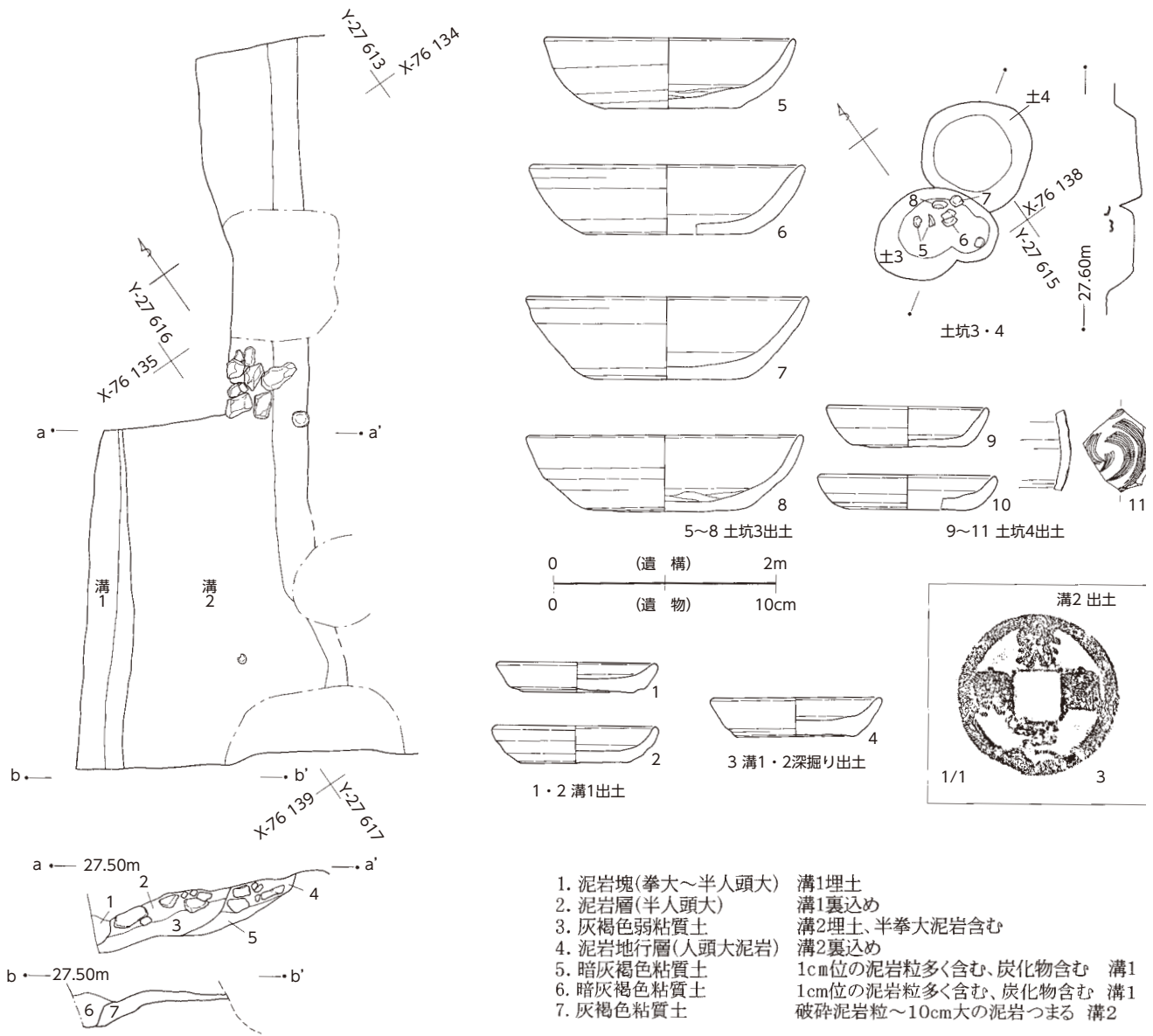


図11 溝1・2・土坑3・4、同出土遺物

土坑6 (図12)

位置：X - 76 139.03 ~ - 76 140.08 Y - 27 612.00 ~ - 27 613.20 規模：東西133cm × 南北66cm × 深さ20cm (底面高27.32m) 平面形：楕円形 断面形：浅皿形または浅い逆台形 主軸方位：N-55°-W 重複関係：なし 出土遺物：土師器皿R種小型 (12) 特記事項：この面の他の土坑に比べ細長い。単独で存在する。遺物年代は13世紀後半~14世紀前半。

土坑8 (図12)

位置：X - 76 134.20 ~ - 76 135.56 Y - 27 613.96 ~ (- 27 615.43) 規模：東西106cm以上 × 南北120cm × 深さ17cm (底面高27.40m) 平面形：隅丸方形 断面形：浅皿形 主軸方位：N-35°-E 重複関係：溝2を切る 出土遺物：瀬戸灰釉卸目付き鉢 (13) 特記事項：土坑9と接する。両者の位置関係は南側の土坑3・4の関係にも似る。側溝に架かる橋脚の可能性を視野に入れておきたい。瀬戸灰釉卸目付き鉢13の年代は藤澤良祐の編年に従えば14世紀後半~15世紀前半(「卸目付大皿」藤澤2008)だが、面全体の様相は鎌倉時代後期~末期を示している。

土坑9 (図12)

位置：X - 76 134.22 ~ (- 76 135.35) Y - 27 613.50 ~ (- 27 614.01) 規模：東西120cm以上

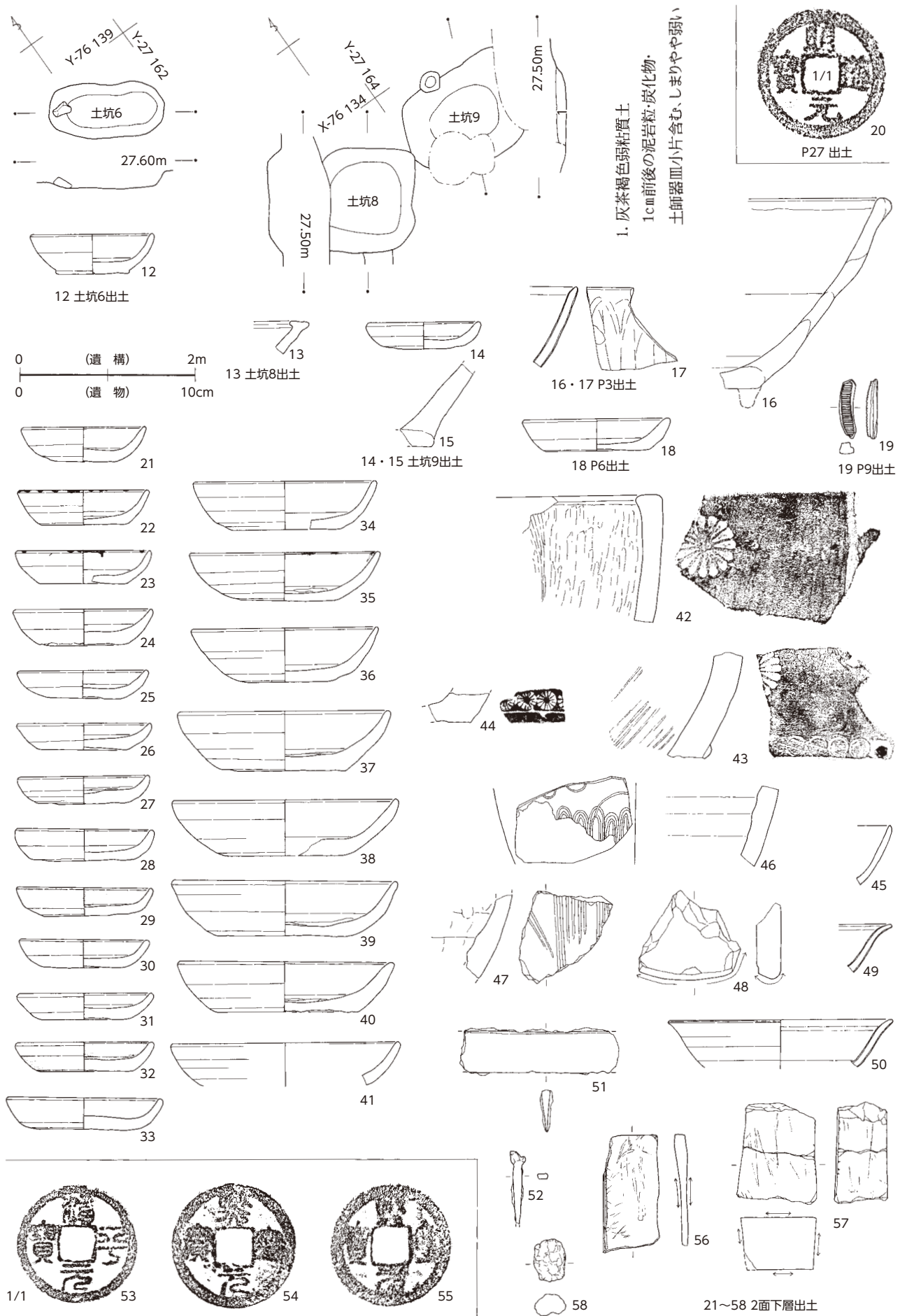


図12 土坑6・8・9、同出土遺物、小穴・Ⅱ面下層面出土遺物

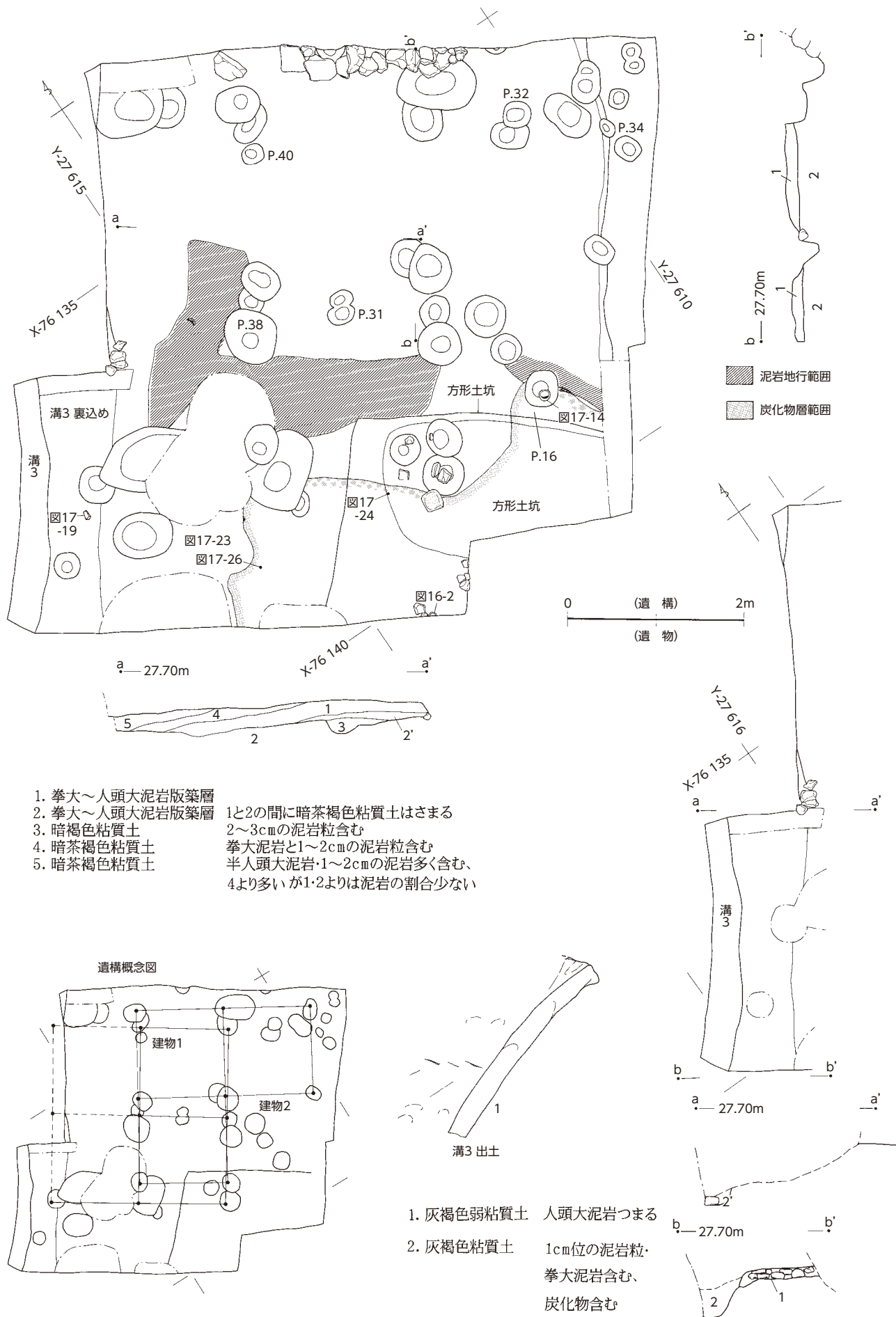


図13 Ⅲ面上層面遺構全図、溝3、同出土遺物

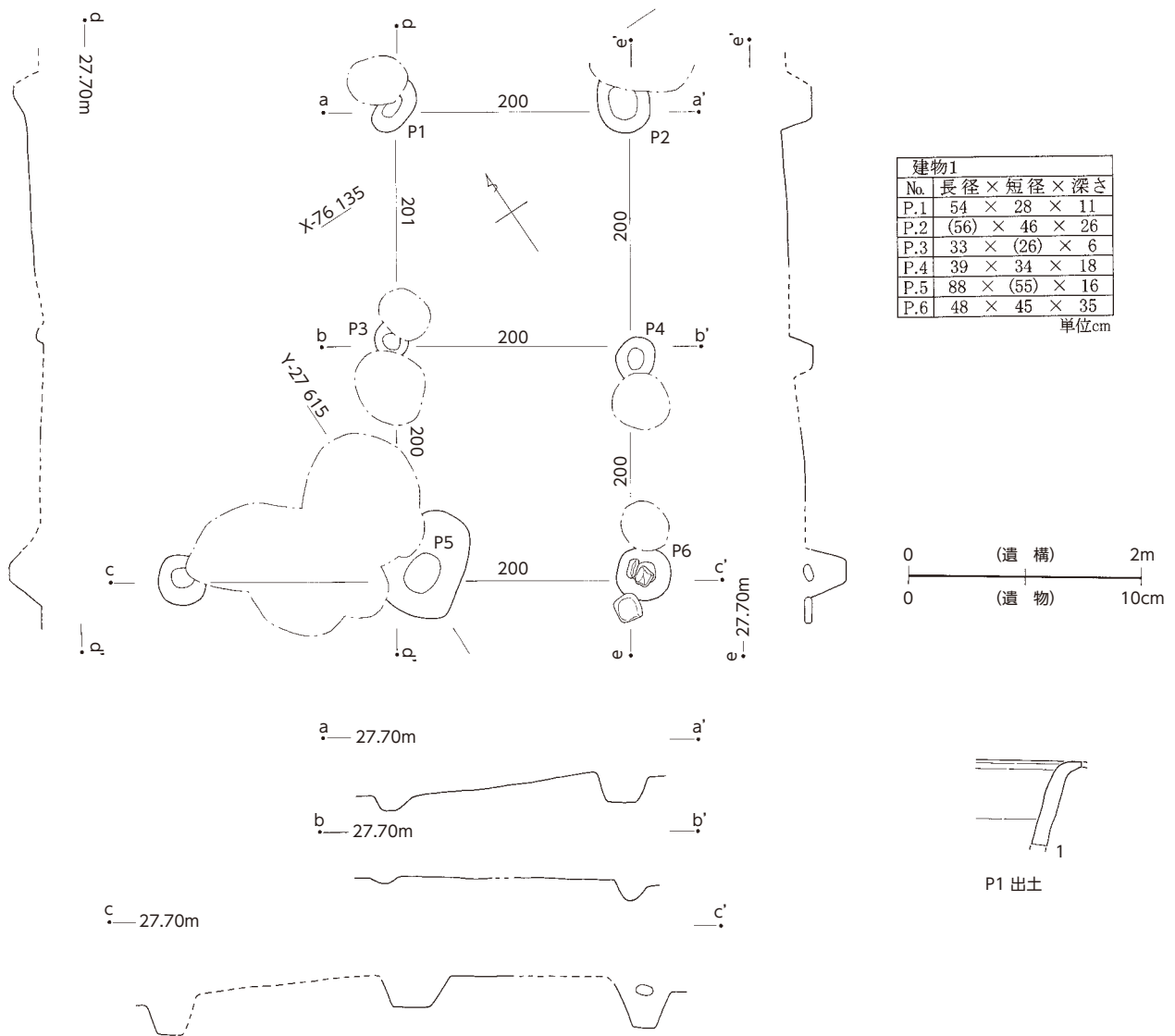


図14 建物1、同出土遺物

×南北112cm×深さ11cm(底面高27.28m) 平面形：不明 断面形：浅皿形 主軸方位：N-87.5°-E
 重複関係：P.23と切り合うが、新旧不明 出土遺物：土師器皿R種小型(14)・常滑片口鉢Ⅱ類(15) 特記事項：14の年代は13世紀後半だろう。

P. 3 出土遺物 (図12)

常滑片口鉢Ⅰ類(16)・竜泉窯青磁鎚連弁文碗(17) 特記事項：17は13世紀後半としていいが、16は第3四半期までに属する。遺構の年代は13世紀後半か。

P. 6 出土遺物 (図12)

土師器皿R種小型(18) 特記事項：年代は13世紀中葉～同第3四半期

P. 9 出土遺物 (図12)

骨製品(19) 特記事項：年代・用途とも不明

P.27 出土遺物 (図12)

明道元寶(20)

Ⅱ面下層面出土遺物 (図12)

土師器皿R種小型(21～33)・同中型(34～36)・同大型(37～41)・瓦器火鉢(42～44)・瀬戸入子(45)・

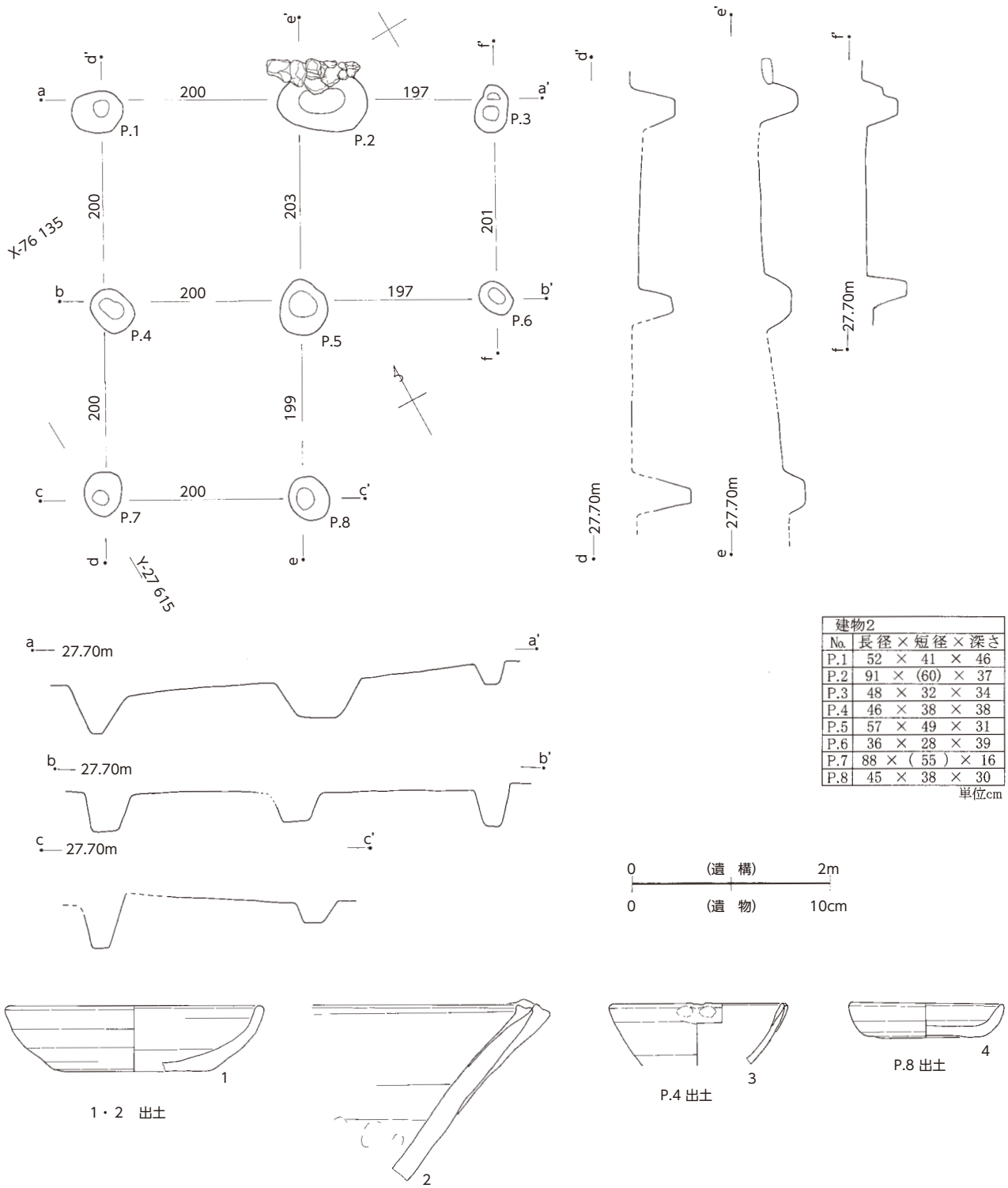


図15 建物2、同出土遺物

瀬戸瓶子 (46・47)・摩耗陶片 (48)・白磁口はげ皿 (49・50)・刀子 (51)・鉄釘 (52)・治平元寶 (53)・熙寧元寶 (54・55)・砥石仕上砥 (56)・砥石中砥 (57)・石英 (58)・ガラス (図版14下段右隅) 特記事項: 46・47の瀬戸瓶子は14世紀初頭に下る可能性があるが、全体的には13世紀後半を示している。

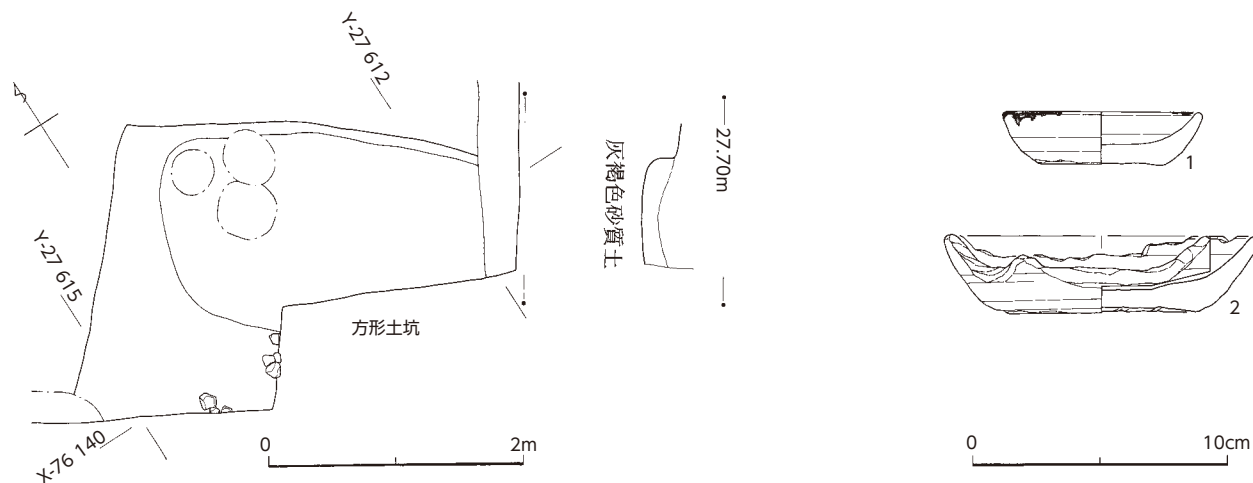


図16 方形土坑、同出土遺物

4. Ⅲ面上層面

溝3 (図13)

位置：X (−76 135.40 ~ −76 137.88) Y (−27 616.65 ~ −27 618.46) 規模：幅(東西) 40cm以上 × 深さ 53cm (底面高 26.60 ~ 27.72 m) 断面形：深皿ないしU字形 流下方向：南→北 南北軸方位：主軸方位：(N-35° -E) 重複関係：上部を溝1・2に切られる 出土遺物：常滑片口鉢Ⅱ類(1) 特記事項：これも道路側溝であろう。流下方向が谷の傾斜とは逆に北に向かっているが、これは検出距離の短さに起因しているのであろう。年代は13世紀後半か。

建物1 (図14)

位置：X (−76 134.38) ~ (−76 139.26) Y (−27 610.48) ~ (−27 615.37) 規模：東西1間(柱間距離2.00m) × 南北2間(柱間距離2.00m) 南北軸方位：N-33° -E 重複関係：建物2に切られる 出土遺物：P.1 瀬戸柄付片口鍋(1) 特記事項：建物2と重なる位置にある掘立柱建物。出土遺物の1はいわゆる「行(雪)平鍋」で、藤澤良祐の編年に従えば「古瀬戸中期Ⅰ」もしくは「同Ⅱ」であり、13世紀第4四半期以降に出現するとされる(藤澤2008)。

建物2 (図15)

位置：X (−76 133.99 ~ −76 138.91) Y (−27 609.25) ~ (−27 615.37) 規模：東西2間(柱間距離2.00m) × 南北2間(柱間距離2.00m) 南北軸方位：N-30.5° -E 重複関係：建物1を切る 出土遺物：P.1 土師器皿R種大型(1)・P.1 常滑片口鉢Ⅱ類(2)・P.4 瀬戸入子(3)・P.8 土師器皿R種小型(4) 特記事項：北壁際のP.2北側には泥岩の敷かれているのがうかがえるので、ここが限界の可能性はある。一方東と南は調査区外に延びるかもしれない。遺物の年代はおおむね13世紀第3四半期前後に収まる

方形土坑 (図16)

位置：X (−76 138.18 ~ −76 140.47) Y (−27 611.41 ~ −27 615.35) 規模：東西(305cm) × (南北236cm)、深さ4cm 平面形：方形 断面形：浅皿または浅い箱形 南北軸方位：N-36° -E 重複関係：南東部炭下層の下で検出、建物1・2に切られる 出土遺物：土師器皿R種小型(1)・同大型(2) 特記事項：最深4cmときわめて浅いが、落ちであるのは間違いない。調査区内の限りで方形に見えるものの、全容は不明。底面の降下角も一様ではない。遺構範囲に重なって炭化物の層があるので、何らかの覆屋の存在は予想されるが、周辺にある柱穴との位置関係からは屋内施設との確証も得られない。

P.16 出土遺物 (図17)

土師器皿R種小型(1・2) 特記事項：年代は13世紀第3四半期ごろか

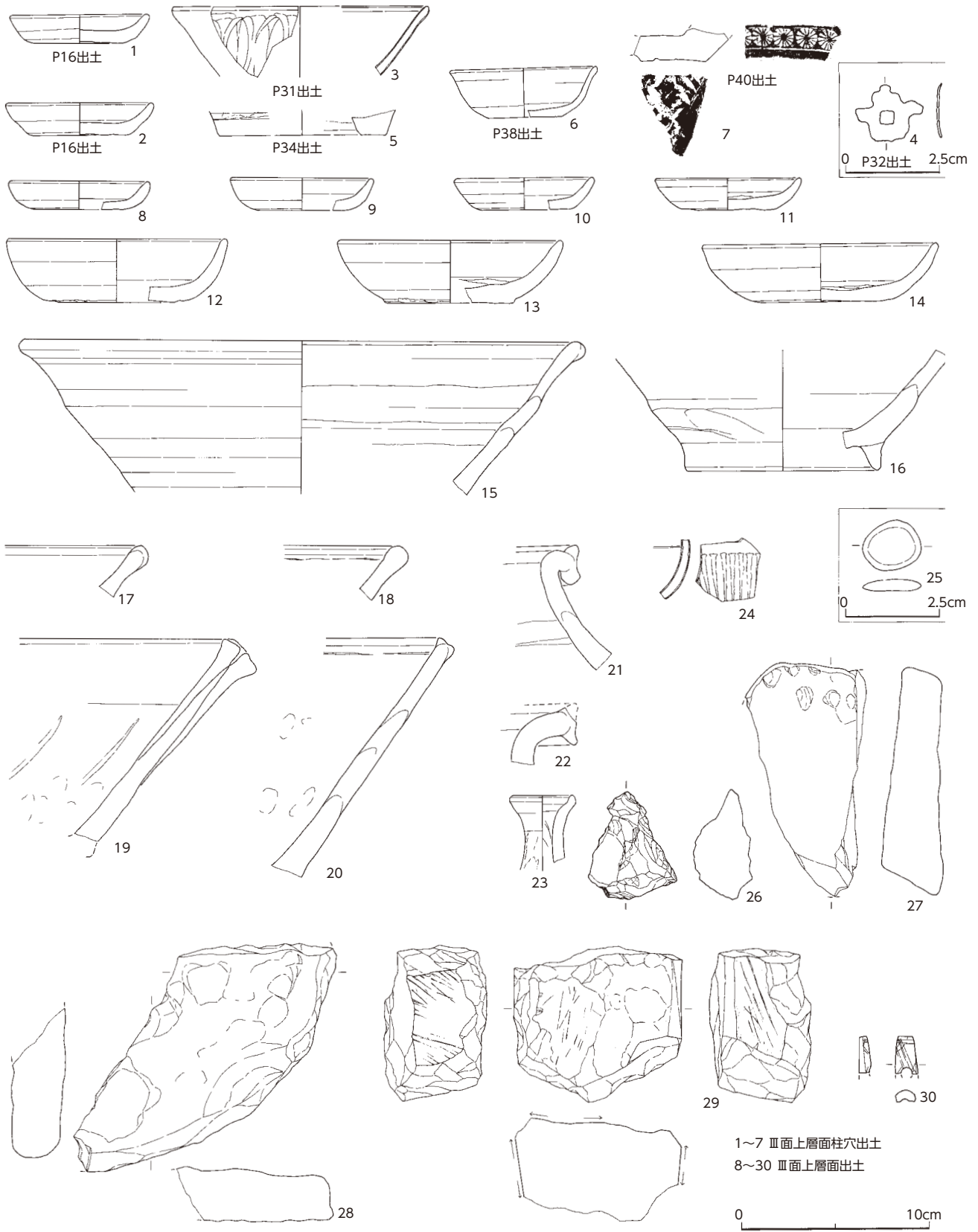


图17 III面上層面小穴、III面上層面出土遺物

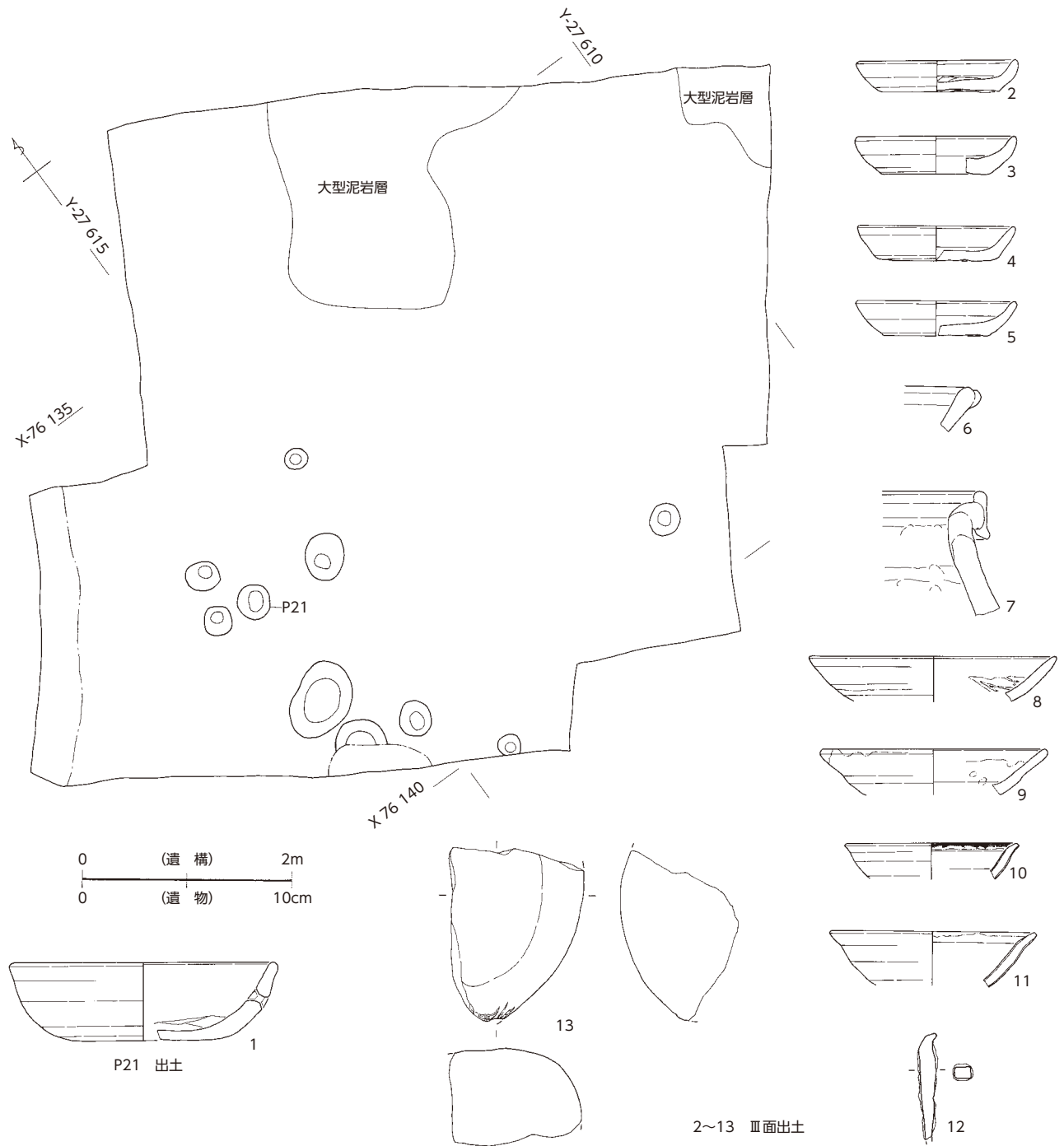


図18 Ⅲ面遺構全図、小穴・Ⅲ面出土遺物

P.31 出土遺物 (図17)

竜泉窯青磁鎚連弁文碗 (3) 特記事項：年代は13世紀後半

P.32 出土遺物 (図17)

銅製品 (4) 特記事項：緑青の剥落した部分にわずかに銀鍍金らしき光沢がある。形からいって釘隠しのようなものではなく、例えば荘厳具しょうごんの部材などの可能性があろう。

P.34 出土遺物 (図17)

舶載陶器 (5) 特記事項：左回転ロクロ成形なので舶載品としたが、年代・産地とも不明。上層からの混入の可能性もある

P.38 出土遺物 (図 17)

瀬戸入子 (6) 特記事項：図 15－3 よりもひと回り小さい

P.40 出土遺物 (図 17)

瓦器火鉢 (7) 特記事項：13 世紀末以降か

Ⅲ面上層面出土遺物 (図 17)

土師器皿 R 種小型 (8～11)・同大型 (12～14)・常滑片口鉢 I 類 (15～18)・同 II 類 (19・20)・常滑甕 (21・22)・瀬戸仏花瓶 (23)・竜泉窯青磁広口小壺 (24)・基石 (25)・石英 (26)・敲打痕ある石 (27)・台石 (28)・砥石中砥 (29)・骨製品 (30) 特記事項：全体的な年代は 13 世紀後半

5. Ⅲ面

南半部に小穴 10 口が検出されたが、規模は様々で、配置上も建物らしき関連性は見られない。面に覗く「大型泥岩層」は谷堆積土の窪みを充填し、平坦面を造成するためのもの。

P.21 出土遺物 (図 18)

土師器皿 R 種大型 (1)

Ⅲ面出土遺物 (図 18)

土師器皿 R 種小型 (2～5)・常滑片口鉢 I 類 (6)・常滑甕 (7)・瀬戸緑釉小皿 (8・9)・白磁口はげ皿 (10・11)・鉄釘 (12)・敲打痕ある泥岩 (13) 特記事項：全体に 13 世紀後半を示している中で、8・9 は 14 世紀末～15 世紀前半の室町時代前期に属する。苦慮せざるを得ないが、上層との相対関係からこの層が室町時代に下るとは考えられないので、8・9 については何らかの理由で上層のものがここで採集されたと理解したい。

(馬淵)

表1 出土遺物観察表(1)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図5-1	調査区南壁	土師器皿 R種小型	口径(6.3)cm 底径(4.8)cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 外底面糸切り、内底面ナデ 胎土は砂粒・白色粒子・砂礫を含みきめがやや粗い 内外表面から胎芯まで灰黒色に炭化
	2 調査区南壁	土師器皿 R種大型	口径(11.65)cm 底径(8.0)cm 器高3.2cm 右回転ロクロ 外底面糸切り、内底にナデ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・砂礫を含み、ややきめ粗い 焼成良好
図8-1	土坑7	瀬戸緑釉小皿	口径(10.4)cm ロクロ成形 胎土は淡灰褐色、岩石質に焼き上がる 口縁部に濃緑色の灰釉や厚く漬け掛け、気泡含む 焼成良好
	2 土坑7	丸瓦	遺存長(6.8)cm 遺存幅(4.2)cm 最大厚(1.8)cm 胎土は灰色、白色粒・砂粒・礫を多く含む粗土 周囲に打ち欠いたような細かい欠損あり
	3 土坑7	磨耗陶片	縦7.6cm 横4.2cm 厚さ1.7cm 常滑裏胴部片 胎土は灰色で岩石質に焼けている 大小長石粒・砂粒含む 破断面のほぼ全体が細かい打突と擦る運動により磨耗 焼成良好
	4 土坑7	磨耗陶片	縦7.1cm 横4.1cm 厚さ1.7cm 常滑裏胴部片を打突の道具に転用 胎土は長石粒・砂粒含む、灰色で岩石質に焼き上がる 破断面のほぼ全体に打突による細かい欠損あり
5	P. 22	瀬戸折縁深皿	口縁部片 ロクロ成形 胎土は黄灰色 釉薬は灰緑色の灰釉 口縁部外側は釉薬が剥落
6	P. 22	常滑片口鉢I類	口縁部片 胎土は灰色、砂粒含むややきめ粗く、気孔散見する 表面に砂礫・長石等が噴出している 内側に降灰 焼成良好
7	P. 22	敲打痕ある石	遺存長(4.7)cm 幅4.3cm 厚1.3cm 淡灰色の産地不明頁岩 数か所に打痕あり 自然面に擦過傷多くとどめる
図9-8	Ⅱ面上層面	土師器皿 R種小型	口径(7.65)cm 底径(5.8)cm 器高1.55cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は淡黄褐色、微砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含む 焼成良好
	9 Ⅱ面上層面	土師器皿 R種小型	口径7.4cm 底径5.7cm 器高1.85cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含む 焼成良好
	10 Ⅱ面上層面	土師器皿 R種小型	口径7.5cm 底径4.9cm 器高1.95cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母・泥岩粒を含む 焼成良好
	11 Ⅱ面上層面	土師器皿 R種小型	口径7.7cm 底径4.9cm 器高1.85cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は淡褐色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母・泥岩粒を含む 焼成良好
	12 Ⅱ面上層面	土師器皿 R種小型	口径7.7cm 底径4.6cm 器高2.1cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含む 焼成良好 口縁部に少量の油煤付着
	13 Ⅱ面上層面	土師器皿 R種小型	口径(7.3)cm 底径(4.8)cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は淡褐色、微砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含みやや粉質 焼成良好
	14 Ⅱ面上層面	土師器皿 R種小型	口径(7.3)cm 底径(4.8)cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は淡褐色、微砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含む 焼成良好 口縁部は平らに削られ内底面に線状の傷多数あり
	15 Ⅱ面上層面	土師器皿 R種大型	口径(11.8)cm 底径(6.8)cm 器高2.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母・泥岩粒を含む 焼成良好
	16 Ⅱ面上層面	土師器皿 R種大型	口径(11.95)cm 底径(7.4)cm 器高2.95cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含む 焼成良好
	17 Ⅱ面上層面	土師器皿 R種大型	口径(11.7)cm 底径(8.7)cm 器高2.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・白色粒子・雲母・気孔を含む 焼成良好
	18 Ⅱ面上層面	土師器皿 R種大型	口径12.4cm 底径(8.1)cm 器高3.05cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含む 焼成良好
	19 Ⅱ面上層面	土師器皿 R種大型	口径(12.3)cm 底径(8.0)cm 器高3.25cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は淡赤褐色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含む 表面が薄く煤ける
	20 Ⅱ面上層面	土師器皿 R種大型	口径(14.4)cm 底径(8.0)cm 器高3.4cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は橙色、微砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含む 焼成良好
	21 Ⅱ面上層面	土師器皿 R種大型	口径(13.7)cm 底径(7.9)cm 器高3.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕、内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨針・少量の雲母を含む 焼成良好
	22 Ⅱ面上層面	瓦器火鉢	口縁から底部片 器高9.9cm 胎土は灰褐色、砂粒多く含む 器表灰色
	23 Ⅱ面上層面	常滑片口鉢I類	口縁部片 胎土は明灰色、長石粒を含む
	24 Ⅱ面上層面	瀬戸輪花入子	口径(6.85)cm 底径(3.6)cm 器高2.4cm ロクロ成形、外底面糸きり 胎土は黄白色外側からへらで押し込み八弁の輪花粘土貼り付けによる脚(3足) 口唇部内側に自然釉付着 内底部使用により磨滅
	25 Ⅱ面上層面	磨耗陶片	縦5.9cm 横3.9cm 厚さ1.1cm 常滑裏胴部片使用 胎土は灰色、長石粒・石英・砂粒含む 断面の3か所の角が使用により磨耗
	26 Ⅱ面上層面	磨耗陶片	縦5.1cm 横3.7cm 厚さ0.9cm 瓦器火鉢胴部片使用 胎土は淡灰褐色、器表灰黒色 断面のほぼ全体が使用により磨耗
	27 Ⅱ面上層面	磨耗陶片	縦3.3cm 横3.3cm 厚さ0.7cm 瀬戸卸皿口縁~胴部片使用 胎土は黄白色 断面の3辺が使用により磨耗
28 Ⅱ面上層面	磨耗陶片	縦5.1cm 横4.3cm 厚さ1.7cm 常滑裏胴部片使用 胎土は灰色、長石粒・石英・砂粒多く含む 断面のほぼ全体が使用により磨耗	
29 Ⅱ面上層面	磨耗陶片	縦3.4cm 横3.7cm 厚さ0.7cm 常滑裏胴部片使用 胎土は淡灰褐色 断面の3辺が使用により磨耗	
30 Ⅱ面上層面	磨耗陶片	縦14.0cm 横8.4cm 厚さ1.2cm 常滑裏胴部片使用 胎土は灰色、長石・石英・砂粒含む 断面の2辺の一部が使用により磨耗	
31 Ⅱ面上層面	擦石	縦8.2cm 横2.5cm 遺存厚(3.5)cm 黒っぽい灰青色の粗粒凝灰岩円礫 丸味を帯びた成形で表面は全体に滑らか、両端が特に摩耗が激しい 手に持って使用したか(持ち砥石?)	
32 Ⅱ面上層面	滑石印判	縦7.0cm 横4.7cm 厚さ1.5cm 大型滑石鍋体部上片の内面側を平らに削って判面を作りだす 石材は銀色を帯びた灰色、表面は白っぽい 左右側面に径0.4~0.6cmの穿孔が2箇所ずつ 梅に鶯紋様 裏・側面取りを施した丁寧な削り	
33 Ⅱ面上層面	砥石 仕上砥	遺存長(7.4)cm 幅3.5cm 厚0.7cm 淡灰緑色 砥面2面 鳴滝産	
図11-1	溝1	土師器皿 R種小型	口径(7.05)cm 底径(5.0)cm 器高1.4cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含む
	2 溝1	土師器皿 R種小型	口径(7.25)cm 底径(5.1)cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は淡褐色、多量の砂粒・赤色粒子・雲母・泥岩粒を含む、砂質土
	3 溝2	熙寧元寶	初鑄1068年 北宋 篆書
	4 溝1・2 深掘り内	土師器皿 R種小型	口径(7.5)cm 底径(5.65)cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は淡褐色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含み、やや砂質
	5 土坑3	土師器皿 R種中型	口径11.2cm 底径6.1cm 器高3.2cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は橙色、赤色粒子・海綿骨針・雲母・泥岩粒を含む 焼成良好
	6 土坑3	土師器皿 R種大型	口径(12.2)cm 底径(7.8)cm 器高3.15cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・白色粒子・赤色粒子・雲母・泥岩粒を含む
	7 土坑3	土師器皿 R種大型	口径(12.65)cm 底径7.8cm 器高3.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り、薄く板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・白色粒子・赤色粒子・雲母を含み、やや砂質に近い
	8 土坑3	土師器皿 R種大型	口径(12.3)cm 底径7.4cm 器高3.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・雲母を含む

表2 出土遺物観察表(2)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
9	土坑4	土師器皿 R種小型	口径7.1cm 底径5.2cm 器高1.85cm 右回転ロクロ 底面糸切り、薄く板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・雲母を含む 焼成良
10	土坑4	土師器皿 R種小型	口径(7.95)cm 底径(6.0)cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・海綿骨針・雲母を含む
11	土坑4	青白磁 梅瓶	胴部片 素地は灰白色、黒色微粒子含む 釉は水青色、半透明 外面に櫛描き渦状文
図12-12	土坑6	土師器皿 R種小型	口径(6.9)cm 底径4.0cm 器高2.3cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・白色粒子・雲母を含む 弱砂質土
13	土坑8	瀬戸灰釉 釦目付き鉢	口縁部片 ロクロ成形 胎土は灰色 灰釉
14	土坑9	土師器皿 R種小型	口径(6.3)cm 底径(4.6)cm 器高1.55cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針を含む
15	土坑9	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部片 胎土は赤橙色、石英・長石を含む 内面は使用により摩耗 焼成やや不良
16	P.3	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁～底部片 胎土は灰色、大小の長石粒・石英粒・砂粒を含む 内面中位より下は使用により磨耗 高台は剥離 口縁から底面までの高さは10.9cm Ⅲ面P20出土の破片が接合している
17	P.3	竜泉窯青磁 鏝連弁文碗	口縁部～胴部片 素地は淡灰色 釉は灰緑色、半透明、細かい気泡含む 内外面とも細かい擦過痕無数
18	P.6	土師器皿 R種小型	口径(8.2)cm 底径(6.1)cm 器高1.85cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母・泥岩粒を含む粗土 厚さ不均一で雑な作り
19	P.9	骨製品	長3.4cm 幅0.8cm 厚0.7cm 黄褐色の大型哺乳類の椎骨外縁を円弧状に切り取って作られた骨製品 裏面の円弧内側に沿って幅3mm、段差3mmほどの段差を作り出し、高位面に幅1mmに満たない溝を横断方向に1mm間隔で端から端まで隙間なく刻む。両端は三角に尖る 用途不明
20	P.27	明道元寶	初鑄1032年 北宋 真書
21	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径6.95cm 底径3.7cm 器高2.0cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は赤橙色、砂粒・赤色粒子・雲母を含む 焼成良
22	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径7.3cm 底径4.8cm 器高2.0cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は赤橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含む 口唇部に油煤附着 内・外面とも火を受けてざらつく
23	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径(7.5)cm 底径(5.0)cm 器高1.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含む弱砂質土 焼成良 口唇部に油煤少量附着
24	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径7.8cm 底径5.2cm 器高2.1cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・海綿骨針・雲母・泥岩粒を含み、やや粗土 焼成良
25	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径7.3cm 底径4.4cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母を含む 焼成良
26	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径7.55cm 底径5.2cm 器高1.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り、薄く板状圧痕あり 内底部ナデ 胎土は赤橙色、砂粒・海綿骨針・礫・泥岩粒を含む粗土 焼成良
27	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径7.3cm 底径5.5cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は黄褐色、大き目の赤色粒・海綿骨針・砂粒・雲母・泥岩粒を含む
28	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径7.7cm 底径5.9cm 器高1.85cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は淡橙色、赤色粒・海綿骨針・砂粒・雲母を含む 弱砂質土
29	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径7.65cm 底径5.1cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り、薄く板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・雲母・泥岩粒を含む 弱砂質土 内・外面とも炭化
30	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径7.2cm 底径4.6cm 器高1.65cm 右回転ロクロ 底面糸切り、薄く板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・雲母・赤色粒子を含む 弱砂質土 内・外面とも炭化 焼成良
31	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径7.6cm 底径5.6cm 器高1.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り、薄く板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・雲母・赤色粒子・海綿骨針を含む 焼成良
32	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径(7.7)cm 底径(5.6)cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は黄灰色、砂粒・雲母・礫を含む やや粗土 内外面とも黒く炭化
33	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種小型	口径(8.6)cm 底径6.4cm 器高1.85cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・雲母・泥岩粒を含む 弱砂質土
34	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種中型	口径(10.25)cm 底径(6.4)cm 器高2.75cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・雲母・海綿骨針を含む
35	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種中型	口径10.8cm 底径5.7cm 器高2.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は赤橙色、砂粒・赤色粒子・雲母・海綿骨針・泥岩粒を含む 焼成良 口唇部に少量の油煤附着
36	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種中型	口径10.6cm 底径5.4cm 器高3.1cm 右回転ロクロ 底面糸切り、薄く板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・雲母・海綿骨針・泥岩粒を含む粉質土 焼成良
37	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種大型	口径11.9cm 底径7.3cm 器高3.45cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・雲母・海綿骨針・泥岩粒を含む 焼成良
38	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種大型	口径(12.7)cm 底径(6.7)cm 器高3.2cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・雲母・海綿骨針・泥岩粒を含む弱砂質の粗土 焼成良
39	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種大型	口径12.8cm 底径7.6cm 器高3.2cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・雲母・海綿骨針・泥岩粒を含む弱砂質の粗土 焼成良
40	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種大型	口径12.1cm 底径8.2cm 器高2.9cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・雲母・海綿骨針・泥岩粒を含む 焼成良
41	Ⅱ面下層面	土師器皿 R種大型	口径(13.05)cm 右回転ロクロ 胎土は橙色、赤色粒子・砂粒・雲母・海綿骨針・泥岩粒を含む
42	Ⅱ面下層面	瓦器 火鉢	口縁～胴部片 輪花型 輪積み成形 胎土は淡灰色、多量の砂粒・白色粒・礫を含む粗い土 器表は暗灰色を呈す 内外面とも縦方向の磨き 外側に菊花文スタンプ
43	Ⅱ面下層面	瓦器 火鉢	胴部片 輪積み成形 胎土は灰褐色、砂粒・白色粒・赤色粒を含む 内面はヘラまたは木口工具による斜め方向の掻き撫で 外側は黒色処理・研磨が施され、菊花文スタンプとその下に貼り付け連珠文が巡る
44	Ⅱ面下層面	瓦器 火鉢	底部片 胎土は淡灰褐色、砂粒・白色粒・赤色粒を含む 外側は表面研磨、胴部下に沈線と小型の菊花押印文を巡らす 外底面に粗い刻み目、脚の接着部分か 図17-11と同一個体か
45	Ⅱ面下層面	瀬戸 入子	口縁部片 ロクロ成形 胎土は明灰色、肌理細かい
46	Ⅱ面下層面	瀬戸 瓶子	梅瓶型 肩部片 胎土は明灰色 釉は灰緑色～黒色を呈する黒褐色の鉄釉、もしくは濃い灰釉で、松灰を含むため乳灰色～乳青緑色に白濁する。厚く掛るが被熱により剥落している部分あり 文様は当片上部の竹管断面の押圧による丸文、およびその下の半裁竹管による二重線の向上き蓮弁文でおもに構成される。両者の間には線刻の唐草の一部とみられる曲線がある。
47	Ⅱ面下層面	瀬戸 瓶子	梅瓶型 胴部片 胎土は淡灰褐色 外面施釉、内面は厚く垂れる 釉薬は黒褐色～緑褐色の鉄釉または濃い灰釉で、釉溜まりで失透 外面に6条の単位の縦方向の線刻連弁文

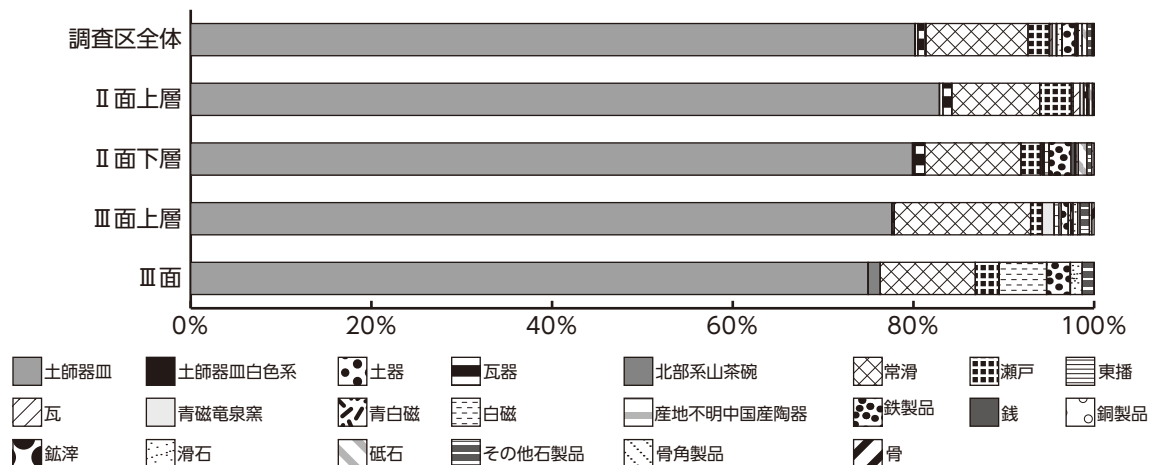
表3 出土遺物観察表(3)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
48	Ⅱ面下層面	磨耗陶片	常滑裏胴部使用 縦5.1cm 横5.8cm 厚み1.4cm 胎土は灰色、長石・石英を含む 断面の一邊が丸みを帯びて滑らかに磨耗
49	Ⅱ面下層面	白磁 口はげ皿	口縁～胴部片 ロクロ成形 素地は灰白色 釉は淡青灰色
50	Ⅱ面下層面	白磁 口はげ皿	口縁～胴部片 口径(12.7)cm ロクロ成形 素地は灰白色、黒色微粒子含む 釉は淡灰緑色透明
51	Ⅱ面下層面	刀子	遺存長(9.0)cm 最大幅(2.3)cm 最大厚(0.4)
52	Ⅱ面下層面	鉄釘	長(4.2)cm 幅0.6cm 厚0.8cm 重量2.4g
53	Ⅱ面下層面	治平元寶	初鑄1064年 北宋 篆書
54	Ⅱ面下層面	熙寧元寶	初鑄1068年 北宋 篆書
55	Ⅱ面下層面	熙寧元寶	初鑄1068年 北宋 篆書
56	Ⅱ面下層面	砥石 仕上砥	遺存長(6.7)cm 幅3.2cm 厚0.7cm 乳白色 砥面2面 鳴滝産
57	Ⅱ面下層面	砥石 中砥	遺存長(5.5)cm 幅4.6cm 厚3.1cm 淡灰褐色に淡紅色が混じる 砥面4面 天草産
58	Ⅱ面下層面	石英	縦2.4cm 横1.8cm 厚1.3cm 白色半透明 片方の小口部分に何度も打ちつけたような微細な敲打痕がある 火打石か
図版14 下段右隅	Ⅱ面下層面	ガラス	長さ3.1cm 幅2.5cm 厚8mm 明水青色で全体に激しく被熱し、大小無数の気泡が噴出している 破断面は層状に剥離 全体形は不明
図13-1	溝3	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁～胴部片 胎土は暗灰色、長石粒・石英粒を含む 器表は橙灰色に酸化 内面には全体的に降灰 焼成良好
図14-1	建物1-P.1	瀬戸柄付片口鍋 (行平鍋)	口縁部片 ロクロ成形 胎土は黄灰色 釉は灰緑色透明の灰釉、細かい貫入が入る 断面は火を受け、煤が黒く付着している
図15-1	建物2-P.2	土師器Ⅲ R種大型	口径(12.75)cm 底径(8.0)cm 器高3.35cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・雲母・海綿骨針・泥岩粒を含む粗土
2	建物2-P.2	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁～胴部片 胎土は灰色、長石粒・砂粒を含む 器表は灰褐色 内側に降灰
3	建物2-P.4	瀬戸 入子	口縁～体部片 口径(8.7)cm ロクロ成形後、ヘラで1カ所片口状に成形 胎土は灰色、堅緻 肌理細かい 内側に少し降灰
4	建物2-P.8	土師器Ⅲ R種小型	口径7.65cm 底径6.1cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は赤褐色、砂粒・赤色粒子・雲母を含む
図16-1	方形土坑	土師器Ⅲ R種小型	口径(7.35)cm 底径(5.0)cm 器高2.05cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針を含み、やや砂質 口縁部に油煤付着
2	方形土坑	土師器Ⅲ R種大型	口径12.5cm 底径7.8cm 器高3.05cm 口縁部二ヶ所を大きく割り取り、反対側を細かく打ち欠く 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母含む弱砂質土
図17-1	P.16	土師器Ⅲ R種小型	口径7.3cm 底径4.8cm 器高1.65cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は赤褐色、砂粒・赤色粒子・雲母を含む砂質土
2	P.16	土師器Ⅲ R種小型	口径(7.65)cm 底径(5.25)cm 器高1.75cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・雲母を含む砂質土
3	P.31	竜泉窯青磁 鎗蓮弁文碗	口縁部～胴部片 口径(13.7)cm 素地は淡灰色 釉は灰緑色、半透明、気泡含む
4	P.32	銅製品	飾り金具または仏壇荘嚴具の一部か? 緑青の剥落した部分に銀鍍金らしき銀色の光沢が見える 縦1.5cm 横1.8cm 厚0.9mm
5	P.34	船載陶器	壺か? 高台部片 底径(8.9)cm 左回転ロクロ成形 高台削り出し 胎土は灰色、堅緻で岩石質に焼ける 高台内上半部に鉄漿(汁)のようなものを刷毛塗り、同外面上部にもきわめて薄い鉄漿塗布の痕跡、また高台置付は淡赤褐色に酸化 灰釉らしき釉薬の一部が見える 産地不明
6	P.38	瀬戸 入子	口径(7.8)cm 底径(4.0)cm 器高1.65cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部摩耗 胎土は灰色、堅緻
7	P.40	瓦器 火鉢	底部片 胎土は淡灰桃色、砂粒・白色粒・赤色粒を含む 外側は表面研磨、胴部下に沈澱と小型の菊花押印文を巡らす 外底面に粗い刻み目、脚の接着部分か 図12-44と同一個体か
8	Ⅲ面上層面	土師器Ⅲ R種小型	口径(7.35)cm 底径(5.3)cm 器高1.55cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母含む
9	Ⅲ面上層面	土師器Ⅲ R種小型	口径(7.3)cm 底径(4.8)cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母含む
10	Ⅲ面上層面	土師器Ⅲ R種小型	口径(7.5)cm 底径(5.3)cm 器高1.75cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・白色粒子・泥岩粒を含む やや粗土 焼成良
11	Ⅲ面上層面	土師器Ⅲ R種小型	口径7.65cm 底径5.25cm 器高1.75cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・白色粒子・泥岩粒含む やや粗土
12	Ⅲ面上層面	土師器Ⅲ R種大型	口径(11.6)cm 底径(7.4)cm 器高3.4cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は淡黄褐色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母含む
13	Ⅲ面上層面	土師器Ⅲ R種大型	口径(11.8)cm 底径(6.8)cm 器高3.35cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母含む 焼成良
14	Ⅲ面上層面	土師器Ⅲ R種大型	口径12.45cm 底径7.6cm 器高3.1cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・海綿骨針・雲母含む 焼成良
15	Ⅲ面上層面	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁～胴部片 口径(30.0)cm 輪積み成形 胎土は灰色、砂粒・長石・石英・礫を含む 内面の下位は使用により摩耗
16	Ⅲ面上層面	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部～胴部下位片 底径(10.2)cm 輪積み成形、高台貼り付け 胎土は灰色、砂粒・長石・石英を含む 内面の下位は使用により摩耗
17	Ⅲ面上層面	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、長石・石英を含む
18	Ⅲ面上層面	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、砂粒・白色粒を含む
19	Ⅲ面上層面	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁～胴部下位片 輪積み成形 胎土は橙褐色、長石・石英・礫・砂粒を含む 内面下位は使用により磨滅
20	Ⅲ面上層面	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁～胴部下位片 輪積み成形 胎土は橙褐色、長石・石英・砂粒を多く含む 器表は赤褐色 内面下位は使用により磨滅
21	Ⅲ面上層面	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰褐色、器表は灰色
22	Ⅲ面上層面	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、砂粒・礫を含む 器表は茶色
23	Ⅲ面上層面	瀬戸 仏花瓶	胴部片 口径3.1cm 胎土は灰色で堅緻 淡灰緑色の灰釉
24	Ⅲ面上層面	竜泉窯青磁 広口小壺	胴部片 素地は灰白色 釉は灰青色半透明の太宰府分類の「Ⅲ類」 外側に細描きの蓮弁文 破片の上端部に上下の継ぎ目が見える
25	Ⅲ面上層面	基石	黒 縦1.6cm 横1.4cm 厚0.3cm 黒色の硬質細粒凝灰岩か

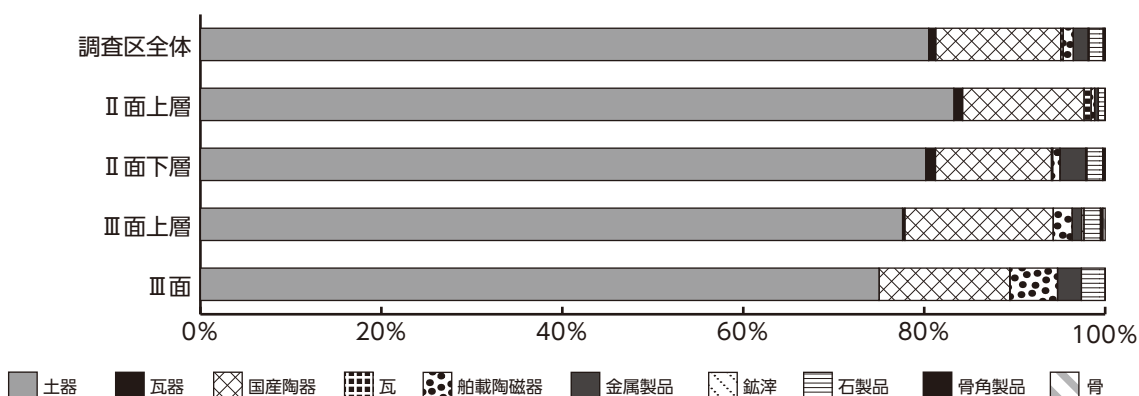
表4 出土遺物観察表(4)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
26	Ⅲ面上層面	石英	縦5.8cm 横4.7cm 厚3.1cm 白色半透明に紅褐色の斑が入る 火打石か
27	Ⅲ面上層面	敲打痕ある石	ホルンフェルス 長さ12.6cm 遺存幅(6.5)cm 最大厚3.3cm 暗茶褐色～黒褐色 側面の一部に細かい敲打痕、表裏にも被熱と敲打による剥離数カ所あり
28	Ⅲ面上層面	台石	粗粒凝灰岩 長(18.0)cm 幅(8.7)cm 最大厚3.2cm 灰色～灰褐色 表面に被熱と敲打による剥離数カ所あり 礎石を転用したか
29	Ⅲ面上層面	砥石 中砥	遺存長(8.2)cm 幅9.0cm 遺存厚(5.5)cm 黄灰褐色と淡紅色が層をなす 砥面4面 天草産
30	Ⅲ面上層面	骨製品	牛骨か 遺存長(2.0)cm 幅1.25cm 厚0.6cm 両端の窄まった円筒を半裁し、中央に径6mmの円孔をあける 円孔部分で折損 外面には小口部直下に平行した2本線を横断方向に刻み、全体に斜格子の線刻 被熱により白く変色 用途不明だが化粧具・装身具・文具などの紐留めや装飾部材の一種か
図18-1	P.21	土師器Ⅲ R種大型	口径(12.5)cm 底径(8.3)cm 器高3.75cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・海綿骨針・赤色粒子を含む 胴部中に径0.8～0.4cmの小孔一か所貫通
2	Ⅲ面	土師器Ⅲ R種小型	口径7.5cm 底径5.7cm 器高1.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子を含む 焼成良好
3	Ⅲ面	土師器Ⅲ R種小型	口径(7.5)cm 底径(5.5)cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は橙色、砂粒・赤色粒子を含む
4	Ⅲ面	土師器Ⅲ R種小型	口径(7.3)cm 底径(5.45)cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り、板状圧痕あり、内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・赤色粒子・雲母・泥岩粒を含む 焼成良好
5	Ⅲ面	土師器Ⅲ R種小型	口径(7.5)cm 底径(5.1)cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底面糸切り、内底部ナデ 胎土は淡橙色、砂粒・海綿骨針・赤色粒子・雲母を含む 焼成良好
6	Ⅲ面	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、白色粒子・黒色粒子含む
7	Ⅲ面	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色、6mm前後の丸い黄白色ブロックを含む 器表は灰褐色
8	Ⅲ面	瀬戸 縁釉小皿	口径(11.8)cm ロクロ成形 胎土は黄灰色、口縁部内外に灰緑色の灰釉をかける
9	Ⅲ面	瀬戸 縁釉小皿	口径(10.7)cm ロクロ成形 胎土は淡灰褐色、口縁部内外に暗緑灰色の灰釉をかける
10	Ⅲ面	白磁 口はげ皿	口縁～胴部片 口径(8.2)cm ロクロ成形 素地は灰白色、黒色微粒子含む 釉は淡灰緑色半透明 縁縁部内側に油煤付着
11	Ⅲ面	白磁 口はげ皿	口縁～胴部片 口径(9.75)cm ロクロ成形 素地は灰白色、黒色微粒子含む 釉は淡灰緑色半透明
12	Ⅲ面	鉄釘	長(5.0)cm 幅0.9cm 厚0.6cm 重量6.2g
13	Ⅲ面	敲打痕ある 泥岩	残存長(8.3)cm 遺存幅(6.5)cm 遺存厚(5.7)cm 泥岩円礫が割れた後尖端を打突ないし加圧(何かを押し潰すため)に使用 使用痕は刻み目状になる 全体に被熱

表5 出土遺物計量表



	II面上層		II面下層		III面上層		III面		調査区全体	
土師器皿R種	426	82.88%	592	79.89%	298	77.60%	57	75.00%	1434	80.16%
土師器皿白色系	0	0.00%	1	0.13%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
土器	2	0.39%	1	0.13%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.28%
瓦器	5	0.97%	8	1.08%	1	0.26%	0	0.00%	14	0.78%
北部系山茶碗	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.32%	2	0.11%
常滑	50	9.73%	79	10.66%	58	15.10%	8	10.53%	202	11.29%
瀬戸	18	3.50%	16	2.16%	5	1.30%	2	2.63%	42	2.35%
東播	1	0.19%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
瓦	4	0.78%	1	0.13%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.28%
青磁竜泉窯	2	0.39%	1	0.13%	5	1.30%	0	0.00%	8	0.45%
青白磁	0	0.00%	1	0.13%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
白磁	0	0.00%	4	0.54%	2	0.52%	4	5.26%	10	0.56%
産地不明中国産陶器	0	0.00%	0	0.00%	1	0.26%	0	0.00%	1	0.06%
鉄製品	2	0.39%	18	2.43%	3	0.78%	2	2.63%	25	1.40%
銭	0	0.00%	3	0.40%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.17%
銅製品	0	0.00%	0	0.00%	1	0.26%	0	0.00%	1	0.06%
鋳滓	0	0.00%	1	0.13%	1	0.26%	0	0.00%	2	0.11%
滑石	1	0.19%	2	0.27%	2	0.52%	1	1.32%	8	0.45%
砥石	2	0.39%	7	0.94%	1	0.26%	0	0.00%	10	0.56%
その他石製品	1	0.19%	4	0.54%	4	1.04%	1	1.32%	10	0.56%
骨角製品	0	0.00%	2	0.27%	1	0.26%	0	0.00%	3	0.17%
骨	0	0.00%	0	0.00%	1	0.26%	0	0.00%	1	0.06%
総計	514	100%	741	100%	384	100%	76	100%	1789	100%



	II面上層		II面下層		III面上層		III面		調査区全体	
土器	428	83.27%	594	80.16%	298	77.60%	57	75.00%	1440	80.49%
瓦器	5	0.97%	8	1.08%	1	0.26%	0	0.00%	14	0.78%
国産陶器	69	13.42%	95	12.82%	63	16.41%	11	14.47%	247	13.81%
瓦	4	0.78%	1	0.13%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.28%
舶載陶磁器	2	0.39%	6	0.81%	8	2.08%	4	5.26%	20	1.12%
金属製品	2	0.39%	21	2.83%	4	1.04%	2	2.63%	29	1.62%
鋳滓	0	0.00%	1	0.13%	1	0.26%	0	0.00%	2	0.11%
石製品	4	0.78%	13	1.75%	7	1.82%	2	2.63%	28	1.57%
骨角製品	0	0.00%	2	0.27%	1	0.26%	0	0.00%	3	0.17%
骨	0	0.00%	0	0.00%	1	0.26%	0	0.00%	1	0.06%
総計	514	100%	741	100%	384	100%	76	100%	1789	100%

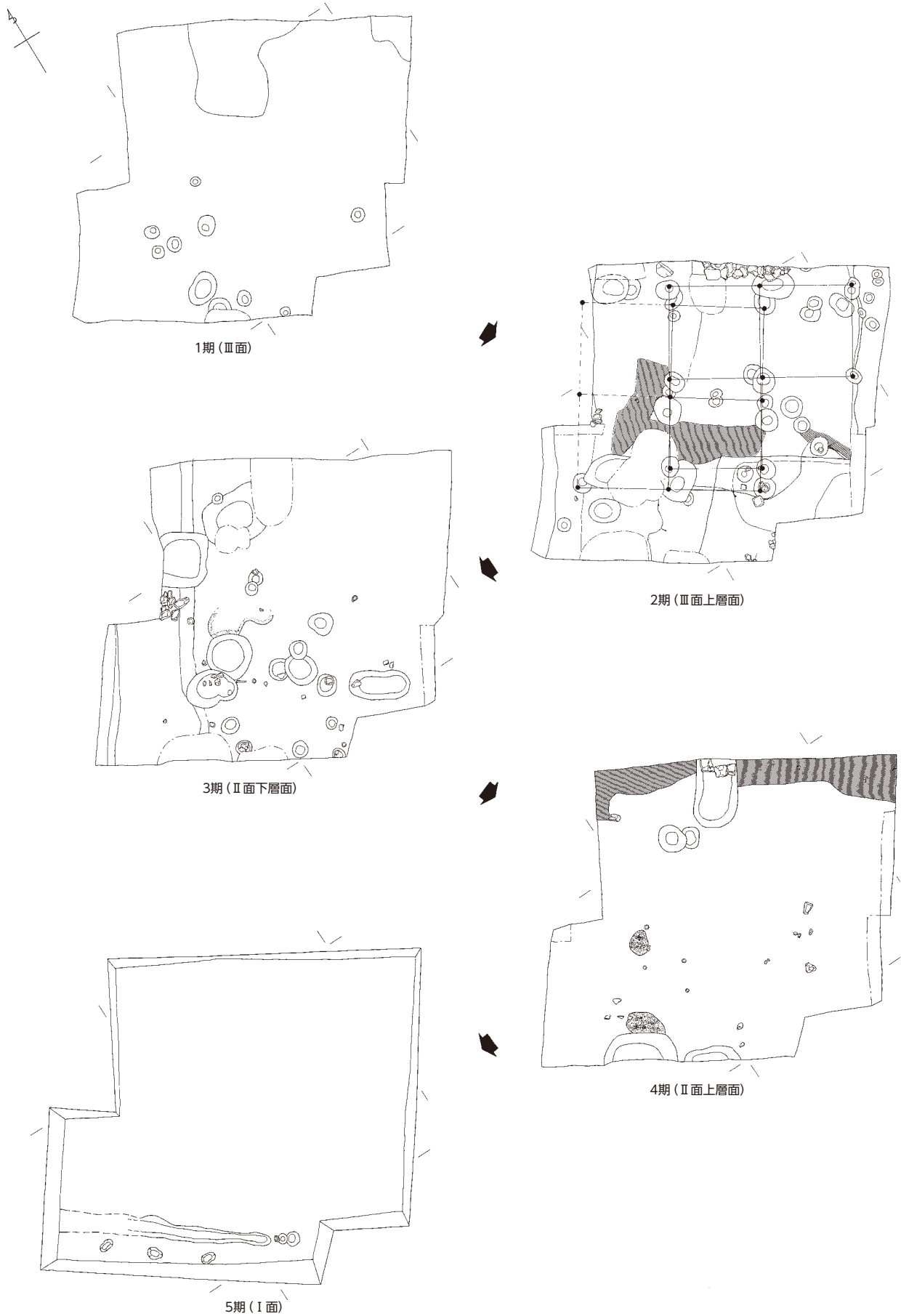


图 19 遺構變遷圖

第四章 まとめと考察

1. 遺構の変遷と年代

1期

最終面であるⅢ面が相当する。面の年代は13世紀後半。検出遺構は小穴10穴のみで、関連性もみられない。Ⅲ面を構成する地行は15層の直上にあたり、調査区北側では15層と思われる大型泥岩層が露頭している。また、上層のⅢ面上層との年代差もみられない。これらのことから、まず15層でおおまかに谷を地行し、Ⅲ面は、その上をならすための最初の地行という可能性も考えられる。いずれにしろ、本調査区内においては1期に盛んに土地利用された形跡はみられない。

2期

Ⅲ面上層が相当する。年代は13世紀後半～14世紀初頭。現在の道路とほぼ平行する角度で、調査区の西端から溝3が検出されている。この溝3がN-35°-E、建物1がN-33°-E、建物2がN-30.5°-Eと建物2棟も現在の道路と溝3にほぼ平行する配置となっている。調査区が狭いため建物の正確な規模は把握できないが、13世紀後半以降、地割の方向軸は踏襲されている可能性がある。また、本期に急速に遺構が広がるが、これは13世紀後半以降の極楽寺の伽藍整備の影響が考えられる。

3期

Ⅱ面下層面が相当する。出土遺物の年代は13世紀後半～14世紀前半を中心とする。2期と同様に現在の道路と接する調査区西端から、道路にほぼ平行する角度で、溝1と溝2が検出されている。建物は検出されないかわりに土坑の数が2期と比べ増えている。2期とは本調査区内の土地利用に変化が生じたといえよう。

4期

Ⅱ面上層面が相当する。出土遺物には14世紀末～15世紀前半のものが含まれる。下層との関わりで考えるなら14世紀前半以降、面の更新がなされなかった可能性が考えられる。出土遺物は相対的に多いが、3期までとは大きく異なり、溝は検出されず、遺構も非常に少ない。本調査区周辺での土地利用が大きく変わった可能性が考えられる。

5期

I面が相当する。出土遺物はほとんどなく面の正確な年代は不明。しかし層位的に見て、近世もしくはそれ以降の可能性も考えたい。

2. まとめ

本調査区内に関しては、ほぼ2期と3期、すなわち13世紀後半～14世紀前半に土地利用が集約されると言ってもよさそう。忍性の入寺以降、伽藍が整備され鎌倉幕府滅亡以後衰微していく極楽寺の動向と軌を一にする可能性も考えられよう。また、検出された溝は道路とほぼ主軸方位を同じにしており、本調査区周辺では13世紀後半以降それが踏襲されている可能性がある。もっともこれは地形的な制約によるものと考えられる。

火災層が検出されたわけでもなく、第一章で触れた法花寺が本調査地点周辺にあったと確定したわけでもないが、2期と3期の土地利用の変化に関しては、1303年～1308年の間に起こったとされる、法花寺まで類焼した火災（細川1989）が契機である可能性も考えられよう。

（沖元）

引用・参考文献(本報全体に共通)

- 赤星直忠 1941「考古学上から見た鎌倉」『鎌倉』(単刊) 鎌倉市壮年団
- 赤星直忠 1959『鎌倉市史 考古編』吉川弘文館
- 上横手雅敬 1992「鎌倉大仏の造立」『龍谷史壇』九九・一〇〇
- 小野塚充巨 1984「中世鎌倉極楽寺をめぐる」『荘園制と中世社会』東京堂出版
- 木村美代治・佐藤仁彦 1995『甘縄神社遺跡群発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
- 大河内勉ほか 1997『由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書』
- 大河内勉 1997『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書』
- 鎌倉市教育センター 2009『かまくら子ども風土記』鎌倉市教育委員会
- 川副武胤・貫達人 1959『鎌倉市史 社寺編』吉川弘文館
- 木下良ほか 1997『神奈川の古代道』藤沢市教育委員会
- 齋木秀雄 1998『極楽寺旧境内遺跡一江ノ島電鉄株式会社極楽寺地区改良計画に伴う発掘調査報告一』
- 齋木秀雄ほか 1992『長谷小路南遺跡』
- 2007『大倉幕府周辺遺跡群発掘調査報告書一雪ノ下4丁目581番5地点一』
- 鈴木庸一郎ほか 2001『「古都鎌倉」を取り巻く山稜部の調査』神奈川県教育委員会・鎌倉市教育委員会・(財)かながわ考古学財団
- 須藤求馬 1896「鎌倉発見埴輪図説」『東京人類學會雜誌』第一二卷第一二七号
- 瀬田哲夫 1994「長谷観音堂周辺遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告10』鎌倉市教育委員会
- 田代郁夫ほか 1995「平成5年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」『中世石窟遺構の調査Ⅱ』
- 田代郁夫ほか 1996「平成6年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」『中世石窟遺構の調査』
- 継実ほか 2002「二ノ谷横穴群」『鎌倉の横穴墓』
- 坪井小五郎 1909「鎌倉にて発見されたる埴輪について」『鎌倉文明史論』三省堂書店
- 原輝彦 1951「一ノ谷横穴古墳発掘報告」『考古学雑誌』第37巻第4号
- 原廣志 2006「極楽寺地区出土の瓦とその変遷」『中世都市鎌倉と極楽寺 予稿集』
- 藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- 細川涼一 1989『女の中世』日本エディタースクール出版部
- 馬淵和雄 1994「武士の都 鎌倉」『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』新人物往来社
- 1998「大倉幕府周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告14』鎌倉市教育委員会
- 1998『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社
- 1999『大倉幕府周辺遺跡群一雪ノ下四丁目620番5地点一』
- 2004「中世都市鎌倉前史」『中世都市鎌倉の実像と境界』高志書院
- 三上次男 1948「鎌倉市稲村ガ崎横穴古墳群について」『科学世界第23巻第1号』
- 八木奨三郎 1897「鎌倉采女塚の遺物」『考古學會雜誌』第壹編第拾號
- 山崎信二 2000『中世瓦の研究』雄山閣



1-1. 東南山麓から調査区をのぞむ



1-2. 調査地点近景



2-1. I区I面全景

2-2. II区II面上層面全景(東から)



2-3. II区II面上層面全景(南から)



3-1. 土坑2 (北から)

3-2. 砥石・滑石印判出土
状況 (西から)



3-3. II区II面下層面全景
(北から)



4-1. I区II面下層面全景(東から)



4-2. II区II面下層面全景(東から)



4-3. II区II面下層面全景(南から)



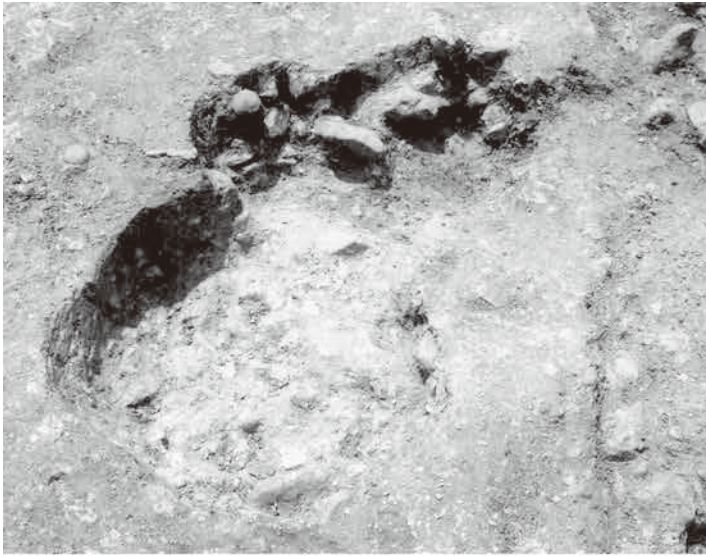
5-1. 溝1 (南から)



5-3. 土師器皿出土状況 (南から)



5-2. 溝2 (南から)



6-1. 土坑3・4 (北から)

6-2. I区Ⅲ面上層面全景 (東から)



6-3. I区Ⅲ面上層面全景 (北から)



7-1. 方形土坑 (北から)



7-2. 溝3 (北から)



7-3. II区Ⅲ面上層面全景 (東から)



8-1. II区Ⅲ面上層面(南から)

8-2. I区南壁土層断面



8-3. I区東壁土層断面

9-1. I区北壁土層
断面

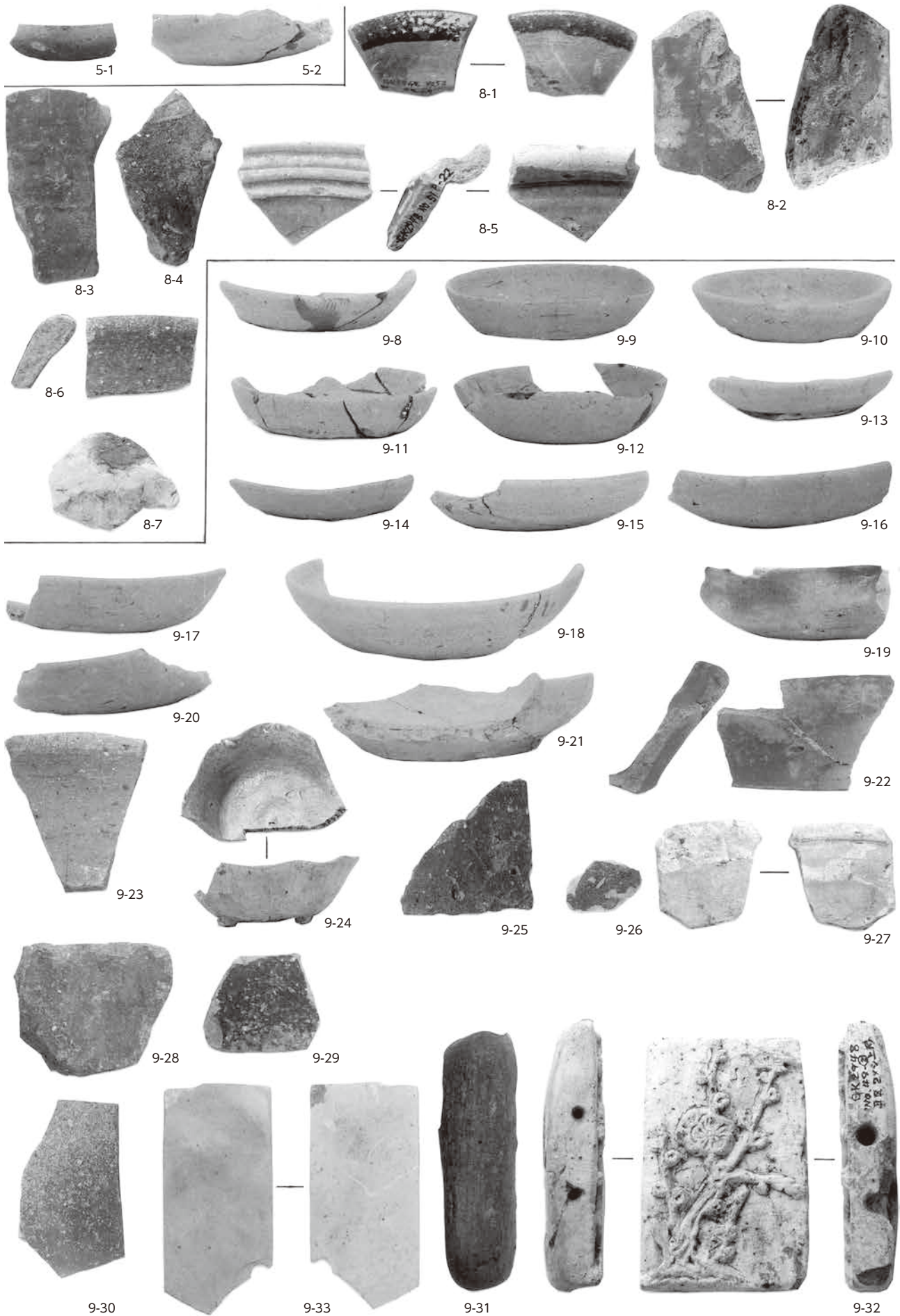


9-2. I区深掘り
(南から)



9-3. II区東壁土層
断面





出土遺物 1

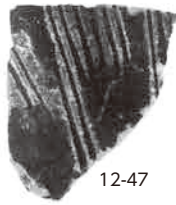


出土遺物 2

图版 12



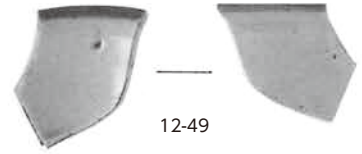
12-46



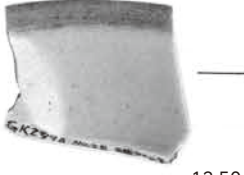
12-47



12-48



12-49



12-50



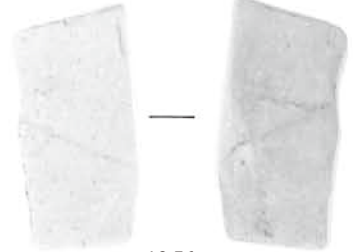
12-51



12-52



12-54



12-55



12-57



12-53



12-55



12-58



13-1



15-1



15-3



15-4



14-1



16-1



16-2



15-2

出土遺物 3



17-1



17-2



17-3



17-4



17-6



17-5



17-7



17-8



17-9



17-10



17-11



17-12



17-13



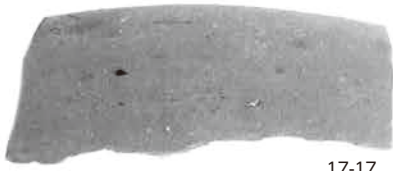
17-14



17-15



17-16



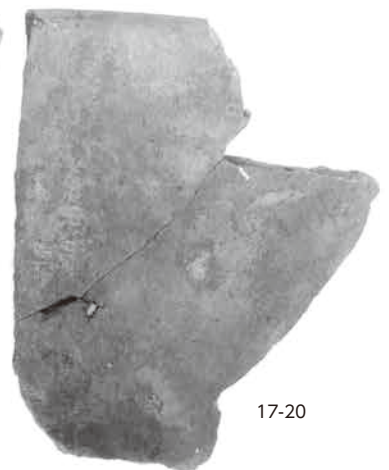
17-17



17-18

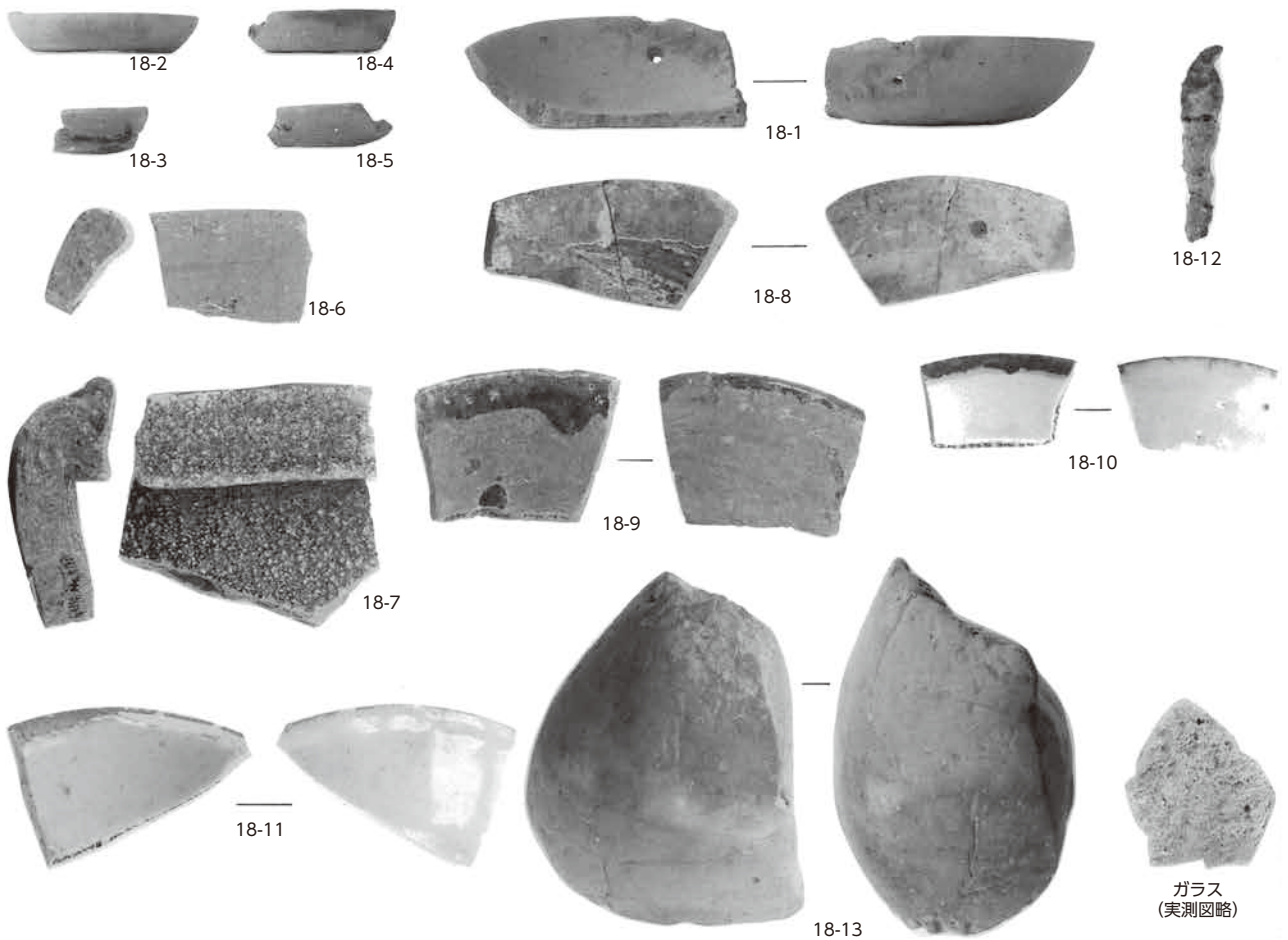
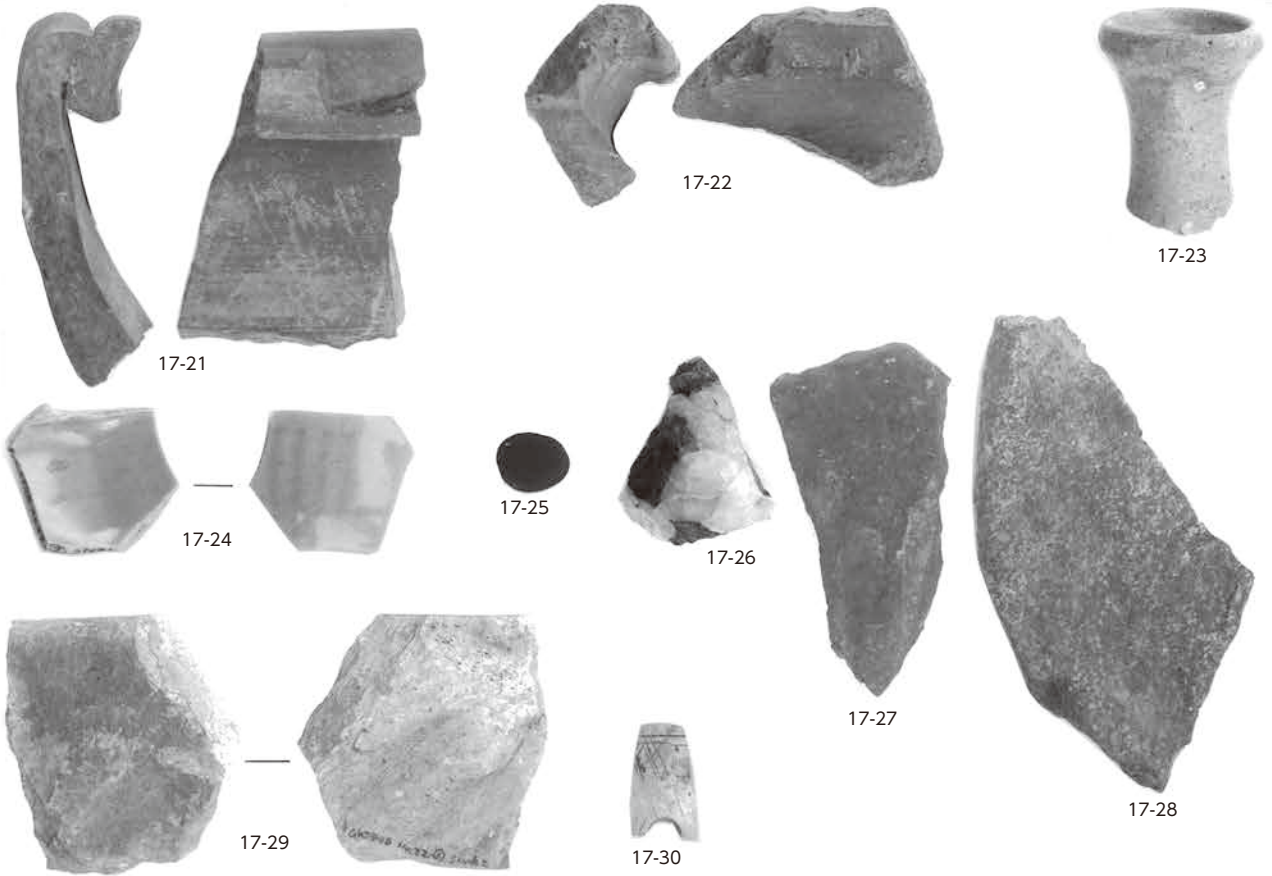


17-19



17-20

出土遺物 4



出土遺物 5

宝蓮寺跡 (No.374)

佐助二丁目 905 番 3

例 言

1. 本報は「宝蓮寺跡（鎌倉市No.374）」内の一部、佐助二丁目905番3地点（略称HRT0504）における個人専用住宅の建築にともなう埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査期間：平成17年（2005）4月7日～同年7月8日 調査面積：72.99㎡
現地調査・整理作業の体制は以下の通りである。
調査担当者：原 廣志
調 査 員：須佐仁和・宇都洋平・田畑衣理・梶岡溪音・赤堀祐子
調査補助員：橋本和之・小野夏菜・銘苅春也・平山千絵
調査協力者：秋田公佑・大戸迫 猛・倉澤六郎・山崎一男（鎌倉市シルバー人材センター）
協力機関名：（社）鎌倉市シルバー人材センター・鎌倉考古学研究所
4. 本報執筆は、第1～3章を宇都があたり、第4章は調査員が協議して宇都・原が稿を草した。
本報の挿図・写真図版の作成には、小野・田畑・梶岡・平山が行った。
本報の掲載写真は、遺構の全景・個別を宇都・原があたり、出土遺物を須佐（仁）が撮影した。
発掘調査における出土遺物、図面・写真などは鎌倉市教育委員会が保管している。
5. 本報の凡例は、以下の通りである。
 - ・挿図縮尺 全側図：1/80 遺構図1/50 遺物図1/3
 - ・遺物図 ー・ー・ーは釉葉の釉際を示し、黒塗りは主にかわらけの墨書痕や灯明皿付着の油煤煙、漆器の朱描き文様を表現している。さらに遺物観察表において手づくねかわらけ 外底径の計測値は外底指頭痕と口縁部下位との稜部の数値を表わした。
 - ・使用名称 本文中の記述で「土丹」・「鎌倉石」と表記する石材は、丘陵基盤となる三浦・葉山岩層群の凝灰岩質泥岩及び砂岩のことである。
6. 本遺跡の現地調査及び資料整理に際して多くの方々からご助言とご協力を戴いた。記して感謝の意を表したい（敬称略、五十音順）。
秋山哲夫・鍛冶屋勝二・池谷初恵・伊丹まどか・菊川 泉・菊川英政・古田戸俊一・五味文彦・汐見一夫・宗臺秀明・宗臺富貴子・鈴木絵美・鈴木弘太・玉林美男・中野晴久・松尾宣方・馬淵和雄

目次

本文目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	93
1. 遺跡の位置と地形	
2. 遺跡の歴史的環境	
第二章 調査の概要	98
1. 調査の経過	
2. 測量軸の設定	
3. 層序と生活面	
第三章 検出遺構と出土遺物	103
1. 第1面の遺構と遺物	
2. 第2面の遺構と遺物	
3. 第3面の遺構・遺物	
4. 第4面の遺構・遺物	
5. 第5面の遺構・遺物	
6. 第6面の遺構・遺物	
7. 第6面下トレンチ	
第四章 まとめ	137

挿図目次

図1 遺跡の位置と周辺旧跡	93	図17 第4面遺構全測図	115
図2 調査地点と周辺遺跡	94	図18 第4面遺構(1)	116
図3 国土座標とグリッド設定図	99	図19 第4面遺構(2)	117
図4 調査区壁土層断面図	100	図20 第4面出土遺物(1)	118
図5 第1面遺構全図	103	図21 第4面遺構外出土遺物	119
図6 第1面各遺構	104	図22 第5面遺構全測図	120
図7 第1面出土遺物	105	図23 第5面各遺構	121
図8 第2面遺構全図	106	図24 第5面石列	122
図9 第2面各遺構	107	図25 第5面出土遺物	123
図10 第2面出土遺物	108	図26 第6面遺構全測図	124
図11 第3面遺構全測図	109	図27 第6面礎石建物	125
図12 第3面土坑・ピット	110	図28 第6面土坑1	126
図13 第3面土塁状遺構・溝1	111	図29 第6面出土遺物	127
図14 第3面石列遺構	112	図30 第6面下トレンチ	128
図15 第3面出土遺物	113	図31 調査地遺構変遷図	137
図16 第3面溝1出土遺物	114	図32 遺構変遷図	138

表 目 次

表1 周辺の遺跡調査地点 ……………	96	表8 遺物観察表(7) ……………	135
表2 遺物観察表(1) ……………	129	表9 遺物観察表(8) ……………	136
表3 遺物観察表(2) ……………	130	表10 遺物分類別出土数量・比率表 ……………	139
表4 遺物観察表(3) ……………	131	表11 各面の遺物分類表 ……………	140
表5 遺物観察表(4) ……………	132	表12 第3面 溝1 遺物分類別 ……………	140
表6 遺物観察表(5) ……………	133	表13 第3面 溝1 かわらけ器種別分類 ……	140
表7 遺物観察表(6) ……………	134		

図 版 目 次

図版1 1～8 第1面全景・各遺構 ……	142	図版11 第2・3面出土遺物 ……	152
図版2 1～4 第2面全景・各遺構 ……	143	図版12 第3面出土遺物 ……	153
図版3 1～3 第3面全景 ……	144	図版13 第3面出土遺物 ……	154
図版4 1～7 第3面土塁・溝 ……	145	図版14 第3・4面出土遺物 ……	155
図版5 1～3 第4面全景・各遺構 ……	146	図版15 第4面出土遺物 ……	156
図版6 1～3 第5面全景 ……	147	図版16 第4・5面出土遺物 ……	157
図版7 1～3 第5面全景、第6面全景 …	148	図版17 第5面出土遺物 ……	158
図版8 1～6 第6面各遺構、トレンチ …	149	図版18 第5・6面出土遺物 ……	159
図版9 1～5 調査地内の遺構・地形 ……	150	図版19 第3・6面出土遺物 ……	160
図版10 第1・2面出土遺物 ……	151		

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置と地形



図1 遺跡の位置と周辺旧跡

本遺跡は鎌倉市街地の北西部である佐助ヶ谷地区に位置し、JR鎌倉駅から直線ではほぼ真西方へ約800mの距離、鎌倉市役所北側の鎌倉市佐助二丁目905番3に所在しており（図1）、神奈川県遺跡台帳の宝蓮寺跡（遺跡台帳No.374）地内に位置する。調査地点は佐助ヶ谷の開口部より北へ約750m奥に進んだ東側の小支谷、宝蓮寺ヶ谷の一角にある。葛原岡神社から源氏山方面に南へと延びる標高50～70m程の丘陵尾根を西に超えていくと、南北に長い佐助ヶ谷と呼ばれる谷戸が展開する。本調査地点のある宝蓮寺ヶ谷は大きく二つの平場によって構成されている。第一番目の平場は調査地の東側で谷の最奥部に形成されており、その地点より5mほど下がったところに山裾を造成した今回の調査地点がある広めの平場が形成されている。この平場の西端から通路を16mほど西方へ進むと、銭洗弁天へ向かう道路へとかなりの傾斜を持ちながら下がっていく。本調査地点海拔高は36.5m前後を計り、佐助稻荷へ向かう前面の道路と



図2 調査地点と周辺遺跡

の比高差15m程である。

佐助ヶ谷は、鎌倉の中心市街地を形成する平野部のほぼ西よりを深く北上する大きな谷であり、開口部の幅約400m、奥行きは900mの主谷と多くの大小支谷で構成され、本調査地点の対西の小支谷には建久年間(1190～1199年)に畠山重忠により再建されたという佐助稲荷があり、北西支谷の山裾には宇賀福神社(通称銭洗弁天)が鎮座している。

2. 遺跡の歴史的環境

本遺跡周辺は古代相模国鎌倉郡の中心域に属し、JR鎌倉駅西方で鎌倉市役所裏手に位置した市立御成小学校内(今小路西遺跡)の発掘調査では奈良～平安時代にかけての5時期にわたる古代遺構が発見されている。古代Ⅰ～Ⅲ期にかけては大型の掘立柱建物や柵列などが検出され、Ⅰ期の柵列柱穴からは天平五年(733)七月十四日の記年銘がある付札木簡が出土している。これら遺構はその配置から正殿や倉庫と思われる建物跡で古代鎌倉郡の郡家と推定されており、古代律令体制においてこの地域が鎌倉郡の中心地であったと考えられる。また調査地点裏山を挟んで南東に展開した無量寺ヶ谷から千葉ヶ谷にかけては7世紀後葉～8世紀代にかけての古瓦の出土が知られ、寺院跡などの存在が予想されている。

本遺跡が所在する「佐助ヶ谷」のについて触れる。地名の由来については佐助稲荷神社の社伝によれば「翁の姿にかえた神霊が佐殿源頼朝に平家討伐の旗揚げをすすめる頼朝を助けたので佐助になったという」という伝えがあり、もう一つは谷戸内に上総・千葉・常陸の三介の屋敷があって三介と呼ばれていたのが転訛したものという説もある。この地は中世に「佐介」と呼ばれたようで、『吾妻鏡』の北条時房(1175～1240)に関する記事を初見とする。時房は時政の子で六波羅探題や蓮著などを任じ、佐介氏を名乗って大仏殿とよばれていた。承久の乱(1221)には北条泰時とともに上洛、初代の六波羅探題となり、のちに蓮著として死没するまで任じた。その子の北条時盛(1197～1277)は寛元四年(1246)六月二十七日条に「入道大納言家渡御干入道越後守時盛佐介第…」(『吾妻鏡』)の記事がみられ、邸宅を構えていたことを窺い知ることができる。鎌倉幕府滅亡後には、山内上杉氏の上杉憲基の邸宅があったようである。しかし応永二十三年(1416)の上杉禅秀(氏憲)の乱では足利持氏が太倉御所からこの邸内に逃れてきたが、その際に焼き払われたようである(『鎌倉大草子』)。谷戸内の寺院をみると宝蓮寺をはじめ、大仏氏の祖にあたる北条朝直が創建した悟真寺、上杉憲顕創建の国清寺、鎌倉光明寺開山の然阿良忠が住持していた蓮花寺の他、松谷寺・宝性寺・薬師堂・北斗堂・天狗堂などの諸寺院・堂の名前があげられる(『鎌倉廃寺事典』)。しかし現在では廃寺となり所在地の特定は難しく、わずかに支谷の字名にその名を留める小支谷から旧蹟を辿るだけであり、宝蓮寺もその中の廃寺の一つである。

本調査地点の遺跡名にもなっている宝蓮寺についてみると、開山・開基、存続年代、宗旨等は良くわかっていない。しかしながら『新編相模風土記稿』には佐介ヶ谷の内に「寶蓮寺谷」という支谷があるとし、また江戸時代中期の宝永年間に作成されたと考えられる『扇ヶ谷村絵図』には調査地点付近が「宝蓮寺跡 畠」とある。また天保三年(1832)の作成という扇ヶ谷村の絵図にも同様の記載があるので、この支谷に宝蓮寺が所在しており、少なくとも江戸中期までには廃寺になっていたことが知られる。

なお、調査地点周辺の調査事例については表1「周辺の遺跡調査地点」を参照されたい。

表1 周辺の遺跡調査地点

()は県遺跡台帳番号

No	遺跡名	調査地点	遺跡の特徴・文献など
1	宝蓮寺跡 (No.374)	佐助二丁目897番11	遺構面3面の4時期、掘立柱建物・土坑・溝・溝状遺構・柵列・ピット多数など 13世紀後葉～14世紀前葉 宗臺・根本 1999
2	佐助ヶ谷遺跡 (No.203)	佐助一丁目583番外	遺構面3面の約10時期に亘る平場造成、石垣状石列・基壇状遺構・土坑・溝など 13世紀後葉～14世紀中頃に営まれた寺地と推定 瀬田 2005
3	佐助ヶ谷遺跡 (No.203)	佐助一丁目566番1	遺構面7面8時期、主に掘立柱建物(工房や倉)・基壇・井戸・門・池など寺院との大きな関わりを推定 13世紀後半～15世紀後半 齋木・瀬田・伊丹他 1993
4	佐助ヶ谷遺跡 (No.203)	佐助一丁目496番4	中世に遡る3時期の河川流路跡など 佐助川の旧河道と推測 熊谷 2011
5	佐助ヶ谷遺跡 (No.203)	佐助一丁目476番1	遺構面2面、礎石建物・石積遺構・土坑・据裏・ピット、旧佐助川の西岸など 14世紀前半～15世紀前半 齋木・降矢 2002
6	佐助ヶ谷遺跡 (No.203)	佐助一丁目476番1	遺構面4面の3時期、礎石建物・掘立柱建物・竪穴建物・土坑・溝・かわらけ溜りなど 13世紀後葉～14世紀中葉 原他 2004
7	佐助ヶ谷遺跡 (No.203)	佐助一丁目450番5外 (A区)・29外(B区)	遺構面A区4面・B区6面、柱穴列・土坑・ピット・岩盤削平面など 13世紀後葉～14世中葉 宮田・滝澤 2009
8	佐助ヶ谷遺跡 (No.203)	佐助一丁目496番5	遺構面6面7時期、掘立柱建物・土坑・遺物溜り・ピット・岩盤削平面など 寺地の一画の可能性が高い 13世紀後半～14世紀代、齋木・降矢 2009
9	佐助ヶ谷遺跡 (No.203)	佐助一丁目620番	比高差10m程の上下二段の平場、土坑(粘土採掘坑含む)・溝・ピット・礎石など 13世紀末葉～14世紀代 手塚・田畑 1989
10	佐助ヶ谷遺跡 (No.203)	佐助一丁目615番1外	遺構面3面 礎石建物・掘立柱建物・竪穴建物・据裏土坑群・粘土採掘土坑・井戸・溝・13世紀～15世紀代 齋木・降矢 2007

【引用・参考文献】

- 貫 達人 1971「北条氏亭址考」『金沢文庫研究紀要』第8号
- 貫 達人・川副武胤 1980『鎌倉廃寺事典』
- 大三輪龍彦・手塚直樹・田畑佐和子 1989『佐助ヶ谷遺跡 佐助一丁目620番地点』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団
- 齋木秀雄・瀬田哲夫・伊丹まどか他 1993『佐助ヶ谷遺跡(鎌倉税務署用地) 発掘調査報告書』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団
- 宗臺富貴子・根本志保 1999「宝蓮寺跡 佐助二丁目897番11地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15(第1分冊) 鎌倉市教育委員会
- 齋木秀雄・降矢順子 2002「佐助ヶ谷遺跡 佐助一丁目476番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18(第1分冊) 鎌倉市教育委員会
- 原 廣志・須佐直子 2004「佐助ヶ谷遺跡 佐助一丁目476番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』20(第1分冊) 鎌倉市教育委員会
- 瀬田哲夫 2005『佐助ヶ谷遺跡発掘調査報告書 鎌倉市佐助一丁目583番外』(有)鎌倉遺跡調査会
- 宮田 眞・滝澤晶子 2009「佐助ヶ谷遺跡 佐助一丁目450番5外・29外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』25(第1分冊) 鎌倉市教育委員会
- 齋木秀雄・降矢順子 2009「佐助ヶ谷遺跡 佐助一丁目496番5」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』25(第2分冊) 鎌倉市教育委員会
- 熊谷 満 2011「佐助ヶ谷遺跡 佐助一丁目469番4」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』27(第1分冊) 鎌倉市教育委員会
- 河野真知郎他 1990『今小路西遺跡(御成り小学校校地内) 発掘調査報告書』今小路西遺跡発掘調査団
- 田代郁夫・原 廣志他 1991「1.佐助ヶ谷遺跡内やぐら」『平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』佐助一丁目B地点 佐助ヶ谷遺跡内やぐら発掘調査団
- 継 実 1994『平成4年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書 佐助ヶ谷遺跡内やぐら』佐助二丁目801番1地点 佐助ヶ谷遺跡内やぐら発掘調査団
- 田代郁夫・継 実他 1996「平成6年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書 佐助二丁目やぐら群」『中世石窟遺構の調査 ―鎌倉所在の「やぐら」群―』佐助二丁目B地点
- 宮田 眞他 1997『佐助ヶ谷遺跡内やぐら 平成7年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』佐助ヶ谷遺跡内やぐら発掘調査団

- 田代郁夫・宗臺秀明・宗臺富貴子他 1998「平成五年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書 松谷寺跡内やぐら」『中世石窟遺構の調査Ⅱ — 鎌倉・六浦所在の「やぐら」群 —』 東国歴史考古学研究所調査研究報告第15集 東国歴史考古学研究所
- 宇都洋平・原 廣志 2006「宝蓮寺跡の調査」『第16回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会』 鎌倉市教育委員会・鎌倉考古学研究所
- 菊川英政・宗臺富貴子 2006『鎌倉城 (No.87) 発掘調査報告書—御成町39番36地点—』 (株) 斎藤建設
- 宮田 眞・滝澤晶子・安藤龍馬 2011『松谷寺跡 (No.205) 発掘調査報告書 (神奈川県鎌倉市佐助一丁目516—1外4筆)』 (株) 斎藤建設
- 宮田 眞・滝澤晶子 2008『無量寺跡 (第4次) 発掘調査報告書 (鎌倉市扇ガ谷一丁目26番14地点)』 (株) 博通
- ※ 同遺跡内ではこの他に本地点北方の三か所で調査が実施されている。

第二章 調査の概要

1. 調査の経過

本調査地点は個人専用住宅の建設に先立つ発掘調査である。建設計画は鋼管杭の設置による基礎工事の内容とするものであったため、埋蔵文化財に影響を及ぼすと判断されたので鎌倉市教育委員会による遺構確認の試掘調査が行われた。その結果、現地下20～30cmまで現代表土が確認され、その直下は中世遺物包含層をほとんど含まずに四時期の遺構面（生活面）の存在が確認された。その遺構面伴い遺構・遺物が明らかになり、建築工事による埋蔵文化財への影響が避けられないと判断されたので発掘調査を実施する運びとなった。

現地調査は平成17年4月7日に機材搬入、重機により試掘データに基づいて遺構面を傷つけないように地表下20cm程までの表土層を除去した後、以下を人力により掘り下げて遺構検出をおこなった。調査面積は72.99㎡が対象ある。調査の結果、礎石建物、土坑、溝、築地塀、ピットなどにより構成された遺構群が検出され、それに伴い13世紀後葉～14世紀中葉にかけての遺物であるかわらけ・陶磁器類・金属製品などの六時期の生活面が検出された。同年7月8日までの間に必要な記録作業をおこない、同日に機材撤収して現地調査を終了した。調査の経過については、以下に主な作業内容を日誌抜粋で記しておく。

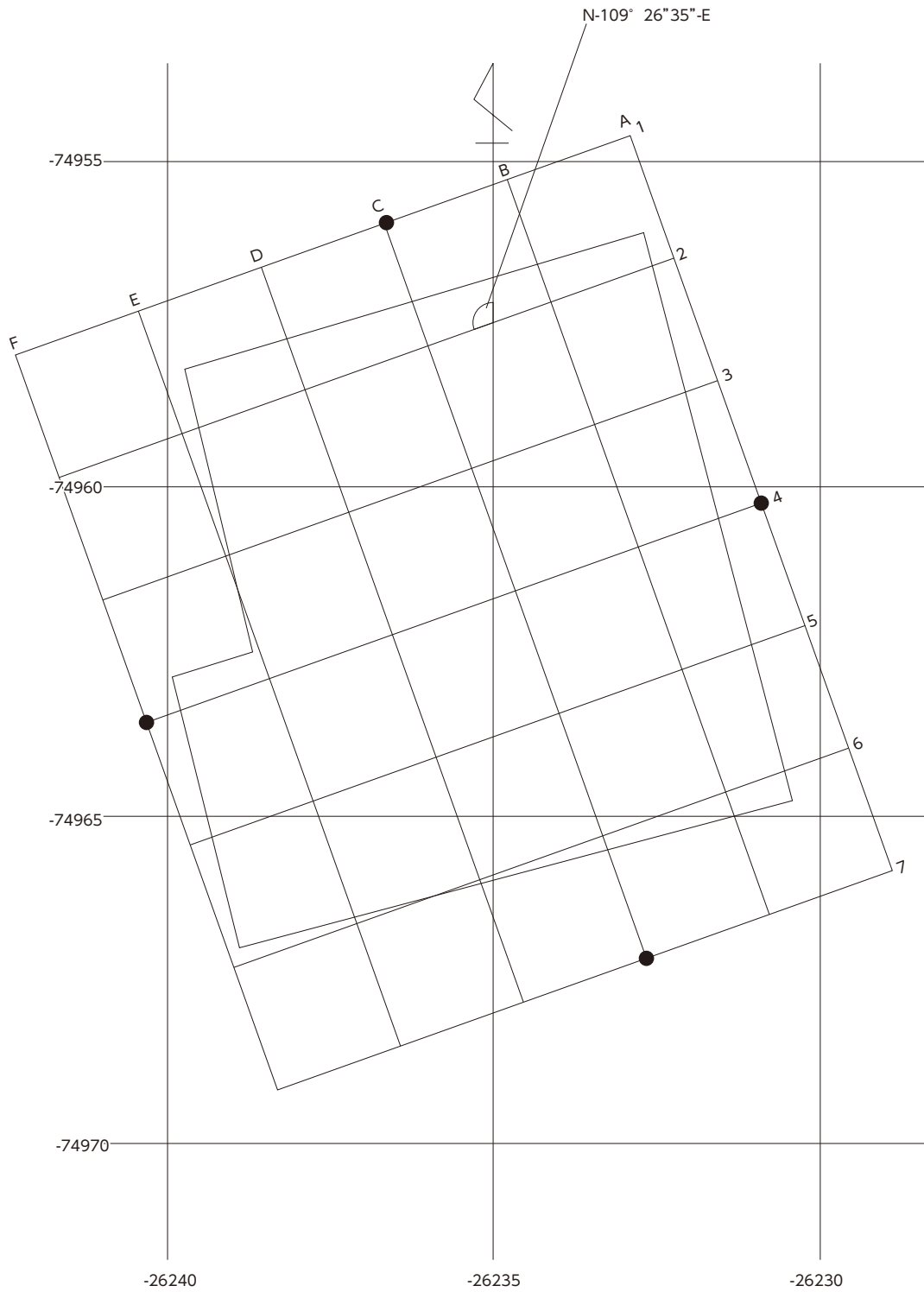
【日誌抄】

- 4月7日(木) 調査区を設定して重機により地表下20cmまで表土掘削。機材搬入とテント設営。
- 12日(火) 第1面の検出及び遺構確認作業。鎌倉市4級基準点を基として測量用方眼の設定。測量用水準点の原点レベルを移動。
- 22日(金) 第1面の全景・個別遺構の写真撮影及び平面図作成。
- 5月17日(月) 第2面の全景・個別遺構の写真撮影及び平面図作成。
- 6月6日(水) 第3面の全景・個別遺構の写真撮影及び平面図作成を開始。
- 13日(月) 第4面の全景・個別遺構の写真撮影及び平面図作成。
- 21日(火) 第5面の全景・個別遺構の写真撮影及び平面図作成。
- 28日(火) 第6面の全景・個別遺構の写真撮影及び平面図作成。
- 7月1日(金) 第6面下のトレンチ調査を実施。調査地平場の地形図測量。
- 3日(金) 調査区西壁・南壁土層堆積の写真撮影及び土層断面図を作成。
- 7日(木) 現地調査終了。調査関係各方面に発掘調査終了の旨を連絡して機材撤収。

2. 測量軸の設定

調査にあたって使用した測量軸の設定には、図2に示したように国土座標の数値を用いており、測量方眼軸は調査区の軸方向にほぼ平行して基準の南北軸を設けた。測量軸の設定には調査地西側を南北に走る道路面上に鎌倉市道路管理課が設定した市4級基準点（第IV座標系）の関係から開放トラバース測量により算出して測量基準点にあたるA-4杭とF-4杭をそれぞれ設置した。さらに測量軸は地形に合わせて東西軸と南北軸をそれぞれ2m方眼による軸線を配し、南北軸にはA～Fのアルファベットの名称、東西軸に1～7の算用数字をそれぞれ付してグリッド設定を行った。

現地調査で使用した国土座標は、日本測地系（座標AREA9）の国土座標数値であった。そこで整理作業の段階で国土地理院が公開する座標変換ソフト『web版TKY2JGD』によって世界測地系第IX系の座標数値に準じて算出し直した数値を図3に示した。なお、調査区は世界測地系でX-74.950～75.970、Y



A-4杭
 X -74960.158
 Y -26230.875

F-4杭
 X -74963.483
 Y -26240.303

C-1杭
 X -74955.862
 Y -26236.637

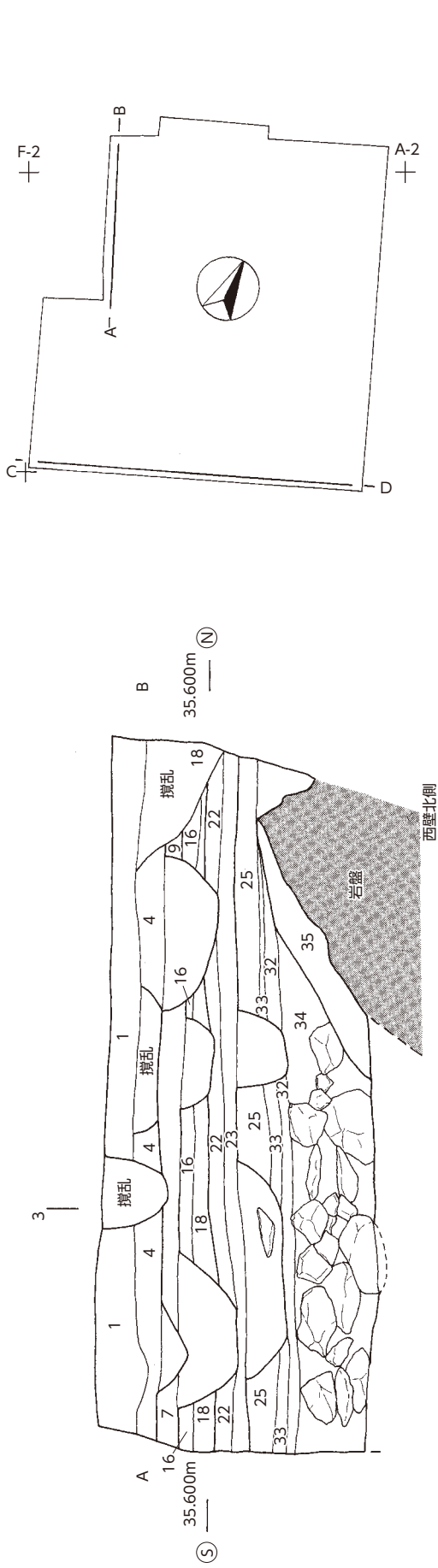
C-7杭
 X -74967.219
 Y -26232.662

P112
 X -74995.5493
 Y -26320.0768

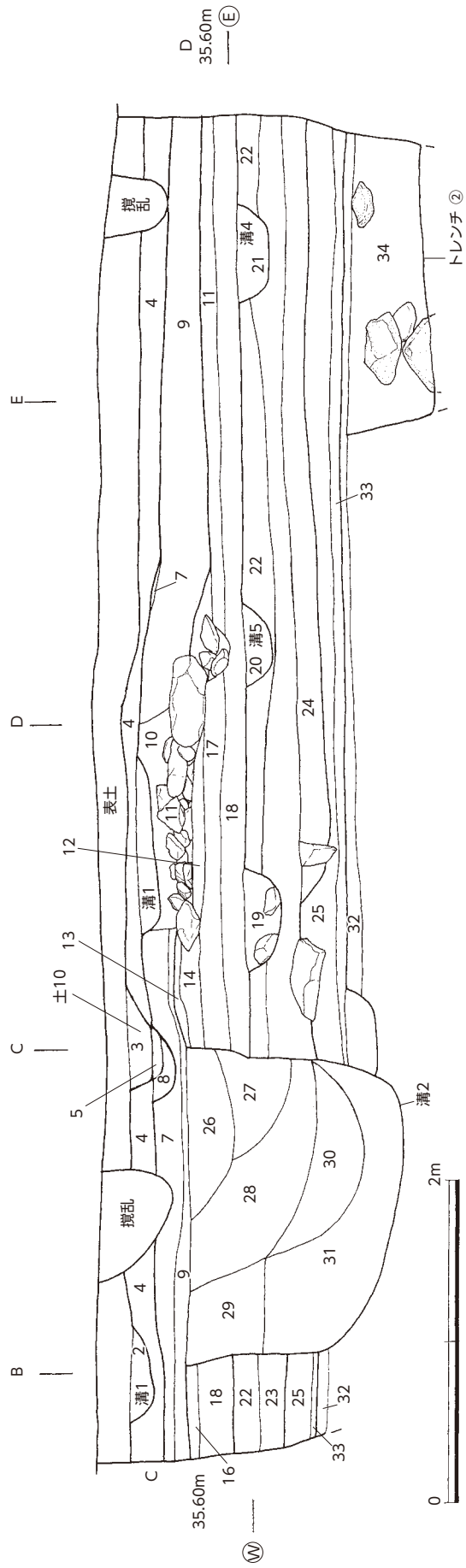
P111
 X -74995.7530
 Y -26304.7562

世界測地系に交換したもの

図3 国土座標とグリッド設定図



▲調査区西壁土層堆積図



▲調査区南壁土層堆積図

図4 調査区壁土層断面図

ー 26. 230 ～ 26. 240 の区域内に位置している。海拔高の原点移動については、本調査地点南方の鎌倉税務所西側で、松谷寺ヶ谷開口部付近の地点に設置されている鎌倉市3級水準点 (B M . 327 = 海拔標高 15. 589 m) から調査地点のグリット A - 4 杭と F - 4 杭上へ仮水準点を移設した。なおグリットの南北軸方位は N - 19° 26' 35" - W である。

3. 層序と生活面

調査地点における現地表の海拔標高は 36. 40 ～ 60m と東から西へ向かって緩やかに傾斜しているがほぼ平坦な宅地となっている。調査区内の堆積土層は概ね 10 層に区分され、少なくとも 6 時期の遺構面が検出されている (図 4) 。調査で確認した土層は厚さ 20 ～ 30cm ほどの現代客土層の表土を除去すると、遺物包含層を挟まずにすぐ小土丹塊や鎌倉石の破碎粒を敷き詰めた生活面 (第 4 層・地行層) と、それに伴う遺構が確認されたので第 1 面として調査を実施した。この面は海拔高約 36. 20m を計る。

第 2 面は第 7・9 層の上面に相当し、第 4 層とは薄い帯状の炭化物層の間層を挟んで認められた地行層である。この生活面では土坑・溝・ピットなどが検出され、海拔高 36. 10m 程である。第 7・9 層を除去して表出したのが第 3 面である。この面は小土丹塊や鎌倉石を破碎したような粗砂、さらにかわらけ小片を突き固めて版築した整地層で海拔高 36. 00m 付近である。検出した遺構は L 字に曲がった溝と土塁状の盛土がセットをなす区画施設、土坑、ピットなどがある。

第 4 面は第 22 層の茶褐色砂質土で小土丹角と粗い山砂を混入した整地層で生活面は海拔高 35. 60m 付近で確認された。その下の第 5 面は面上に堆積した厚さ 10 ～ 20cm の遺物包含層 (第 23 層) を取り除いた海拔高 35. 40m 前後で確認された。第 6 面は海拔高 34. 90m で確認され、礎石建物、石切場跡、土坑、ピットなどを検出した。礎石建物跡は調査区南端で柱間東西二間分が検出されただけで、南側は調査区外へ伸びている。石切場跡は調査区北側で岩盤削平面から石を切り出す際の直線的な溝痕跡が確認されている。

なお、第 6 面の調査終了後に調査区西壁の岩盤落ち込み部 (トレンチ 1) と、調査区南西隅 (トレンチ 2) にそれぞれトレンチを設定し遺構確認を実施した。その結果、トレンチ 1 の岩盤は急な角度で南へ傾斜し、人為的な痕跡は見受けられず、またトレンチ 2 からは岩塊が発見されたが無遺物層で生活の痕跡は認められなかった。第 6 面以下は崩落による完全な自然堆積層の地形であることが判明した。

《調査区南壁・西壁土層注記》

第 1 層 表土

第 2 層 茶褐色砂質土：土丹粒少量、かわらけ片わずかに含む。粘性・縮まりなし。1 と似るが小指大ほどの土丹塊を少量含む。

第 3 層 茶褐色砂質土：鎌石粒多量、土丹塊を少量含む。粘性なし。縮まりやや有り。

第 4 層 茶褐色砂質土：鎌石粒・土丹粒中量、小指大の土丹塊を少量含む。粘性なし。縮まりやや有り。〈第 1 面〉

第 5 層 茶褐色砂質土：土丹塊を少量含む。粘性なし。縮まりやや有り。

第 6 層 茶褐色砂質土：土丹粒、炭粒少量含む。粘性・縮まりなし。

第 7 層 砕いた鎌石による地業層：鎌石を砕いた地業層。粘性なし。縮まり強い。〈第 2 面〉

第 8 層 茶褐色砂質土：鎌石粒多量、土丹粒少量、かわらけ片僅かに含む。粘性なし。縮まりやや有り。

第 9 層 茶褐色砂質土：土丹塊・鎌石塊少量、かわらけ片・炭粒僅かに含む。粘性僅か。縮まりやや有り。

第 10 層 茶褐色砂質土：土丹粒・炭粒少量含む。粘性・縮まり共にやや有り。11・12・17 同様土塁基礎部の土か。

第 11 層 鎌石塊の層：拳大～人頭大迄の大きさの鎌石塊を敷いた層。築地塀の基礎部。

第 12 層 暗茶褐色弱粘質土：鎌石粒を少量、炭粒僅かに含むのみの精良土。粘性やや有り。縮まりあり。土塁の基礎部。

第 13 層 砕いた鎌石による層：第 3 面と築地塀を繋ぐ地業層。粘性なし。縮まり強い。

第 14 層 暗茶褐色砂質土：土丹粒少量、小石を僅かに含むのみの精良土。粘性僅かに有り。縮まり有り。

第 15 層 暗茶褐色砂質土：土丹粒少量、かわらけ片僅かに含む。粘性なし。縮まりやや有り。

第 16 層 砕いた鎌石による地業層：鎌石粒を砕いた地業層。粘性なし。縮まり強い。〈第 3 面〉

- 第17層 暗茶褐色弱粘質土：12に似るが鎌石塊やかかわらけ片を少量含む。粘性やや有り。締まり有り。
築地塀の基礎部最下層。
- 第18層 暗茶灰色弱粘質土：鎌石粒多量、炭粒中量、かわらけ片を少量含む。粘性・締まりやや有り。
- 第19層 暗茶褐色弱粘質土：拳大の鎌石塊を中量、小石・かわらけ片少量含む。粘性・締まりやや有り。
- 第20層 暗茶灰色砂質土：鎌石粒・土丹粒多量、炭粒少量含む。粘性僅かに有り。締まりやや有り。
- 第21層 茶灰色砂質土：かわらけ片少量含む。粘性なし。締まりやや有り。
- 第22層 明茶褐色砂質土：鎌石粒多量、炭粒中量、鎌石塊少量含む。粘性なし。締まり有り。〈第4面〉
- 第23層 暗茶褐色弱粘質土：土丹粒・鎌石粒斑状に中量含む。粘性・締まりやや有り。
- 第24層 茶褐色弱粘質土：土丹粒中量、かわらけ片僅かに含む。粘性・締まりやや有り。溝の覆土。
- 第25層 暗茶灰色粘質土：土丹粒・鎌石粒中量、鎌石塊少量含む。粘性・締まり有り。〈第5面〉
- 第26層 人頭大の鎌石層：人頭大の鎌石で構成されている層。粘性・締まりなし。
- 第27層 拳大の鎌石層：拳大の鎌石多く含む。粘性・締まりなし。
- 第28層 拳大の鎌石層：拳大の鎌石多量に含む。粘性・締まりなし。
- 第29層 大型鎌石層：20～30cm位の鎌石で構成されている層。粘性・締まりなし。
- 第30層 拳大の鎌石層：拳大の鎌石で構成されている層。粘性・締まりなし。
- 第31層 人頭大の鎌石層：人頭大の鎌石で構成されている層。粘性・締まりなし。
- 第32層 暗茶褐色砂質土：当層の礎石建物内には玉砂利が敷き詰められている。その他の場所においては、土丹粒・鎌石粒多量かわらけ片僅かに含む。〈第6面〉
- 第33層 暗茶褐色砂質土：32に似るも、締まりなし。
- 第34層 黄橙色砂質土：大型土丹が多く含まれる層。人為的ではなく自然地層。
- 第35層 黒色粘質土：一般的に中世地山と呼ばれる土。当遺跡ではこの層の上に34の土が覆い被さり、その上から生活面として利用されている事がわかる。

第三章 検出遺構と出土遺物

1. 第1面の遺構と遺物

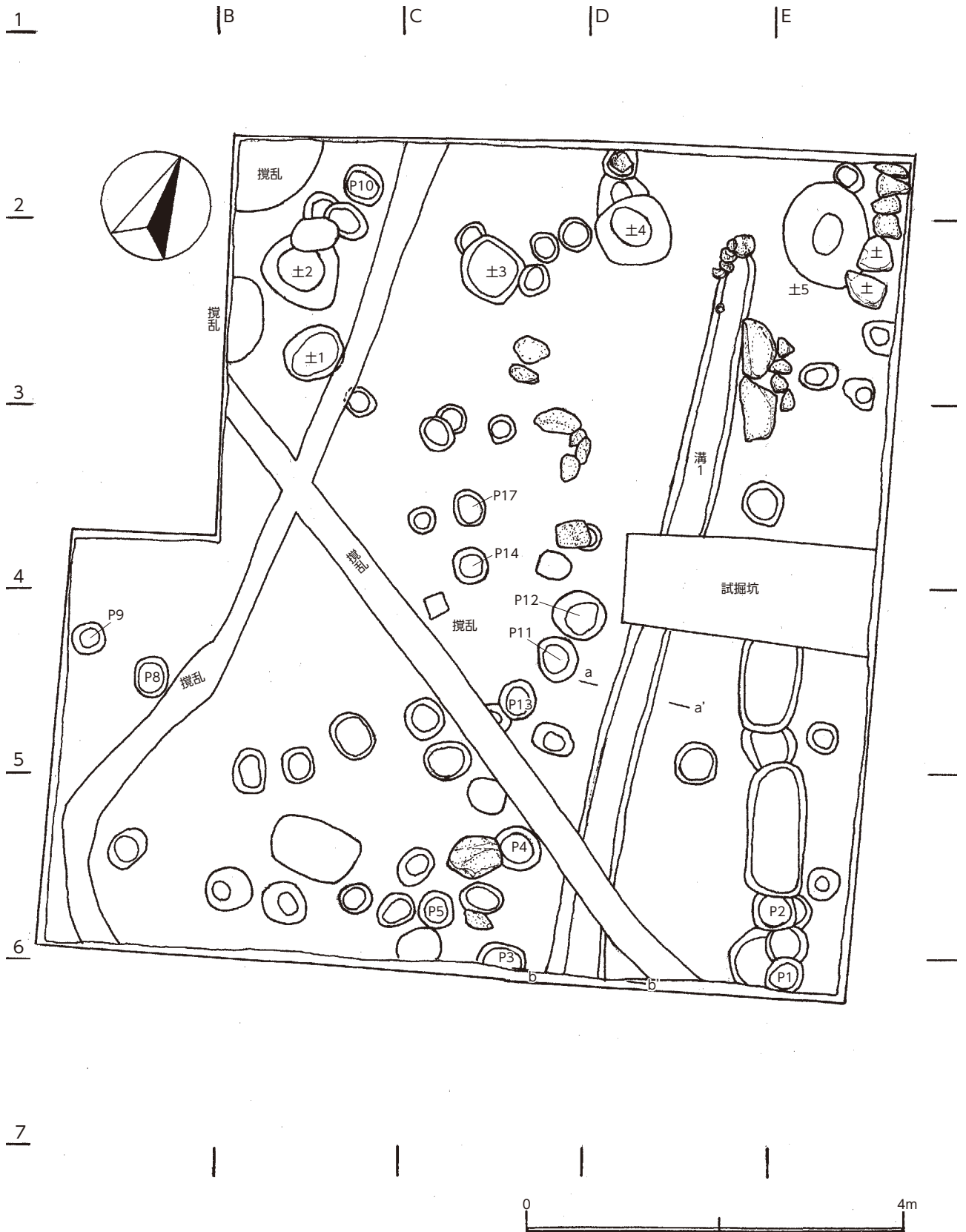


図5 第1面遺構全図

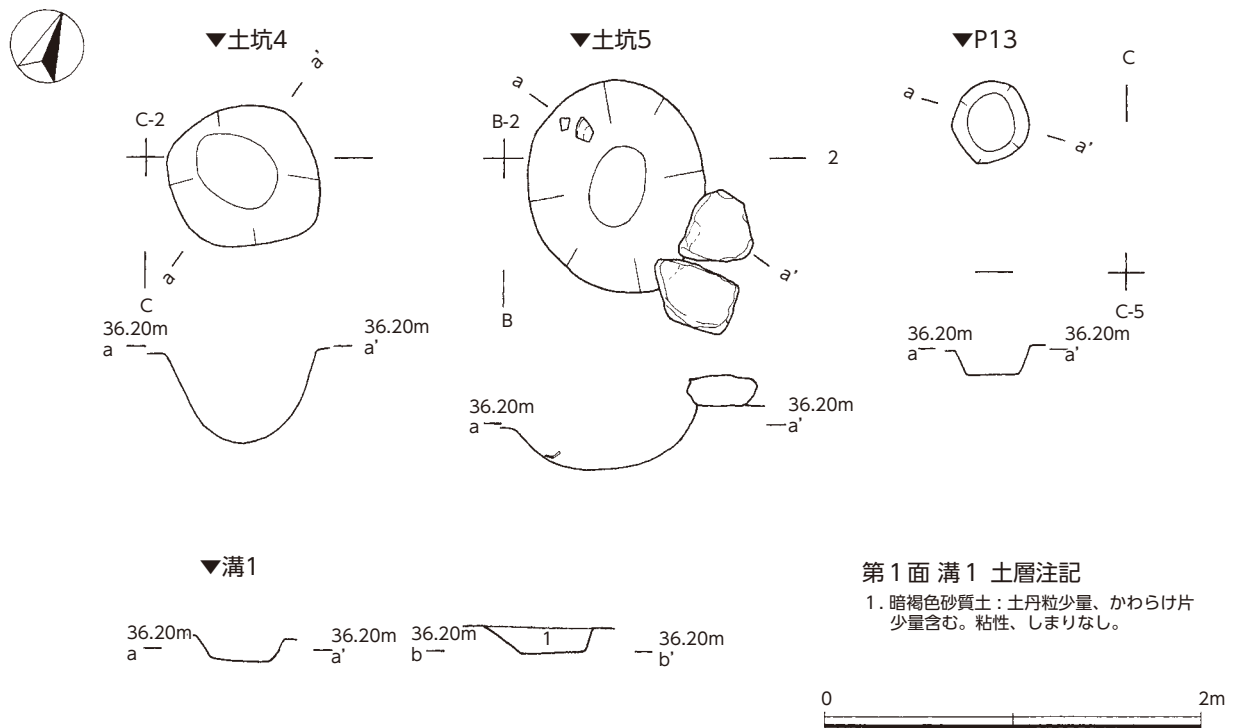


図6 第1面各遺構

第1面は表土の下、調査区北端で海拔高約36.05m、南端で海拔高36.35mほどで南から北へ向かって緩やかな傾斜をもつが、確認した遺構はすべて掘り込みが浅く、後世の削平による結果と推測される。検出した遺構には土坑、溝、ピットなどが認められた。出土遺物はかわらけをはじめ、少量の青磁・白磁の貿易陶磁器、瀬戸・常滑窯の国産陶器などである。

土坑1(図5)：調査区の北西、C-3グリット付近で検出。短辺55cm×長辺65cm×深さ15cm、楕円形の浅い窪みである。覆土は鎌倉石を破碎した粗砂を多く含む茶褐色砂質土、遺物は図示できない小片だけである。

土坑2(図5)：土坑1の北側、E-2グリット付近で検出。短辺57cm×長辺90cm×深さ24cmの不整形円形を呈する。覆土は土丹粒・炭化物を含む茶褐色砂質土、出土遺物はかわらけの細片だけである。

土坑3(図5)：調査区の北東隅、D-2グリット付近で検出。短辺66cm×長辺75cm×深さ23cm、不整形円形を呈する。覆土は小型土丹塊を含んだ茶灰褐色土で、かわらけの細片だけが出土。

土坑4(図5・6)：調査区の北側中央、D-2グリット付近で検出。短辺72cm×長辺74cm×深さ50cm、円形を呈し断面楕円形の土坑である。覆土は茶褐色砂質土で炭化物やかわらけ細片を多く含むもの。

土坑5(図5～7)：調査区の北東隅、E-2グリット付近で検出。短辺94cm×長辺116cm×深さ33cm、楕円形を呈する。覆土は土丹粒、小土丹、かわらけ粒を含む黄茶褐色砂質土の単層で、かわらけを中心に遺物が多めに出土した。なお土坑5の東側に南北方向に人頭大の泥岩と砂岩が並べられているが、後述する溝1と同軸であり、また第2面検出の溝や、第3面検出の築地ともほぼ同軸であることから、区画に関わる石列の可能性も考えられる。出土遺物は図7-1・2は糸切り底で薄手器壁をもつかわらけ大皿、3が瀬戸窯の折縁皿で内底面に櫛搔の回転施文、4が常滑窯の片口鉢Ⅱ類である。

溝1(図5～7)：調査区の東側、Eライン上で検出。主軸方位はN-4°20'-Wを測る。溝の南側は調査区外へ展開するが、確認された長さは796cm×幅50～57cm×深さ約16cmである。覆土は土丹粒・かわらけ片を少量含むしまりの弱い暗茶褐色砂質土が堆積する。前述した土坑5の東側で検出された石列

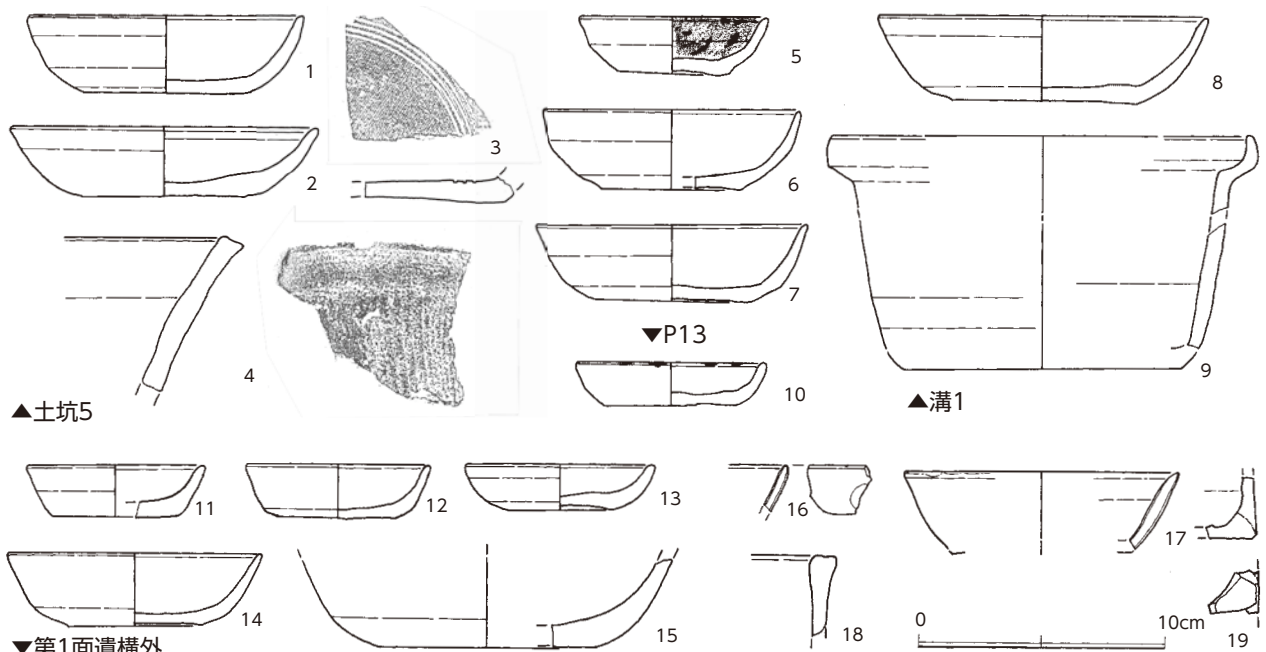


図7 第1面出土遺物

と同一の軸線を持っており、区画に関わる遺構と考えられる。出土遺物は5～8が糸切底のかわらけ小・中・大皿ですべて薄手器壁による丸深器形の資料、9は瀬戸窯行平鍋である。

ピット(図5・7)：この面からはピットが多数確認されたが、いずれも浅い掘り方で異なる時期が混在しており、柱並びの確かなものはなく建物を復元するには至っていない。各ピットの覆土は茶褐色や茶灰褐色砂質土が多く、上部を後世に削平されているために単一層である。P13から10のかわらけ小皿が出土した。

第1面遺構外出土遺物(図7)：遺構外とした出土遺物は、ほとんどが遺構確認に伴い出土した資料である。11～15糸切底のかわらけ大小皿で、15は碗に近い特大資料であろう。16が竜泉窯青磁碗、17が白磁口元皿、18・19はかわらけ質土製品で前者が丸いコップ型、後者は板作りで方形状のもの。

2. 第2面の遺構と遺物

第2面は調査区北側で海拔高35.90m前後、南端で海拔高約36.10mで確認できた。第2面の遺構も第1面の遺構と同様、掘り込みが浅いものが多い。検出した遺構は土坑7基・溝2条・ピット9穴などである。遺物はかわらけ皿の他に青磁・青白磁の貿易陶磁器、国産陶器の瀬戸・常滑窯製品、石製品などが出土している。

土坑1(図8)：調査区中央、D-4グリット付近で検出。短辺67cm×長辺80cm×深さ15cm、円形で浅い皿状断面を呈する。覆土は土丹粒・かわらけ粒を少量含む茶褐色土、遺物はかわらけ細片だけである。

土坑2(図8・9・10)：調査区ほぼ中央、C-3グリット付近で検出した土坑で、溝1を壊して掘り込んでいる。規模は短辺111cm×長辺142cm×深さ21cm、楕円形を呈する。覆土は小土丹、炭化物を多く含む暗茶褐色砂質土と底面付近の薄い粗砂粒層の2層に分かれる。遺物は図10-1～3が糸切底のかわらけ大小皿、4が青白磁小壺、5が常滑窯甕の肩部片などが出土した。

土坑3(図8)：調査区北側、B-2グリット付近で溝1を壊して掘り込んだ土坑を検出した。大きさは短辺85cm×長辺103cm×深さ25cm、楕円形を呈した断面皿状の掘り方をもつ。覆土は土丹粒、炭化物を含む茶褐色土、実測可能な遺物は出土していない。

土坑4(図8・9)：調査区北東隅、B-2グリット付近で調査区外に拡がった大型の土坑を検出した。調

査区内の規模は長辺190cm以上、短辺131cm×深さ20cmの浅い皿状断面で楕円形を呈すると思われる。覆土は締まりのない茶褐色土で埋め戻されており、良好な出土遺物はない。

土坑6(図8)：調査区東側、B-3グリット付近で検出。遺構の南側は試掘孔により壊されているが、平面形状は楕円形を呈すると思われる。確認規模は長辺120cm以上、短辺は104cmである。確認面からの深さ30cm、覆土は概ね2層に分かれ上層は土丹粒、炭化物を含む茶褐色土、下層が粗砂粒を多めに含む茶褐色の締まりのない砂質土である。

土坑7(図8・9・10)：調査区北西隅、E-2グリット付近で検出。遺構は調査区外に広がっているため全体の様相は不明である。確認できた規模は一辺1mほどであり、短辺になるものと思われる。断面が掘

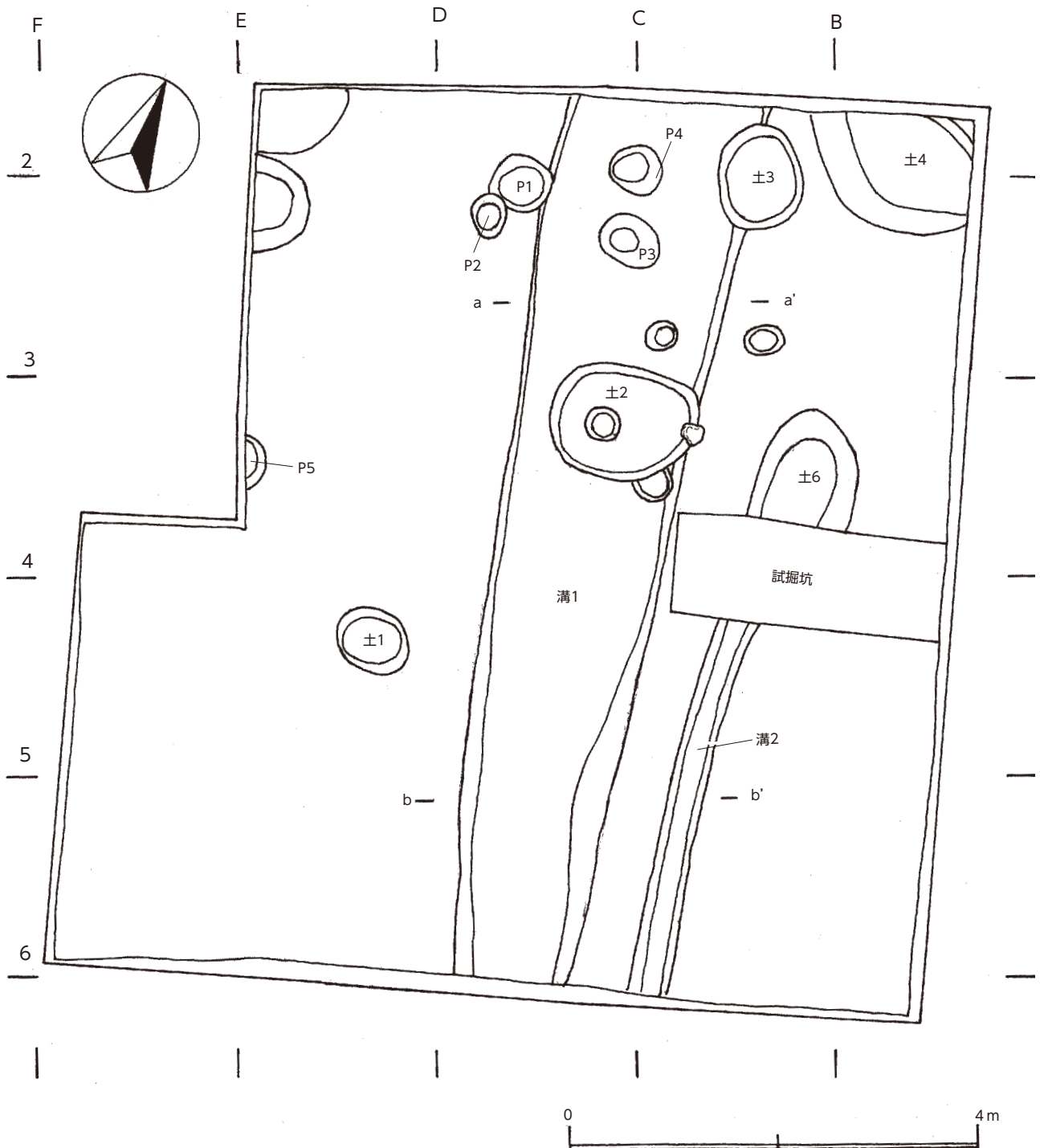


図8 第2面遺構全図

鉢状を呈し深さ35cmで、覆土は小土丹、炭化物、かわらけ粒を含む締めりのない茶灰褐色土である。遺物は6～9の糸切底のかわらけ小中皿が出土した。

溝1(図8・9・10)：調査区の中央、Cライン上で検出。主軸方位はN-8°30'-Wを測る。確認された長さは約880cm×幅203～115cmで南側の溝幅が狭くなっている。深さ15～25cmで北から南へ緩やかに下る。覆土は単層で、炭化物や泥岩粒を少量含むしまりの弱い茶褐色砂質土。出土遺物には10がロクロ整形のかわらけ小皿、11が瀬戸窯折縁皿、12が銅の鋳滓、13が仕上げ砥石である。

溝2(図8・9)：溝1の東側、Bライン上で検出。主軸方位はN-8°-Wを測る。遺構の北端は試掘坑もしくは土坑6により壊され、南側は調査区外へ広がっている。確認された長さは約390cm×幅35～45cm×深さ18cmである。覆土は単層で、砂岩粒を多量に含むしまりのある茶褐色砂質土であるが、良好な出土遺物はない。

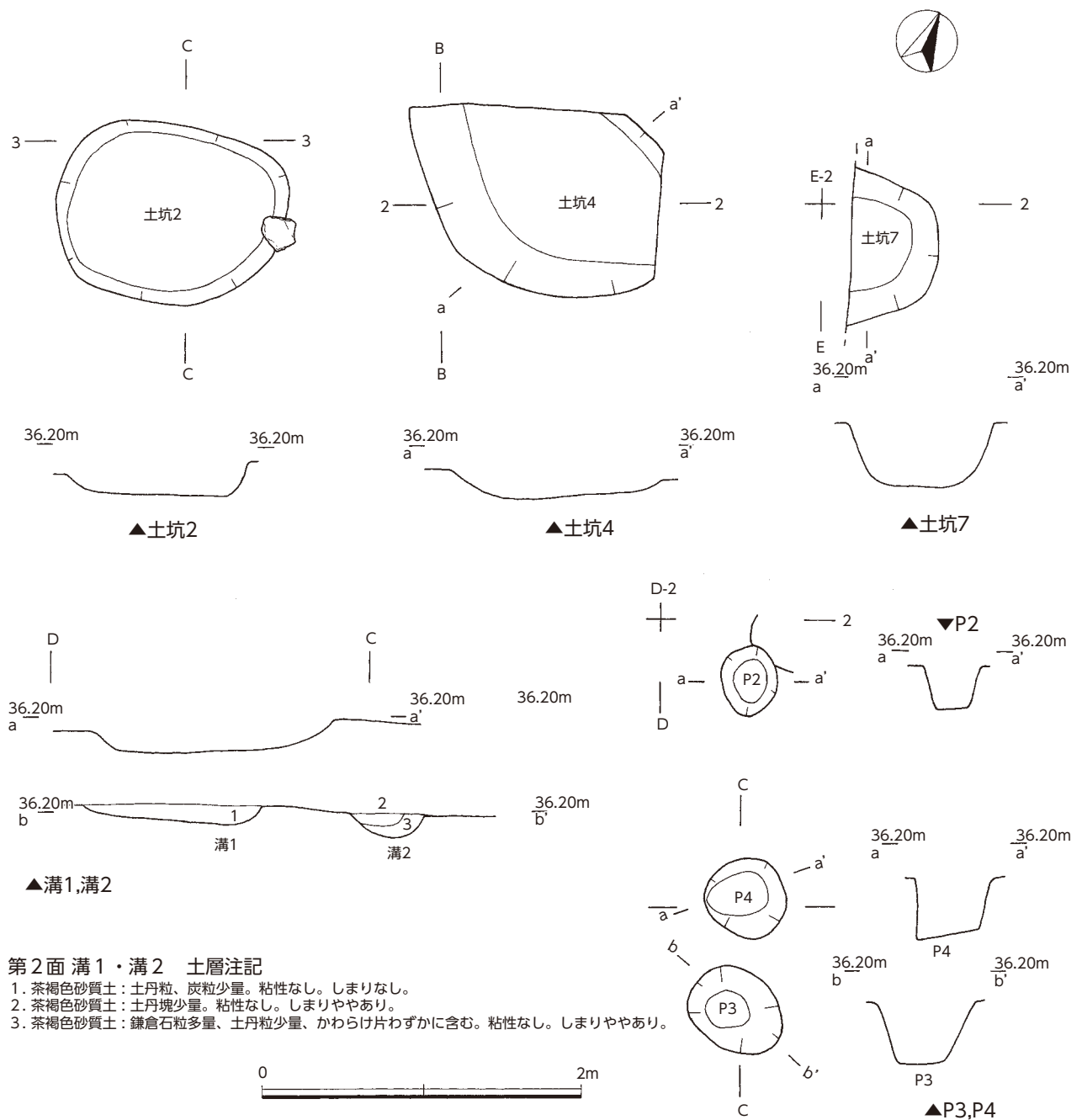


図9 第2面各遺構

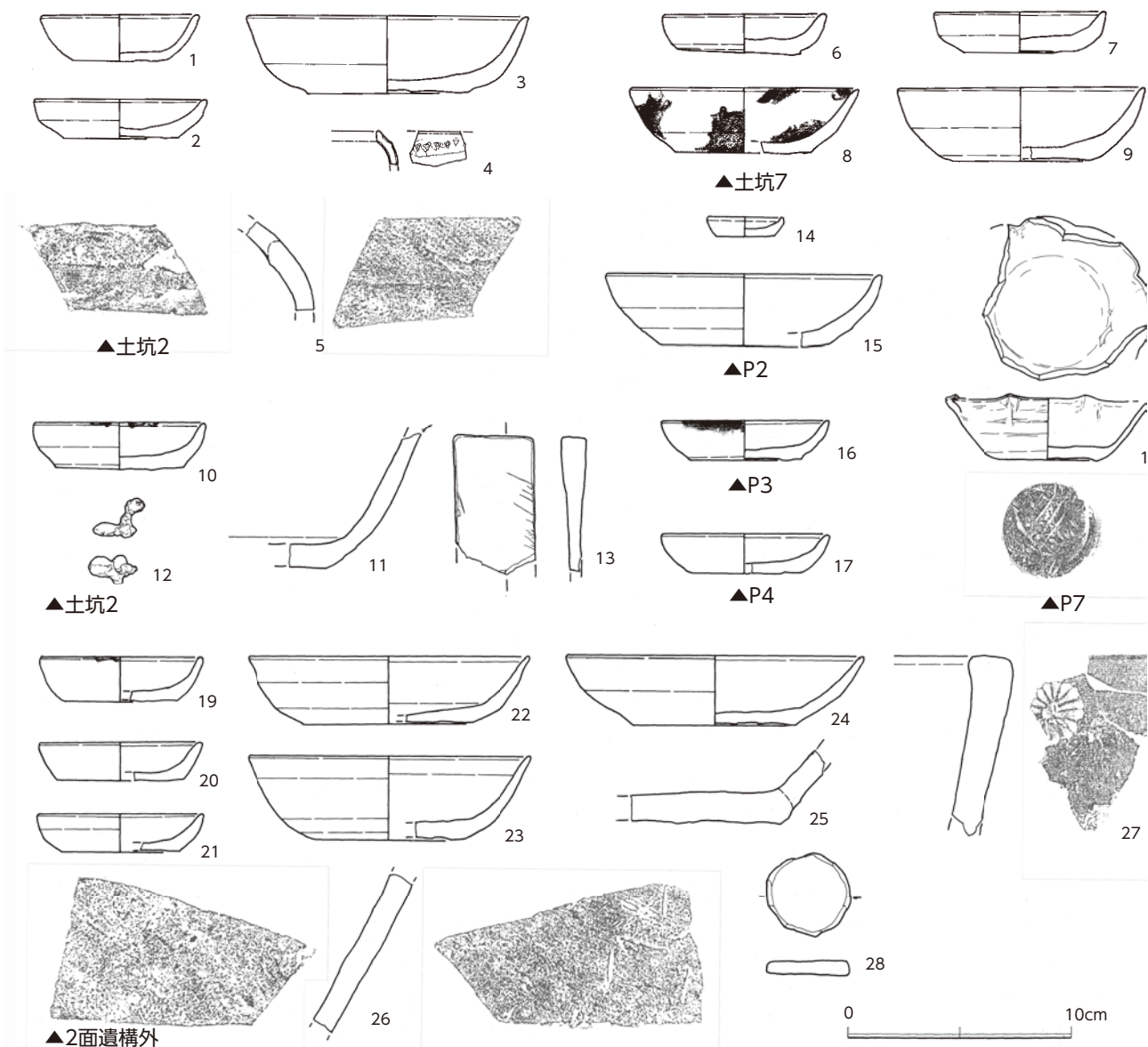


図10 第2面出土遺物

ピット(図8・9)：検出したピットのうち、ここでは実測可能な遺物が出土した4穴について簡単に触れる。ピット2はD-2付近でピット1を壊して検出。短辺34cm×長辺45cm×深さ32cm、平面形状は楕円形を呈する。覆土は炭化物、かわらけ粒を含む茶褐色土の単層で、遺物は14が内折れ糸切底かわらけ小皿と15のかわらけ大皿が出土。ピット3・ピット4は溝1を壊し掘り込む。ピット3は短辺48cm×長辺62cm×深さ40cm、楕円形を呈する。覆土は暗茶褐色土の単層で、遺物は16の糸切底かわらけ大皿である。ピット4はピット3の北側で検出。短辺49cm×長辺52cm×深さ38cmで不整円形を呈し、覆土は茶灰褐色土の単層で、17のかわらけ小皿が出土した。ピット7からは18の瀬戸窯入子が出土した。

第2面遺構外出土遺物(図10)：遺構外とした遺物は第1面整地層や第2面の遺構確認に伴う資料も含まれている。19～24は糸切底のかわらけ大小皿、25・26は常滑窯甕、27が瓦質火鉢、28がロクロ成形かわらけ皿の底部を打ち欠いて円盤としたもの。

3. 第3面の遺構・遺物

第3面は調査区北端で海拔高35.75m、南端で海拔高35.95m前後を確認することができた。検出した遺構は土塁状遺構1基・石列遺構1基、土坑6基・溝2条・ピット7穴である。

土塁状遺構(図11・13)：調査区中央で南北方向に検出。主軸方位はN-6°30'-Wを測る。調査区南側では基礎部がしっかりと残存しているものの、北半部は削平され非常に残存状況が悪い。土塁状遺構は幅約130cmであり、長さ約30~50cm、幅約20~30cmの泥岩塊を遺構両端に並べている。泥岩塊は

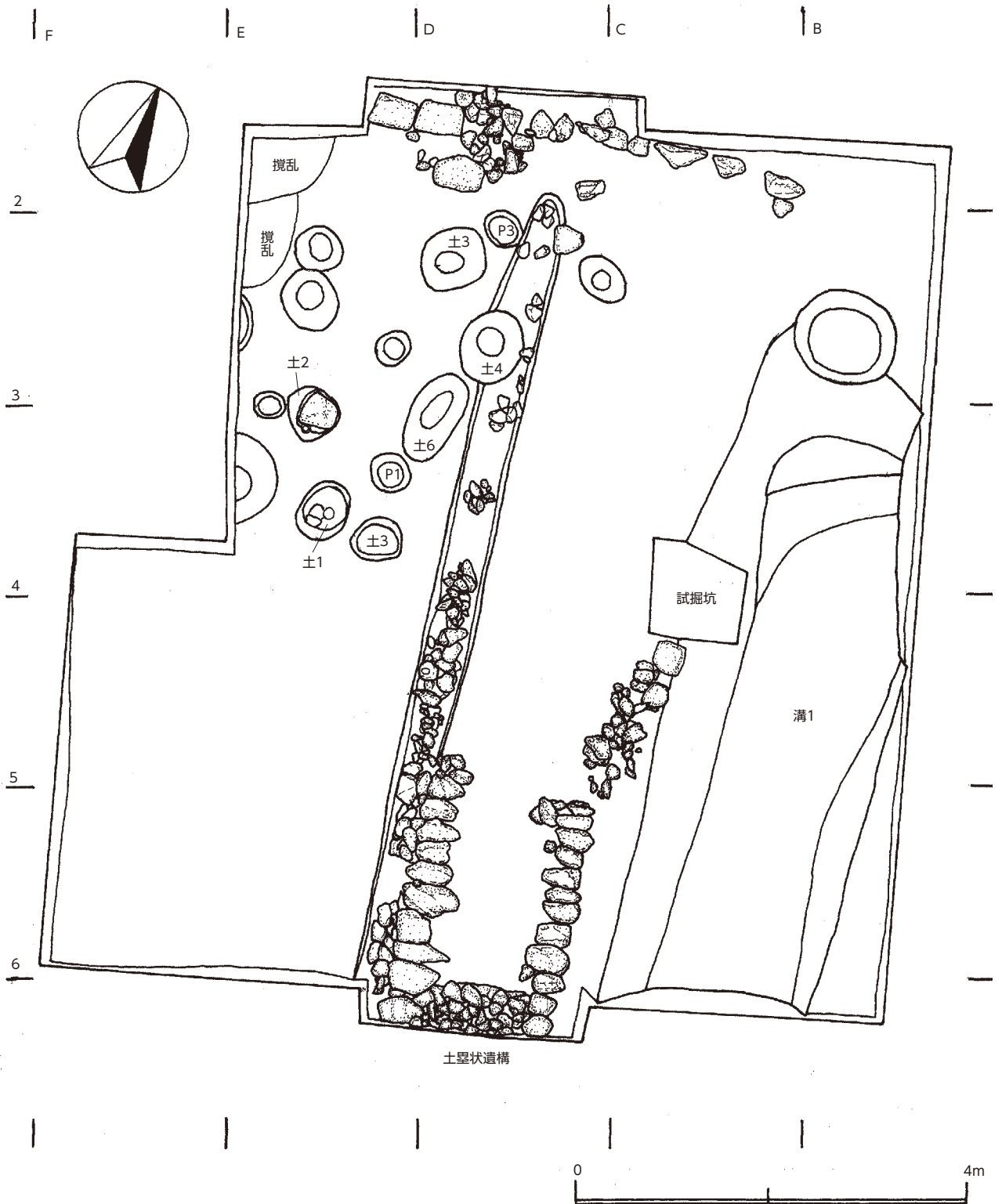


図11 第3面遺構全測図

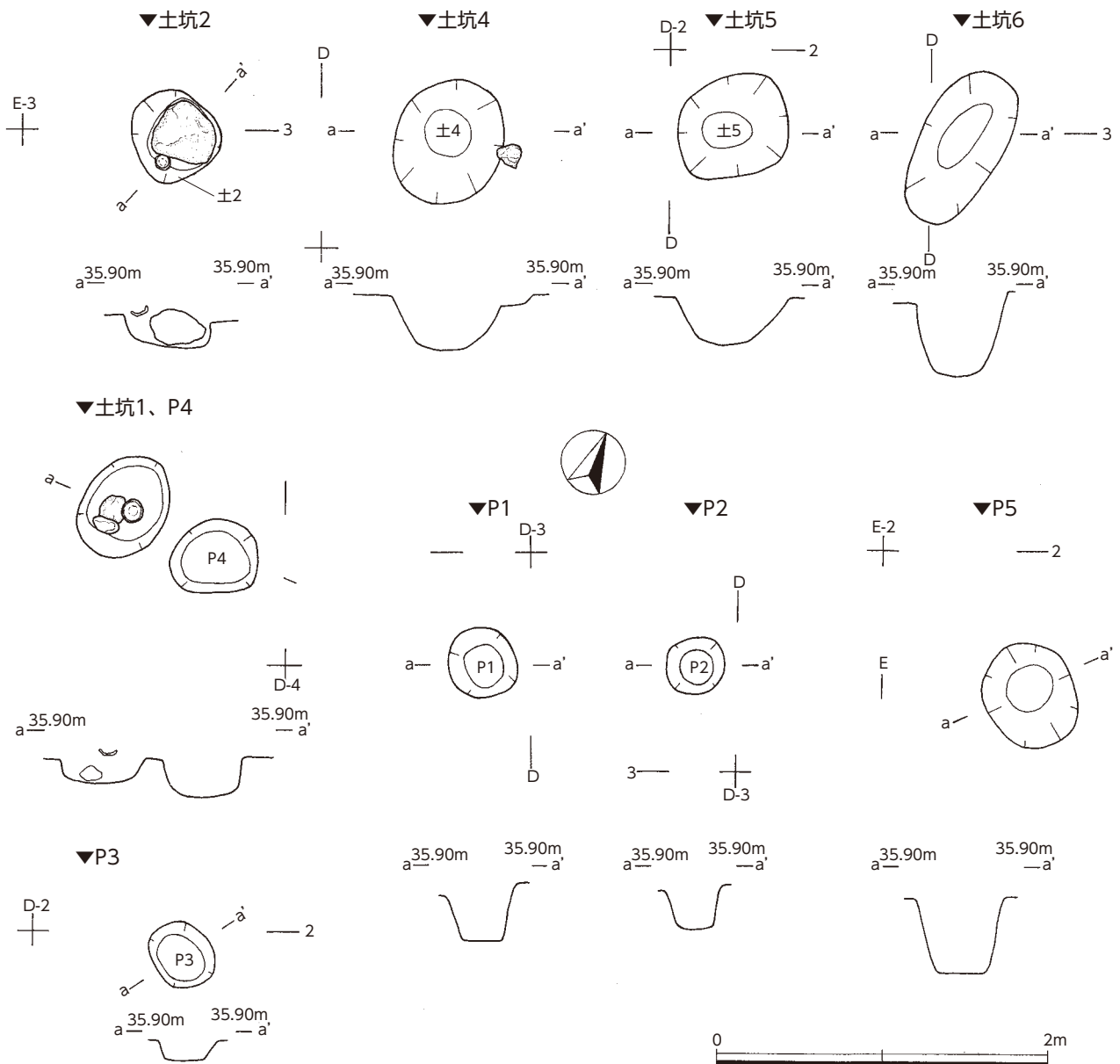


図12 第3面土坑・ピット

外側に面する箇所が整えられている。調査では5・6ラインでこの泥岩列が確認されたが、これより北側では泥岩列は確認できなかった。また泥岩列の内部には泥岩を2段積んだ高さで一度破碎した泥岩塊が充填されているのが確認できた。図11・13では6ライン上で内部の充填状況を表示しているが、調査段階では5ライン上までこのような状況であったことが確認できた。また基礎部の外側には小型の泥岩塊で補強されている痕跡があり、最低一度は修繕されたことが確認できた。なおこの遺構の西側には同じ主軸方位をもつ溝1が検出されているが、この溝の東肩に土塁状遺構の基礎の外面を合わせている状況から推測すると、この遺構に伴う堀のような機能を有する溝ではないかと考えられる。また溝1内には補強に使われた泥岩塊が混入しており、溝1は一度目の修繕の際に埋められたと考えられる。次に本遺構の長さについてであるが、西肩に位置した溝1が本遺構に伴うものであれば、本遺構は2ライン上から南へ延びることになり、調査区内で確認された長さは約8.7mになる。2ラインより北側では溝1と直行する石列遺構1が検出されており、これより北側までは当遺構は拡がらないと思われる。

本遺構に伴う遺物は図15-13～15である。13・14は糸切底でロクロ成形のかわらけ大小皿、15は常滑窯甕の底部片である。

石列遺構 1(図 11・14) 調査区の北側、2ライン付近で南北方向に検出。遺構の大半が調査区外であり、具体的な性格は掴みきれなかった。石列を構成する石は砂岩が主体であり、中には整形した砂岩も含まれていた。土塁状遺構とはほぼ直行するかたちになっており、その関連から、同じく土塁のような基礎か、もしくは土塁の内外をつなぐ通路であった可能性も考えられる。

土坑 1(図 11・12)：調査区の中央より西側、D-4グリット付近で検出。短辺51cm×長辺67cm×深

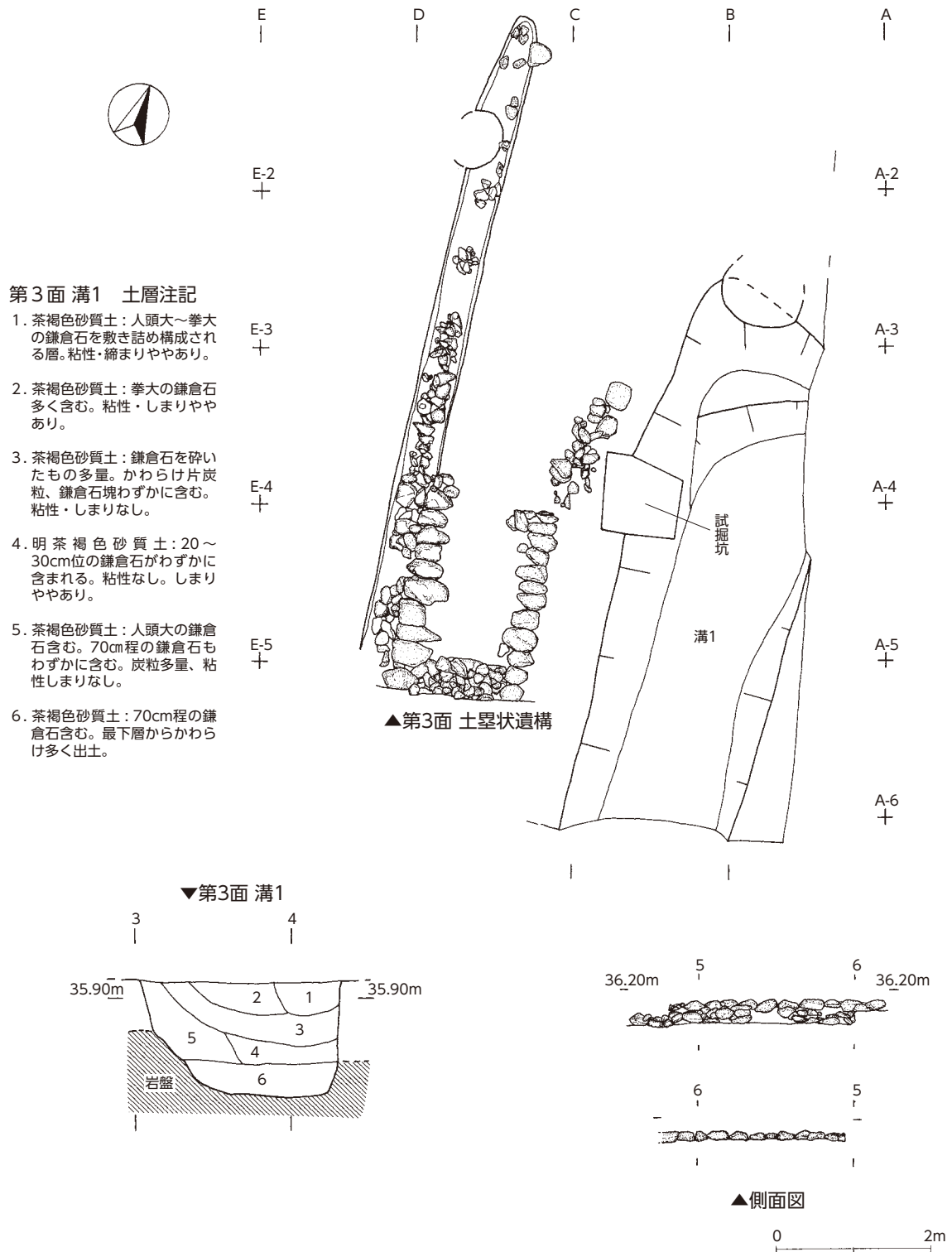


図 1 3 第 3 面土塁状遺構・溝 1

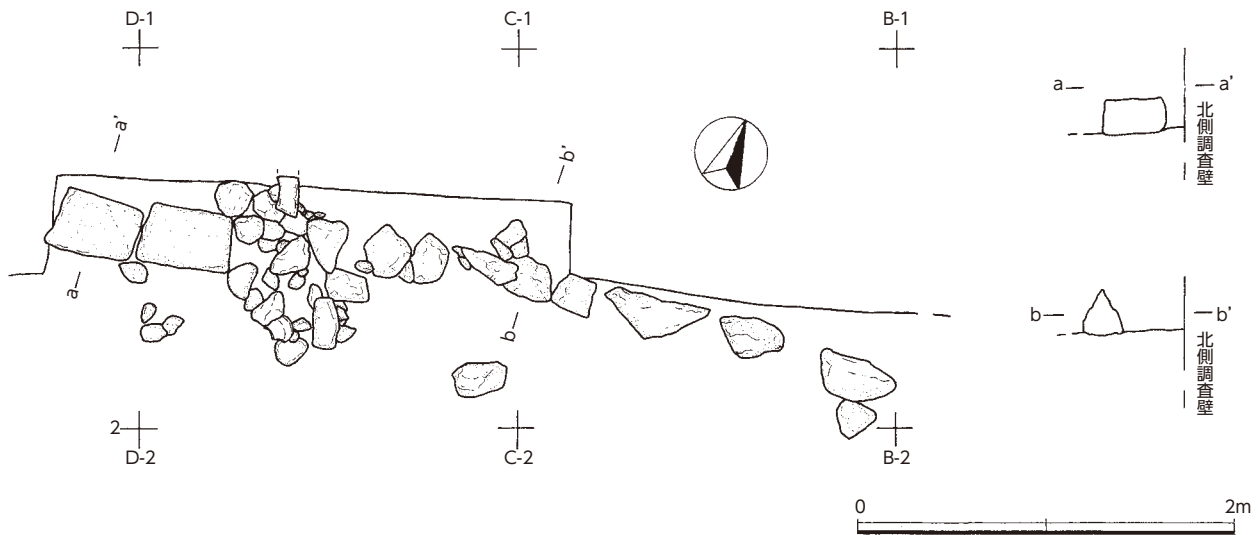


図14 第3面石列遺構

さ17cm、楕円形を呈する。覆土は茶褐色土であり、遺物は図15-1のかわらけ大皿が出土した。

土坑2(図11・12)：土坑1の北側、D-3グリット付近で検出。短辺51cm×長辺54cm×深さ18cm、不成形な円形を呈する。遺構内に人頭大の泥岩塊が確認できたが、人為的な整形はされておらず、投げ込まれたものと考えられる。覆土は茶灰褐色砂質土で、2・3のロクロ成形かわらけ中小皿が出土した。

土坑3(図11)：土坑1の東側、D-4グリット付近で検出。短辺45cm×長辺53cm×深さ22cm、楕円形を呈する。覆土は暗茶灰色砂質土であり、出土遺物は4の糸切底のかわらけ小皿だけである。

土坑4(図11・12)：調査区中央北側、C-3グリット付近で土塁状遺構に伴う溝を壊すかたちで検出。短辺65cm×長辺76cm×深さ35cm、長楕円形を呈する。覆土は炭化物、かわらけ粒を多く含む茶褐色砂質土で、出土遺物は5～8のロクロ成形による糸切底のかわらけ大皿である。

土坑6(図11・12)：土坑2の東側、D-3グリット付近で検出。短辺52cm×長辺103cm×深さ51cm、長楕円形を呈する。覆土は土丹粒、粗砂を多めに含む砂質土で、遺物は9・10のロクロ成形かわらけ小皿が出土した。

溝1(図11・13) 調査区東側、Bライン上で検出。調査区南端から3ライン上までは直線的に延びるが、そこから東側にほぼ直角に曲がり、東側の調査区外へと延びていく。溝幅は東西方向で約220～230cm、深さは132～144cmでわずかであるが、北側へむけ下がっている。また3ラインより北側では岩盤を掘り込み溝が掘削されている状況が確認できた。南北方向の主軸方位はN-6°30'-Wを測る。覆土は拳大～人頭大の泥岩塊が投げ込まれたようなかたちで多量に含まれており、一度に埋め戻されたものと考えられる。また土層観察から浚渫されたような痕跡は確認できなかった。

出土遺物をみると、図16-1～53でロクロ成形かわらけ皿を主体に出土している。1～15のかわらけ小皿は口径7.3～8.0cm、器高2.0～2.6cmと高めの器形で薄い器壁の資料が主体を占めている。16～36のかわらけ中皿の多くは薄手器壁で口径10.3～11.3cm、器高3cm以上と高めものである。37～46はかわらけ大皿で薄手器壁に丸深器形が主体を占めている。かわらけは特に遺構覆土の最下層からまともに出て出土している。47は青磁鎬蓮弁文碗、48は瀬戸窯卸皿、49・50は甕・片口鉢Ⅱ類、51は瓦質黒縁皿、52は磨石で両面に磨滅した痕跡がある。53は銅銭の「元豊通宝」である。

ピット(図11・12)：検出したピットのうち、実測可能な遺物が出土した2穴を含めた4穴についてここで説明をおこなう。ピット1はD-3付近で検出。径は約40cmの円形を呈し、深さは36cmを測る。覆土は茶褐色砂質土の単層である。ピット2はピット1の北側、同じくD-3付近で検出。径は約34cmの円形を呈し、深さは27cmを測る。覆土は炭化物を含む単層、11のロクロ成形かわらけ小皿が出土。

ピット3は調査区北西で検出。ピット2は短辺35cm×長辺42cm×深さ14cm、楕円形を呈する。覆土は茶褐色土の単層である。ピット5はピット3の南側で検出。短辺54cm×長辺66cm×深さ46cm、楕円形を呈し覆土は土丹粒を含む土、遺物は12のかわらけ転用の円盤が出土している。

第3面遺構外出土遺物(図15):16~24・34のかわらけ小皿は口径6.6~7.8cm、器高1.5~2.3cmと一定しておらず、25~27の中皿は薄手丸深であり、28~33は口径13cm以下の大皿である。34は体部を打ち欠き加工を施すもの。35はロクロ成形の白かわらけ皿、36~38は常滑窯甕、39は瓦質火鉢、40はかわらけ質土製品、41は鞆羽口片、42は京都鳴滝産の砥石、43が鉄釘である。

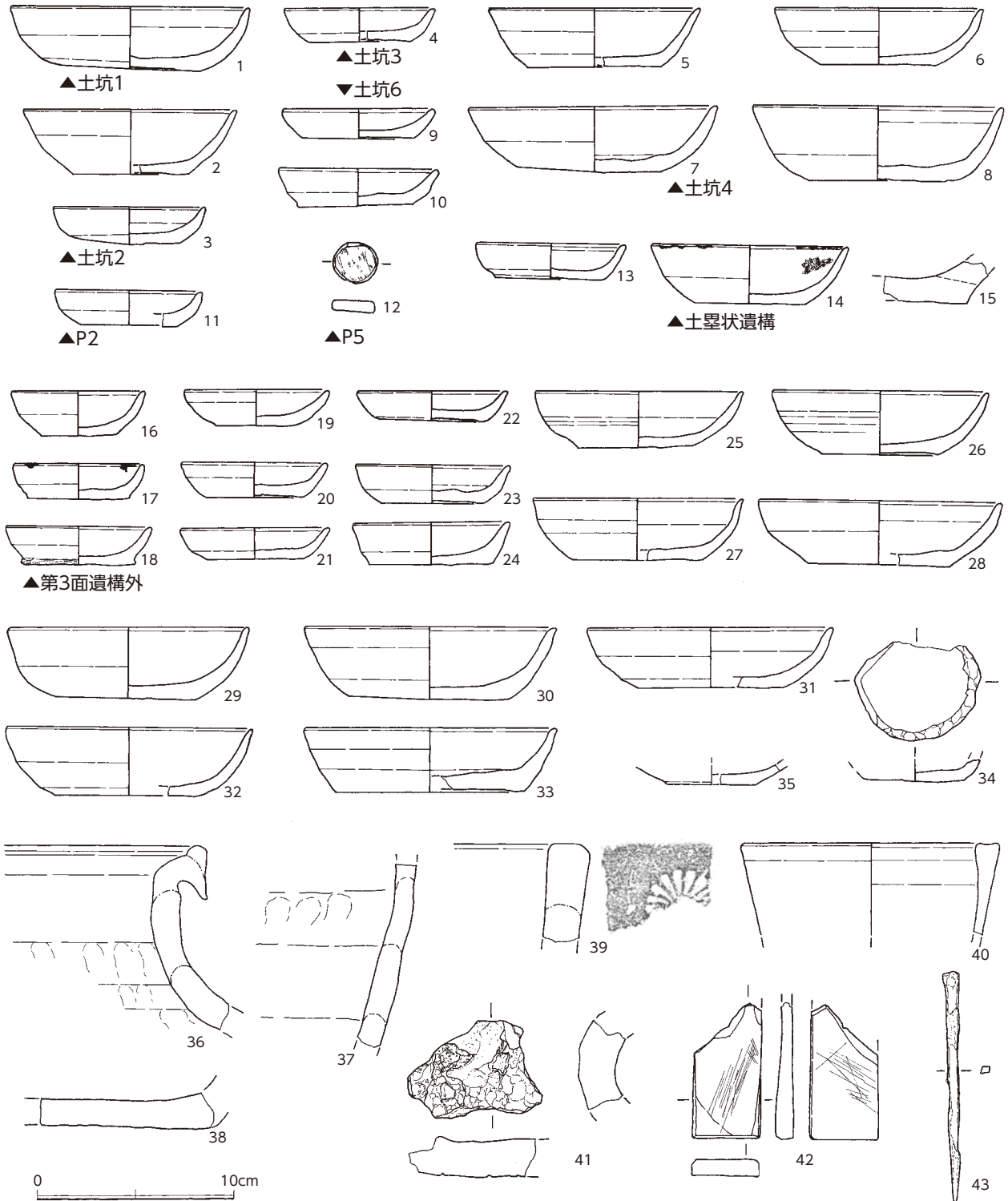


図15 第3面出土遺物

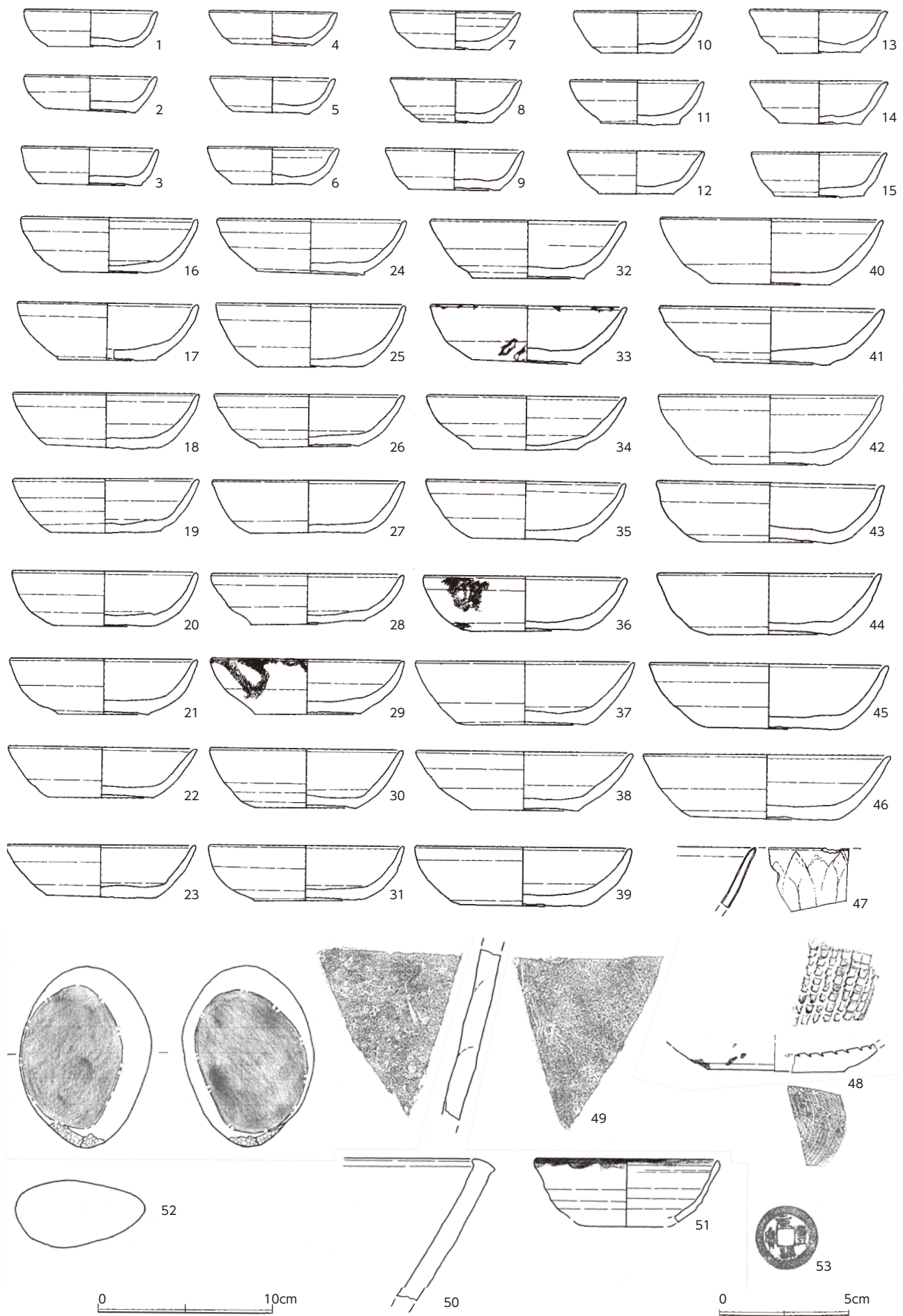


图16 第3面溝1出土遺物

4. 第4面の遺構・遺物

第4面は調査区北側で海拔高35.65m前後、南端で海拔高約35.70mで確認できた。検出した遺構は土坑11基・溝1条・ピット22穴である。遺物にはかわらけ皿の他に貿易陶磁器、国産陶器、瓦質製品、石製品、金属製品、ガラス片などがあげられる。

土坑1(図17・18)：調査区の中央北側、C-2グリット付近で検出。短辺67cm×長辺152cm×深さ25cm、長楕円形を呈する。遺構からは面取りして調整した砂岩が出土したが、これが遺構に伴い据えられたものか廃棄されたものかは不明である。覆土は茶灰色砂質土であり、良好な出土遺物はない。

土坑2(図17・18)：土坑1の北東側、C-2グリット付近で検出。短辺65cm×長辺69cm×深さ

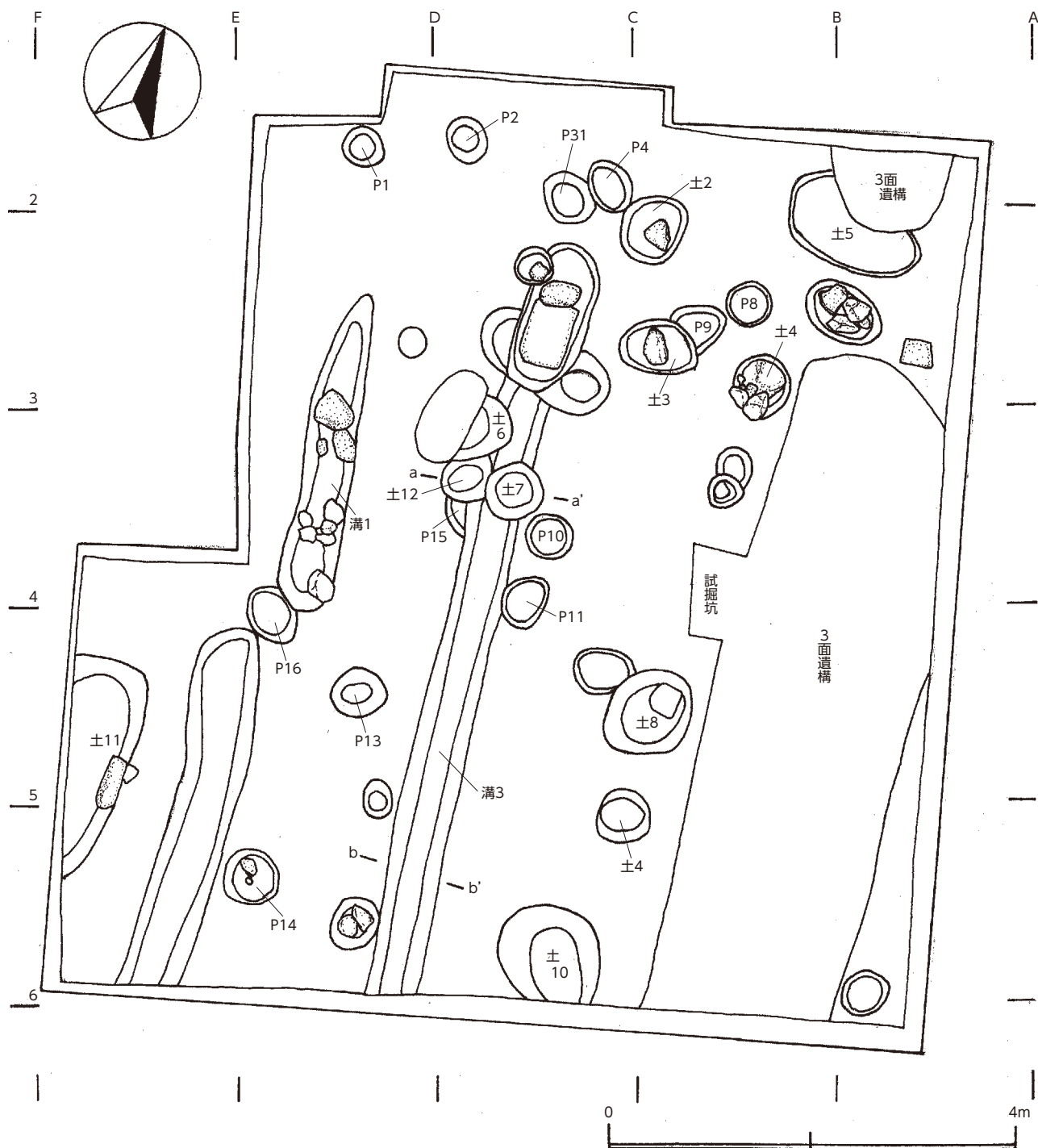


図17 第4面遺構全測図

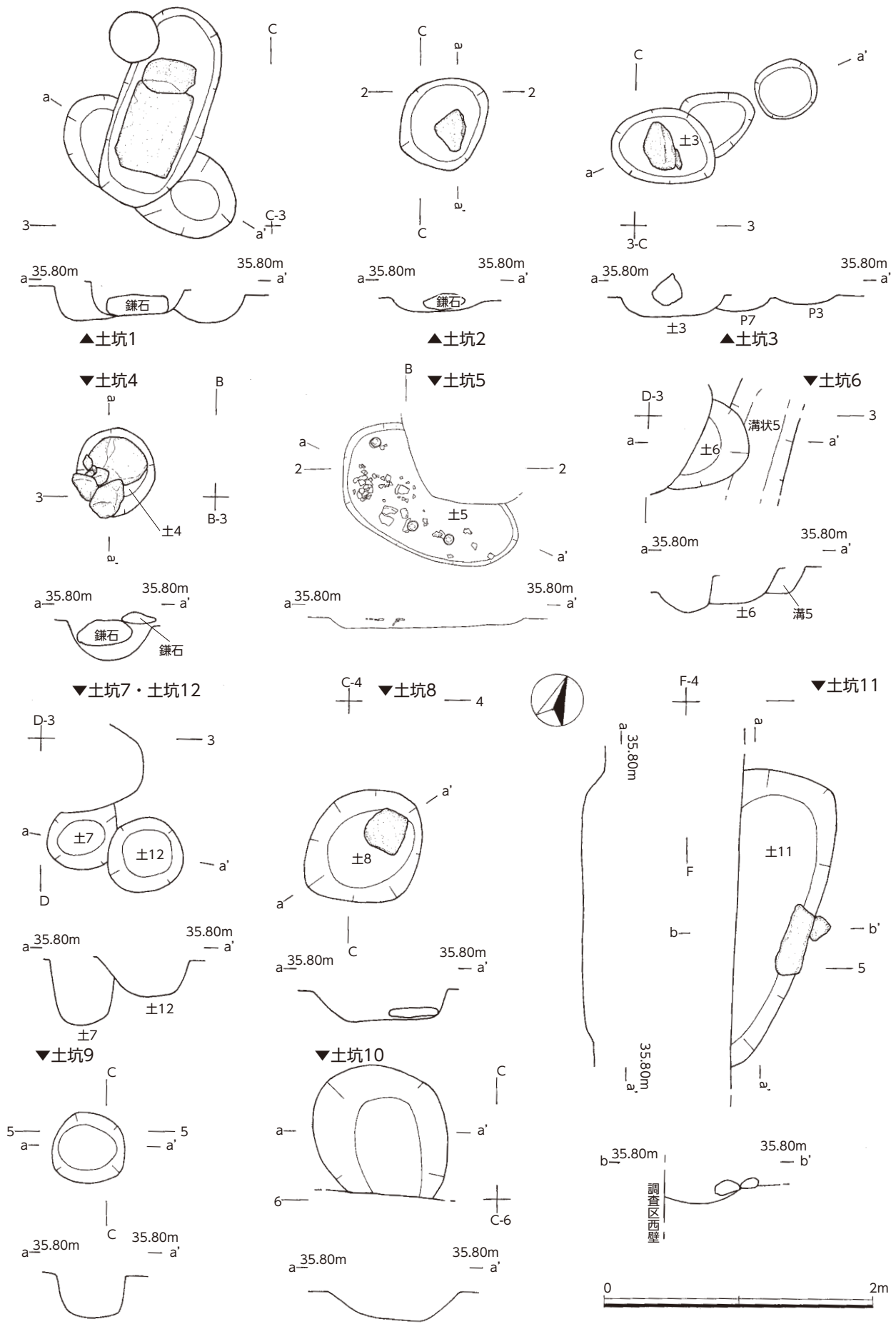


图18 第4面遺構(1)

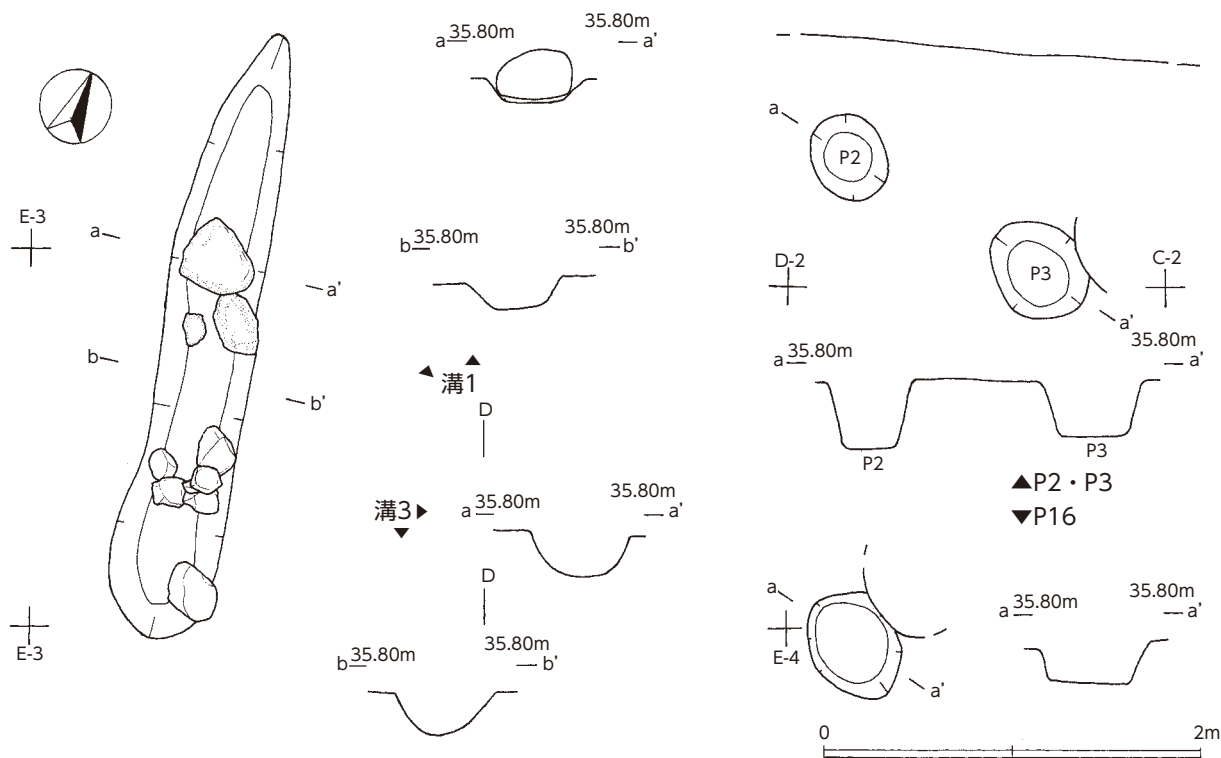


図19 第4面遺構(2)

10cm、不成形な円形を呈する。覆土は土丹粒、粗砂を多く含む単層の土、良好な遺物は出土してない。

土坑3(図17・18)：土坑1の東側、C-3グリット付近で検出。短辺54cm×長辺75cm×深さ16cm、円形を呈する。覆土は炭化物を含んだ茶褐色土、図20-1の平瓦が出土している。

土坑4(図17・18)：土坑3東側、B-3グリット付近で検出。短辺58cm×長辺65cm×深さ29cm、円形を呈する。覆土は炭化物が多い締まりのない砂質土で、覆土の上部は砂岩が充填されて礎石なる可能性のある扁平な砂岩塊もあるが、対になる遺構は検出されていない。出土遺物はかわらけ細片だけである。

土坑5(図17・18)：調査区の北東隅、B-2グリット付近で検出。一部を第2面の土坑4により壊されている。短辺78cm×長辺146cm、深さは8cmと非常に浅く、落ち込み状の遺構である。覆土は茶褐色砂質土で、遺物は2~12はロクロ成形のかわらけ大・中・小皿である。かわらけの多くは覆土の上層から出土している。

土坑6(図17・18)：調査区の中央北側、D-3グリット付近で検出。土坑12・溝3をきる。第3面土坑6に遺構の西側を破壊されているため遺構の規模は不明である。深さは21cmを測る。覆土は砂質土である。

土坑7(図17・18)：調査区のほぼ中央、C-3グリット付近で検出。土坑12・溝3をきる。径約60cm、深さ29cm、円形を呈する。覆土は締まりのない茶褐色砂質土あり、出土遺物は伴っていない。

土坑8(図17・18)：C-4グリット付近で検出。短辺85cm×長辺99cm×深さ24cm、楕円形を呈する。覆土は小土丹、かわらけ粒を含む砂質土であり、良好遺物は出土していない。

土坑9(図17・18)：土坑8の南側、C-5グリット付近で検出。径約50cm、深さ29cm、円形を呈する。覆土は茶灰褐色土で、出土遺物はない。

土坑10(図17・18)：土坑9の南側、C-3グリット付近で検出。遺構の南側は調査区外へ延びる。確認規模は短辺98cm×確認された長辺115cm×深さ21cm、楕円形を呈すると思われる。覆土は炭化物、かわらけ粒を多く含む締まりのない茶褐色砂質土であり、遺物は13が糸切底のかわらけ小皿、14は北部系山茶碗が出土している。

土坑11(図17・18)：調査区西側F-5グリット付近で検出。遺構の西側は調査区外へ延びる。深さ

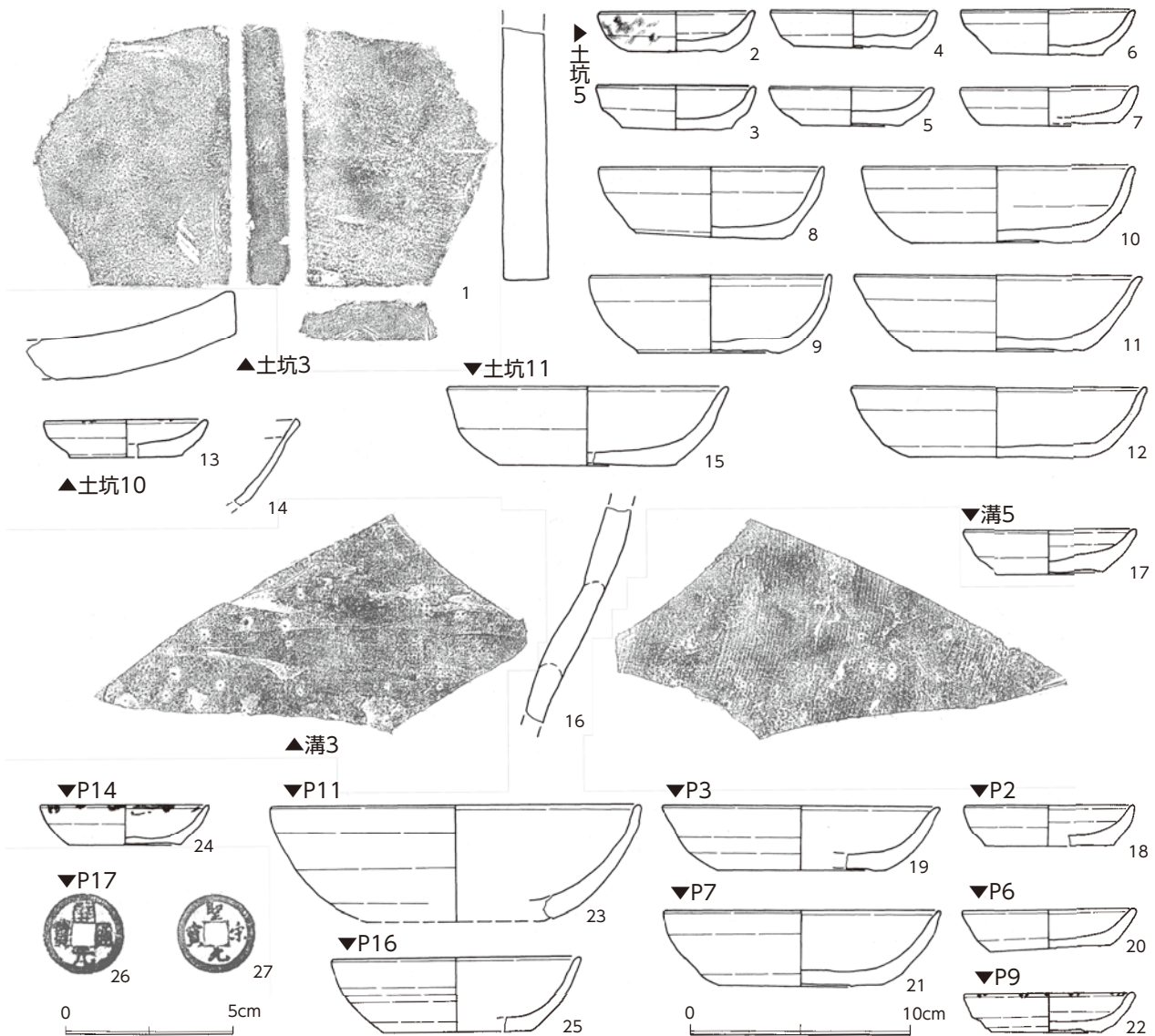


図20 第4面出土遺物(1)

24cmで楕円形を呈すると思われる。覆土は炭化物を含む砂質土であり、15のかわらけ大皿が1点出土した。

土坑12(図17・18)：調査区のほぼ中央、C-3グリット付近で検出。土坑6・土坑7にきられ、溝3・ピット15をきる。深さ48cm、楕円形を呈すると思われる。覆土は茶褐色砂質土であり、良好な遺物は出土していない。

溝1(図17～20)：調査区の中央西側、Dライン上で検出され、ピット16をきる。主軸方位はN-3°30'-Wを測る。長さは約319cm×幅57～35cm×深さ16～12cmで北から南へ下っている。底面から覆土上部に砂岩塊と土丹塊がみられた。覆土は茶褐色砂質土であり、出土遺物は16の常滑甕だけである。

溝2(図17)：溝1の南側、Eライン上で検出。主軸方位は溝1とほぼ同じ軸方位である。遺構の南側は調査区外へ広がっている。確認された長さは366cm×幅67～59cm×深さ15cmほどで浅く、底面は北から南へ向かって緩やかに傾斜する。出土遺物はない。

溝3(図17・19)：溝1・溝2の東側、C～Dライン上で検出。土坑1・土坑6・土坑7・土坑12・ピット11にきられ、ピット15をきる。主軸方位は溝1・2とほぼ同一方向を示している。遺構の南側は調査区外へ広がっている。確認された規模は長さ620cm以上×幅67～59cm×深さ21～24cmで傾斜はほとんどない。覆土は締まりのない茶褐色砂質土であり、出土遺物には17のかわらけ小皿だけである。

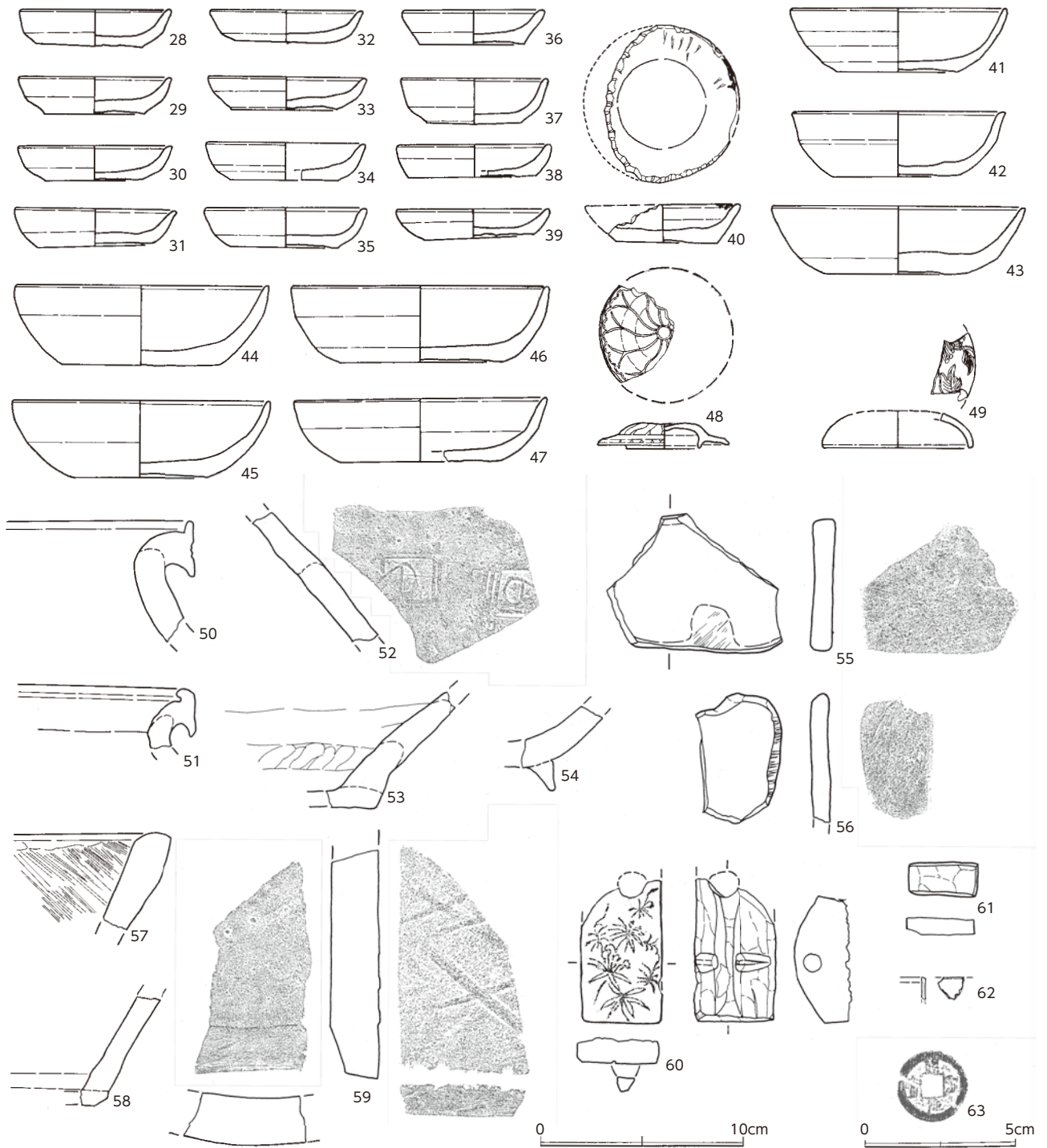


図 21 第4面遺構外出土遺物

ピット(図17・19)：検出したピットのうち、実測可能な遺物が出土したのは□穴であり、そのうち5穴についてここで説明をおこなう。ピット2・ピット3は調査区北側で検出。ピット2は短辺38cm×長辺47cm×深さ37cm、楕円形を呈する。覆土は炭化物を多く含む砂質土の単層であり、18のかわらけ小皿が出土。ピット3は短辺48cm×長辺55cm×深さ30cm、楕円形を呈する。覆土は土丹粒、粗砂を多く含み締まりなく、かわらけ大皿が1点出土している。ピット7・ピット8は土坑3の東側で検出。ピット7は土坑3にきられ全体の形は不明であるが、楕円形を呈していたと思われる。深さは12cmで、覆土は茶褐色砂質土、21のかわらけ大皿が出土。ピット8は短辺42cm×長辺45cm×深さ11cm、ほぼ円形

を呈する。覆土は土丹粒を含む土で、出土遺物はない。

ピット16は調査区の中央西側、溝1にきられるかたちで検出した。短辺43cm×長辺61cm×深さ24cm、楕円形を呈する。覆土は炭化物の多い茶褐色土、25のかわらけ中皿が出土した。

第4面遺構外出土遺物(図21):かわらけはすべてロクロ成形である。28～40は小皿で口径8cm以下、器高2cm以下の資料が主体で、41・42は薄手器壁のもの、43～47の大皿は口径12.7cm前後である。48・49は白磁の小壺・合子、50～53は常滑窯甕、54が片口鉢I類、55・56は常滑甕片の加工品、

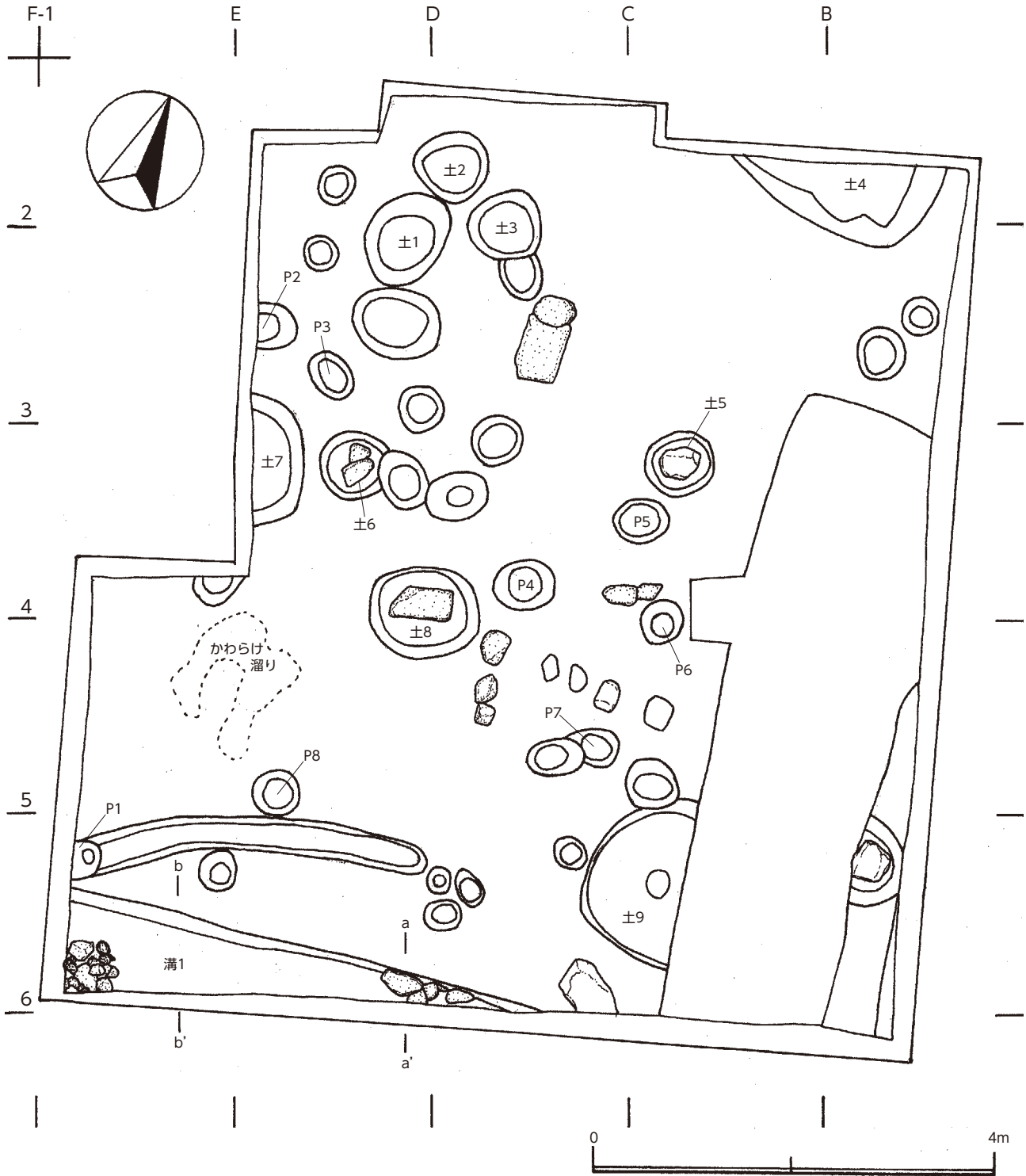


図22 第5面遺構全測図

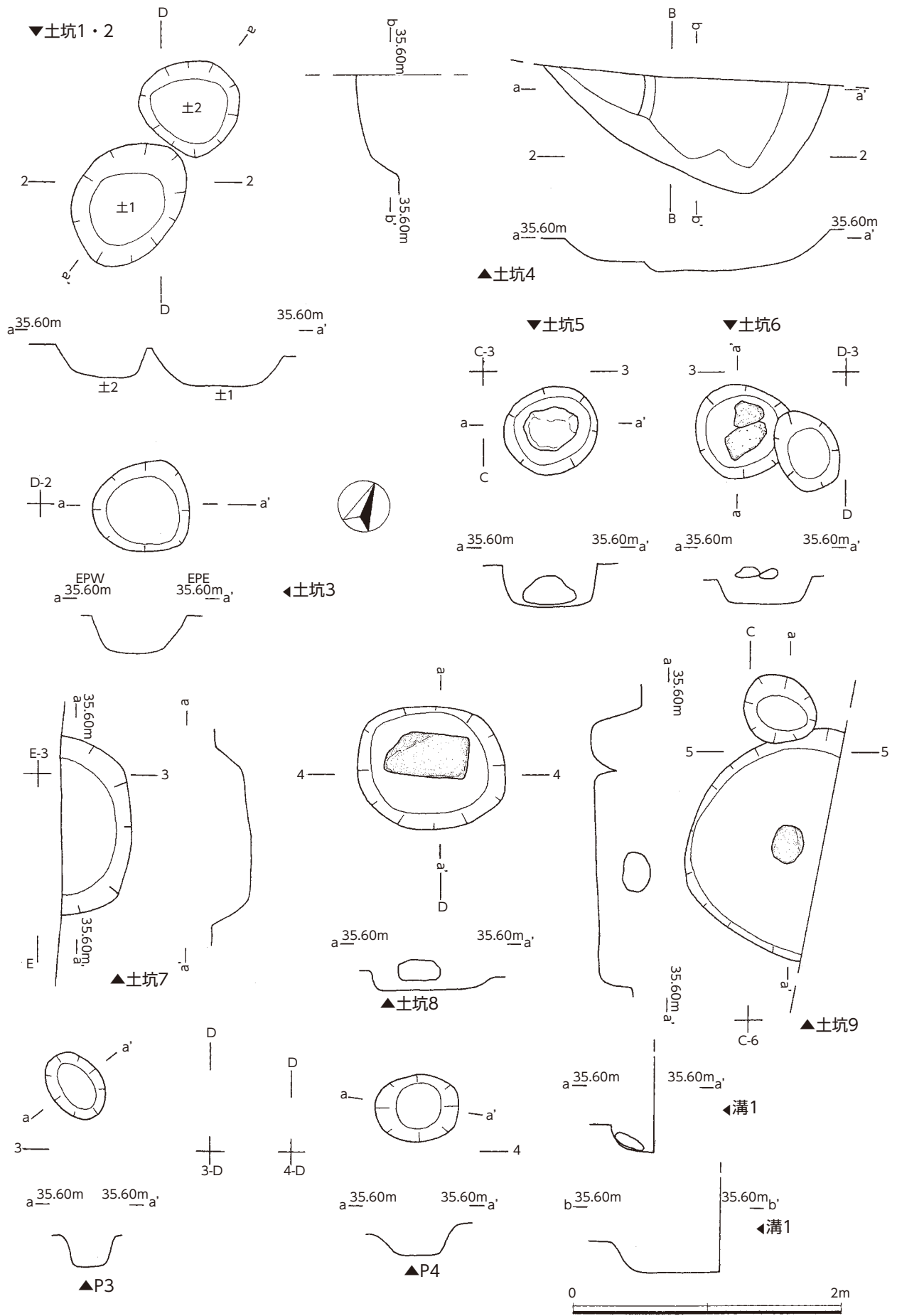


图 2 3 第 5 面各遺構

57・58は鉢形火鉢、59は平瓦、60・61は滑石製品、62はガラス製品、63は銅銭で「紹聖元宝」の北宋銭である。

5. 第5面の遺構・遺物

第5面は調査区北端から南端はほぼ平坦で生活面で海拔高約35.40mを測る。検出した遺構は土坑9基、溝2条、石列・かわらけ溜りが1箇所・ピット30穴ほどである。

土坑1(図22・23)：調査区の北側、D-2グリット付近で検出。短辺76cm×長辺99cm×深さ28cm、楕円形を呈する。覆土は炭化物、粗砂を含む砂質土で、遺物は図25-1の糸切底のかわらけ大皿が出土。

土坑2(図22・23)：土坑1の北側、D-2グリット付近で検出。短辺67cm×長辺72cm×深さ23cm、不成形な円形を呈する。覆土は締まりのない砂質土、2の平瓦1点が出土した。

土坑3(図22・23)：土坑1・土坑2の東側にてピットを壊すかたちで検出。短辺66cm×長辺74cm×深さ28cm、不成形な円形を呈する。覆土は茶灰褐色土であり、3のかわらけ小皿が出土。

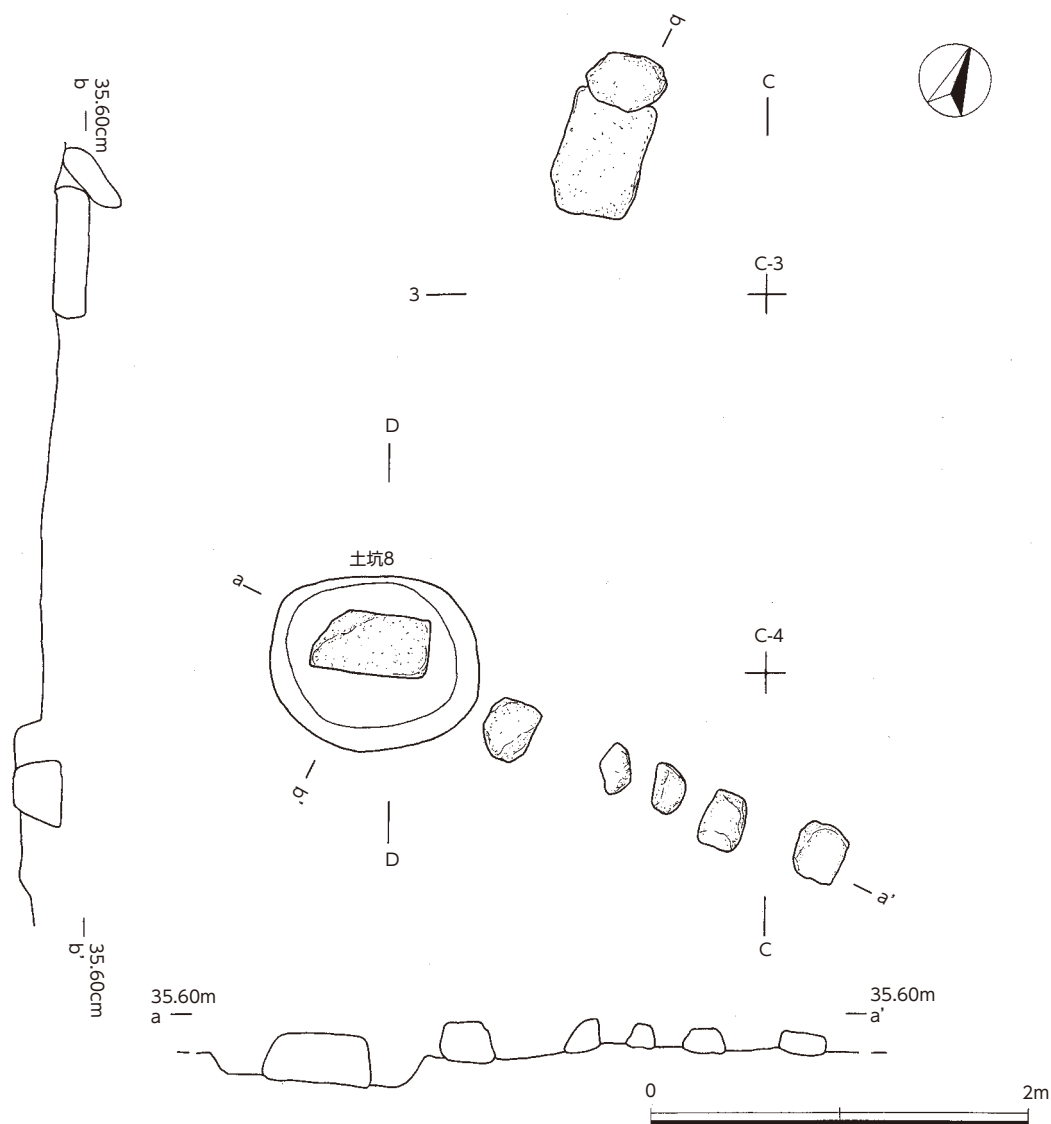


図24 第5面石列

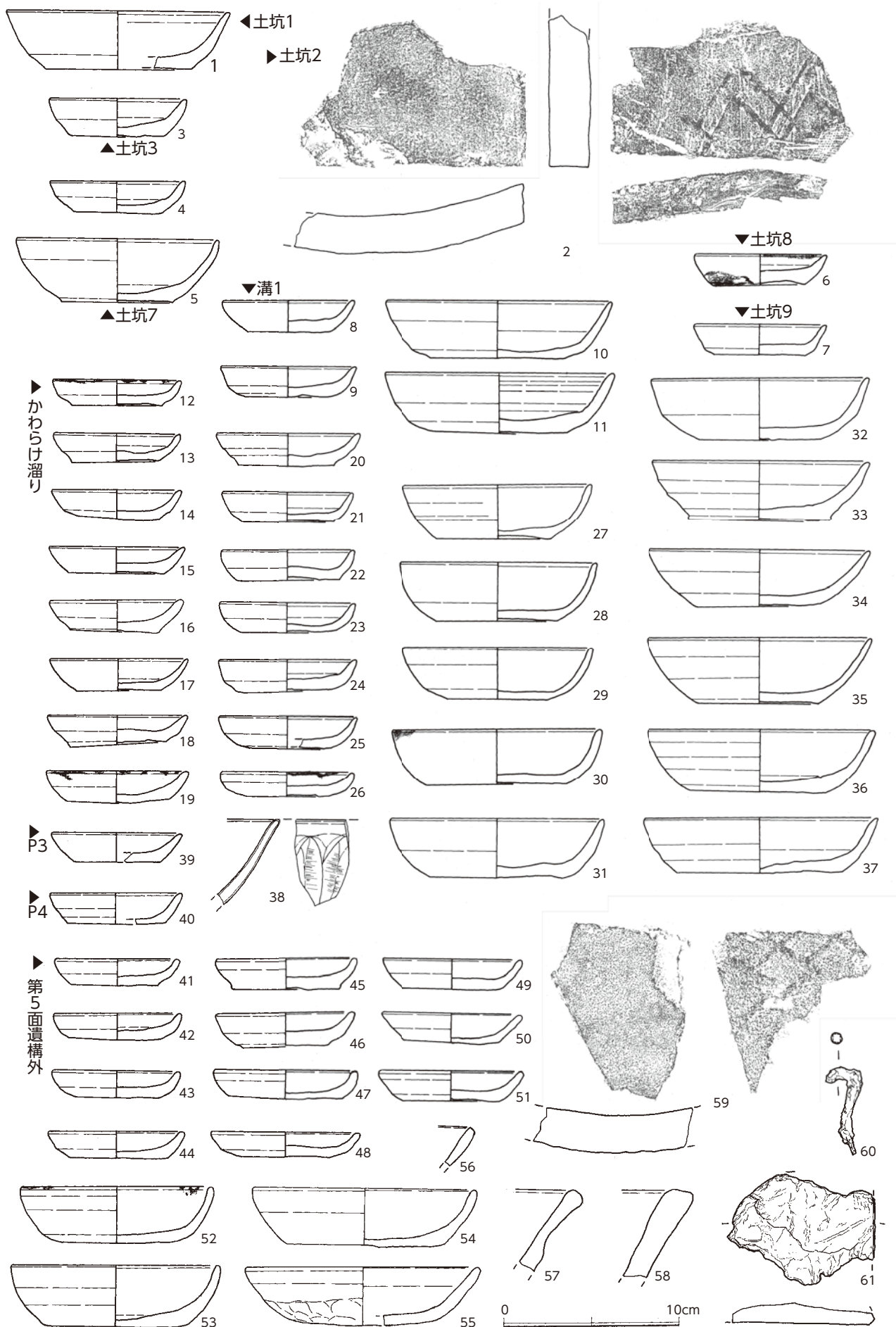


图 25 第5面出土遺物

土坑4(図22・23)：調査区の北東隅、B-2グリット付近で検出。遺構のほとんどが調査区外に拡がっているため規模は不明である。深さは28cmで覆土は砂質土。出土遺物はない。

土坑5(図22・23)：調査区の中央東側、C-3グリット付近で検出。短辺62cm×長辺70cm、深さは30cmで楕円形を呈する。覆土は締まりのある茶褐色弱粘質土で、遺構からは人頭大の泥岩塊が検出されているが、対になる遺構は検出されず、意図的に据えられたものではないと思われる。出土遺物はない。

土坑6(図22・23)：調査区の中央西側、D-3グリット付近にてピット□にきられるかたちで検出。径

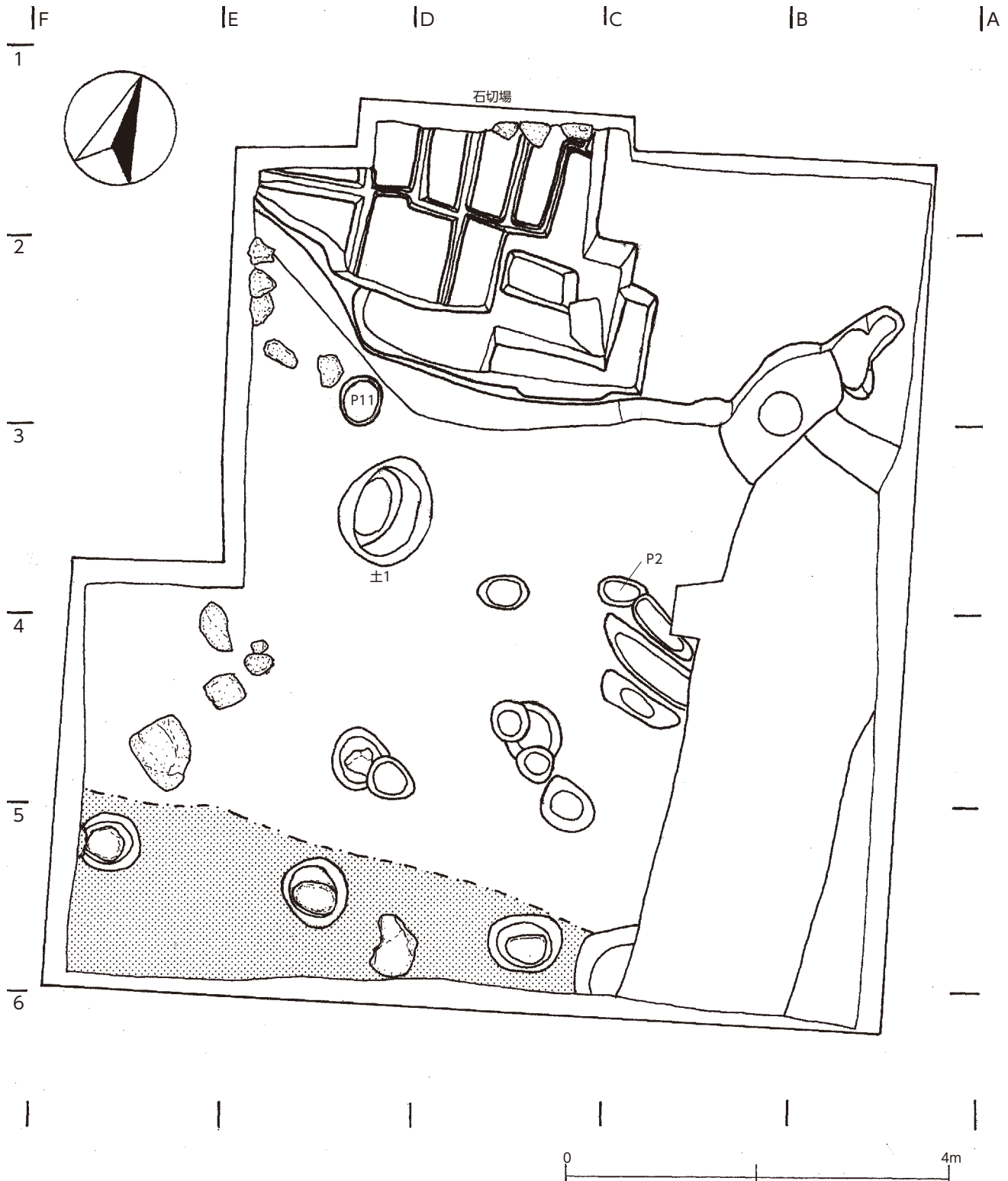
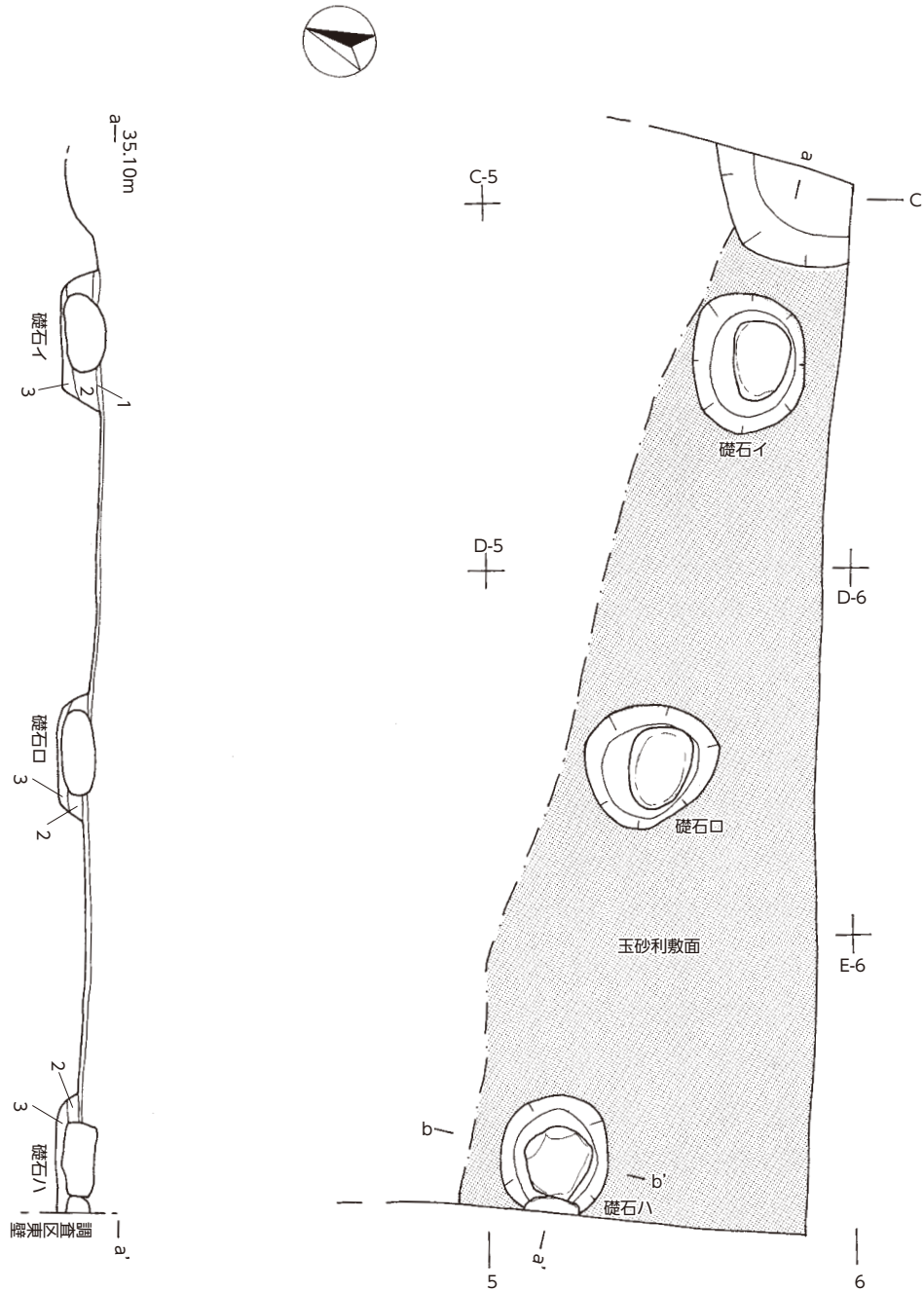


図26 第6面遺構全測図

約70cmの円形を呈し、深さは17cmを測る。覆土は土丹粒、炭化物を多めに含む土で、遺物出土はない。

土坑7(図22・23)：土坑6の西側、E-3グリット付近で検出。遺構の半分は調査区外に拡がっているが、おそらく楕円形を呈すると思われる。深さは28cmで、覆土は炭化物の多い砂質土、出土遺物には4・5のロクロ成形のかわらけ小皿が出土した。



第6面 礎石建物 土層注記

1. 玉砂利層 : φ 3~10mm程砂利層である。
礎石を据えた後に敷く。
2. 暗灰褐色砂質土 : 鎌倉石砕いたような粗砂岩粒。
しまりなし。
3. 淡黄灰色土層 : 拳大以下の土丹塊を密に突き固める。

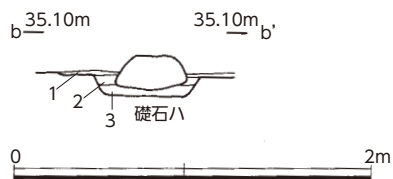


図27 第6面礎石建物

土坑8(図22・23)：調査区のほぼ中央、D-4グリット付近で検出。短辺98cm×長辺107cm×深さ15cm、楕円形を呈する。覆土は鎌倉石の破砕粒を多く含み、覆土上層からは一部欠損しているが長さ61cm×幅33cm×厚さ18cmの整形された砂岩塊が検出された。出土遺物はかわらけ小皿がある。

土坑9(図22・23)：C-5グリット付近にてピットに切られる状態で検出。遺構の東側は3面溝1に壊されているため規模は不明である。深さは25cmを測る。覆土から7のかわらけ小皿の遺物が出土した。

溝1(図22)：調査区の南側、6ライン上で東西方向の主軸方位で検出された。遺構は調査区外に広がっているため全体は不明であるが、確認された長さは東西方向で約490cm、深さ20cm前後で底面の海拔は東から西へ向かって緩やかに下っている。覆土は茶褐色土で締まりなく、出土遺物には8～11のかわらけ大小皿がみられた。

溝2(図17)：溝1の北側、5ライン上にてピット1にきられるかたちで検出。遺構の西側は調査区外へ広がっているが、確認された長さは355cm×幅40～37cm×深さ18cmほどで底面標高は東から西へ緩やかに下る。覆土は茶灰褐色砂質土で、良好な遺物の出土はない。

石列1(図22・24)調査区のほぼ中央で検出した。遺構は「L」字状を呈しており、溝1とほぼ並行・直行した主軸方位の関係である。石列を構成する石材は砂岩であり、石列に使用されている石の多くは不整形のものだが、南北方向の北側の砂岩塊は長さ64cm×44cm×厚さ16～20cmに整形されたものが使用されている。南北軸と東西軸の交わる石は土坑8から検出されており、この石を設置するにあたり、表面の高さを調整する目的で土坑8が掘られた可能性も考えられる。遺構の性格は不明だが、溝1と主軸が似ている点に留意しておきたい。

かわらけ溜り1(図22)E-4ライン付近で検出。確認されたかわらけ溜りの範囲は東西約1.3m、南北約1.5mで、かわらけ溜りの周辺は周りに比べ15cmほど低くなり、窪地状の場所にかわらけを廃棄したものとされる。出土遺物には12～37のロクロ成形かわらけ皿のほか38の青磁鑄蓮弁文碗がある。

ピット(図22・23)：検出したピットのうち、実測可能な遺物が出土したのは2穴についてここで説明をおこなう。ピット3はD-3付近で検出。短辺38cm×長辺54cm×深さ25cm、楕円形を呈する。覆土は茶灰褐色土の単層である。ピット4は調査区中央、D-4付近で検出。短辺50cm×長辺61cm×深さ22cm、楕円形を呈する。覆土は炭化物、粗砂を多く含む土である。遺物は両ピットからかわらけ小皿が出土。

第5面遺構外出土遺物(図25)：41～55はロクロ成形のかわらけ皿である。41～51は口径7.0～8.2cm、器高1.6cmの低い器高の小皿であり、52～54は口径と底径の比率がやや小さめの大皿である。55は外底に指頭圧痕を残す手づくねかわらけの大皿である。

56は瀬戸窯卸皿、57は常滑窯片口鉢I類、58は瓦質火鉢の鉢形のもの、96は鎌倉時代前期の平瓦である。60は鉄釘、61は石硯である。

6. 第6面の遺構・遺物

第6面は調査区北側で海拔高約35.30m、南側で海拔高約35.20mが確認できほぼ平坦な地形を呈している。検出した遺構は礎石建物1軒、石切場、土坑4基・ピット9穴である。

石切場(図26)：調査区の北側、C～E-1～3グリット付で検出。調査区の北側、3グリット以北は岩盤面が露出しているが、この岩盤面から長さ約80cm×幅約40cmの石を切り出した痕跡が発見された。調査区内からは少なくとも7点の石を切り出したものと思われる。

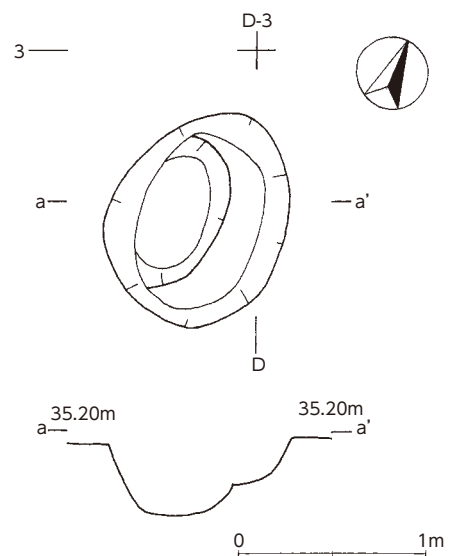


図28 第6面土坑1

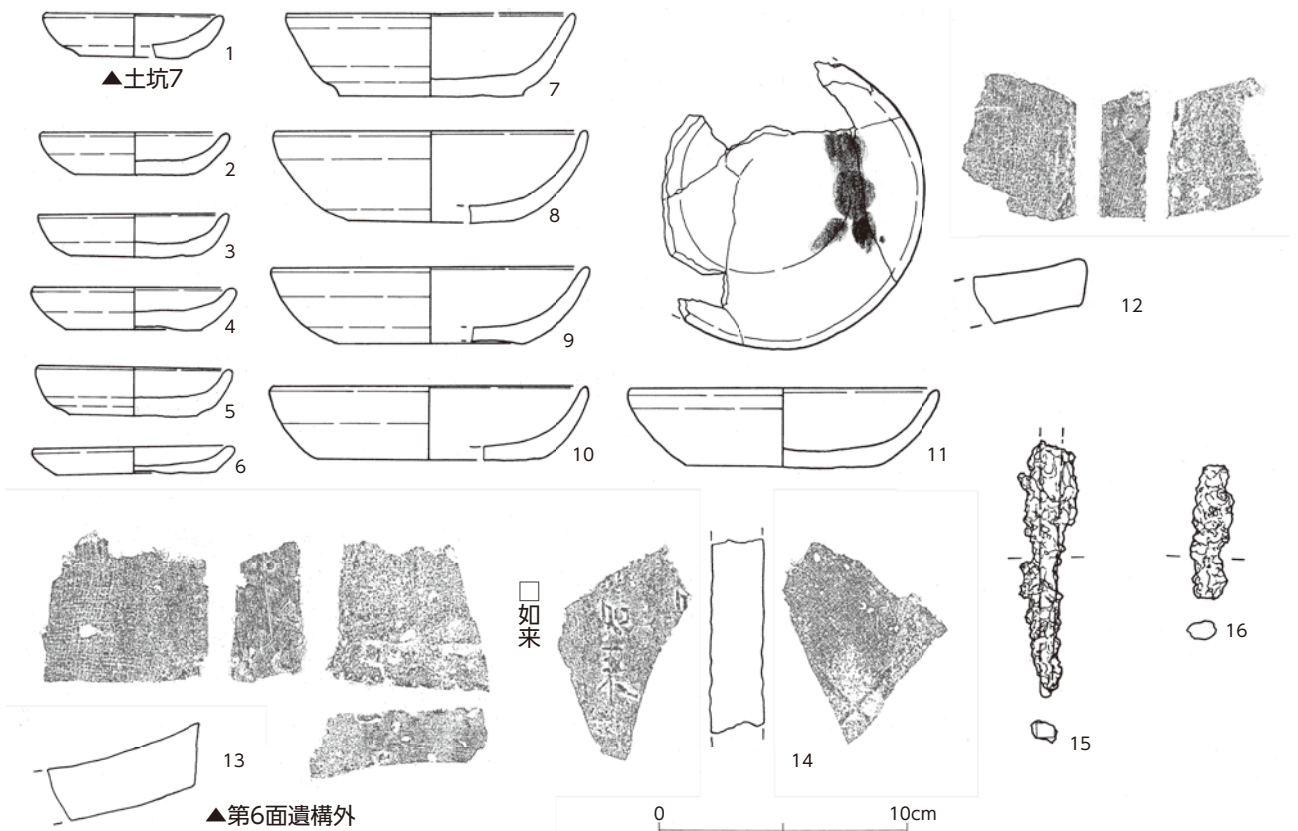


図29 第6面出土遺物

礎石建物(図26・27)：調査区の南側、5～6ライン付近で図28 第6面土坑検出。主軸方向は東西軸方位を示している。調査区内から礎石は3個で径は30～46cm、厚さ18～22cmの安山岩。礎石間隔は約230cmである。5ライン以北からは礎石及び、礎石を抜き取った痕跡が確認されなかったことから建物は調査区の南側に拵がっていると思われる。なお図26にトーンで表現した箇所は3～10mmほどの小石が引き詰められていた部分である。

土坑1(図26・28)：調査区の中央、D-3グリット付近で検出。短辺93cm×長辺114cm×深さ46cm、楕円形を呈する。覆土は暗茶褐色弱粘質土で炭化物の多く含む、図29-1のロクロ成形のかわらけ小皿が出土している。

第6面遺構外出土遺物(図29)：かわらけ皿はロクロ成形である。2～6の小皿は口径7.5～8.1cm、底径5.2～6.5cm、器高は6以外が1.7cm前後である。7～11の大皿は口径13cm以下、器高3cmを越す資料である。12・13は平瓦で鎌倉前半期所産、14も平瓦で凹面に「如来」押印。15・16は鉄釘である。

7. 第6面下トレンチ

本調査前の試掘調査の結果では第6面下からの生活面は確認されなかった。しかし、本遺跡が位置する小谷戸が最終面である第6面以前に人々が生活するために人為的に開発されたのか確認する必要があったため、調査区内に二箇所トレンチを設定した。

トレンチは調査区西壁沿い石切場からの岩盤落ち込み部を確認する目的のトレンチ1と、調査区南西隅にあたる壁直下にトレンチ2をそれぞれ設定して遺構・遺物の有無を確認を実施した。その結果、トレンチ1では岩盤は急な角度で南下へ傾斜しており、人為的な痕跡は見受けられなかった。また、トレンチ2では岩塊が発見されているが、土層観察から無遺物層で生活の痕跡は認められなかった。従って、第6面以下は自然崩落による完全な自然堆積層の地形であることが判明した。

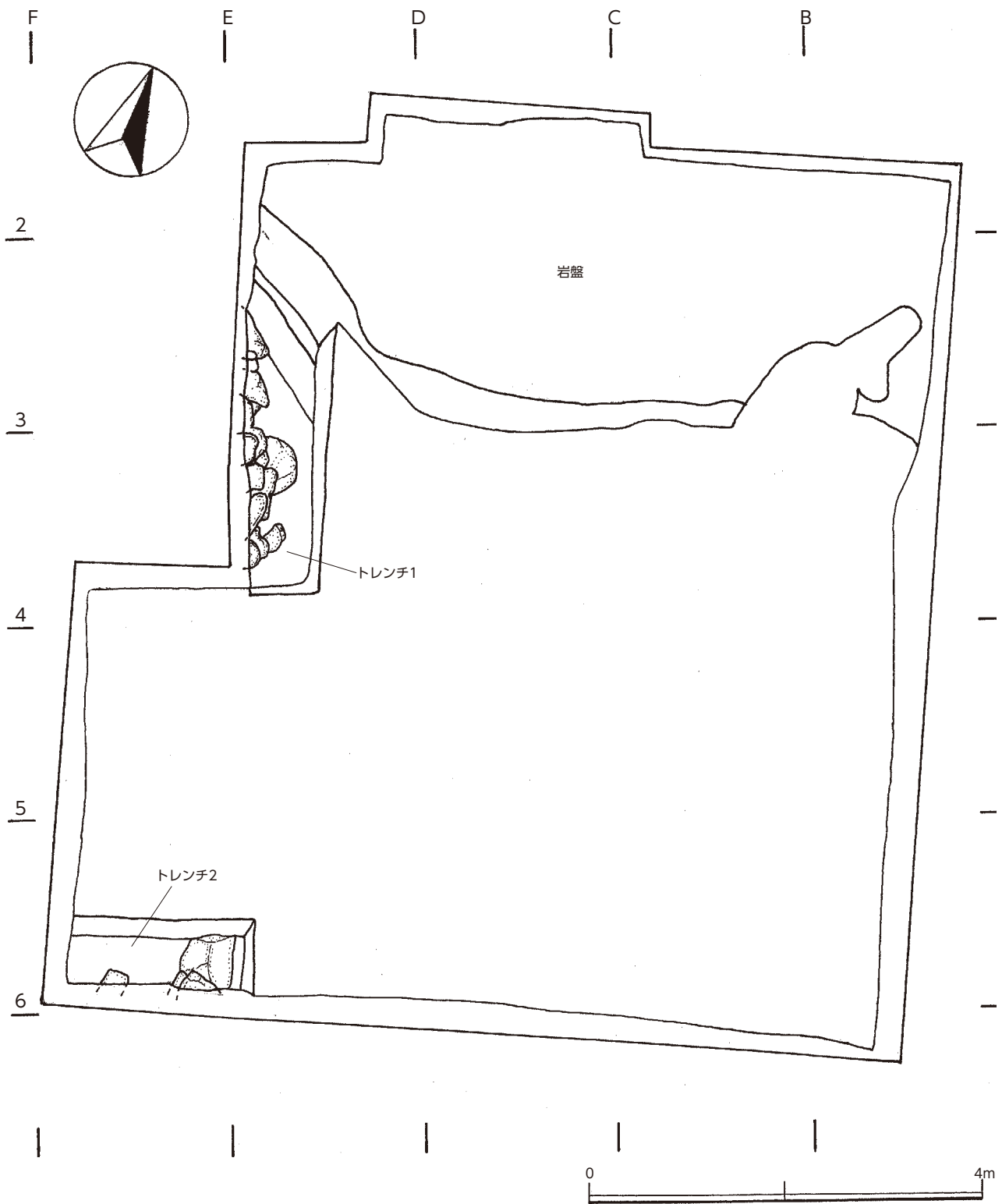


図30 第6面下トレンチ

表2 遺物観察表(1)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
7- 1	第1面 土坑5	かわらけ	(11.2)	(6.7)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや砂質土 c.橙色 e.良好
7- 2	"	かわらけ	(12.5)	(6.6)	2.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質やや粗土 c.橙色 e.良好
7- 3	"	瀬戸 折縁深皿	底部片			a.ロクロ 内底に摺搔文を回転施文 b.良土 c.黄白色 d.刷毛塗り 白濁した灰釉 薄く施釉 e.良好
7- 4	"	常滑 片口鉢	口縁部片			a.輪積技法 口唇部やや角張る b.灰黒色 長石粒 石英粒多く含む c.器表茶灰色 e.良好
7- 5	溝1	かわらけ	(7.6)	(4.6)	2.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質粗土 c.黄橙色 e.良好 f.内面全体に黒色物質付着
7- 6	"	かわらけ	(10.4)	(5.7)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質やや良土 c.橙色 e.良好
7- 7	"	かわらけ	(10.9)	(6.4)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高気味器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質粗土 c.橙色 e.良好
7- 8	"	かわらけ	13.4	7.5	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質粗土気味 c.橙色 e.良好
7- 9	"	瀬戸 柄付片口(行平鍋)	(17.0)	—	—	a.ロクロ 口縁部を折縁状に成形 b.灰色 黒色微砂 d.灰緑色の灰釉を内外面に刷毛塗り e.堅緻 f.古瀬戸中Ⅱ期様式
7-10	P13	かわらけ	(7.6)	(5.5)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.口縁部に煤付着 灯明皿
7-11	第1面 遺構外	かわらけ	(7.2)	(5.2)	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c.黄橙色 e.良好
7-12	"	かわらけ	(7.4)	(4.8)	2.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c.橙色 e.良好
7-13	"	かわらけ	(7.7)	(4.3)	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
7-14	"	かわらけ	(10.3)	(5.5)	3.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.橙色 e.良好
7-15	"	かわらけ	—	(8.8)	—	a.ロクロ 外底回転糸切痕 厚手器壁 特大皿 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質良土 c.黄橙色 e.良好
7-16	"	龍泉窯系 青磁碗	口縁部片			a.ロクロ b.灰色 d.灰緑色不透明 厚手施釉 小気泡多い e.堅緻 f.外面無文
7-17	"	白磁 口兀皿	(11.1)	—	—	a.ロクロ b.灰白色 緻密 d.灰白色不透明 口唇部露胎 e.堅緻
7-18	"	かわらけ 質土製品	口縁部片			a.ロクロ 口縁部肥厚 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質土 c.橙色 e.良好
7-19	"	かわらけ 質土製品	底部片			a.板作りを継ぎ合せた製作法で方形を呈すもの b.微砂 海綿骨芯 粉質良土 c.橙色 e.良好
10- 1	第2面 土坑2	かわらけ	(7.0)	(4.4)	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c.橙色 e.良好
10- 2	"	かわらけ	(7.7)	(5.3)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質土 c.黄灰色 e.不良
10- 3	"	かわらけ	(12.6)	(7.3)	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海面骨芯 赤色粒 土丹粒 やや砂質良土 c.黄灰色 e.不良
10- 4	"	青白磁 無頸小壺	口縁部片			a.外型作りで外面に花形文型捺し b.白色緻密 d.水青色半透明 口唇部内外が露胎
10- 5	"	常滑 甕	肩部片			a.輪積技法 b.灰黒色 長石 石英粒 黒色粒 粗土 c.外面:明灰色 内面:茶褐色 e.堅緻 f.自然降灰がごま降り状
10- 6	第2面 土坑7	かわらけ	7.3	5.4	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄橙色 e.良好
10- 7	"	かわらけ	(7.7)	(5.2)	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや砂質土 c.黄灰色 e.不良
10- 8	"	かわらけ	(10.3)	(6.2)	2.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
10- 9	"	かわらけ	(11.1)	(6.2)	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
10-10	第2面 溝1	かわらけ	(7.6)	(5.8)	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.やや不良 f.口唇部に煤付着 灯明皿
10-11	"	瀬戸 折縁深皿	底部～体部片			a.ロクロ b.黄灰色 白色粒 d.灰緑色白濁気味の灰釉を粗く刷毛塗り 外底露胎 e.堅緻
10-12	"	鈎滓	1.8×2.2			f.緑青がふいて銅滓の可能性が高い
10-13	"	砥石	残存長6.2×幅3.6×厚さ1.1～0.5			a.砥面:表裏2面 上端面は切出痕 c.黄味肌色 f.京都鳴滝産仕上砥
10-14	第2面 P-2	かわらけ 内折れ	(3.3)	(2.6)	0.9	a.ロクロ 口唇部がやや内側へ折れる b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質粗土 c.橙色 e.良好
10-15	"	かわらけ	(12.4)	(7.6)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c.橙色 e.良好
10-16	第2面 P-3	かわらけ	7.5	5.1	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質やや粗土 c.橙色 e.良好 f.口縁部煤付着 灯明皿
10-17	第2面 P-4	かわらけ	(7.5)	(5.0)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや砂質土 c.黄灰色 e.不良
10-18	第2面 P-7	瀬戸 入子	(9.4)	(4.5)	2.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 輪花型へらで押し込む b.灰白色 砂粒 少量の長石粒 良土 d.内側のみ灰白色の自然釉 e.良好 硬質
10-19	第2面 遺構外	かわらけ	(7.2)	(5.1)	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄橙色 e.やや不良 f.口唇部に煤付着 灯明皿

表3 遺物観察表(2)

() は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
10-20	第2面 遺構外	かわらけ	(7.3)	(5.7)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質の良土 c.橙色 e.良好
10-21	"	かわらけ	(7.5)	(5.3)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 砂質粗土 c.橙色 e.良好
10-22	"	かわらけ	(12.6)	(7.6)	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質やや粗土 c.黄褐色 e.良好
10-23	"	かわらけ	(12.7)	(6.7)	3.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好
10-24	"	かわらけ	(13.3)	(7.3)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 口径が大きめの薄手器壁 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質良土 c.橙色 e.良好
10-25	"	常滑 甕	底部片			a.輪積技法 外底粗砂目底 b.灰黒色 長石粒 黒色粒 砂粒 c.器表:茶褐色 d.自然降灰
10-26	"	常滑 甕	胴部片 厚さ1.1			a.輪積技法 b.灰黒色 砂粒 長石粒 c.器表:茶褐色
10-27	"	瓦質火鉢	口縁部片			a.輪積技法 b.灰白色 黒色微砂 小石粒 砂質粗土 c.外面:灰黒色 内面:灰白色 e.良好
10-28	"	かわらけ 円盤	径3.8×厚さ0.6			a.ロクロ成形のかわらけ底部を転用して円形に打ち欠いたのち磨り加工を施したもの f.外底面・側面磨り加工
15- 1	第3面 土坑1	かわらけ	(12.3)	(7.2)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.淡褐色 e.良好
15- 2	第3面 土坑2	かわらけ	(10.9)	(5.9)	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高な内湾した器形(薄手丸深) b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c.橙色 e.良好
15- 3	"	かわらけ	(7.9)	(5.0)	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質土 c.黄褐色 e.不良
15- 4	第3面 土坑3	かわらけ	(7.8)	(5.2)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 厚手器壁で背低い器形 b.微砂やや多め 海綿骨芯 赤色粒 砂質気味やや粗土 c.橙色 e.良好
15- 5	第3面 土坑4	かわらけ	(10.8)	(6.7)	3.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 砂質気味粗土 c.黄褐色 e.不良
15- 6	"	かわらけ	(10.6)	(5.8)	3.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高な内湾した器形(薄手丸深) b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c.橙色 e.良好
15- 7	"	かわらけ	12.8	7.4	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 厚手器壁 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c.淡褐色 e.良好
15- 8	"	かわらけ	(12.8)	(7.1)	3.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 厚手器壁背高気味の器形 b.微砂やや多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質気味粗土 c.黄褐色 e.不良
15- 9	第3面 土坑6	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 背低い器形 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや砂質土 c.黄褐色 e.良好
15-10	"	かわらけ	8.1	5.9	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 やや厚手器壁で背低気味の器形 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや砂質土 c.黄褐色 e.良好
15-11	第3面 P-2	かわらけ	(7.6)	(5.0)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 砂質粗土 c.橙色 e.良好
15-12	第3面 P-5	かわらけ片 円盤	径2.2×厚さ0.6			a.ロクロ成形のかわらけ底部片を転用して円盤状に磨り加工を施したもの b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 c.黄褐色 e.やや不良
15-13	第3面 土塁状遺構	かわらけ	7.7	5.6	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手気味器壁で背低い器形 b.微砂 海綿骨芯 粉質気味良土 c.黄褐色 e.不良
15-14	"	かわらけ	(10.2)	5.7	3.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 粉質良土 c.黄褐色 e.不良 f.口縁部煤付着 灯明皿
15-15	"	常滑 甕	底部片			a.輪積技法 外底砂目底 b.黒灰色 石英粒・白色粒多め 砂質 c.器表:茶褐～黒灰色 e.堅緻
15-16	第3面遺構外	かわらけ	(6.8)	(3.8)	2.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手気味器壁で背高器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質粗土 c.橙色 e.良好
15-17	"	かわらけ	(6.6)	(5.2)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 薄手器壁で背低い内湾した器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや良土 c.黄褐色 e.やや不良
15-18	"	かわらけ	(7.4)	(5.9)	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 薄手器壁 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 粉質気味良土 c.黄褐色 e.やや不良
15-19	"	かわらけ	(7.3)	(4.2)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 背低い器形 b.微砂やや多め 海綿骨芯 土丹粒 やや砂質土 c.黄褐色 e.やや不良
15-20	"	かわらけ	(7.4)	(4.9)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 やや砂質土 c.灰色 e.良好 再火で内面に気泡の抜けた小穴 f.内面強い被熱で発泡 かわらけ転用の坩堝
15-21	"	かわらけ	(7.4)	(5.9)	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 薄手器壁 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 粉質気味良土 c.黄褐色 e.やや不良
15-22	"	かわらけ	7.7	5.5	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 背低い器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.不良
15-23	"	かわらけ	(7.8)	(5.3)	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 背低気味 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 良土 c.黄灰色 e.不良
15-24	"	かわらけ	(7.9)	(6.4)	2.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 口径と底径比が小さな背低い器形 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 砂質やや粗土 c.橙色 e.良好
15-25	"	かわらけ	10.5	5.9	2.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高気味器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c.橙色 e.良好
15-26	"	かわらけ	(11.0)	(6.0)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高な内湾した器形(薄手丸深) b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質気味良土 c.橙色 e.良好
15-27	"	かわらけ	(10.8)	(6.5)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高い内湾した器形(薄手丸深) b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質土 c.橙色 e.良好
15-28	"	かわらけ	(12.4)	(7.3)	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 背低い器形 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質気味やや粗土 c.橙色 e.良好

15-29	"	かわらけ	12.3	7.2	3.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂・赤色粒多め 海綿骨芯 土丹粒 砂質粗土 c.内面:灰褐色 外面:橙色 e.良好
15-30	"	かわらけ	12.8	8.3	3.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 底部やや厚手器壁で背高気味の器形 b.微砂 海綿骨 芯 赤色粒 土丹粒 砂質気味やや良土 c.黄褐色 e.良好

表4 遺物観察表 (3)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
15-31	第3面 遺構外	かわらけ	(12.5)	(7.5)	3.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 背低く内湾した器形 b.微砂少なめ 海綿骨芯 赤色 粒 やや良土 c.黄褐色 e.良好
15-32	"	かわらけ	(12.7)	(7.6)	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高な内湾した器形(薄手丸 深) b.微砂少なめ 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粉質気味やや良土 c.黄褐色 e.良好
15-33	"	かわらけ	(12.9)	(9.7)	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 厚手器壁で口径と底径比が少ない器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.不良
15-34	"	かわらけ 加工品		底径 4.8		a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 破片であるが体部中位まで打ち欠いて粗 く磨った成形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄褐色 e.不良
15-35	"	白かわらけ		底径 4.5		a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂質の良土 c.白色 e.良好
15-36	"	常滑 甕		口縁部片		a.輪積技法 b.灰黒色 長石粒 黒色粒 流文状の粘性 c.器表:茶褐色 e.硬質 f.常滑中野編年6 a型式(13 C後半か)
15-37	"	常滑 甕		胴部片		a.輪積技法 b.灰色 長石粒 砂粒 黒色粒 流文状の粘性 c.器表:茶褐色 e.硬質 f.内面自然降灰
15-38	"	常滑 甕		底部片		a.輪積技法 外底砂目 石粒の多い粗砂粒付着 b.灰黒色 長石粒 黒色粒 c.内底:暗茶褐色 外底:灰褐色 e.硬質
15-39	"	瓦質火鉢		口縁部片		c.内面:灰色 外面:灰黒色
15-40	"	かわらけ質 土製品		口径 13.2		a.ロクロ 口縁部が肥厚した形態で鉢形を呈す b.かわらけと同質 微砂多め 海 綿骨芯 赤色粒 砂質土 c.淡褐色 e.良好 f.香炉のような器系か
15-41	"	輪	羽口片 残長7.0×外径 (7.1)×内径(2.9)			a.円筒状で炉へ接続する片側がすばまる 外面に暗灰褐色の溶融物付着 b.砂 粒 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.橙褐色
15-42	"	砥石	残長6.9×幅3.5 ×厚さ0.5~0.9			a.砥面:表裏2面 側面・端面はノコ状の切り離し痕 b.粘板岩質 f.京都鳴滝産 仕上砥
15-43	"	鉄製品 釘	長さ11.8×幅0.45 ×厚さ0.3			a.鉄製で鋳造の断面四角形 角釘あり
16- 1	第3面 溝1	かわらけ	(7.6)	5.0	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 やや良土 c.褐色 e.良好
16- 2	"	かわらけ	7.7	5.2	2.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒少量 やや砂質土 c.黄褐色 e.良好
16- 3	"	かわらけ	(7.9)	6.0	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 薄手器壁で背低気味器形 b.微砂 海綿骨芯 やや砂 質土 c.褐色 e.良好
16- 4	"	かわらけ	7.5	4.7	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒少量 やや砂質土 c.黄褐色 e.良好 f.口縁部内外に煤付着 灯明皿
16- 5	"	かわらけ	7.3	4.5	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 やや良土 c.黄褐色 e.良 好 f.口縁部に煤付着 灯明皿
16- 6	"	かわらけ	7.6	4.6	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.褐色 e.やや不良
16- 7	"	かわらけ	7.5	4.3	2.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質気味やや粗土 c.黄褐色 e.良好
16- 8	"	かわらけ	7.6	4.2	2.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒少量 やや良土 c.褐色 e.良好
16- 9	"	かわらけ	(8.0)	5.3	2.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒少量 やや 粗土 c.褐色 e.良好
16-10	"	かわらけ	(7.4)	(4.2)	2.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質土 c.褐色 e.良好
16-11	"	かわらけ	7.7	4.6	2.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒少量 やや砂質土 c.褐色 e.良好 f.口縁部1ヶ所に煤付着 灯明皿
16-12	"	かわらけ	(7.8)	4.4	2.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 やや砂質土 c.黄褐色 e.やや不良
16-13	"	かわらけ	7.9	4.8	2.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 薄手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂 質やや粗土 c.褐色 e.良好 f.口縁部内外に煤付着 灯明皿
16-14	"	かわらけ	7.9	4.7	2.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 薄手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 やや良土 c.黄褐色 e.良好 f.口縁部に煤付着 灯明皿
16-15	"	かわらけ	(7.8)	(5.2)	2.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 粉質土 c.褐色 e.良好
16-16	"	かわらけ	(10.3)	5.6	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁 b.微砂多い 海綿骨芯 赤色粒 土 丹粒少量 c.褐色 e.良好
16-17	"	かわらけ	(10.5)	(5.7)	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 体部薄手器壁 b.微砂多い 海綿骨芯 赤色 粒 砂質土 c.淡褐色 e.良好
16-18	"	かわらけ	10.8	6.5	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高気味器形 b.微砂 海綿骨 芯 赤色粒 やや粗土 c.褐色 e.良好
16-19	"	かわらけ	10.7	6.4	3.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高気味器形 b.微砂 海綿骨 芯 赤色粒 粉質気味やや良土 c.黄褐色 e.やや不良
16-20	"	かわらけ	(10.7)	(5.7)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 薄手器壁 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 やや砂質土 c.褐色 e.良好
16-21	"	かわらけ	(10.8)	5.3	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 背高気味器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒・ 土丹粒少量 やや砂質土 c.褐色 e.良好
16-22	"	かわらけ	(10.9)	6.0	2.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 少量 やや粉質土 c.褐色 e.良好

16-23	"	かわらけ	(11.0)	6.3	3.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 底部に比べ体部薄手器壁 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒・土丹粒少量 やや砂質土 c.橙色 e.良好 f.体部外面と底部一部に煤状黒色物質付着
16-24	"	かわらけ	10.8	6.2	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.橙色 e.良好
16-25	"	かわらけ	(11.0)	(6.0)	2.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒少量 やや粉質土 c.橙色 e.良好

表5 遺物観察表 (4)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
16-26	第3面 溝1	かわらけ	11.0	5.8	3.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高気味器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質やや良土 c.橙色 e.良好
16-27	"	かわらけ	(11.1)	6.5	3.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒少量 粉質気味良土 c.淡橙色 e.良好
16-28	"	かわらけ	(11.1)	6.7	3.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁 b.微砂 海綿骨芯多め 砂質土 c.淡橙色 e.良好
16-29	"	かわらけ	11.3	6.1	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高気味器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒多め 粗土 c.橙色 e.良好
16-30	"	かわらけ	(11.2)	5.9	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒少量 やや砂質土 c.橙色 e.良好
16-31	"	かわらけ	11.3	6.0	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 背高気味器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
16-32	"	かわらけ	(11.3)	(6.5)	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 背高気味器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒多め やや粗土 c.黄橙色 e.良好
16-33	"	かわらけ	(11.3)	6.4	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 粉質の良土 c.黄橙色 e.やや不良 f.口縁部内外と外面体部下位～外底に煤状の黒物質が付着
16-34	"	かわらけ	11.4	6.1	3.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒少量 やや粗土 c.橙色 e.良好
16-35	"	かわらけ	11.5	6.3	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 薄手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒少量 やや砂質土 c.橙色 e.良好
16-36	"	かわらけ	11.7	6.6	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒少量 やや良土 c.淡橙色 e.良好 f.外面の体部・底部で部分的に煤状の黒物質が付着
16-37	"	かわらけ	(12.7)	(7.0)	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 やや薄手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質土 c.黄橙色 e.やや不良
16-38	"	かわらけ	12.5	6.3	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高気味器形 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 粉質の良土 c.黄橙色 e.良好
16-39	"	かわらけ	12.5	7.3	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 厚手器壁で背高気味器形 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 砂質粗土 c.橙色 e.良好
16-40	"	かわらけ	(12.9)	(7.0)	3.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
16-41	"	かわらけ	(13.0)	6.8	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 厚手器壁 b.微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質粗土 c.橙色 e.良好
16-42	"	かわらけ	(13.0)	7.0	4.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 薄手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質やや粗土 c.橙色 e.良好
16-43	"	かわらけ	(13.0)	7.0	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒少量含む やや良土 c.黄橙色 e.不良
16-44	"	かわらけ	(8.6)	(6.0)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄橙色 e.やや甘い
16-45	"	かわらけ	13.9	8.0	3.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 14cm近い大型口径で背高な器形 b.微砂・赤色粒やや多め海綿骨芯 砂質やや粗土 c.橙色 e.良好
16-46	"	かわらけ	14.2	8.9	3.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質気味やや粗土 c.淡橙色 e.良好
16-47	"	龍泉窯系 青磁 鎗蓮弁文碗	口縁部片			b.灰色 黒色微砂含むが精良 d.薄灰緑色不透明 二次焼成で内外釉薬は白濁気味 e.堅緻 f.外面:鎗蓮弁文を片切彫 釉薬が白濁不透明で文様不鮮明
16-48	"	瀬戸 卸皿	—	(8.0)	—	a.ロクロ 外底回転糸切痕 内底へら状工具による卸目 b.黄色味の白灰色 精良土 d.内外面灰白色灰釉が斑にある e.堅緻
16-49	"	常滑 甕	胴部片			a.輪積技法 外面:ナデ成形痕 内面:指頭圧痕 ナデ成形痕 b.黒灰色 白色石粒多く含む 岩石質 c.茶灰色(器表) e.堅緻
16-50	"	常滑 片口鉢	口縁～胴部片			a.輪積技法 b.橙色 長石粒 砂粒 黒色粒多め c.茶褐色(器表) e.良好 f.内外面に斑の降灰
16-51	"	黒縁皿	(10.7)	—	—	a.ロクロ 薄手器壁 口唇部肥厚 b.灰白色 微砂多めで微細質土 c.口縁部内外面黒灰色 e.良好
16-52	"	摩石	長径10.5×短径7.6×厚さ3.9			素材:水摩したような扁平な楕円礫 使用:両面に磨滅した磨面が認められ、下端周縁には痘痕状の敲打痕が残る
16-53	"	銅銭	外径2.5 内径1.8			元豊通宝 初鑄年 1078年 北宋
20- 1	第4面 土坑3	平瓦(女瓦)	厚さ2.0			a.凹面:粗砂の離れ砂付着 凸面:横位 糸切痕 粗砂の離れ砂 b.砂粒 石粒 良土 c.灰色 e.良好
20- 2	第4面 土坑5	かわらけ	7.2	4.4	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや良土 c.橙色 e.良好 f.外面体部に黒色物質付着
20- 3	"	かわらけ	7.3	5.1	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや良土 c.黄橙色 e.不良
20- 4	"	かわらけ	7.6	5.5	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質粗土 c.橙色 e.良好

20- 5	〃	かわらけ	(7.5)	(4.6)	1.75	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄灰色 e.不良
20- 6	〃	かわらけ	8.0	5.2	2.01	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁 b.微砂 海綿骨芯 粉質良土 c.橙色 e.良好
20- 7	〃	かわらけ	(8.0)	(6.3)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 背高な器形 口径と底径の比が小さい b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質土 c.橙色 e.良好
20- 8	〃	かわらけ	11.2	6.7	3.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 薄手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや良土 c.橙色 e.良好
20- 9	〃	かわらけ	11.0	6.5	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 薄手器壁で背高な器形(薄手丸深) b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質良土 c.橙色 e.良好
20-10	〃	かわらけ	12.4	8.0	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 薄手器壁で背高気味器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質粗土 c.橙色 e.良好

表6 遺物観察表(5)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
20-11	第4面 土坑5	かわらけ	(12.5)	8.0	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 薄手器壁で背高気味器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 c.橙色 e.良好
20-12	〃	かわらけ	13.2	7.8	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 薄手器壁で背高気味器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.不良
20-13	第4面 土坑10	かわらけ	(7.5)	(5.3)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.やや不良 f.口唇部の一ヶ所に煤付着 灯明皿
20-14	〃	北部系 山茶碗	口縁部～体部片			a.ロクロ 口縁部がわずかに外反し端部が少し肥厚気味 b.灰白色 精良土 e.良好 硬質 f.内面斑に降灰 北部系東美濃型
20-15	第4面 土坑11	かわらけ	(12.8)	(8.2)	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 やや背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.不良
20-16	第4面 溝1	常滑 甕	胴部片 厚さ1.0～1.2			a.輪積技法 b.黒灰色 長石粒 砂粒 c.明茶色(器表) e.堅緻
20-17	第4面 溝3	かわらけ	(7.8)	(4.9)	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 体部中で強く屈曲する器形 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや良土 c.橙色 e.良好
20-18	第4面 P-2	かわらけ	(7.7)	(6.0)	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c.黄褐色 e.やや不良
20-19	第4面 P-3	かわらけ	(12.7)	(7.7)	3.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 やや厚手器壁で背低い器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄褐色 e.良好
20-20	第4面 P-6	かわらけ	7.9	5.5	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 良土 c.黄褐色 e.良好
20-21	第4面 P-7	かわらけ	(12.6)	(7.6)	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 やや薄手器壁で背高気味 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粗土 c.橙色 e.良好
20-22	第4面 P-9	かわらけ	7.8	5.1	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄褐色 e.良好 f.口唇部煤付着 灯明皿
20-23	第4面 P-11	かわらけ	(16.8)	—	—	a.ロクロ 口径が18cm近い大口径で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 良土 c.黄褐色 e.やや不良
20-24	第4面 P-14	かわらけ	(7.7)	(5.2)	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 薄手器壁 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.橙色 e.良好 f.口縁部煤付着 灯明皿
20-25	第4面 P-16	かわらけ	(11.4)	(6.8)	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 薄手器壁で背高な器形(薄手丸深) b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c.橙色 e.良好
20-26	第4面 P-17	銅銭	外径2.5 内径2.0			開元通宝 初鑄年 621年 唐
20-27	〃	銅銭	外径2.4 内径1.9			聖宋通宝 初鑄年 1101年 北宋
21-28	第4面 遺構外	かわらけ	7.5	5.3	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c.橙色 e.良好 f.口唇部煤付着 灯明皿
21-29	〃	かわらけ	(7.7)	(5.1)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質気味 粗土 c.橙色 e.良好
21-30	〃	かわらけ	(7.7)	(5.1)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや良土 c.黄褐色 e.良好
21-31	〃	かわらけ	8.0	5.9	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 良土 c.黄灰色 e.不良 f.口唇部煤付着 灯明皿
21-32	〃	かわらけ	(7.7)	(5.2)	(1.6)	a.ロクロ 外底回転糸切痕 背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質やや良土 c.黄灰色 e.不良
21-33	〃	かわらけ	7.9	5.4	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背低い器形 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 粉質気味良土 c.黄灰色 e.やや不良
21-34	〃	かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c.橙色 e.良好
21-35	〃	かわらけ	8.0	5.5	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質土 c.黄褐色 e.良好 f.口縁部煤付着 灯明皿
21-36	〃	かわらけ	(7.1)	5.0	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 小口径で背低い器形 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粉質良土 c.黄灰色 e.やや不良
21-37	〃	かわらけ	(7.3)	(4.7)	2.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕が細かい 薄手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.橙色 e.良好
21-38	〃	かわらけ	7.7	6.4	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 口径と底径の比が少ない背低い器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや砂質土 c.黄灰色 e.やや不良
21-39	〃	かわらけ	7.6	5.5	1.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 背低い器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粗土 c.橙色 e.良好
21-40	〃	かわらけ	(7.7)	5.0	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c.橙色 e.良好 f.ノミ状の工具で削りや打欠きを口縁～体部に施す 一部煤付着 灯明皿
21-41	〃	かわらけ	10.8	6.0	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 薄手器壁で背高な器形(薄手丸深) b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質気味やや粗土 c.橙色 e.良好
21-42	〃	かわらけ	(10.6)	6.4	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c.淡褐色 e.良好

21-43	"	かわらけ	12.6	7.1	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 厚手器壁で背高気味器形 b.微砂 海綿骨 芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
21-44	"	かわらけ	(12.6)	(7.9)	4.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 厚手器壁で背高気味器形 b.微砂 海綿骨 芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
21-45	"	かわらけ	(12.8)	(6.7)	3.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質 良土 c.橙色 e.良好
21-46	"	かわらけ	12.8	8.1	3.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 やや厚手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿 骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.橙色 e.良好
21-47	"	かわらけ	(12.7)	(8.0)	3.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好 f.口唇部煤付着 灯明皿
21-48	"	白磁 小壺蓋	最大径 (6.5) 口径 (3.6)		1.25	a.短頸小壺の蓋で型捺し作り b.灰味白色で精良緻密 e.堅緻 d.周縁～上面は 青味灰白色不透明釉が薄く施釉 内面は露胎で赤みを帯びた鉄発色が薄く斑 にみられる f.上面に輪花文と凸線の蓮華文を組合せた文様が型捺して表され ている

表7 遺物観察表 (6)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考			
			口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	
21-49	第4面 遺構外	白磁 合子蓋	(7.6)	—	(1.8)	a.外型捺作り b.白色 精良緻密で結晶質なもの d.外面に灰味白色で半透明の 釉を施す f.型捺して外面に枝葉文を施文
21-50	"	常滑 甕	口縁部片			a.輪積み技法 b.灰黒色 長石粒 砂粒多め c.赤茶～灰黒色 (器表) e.硬質 f.口縁部付近の内外に自然降灰 常滑中野編年6型式
21-51	"	常滑 甕	口縁部片			a.輪積み技法 b.灰色 長石粒 砂粒少量 粘質良胎 c.明茶色 (器表) e.硬質 f.口縁部付近の内面に自然降灰 常滑中野編年6型式
21-52	"	常滑 甕	肩部片 厚さ1.0～1.4			a.輪積み技法 b.灰色 長石粒 砂粒 c.器表外面:明茶色 内面:灰黒色 e.硬質 f.外面に叩き目あり
21-53	"	常滑 甕	底部片 厚さ0.8～1.4			a.輪積み技法 b.灰橙色 長石粒 砂粒 粘質気味 c.明茶～灰茶色 (器表) e.良好 f.外底砂目底
21-54	"	常滑 片口鉢	底部片 厚さ0.8～1.4			a.輪積み技法 貼付高台で断面三角形 b.灰色 長石粒多め c.明茶色 (器表) e.硬 質 f.内面が使用により摩耗し滑らか
21-55	"	常滑 転用品	長さ9.2 幅6.7			常滑胴部片を転用したもの 破断面の下端を上端の一部に磨った痕跡を残す また下端の内面器表に丸く研磨されている
21-56	"	常滑 転用品	長さ6.5 幅4.2			常滑甕胴部片を転用 下半の破断面部分に磨った痕跡がある
21-57	"	鉢形火鉢	口縁部片			a.輪積み技法 口縁部が肥厚する鉢形の器形 内面へら状のナデ調整 外面指頭 圧痕と横位ナデ b.灰色 長石粒 砂粒 c.灰黒色 (器表) e.良好だが、砂質分が 多く焼き締りが甘い
21-58	"	鉢形火鉢	底部片			a.輪積み技法 底部薄手で外面が砂目底を呈す b.橙色 微砂多め 赤色粒 白色 粒 砂質粗土 c.明茶色 (器表) e.不良
21-59	"	平瓦 (女瓦)	厚さ2.4			a.端縁を幅広のへら削り施す 凹面:ナデ調整施す 凸面:X状の針格子叩き目 やや粗い離れ砂が叩き締めで打ち込まれている b.砂粒 良土 c.灰色
21-60	"	滑石加工品 スタンプ	残存長7.2×幅4.1×高2.7 穿孔径0.9			a.滑石鍋の鏝部分を転用した長方形を呈す 背面の取手 (鏝部)に径9mm程 の穿孔あり f.文様:笹竜胆風の植物文を陽刻で表現
21-61	"	滑石加工品	残存長3.5×幅1.7 ×厚(0.8)			f.石鍋の再加工作品 鏝部片の一部を切断して削り加工を施したもの
21-62	"	ガラス製品	口縁部小片 厚0.17			c.濃青色 f.外面は銀化して黒ずんでいる 破断面は部分的に白色
21-63	"	銅銭	外径2.4 内径1.8			紹聖元宝 初鑄年 1094年 北宋
25- 1	第5面 土坑1	かわらけ	12.9	8.4	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.橙色 e.良好
25- 2	第5面 土坑2	平瓦 (女瓦)	厚さ2.3			a.端縁を幅広のへら削り施す 凹面:ナデ調整施す 凸面:X状の針格子目叩き 部分的に縦位ナデと布目痕がみられる 薄く離れ砂付着 側面・端面ともに1 回のへら削り成形 b.微砂 黒色粒 白色流文状をみせる やや粉質良土 c.器表 が灰黒色でくすべ状 f.端面に砂粒付着 乾燥時立てかけて付着したものとみ られる
25- 3	第5面 土坑3	かわらけ	(7.8)	(5.4)	2.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄橙 色 e.良好
25- 4	第5面 土坑7	かわらけ	7.7	5.1	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄橙色 e.良好
25- 5	第5面 土坑7	かわらけ	(11.6)	(6.4)	3.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 薄手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 や や粉質 良土気味 c.橙色 e.良好
25- 6	第5面 土坑8	かわらけ	7.5	5.2	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 厚手器壁 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや砂 質粗土 c.黄橙色 e.やや不良 f.口縁部と体部下半に煤付着 灯明皿
25- 7	第5面 土坑9	かわらけ	(7.5)	(5.3)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
25- 8	第5面 溝1	かわらけ	(7.5)	(4.8)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや砂質 土 c.橙色 e.良好
25- 9	"	かわらけ	(7.8)	(4.9)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.黄橙色 e.良好
25-10	"	かわらけ	(12.9)	7.8	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高気味 (薄手丸深) b.微砂 海綿骨芯 粉質良土 c.橙色 e.良好
25-11	"	かわらけ	13.2	7.8	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 内壁面に強いロクロ目痕 厚手器壁で背高 な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
25-12	第5面 かわらけ溜り	かわらけ	(7.5)	(5.3)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.口縁部内外面に煤付着 灯明皿
25-13	"	かわらけ	7.3	5.0	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや良土 c.黄橙 色 e.良好
25-14	"	かわらけ	7.5	4.8	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.黄橙 色 e.やや不良
25-15	"	かわらけ	(7.7)	(5.5)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや良土 c.黄橙 色 e.良好

25-16	"	かわらけ	7.6	5.2	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質粗土 c.黄橙色 e.やや不良
25-17	"	かわらけ	(7.9)	(4.9)	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高気味 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c.橙色 e.良好
25-18	"	かわらけ	8.0	5.5	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.不良
25-19	"	かわらけ	8.1	5.9	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.不良 f.口縁部に煤付着 灯明皿
25-20	"	かわらけ	8.2	5.5	1.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.橙色 e.良好
25-21	"	かわらけ	(7.5)	5.4	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁 b.微砂 海綿骨芯 粉質良土 c.橙色 e.良好

表8 遺物観察表(7)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径	底径	器高	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			(cm)	(cm)	(cm)	
25-22	第5面 かわらけ溜り	かわらけ	7.6	5.6	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや砂質土 c.黄灰色 e.不良
25-23	"	かわらけ	7.7	5.4	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背低気味 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや砂質粗土気味 c.黄灰色 e.不良
25-24	"	かわらけ	7.9	5.5	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 厚手器壁で背低気味 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粉質良土 c.黄灰色 e.不良
25-25	"	かわらけ	(7.8)	4.3	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質土 c.黄橙色 e.やや不良
25-26	"	かわらけ	(7.6)	4.9	1.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや良土 c.黄橙色 e.やや良好 f.口縁部内外に煤付着 灯明皿
25-27	"	かわらけ	10.7	6.6	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 薄手器壁で背高器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質土 c.橙色 e.良好
25-28	"	かわらけ	(11.2)	7.0	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 薄手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質土 c.黄橙色 e.良好
25-29	"	かわらけ	10.9	5.7	3.0	a.ロクロ 外底細かな糸切痕 薄手器壁で背高気味 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粉質良土 c.黄灰色 e.不良
25-30	"	かわらけ	12.0	8.1	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.口縁部に薄く煤付着 灯明皿
25-31	"	かわらけ	12.3	7.6	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 厚手器壁 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄灰色 e.不良
25-32	"	かわらけ	(12.4)	7.0	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
25-33	"	かわらけ	(12.5)	(8.2)	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 ロクロ目痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質気味粗土 c.橙色 e.良好
25-34	"	かわらけ	12.7	7.0	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.橙色 e.良好
25-35	"	かわらけ	12.8	6.8	3.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 薄手器壁で背高な器形 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質土 c.橙色 e.良好
25-36	"	かわらけ	12.9	7.8	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質土 c.黄灰色 e.不良
25-37	"	かわらけ	13.4	9.5	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄橙色 e.やや不良
25-38	"	龍泉窯系 青磁蓮弁文碗	口縁部片			b.灰色 黒色微砂含むが緻密 d.灰緑色半透明 f.ロクロ 外面複蓮弁文片切彫
25-39	第5面 P-3	かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質良土 c.黄灰色 e.やや不良
25-40	第5面 P-4	かわらけ	(7.7)	(5.7)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質良土 c.黄橙色 e.良好
25-41	第5面遺構外	かわらけ	6.9	4.9	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.橙色 e.良好
25-42	"	かわらけ	7.4	5.1	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
25-43	"	かわらけ	7.1	4.7	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
25-44	"	かわらけ	7.6	5.6	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 砂質やや粗土 c.橙色 e.良好
25-45	"	かわらけ	(7.9)	(6.1)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
25-46	"	かわらけ	(7.6)	(4.9)	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質粗土 c.橙色 e.良好
25-47	"	かわらけ	8.0	6.4	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質良土 c.橙色 e.良好
25-48	"	かわらけ	(8.3)	(5.1)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄灰色 e.良好
25-49	"	かわらけ	(8.0)	(5.3)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質良土 c.黄橙色 e.良好
25-50	"	かわらけ	8.2	5.3	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c.橙色 e.良好
25-51	"	かわらけ	(8.1)	(5.5)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 良土 c.黄橙色 e.良好
25-52	"	かわらけ	(10.9)	(6.1)	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 砂質良土 c.橙色 e.良好 f.口縁部にタール状の煤付着

25-53	"	かわらけ	(11.7)	(7.6)	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.黄橙色 e.良好
25-54	"	かわらけ	(12.7)	(8.8)	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや良土 c.橙色 e.良好
25-55	"	かわらけ	(13.3)	(11.4)	3.3	a.手づくね 外底指頭圧痕 b.微砂 海綿骨芯 粉質良土 c.黄橙色 e.良好
25-56	"	瀬戸 卸皿	口縁部 残存量2.6×3			b.灰白色 砂粒 良土 d.灰白色 やや薄く施釉 e.良好 軟質
25-57	"	常滑 片口鉢	口縁部 残存量5.4×8.4			b.灰色 砂粒 白色粒多め c.灰色
25-58	"	瓦質火鉢	口縁部片 残存量6.5×7			b.灰色 砂粒 黒色微砂 雲母 c.灰色
25-59	"	平瓦(女瓦) 八幡宮Ⅰ期	残存量9.4×8.3 厚さ2.1			a.端面を一回のへら削り施す 凹面:布目痕無く前面に荒れ砂 凸面:X状の針格子叩き目 離れ砂が叩き締めで打ち込まれている b.良土 混入物無し c.灰白色 e.軟質気味 f.鶴岡八幡宮中世最下層共半瓦と同類(女瓦ⅡB類)

表9 遺物観察表(8)

()は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	寸法			a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
			口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	
25-60	第5面遺構外	鉄製品 釘	残存長 4.9			
25-61	"	硯	残存量8.5×6.3 中央左側部片			a.台形 b.頁岩 c.黒色 f.上面剥離が著しい 京都鞍馬
29- 1	第6面土坑7	かわらけ	(7.1)	(4.4)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄橙色 e.良好
29- 2	第6面遺構外	かわらけ	(7.4)	(4.7)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
29- 3	"	かわらけ	7.6	5.1	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 良土 c.橙色 e.良好
29- 4	"	かわらけ	(8.0)	(5.5)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
29- 5	"	かわらけ	7.8	5.2	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
29- 6	"	かわらけ	8.1	6.5	1.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.黄橙色 e.良好
29- 7	"	かわらけ	(11.6)	(7.6)	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
29- 8	"	かわらけ	(12.5)	(6.6)	3.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄橙色 e.良好
29- 9	"	かわらけ	(12.7)	(7.5)	3.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄橙色 e.良好
29-10	"	かわらけ	(12.7)	(9.0)	3.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
29-11	"	かわらけ	(12.4)	(7.8)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好 f.内側底部辺りに墨痕のようなシミあり
29-12	"	平瓦(女瓦) 八幡宮Ⅰ期	残存量5.1×5.1 厚さ1.8~1.9			a.凹面:布目痕 縦位ナデ 凸面:叩き目不明瞭 縦位ナデ b.灰白色 砂粒 黒色粒 小石粒 良土 c.灰白色 e.良好
29-13	"	平瓦(女瓦) 永福寺Ⅱ期 D類	残存量6×7.3 厚さ2.1			a.凹面:布目痕 丁寧縦位ナデ 凸面:叩き目不明瞭 横位ナデ 離れ砂付着 b.灰白色 砂粒 黒色粒 良土 c.灰色 e.良好
29-14	"	平瓦(女瓦)	残存量9×6 厚さ2.1~2.2			a.凹面:縦位ナデ 凸面:斜格子叩き目 ナデよりも摩耗してツルツルする b.灰白色 砂粒 小石粒 良土 c.灰色 e.良好 f.凹面に○如来○と文字が飛び出て印字
29-15	"	鉄製品 釘	残存長10 厚さ0.7			全体が鉄分で凝固した汚れに覆われている
29-16	"	鉄製品 釘	長さ5.4 厚さ0.7			全体が鉄分で凝固した汚れに覆われている

第四章 まとめ

発掘調査では概ね6時期の生活面に伴う遺構と遺物を確認しており、前章までにその調査概要を述べてきた。ここでは各面の遺構の変遷からⅠ～Ⅳ期の遺構群として大別区分して各期の概略を記してまとめにかえたい。

Ⅰ期遺構群：第6面 Ⅱ期遺構群：第5・4面 Ⅲ期遺構群：第3面 Ⅳ期遺構群：第2・1面

Ⅰ期遺構群は13世紀後半と考えられ、礎石建物や石切場が検出されているが、当該期における礎石建物の性格として寺院の可能性が推測される。この礎石建物が宝蓮寺伽藍の一部であったかは言及できないが、この地の谷戸開発の初期段階に寺院が展開することは、鎌倉市内の谷戸利用の様相を示す調査事例に共通するところであろう。また調査区北側で検出された石切場跡であるが、この石切場で採掘されたであ

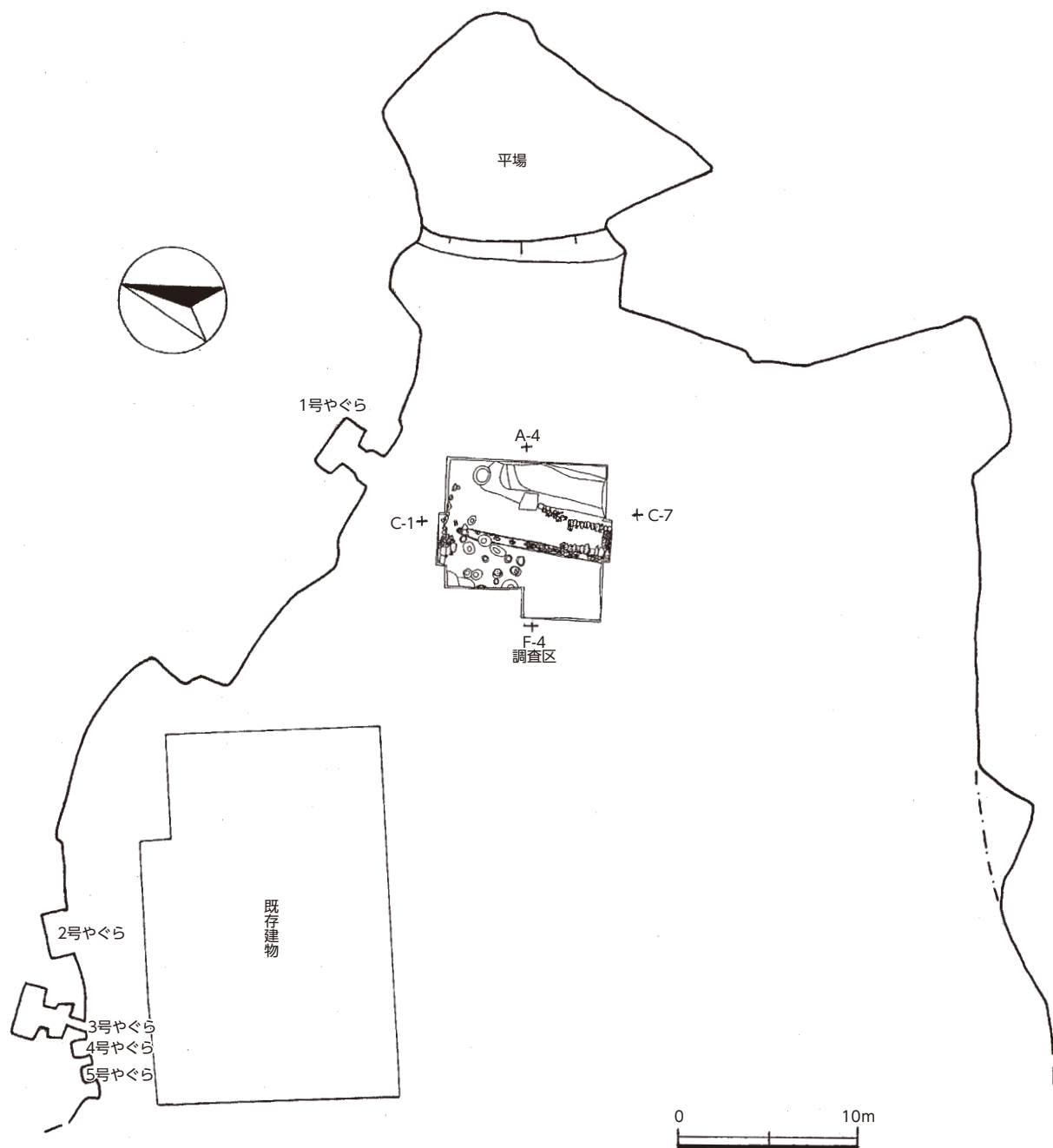


図31 調査地遺構変遷図

ろう同じ石材の切石が、Ⅱ期遺構群に相当する第5面からも検出されている。このことは礎石建物と同時期に石切場が存在していたと考えるよりもⅠ期遺構群が、場の使われ方変化に伴い次のⅡ期遺構群へと移行する際に切石を採掘したと考えられよう。

Ⅱ期遺構群ではⅠ期遺構群に存在していた建物は廃絶したか、もしくは調査区外の場所へ移動した可能性が高く、場の使われ方が一変したことが窺える。しかし、Ⅲ期遺構群の時期に移行すると土塁状遺構や堀のような深い溝に代表されるように当調査地が宗教的な広い範囲の一部に使用されることになる。

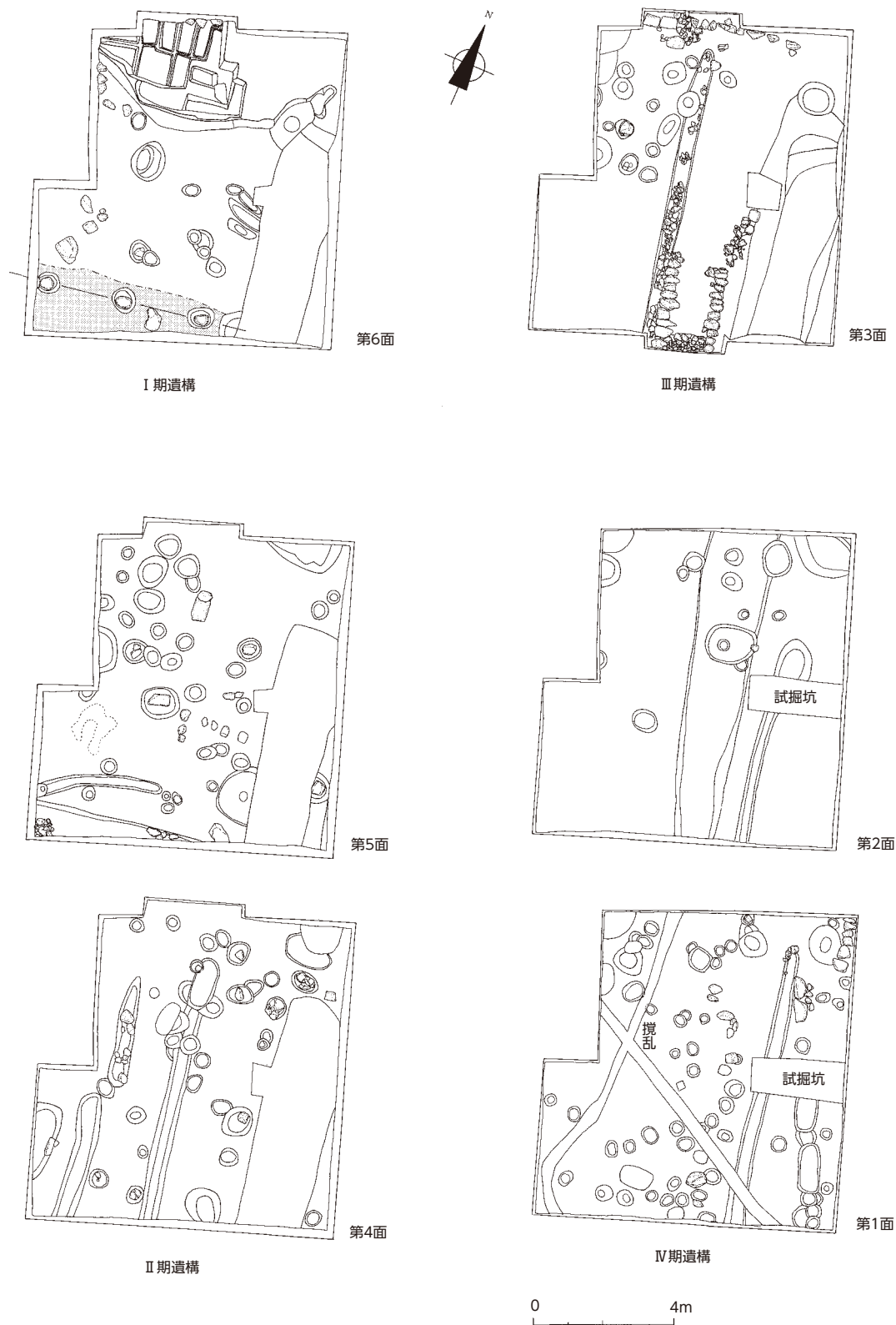


図32 遺構変遷図

表10 遺物分類別出土数量・比率表

出土地種類		1面	2面	3面	4面	5面	6面	個数	比率(%)
かわらけ	ロクロ	159	248	982	482	504	78	2453	87.48
	手捏ね	2	0	0	0	15	0	17	0.61
	白	0	2	2	0	0	1	5	0.18
舶載陶磁器	青磁	0	0	1	0	2	0	3	0.11
	青白磁	0	1	0	0	0	0	1	0.04
国産陶磁器	瀬戸	5	2	3	0	1	0	11	0.39
	常滑	25	22	58	59	24	1	189	6.74
土製品	瓦	1	0	1	3	4	0	9	0.32
	火鉢	1	1	4	2	1	0	9	0.32
	その他	0	1	4	0	0	0	5	0.18
石製品	硯	0	0	0	0	1	0	1	0.04
	その他	0	0	2	0	0	0	2	0.07
金属製品	釘	0	0	10	8	5	4	27	0.96
	銭	0	0	3	4	0	0	7	0.25
	鉄滓	0	10	1	3	0	0	14	0.5
	その他	0	4	2	2	0	0	8	0.29
自然遺物	骨	0	2	6	4	3	0	15	0.53
	炭	0	0	0	0	2	0	2	0.07
	玉石	0	0	0	0	24	2	26	0.93
合計		193	293	1079	567	586	86	2804	
比率(%)		7	10	39	20	21	3		

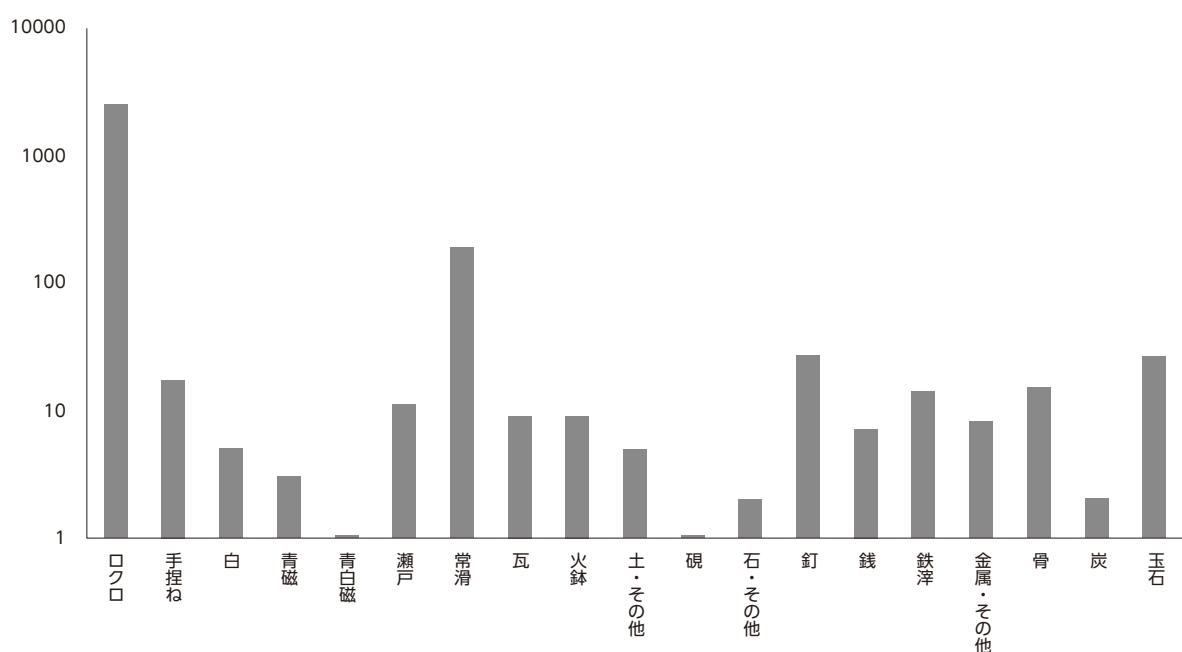


表11 各面の遺物分類表

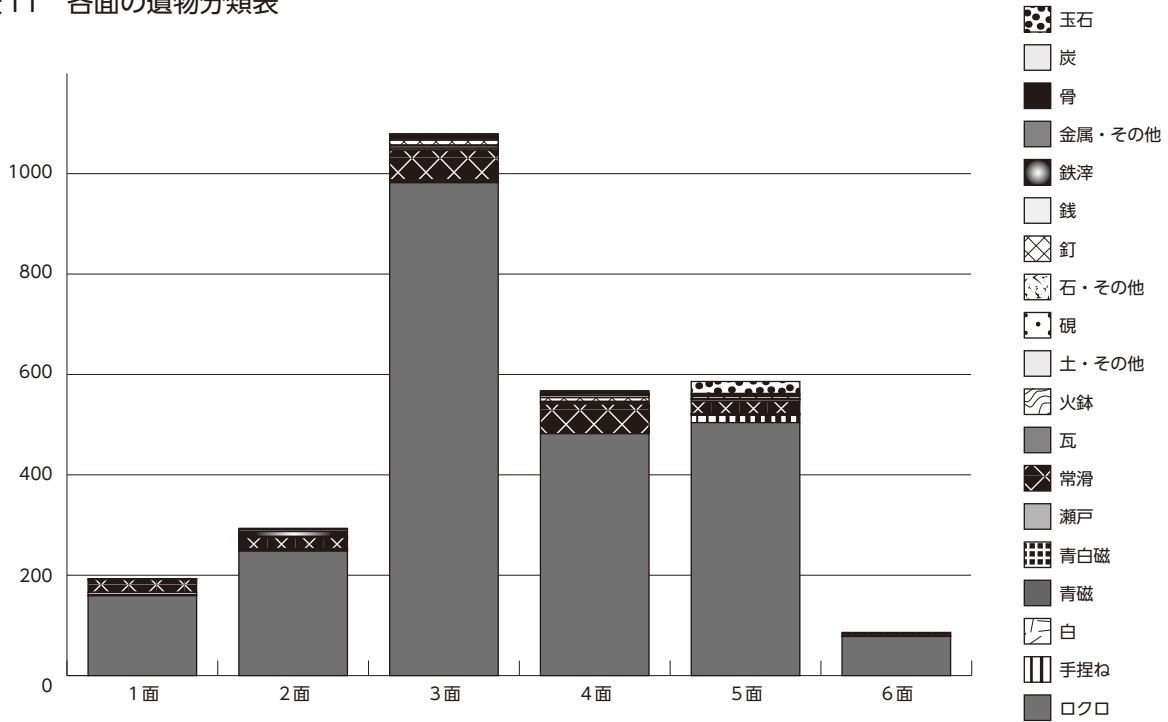


表12 第3面 溝1 遺物分類別

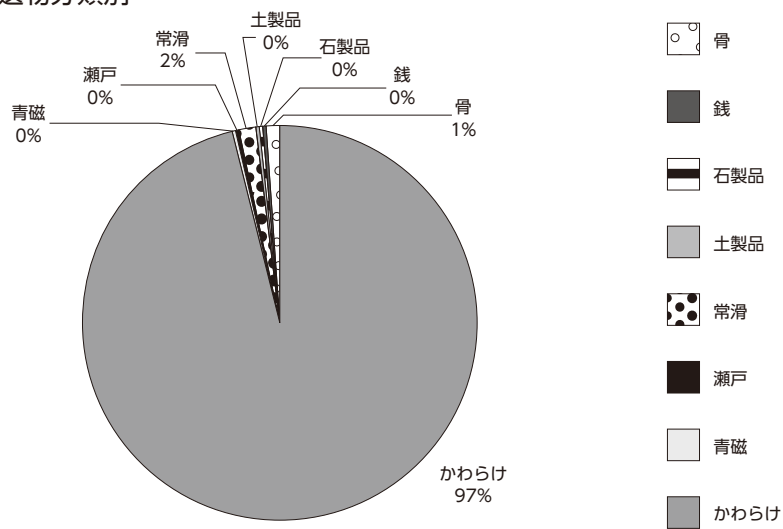
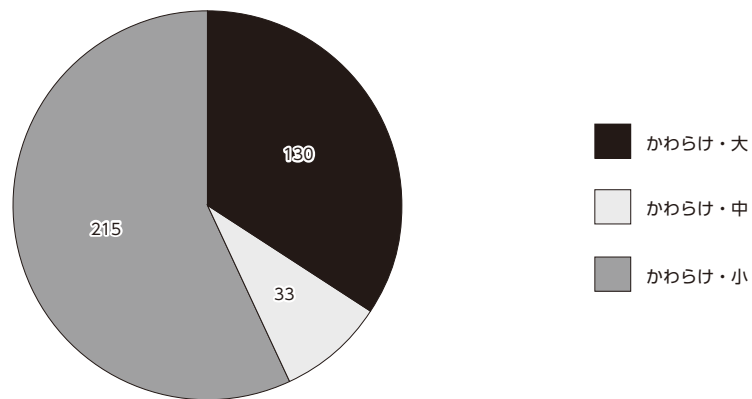


表13 第3面 溝1 かわらけ器種別分類



しかしながら第2・1面で次のIV期遺構群になると、大型の区画を示す遺構は廃絶されて確認されなくなる。出土遺物の中に鉄滓や鞆の羽口・埴埦に代表される鑄造関係の遺物が見られることから、この場の様相がかなり変化したことが想像できる。この場の使われ方が寺院伽藍から外れ位置になったものか、もしくはIV期遺構群の年代が想定される14世紀中頃までに寺院が衰退・廃絶したことも考えられよう。

ところで今回の発掘調査により寺院跡を思わせる宗教的な空間をI期～III期遺構群で捉えることができたが、これらの遺構が宝蓮寺であると確証できるものはない。図31の調査地遺構配置図で示したように調査地東奥の一段高く造成された平場は、その位置関係から3期遺構群の土塁状遺構と堀状の溝や北側山裾の切岸した崖面に確認された残りの良い3基のやぐらなど、その遺構配置から関連性が考えられる。いずれにしても今後の周辺の調査によりさらなる事実解明が進むことを期待したい。

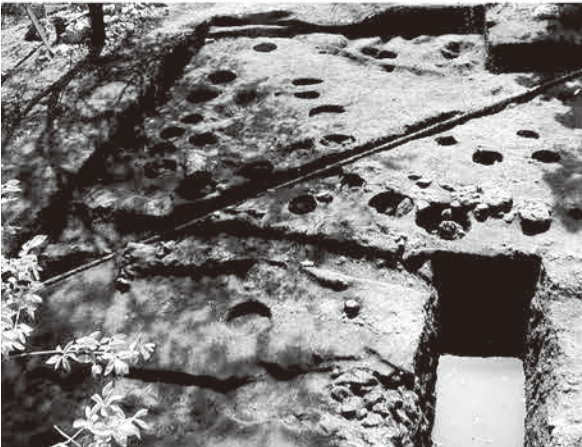
図版1



△1. 重機による表土掘削風景



△2. 第1面全景(南から)



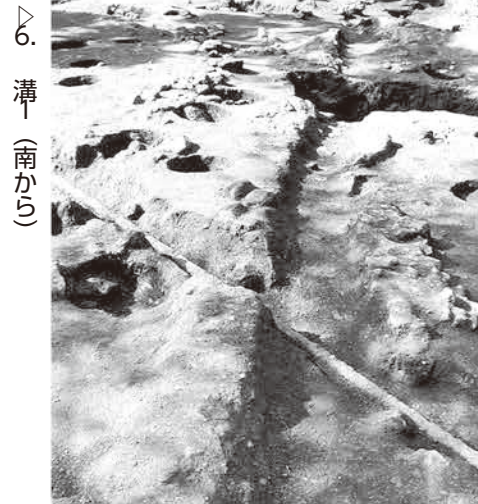
△3. 第1面全景南側(東から)



△4. 第1面全景北側(東から)



△5. 第1面西側(南から)

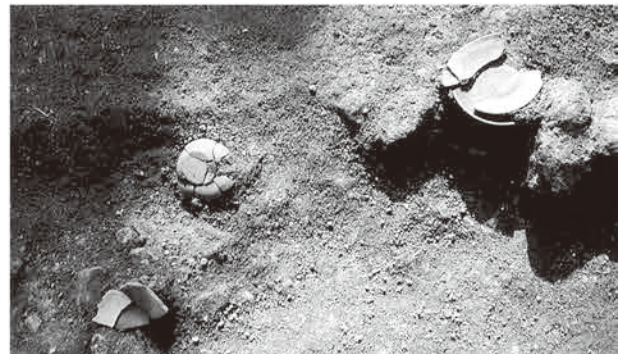


6. 溝(南から)



△7. 土坑5土層堆積(東から)

▷8. 溝遺物出土状況





◁ 1. 第2面全景(南から)



▷ 2. 第2面全景(東から)

▽ 3. 第2面西半部



▽ 4. 第2面南西部

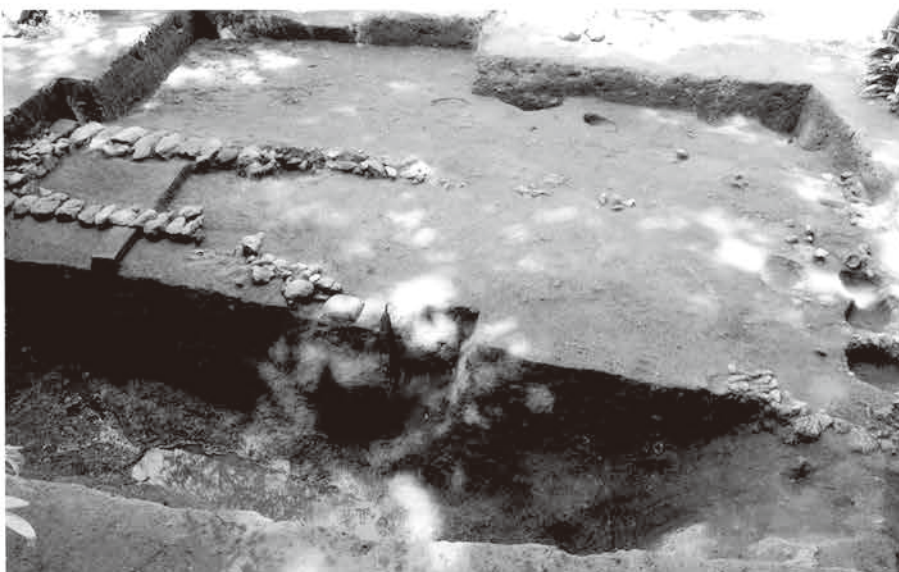




◁ 1. 第3面全景(南から)



▷ 2. 第3面全景(北から)

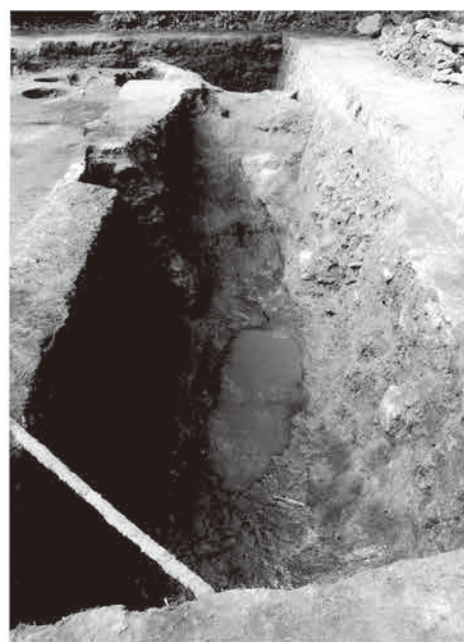


◁ 3. 第3面全景(東から)

第3面

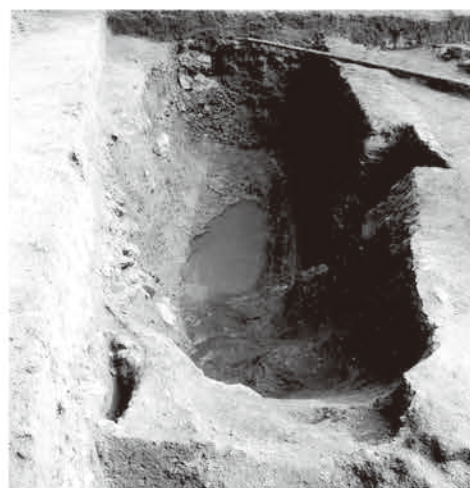


△1. 土塁・溝 (南から)



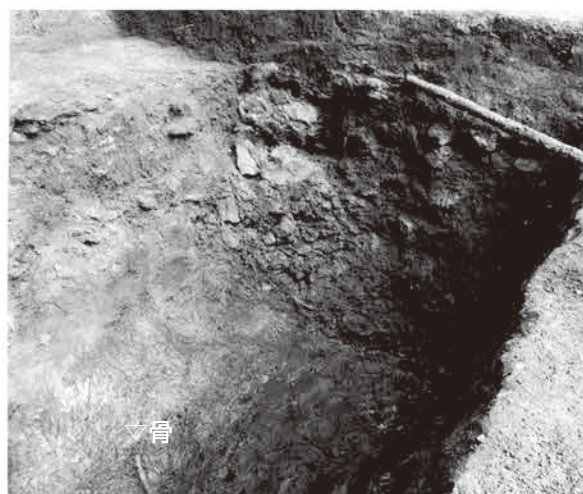
△3. 溝1 (南から)

▽2. 土塁・溝1 (西から)



△4. 溝1 (北から)

▽5. 溝1土層断面 (調査区東壁)



△6. 溝1土層断面 (調査区南壁)

▽7. 溝1骨出土状況





1. 第4面全景(南から)



2. 第4面全景(東から)



3. 第4面遺構(北から)



◁1. 第5面全景(南から)



▷2. 第5面遺構(北から)



◁3. 第5面全景(東から)



▽1. 第5面全景(西から)

▽2. かわらけ溜り(西から)



▽3. 第6面全景(南から)



△1. 第6面礎石列 (西から)



△2. 同左 (北西から)



△3. 石切場跡



△4. トレンチ2



△5. 調査区南壁東端土層



△6. 調査区東壁土層 (西から)



△1. 2号・5号やぐら(東から)

※図32の調査地遺構・地形を参照されたい

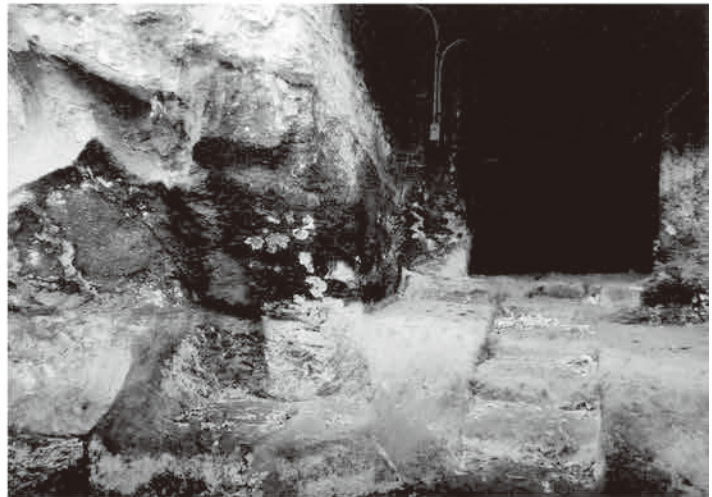


△2. 3号やぐら



△4. 2号やぐら

▽3. 2号・4号やぐら



▽5. 平場 (調査区東端奥の平場地形)



▼第1面



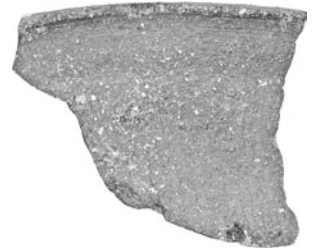
7-1



7-2



7-3



7-4

△土坑5

▽溝1



7-5



7-7



7-6

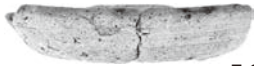


7-8



7-9

▽P13



7-10

▽1面遺構外



7-11



7-12



7-13



7-16



7-17



7-14



7-15



7-18

▼第2面

▽土坑2



10-1



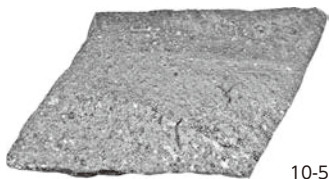
10-2



10-3



10-4



10-5

▽土坑7



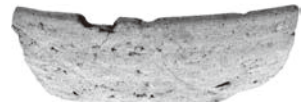
10-6



10-7



10-8



10-9

▽溝1



10-10



10-11



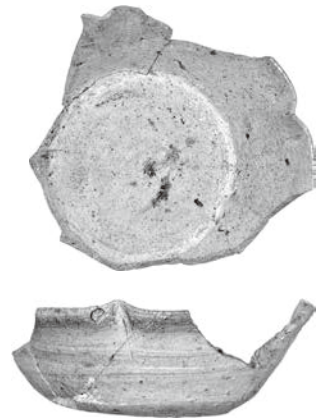
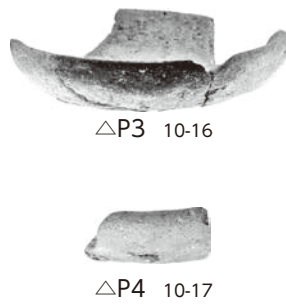
10-12



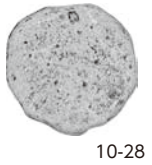
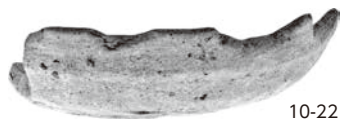
10-13

図版 11

▽P2



▽2面遺構外



▼第3面

▽土坑 1



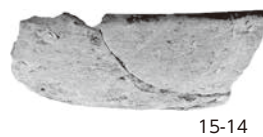
▽土坑 4



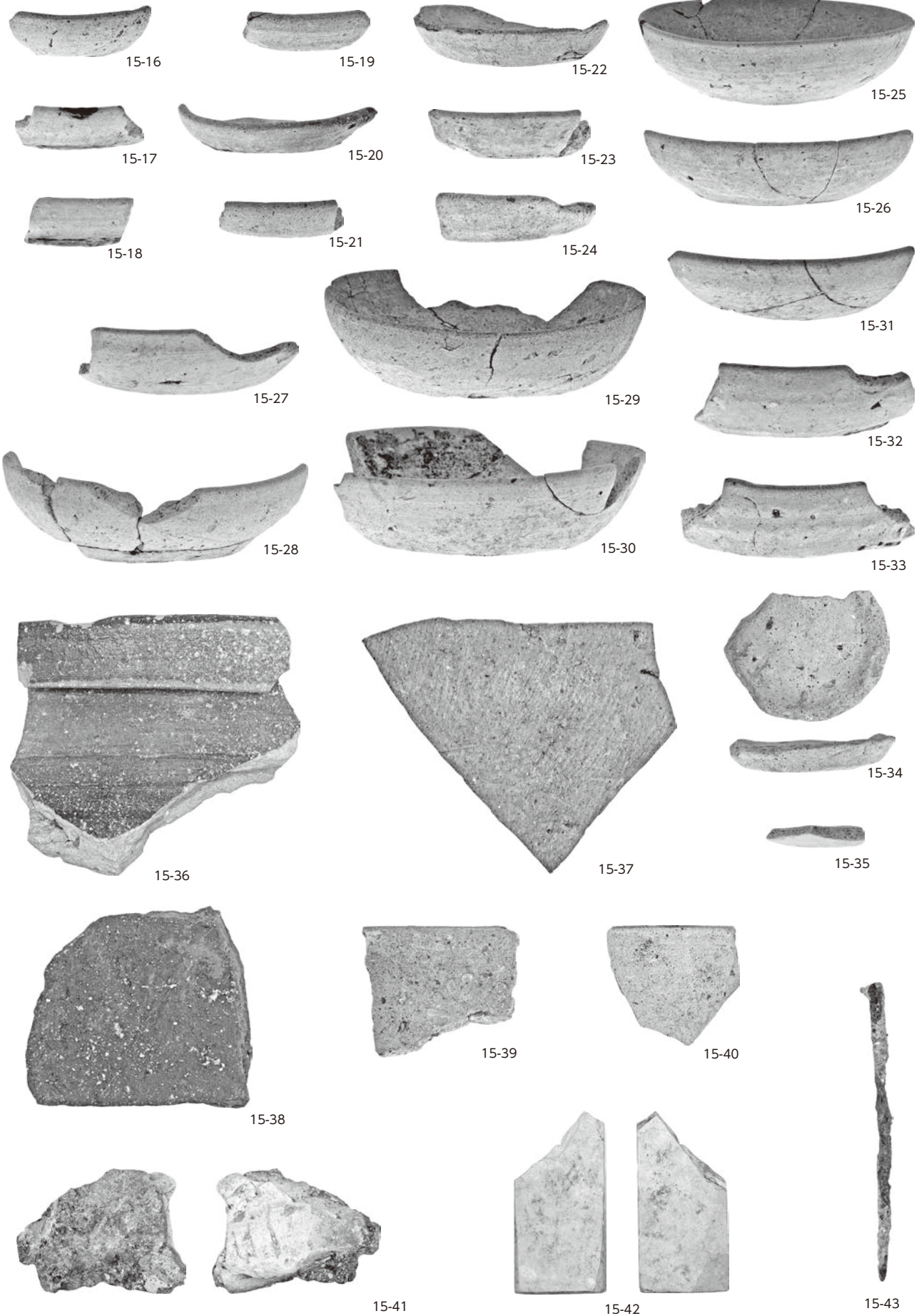
▽土坑 6



▽土罫遺構

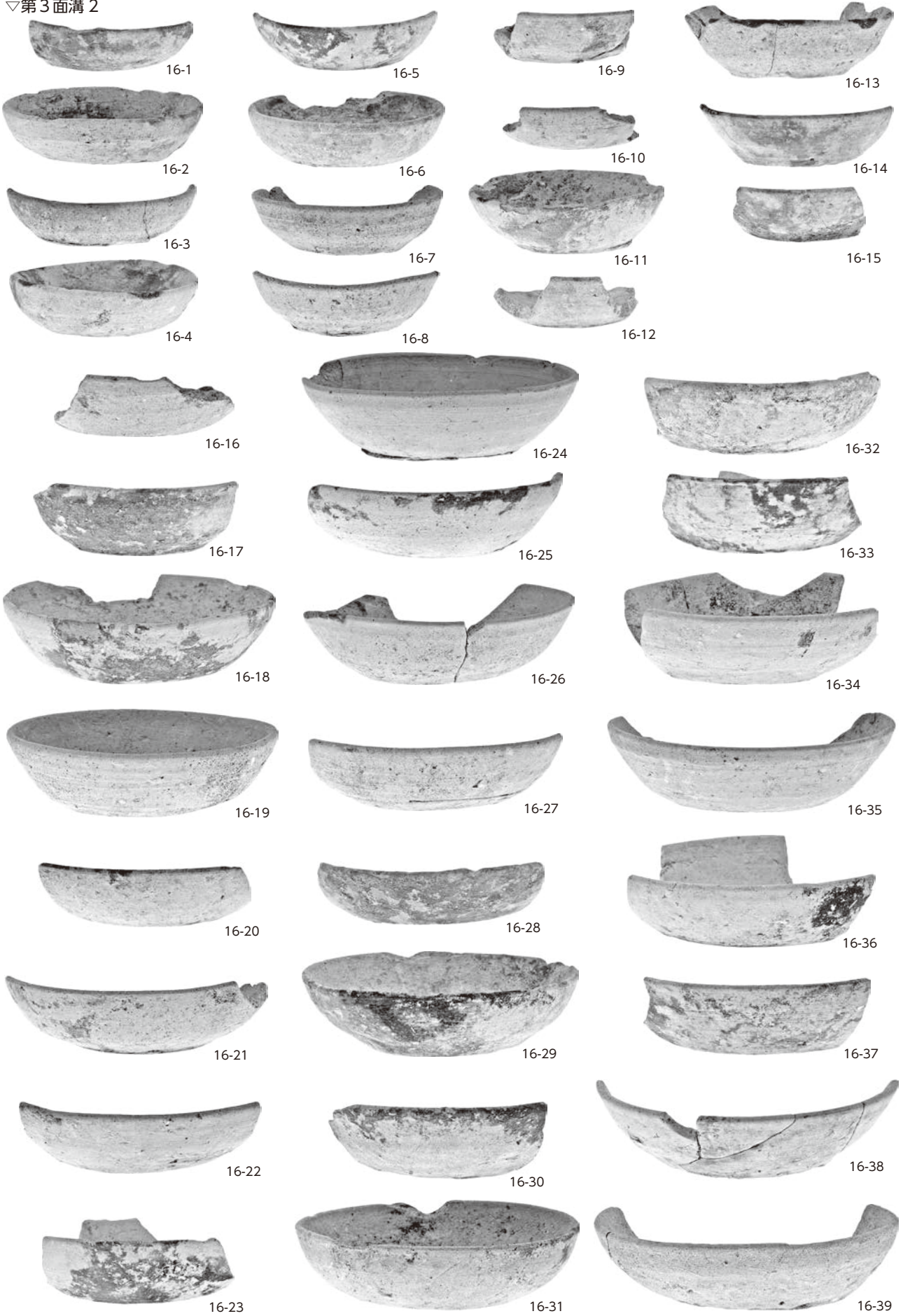


▽第3面遺構外

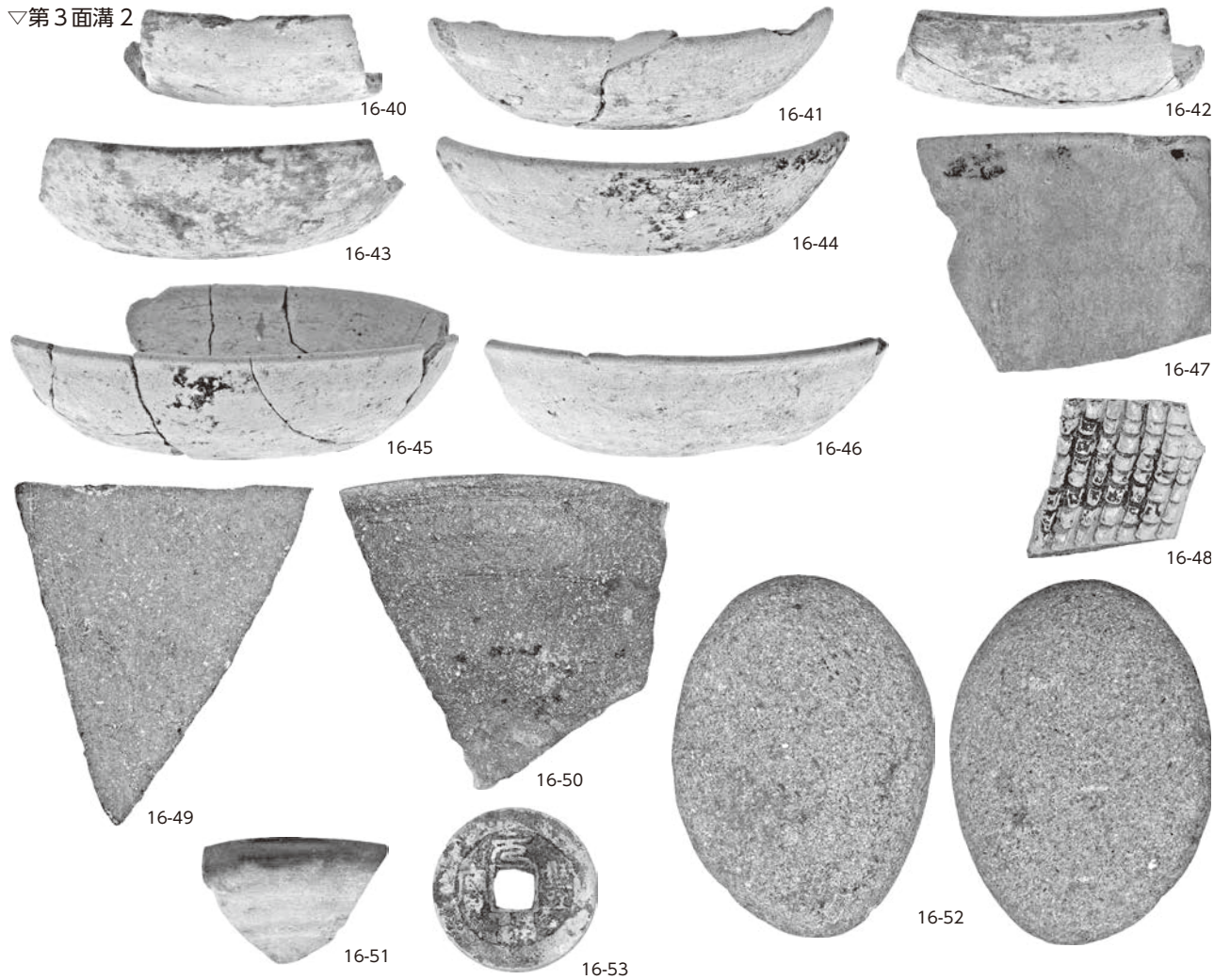


图版 13

▽第3面溝 2



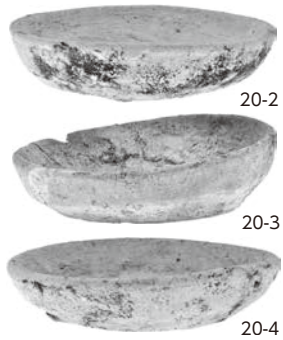
▽第3面溝 2



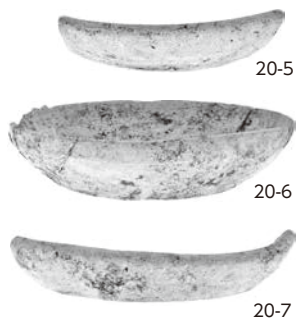
▼第4面



▽土坑 5

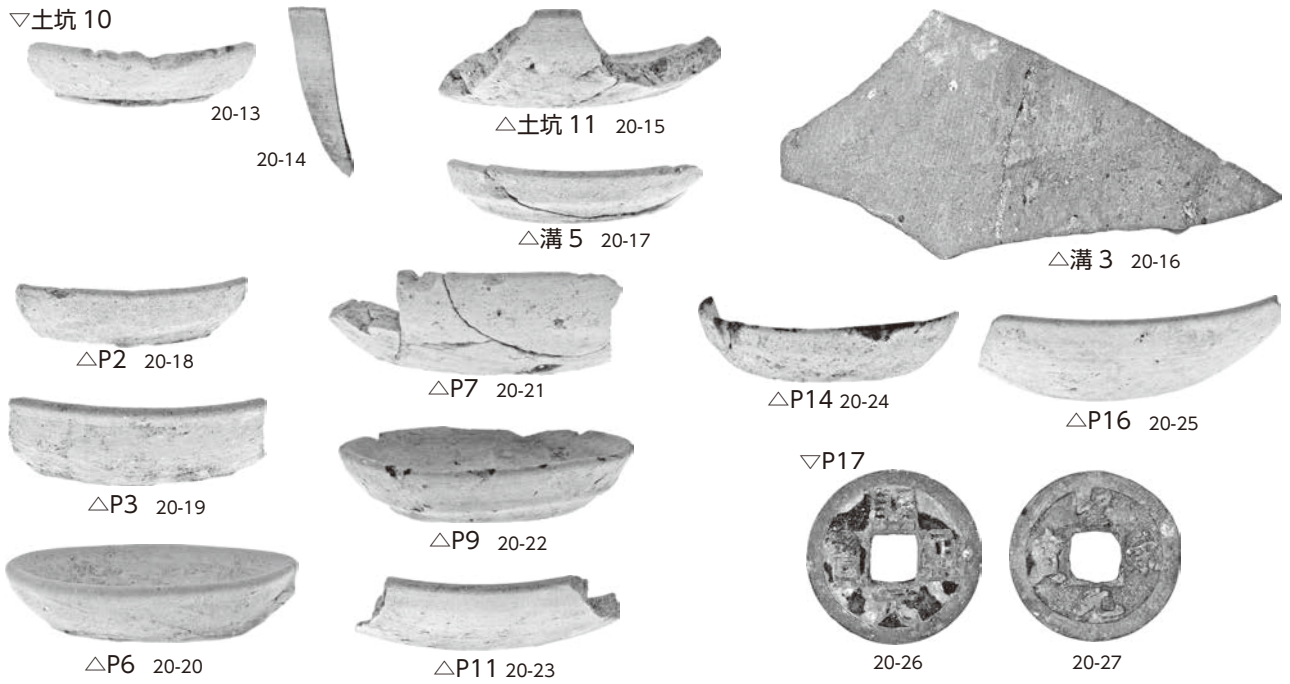


△土坑 3

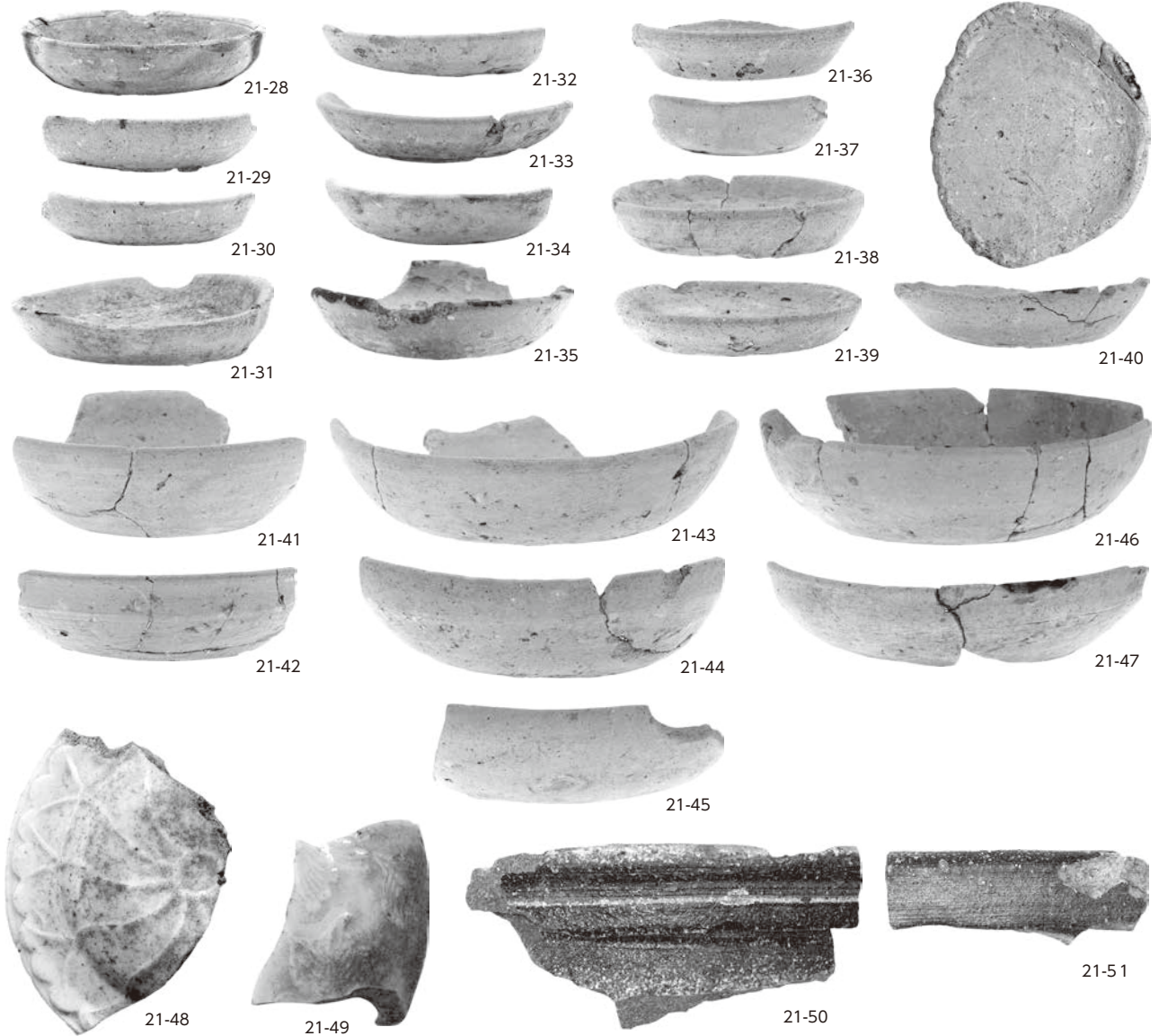


図版 15

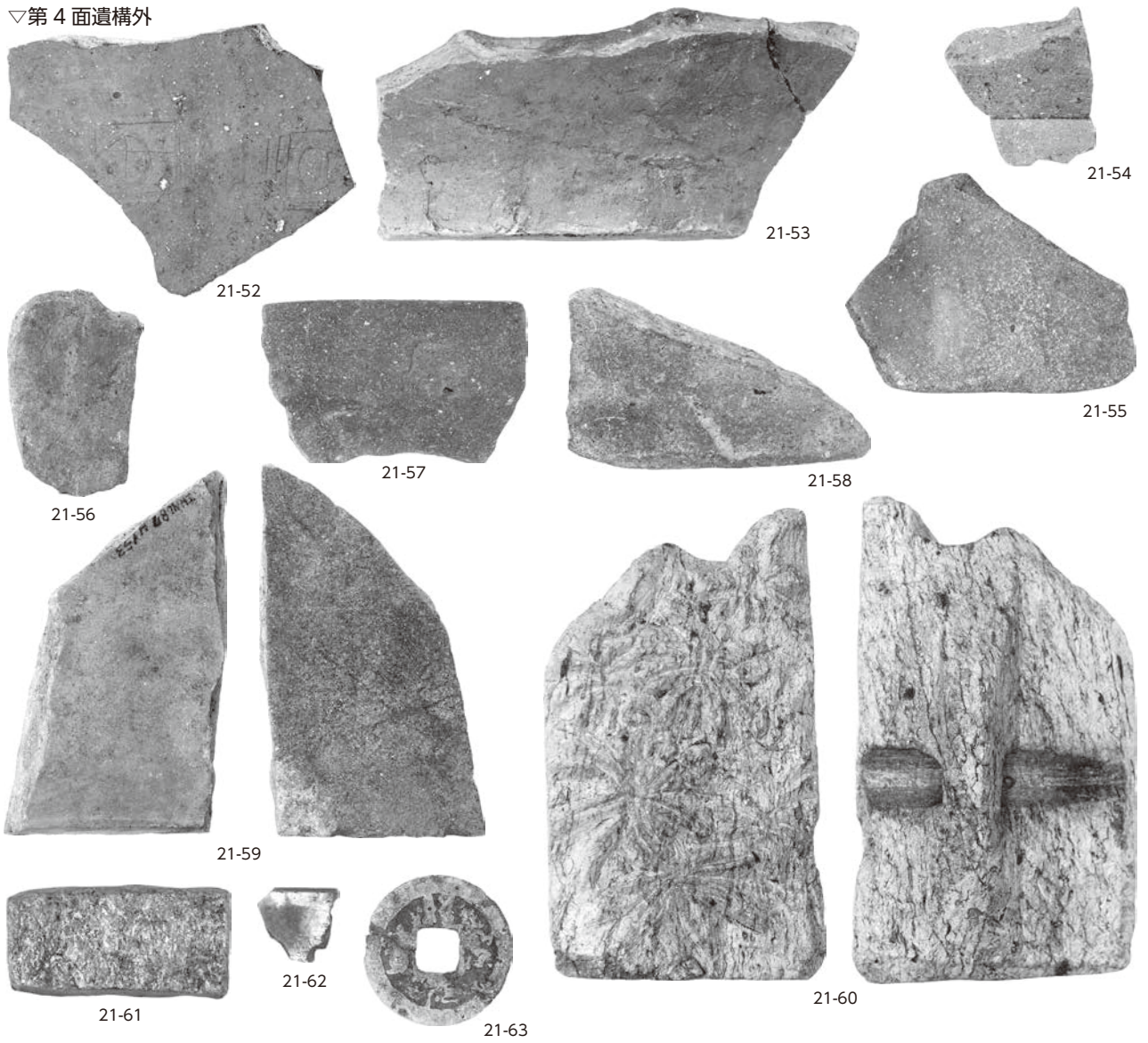
▽土坑 10



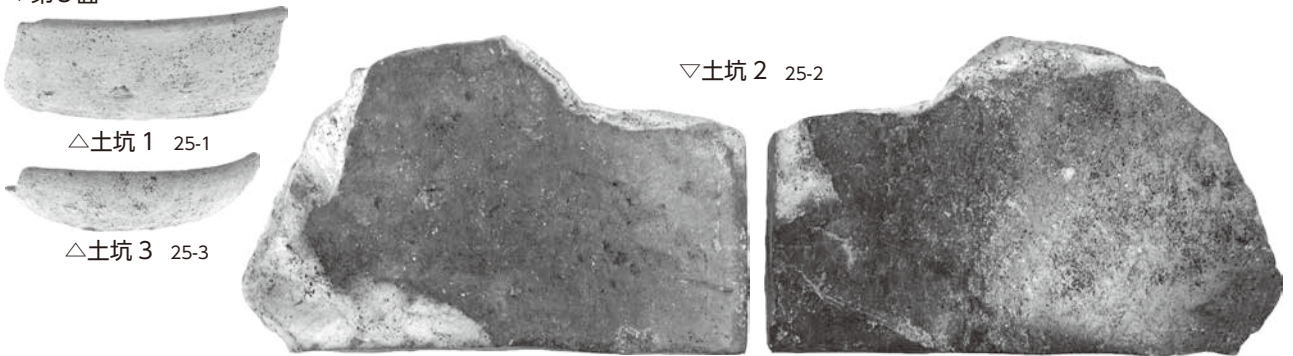
▽第 4 面遺構外



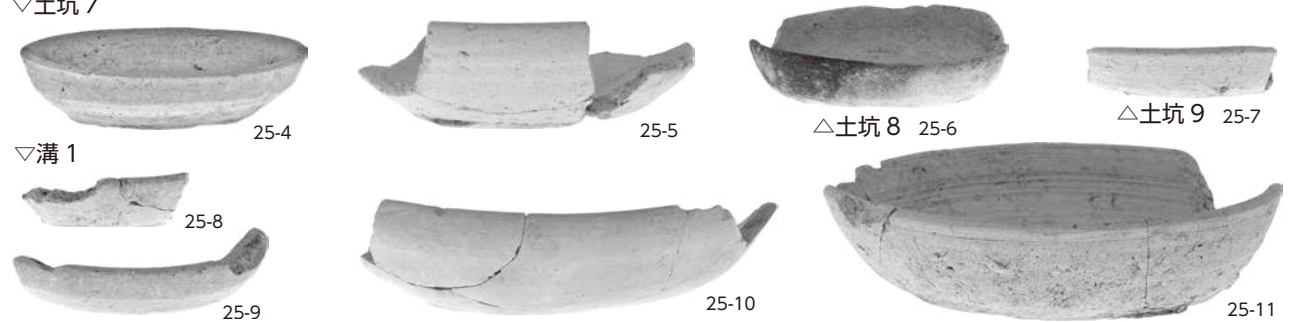
▽第4面遺構外



▼第5面

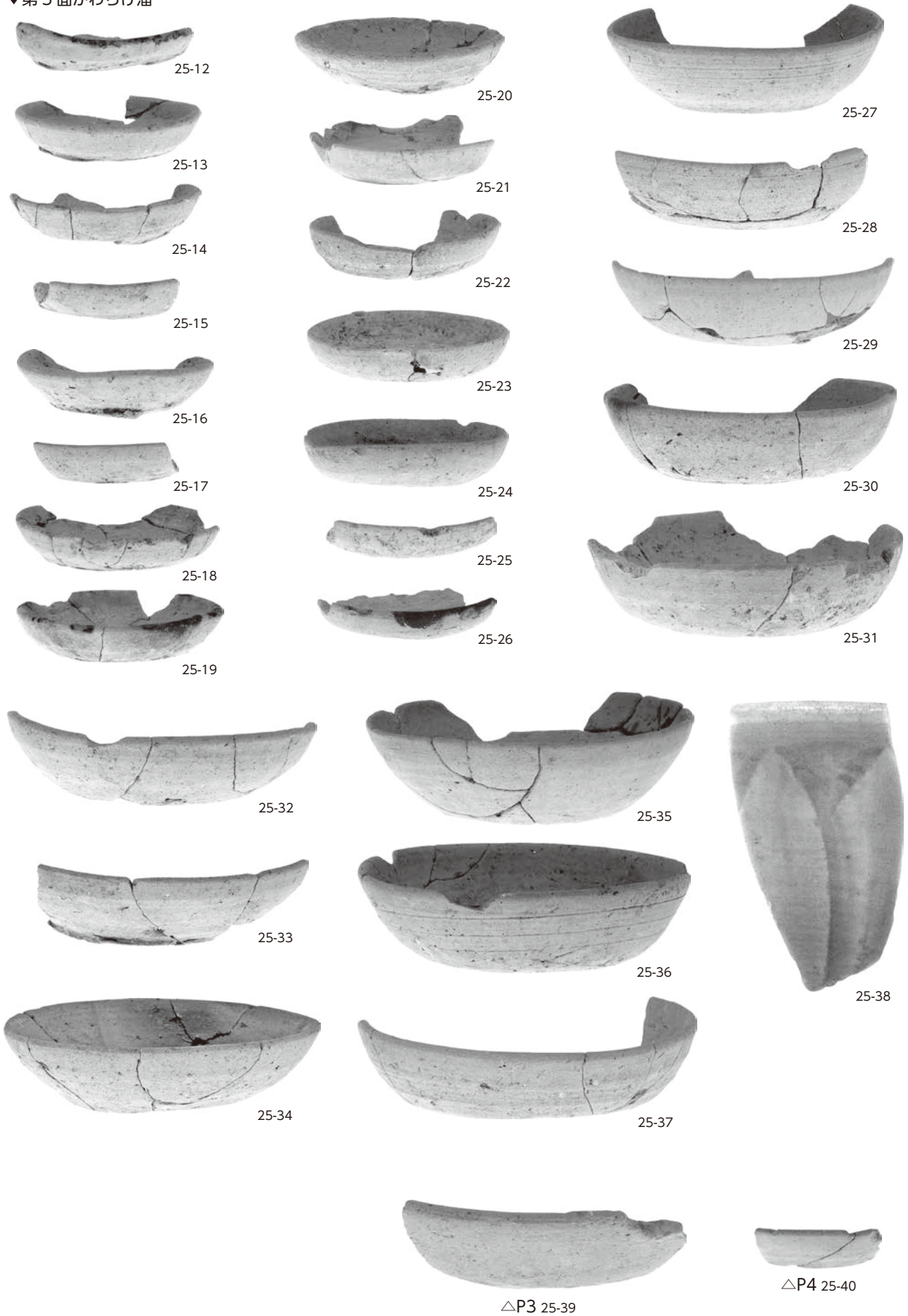


▽土坑7

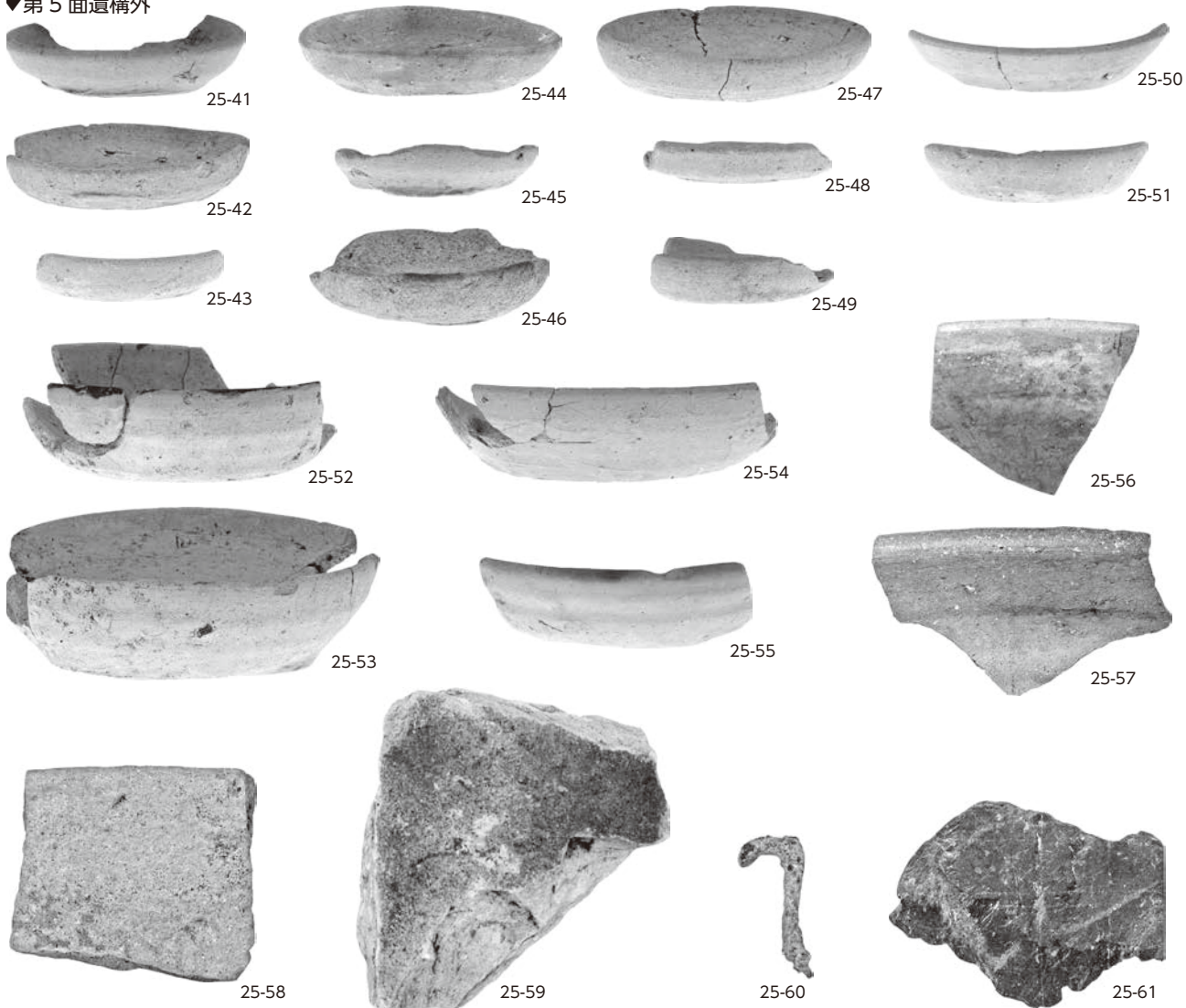


図版 17

▼第5面かわらけ溜



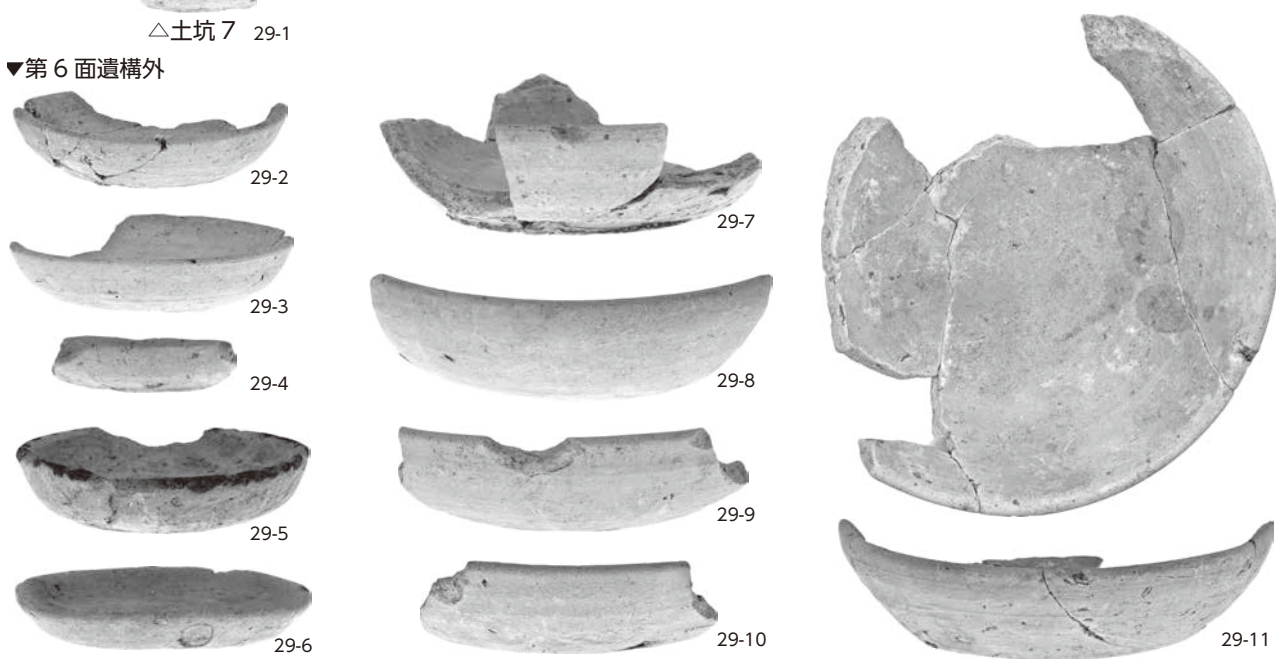
▼第 5 面遺構外



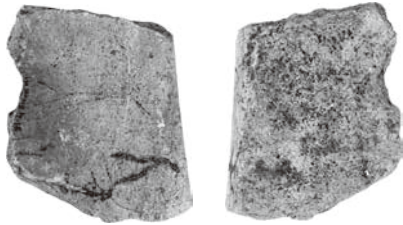
▼第 6 面



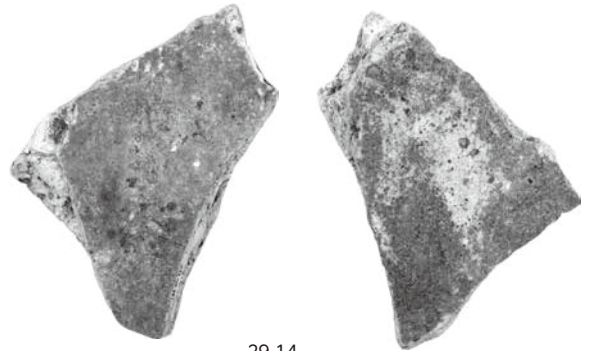
▼第 6 面遺構外



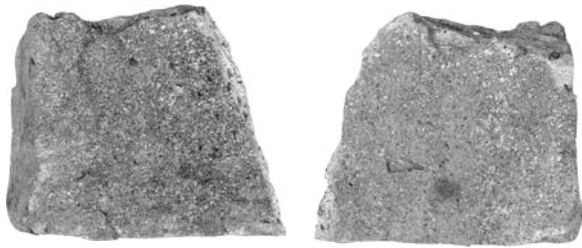
▼第 6 面遺構外



29-12



29-14



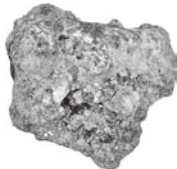
29-13

□
如
来



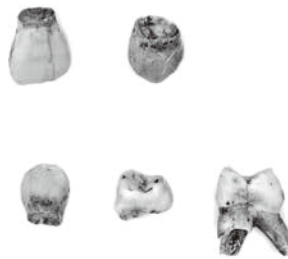
文字部分拡大

▼第 3 面土坑 6



スラグ

▼第 6 面上 人骨 (歯)



▼第 3 面溝 1



獣骨



人骨

覺園寺旧境内遺跡 (No.435)

二階堂字会下 351 番 1

例 言

1. 本報は「覚園寺旧境内遺跡」内、二階堂字会下351番1における埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 調査期間 2005年6月21日～同年8月31日
調査面積 30m²
3. 本調査地点の略称はKNE351とした。
4. 調査体制
担当者 馬淵和雄
調査員 松原康子(資料整理)・鍛冶屋勝二・松葉崇・根本志保(資料整理)・沖元道(資料整理)
調査補助員 鈴木弘太・岩崎卓治(資料整理)
作業員 河原龍雄・田口康雄・沼上三代治(社団法人鎌倉シルバー人材センター)
5. 本報作成分担
遺構図整理 沖元
遺物実測 松原・根本・岩崎
同墨入れ 松原・根本・岩崎
同観察表 松原
原稿執筆 馬淵
編集・総括 馬淵

目 次

本 文 目 次

第一章 調査地点の概観	165
1. 位置と地勢	165
2. 歴史的環境	168
第二章 調査の概略	174
1. 調査にいたる経緯	174
2. 調査方法	174
3. 調査経過	175
第三章 調査結果	176
第1節 概要	176
1. 層序	176
第2節 各説	178
1. I面	178
2. II面	178
3. IIIa面	183
4. IIIb面	187
5. IIIc面	188

6. III d面	189
7. IV a面	193
8. IV b面	193
9. V a面	193
10. V b面	195
11. VI面	197
第四章 まとめと考察	205
1. 遺構の変遷と年代	206
2. 火災と泥岩地形層の年代的位置づけについて	209
3. まとめ	211

挿 図 目 次

図1 調査地点と周辺の遺跡・旧跡	166	図14 III c面遺構全図・溝5・ P.18出土遺物	189
図2 明治15年頃の鎌倉中心部と調査地点	167	図15 III d面遺構全図・同出土遺物	190
図3 覚園寺境内絵図	171	図16 建物1・柱穴列1・柱穴列2, 同出土遺物	191
図4 調査区設定図	174	図17 IV a面・IV b面遺構全図, 同面出土遺物	192
図5 調査区南壁土層断面	177	図18 V a面・V b面遺構全図, 同面出土遺物	194
図6 I面遺構全図・I面出土遺物	179	図19 V a面土坑6・9, 段1, 同出土遺物	195
図7 II面遺構全図・II面出土遺物(1)	180	図20 VI面遺構全図, VI面出土遺物	196
図8 II面出土遺物(2), 囲炉裏・同出土遺物	181	図21 VI面建物2・3	197
図9 II面土坑2~4, 同出土遺物	182	図22 遺構変遷図(1)	206
図10 III a面遺構全図, 礎板列1, III a面出土遺物(1)	184	図23 遺構変遷図(2)	207
図11 III a面出土遺物(2), 溝4, 同出土遺物	185	図24 近隣調査地点対応図	208
図12 III b面遺構全図, 竪穴建物1, 同出土遺物	186	図25 泥岩地形層・炭化物層対比図	210
図13 溝2・土坑10・土坑5, 同出土遺物	187		

表 目 次

表1 出土遺物観察表(1)	198	表5 出土遺物観察表(5)	202
表2 出土遺物観察表(2)	199	表6 出土遺物観察表(6)	203
表3 出土遺物観察表(3)	200	表7 出土遺物計量表	204
表4 出土遺物観察表(4)	201		

図 版 目 次

<p>図版 1-1 薬師堂ヶ谷入口から谷奥(北) を望む……………212</p> <p>1-2 調査地点付近の薬師堂ヶ谷(北から)</p> <p>1-3 調査地点近景(東から)</p> <p>図版 2-1 1区Ⅰ面全景(東から)……………213</p> <p>2-2 1区Ⅰ面全景(西から)</p> <p>2-3 1区Ⅰ面土師器皿(図6-2) 出土状況(東から)</p> <p>図版 3-1 1区Ⅱ面全景(東から)……………214</p> <p>3-2 1区Ⅱ面全景(西から)</p> <p>3-3 2区Ⅱ面全景(東から)</p> <p>3-3 2区Ⅱ面全景(西から)</p> <p>図版 4-1 Ⅱ面囲炉裏(東から)……………215</p> <p>4-2 Ⅱ面土坑2～4 遺物出土状況(南から)</p> <p>4-3 Ⅱ面石組遺構(南から)</p> <p>4-4 Ⅱ面漆器椀(図8-39)出土状況(南から)</p> <p>4-5 Ⅱ面囲炉裏周辺遺物出土状況(東から)</p> <p>図版 5-1 1区Ⅲa面全景(東から)……………216</p> <p>5-2 1区Ⅲa面全景(西から)</p> <p>5-3 2区Ⅲa面全景(東から)</p> <p>5-4 2区Ⅲa面全景(西から)</p> <p>図版 6-1 Ⅲa面1区南壁寄り遺物出土状況 (南から、一部Ⅱ面遺物含む)……………217</p> <p>6-2 Ⅲa面西端の石列(北から)</p> <p>6-3 Ⅲa面溝4と右岸(西岸)の石組(北から)</p> <p>図版 7-1 1区Ⅲb面全景(東から)……………218</p> <p>7-2 1区Ⅲb面全景(西から)</p> <p>7-3 2区Ⅲb面全景(東から)</p> <p>7-4 2区Ⅲb面全景(西から)</p> <p>図版 8-1 Ⅲb面土坑5(南から)……………219</p> <p>8-2 Ⅲb面竪穴建物1(東から)</p> <p>8-3 Ⅲb面漆器皿(図13-22)出土状況 (西から)</p> <p>8-4 Ⅲc面P.18合わせ口漆器皿(図14-5・7・8) 出土状況</p> <p>図版 9-1 1区Ⅲd面全景(東から)……………220</p> <p>9-2 1区Ⅲd面全景(西から)</p> <p>9-3 2区Ⅲd面全景(東から)</p> <p>9-4 2区Ⅲd面全景(西から)</p>	<p>図版 10-1 2区Ⅲd下部面全景(東から) ……221</p> <p>10-2 2区Ⅲd下部面全景(西から)</p> <p>10-3 1区Ⅳa面全景(東から)</p> <p>10-4 1区Ⅳa面全景(西から)</p> <p>図版 11-1 1区Ⅳb面全景(東から)……………222</p> <p>11-2 1区Ⅳb面全景(西から)</p> <p>11-3 Ⅳb面土師器皿(図17-15・同-16,奥から) 出土状況(北から)</p> <p>11-4 Ⅳb面土師器皿(図17-10)出土状況 (西から)</p> <p>図版 12-1 1区Ⅴa面全景(東から)……………223</p> <p>12-2 2区Ⅴa面全景(東から)</p> <p>12-3 2区Ⅴa面全景(西から)</p> <p>図版 13-1 Ⅴa面段1下駄(図19-1) 出土状況(東から)……………224</p> <p>13-2 Ⅴa面角柱出土状況(北から)</p> <p>13-3 Ⅴa面P.29・P.30・土坑6検出状況 (南から)</p> <p>図版 14-1 1区Ⅴb面全景(東から)……………225</p> <p>14-2 1区Ⅴb面全景(西から)</p> <p>14-3 Ⅴb面段2(南から)</p> <p>図版 15-1 1区Ⅵ面全景(東から)……………226</p> <p>15-2 1区Ⅵ面全景(西から)</p> <p>15-3 2区南壁際深掘り(東から)</p> <p>15-4 Ⅵ面青磁碗(図20-6)出土状況(南から)</p> <p>図版 16-1 1区南壁中央部土層断面……………227</p> <p>16-2 2区南壁土層断面</p> <p>図版 17 出土遺物1……………228</p> <p>図版 18 出土遺物2……………229</p> <p>図版 19 出土遺物3……………230</p> <p>図版 20 出土遺物4……………231</p> <p>図版 21 出土遺物5……………232</p> <p>図版 22 出土遺物6……………233</p> <p>図版 23 出土遺物7……………234</p>
--	--

第一章 調査地点の概観

1. 位置と地勢

鎌倉市二階堂の谷奥にある覚園寺は、その前身を大倉薬師堂という。調査地点のある谷を「薬師堂ケ谷」というのはそのためである。薬師堂に冠される「大倉(蔵)」の地名が、正式の郷名だったかどうかはわからない。郷の厳密な範囲も不詳である。現在の十二所明王院の場所に所在した大慈寺の場所が建暦二年(1212)四月十八日の立柱・上棟の際に「大倉郷」となっていることからすれば(『吾妻鏡』同日条)、朝比奈峠近くまで「大倉」と呼ばれていたことがわかる。しかし、三浦大介義明長子義宗は平安時代末期に現在の杉本寺付近に住んで杉本義宗を名乗っており、その頃すでにあの一帯が「杉本」と呼ばれていたことは確実である。また、平安時代末期あるいは鎌倉時代のごく初期には、鶴岡八幡宮の辺りは「小林郷北山」と呼ばれている(『吾妻鏡』治承四年1180十月十二日条)。「大倉」は「大倉谷」とも呼ばれるので、地形からみると現在の二階堂一帯が相応しい。本来は杉本と小林郷両地域の間にあった地名だったのかもしれない。なお、ここで「大倉」といった場合は杉本と小林郷北山に挟まれた地域をさす。すなわち、現在の鎌倉市雪ノ下三～五丁目、および二階堂と呼ばれている地域が相当する。

その一方で、平安時代末期の創建と推測される杉本寺は、遅くとも鎌倉時代初期には「大倉観音堂」と呼ばれている。してみると「大倉」は、広範囲の総称と、限定的な地域名称との両様で使われていたのかもしれない。それとも「杉本」が郷の名ではなく、いわば郷内の小字のようなものだったのだろうか。広範囲の大倉郷は、あるいは律令時代に「荏草郷^{えかや}」と呼ばれていた地域の、後世の名前である可能性もあろう。そうであれば、時期は不詳にせよ、平安時代のある時点で変わったことになる。あるいは寛徳二年(1045)の荘園整理令に伴う郡郷再編の結果だろうか。しかし1000年近い歴史を持つ「大倉」の地名は、近代の行政当局による地名改変によって、鎌倉から失われた。

大倉は地勢上大きく二つに分かれる。すなわち、南半の山麓平野部と、北半の山稜部である。平野部は北からの二階堂川と東御門川が、東から下ってきた滑川本流に合流して形成されたもので、東西600～700m、南北400～500mほどの広さがある。この平野部は西側で鎌倉市域中心部の低平な沖積平野に出る。鎌倉時代に源頼朝が最初の幕府を置いたのがこの地である。北半の山稜部は東西・南北とも1km前後に及び、北端は今泉と境を接する。『吾妻鏡』建久二年(1191)二月十五日条によると、源頼朝は永福寺の寺地を求めるにあたり、この日夕刻大倉山の辺を歴覧したとあるので、北東のかなり奥まで「大倉山」と呼ばれていたことがわかる。

大倉山の山中には二階堂川支流の小河川が何本か流れ、それぞれが枝谷を形成する。薬師堂ケ谷の中央を流れる平子川も支流の1本であり、急な斜面を山腹に形成しながら西北から東南に向かって直線的に流下する。流域距離はほぼ1km、谷を出たところで北東から来た二階堂川に合流する。この川に開析された薬師堂ケ谷もやはり直線的な谷で、幅が狭く、平坦部は最大でも100mほどしかない。平坦部の標高は谷口で13mほど、谷尻では45mほどで、比高30mを越える。近世に成立したと推定される「覚園寺境内絵図」では、薬師堂ケ谷全体が寺の境内として描かれている。

調査地点は谷の入口から約400m入ったところにあり、ほぼ中間地点に近い薬師堂川右岸に位置する。原本が永享十一年(1439)以後成立の「境内絵図」(写)には、谷の途中に「門」と書かれた建物があり、そのすぐ南西脇にあたる。また「絵図」には、それぞれ「大楽寺」と「二条殿跡」と註された谷の窪みが西岸に見え、調査地点はこの二地点間の狭い川岸にある。地番は鎌倉市二階堂字会下351番1。

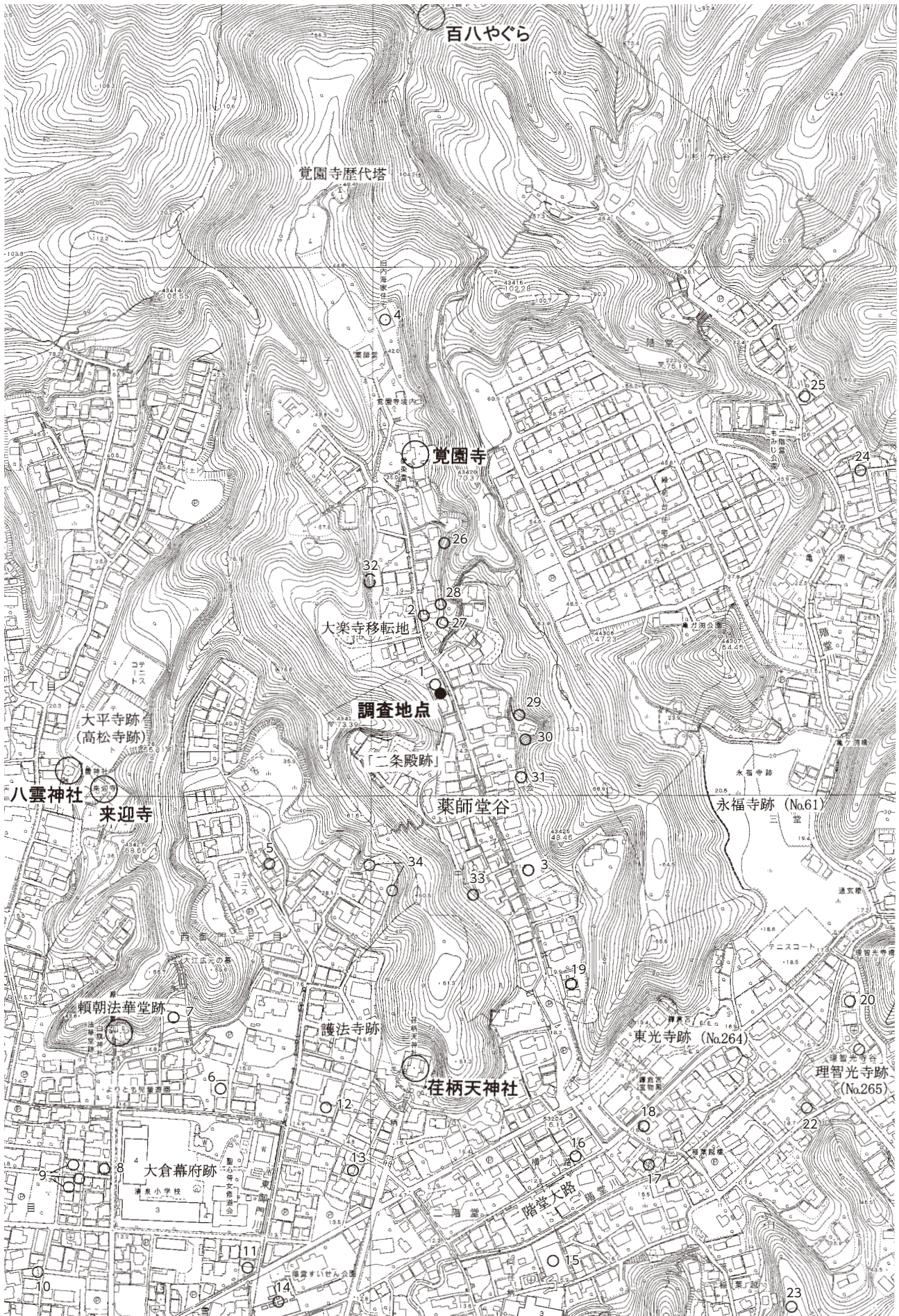


図1 調査地点と周辺の遺跡・旧跡

(No.435 覚園寺旧境内遺跡)

本調査地点 二階堂字会下351-1 1. 二階堂字会下351-3外(伊丹2004)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書26 第1分冊』(伊丹2010) 2. 二階堂字平子412-1外(汐見1995)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12 第2分冊』(汐見1996) 3. 二階堂字会下331-3外(降矢2004)『覚園寺旧境内発掘調査報告書』(2005 齋木・降矢他) 4. 二階堂字平子421(河野1979・1981)『覚園寺境内発掘調査報告書』(河野他1982)

(No.193 大倉幕府北遺跡)

5. 西御門2-796-1外2筆(宮田2001)『大倉幕府北遺跡発掘調査報告書』(森・宮田2002) 6. 西御門2-756-10・756-6(宮田・滝沢2004)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書25第1分冊』(宮田・滝沢2009)

(No.461 北条義時法華堂跡)

7. 西御門2-686(福田2005)『北条義時法華堂跡確認調査報告書』(福田2005)

(No.253 大倉幕府跡)

8. 雪の下3-704-3外(福田2005)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書27 第2分冊』(福田2011) 9. 雪の下3-701-1・3・14(馬淵・滝澤2002~2003)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21 第1分冊』(馬淵・滝澤他2005) 10. 雪の下3-651-8(小林1997)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15 第2分冊』(汐見1999) 11. 雪の下3-637-4(熊谷2006~2007)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書27 第2分冊』(熊谷2011)

(No.49 大倉幕府周辺遺跡群)

12. 二階堂字荏柄58-4外(原2000)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18 第1分冊』(原2002) 13. 二階堂字荏柄27-3(原2002)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22 第1分冊』(原2006) 14. 二階堂字荏柄38-1(馬淵1991~1992)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9 第2分冊』(馬淵1993)

(No.259 横小路周辺遺跡)

15. 二階堂字向荏柄880・874(馬淵1982)『向荏柄遺跡発掘調査報告書』(馬淵他1985) 16. 二階堂字横小路93-11(手塚1998)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15 第2分冊』(野本1999) 17. 二階堂字横小路110-3(宗台1994)『横小路周辺遺跡発掘調査報告書』(宗台他1996) 18. 二階堂字四ツ石115-3(福田2002)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23 第2分冊』(福田2007) 19. 二階堂字会下323外(原・福田2000)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20 第2分冊』(福田2004)



図2 明治15年頃の鎌倉中心部と調査地点(黒丸印, 迅速測図第一測期第十測図)

2. 歴史的環境

中世以前

薬師堂ヶ谷内での発掘調査は、崖面のやぐら以外は多くない。したがって、この谷にいつごろから人が住み始めたかも明らかではないが、大倉郷の平野部域では早く縄文時代前期の土器が出土している（赤星1959）。荏柄天神社前で、地表下3mの砂層上から諸磯b式・阿玉台式の土器片や打製石斧、凹石、獣骨等が出土した。砂層面は標高9mなので、縄文前期～中期の古鎌倉湾の海岸線を推測させる資料となる。その後この平野部では、弥生時代中期以後歴史時代まで連続的に集落が営まれている。

弥生時代では、平野部の大倉幕府周辺遺跡群で中期後半～後期にかけての大規模な集落が確認されている（馬淵1998・同1999・斎木ほか2007）。また調査地点から指呼の距離にある薬師堂ヶ谷入口の狭い平坦地で、西遠江伊場式の系譜をひく弥生時代後期後半の高坏が出土していることから（野本ほか1999）、調査地点付近にもこの時代から人の往来があった可能性は十分にある。

古墳時代には、大倉幕府東隣にある大倉幕府周辺遺跡群（二階堂字荏柄38番1地点）で、前期の竪穴遺構数基が発見されている（馬淵1993）。同じ地点では、カマドを持つ古墳時代後期の住居址4軒が見つかり、また調査区内で検出された東御門川旧流路中から大量の土師器や須恵器が出土した。大倉の周辺山麓には横穴墓も少なくない。大倉一帯に相当規模の集落が展開していたことは確実である。薬師堂ヶ谷に人の営為がなかったとは考えにくい。

律令時代の鎌倉ではいたるところから住居址が発見されるようになる。調査地点近在では、向荏柄遺跡で8世紀後半から9世紀にかけての9軒の竪穴住居が検出された（馬淵ほか1985）。また今回の調査でも当該期の土器片が採集されているので、大倉郷の平地のみならず、薬師堂ヶ谷の内にも人跡の及んでいたことは確かである。

中世

長元元年（1028）、房総の大乱「平忠常の乱」が始まる。源頼信・頼義父子は追討使平直方に代わって乱を鎮めるため河内国から関東に下り、長元四年（1031）これを収める。彼らは鎌倉を拠点に房総に渡った。「六浦道」はこの戦乱の際に開かれたとする見解が近年有力である。六浦道は大倉郷平野部を東西に通過する。荏柄天神社は、社伝によれば平安時代末期の長治元年（1104）、里民によって大倉郷の山裾に置かれたとされる。大倉一帯の平安時代後半の動向は、ほかに伝わらない。

鎌倉時代前期、大倉は鎌倉の中心であった。したがって史料中にその消息を伝える記事は多い。

治承四年（1180）、源頼朝は鎌倉入部直後、大倉の平野部に「新亭」を造営する。これがのちに「御所」あるいは「幕府」と呼ばれるようになる。以後嘉禄元年（1225）の幕府移転まで、大倉郷平野部の動静は頻繁に伝わる。

鎌倉時代前期の建保六年（1218）、北条義時が大倉の谷に堂を建立し、薬師如来を安置供養した。先述の通り、遺跡のある谷の名称はこの堂に由来する。堂は永仁四年（1296）、北条貞時により、京都泉涌寺流真言律宗の覚園寺と改められる。この寺の動静は鎌倉時代以降のこの谷に大きく影響したであろう。覚園寺については後述する。

このほか文献史料に現われる中世薬師堂ヶ谷の消息を摘記しておく。

貞応二年（1223）7月9日 「薬師堂ヶ谷辺」の浄密という僧の坊に優曇華が咲いたので、鎌倉中の人々が見物に出かけ、将軍実朝も家来に見にいかせたが、芭蕉の花であったという（『吾妻鏡』）。

延応元年（1239）11月20日 当谷の丹波良基宅に将軍頼経の二棟の御方（「大宮殿」）が、産気のため大倉から移った（『吾妻鏡』）。

建長三年（1251）10月7日 薬師堂ケ谷焼亡、二階堂大路南辺まで延焼した（『吾妻鏡』）。

正嘉元年（1257）8月18日 将軍・親王宗尊が大慈寺供養に出席するための方違の場所として、佐々木泰綱の薬師堂ケ谷の山荘が定められ、9月30日に山荘に移った（『吾妻鏡』）。

文永三年（1266）7月4日 北条教時亭が薬師堂ケ谷にあった（『吾妻鏡』）。

元亨二年（1322）11月24日 右筆仏子憲海が鎌倉薬師堂ケ谷勸学院において書写した（『三国仏法伝通縁起奥書』『東寺金剛藏聖教目録』3 — 『神奈川県史 資料編』2 — 2326）。

以下、中世起源の近在寺社・遺跡等をみてみたい。

【永福寺】 薬師堂ケ谷近在ではまず、頼朝による永福寺の建立がある。文治五年（1189）奥州平泉から帰った頼朝は、12月9日伽藍造営に着手、建久二年（1191）2月15日寺地をみずから決め、翌建久三年11月25日供養をおこなう。この寺院は以後15世紀まで存続した。薬師堂ケ谷の隣（北側）の谷あいであり、谷口からは300～400mの距離にある。

【二階堂大路】 「二階堂」とは永福寺であり、六浦道の「関取場」遺称地から永福寺惣門に向かう道のこととみていいであろう（赤星1938、のち1982所収）。現在の「岐れ道」交差点から薬師堂ケ谷入口の「鎌倉宮」社頭に向かうバス通りの、東約60mを平行して通じる小道がそれである。薬師堂ケ谷中心軸を貫く道は、現在では明治時代に敷設された「鎌倉宮」参詣路に寸断されているが、本来二階堂大路までは続いていたはずである。宝治元年（1247）6月5日、三浦合戦の際、能登守三浦光村は永福寺惣（総）門内に80余騎をもって陣を張っている（『吾妻鏡』同日条）。鎌倉宮東脇を少し瑞泉寺方向（北）に進んだあたりの小字「四つ石」は、惣門の礎石に由来すると推定される（赤星1938、のち1982所収）。とすれば、薬師堂ケ谷出口からはほんの200mほどの位置になる。

近年の発掘調査で、この大路が幅20m強の規模であったことが判明した。おそらく他の大路と同じく、若宮大路のその3分の2、すなわち22mとみていいのではないか（馬淵2008）。

【東光寺】 明治二年（1869）創建の鎌倉宮の場所には、かつて東光寺という臨済宗寺院があった。山号を医王山という。創建年、廃絶年ともに不詳だが、永享の乱以後は徐々に衰えていったらしい。調査地点からは400mほどの距離にある。『鎌倉攬勝考』は、民部太夫（二階堂）行光が永福寺傍らに一寺を創建し、承元三年（1209）明王院僧正公胤を導師に供養をおこなったのがこの寺であろう、という。『新編相模国風土記稿』は、東光寺の山号が「医王山」なので、『吾妻鏡』建久四年（1193）十一月八日条に源頼朝が永福寺傍らに梵宇を建て薬師如来像を安置した、とあるのが当寺の前身であろうとする。しかし、貫達人はこれを『風土記稿』の臆説として退けている（貫・川副1980）。『本朝高僧伝』によると、円覚寺九世無為昭元は病気のため同寺を退き、宝満寺という寺に寓して応長元年（1311）に没し、東光寺に塔した、という。南北朝時代の建武二年（1335）7月、北条時行らに攻められた足利直義は23日、当寺において天皇後醍醐の息、親王護良を生害し三河に敗走した（『鎌倉大日記』など）。貞和三年（1347）7月23日、住持月山友桂が当寺に利生塔を造立した際、直義は建長寺の渡来僧竺仙梵僊にこれを慶賀させ、護良の冥福を薦めている（『竺仙和尚語録』）。以後東光寺は護良の菩提寺となった。利生塔は、備後尾道の浄土寺の例からみても、五重塔であった可能性が高い（太田1957）。この寺には南北朝時代、西御門の報恩寺に住んでいた義堂周信もたびたび訪問し、詩を残している（『空華日用工夫略集』）。

【大楽寺】 薬師堂ケ谷を谷奥に向かって進むと、調査地点すぐ先の左手の枝谷に、現在覚園寺参詣者の駐車場となっている幅50m前後、奥行き70～80mの平場がある。寺蔵の「境内絵図」(写)には、この場所に「大楽寺」と注された建物が描かれている。ちょうど調査地点前面付近にあたる「門」の位置からは、北西になる。大楽寺はもと浄妙寺東側の胡桃ケ谷にあった律院で、開山は願行房憲静、旧跡には今も大型のやぐら4基が開口している。永享元年（1429）2月11日に瑞泉寺門外の永安寺が焼けた際、山を越えて類焼し、伽藍を失った。このときまでは胡桃ケ谷にあったという（『新編鎌倉志』）。のち覚園寺に吸収

されて「覚園寺境内絵図」の場所に移った。天保十年(1839)の『五大堂事蹟備考』に、「今猶覚園寺域、不動・薬師・愛染・願行上人ノ肖像ヲ安スル堂を大楽寺と称ス」とあり、堂のみ残っていたことがわかる。明治四年(1872)兼宗廃止令が出たときに廃寺となった。

現在厚木市中依知の浅間神社に大楽寺の梵鐘がある。貞和六年(1350)鋳物師清原宗広によって作られた鐘で、銘文によれば、大楽寺は文保元年(1317)に伽藍を興隆した、という。『新編鎌倉志』によると、開山は公珍、本尊は鉄不動で、ほかに薬師如来・愛染明王がある。鉄不動は「試みの不動」といい、泉涌寺六世願行房憲静たいざんじが大山寺(伊勢原市大山)の本尊不動を鋳造するに先立ち、試しに鋳たのでこの名があるという。薬師如来・愛染明王とともに、現在覚園寺愛染堂に祀られている。

近世

『相模国鎌倉郡村誌』(『皇国地誌』)によれば、江戸時代になり、小字の荏柄・杉本・紅葉ヶ谷・薬師堂ヶ谷・亀ヶ淵・獅子舞・稲葉越等を合わせて一村とし、二階堂を村名とした。村高のうち永別百十二貫三六〇文を東慶寺・円覚寺・杉本寺・荏柄天神社等の寺社領に寄付し、残高七貫三三九文余りを徳川氏の直轄として代官が管理した。嘉永五年(1852)井伊直弼の預所となつてのち、山口松平大膳大夫、熊本細川越中守、佐倉堀田鴻之丞と変わり、慶応三年(1867)に代官の所管に戻った。

薬師堂ヶ谷内の発掘調査

現在の覚園寺境内、同寺旧境内では平地部分4カ所と周辺の石窟遺構(「やぐら」)がある。

【地点1】 本地点の北側隣地に位置する。計7枚の遺構面が確認され、柱穴の並びらしきものもみえる。「境内絵図」の「門」の西脇に当たる位置であり、その性格には今後検討の要があろう(伊丹2010)。

【地点4】 覚園寺境内でおこなわれた調査である。旧内海家住宅移転予定地と薬師堂周囲を中心に、いくつかの調査区が設定されている。それぞれの範囲が狭いため面の連続性は明瞭でないが、岩盤削平面や礎石らしき切石、薬師堂の基壇縁辺とみられる石列が見つかっている。律院らしく茶臼が出土しているほか、三ツ鱗文平瓦の出土が北条氏とのつながりを示唆する。なお報告書の遺物年代観については、現在の研究水準に照らして、全体的に再考の必要がある(河野1982)。

【地点3】 谷口に近い平坦な場所で、他に比べると少ない3枚の遺構面が調査されている。上部の1面・2面(「1期」・「2期」)では版築面と礎石1個のほか、溝や浅い土坑等が検出され、3面(「3期」)から町屋建物の可能性ある杭列や板列が発見されている(この報告では上層から下層に向かうにつれ「期」の数字が加算されるという、当該調査組織独特のきわめて個性的な方式が採用されている)。報告者はこの変化について、

「短絡的に3期の板壁建物と掘立柱建物を一般の町屋建物、2期と1期の良好な土丹(破碎泥岩)版築と礎石建物を伴う空間を富裕層あるいは寺院の関わる整地地業とした場合、この変化を単純に町屋地域から覚園寺の寺域拡大に伴う谷内の開発と土地使用者の変化と捉える事も可能」

としつつ、

「しかし、覚園寺寺域内の様相変化の可能性も十分にあり、これはあくまで推測・空想の域を出ない短絡的な意見である」

という、読む者の判断を眩ませるに十分な、融通無碍の保留をつけている(降矢ほか2005)。

【やぐら】 最奥部にある「百八やぐら」群をはじめ、薬師堂ヶ谷内部には「やぐら」は多い。「やぐら」が、南都・北京を問わず律院と不可分の存在であることは明らかだが、この谷の状況は、そのことをよく示していよう。現在までに7群が調査されている。他の谷と同じく、一つの枝谷ごとに数基が群集しているが、覚園寺歴代塔自体は同寺境内最奥部にあるので、塔所とするのは考慮を要しよう。

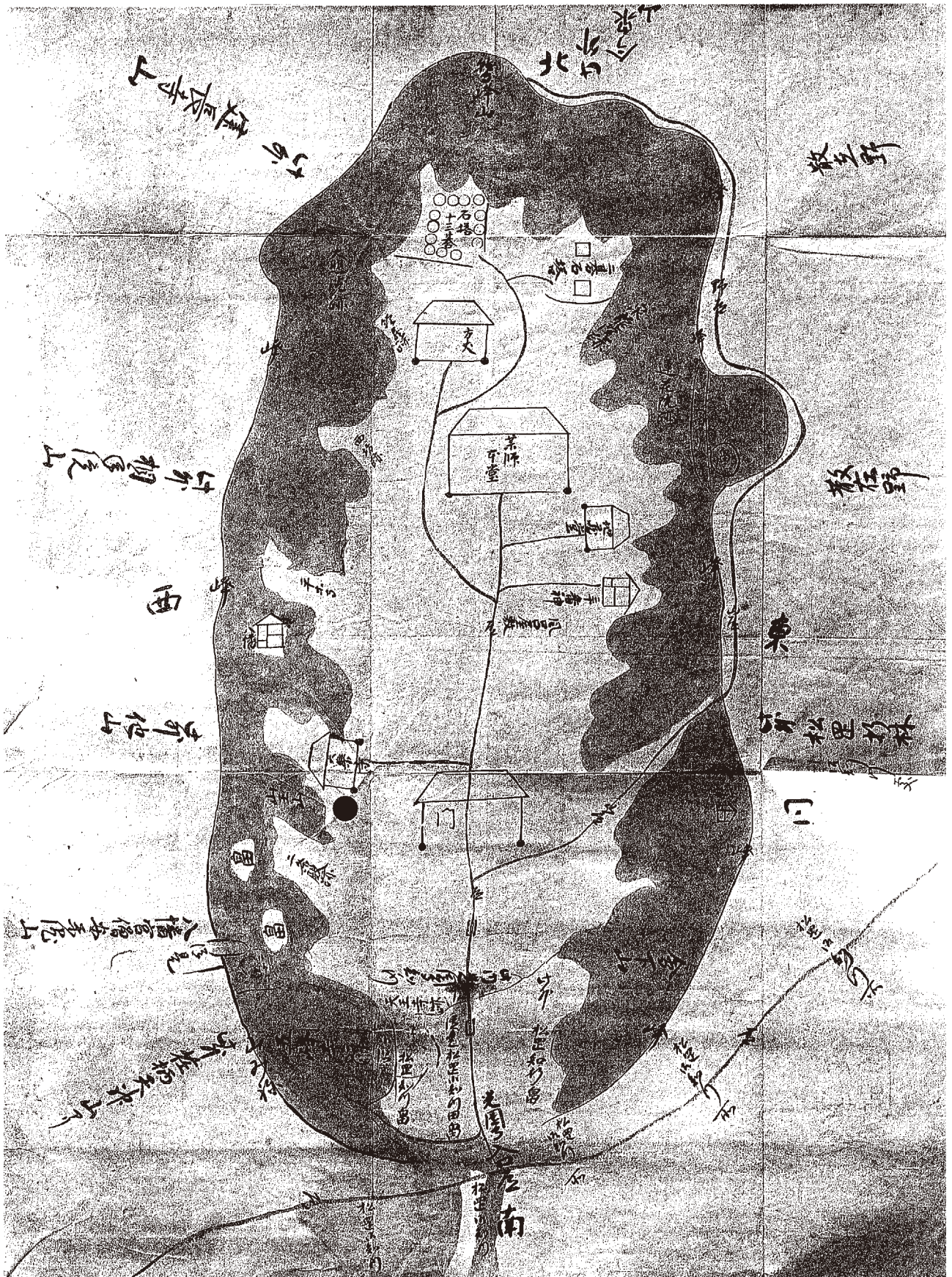


図3 覚園寺境内絵図(黒丸印付近が調査地点、『鎌倉国宝館図録 第15集』)

覚園寺について

薬師堂ヶ谷の谷尻には真言宗覚園寺がある。^{じゅうぶせん}鷲峯山真言院覚園寺と号する。鎌倉時代以来四宗兼学であったが、明治初年の兼学禁止と本山泉涌寺の古義真言宗標榜にともない、同宗となった。この寺の前身が、谷の名称の元となった大倉薬師堂である。覚園寺は関東における北京律の根本道場であり、その動静はこの谷に強い影響を及ぼさずにはおこなったであろうから、簡単に沿革をみておきたい。

建保六年(1218)7月9日、北条義時が大倉郷におもむき、南山のあいだに便宜の地をトして、一堂を建立し薬師像を安置する、といった。昨晚、薬師十二神将の戌神の夢告があったという。弟時房や息子泰時が反対したが押し切り、同年12月2日、大倉新御堂に雲慶作の薬師如来を安置し、供養した。導師は莊嚴房律師(退耕)行勇。これより先建保四年(1216)正月17日、「京都仏師雲慶」が將軍家持仏堂の本尊釈迦如来を京都から運んで安置している(以上『吾妻鏡』)。このときの例から渋江二郎は、大倉新御堂の薬師像についても、京で制作したものを運んだ可能性を指摘する。また渋江は、「雲慶」が南都の「運慶」と同一人物と推定している(渋江1973)。

仁治四年(寛元元年1243)2月2日、失火により大倉薬師堂焼亡、本仏は取り出した。

建長二年(1250)2月8日、時頼が霊夢の告により信仰。

建長三年(1251)10月7日、薬師堂ヶ谷焼亡、二階堂大路南辺まで延焼した。調査地点は確実に被災したとみられる。

弘長三年(1263)3月10日、執権北条時宗は当堂を修造し、遠江僧都公朝を導師として真言供養が行われた。

永仁四年(1296)、北条貞時が元寇の賊を討つためこれを寺に改め、覚園寺とした。開山は^{しんえ}心慧智海(智海心慧とも)。垂木は彫刻され、柱は丹塗された「厳麗」な寺観であった。また元の薬師堂時代から北京泉涌寺律の法系の人々が入っていて、同寺開山の俊祐が関東に下向(貞応三年1224)したのちは、顕と密とを問わず僧が集まり、鎌倉時代後期には北京律関東弘通の拠点となった(至徳三年1386 6月15日付「官宣旨」『神奈川県史 資料編』3-5009)。寺領は伊予国新居西条庄内四ヶ村にあった(「智海心慧書状案」『県史 資料編』2-1535)。建武四年(1337)の「覚園寺住僧申状案」によれば、当寺開創の目的は異国降伏と朝廷鎮護にある(『県史 資料編』3-3350)。

薬師堂および覚園寺は鎌倉時代を通じて北条氏の外護によって寺勢を維持したが、寺容は明らかでなく、変遷も未詳である。しかし、嘉元四年(1306)に没した心慧の同年4月21日付置文に、「宝篋印塔婆・灌頂堂・護摩堂・光明院」の造立が完了、仏殿・法堂・祖師堂・土地堂・僧堂・庫院・山門・両廊などを修理してほしいとあり、一端がうかがえる(「智海心慧置文」『県史 資料編』2-1534)。

建武中興後の元弘三年(1333)12月21日、天皇後醍醐から国家鎮護・玉体安穩を祈る勅願寺の綸旨が与えられ、翌建武元年(1334)8月5日、新居西条庄の寺領が安堵された(『神奈川県史 資料編』2-3135・3-3181)。続いて足利氏の祈願所となったが、建武四年(1337)2月10日の火事で諸堂を失ったらしい。復興は尊氏により進められ、文和三年(1354)12月、仏殿完成。尊氏は梁の牌銘に自署している(『県史 資料編』3-4282)。尊氏没後は歴代の関東公方が寺領の寄進や諸仏の修造をおこなってよく外護し、寺勢は維持された。室町初期、寺領は相模国毛利庄妻田・^{もりのしょう}三田・^{さんだ}荻野三郷(現厚木市)、上総国小蓋・^{やいた}八板両村(千葉県長生郡長南町)、越後国埴生保(新潟県柏崎市宮川)にあった。

先述したように、胡桃ヶ谷の大楽寺が永享元年(1429)に焼け、覚園寺の門の西側にある枝谷の中に移転した。原本が永享十一年(1439)以後に成立したと推測される「境内絵図」には、五峰寺跡・二条殿跡・大楽寺・平等寺・一心坊跡・経蔵跡・大悲院跡・泉童院跡・薬師本堂・地藏堂・三十番神・八幡・門・方丈・風呂屋敷・山王山・石塔十三基・二基石塔などの文字が見える。

小田原北条氏歴代も寺をよく保護した。古河公方足利義氏は、永禄七年(1564)11月15日、禁制を下し、同十年5月11日には寺領を寄進している。天正十八年(1590)4月には、豊臣秀吉が当寺および瑞泉寺・宝戒寺・浄光明寺など六ヶ所に禁制を下し、保護した。徳川家康は翌天正十九年11月に鎌倉の内において、七貫一〇〇文の地を寄進した。この高は江戸時代を通じて変わらなかったらしい。

元禄十六年(1703)の大地震、文政十三年(1830)の庫院焼失などにより寺運は徐々に衰え、幕末には無住の時期もあった(薬師三尊像胎内札銘)。明治四年の兼宗廃止令により、四宗兼学を改め、本寺の泉涌寺になって真言宗となった。一時荒廃著しかったが、戦後長い年月をかけて復興し、現在の寺容となった。

境内最奥部には玉垣で囲まれた方形区画があり、歴代住持の墓塔が並ぶ。このうち開山心慧智海と二世大燈源智のそれはともに4m前後の大宝篋印塔で、関東形式の代表的な作例として知られる。三世以後は無縫塔である。開山塔は高さ406cm・総高427cm、「正慶元年壬申」の「仲冬廿七日造立」とある。正慶元年仲冬は1332年11月であり、心慧は嘉元四年(1306)に示寂しているので、26年後の供養塔ということになる。大燈塔は高さ389.9cm・総高411cm、これも「正慶元年壬申」だが、「仲秋廿八日造立」とあり、開山塔より3ヶ月早い8月に造られている。ときの住持は三世鑿^{かんえ}恵で、ともに大工光広の手になる。願主は異なるものの、「営事」(興行の統括者の意か)の恵秀も共通する。寺が開山と二世を同時期に供養したとみられる。「光広」は大蔵派石工であろう。

引用・参考文献

- 赤星直忠1938 「永福寺址の研究」『神奈川県史蹟名勝天然記念物調査報告書』(のち1980『中世考古学の研究』所収)
赤星直忠1959 『鎌倉市史 考古編』吉川弘文館
伊丹まどか2010 「覚園寺旧境内遺跡(No.435) 二階堂字会下351番3外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』26
太田博太郎1957 「備後の利生塔」『中世の建築』彰国社
大森順雄1991 『覚園寺と鎌倉律宗の研究』有隣堂
河野真知郎1982 『鎌倉市二階堂 覚園寺境内発掘調査報告書』宗教法人覚園寺
小林康幸・野本賢二2000 「鎌倉における最近の弥生時代遺跡調査の動向」『考古学論究』第7号 立正大学考古学会
洪江二郎1973 『鎌倉地方仏像彫刻概説』鎌倉市教育委員会
貫達人・川副武胤1980 『鎌倉廃寺事典』有隣堂
野本賢二ほか1999 「横小路周辺遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15
降矢順子ほか2005 『覚園寺旧境内遺跡発掘調査報告書 一二階堂字会下331番3外における埋蔵文化財調査一』有限会社鎌倉遺跡調査会
馬淵和雄1993 「大倉幕府周辺遺跡群(No.49) 二階堂字荏柄38番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9
馬淵和雄1998 「大倉幕府周辺遺跡群(No.49) 雪ノ下四丁目620番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14
馬淵和雄1999 『大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下四丁目620番5地点発掘調査報告』大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団
馬淵和雄2008 「大倉幕府周辺遺跡群(No.49)の発掘調査 一雪ノ下天神前562番30地点一」『第18回 鎌倉市教育委員会遺跡調査・研究発表会 発表要旨』鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会
馬淵和雄ほか1985 『向荏柄遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会

(馬淵)

第二章 調査の概略

1. 調査にいたる経緯

覚園寺旧境内遺跡の範囲内にある二階堂字会下351番1において、個人住宅建設の照会があった。工法は耐震を考慮した鋼管杭の打設による基礎工事を含むものであり、設計変更は困難と判断された。前年におこなわれた北側隣地の調査結果からみて遺構の損傷は避けられないため、発掘調査を実施することになった。試掘調査については北側隣地の発掘調査をもって代えることとし、本地点ではおこなわれなかった。調査は2005年6月21日に開始された。面積は30㎡である。

2. 調査方法

掘削方法

調査の際の便宜上の呼称として谷尻を「北」、谷口を「南」と称した。したがって東西方向では山側が「西」、川側が「東」となる。

掘削に当たっては、残土置場の確保のため発掘区を東西に二分割し、先に調査した山(西)側を「1区」、後半の谷(東)側を「2区」とした。両区とも地表下60～80cmの表土部分を重機で掘削し、以下が人力による。

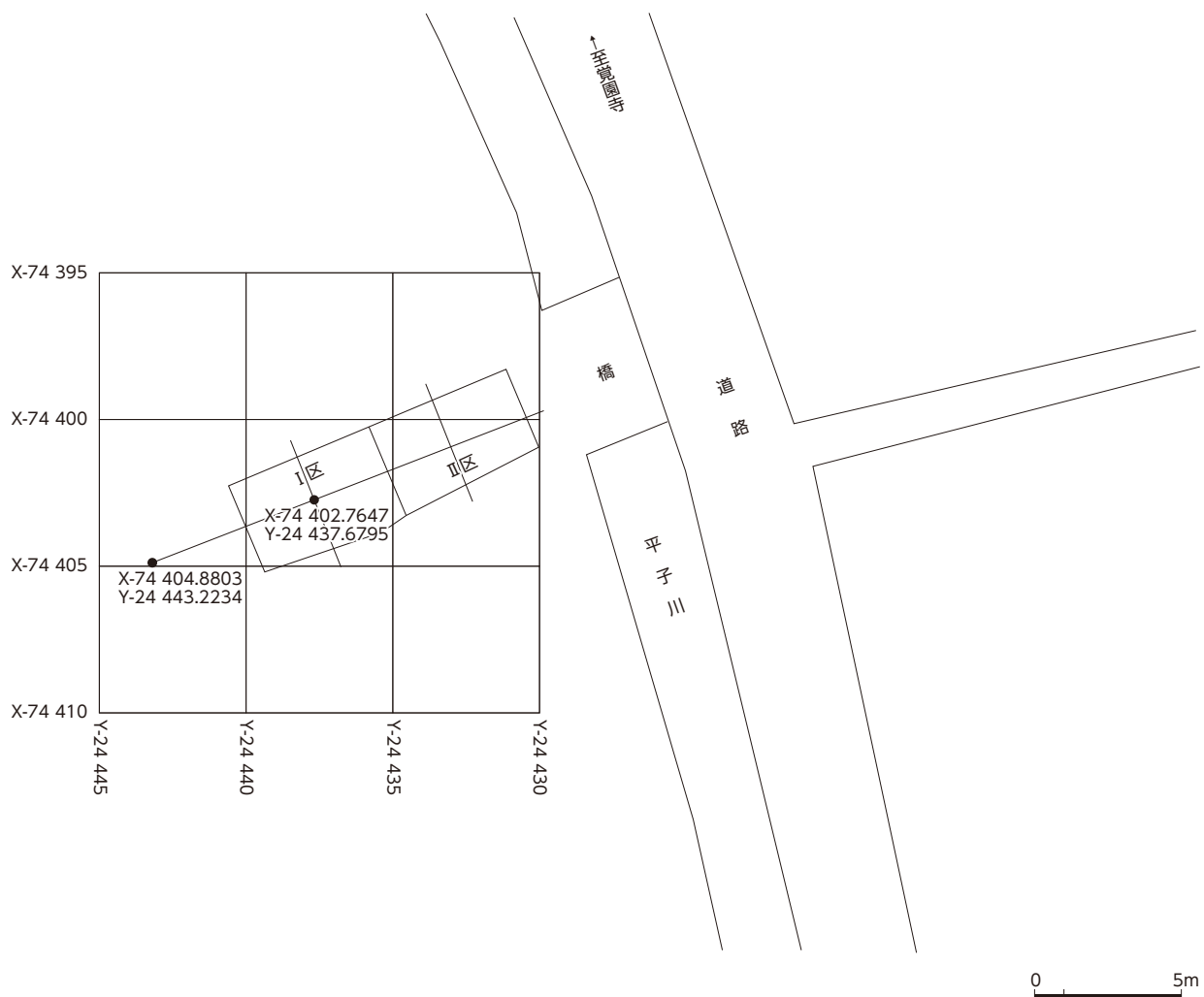


図4 調査区設定図

測量基準の設定

測量基準軸は調査区主軸方位に合わせて任意に設定し、のち座標成果を求めるという方法を取った。まず、調査区中心に東西軸線Bを想定、その最奥部に任意点(見返り)を置き、線上6mを折り返した点を南北軸2とした。軸線Aは北の調査区外に、また南北軸1は西の調査区外にあるという設定とした。方眼は5mとして、南北軸2から東に向かって3が調査区内にある。

座標成果は以下の通り(世界測地系、エリア9)。

B軸最奥部 X-74.404.8803 Y-24.443.2233

交点2 B X-74.402.7647 Y-24.437.6795

3. 調査経過

以下におもな作業経過を記す。

6月21日	重機により、1区表土掘削。	8月4日	2区Ⅲ面全景写真撮影と平面実測。
6月23日	機材搬入	8月8日	2区Ⅲb面全景写真撮影と平面実測。
6月27日	1区Ⅰ面全景写真撮影と平面実測。	8月10日	2区Ⅲc部分写真撮影と平面実測。
7月5日	1区Ⅱ面全景写真撮影と平面実測。	8月12日	2区Ⅲe面全景写真撮影と平面実測。
7月8日	1区Ⅲ面全景写真撮影と平面実測。	8月16日	2区Ⅲf面全景写真撮影と平面実測。
7月12日	1区Ⅲb面全景写真撮影と平面実測。	8月18日	2区西辺に深掘り区設定
7月14日	1区Ⅲc面全景写真撮影と平面実測。	8月19日	2区Ⅳb面全景写真撮影と平面実測。
7月20日	1区Ⅳ面全景写真撮影と平面実測。	8月23日	2区Ⅴ面全景写真撮影と平面実測
7月22日	1区Ⅴ面全景写真撮影と平面実測。	8月24日	2区Ⅴb面全景写真撮影と平面実測。
7月25日	1区Ⅵ面全景写真撮影と平面実測。	8月26日	2区Ⅵ面全景写真撮影と平面実測。
7月26日	重機により、1区埋め戻しと2区表土掘削。	8月29日	前日の雨のため水没、排水後南壁の土層断面写真撮影と実測。
8月2日	2区Ⅱ面全景写真撮影と平面実測。	8月31日	機材撤収

(馬淵)

第三章 調査結果

第1節 概要

1. 層序

地表面

地表面の標高は24m前後で、山側より谷側の方が10cmほど低くなっている。以下地中のどの面も全体に谷側に向かって傾斜している。

I面

表土下の近現代層は50cmから1mの厚みがあり、これを除去すると人頭大破碎泥岩の層が現れ(図5土層番号1, 以下「図5」略す)、上面に柱穴らしい小穴も認められたので、これを最初の遺構面「I面」とた。ただし、表面に人の踏みしめた形跡などはみられず、面自体は本来もっと高いところに存在していたのが、近代に削り取られたものと考えたい。13世紀から近代におよぶ出土遺物のあり方も、そのことを裏付けていよう。面の標高は25.2～25.4mである。

II面

I面を構成する大型破碎泥岩層は平均して50cm前後もの厚みがあり、その下に破碎泥岩層、および暗青灰色の粘質土層が現れる(土層番号2・7)。この表面には部分的に炭化物の層が見られ、囲炉裏や石組み、いくつかの小穴などの遺構も検出できるなど人的営為の痕跡がきわめて濃かったので、これを「II面」と認定した。面の標高は24.8～25.05mにある。

III面群

III面はII面の下15cmから20cm前後で検出された。この面の下には、厚さ約30cmの間に5～7cmおきに数枚の遺構面が重なるように存在する。これらはいずれも細かな破碎泥岩で構築されており、表面にしばしば炭化物層や木器層が加圧された状態で認められる。すなわち明瞭に生活痕をとどめている。これらを抜けると厚い大型破碎泥岩層となり、前代との断絶は顕著となる。そこでこれら接近した層の重なりを全体としてIII面群とし、上からそれぞれ「III a面」・「III b面」・「III c面」・「III d面」の名称を与えた(土層番号10～14・18)。2区III d面東半部にはさらに数cm下に下部面があり、これを「III d下部面」と呼ぶこととした(図版10-1・10-2、図はIII d面で一括呈示)。III a面の標高は24.70～24.85m、最下層III d面は24.40～24.70mである。

IV a・IV b面

III面群の最下層であるIII d面は、青灰色粘質土を含む大型泥岩^{じぎょう}地形層、および明灰褐色粘質土の上面にある(土層番号17・19・20・21)。この層の厚さは30～40cmほどもあり、これを除くと全体に青灰色粘質土となる(土層番号22・25)。1区においてはその上面には生活痕跡が乏しく、遺構面として認定することはためられたので、さらに15cmほど掘り下げた。すると同じく青灰色粘質土ながら破碎泥岩の多い新たな層が現れ、いくつか小穴も検出されたので、これを当初「IV面」とした。

ところが一方、2区においては土層番号22・25上面に炭化物が広がり、遺構こそ多くはないが、礎板が散見されるなど生活痕跡は明瞭であった。そこで新たにこれを「IV a面」と名付け、先の1区で「IV面」とした面を「IV b面」と改めた。IV b面は2区においても明瞭である(土層番号23・34)。面の標高は、IV a面が23.95～24.40m、IV b面が24.00～24.60mにある。

なお調査の経緯・手順の都合で「IV a」・「IV b」とはしたものの、両者はその性格を大きく異とし、実質的な観点からは別番号とすべきだが、以上のような進事情から枝番となったことを理解されたい。

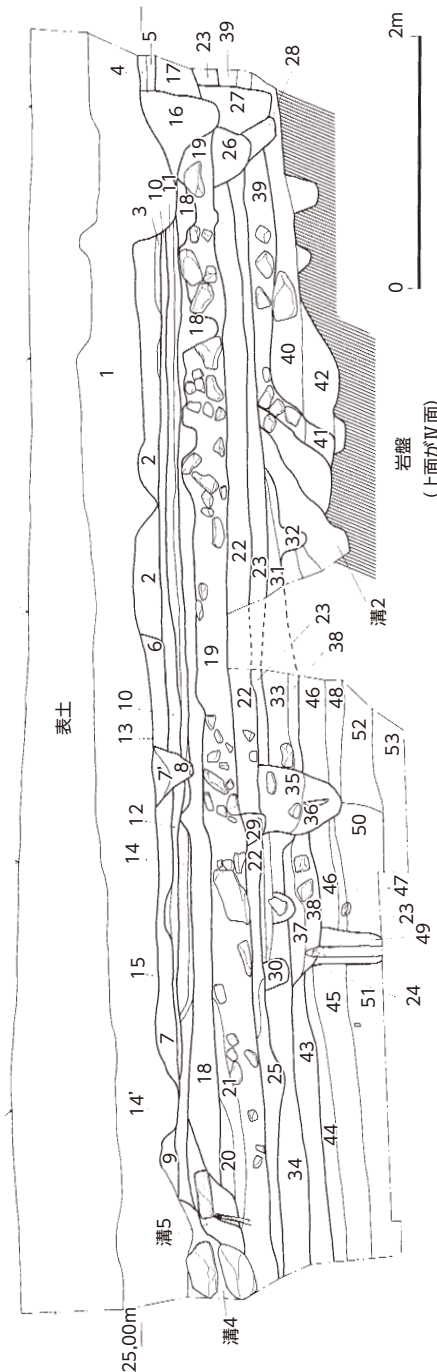


図5 田原南西隅土層断面

- | | | | |
|---|---|---|--|
| <p>1. 大型泥岩地行
2. 暗青灰色粘質土
3. 暗灰色粘質土
4. 炭化物層
5. 破碎泥岩地行
6. 黒褐色粘質土
7. 破碎泥岩地行
8. 黒褐色粘質土
9. 灰褐色粘質土を含む
破碎泥岩地行
10. 明灰褐色泥岩層
11. 破碎泥岩地行
12. 明灰褐色粘質土
13. 暗茶灰色粘質土を含む
破碎泥岩地行
14. 黄灰褐色粘質土
15. 破碎泥岩地行
16. 青灰色粘質土
17. 青灰色粘質土を含む泥岩層
18. 破碎泥岩地行
19. 大型泥岩層
20. 明灰褐色粘質土
21. 黄灰色破碎泥岩地行
22. 青灰色粘質土
23. 青灰色粘質土
24. 黄灰色泥岩層
25. 黄灰褐色粘質土
26. 暗青灰色粘質土
27. 暗青灰色粘質土
28. 暗青灰色粘質土</p> | <p>炭化物多く含む、小石大泥岩・木片・土師器片含む 上面II面
多量の炭化物、泥岩粒・微量の貝片・木片含む
上面II面
多量の炭化物、破碎泥岩・木片含む 土坑3・4覆土
上面II面
多量の炭化物、破碎泥岩・木片含む 小穴覆土
上面II面
I区側は非常に多量の炭化物を含む
上面IIIa面
II区側は木片・炭化物を多量に含む灰茶褐色粘質土の割合が多い
上面IIIb面
多量の炭化物、破碎泥岩・木片・遺物、鉄分含む 上面IIIa面
多量の炭化物、腐食木片含む
上面IIIb面
多量の炭化物、腐食木片含む
炭化物・小塊～大型泥岩多く含む 土坑 覆土
炭化物・木片・鉄分含む 上面IIIc面
暗灰色粘土混入 炭化物含む 上面IIId面 21との間にIII d下部面
小石大泥岩粒・炭化物・木片含む 上面III d面
炭化物・木片含む 上面III d面
炭化物・小塊～大型泥岩・木片・遺物片含む 上面IVa
破碎泥岩22より多く含む 上面IVb面
大泥岩多量を含む 上面IVb面
小石大泥岩・木片・遺物片を含む 上面IVa面
小石～半人頭大泥岩雜につまり、間は炭化物多く縮まり弱い 小穴覆土
小石～半人頭大泥岩雜につまり、間は炭化物多く縮まり弱い 小穴覆土
小石～半人頭大泥岩雜につまり、間は炭化物多く縮まり弱い 小穴覆土</p> | <p>29. 青灰褐色粘質土
30. 暗青灰色粘質土
31. 黒褐色粘質土
32. 暗青灰色粘質土
33. 青灰色粘質土
34. 青灰色粘質土
35. 灰褐色粘質土
36. 青灰色粘質土
37. 青灰色弱砂質土
38. 黒青灰色粘質土
39. 黒灰色粘質土
40. 黒灰色粘質土
41. 黒灰色粘質土
42. 黒青灰色粘質土
43. 暗青灰色粘質土
44. 黒灰褐色粘質土 (炭化物層)
45. 暗青灰色粘質土
46. 暗青灰色粘質土
47. 暗青灰色粘質土
48. 暗青灰色粘質土
49. 暗青灰色粘質土
50. 暗青灰色粘質土
51. 暗青灰色粘質土
52. 明青灰色粘質土
53. 暗青灰色粘質土</p> | <p>泥岩粒・炭化物・貝砂、木片・遺物片含む 小穴覆土
泥岩粒・多量の炭化物・木片・貝片含む 小穴覆土
多量の炭化物、小石大泥岩・木片含む 上面Va面
石大泥岩含む
多量の炭化物、泥岩粒・木片・貝片・遺物片含む
小石大泥岩多量を含む 上面IVb面
泥岩粒～半人頭大泥岩・炭化物多く含む、遺物片含む 小穴覆土
泥岩粒～拳大泥岩・炭化物・遺物片含む 杭柱の残る小穴覆土
小石大泥岩・炭化物多く含む 土坑7・8覆土
炭化物非常に多い 小石大～半人頭大泥岩・遺物片・木片含む
土坑7・8覆土
小石大～大型泥岩詰まる 炭化物・木片・微量の貝片含む 上面Va面
39.と同質
39.と同質
小石大泥岩粒・多量の炭化物含む
多量の粒～小石大泥岩・炭化物、貝片・木片含む 上面Va面
上面Vb面
炭化物、少量の泥岩粒・遺物片・木片含む
多量の炭化物、泥岩粒～拳大泥岩・木片含む 上面Vb面
拳大泥岩多量に含み、炭化物・木片・遺物片・貝片含む
46.に比べ泥岩の量が少ない
炭化物・貝片・微量の泥岩粒含む 柱含む小穴覆土
少量の破碎泥岩・炭化物・遺物片含む
50.と同じ
破碎泥岩非常に多量に含む 炭化物多く含む 上面VI面
小石大泥岩・多量の炭化物含む</p> |
|---|---|---|--|

V a・V b面

IV b面を構成する破碎泥岩の多い青灰色粘質土は、山側（1区）で5～13cm（土層番号23）、谷側（2区東域）では最大25cmの層厚がある（土層番号34）。これを除くと山側で大小の泥岩を多く含む黒灰色の層が現れる（土層番号39）。この層は西壁から2.5mほどで下に落ちていくが、その落ちを埋めて形成された平面が東側に続く（土層番号43）。面上には土坑・小穴などがいくつか検出され、これを「V面」とした。さらに落ちの充填土を除くと緩傾斜面となり、遺構が検出された（土層番号44・46）。この面の西側高位部平坦面はV面と共有されているので、これを「V b面」と名付けた。そしてこれにともない、先の「V面」を「V a面」と改めた。なお、土層番号44は炭化物の層であり、何らかの火災痕跡である可能性が高い。

面の標高は、V a面が23.95～24.40m、V b面が23.50～24.00mである。

VI面

V b面は拳大～人頭大の破碎泥岩で構築されており、層厚は12～22cm程度ある（土層番号39）。1区においては、これを下げるとほぼ同質のやはり大小の泥岩を大量に含む黒灰色粘質土となる。これは厚さ12～25cmほどで、上面には人的営為が見られない。そこでこれも除くと岩盤が現れる（池子層）。岩盤上面には柱穴らしい小穴が10数穴確認され、生活面として使われていたことは明らかであったので、「VI面」とした。岩盤は西側の1区でしか検出されず、2区にはなかった。したがって1・2区境界の未掘部分で地中深く落ちていくことがわかる。しかし、2区は上層V b面段階ですでに掘削深度が2.5mに達していたため、安全性を考慮して全面掘削を断念し、幅40～50cmの溝状確認坑を入れるにとどめた。ここでは岩盤の落ち込みを埋めて平坦部の確保を図った面が見られ、1区VI面の続きであることを確認した。確認坑の下位層中には炭化物が含まれているが、上述の理由で基盤層には到達していない。

面の標高は23.15～23.90mである。

第2節 各説

1. I面

面の概要（図6）

検出高：25.2～25.4m 面構成土：大型破碎泥岩 検出遺構：小穴2口 面出土遺物（図6）：土師器皿R種大型（1・2）・瀬戸美濃播鉢（3）・白磁口はげ皿（4）・平瓦（5） 特記事項：提示した出土遺物は13世紀後半（1・2・4）から16世紀（3）におよぶが、近代のものも採集されており、面自体は明治以降にここまで削り取られたと考えるのが妥当である。面上で検出された2個の穴は深さ23cm（P.1）と16cm（P.2）で、似た形状をしているが関連性を見出せず、連繋するような小穴も調査区内にない。また面上には土師器等の散布がみられる。

2. II面

面の概要（図7・8）

検出高：24.8～25.05m 面構成土：暗青灰色粘質土・破碎泥岩・炭化物 検出遺構：土坑3基・石組み遺構1基・囲炉裏1基・小穴5口 面出土遺物：土師器皿R種小型（1～9）・土師器皿R種中型（10～13）・土師器皿R種大型（14～24）・瓦器火鉢（25）・常滑片口鉢Ⅱ類（26）・瀬戸入子（27）・瀬戸卸し皿（28・29）・竜泉窯青磁鎚蓮弁文碗（30）・白磁口はげ皿（31）・開元通宝（32）・熙寧元宝（33）・石製硯（34）・擦り石（35）・凹石（36）・箸状木製品（37・38）・漆器椀（39）・筭（40） 特記事項：出土遺物は全体に13世紀後半～14世紀第1四半期を示す。

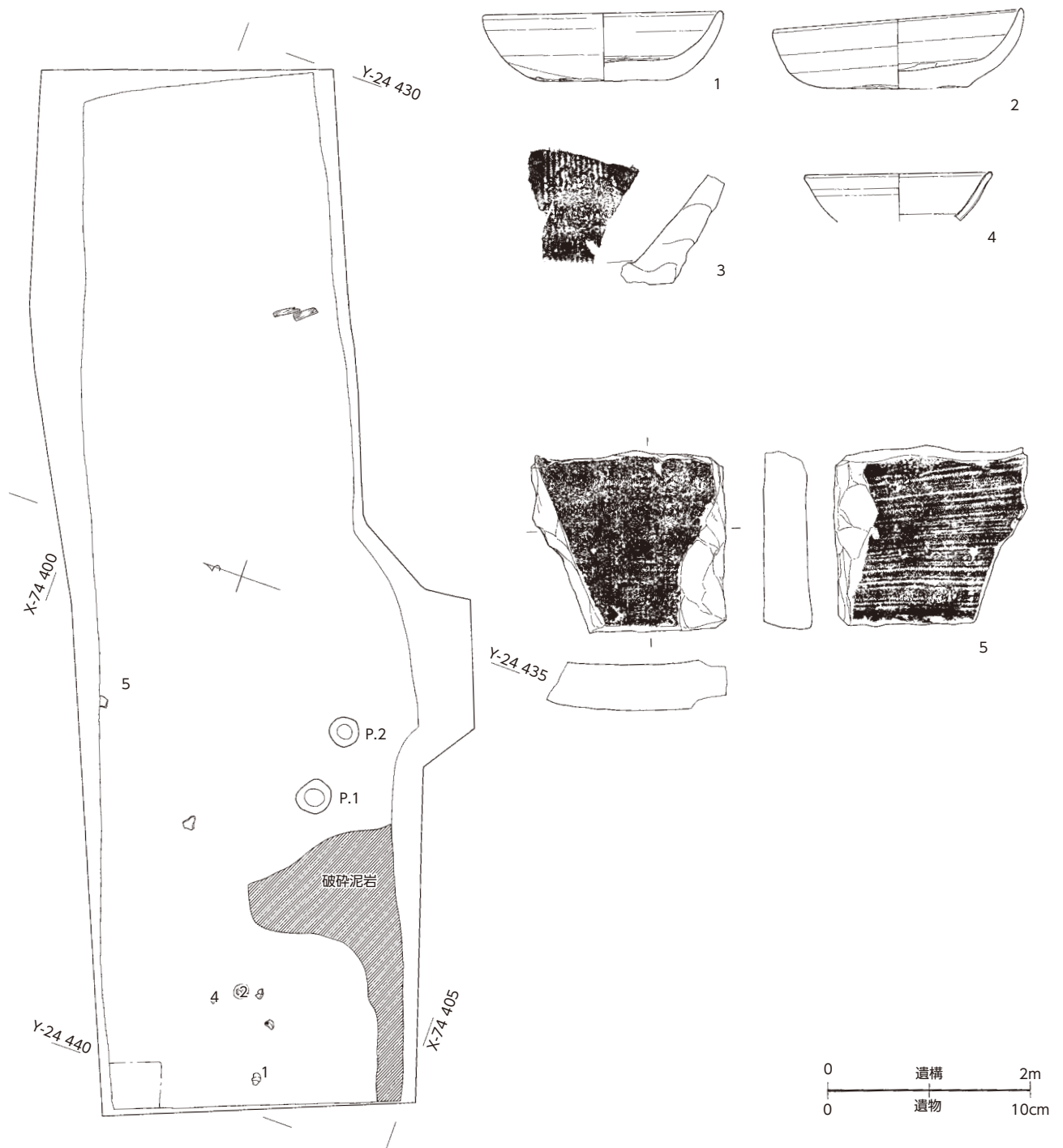


図6 I面遺構全図・I面出土遺物

P. 8 (図8)

出土遺物：箸状木製品 (41)

囲炉裏 (図8)

位置：X-74 402.38 ~ -74 404.07 Y-24 434.51 ~ -24 434.62 形状：長方形 規模：長辺154cm×短辺121cm×深さ28cm 主軸方位：N-62.5°-E 重複関係：土坑3・4を切る 出土遺物：土師器皿R種小型(42~44)・土師器皿R種大型(45~48)・常滑片口鉢Ⅱ類(49)・砥石仕上砥(50) 特記事項：大型の囲炉裏。幅7~8cmから30cmを超える板を縦位置で横に並べ、囲いとする。内部に数点

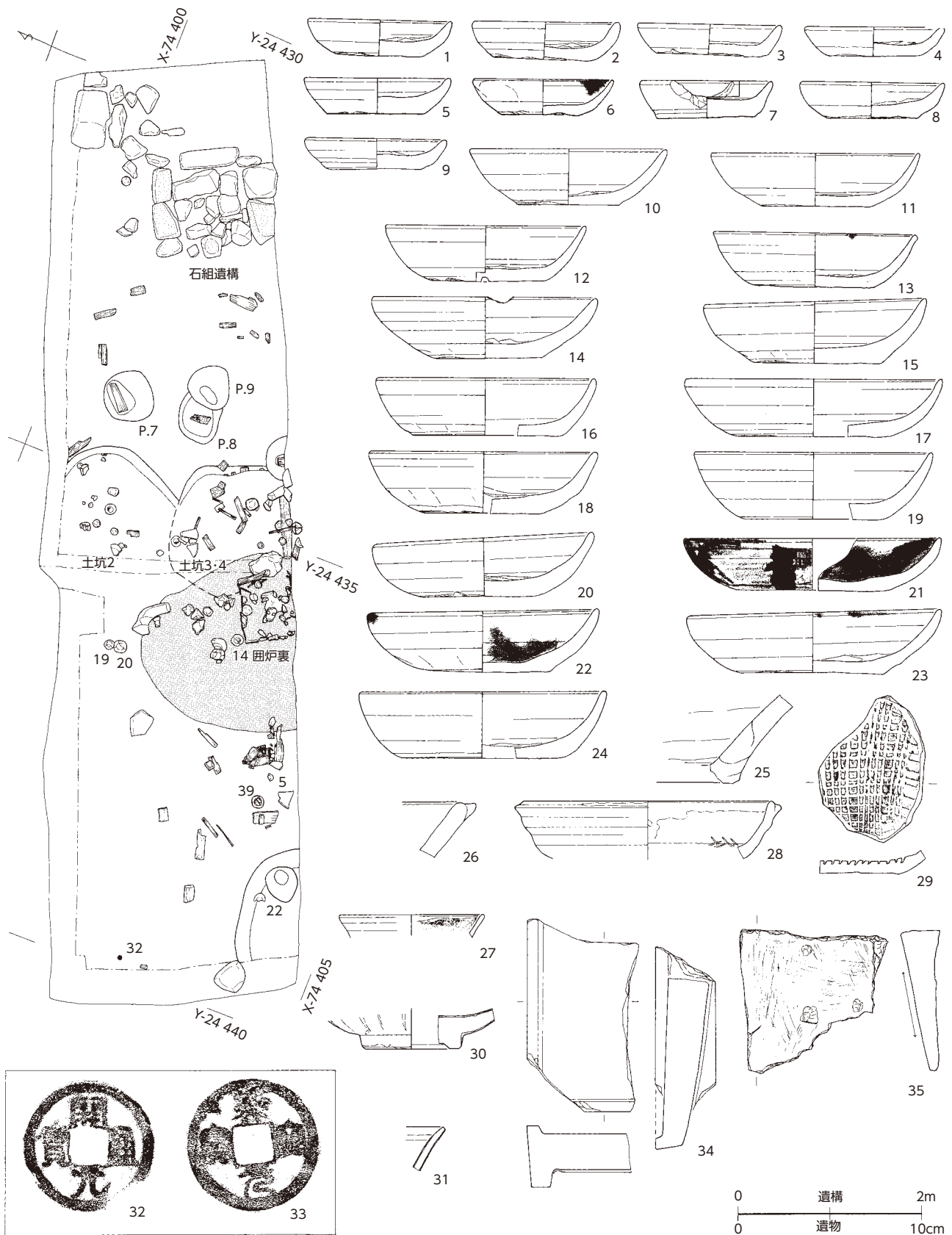
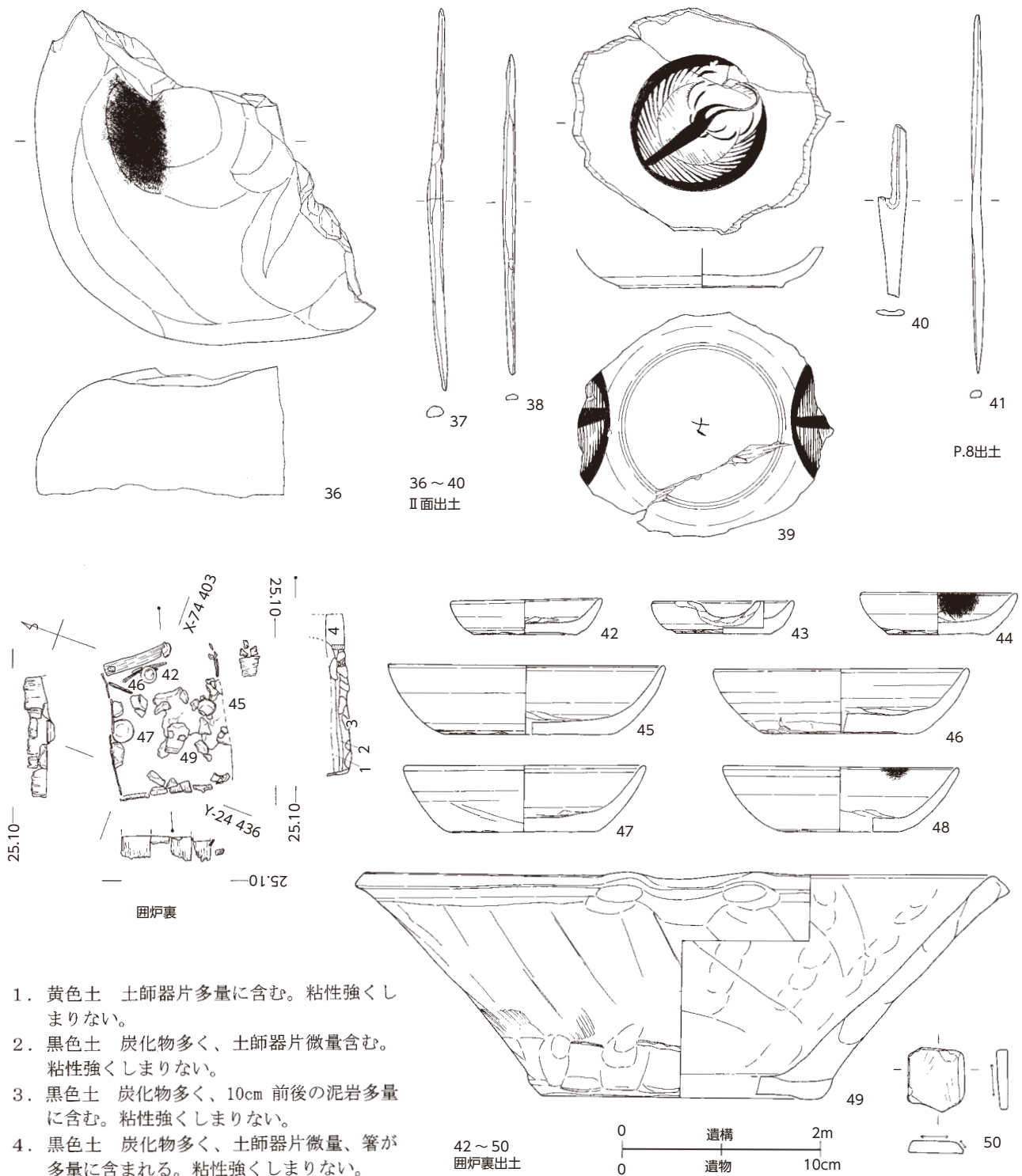


図7 II面遺構全図・II面出土遺物(1)



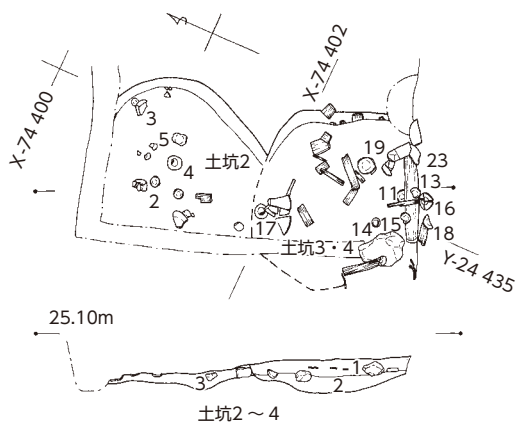
1. 黄色土 土師器片多量に含む。粘性強くしまりない。
2. 黒色土 炭化物多く、土師器片微量含む。粘性強くしまりない。
3. 黒色土 炭化物多く、10cm 前後の泥岩多量に含む。粘性強くしまりない。
4. 黒色土 炭化物多く、土師器片微量、箸が多量に含まれる。粘性強くしまりない。

図8 II面出土遺物(2), 囿炉裏・同出土遺物

の土師器と常滑片口鉢Ⅱ類の大ぶりの破片(49)があった。49の外面には煤と灰が付着しており、すり鉢を煮炊具に転用した可能性がある(「すり鉢鍋」)。年代は前後の相対的關係から13世紀後半~末か。

土坑2(図9)

位置: X-(74 400.52)~(74 401.95) Y-24 434.64~(24 435.68) 形状: 不整円形 規模: 南北(127cm)×東西(140cm)×深さ14cm 主軸方位: 不明 重複関係: 土坑3・4に切られる 出土遺物:



1. 暗灰黒色粘質土 小石大の泥岩少量、箸を多量、貝、炭化物を含む。粘性強くしまり弱い。
2. 炭化層 小石大の泥岩少量、炭化物非常に多く、木片(箸)を多量に、遺物片を多く、貝を含む。粘性強くしまり弱い。
3. 暗茶灰色粘質土 拳大までの泥岩やや多く、炭化物やや多く、木片、遺物片多く含む。粘性強くしまり弱い。

1~10 土坑2出土
11~28 土坑3・4出土

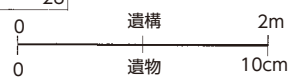
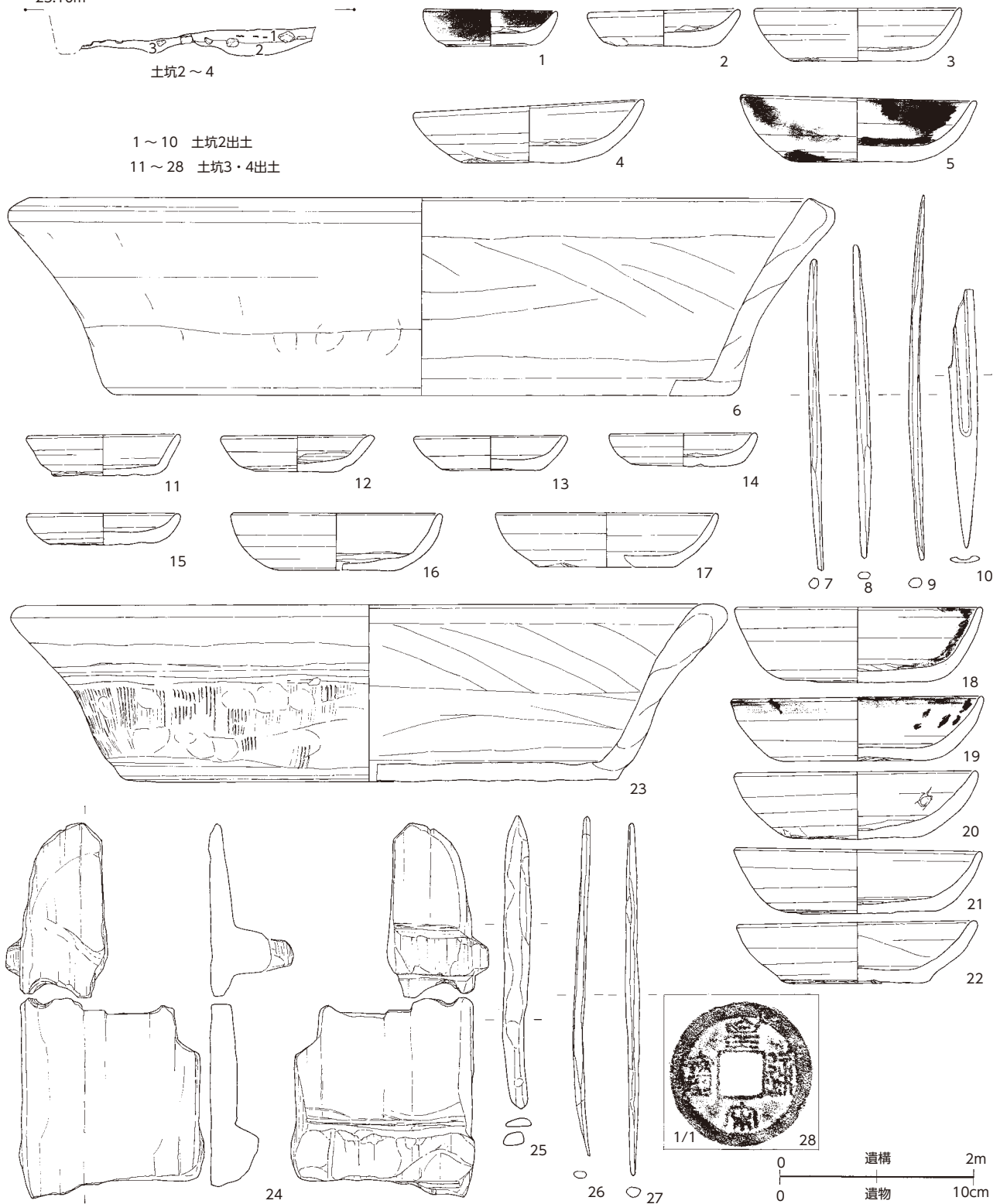


図9 II面土坑2~4, 同出土遺物

土師器皿R種小型(1・2)・土師器皿R種中型(3・4)・土師器皿R種大型(5)・瓦器火鉢(6)・箸状木製品(7～9)・骨製筭(10) **特記事項**：浅い皿状の落ち込み。次述土坑3・4が囲炉裏の痕跡だとすると、これもそうである可能性がある。年代は13世紀後半～14世紀初頭。

土坑3・4(図9)

位置：X-74 401.80～-(74 403.25) Y-(24 434.27)～-(24 435.80) **形状**：不整円形または不整隅丸方形 **規模**：(153cm)×(143cm)×深さ28cm **主軸方位**：N-67°-E **重複関係**：土坑2を切る
出土遺物：土師器皿R種小型(11～15)・土師器皿R種中型(16・17)・土師器皿R種大型(18～22)・瓦器火鉢(23)・連歯下駄(24)・棒状木製品(25)・箸状木製品(26・27)・皇宋通宝(28) **特記事項**：当初は2基の土坑と認識していたが、完掘時に1基と判断した。土坑のへりに縦板が何枚か遺存しており、囲炉裏の痕跡である可能性が高い。年代は13世紀後半～14世紀初頭。

3. III a 面

面の概要(図10・11)

検出高：24.70～24.85 m **面構成土**：明灰褐色粘質土 **検出遺構**：溝1条・礎板列1列・土坑2基・小穴1口・遺物集中出土1群 **面出土遺物**：土師器皿R種小型(図10-1～16)・土師器皿R種大型(17～23)・常滑片口鉢Ⅱ類(24～26)・常滑甕(27)・丸瓦(28)・竜泉窯青磁鎬蓮弁文折縁鉢(29)・金銅製品(図11-30)・紹聖元宝(31)・鉄釘(32・33)・砥石中砥(34)・骨製筭(35)・糸杵(36)・連歯下駄(37)・雲形肘木(38)・箸状木製品(39～42)・串状木製品(43)・用途不明木製品(44～49) **特記事項**：遺物年代は全体に13世紀後半～同末の様相を呈している。

溝4(図11)

位置：X-(74 399.32)～-(74 401.25) Y-(24 430.35)～-(24 431.98) **規模**：幅(86) cm×長さ(210) cm×深さ(64) cm **流下方向**：北→南 **主軸方位**：N-23°-W **重複関係**：なし **出土遺物**：土師器皿R種小型(50)・常滑甕(51)・備前すり鉢(52)・箸状木製品(53) **付帯施設**：右岸(西岸)に凝灰岩切石を方形に並べた石組み **特記事項**：溝左岸(東岸)は調査区外にあり、全体の幅は不明。中位に段があり、土層堆積からみて谷側(東)が溝の通水部で、山側の浅い部分が裏込めの可能性がある。掘り直しについては観察できなかった。東側には薬師堂ヶ谷中央を流下する川(平子川)があり、位置からいって本址はその中世期の右岸(西岸)であろう。付帯施設とみられる石組みについては詳細不明だが、これが突き出しているところは溝幅が20cmほど狭くなっており、例えば橋のような、溝を渡る何らかの施設と考えたい。石組みの北側に礎板を重ねて敷いた大ぶりの柱穴があり、橋脚の可能性も視野に入れておきたい。溝の年代は、52の備前すり鉢の存在から13世紀第4四半期頃であろう。

P.10出土遺物(図11)

土師器皿R種小型(54) **特記事項**：13世紀後半だろう。

礎板列1(図10・11)

位置：X(-74 399.82～-74 401.92) Y(-24 433.28～-24 434.86) **礎板間隔**：芯々200cm(±15cm) **主軸方位**：N-32°-W **重複関係**：P.10に乗る **出土遺物**：[P.10]土師器皿R種小型(図11-54) **特記事項**：調査区北壁面に立った木材が見えたのでその部分を拡張すると、1辺9cmの柱となった。位置的には調査区内のP.10にある礎板とほぼ2mの距離にあり、鎌倉時代後期に一般的な柱間に相当したので、1間のみ並びではあるがここに呈示しておく。南側の礎板はP.10の埋土中にあるが、それがこの礎板にともなう柱穴かどうかはわからない。年代は54とこの面の他の傾向に従えば、13世紀後半であ

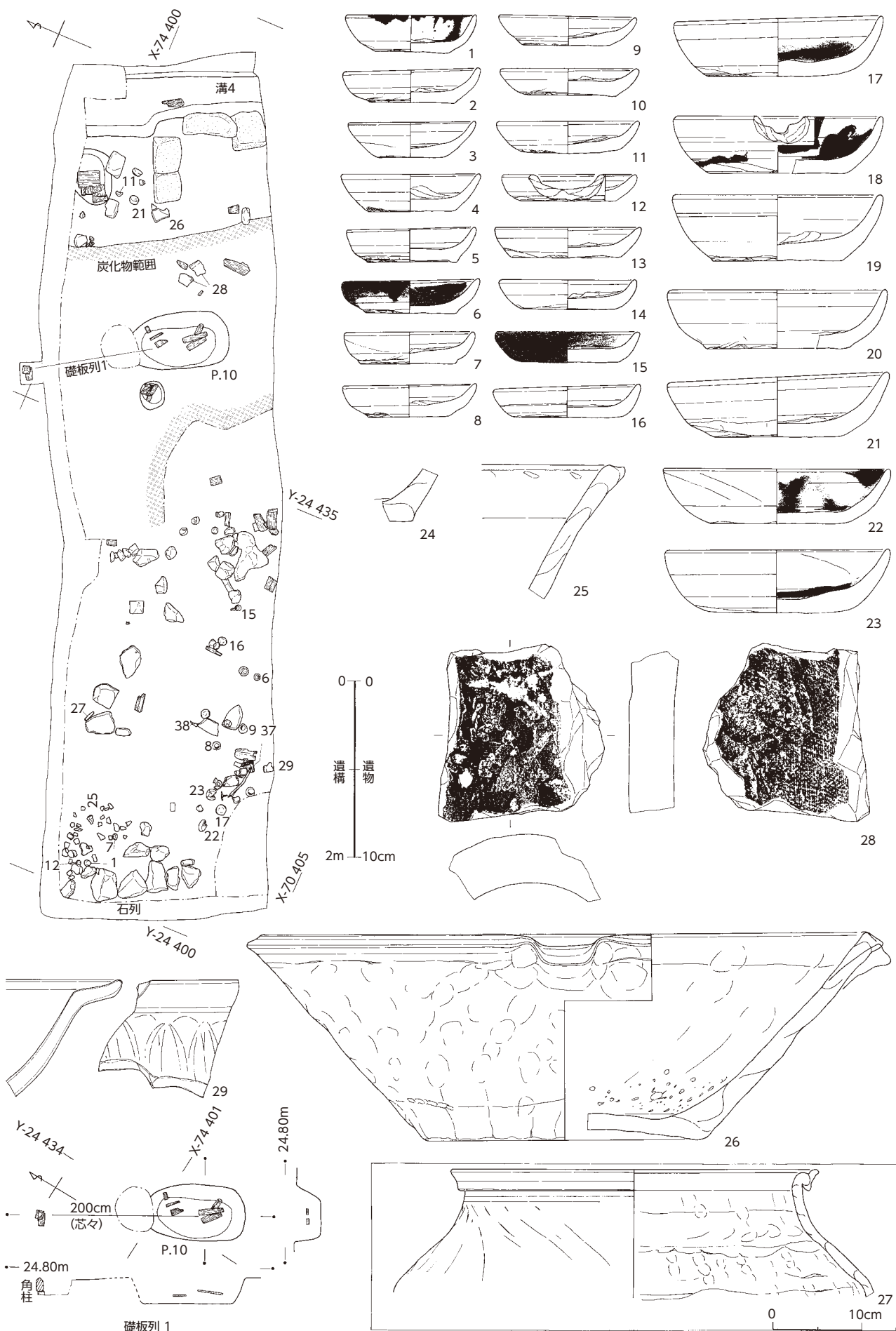


图10 Ⅲ a面遺構全圖，礎板列1，Ⅲ a面出土遺物(1)

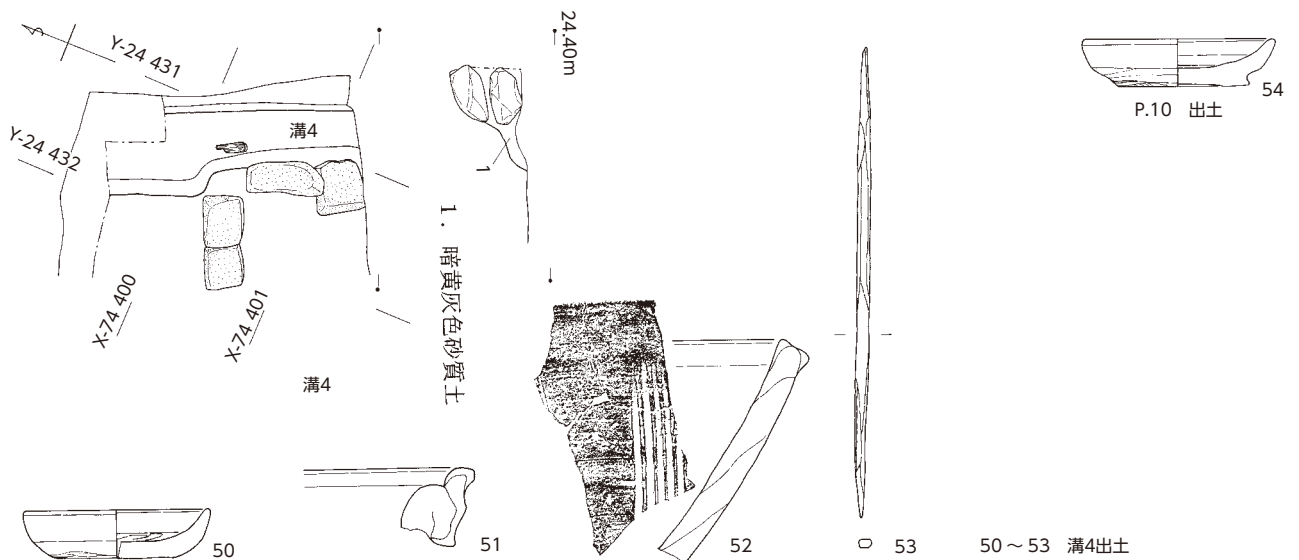
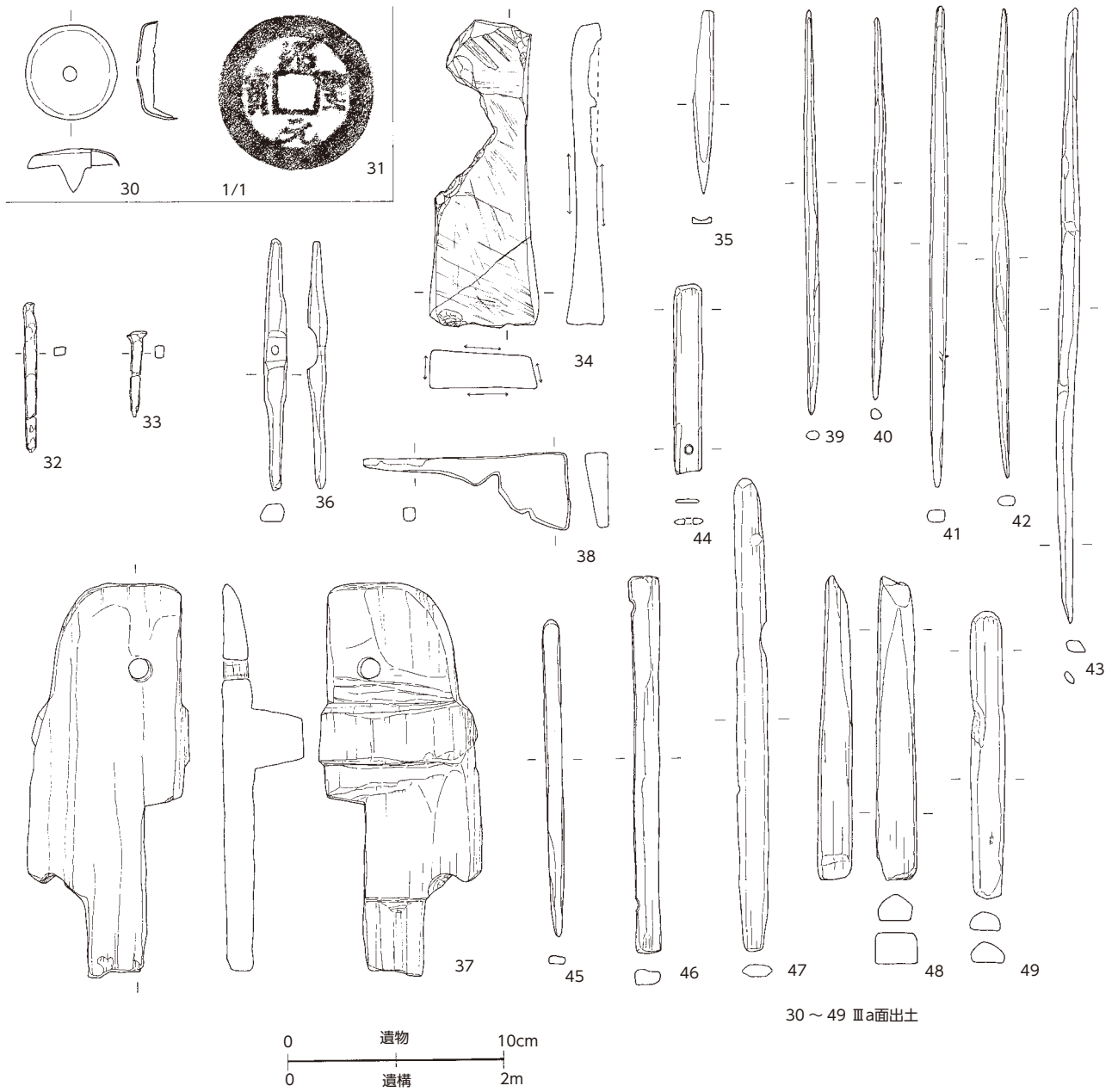
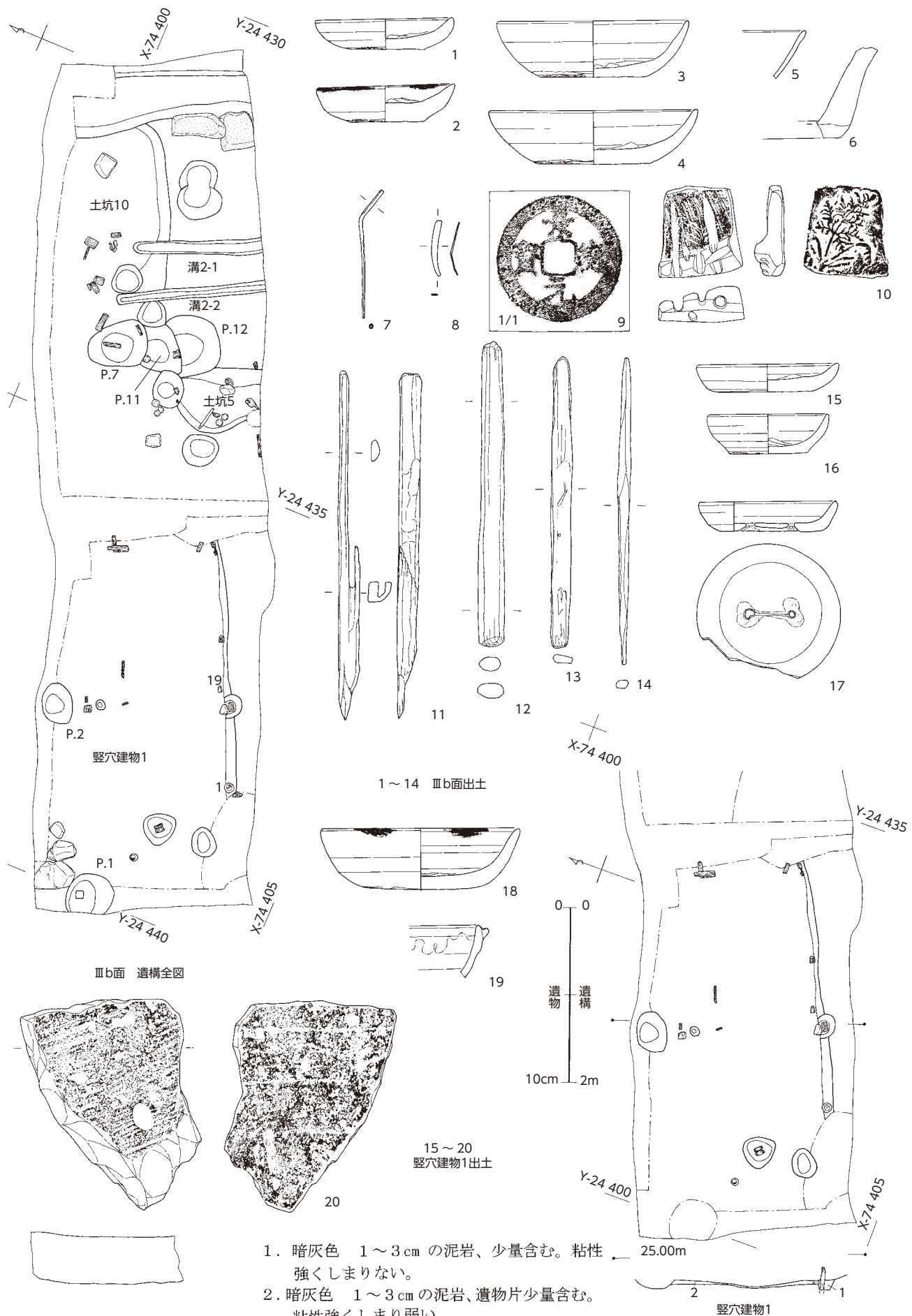


图11 III a面出土遺物(2), 溝4, 同出土遺物



1. 暗灰色 1~3cm の泥岩、少量含む。粘性強くしまりない。
2. 暗灰色 1~3cm の泥岩、遺物片少量含む。粘性強くしまり弱い。

図 12 III b面遺構全図、竪穴建物1，同出土遺物

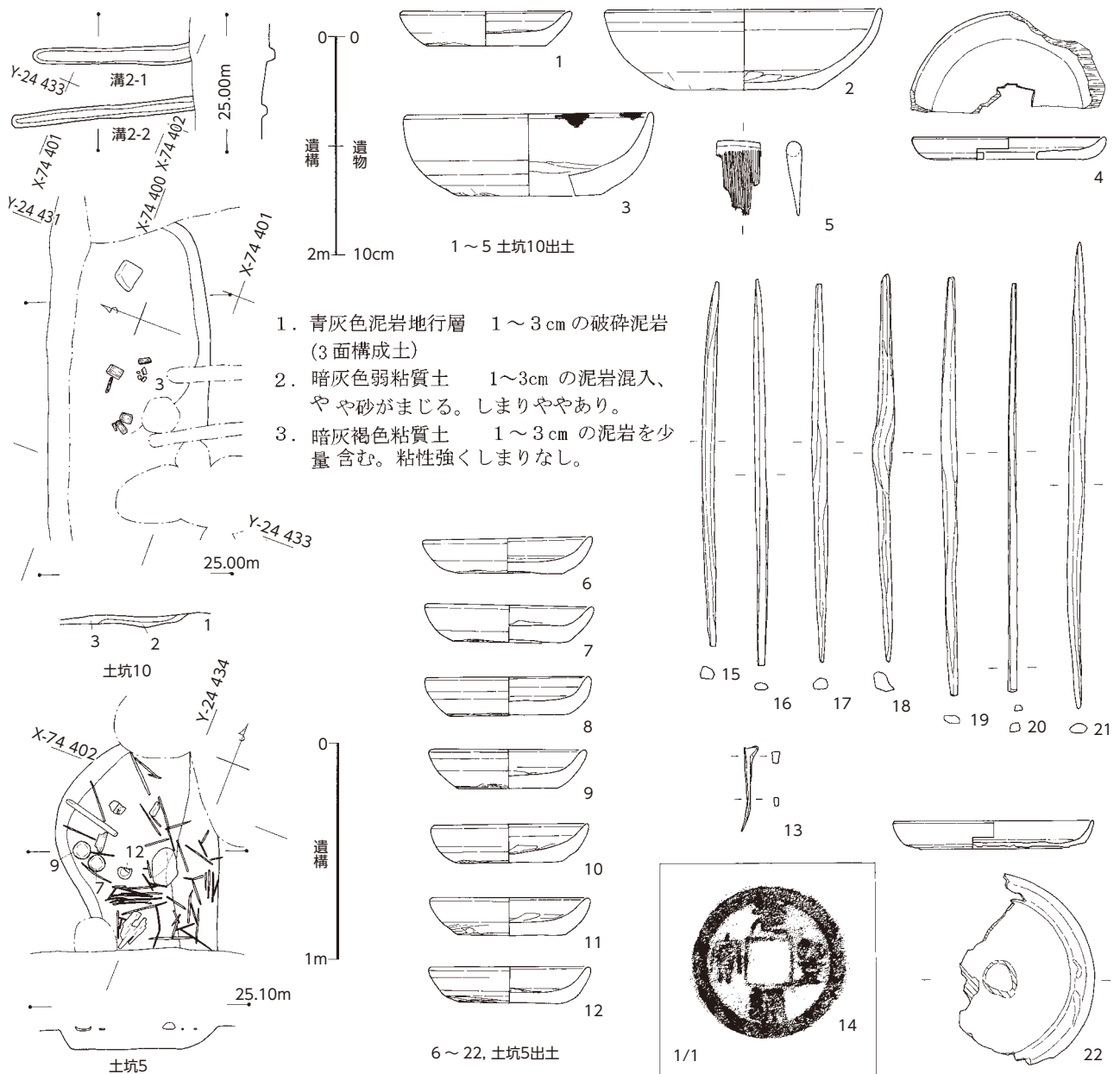


図13 溝2・土坑10・土坑5, 同出土遺物

ろう。

4. III b 面

面の概要 (図12)

検出高：24.70～24.80m 面構成土：破碎泥岩 検出遺構：溝3条（うち2条は組みとなる）・板壁竪穴建物2棟・小穴15口 出土遺物：土師器皿R種小型（1・2）・土師器皿R種中型（3）・土師器皿R種大型（4）・瀬戸入子（5）・土師質火鉢（6）・銅製品（7・8）・景德元宝（9）・滑石印判（10）・格子部材（11）・串状木製品（12・13）・箸状木製品（14） 特記事項：浅い竪穴建物とそれに連続した浅い落ち込みが東西に並ぶ。出土遺物の年代は、全体に13世紀後半を示す。

竪穴建物1 (図12)

位置：X-(74 401.50)～(74 404.25) Y-(24 435.58)～(24 440.30) 形状：方形ないし長方形 規模：東西(406)cm×南北(212)cm×深さ16cm 主軸方位：N-64°-E 重複関係：P.1に切られ

る 出土遺物：土師器皿R種小型(15～17)・土師器皿R種大型(18)・瀬戸卸し皿(19)・平瓦(20)
特記事項：町屋風の浅い堅穴建物。壁際に細い杭が80cm～1mおきに遺存、柱か。年代は13世紀後半～末だろう。

土坑10(図13)

位置：X-(74 400.10)～-(74 401.14) Y-(24 430.61)～-(24 432.23) 形状：隅丸方形か 規模：東西(190)cm×南北(120)cm×深さ7～10cm 主軸方位：N-67°-E 重複関係：P.7・11・12に切られる 出土遺物：土師器皿R種小型(1)・土師器皿R種大型(2・3)・漆器皿(4)・木製櫛(5) 特記事項：堅穴建物1東側のほぼ横並びにあり、底面も平らで礎板が散見されるので、当初一連の遺構とした。しかし境界部分の関係性が不明なため、整理時に「土坑」として扱うことにした(したがって土坑番号は下層で検出されたものよりも降る)。年代はやはり13世紀後半～末であろう。南北に走行する平行した2本の細い溝(溝2-1・溝2-2)が本址で断ち切られているが、性格は不明。

土坑5(図13)

位置：X-(74 401.77)～-(74 403.78) Y-(24 433.59)～-(24 434.52) 形状：円形? 規模：(105)cm×(94)cm×深さ11cm 主軸方位：N-50°-W前後 重複関係：P.12に切られる 出土遺物：土師器皿R種小型(6～12)・鉄釘(13)・元豊通宝(14)・箸状木製品(15～21)・漆器椀(22) 特記事項：大量の箸状木製品が土坑内に散乱しており、土師器皿も数点みられる。共食儀礼後の一括廃棄か。年代は13世紀後半であろう。

溝2-1・2-2(図13)

位置：[2-1]X-74 400.60～-(74 402.03) Y-(24 432.23)～-(24 432.92) [2-2]X-74 400.65～-(74 402.23) Y-(24 43.269)～-(24 43.356) 断面形：1・2とも箱形またはU字形 規模：[2-1]長さ150cm×幅19cm×深さ10cm [2-2]長さ172cm×幅14cm×深さ8cm 流下方向：[2-1]確認できず [2-2]南→北 主軸方位：[2-1]N-22°-W [2-2]N-28°-W 重複関係：ともに土坑10と重なるが、切合い関係は不明 出土遺物：凶化可能遺物なし 特記事項：2本の細い溝が平行する。ともに土坑10の中で消滅し、切合い関係も観察できないことに加え、流下方向が2-1はほぼ水平、2-2は谷の傾斜とは逆に土坑10に向かっていることから、土坑10に付帯する排水施設のようなものである可能性がある。

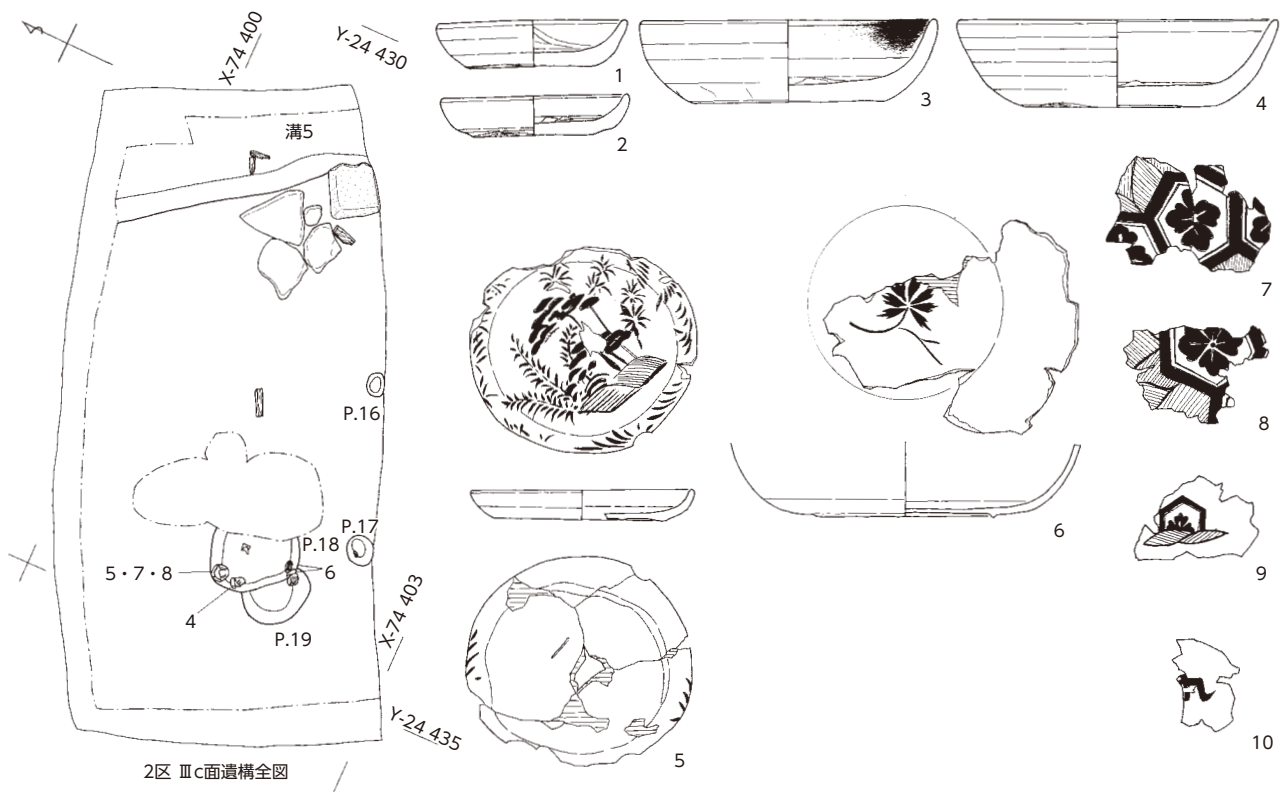
5. III c 面

面の概要(図14)

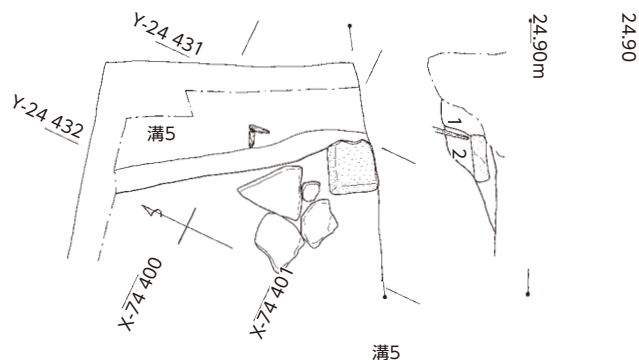
検出高：24.60～24.70m 面構成土：破碎泥岩 検出遺構：溝1条・小穴4口 面出土遺物：凶化しうるものなし 特記事項：谷側の2区では、III b面の下にさらにもう一枚の生活面が検出された。上層溝4にあったと同じような、溝付帯施設とみられる石組みがここでも検出されている。この面で検出されたP.18から出土した土師器の年代は13世紀後半。

溝5(図14)

位置：X-(74 399.33)～-(74 401.16) Y-(24 430.63)～-(24 432.22) 規模：南北(218)cm×東西(84)cm×深さ44cm 流下方向：北→南 主軸方位：N-31°-W 重複関係：なし 出土遺物：凶化可能遺物なし 付帯施設：西岸に上層の溝4と同じく、平たい泥岩を粗く敷いたものがある。やはり橋に関連する可能性がある。 特記事項：これも谷中央部を縦に流れる川の右岸、または道路の西側側溝。溝枠の束柱らしい杭がある。年代は、出土遺物を欠くが、面全体のそれを適用すれば13世紀後半であろう。



2区 III c面遺構全図



1. 明灰色粘質土 拳大までの泥岩多く、炭化物、木片含む。
2. 明灰色粘質土 拳大までの泥岩やや多く、炭化物、木片、遺物片含む。(裏込め)



図14 III c面遺構全図・溝5・P.18出土遺物

P.18出土遺物 (図14)

土師器皿R種小型 (1・2)・土師器皿R種大型 (3・4)・漆器皿 (5)・漆器碗 (6)・漆皮膜 (7～10) 特記事項：浅い穴の中に比較的多くの遺物が含まれている。7・8は同一個体、5と合わせ口で出土。年代は13世紀後半。

6. III d 面

面の概要 (図15)

検出高：24.40～24.70m 面構成土：大型破碎泥岩・青灰色粘質土 検出遺構：掘立柱建物1棟・柱穴列2列 特記事項：面は全体に西の山側に向かって高くなる。上層にはなかった掘立柱建物がここで現れる。出土遺物：土師器皿R種小型 (1・2)・土師器皿R種大型 (3・4)・土錘 (5)・常滑片口鉢Ⅱ類 (6・7)・常滑甕 (8)・鉄釘 (9)・漆器皿 (10・11) 特記事項：2区東半部にはさらに数cm下に面があるが (III d 下部面)、1区III d 面の柱穴列と結びついたため、III d 面として図15上では一括した。面の年代は遺物からみて13世紀中葉～後半としてよからう。

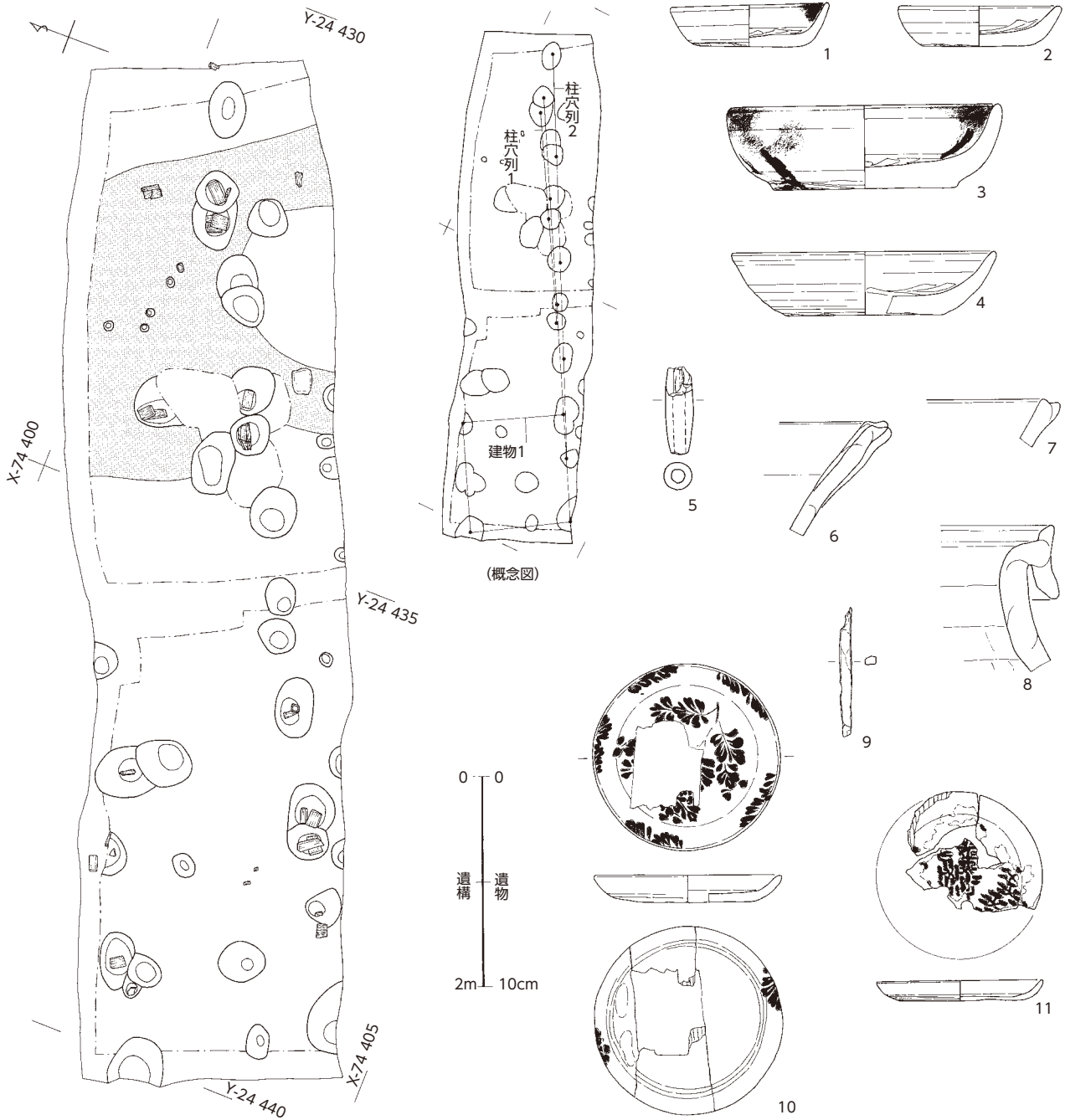


図15 Ⅲ d面遺構全図・同出土遺物

建物1 (図16)

位置：X-74 400.37 ~ -74 404.67 Y-24 430.76 ~ (24 440.34) 規模：東西4間，8.55m×南北1間，(2.50m) 主軸方位：N-60°-E 重複関係：柱穴列1を切る 出土遺物：図化可能遺物なし 特記事項：次章で述べるように、本址を北に延長すると隣地の二階堂字会下351-3ほか地点(伊丹2004)当該面検出の柱穴列に軸線が一致する。もし同一の建物だとすると、少なくとも南北4間の規模を有することになる。東西は地形的な制約からこれ以上は拡がらない可能性が高い。

柱穴列1 (図16)

位置：X-74 400.38 ~ -74 403.87 Y-24 431.93 ~ (24 437.75) 規模：東西3間，6.74m 主軸方位：N-59°-E 重複関係：建物1に切られる 出土遺物：[P.2]土師器皿R種小型(1) 特記事項：

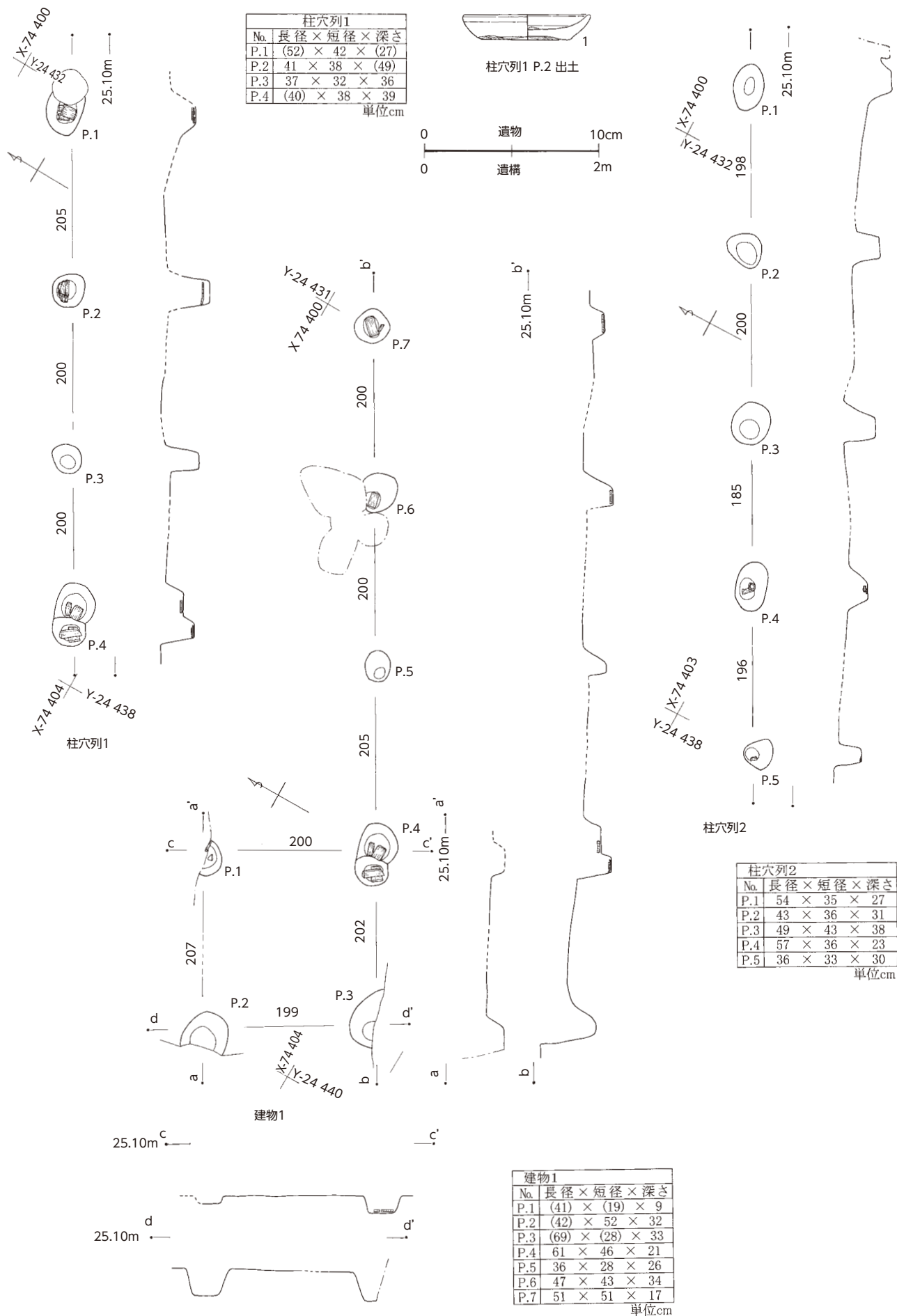


図16 建物1・柱穴列1・柱穴列2, 同出土遺物

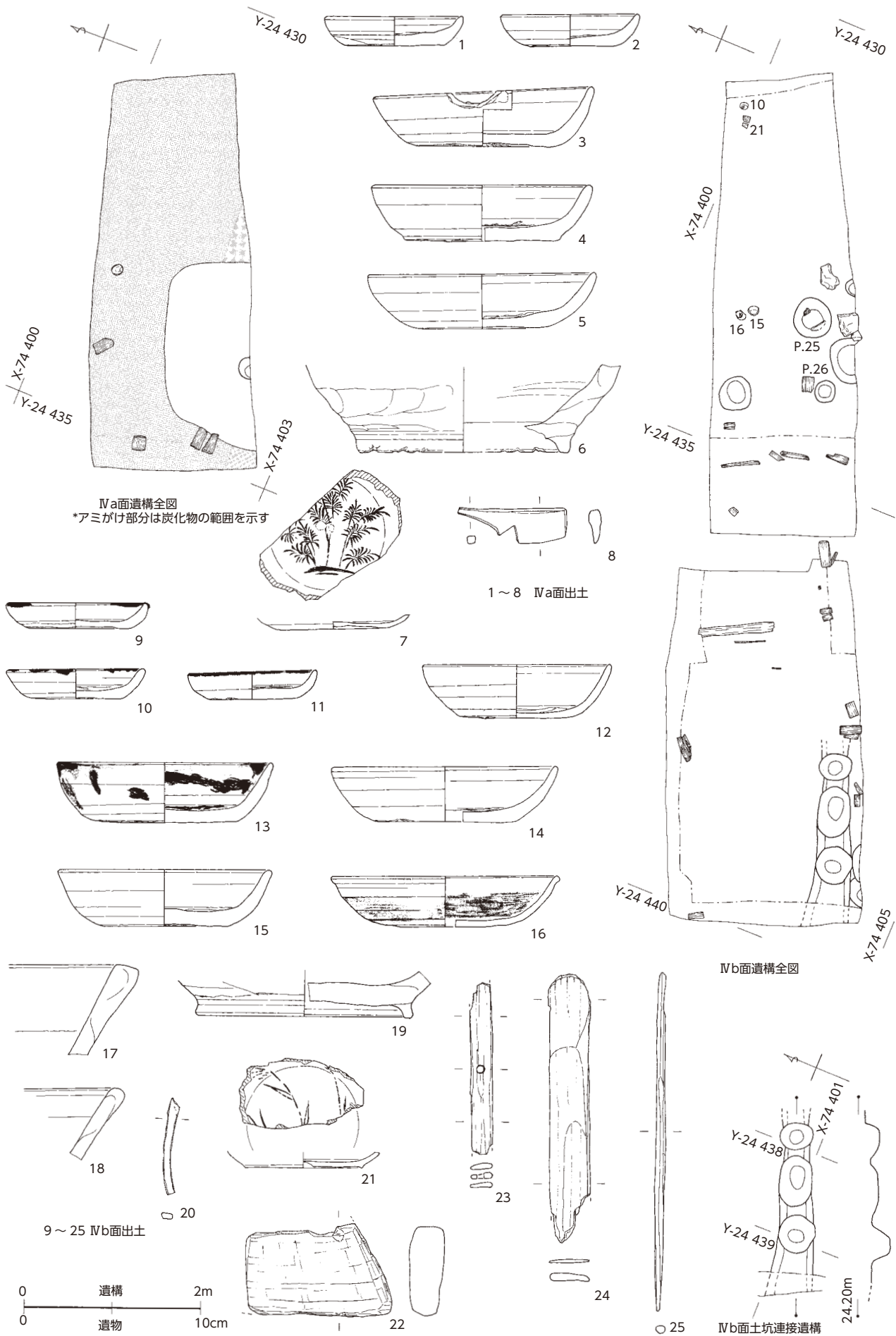


図17 IVa面・IVb面遺構全図，同面出土遺物

柱穴列とはしたが、建物1同様調査区南北の外に拡がり、掘立柱建物となる可能性がある。P.2出土の1は13世紀第3四半期頃であろう。2区検出のP.1・P.2はⅢd下部面検出で当該面でも古い。

柱穴列2 (図16)

位置：X-74 400.20～-74 404.21 Y-24 430.92～-24 438.14 規模：東西4間, 8.17m
主軸方位：N-60.5°-E 重複関係：なし 出土遺物：図化可能遺物なし 特記事項：これも南北の調査区外に延びて建物となる可能性がある。

7. IV a 面

面の概要 (図17)

検出高：23.95～24.40m 面構成土：拳大破碎泥岩を含む青灰色粘質土・炭化物 検出遺構：小穴1口 面出土遺物：土師器ⅢR種小型(1・2)・土師器ⅢR種大型(3～5)・常滑片口鉢Ⅰ類(6)・漆器Ⅲ(7)・雲形肘木(8) 特記事項：調査区は谷側に向かい徐々に低くなっていき、IV面はほぼ1・2区の境界付近から上下2枚に分かれる。ほぼ2区全体にわたって広く炭の層で覆われた面があり、これをIVa面とした。激しい火事に見舞われたことは明らか。炭化物層上面に礎板が三ヶ所点在する。年代は13世紀中葉～同第3四半期頃か。

8. IV b 面

面の概要 (図17)

検出高：24.00～24.60m 面構成土：青灰色粘質土・黄灰色破碎泥岩 検出遺構：小穴9口(3口の連接遺構含む) 面出土遺物：土師器ⅢR種小型(9～11)・土師器ⅢR種中型(12)・土師器ⅢR種大型(13～15)・瀬戸内東部型瓦器(16)・土師質火鉢(17)・常滑片口鉢Ⅰ類(18・19)・鉄釘(20)・漆器Ⅲ(21)・連歯下駄(22)・用途不明木製品(23)・へら状木製品(24)・箸状木製品(25) 特記事項：山際と谷寄りにいくつか穴がある。調査区中央部には礎板様の板が散見され、何らかの小規模建物の存在を示唆するが、落ち込み等はなく詳細は不明。土師器からみた面の年代は13世紀中葉～同第3四半期とすべきだろう。

土坑連接遺構 (図17)

位置：X-74 400.47～-(74 401.50) Y-24 437.60～-(24 439.44) 形状：溝中に土坑3基が並ぶ 規模：長さ197cm×幅50cm×深さ24cm 主軸方位：N-69°-E 重複関係：なし 出土遺物：図化可能遺物なし 特記事項：東西溝の中に円または楕円形の小穴3口が、10cmほど間隔をあけて並ぶ。甕を据えたにしては穴の間隔が狭く、性格は不明。

9. V a 面

面の概要 (図18)

検出高：23.60～24.40m 面構成土：小石大～大型泥岩の詰まった黒褐色粘質土 検出遺構：小穴7口・土坑3基・段部1ヶ所・泥岩切石敷1箇所 出土遺物：土師器ⅢR種小型(1・2)・土師器ⅢR種大型(3)・南部系卸目入り山茶碗(4)・常滑甕(5)・竜泉窯青磁鑄蓮弁文碗(6) 特記事項：この面も2区で上下に分かれる。1区山際には泥岩が乱雑に敷かれ、その部分の東端で段が形成される。調査区東端に溝は検出されず、もっと谷中央部寄りにあった可能性がある。出土遺物の年代は13世紀中葉～第3四半期。

土坑6 (図19)

位置：X-74 401.23～-(74 402.18) Y-24 433.26～-(24 434.55) 平面形：不整円形 断面形：浅い逆台形 規模：東西(122)cm×南北(102)cm×深さ14cm 主軸方位：N-62°-W 重複関係：

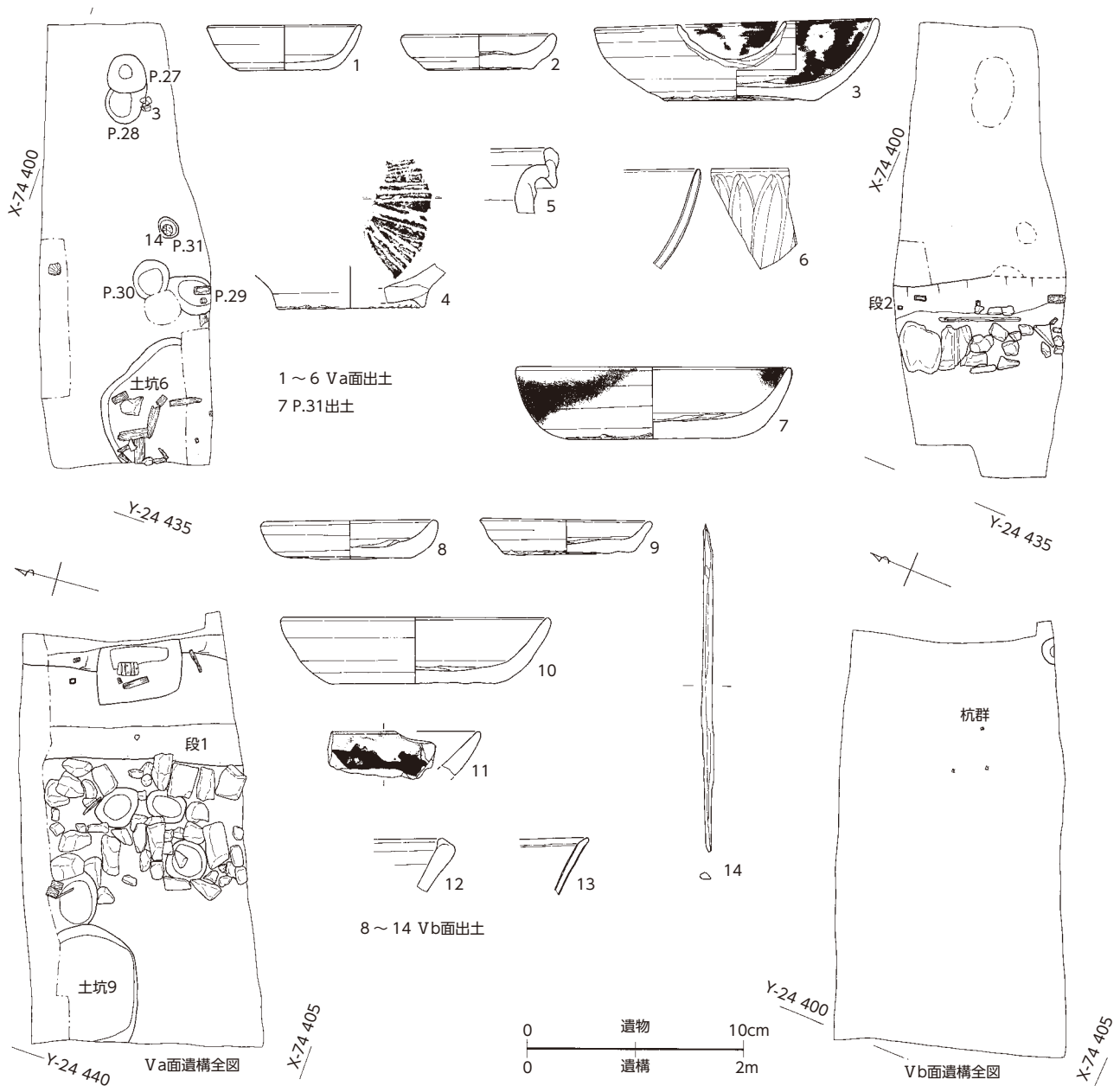


図18 Va面・Vb面遺構全図，同面出土遺物

なし 出土遺物：土師器皿R種小型(2)・土師器皿R種大型(3)・渥美壺(4)・竜泉窯青磁鉢(5)・筒形木製品(6)・部材(7)・用途不明木製品(8) 特記事項：遺物年代は、鎌倉前期の4もあるが、全体に13世紀中葉～第3四半期を示している。

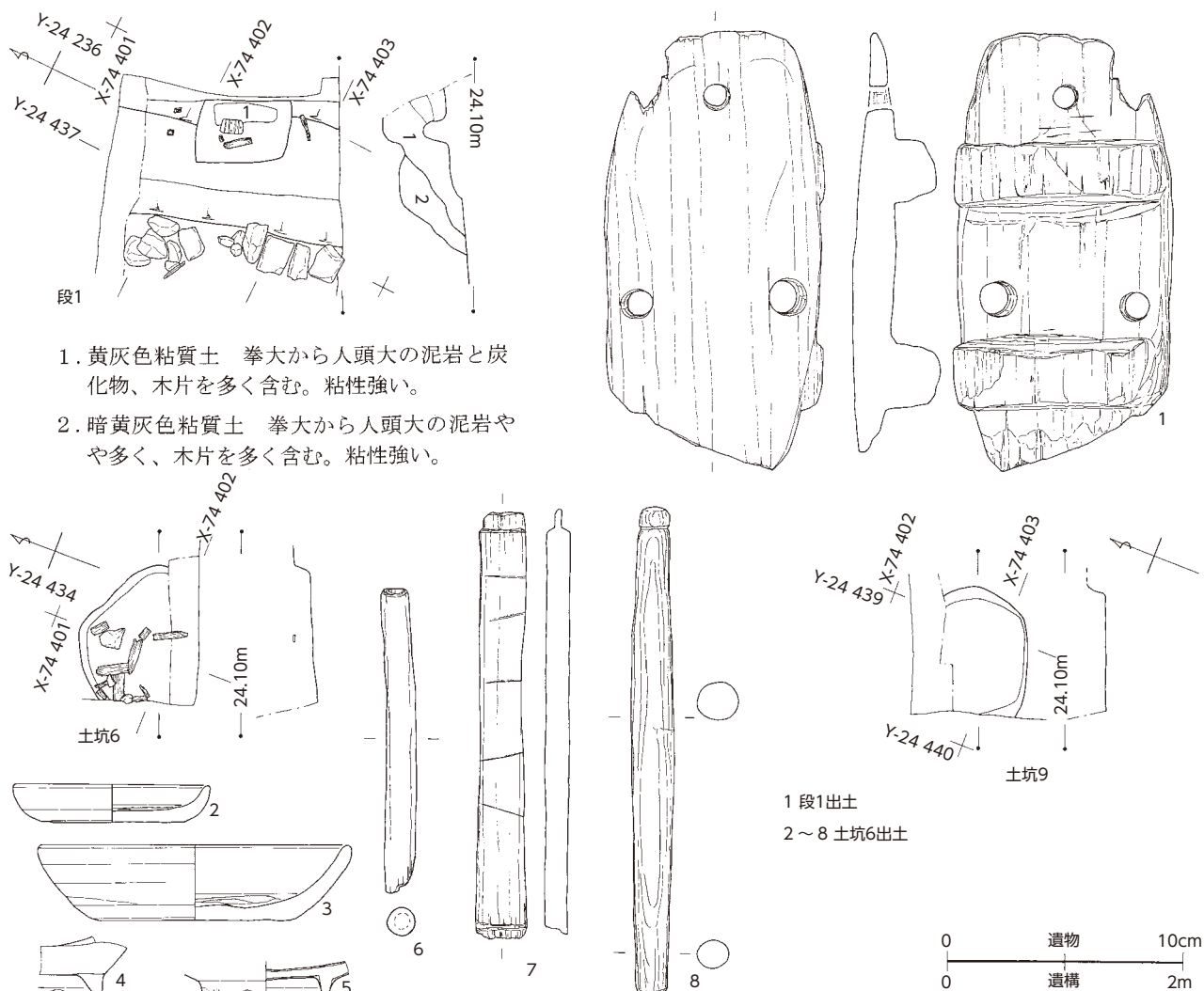
土坑9 (図19)

位置：X-(74 402.38)～(74 403.36) Y-24 438.70～(24 439.75) 平面形：楕円 断面形：浅い逆台形 規模：東西(108)cm×南北(77)cm×深さ18cm 主軸方位：N-21°-E 重複関係：なし

出土遺物：凶化可能遺物なし 特記事項：遺物に乏しくこれのみでの年代比定は困難だが、層位的には前後の関係から13世紀中葉～同第3四半期に属する。

P.31 出土遺物 (図18)

土師器皿R種大型(7) 特記事項：器壁がかなり厚く、13世紀中葉の年代を示している。



1. 黄灰色粘質土 拳大から人頭大の泥岩と炭化物、木片を多く含む。粘性強い。
2. 暗黄灰色粘質土 拳大から人頭大の泥岩や多く、木片を多く含む。粘性強い。

図19 Va面土坑6・9，段，同出土遺物

段1 (図19)

位置：X-(74 401.30)～-(74 403.58) Y-(24 435.56)～-(24 437.90) 段差：70cm 主軸方位：N-18°-W 出土遺物：連歯下駄(1) 付帯施設：段下に南北81cm×東西53cm×深さ31cm、長方形の土坑がある。切合いが観察できないので同時存在の施設と判断 特記事項：溝のようにも見えるが土層断面の観察では対岸がなく、段状の落ちと判断した。4～5回の掘り直しがあり、それぞれの底面の深度差によって中位にさらに段が生じている。切り込み肩の面上には凝灰岩や泥岩が乱雑に置かれており、山際に通路状の施設が存在していた可能性がある。

10. V b 面

面の概要 (図18)

検出高：23.50～24.00m 面構成土：暗青灰色粘質土 検出遺構：段部1ヶ所・小穴1口・杭群1ヶ所 出土遺物：土師器皿R種小型(8・9)・土師器皿R種大型(10)・土師器皿T種大型(11)・常滑片口鉢Ⅱ類(12)・白磁口はげ皿(13)・箸状木製品(14) 特記事項：この面にも東側に溝はない。11は本地点唯一の手づくね成形の土師器である。面全体の年代は13世紀中葉～第3四半期であろうが、11の存在を考えると13世紀第2四半期も視野に入れてよいであろう。

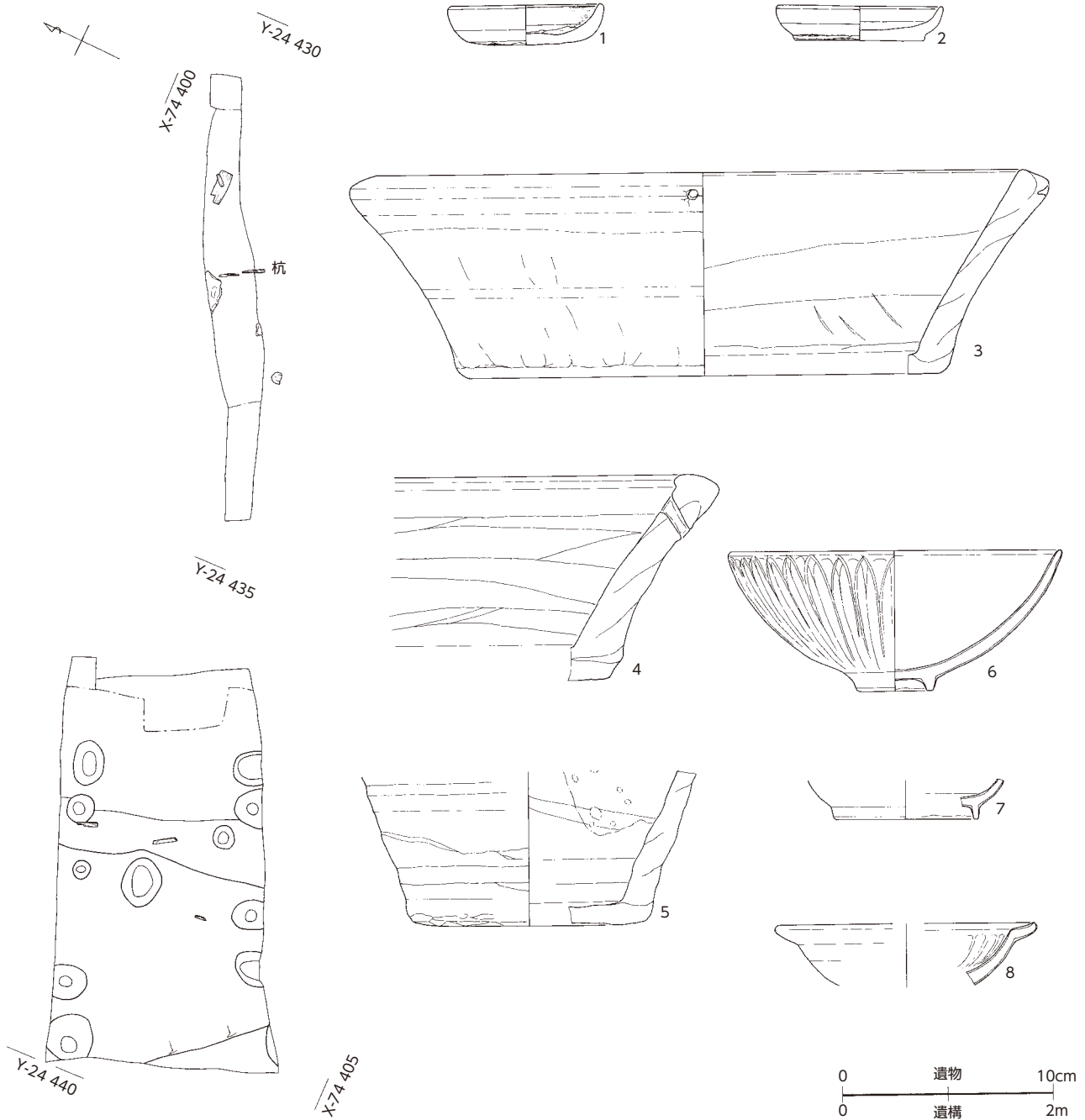


図20 VI面遺構全図，VI面出土遺物

段2 (個別図略，断面は図5参照)

位置：X-(74 400.40)～(74 402.42) Y-(24 432.75)～(24 434.75) 段差：28cm 主軸方位：N-23°-W 重複関係：なし 出土遺物：段下に凶化可能遺物なし 特記事項：これのみでは年代はわからないが、面全体では13世紀中葉～第3四半期頃であろう。

杭群 (個別図略)

位置：X-74 402.63～74 402.95 Y-24 436.93～24 437.41 平面形：3本の杭が立つ 規模：東西40cm×35cm 主軸方位：N-63°-W(東西を主軸とみた場合) 特記事項：3本の杭がカギの手に配されている。囲炉裏の隅の束柱の可能性ある。上部はVa面の切石群により壊されたとみたい。年代は面のそれに準じ、13世紀中葉～第3四半期であろう。

11. VI面

面の概要 (図20)

検出高：23.15～23.90m 面構成土：岩盤・暗青灰色粘質土 検出遺構：掘立柱建物2棟・杭列・礎板 出土遺物：土師器皿R種小型(1・2)・土師質火鉢(3)・瓦器火鉢(4)・褐釉壺(5)・竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗(6)・竜泉窯青磁無文鉢(7)・竜泉窯青磁鎬蓮弁文折縁鉢(8) 特記事項：西の山側では岩盤面を、東の谷側では岩盤の落ちを埋めた暗青灰色粘質土上面を生活面として使っている。2区はVb面検出時点ですでに地表面からの掘削深度が2.5mを超えており、安全面への配慮から全面掘削はおこなわず、幅50cmほどの確認坑を入れるだけにとどめた。岩盤面はいくらか傾斜を持つが、本来の谷の傾斜からみて不自然に平坦で、削平により形成されたと考えるべきであろう。2区の低位面の土層には多量の破碎泥岩とともに炭化物も多くみられるが(図5)、それには以上のような背景も想定される。1区中央部には谷に向かって落ちる段がある。段の斜面は谷形成時の岩盤自然傾斜面とみられるが、段下もまた生活面とされ、柱穴様の小穴が検出された。柱穴は段の上下にあり、一連の建物かどうかは疑問なしとしないが、ここでは連携を想定して線で結んでおく。出土遺物には13世紀前半とみられる中国産の褐釉壺(5)が含まれているが、全体的には13世紀中葉～後半であろう。

建物2

位置：X-74 401.68～(74 402.17) Y-24 436.47～-24 439.40 平面形：調査区内で方形 規模：東西1間(250cm)×南北1間(200cm) 主軸方位：N-67°-E 重複関係：なし 出土遺物：図化可能遺物なし 特記事項：上述のように段の上下にまたがっており、建物としてのつながりには検討の余地があるが、柱穴同士に共通要素もあるのでここに呈示しておく。

建物3

位置：X-24 401.70～(24 403.53) Y-74 436.82～(74 439.92) 平面形：カギ形 規模：東西1間(256cm)×南北1間(200cm) 主軸方位：N-69°-E 重複関係：なし 出土遺物：図化可能遺物なし 特記事項：これも上記建物2同様建物としてのつながりは確実ではないが、穴の大きさなど共通する点もあるので、建物の可能性を指摘しておく。

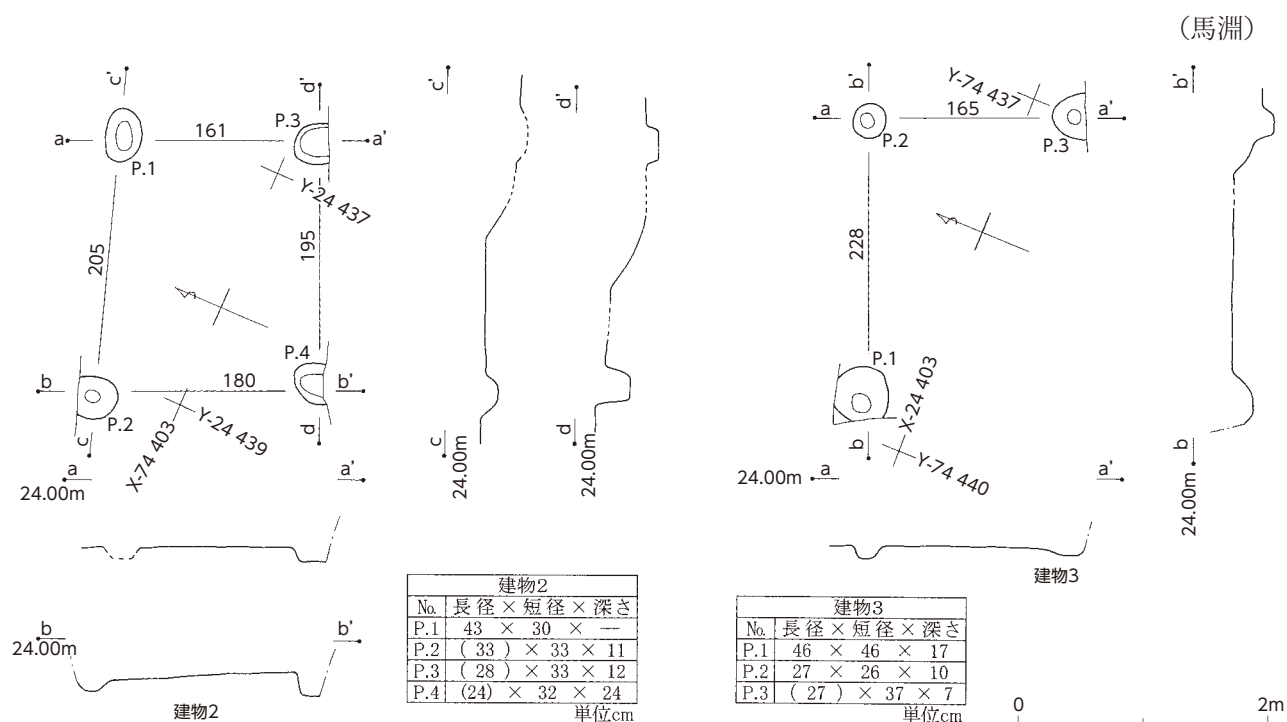


図21 VI面建物2・3

表1 出土遺物観察表(1)

挿図番号	層位	出土遺構	種別	観察
図6-1	I面	I面包含層	土師器皿 R種 大型	口径(11.7)cm 底径(6.7)cm 器高3.2cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 板状圧痕あり 胎土は赤色粒子・海綿骨針・砂粒・雲母片を含む淡橙色弱砂質土
2	I面	I面包含層	土師器皿 R種 大型	口径12.3cm 底径7.4cm 器高3.5cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 板状圧痕あり 胎土は赤色粒子・海綿骨針・泥岩粒を含む淡黄褐色弱粉質土
3	I面	I面包含層	瀬戸美濃 すり鉢	底部片 輪積み成形 胎土は淡灰褐色 砂粒・赤色粒・岐路色石英・長石の微粒～微石を含む 褐釉 条線は13本 内面下位は使用のため磨耗
4	I面	I面包含層	白磁 口はげ皿	口径(9.2)cm ロクロ成型 口縁部面取り、釉ぬぐう 素地は砂粒子を含む灰白色 釉は不透明な青灰白色で貫入あり
5	I面	I面包含層	平瓦	厚(2.3)cm 胎土は砂粒・長石粒・雲母を含む堅致な灰褐色土 凸面は糸切り痕、凹面は布目痕が残る
図7-1	II面	II面包含層	土師器皿 R種 小型	口径(7.75)cm 底径4.8cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む橙色弱砂質土
2	II面	II面包含層	土師器皿 R種 小型	口径8.0cm 底径5.7cm 器高1.9cm 右回転ロクロ 底部糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・微砂粒・泥岩粒を含む黄灰色弱粉質土
3	II面	II面包含層	土師器皿 R種 小型	口径7.7cm 底径5.7cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底部糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・微砂粒・泥岩粒を含む黄灰色弱粉質土
4	II面	II面包含層	土師器皿 R種 小型	口径(7.4)cm 底径5.3cm 器高1.55cm 右回転ロクロ 底部糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒・少量の雲母片を含む黄灰色弱粉質土
5	II面	II面包含層	土師器皿 R種 小型	口径(7.8)cm 底径5.4cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底部糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・少量の雲母片を含む黄灰色弱砂質土
6	II面	II面包含層	土師器皿 R種 小型	口径7.5cm 底径4.3cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底部糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・少量の雲母片を含む淡灰褐色砂質土 器表は被熱により剥落、口縁部に油煤付着
7	II面	II面包含層	土師器皿 R種 小型	口径7.2cm 底径5.4cm 器高1.9cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 口縁部を故意に打ち欠く 胎土は 海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む淡黄褐色砂質土
8	II面	II面包含層	土師器皿 R種 小型	口径7.7cm 底径5.0cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底部糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・ 赤色粒子・砂粒・泥岩粒・少量の雲母片を含む淡灰褐色弱砂質土 口縁部に油煤少量付着
9	II面	II面包含層	土師器皿 R種 小型	口径7.6cm 底径5.3cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底部糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒・雲母片を含む黄灰色弱砂質土
10	II面	II面包含層	土師器皿 R種 中型	口径(10.77)cm 底径(5.6)cm 器高3.0cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕あり 胎土は赤色粒子・海綿骨針・微量の雲母片を含む淡橙色粉質土
11	II面	II面包含層	土師器皿 R種 中型	口径11.3cm 底径6.0cm 器高2.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 外底部に板状圧痕あり 胎土は多量 の砂粒・赤色粒子・雲母片を含む肌色を呈す堅緻な砂質土
12	II面	II面包含層	土師器皿 R種 中型	口径10.8cm 底径6.2cm 器高3.0cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 外底部に板状圧痕・不貫通の穿孔あり 胎土は赤色粒子・雲母片・海綿骨芯を含む橙色粉質精良土
13	II面	II面包含層	土師器皿 R種 中型	口径10.8cm 底径7.2cm 器高3.0cm 右回転ロクロ 底部糸切り 外底部に薄く板状圧痕 内底部ナデ 口縁部に油 煤付着 胎土は赤色粒子・砂粒・雲母片を含む黄灰色弱砂質土で堅緻
14	II面	II面包含層	土師器皿 R種 大型	口径12.1cm 底径5.9cm 器高3.3cm 右回転ロクロ 底部糸切り 外底部に薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿 骨芯・赤色粒子・泥岩粒を含む橙色弱粉質土 口縁部に故意に打ち欠いた部分あり
15	II面	II面包含層	土師器皿 R種 大型	口径12.0cm 底径6.9cm 器高3.4cm 右回転ロクロ 底部糸切り 外底部に薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿 骨芯・赤色粒子・気孔を含む橙色弱粉質土
16	II面	II面包含層	土師器皿 R種 大型	口径(11.7)cm 底径(8.3)cm 器高3.1cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は赤色粒子・微量の雲母片を含む橙色粉質土
17	II面	II面包含層	土師器皿 R種 大型	口径(13.8)cm 底径(8.4)cm 器高3.0cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 板状圧痕あり 胎土は赤色粒子・微砂粒・雲母片を含む淡橙色弱粉質土
18	II面	II面包含層	土師器皿 R種 大型	口径(12.2)cm 底径(6.5)cm 器高3.3cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は赤色粒子・微砂粒・海綿骨芯・泥岩粒を含む淡橙色弱砂質土
19	II面	II面包含層	土師器皿 R種 大型	口径(8.0)cm 底径(7.8)cm 器高3.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は赤色粒子・微量の雲母片・海綿骨芯を含む橙色精良粉質土
20	II面	II面包含層	土師器皿 R種 大型	口径12.0cm 底径6.7cm 器高3.2cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は赤色粒子・海綿骨針・泥岩粒・雲母片を含む淡橙色弱粉質土
21	II面	II面包含層	土師器皿 R種 大型	口径(13.8)cm 底径(8.5)cm 器高2.8cm 右回転ロクロ 底面糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕あり 胎土は赤色粒子・微砂粒・微量の雲母片を含む淡橙色粉質土 内面・外面とも広い範囲に煤状の黒色物質が付着する
22	II面	II面包含層	土師器皿 R種 大型	口径12.3cm 底径7.5cm 器高3.2cm 右回転ロクロ 底部糸切り 外底部に強く板状圧痕 内底部ナデ 口縁部と内 底部に油煤付着 胎土は赤色粒子・海綿骨芯・雲母片を含む淡橙色弱砂質土
23	II面	II面包含層	土師器皿 R種 大型	口径13.8cm 底径8.2cm 器高3.3cm 右回転ロクロ 底部糸切り 外底部に板状圧痕 内底部ナデ 口縁部に少量の 油煤付着 胎土は赤色粒子・海綿骨芯・雲母片それぞれ少量を含む淡橙色弱粉質精良土
24	II面	II面包含層	土師器皿 R種 大型	口径13.3cm 底径8.8cm 器高3.6cm 右回転ロクロ 底部糸切り 外底部に板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤色粒子・海綿骨芯・雲母片を含む橙色弱粉質土
25	II面	II面包含層	瓦器火鉢	底部片 胎土は白色粒・赤色粒・砂粒・礫を含む灰色瓦質土、器表は灰褐色 内面下位に斜めに平行した引っかき傷
26	II面	II面包含層	常滑 片口鉢II類	口縁部片 輪積み成形 胎土は長石・石英微粒を含む暗灰色緻密土 器表は黒褐色 小片のため使用痕は不明
27	II面	II面包含層	瀬戸 入り	口縁部片 口径(7.7)cm ロクロ成形 胎土は黄灰色 器表は灰色 内面降灰による自然釉
28	II面	II面包含層	瀬戸 卸し皿	口縁部～体部片 口径(13.45)cm ロクロ成型 胎土は明黄灰色 灰釉、二次焼成を受け口縁部～外側にかけて剥離
29	II面	II面包含層	瀬戸 卸し皿	底部片 ロクロ成型 胎土は明灰褐色 灰釉、外底部は露胎
30	II面	II面包含層	竜泉窯青磁 鏝蓮弁文碗	底部片 底径(5.1)cm ロクロ成形 素地は明灰色、黒色微粒子含み緻密 釉は青緑色半透明 削りだし高台、畳み 付きより内側は露胎 複弁 貫入あり
31	II面	II面包含層	白磁 口はげ皿	口縁部片 ロクロ成型 口縁部面取り、釉ぬぐう 素地は微砂粒を含む灰白色 釉は不透明な灰緑色
32	II面	II面包含層	開元通寶	初鑄唐621年 唐 楷書
33	II面	II面包含層	熙寧元寶	初鑄1068年 北宋 篆書
34	II面	II面包含層	石製 硯	残存長(10.5)cm 残存幅(6.1)cm 最大厚3.4cm 頁岩製太子硯 両面から脚を削りだし、表面は非常に滑らかで端 正な仕上げ 色調は明灰色 国産ではない

表2 出土遺物観察表(2)

挿図番号	層位	出土遺構	種別	観察
35	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	擦り石	残存長(7.7)cm 残存幅(8.0)cm 残存厚(2.1)cm 表面は非常に滑らかに平らに研磨されている 色調は灰色 全体像は不明
図8-36	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	凹石	残存長(16.8)cm 残存幅(17.2)cm 残存厚(6.5)cm 表面の曲面は滑らかに研磨 色調は灰色 上面の窪みは火を受けて赤褐色化、煤付着
37	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	箸状木製品	全長19.1cm 幅0.85cm 厚0.6cm 両口
38	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	箸状木製品	全長16.1cm 幅0.6cm 厚0.3cm 両口
39	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	漆器 椀	高台径8.2cm 輪高台 内側・外側とも黒漆塗り、見込みおよび体部外側に朱漆の手描き鶴丸文 外底面中央に朱漆で「七」の文字
40	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	骨製品 筭	残存長(8.7)cm 残存幅(1.4)cm 厚0.3cm
41	Ⅱ面	P. 8	箸状木製品	全長18.0cm 幅0.5cm 厚0.3cm 両口
42	Ⅱ面	囲炉裏	土師器皿 R種 小型	口径7.45cm 底径5.3cm 器高1.8cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・微砂粒・少量の雲母片を含む淡橙色弱粉質土
43	Ⅱ面	囲炉裏	土師器皿 R種 小型	口径7.0cm 底径4.9cm 器高1.6cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕不明瞭 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・少量の泥岩粒を含む黄灰色弱砂質土
44	Ⅱ面	囲炉裏	土師器皿 R種 小型	口径(7.8)cm 底径(5.1)cm 器高2.1cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部かすかな板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・少量の雲母片と泥岩粒を含む淡橙色弱粉質土 油煤付着
45	Ⅱ面	囲炉裏	土師器皿 R種 大型	口径(13.8)cm 底径(8.3)cm 器高3.5cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤色粒子・雲母片を含む橙色粉質土
46	Ⅱ面	囲炉裏	土師器皿 R種 大型	口径(12.8)cm 底径(8.0)cm 器高3.2cm 右回転口クロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は砂粒・多量の泥岩粒を含む黄灰色弱砂質粗土
47	Ⅱ面	囲炉裏	土師器皿 R種 大型	口径12.0cm 底径7.8cm 器高3.4cm 右回転口クロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む橙色弱砂質土
48	Ⅱ面	囲炉裏	土師器皿 R種 大型	口径(11.8)cm 底径(6.3)cm 器高3.3cm 右回転口クロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は赤色粒子・砂粒・泥岩粒・雲母片を含む淡橙色弱砂質土
49	Ⅱ面	囲炉裏	常滑片口鉢Ⅱ類	口径31.6cm 底径14.2cm 器高11.4cm 輪積み成形 胎土は長石・石英粒を多く含む粗い橙褐色土 内底面は使用により磨耗 外面指頭痕、下位削り、煤と灰付着
50	Ⅱ面	囲炉裏	砥石 仕上砥	残存長(3.3)cm 幅2.9cm 最大厚0.6cm 灰色頁岩 砥面2面 鳴滝産
図9-1	Ⅱ面	土坑2	土師器皿 R種 小型	口径6.8cm 底径4.7cm 器高1.8cm 右回転口クロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・砂粒・雲母片を含む淡橙色弱砂質土 口縁から体部にかけて油煤付着
2	Ⅱ面	土坑2	土師器皿 R種 小型	口径7.8cm 底径5.2cm 器高1.8cm 右回転口クロ 底面糸切り 内底部ナデ 外底部板状圧痕 胎土は海綿骨芯・砂粒・雲母片を含む灰黄色砂質土
3	Ⅱ面	土坑2	土師器皿 R種 中型	口径(10.6)cm 底径(7.4)cm 器高2.7cm 右回転口クロ 底面糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は赤色粒子・微砂・雲母片を含む淡橙色弱粉質土
4	Ⅱ面	土坑2	土師器皿 R種 中型	口径11.8cm 底径7.4cm 器高2.9cm 右回転口クロ 底面糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む橙色弱砂質土
5	Ⅱ面	土坑2	土師器皿 R種 大型	口径12.0cm 底径7.2cm 器高3.3cm 右回転口クロ 底面糸切り 内底部ナデ 外底部板状圧痕 胎土は赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・雲母片・気孔を含む淡褐色弱砂質土 内底面に多量の、外底面に少量の油煤付着
6	Ⅱ面	土坑2	瓦器火鉢	口径(40.2)cm 底径(31.7)cm 器高10.2cm 輪積み成型 胎土は赤色粒子・白色粒子・砂粒・雲母片を含む橙色砂質土 器表は黒灰色
7	Ⅱ面	土坑2	箸状木製品	全長16.1cm 幅0.55cm 厚0.55cm 両口
8	Ⅱ面	土坑2	箸状木製品	全長18.8cm 幅0.6cm 厚0.5cm 両口
9	Ⅱ面	土坑2	箸状木製品	全長16.2cm 幅0.7cm 厚0.35cm 両口
10	Ⅱ面	土坑2	骨製品 筭	残存長(13.4)cm 幅1.4cm 厚0.3cm
11	Ⅱ面	土坑3・4	土師器皿 R種 小型	口径7.75cm 底径5.25cm 器高2.1cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は少量の赤色粒子・微砂粒を含む淡褐色橙色弱粉質土
12	Ⅱ面	土坑3・4	土師器皿 R種 小型	口径7.6cm 底径4.4cm 器高1.9cm 右回転口クロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む淡褐色弱砂質土
13	Ⅱ面	土坑3・4	土師器皿 R種 小型	口径7.7cm 底径5.1cm 器高1.8cm 右回転口クロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む淡褐色弱砂質土
14	Ⅱ面	土坑3・4	土師器皿 R種 小型	口径7.4cm 底径5.4cm 器高1.75cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・少量の雲母片・泥岩粒・砂粒を含む淡灰褐色弱砂質土
15	Ⅱ面	土坑3・4	土師器皿 R種 小型	口径7.5cm 底径5.5cm 器高1.65cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・雲母片・泥岩粒・砂粒を含む淡灰褐色砂質土
16	Ⅱ面	土坑3・4	土師器皿 R種 中型	口径(10.7)cm 底径(6.9)cm 器高2.95cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部かすかな板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤色粒子・微砂を含む橙色弱粉質土
17	Ⅱ面	土坑3・4	土師器皿 R種 中型	口径(11.8)cm 底径(7.0)cm 器高2.8cm 右回転口クロ 底面糸切り 内底部ナデ 胎土は赤砂粒・砂粒を含む淡褐色弱粉質土
18	Ⅱ面	土坑3・4	土師器皿 R種 大型	口径12.55cm 底径8.3cm 器高3.9cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部かすかな板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤色粒子・雲母片・砂粒を含む橙色弱砂質土 内面・外面とも少量の煤付着
19	Ⅱ面	土坑3・4	土師器皿 R種 大型	口径12.95cm 底径7.8cm 器高3.3cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤色粒子・少量の雲母片・砂粒を含む淡褐色砂質土 口縁部全体に油煤付着
20	Ⅱ面	土坑3・4	土師器皿 R種 大型	口径12.35cm 底径7.1cm 器高3.5cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部に強い板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・大粒の泥岩粒・砂粒を含む橙色弱砂質粗土
21	Ⅱ面	土坑3・4	土師器皿 R種 大型	口径12.55cm 底径8.3cm 器高3.3cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部強い板状圧痕 内底部ナデ胎土は赤色粒子・雲母片・微砂を含む淡褐色弱砂質土
22	Ⅱ面	土坑3・4	土師器皿 R種 大型	口径12.2cm 底径7.4cm 器高23.15cm 右回転口クロ 底面糸切り 外底部かすかな板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・大粒の泥岩粒を含む淡褐色弱砂質粗土
23	Ⅱ面	土坑3・4	瓦器火鉢	口径(35.5)cm 底径(25.5)cm 器高9.22cm 輪積み成型 胎土は白色粒子・砂粒・礫を含む灰色砂質土 器表は灰色 外側中位は木口工具または篋による縦位の掻きナデと指頭痕、下位は削り 外底面に板状圧痕あり
24	Ⅱ面	土坑3・4	連筒下駄	残存長(19.3)cm 残存幅(9.6)cm 残存高(4.3)cm
25	Ⅱ面	土坑3・4	棒状木製品	全長15.1cm 幅1.5cm 厚0.7cm
26	Ⅱ面	土坑3・4	箸状木製品	全長17.6cm 幅0.6cm 厚0.35cm 両口
27	Ⅱ面	土坑3・4	箸状木製品	全長18.15cm 幅0.75cm 厚0.5cm 両口
28	Ⅱ面	土坑3・4	皇宋通寶	初鑄1038年 北宋 篆書

表3 出土遺物観察表(3)

挿図番号	層位	出土遺構	種別	観察
図10-1	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.3cm 底径4.2cm 器高2.1cm 右回転口クロ 底部糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は雲母片・赤色粒子を含む橙色弱粉質土 口縁から内底部の一部に油煤付着
2	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.9cm 底径4.9cm 器高1.8cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・微砂を含む黄灰色弱砂質土
3	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.2cm 底径4.0cm 器高2.0cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部板状圧痕 胎土は雲母片・赤色粒子・微砂を含む淡橙色弱砂質土
4	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	土師器Ⅲ R種 小型	口径(7.8)cm 底径(5.0)cm 器高2.1cm 右回転口クロ 底部糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は雲母片・赤色粒子・泥岩粒・砂粒を含む淡橙色弱砂質土
5	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.3cm 底径5.2cm 器高1.9cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む黄灰色砂質土
6	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.8cm 底径5.1cm 器高1.9cm 右回転口クロ 底部糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒を含む淡橙色弱砂質土 内面全体が黒灰色に焼けている
7	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.3cm 底径5.6cm 器高1.8cm 右回転口クロ 底部糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒を含む淡橙色弱砂質土
8	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.5cm 底径4.7cm 器高1.8cm 右回転口クロ 底部糸切り 外底部に薄く板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む黄灰色弱砂質粗土
9	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.7cm 底径5.2cm 器高1.7cm 右回転口クロ 底部糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む黄灰色弱砂質土
10	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.8cm 底径5.5cm 器高1.4cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 胎土は雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む黄灰色弱砂質粗土
11	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.9cm 底径(5.6)cm 器高1.8cm 右回転口クロ 底部糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒を含む淡橙色弱砂質土
12	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.6cm 底径5.5cm 器高1.5cm 右回転口クロ 底部糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は雲母片・赤色粒子・海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む黄灰色砂質粗土
13	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	土師器Ⅲ R種 小型	口径8.2cm 底径6.4cm 器高1.7cm 右回転口クロ 底部糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む黄灰色弱砂質土
14	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	土師器Ⅲ R種 小型	口径7.6cm 底径5.5cm 器高1.7cm 右回転口クロ 底部糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は赤色粒子・海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む淡橙色弱砂質土
15	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	土師器Ⅲ R種 小型	口径8.0cm 底径5.8cm 器高1.7cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部板状圧痕 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む淡橙色弱砂質土 二次焼成を受けて器表は全体に灰色を帯びる
16	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	土師器Ⅲ R種 小型	口径8.4cm 底径6.4cm 器高1.7cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部板状圧痕 胎土は雲母片・赤色粒子・砂粒を含む淡橙色砂質土
17	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	土師器Ⅲ R種 大型	口径11.8cm 底径7.8cm 器高3.3cm 右回転口クロ 底部糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む淡橙色弱砂質粗土 内面と外底面は暗灰色に焼けている
18	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	土師器Ⅲ R種 大型	口径(11.8)cm 底径(8.2)cm 器高3.3cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む橙色弱砂質粗土 内底面に油煤付着
19	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	土師器Ⅲ R種 大型	口径(11.8)cm 底径7.5cm 器高3.8cm 右回転口クロ 底部糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む黄灰色弱砂質土
20	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	土師器Ⅲ R種 大型	口径(8.2)cm 底径12.3cm 器高3.3cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む橙色弱砂質土
21	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	土師器Ⅲ R種 大型	口径12.4cm 底径7.7cm 器高3.4cm 右回転口クロ 底部糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む淡橙色弱砂質土
22	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	土師器Ⅲ R種 大型	口径(12.9)cm 底径(7.5)cm 器高2.1cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子を含む橙色弱粉質土 内面に油煤付
23	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	土師器Ⅲ R種 大型	口径12.7cm 底径8.5cm 器高3.5cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部板状圧痕 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・泥岩粒・微砂を含む橙色弱砂質土 内面に油煤付着
24	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	常滑片口鉢Ⅱ類	底部片 輪積み成形 胎土は白色粒・砂粒を含む粗い灰色土 内面は使用により磨耗、黒灰色に焼けている
25	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	常滑片口鉢Ⅱ類	底縁部片 輪積み成形 胎土は長石・石英粒を多く含む暗灰色土 器表は赤褐色～灰色
26	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	常滑片口鉢Ⅱ類	口径(34.6)cm 底径16.0cm 器高11.8cm 輪積み成形 胎土は長石・石英粒を多く含む粗い暗灰色土 器表は茶褐色 内底面は使用により磨耗 外面指頭痕、下位削り 窪穴1・土坑3・4から同一固体と思われる破片が出土している
27	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	常滑 甗	口縁部片 口径(41.4)cm 輪積み成形 胎土は白色粒・気孔を少し含む粘性の強い灰色土 器表は灰色 頸部から肩部に多量の降灰 VI面包含層出土の破片と接合
28	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	丸瓦	胎土は雲母片・微石を含む灰褐色緻密土 凸面は火を受けて爆ぜており、凹面は布目痕が残る 全体に破片になった後黒く焼けている
29	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	竜泉窯 青磁 鎚蓮弁文折縁鉢	口縁～体部片 ロクロ成形 素地は黒い微粒子を含む灰白色 釉は青緑色不透明 貫入あり 二次焼成を受け釉表は荒れる 外面は鎚蓮弁文
図11-30	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	金銅製品	厚さ0.03cm 直径1.4cm 丸みを帯びて0.25cmの縁が折れ曲がり、ほぼ中央部に0.19cmの小孔 縁に三角形に尖った爪が一箇所あり
31	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	紹聖元寶	初鑄1094年 北宋 行書
32	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	鉄釘	残存長(7.1)cm 幅0.6cm 厚0.4cm 残存重量2.9g
33	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	鉄釘	残存長(3.9)cm 幅0.55cm 厚0.4cm 残存重量2.2g
34	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	砥石 中砥	残存長(14.1)cm 最大幅5.0cm 最大厚1.8cm 桃灰色凝灰岩 砥面4面 天草産
35	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	骨製品 筭	長8.5cm 幅0.9cm 厚0.3cm
36	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	木製品 糸梓 横木	長11.6cm 幅1.1cm 厚0.9cm
37	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	連歯下駄	残存長(18.3)cm 残存幅(7.6)cm 残存厚(3.6)cm 柁目材
38	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	木製品 雲形 肘木	全長9.5cm 幅3.6cm 厚1.0cm 上面・側面の取り付け部分以外は黒漆塗り
39	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	箸状木製品	長18.7cm 幅0.6cm 厚0.45cm 両口
40	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	箸状木製品	長18.6cm 幅0.5cm 厚0.5cm 両口
41	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	箸状木製品	長22.3cm 幅0.75cm 厚0.6cm 両口

表4 出土遺物観察表(4)

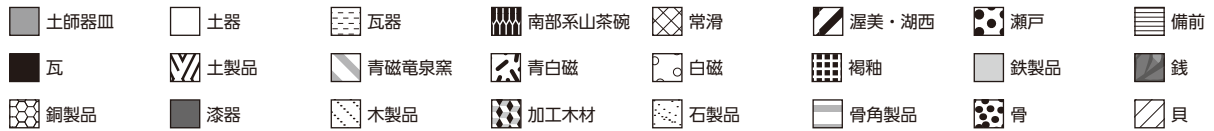
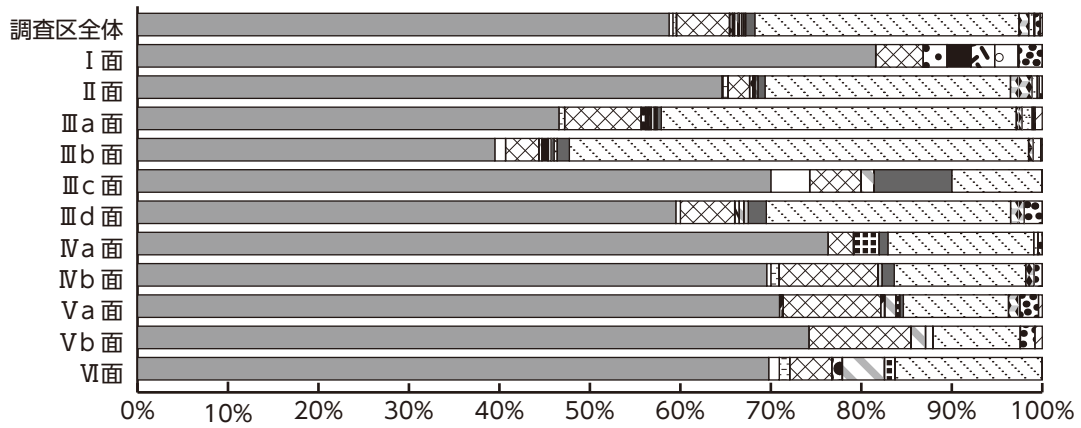
挿図番号	層位	出土遺構	種別	観察
42	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	箸状木製品	長21.7cm 幅0.8cm 厚0.5cm 両口
43	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	串状木製品	長28.7cm 幅0.9cm 厚0.5cm 両口
44	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	用途不明木製品	残存長(8.9)cm 幅1.4cm 厚0.3cm 小孔貫通 扇骨の一部か
45	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	用途不明木製品	長14.7cm 幅0.75cm 厚0.4cm 一端は尖り、他端は丸みを帯びる 串状
46	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	用途不明木製品	長17.5cm 幅1.3cm 厚0.7cm 角棒状、切れ込み二箇所あり
47	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	用途不明木製品	長21.9cm 幅1.4cm 厚0.6cm 断面レンズ型の篋状、両端は丸みを帯びた整形
48	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	用途不明木製品	長14.1cm 幅1.9cm 厚1.4cm 棒状
49	Ⅲ a 面	Ⅲ a 面包含層	用途不明木製品	長13.3cm 幅1.6cm 厚1.0cm 断面薄錐型の棒状、両端は丸い
50	Ⅲ a 面	溝4	土師器皿 R種 小型	口径(7.4)cm 底径(5.0)cm 器高1.9cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部強い板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・礫含む橙色砂質土
51	Ⅲ a 面	溝4	常滑 甃	口縁部片 輪積み成形 胎土は白色粒を少量含む粘性の強い明灰色土 器表は明茶色
52	Ⅲ a 面	溝4	備前 すり鉢	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色 砂粒・石英・長石粒・礫・黒色粒を含む 器表は灰褐色で内外とも煤付着 条線は5本 内面下位は使用のため磨耗
53	Ⅲ a 面	溝4	箸状木製品	長18.8cm 幅0.6cm 厚0.3cm 両口
54	Ⅲ a 面	P.10	土師器皿 R種 小型	口径7.5cm 底径5.3cm 器高18cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・白色粒・雲母片・砂粒・大きい泥岩粒含む淡橙色砂質粗土
図12-1	Ⅲ b 面	Ⅲ b 面包含層	土師器皿 R種 小型	口径7.8cm 底径4.5cm 器高18cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・雲母片・砂粒・礫含む黄灰色砂質土
2	Ⅲ b 面	Ⅲ b 面包含層	土師器皿 R種 小型	口径7.8cm 底径4.3cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・大きい泥岩粒含む黄灰色砂質 口縁部に帯状に油煤付着
3	Ⅲ b 面	Ⅲ b 面包含層	土師器皿 R種 中型	口径(10.8)cm 底径(5.2)cm 器高3.2cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・雲母片・微砂粒含む淡橙色弱粉質土
4	Ⅲ b 面	Ⅲ b 面包含層	土師器皿 R種 大型	口径(11.8)cm 底径6.6cm 器高3.1m 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・雲母片・砂粒・泥岩粒を含む淡橙色弱粉質粗土 内底部・外底部に煤付
5	Ⅲ b 面	Ⅲ b 面包含層	瀬戸 入子	口縁部片 ロクロ成形 胎土は灰色 器表は灰色 内面降灰による自然釉
6	Ⅲ b 面	Ⅲ b 面包含層	土師質火鉢	底部片 胎土は白色粒・多量の砂粒・礫を含む赤橙色瓦質土、器表は灰褐色
7	Ⅲ b 面	Ⅲ b 面包含層	銅製品	長7.5cm 径0.2～0.15cm 薄い銅板を丸めて筒状に整形
8	Ⅲ b 面	Ⅲ b 面包含層	銅製品	残存長(3.2)cm 幅0.4cm 厚0.03cm
9	Ⅲ b 面	Ⅲ b 面包含層	景德元寶	初鑄1004年 北宋 楷書
10	Ⅲ b 面	Ⅲ b 面包含層	滑石 印判	長5.2cm 幅4.8cm 厚1.8cm 滑石鍋敷用品 側面に同方向の4箇所の孔貫通 表面に植物文の浮き彫り、裏面に稚拙な線刻あり
11	Ⅲ b 面	Ⅲ b 面包含層	格子部材	残存長(20.1)cm 幅1.2cm 厚1.1cm 棒状 途中から厚さ0.3～0.5cmの二枚の板に別れその先端は円く整えられる
12	Ⅲ b 面	Ⅲ b 面包含層	串状木製品	長17.4cm 幅1.5cm 厚0.85cm 棒状 全体に丸みを帯びる
13	Ⅲ b 面	Ⅲ b 面包含層	串状木製品	長16.6cm 幅1.15cm 厚0.55cm 篋状
14	Ⅲ b 面	Ⅲ b 面包含層	箸状木製品	長17.6cm 幅0.75cm 厚0.45cm 両口
15	Ⅲ b 面	I 区壁穴1	土師器皿 R種 小型	口径7.9cm 底径5.9cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒含む橙色弱粉質土
16	Ⅲ b 面	I 区壁穴1	土師器皿 R種 小型	口径(6.8)cm 底径4.45cm 器高2.3cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は赤色粒子・雲母片・微砂粒含む淡橙色弱粉質土
17	Ⅲ b 面	I 区壁穴1	土師器皿 R種 小型	口径7.8cm 底径5.7cm 器高1.75cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・雲母片・砂粒含む淡橙色弱粉質土 外底面から2孔貫通、それを結ぶ幅0.2～0.3cm、深さ0.2cmの溝を刻む 全体に薄く煤付着
18	Ⅲ b 面	I 区壁穴1	土師器皿 R種 大型	口径(11.2)cm 底径(7.2)cm 器高3.5cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に強い板状圧痕 胎土は赤色粒子・雲母片・砂粒・泥岩粒含む淡橙色弱粉質土 口縁部に油煤付着
19	Ⅲ b 面	I 区壁穴1	瀬戸 卸し皿	口縁部～体部片 ロクロ成型 胎土は黄灰色 灰釉、二次焼成を受け口縁部の内側に剥離
20	Ⅲ b 面	I 区壁穴1	平瓦	厚さ(2.7)cm 胎土は長石粒・石英粒・多量の砂を含む灰色土 凹面は糸きり痕、凸面は不明 八事裏山窯 永福寺女瓦F類と同類
図13-1	Ⅲ b 面	土坑10	土師器皿 R種 小型	口径(7.8)cm 底径(5.5)cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 胎土は淡褐色赤色粒子・海綿骨芯・雲母片・泥岩粒を含む弱砂質土
2	Ⅲ b 面	土坑10	土師器皿 R種 大型	口径12.7cm 底径6.8cm 器高3.7cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒含む橙色弱粉質土
3	Ⅲ b 面	土坑10	土師器皿 R種 大型	口径(11.3)cm 底径(7.0)cm 器高3.7cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に板状圧痕 胎土は赤色粒子・砂粒・泥岩粒含む淡橙色弱粉質土 口縁部と内底面に油煤少量付着
4	Ⅲ b 面	土坑10	漆器皿	口径(8.8)cm 高台径(7.7)cm 器高1.05cm 無高台 外底面を除き黒色漆が塗られる 施文無し
5	Ⅲ b 面	土坑10	木製 櫛	残存長(3.4)cm 残存幅(8.2)cm 最大厚0.7cm 施漆なし
6	Ⅲ b 面	土坑5	土師器皿 R種 小型	口径7.7cm 底径5.2cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・砂粒・泥岩粒・雲母片含む灰黄色弱砂質土
7	Ⅲ b 面	土坑5	土師器皿 R種 小型	口径7.7cm 底径5.4cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・礫・雲母片含む灰黄色弱砂質土
8	Ⅲ b 面	土坑5	土師器皿 R種 小型	口径7.5cm 底径5.5cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒・礫含む淡橙色弱粉質粗土
9	Ⅲ b 面	土坑5	土師器皿 R種 小型	口径7.2cm 底径4.5cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒・雲母片含む黄灰色弱砂質粗土
10	Ⅲ b 面	土坑5	土師器皿 R種 小型	口径7.2cm 底径4.8cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に板状圧痕 胎土は白色粒子・赤色粒子・砂粒・泥岩粒含む黄灰色砂質土
11	Ⅲ b 面	土坑5	土師器皿 R種 小型	口径7.2cm 底径5.1cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は赤色粒子・砂粒・泥岩粒・雲母片含む灰黄色砂質土
12	Ⅲ b 面	土坑5	土師器皿 R種 小型	口径7.3cm 底径5.0cm 器高1.7cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒含む橙色弱粉質土
13	Ⅲ b 面	土坑5	鉄釘	長4.0cm 幅0.3cm 厚0.5cm 重量1.8g
14	Ⅲ b 面	土坑5	元豐通寶	初鑄1078年 北宋 篆書
15	Ⅲ b 面	土坑5	箸状木製品	長16.8cm 幅0.6cm 厚0.55cm 両口
16	Ⅲ b 面	土坑5	箸状木製品	長17.8cm 幅0.55cm 厚0.3cm 両口
17	Ⅲ b 面	土坑5	箸状木製品	長17.5cm 幅0.7cm 厚0.55cm 両口

表5 出土遺物観察表(5)

挿図番号	層位	出土遺構	種別	観察
18	Ⅲ b面	土坑5	箸状木製品	長18.0cm 幅0.9cm 厚0.85cm 両口
19	Ⅲ b面	土坑5	箸状木製品	長19.2cm 幅0.7cm 厚0.35cm 両口
20	Ⅲ b面	土坑5	箸状木製品	長18.8cm 幅0.4cm 厚0.4cm 両口
21	Ⅲ b面	土坑5	箸状木製品	長21.5cm 幅0.75cm 厚0.45cm 両口
22	Ⅲ b面	土坑5	漆器椀	口径(9.2)cm 高台径(7.0)cm 器高1.3cm 平高台 外側は外底面も含め黒色漆塗、中央付近に歪な輪型の線刻あり 内面は鈍い朱色の漆を粗く塗ってある 施文無し
図14-1	Ⅲ c面	P.18	土師器皿 R種 小型	口径7.4cm 底径5.2cm 器高1.8cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒含む淡橙色砂質土
2	Ⅲ c面	P.18	土師器皿 R種 小型	口径7.3cm 底径5.0cm 器高1.5cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒含む灰黄色弱粉質土
3	Ⅲ c面	P.18	土師器皿 R種 大型	口径(11.8)cm 底径8.2cm 器高3.3cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒含む淡橙色弱粉質土
4	Ⅲ c面	P.18	土師器皿 R種 大型	口径(12.6)cm 底径8.0cm 器高3.5cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・微砂粒・泥岩粒含む橙色弱粉質土
5	Ⅲ c面	P.18	漆器皿	口径8.8cm 底径6.8cm 器高1.2cm 無高台 内・外面とも黒色漆塗、内側に朱漆の手描き文で波・松・笹・草を組み合わせた情景文 外側は縁付近二箇所草上状の文様
6	Ⅲ c面	P.18	漆器椀	高台径(7.1)cm 輪高台 全体に黒色漆塗、内底面に朱漆の手描きで楓文
7	Ⅲ c面	P.18	漆皮膜	腐食が激しく皮膜部が残る 椀の外側部分と思われる 黒漆に朱漆の手描きで、亀甲の中に花菱文と波文を配す
8	Ⅲ c面	P.18	漆皮膜	腐食が激しく皮膜部が残る 椀の外側部分と思われる 黒漆に朱漆の手描きで、亀甲の中に花菱文と波文を配す
9	Ⅲ c面	P.18	漆皮膜	椀か皿の内側、見込みの中央部分と思われる 朱漆塗りに黒漆の手描きで亀甲の中に花菱文と波文を配す 図14-7・8と配色が逆の同タイプの意匠
10	Ⅲ c面	P.18	漆皮膜	椀か皿の外底面と思われる 黒漆に朱漆の手描きで「九」の文字
図15-1	Ⅲ d面	Ⅲ d面包含層	土師器皿 R種 小型	口径7.5cm 底径4.8cm 器高1.9cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は赤色粒子・砂粒・泥岩粒・雲母片含む淡橙色弱砂質土 薄く煤附着
2	Ⅲ d面	Ⅲ d面包含層	土師器皿 R種 小型	口径7.7cm 底径5.2cm 器高1.9cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・砂粒・泥岩粒・雲母片含む黄色灰色弱砂質土
3	Ⅲ d面	Ⅲ d面包含層	土師器皿 R種 大型	口径(12.8)cm 底径(8.8)cm 器高4.0cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒・雲母片含む橙色弱砂質土 内・外側とも少し煤附着
4	Ⅲ d面	Ⅲ d面包含層	土師器皿 R種 大型	口径(12.5)cm 底径(7.6)cm 器高3.0cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒・雲母片含む黄色灰色弱砂質土
5	Ⅲ d面	Ⅲ d面包含層	土錘	残存長(4.1)cm 最大幅1.4cm 孔径0.6cm 胎土は灰橙色 表面は磨耗
6	Ⅲ d面	Ⅲ d面包含層	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積み成形 胎土は長石の微～小石を多く含む粗い暗灰～暗橙色土 器表は暗茶色 小片のため使用痕は不明
7	Ⅲ d面	Ⅲ d面包含層	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積み成形 胎土は長石粒・黒色粒子を含む灰色土 器表は茶色 小片のため使用痕は不明
8	Ⅲ d面	Ⅲ d面包含層	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は長石・石英粒・気孔・砂粒を含む粘性の強い灰色土 器表は暗灰褐色 縁帯～頸部にかけて多量の降灰
9	Ⅲ d面	Ⅲ d面包含層	釘	残存長(7.1)cm 幅0.6cm 厚0.4cm 重量2.8g
10	Ⅲ d面	Ⅲ d面包含層	漆器皿	口径8.8cm 底径7.0cm 器高1.3cm 無高台 内・外面とも黒色漆塗、朱漆の手描き文で草文(菊葉か)
11	Ⅲ d面	Ⅲ d面包含層	漆器皿	口径(7.9)cm 底径(5.3)cm 器高0.95cm 無高台 内・外面とも黒色漆塗、内底面に朱漆で植物文(松)らしき押印
図16-1	Ⅲ d面	柱穴列1 P, 2	土師器皿 R種 小型	口径7.2cm 底径5.2cm 器高1.4cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・砂粒・赤色粒子・泥岩粒・雲母片含む黄色灰色砂質土
図17-1	Ⅳ a面	Ⅳ a面包含層	土師器皿 R種 小型	口径(7.7)cm 底径(5.4)cm 器高1.6cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・微砂粒・赤色粒子含む橙色弱粉質土
2	Ⅳ a面	Ⅳ a面包含層	土師器皿 R種 小型	口径(7.75)cm 底径(5.45)cm 器高1.8cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・砂粒・赤色粒子・礫含む淡褐色弱砂質土
3	Ⅳ a面	Ⅳ a面包含層	土師器皿 R種 大型	口径12.2cm 底径7.65cm 器高3.1cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・砂粒・赤色粒子・泥岩粒・雲母片含む橙色弱粉質土
4	Ⅳ a面	Ⅳ a面包含層	土師器皿 R種 大型	口径(12.15)cm 底径(8.7)cm 器高3.2cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・砂粒・赤色粒子・泥岩粒含む淡褐色弱粉質土 内底部に油煤少し附着
5	Ⅳ a面	Ⅳ a面包含層	土師器皿 R種 大型	口径(12.7)cm 底径(7.5)cm 器高3.1cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に板状圧痕 胎土は砂粒・赤色粒子・雲母片・白色粒子含む淡褐色弱砂質土
6	Ⅳ a面	Ⅳ a面包含層	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部片 高台径(12.0)cm 輪積み成形 胎土は長石・石英粒・黒色粒子・砂粒を含む灰色土 体部下位は使用により磨耗、煤附着 高台の畳み付き部分に切れ込みが入る
7	Ⅳ a面	Ⅳ a面包含層	漆器皿	底径6.2cm 輪高台 内・外面とも黒色漆塗、内側に朱漆の手描き文で笹を組み合わせた情景文
8	Ⅳ a面	Ⅳ a面包含層	木製品 雲形 肘木	残存長(6.2)cm 残存幅(1.9)cm 厚0.8cm 上面・側面の取り付け部分以外は黒漆塗り
9	Ⅳ b面	Ⅳ b面包含層	土師器皿 R種 小型	口径7.75cm 底径5.85cm 器高1.45cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に板状圧痕 胎土は海綿骨芯・砂粒・赤色粒子・泥岩粒・雲母片含む淡褐色弱砂質土 口縁部に油煤少量附着
10	Ⅳ b面	Ⅳ b面包含層	土師器皿 R種 小型	口径7.55cm 底径5.35cm 器高1.7cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・砂粒・大きめの礫粒・雲母片含む黄灰色弱砂質土 口縁部に油煤附着
11	Ⅳ b面	Ⅳ b面包含層	土師器皿 R種 小型	口径7.15cm 底径5.1cm 器高1.6cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は微砂粒・雲母片含む淡黄褐色弱砂質土 口縁部に油煤附着
12	Ⅳ b面	Ⅳ b面包含層	土師器皿 R種 中型	口径0.55cm 底径6.45cm 器高3.05cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子少量含む橙色粉質土
13	Ⅳ b面	Ⅳ b面包含層	土師器皿 R種 大型	口径12.1cm 底径7.8cm 器高3.45cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・砂粒・赤色粒子・雲母片含む淡茶褐色弱砂質土 内・外側に煤附着
14	Ⅳ b面	Ⅳ b面包含層	土師器皿 R種 大型	口径(12.7)cm 底径(8.2)cm 器高3.1cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・微砂粒・赤色粒子・泥岩粒含む橙色弱粉質土
15	Ⅳ b面	Ⅳ b面包含層	土師器皿 R種 大型	口径(11.8)cm 底径(7.45)cm 器高3.2cm 右回転口クロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に板状圧痕 胎土は海綿骨芯・砂粒・赤色粒子・大きめの礫含む淡褐色弱砂質土 内底部に煤附着
16	Ⅳ b面	Ⅳ b面包含層	瀬戸内型 瓦器	口径(12.8)cm 底径(6.8)cm 器高2.85cm 右回転ナデ成形 底部回転ヘラ削り 内底部ナデ 胎土は微砂粒・白色粒子・雲母片含む灰黒色、硬く焼きしめる 口縁部付近は炭素吸着がされており灰白色を呈す
17	Ⅳ b面	Ⅳ b面包含層	土師質 火鉢	口縁部片 輪積み成形 胎土は白色粒・砂粒・気孔・礫を含む暗灰色土 器表は橙色

表6 出土遺物観察表(6)

挿図番号	層位	出土遺構	種別	観察
18	IV b面	IV b面包含層	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積み成形 胎土は石英粒・黒色粒を含む灰色土
19	IV b面	IV b面包含層	常滑片口鉢Ⅰ類	底部片 高台径(12.1)cm 輪積み成形 胎土は石英粒・砂粒・黒色粒・気孔を含む灰色土 内底面は使用により磨耗
20	IV b面	IV b面包含層	鉄釘	残存長(5.5)cm 幅0.6cm 厚0.3cm 重量3.4g
21	IV b面	IV b面包含層	漆器皿	底径(6.6)cm 輪高台 内・外面とも黒色漆塗、内底面に朱漆の手描き文で草(葦か?)
22	IV b面	IV b面包含層	連歯下駄	歯部分 残存高(5.2)cm 残存幅(8.2)cm 最大厚1.9cm
23	IV b面	IV b面包含層	用途不明木製品	残存長(9.7)cm 幅1.2cm 厚0.4cm 形は竹とんぼに似る
24	IV b面	IV b面包含層	へら状木製品	残存長(15.2)cm 幅2.3cm 厚0.45cm 先端は円く薄く削る
25	IV b面	IV b面包含層	箸状木製品	長19.2cm 幅0.5cm 厚0.45cm 両口
図18-1	V a面	V a面包含層	土師器皿 R種 小型	口径(6.95)cm 底径4.8cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・砂粒・赤色粒子・泥岩粒含む黄灰色砂質土
2	V a面	V a面包含層	土師器皿 R種 小型	口径6.8cm 底径5.1cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒含む黄灰色弱砂質土
3	V a面	V a面包含層	土師器皿 R種 大型	口径12.9cm 底径7.3cm 器高3.6cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は微砂粒含む橙色粉質精良土 内側の半分は厚く煤附着
4	V a面	V a面包含層	南部系 卸し目入り山茶碗	底部片 高台径(6.6)cm 胎土は海綿骨芯・砂粒を含む灰色土で硬く焼き締まる 外底面糸きり、貼り付け高台で粗殺痕あり 内底面は篋で一本ずつつけた不規則な卸し目があり、磨耗はしていない
5	V a面	V a面包含層	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は白色微粒子を含む堅緻な暗灰色土 器表は暗灰色 6a型式
6	V a面	V a面包含層	竜泉窯青磁 鍋連弁文碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は明灰色、黒色微粒子を含む 釉は水色半透明で気泡含む 貫入あり 体部内面に擦過傷がわずかに残る
7	V a面	P.31	土師器皿 R種 大型	口径12.6cm 底径9.0cm 器高3.4cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に板状圧痕 胎土は海綿骨芯・微砂粒・赤色粒子・泥岩粒・雲母片含む黄灰色弱粉質土 内・外面とも少量煤附着
8	V b面	V b面包含層	土師器皿 R種 小型	口径7.8cm 底径6.0cm 器高1.8cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に板状圧痕 胎土は海綿骨芯・砂粒・雲母片含む黄灰色弱砂質土
9	V b面	V b面包含層	土師器皿 R種 小型	口径7.7cm 底径5.85cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底面糸切り 外底部板状圧痕 内底部ナデ 胎土は砂粒・海綿骨芯・赤色粒子・雲母片を含む赤橙色弱砂質粗土
10	V b面	V b面包含層	土師器皿 R種 大型	口径(12.25)cm 底径8.0cm 器高3.1cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・砂粒・泥岩粒・雲母片・泥岩粒含む灰黄色弱砂質土
11	V b面	V b面包含層	土師器皿 T種 大型	口縁部片 胎土は白色粒子・微砂含む淡橙色弱粉質土 内側に漆状の黒色物質附着
12	V b面	V b面包含層	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積み成形 胎土は石英粒、砂粒を含む粗い橙褐色土 器表は茶褐色 口唇部と内側に降灰 小片のため使用痕は不明
13	V b面	V b面包含層	白磁 口はげ皿	口縁部片 ロクロ成型 口縁部面取り、釉ぬぐう 素地は微砂粒を含む灰白色 釉は不透明な灰緑色 貫入あり
14	V b面	V b面包含層	箸状木製品	長15.2cm 幅0.5cm 厚0.55cm 両口
図19-1	V a面	段1	連歯下駄	残存長(18.6)cm 幅9.6cm 残存厚(3.8)cm 前の歯の一部が炭化
2	V a面	土坑6	土師器皿 R種 小型	口径(8.2)cm 底径(6.2)cm 器高1.65cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に板状圧痕 胎土は海綿骨芯・砂粒・赤色粒子・雲母片含む橙色砂質土
3	V a面	土坑6	土師器皿 R種 大型	口径(13.0)cm 底径(8.6)cm 器高3.2cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に板状圧痕 胎土は微砂粒・赤色粒子含む橙色弱粉質土 内面に少量煤附着
4	V a面	土坑6	渥美 壺	底部片 輪積み成形 胎土は長石微粒をわずかに含む灰色緻密土 内底面と外側下位に降灰による自然釉
5	V a面	土坑6	竜泉窯青磁鉢	高台径(5.3)cm ロクロ成形 素地は黒色微粒子を含む灰白色 釉は青緑色半透明 畳付きのみ露胎 内底面は使用による擦過傷残る
6	V a面	土坑6	筒形木製品	残存長(12.9)cm 外径幅1.2~1.3cm 内径1.6cm 上端から中位にかけて径0.3cmほどの差込み孔あり
7	V a面	土坑6	部材	残存長(18.1)cm 幅2.2cm 厚1.0cm 不規則な横位の傷あり
8	V a面	土坑6	用途不明木製品	全長20.8cm 最大径1.8cm 断面円形の棒状で中央がやや太い 両端は丸味を帯び、一端の端から0.8cmのt部分にくびれあり
図20-1	VI面	VI面包含層	土師器皿 R種 小型	口径(7.1)cm 底径(5.4)cm 器高1.9cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に板状圧痕 胎土は白色粒子・砂粒・赤色粒子・雲母片含む黄灰色弱砂質土 内側に薄く煤附着
2	VI面	VI面包含層	土師器皿 R種 小型	口径(7.8)cm 底径(6.2)cm 器高1.6cm 右回転ロクロ 底部糸切り 内底部ナデ 外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・砂粒・赤色粒子・雲母片含む黄灰色砂質土
3	VI面	VI面包含層	土師質 火鉢	口径(31.0)cm 底径(22.5)cm 器高9.7cm 輪積み成型 胎土は白色粒子・海綿骨芯・砂粒・礫・気孔を含む灰色砂質土 器表は灰色~灰桃色 外側口縁直下に不貫通の小孔
4	VI面	VI面包含層	瓦器 火鉢	口縁から底部片 輪積み成型 胎土は砂粒・礫・雲母片を含む灰色瓦質土 器表は暗灰色 内側横位ナデ 外側指頭痕 口縁部下に孔貫通
5	VI面	VI面包含層	褐釉 壺	底径(11.0)cm 輪積み成形 胎土は黒色粒子・白色粒子・茶色粒子を含む灰色緻密土 明茶褐色の褐釉薬が内・外側とも薄くかかる 舶載品
6	VI面	VI面包含層	竜泉窯青磁 鍋連弁文碗	口径(15.8)cm 高台径3.6cm 器高6.7cm ロクロ成形 素地は堅緻な灰色土 釉は灰緑色半透明、気泡含む 貫入あり 畳み付きのみ露胎 内底面は擦過傷が残る
7	VI面	VI面包含層	竜泉窯青磁 無文鉢	高台径(7.0)cm ロクロ成形 素地は堅緻な淡灰色土 釉は灰緑色半透明 畳み付きのみ露胎 内底面は擦過傷が残る
8	VI面	VI面包含層	竜泉窯青磁 蓮弁折縁鉢	口径(12.3)cm ロクロ成形 素地は明灰色粘質で緻密 釉は青緑色半透明 貫乳あり 体部内側に蓮弁文陰刻



	I 面		II 面		III a 面		III b 面		III c 面		III d 面	
土師器皿	31	81.58%	569	64.59%	292	46.57%	235	39.50%	49	70.00%	119	59.50%
土器	0	0.00%	1	0.11%	0	0.00%	7	1.18%	3	4.29%	1	0.50%
瓦器	0	0.00%	5	0.57%	4	0.64%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
南部系山茶碗	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
常滑	2	5.26%	21	2.38%	53	8.45%	22	3.70%	4	5.71%	12	6.00%
渥美・湖西	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
瀬戸	1	2.63%	3	0.34%	3	0.48%	2	0.34%	0	0.00%	0	0.00%
備前	0	0.00%	0	0.00%	1	0.16%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
瓦	1	2.63%	0	0.00%	1	0.16%	4	0.67%	0	0.00%	0	0.00%
土製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.50%
青磁竜泉窯	0	0.00%	1	0.11%	1	0.16%	0	0.00%	1	1.43%	1	0.50%
青白磁	1	2.63%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
白磁	1	2.63%	1	0.11%	1	0.16%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
褐釉	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
鉄製品	0	0.00%	0	0.00%	2	0.32%	2	0.34%	0	0.00%	1	0.50%
銭	0	0.00%	3	0.34%	1	0.16%	2	0.34%	0	0.00%	0	0.00%
銅製品	0	0.00%	0	0.00%	1	0.16%	2	0.34%	0	0.00%	0	0.00%
漆器	0	0.00%	7	0.79%	3	0.48%	8	1.34%	6	8.57%	4	2.00%
木製品	0	0.00%	239	27.13%	246	39.23%	302	50.76%	7	10.00%	54	27.00%
加工木材	0	0.00%	21	2.38%	4	0.64%	3	0.50%	0	0.00%	3	1.50%
石製品	0	0.00%	5	0.57%	7	1.12%	5	0.84%	0	0.00%	0	0.00%
骨角製品	0	0.00%	2	0.23%	1	0.16%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
骨	1	2.63%	3	0.34%	1	0.16%	0	0.00%	0	0.00%	4	2.00%
貝	0	0.00%	0	0.00%	5	0.80%	1	0.17%	0	0.00%	0	0.00%
総計	38	100%	881	100%	627	100%	595	100%	70	100%	200	100%

	IV a 面		IV b 面		V a 面		V b 面		VI 面		調査区全体	
土師器皿	161	76.30%	153	69.55%	171	70.95%	92	74.19%	60	69.77%	1964	58.75%
土器	0	0.00%	1	0.45%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.16%	14	0.42%
瓦器	0	0.00%	2	0.91%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.16%	13	0.39%
南部系山茶碗	0	0.00%	0	0.00%	1	0.41%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.03%
常滑	6	2.84%	24	10.91%	26	10.79%	14	11.29%	4	4.65%	195	5.83%
渥美・湖西	0	0.00%	0	0.00%	1	0.41%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.03%
瀬戸	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.16%	10	0.30%
備前	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.03%
瓦	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	6	0.18%
土製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.03%
青磁竜泉窯	0	0.00%	0	0.00%	3	1.24%	2	1.61%	4	4.65%	13	0.39%
青白磁	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.03%
白磁	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.81%	0	0.00%	4	0.12%
褐釉	6	2.84%	0	0.00%	1	0.41%	0	0.00%	1	1.16%	8	0.24%
鉄製品	0	0.00%	1	0.45%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	6	0.18%
銭	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	6	0.18%
銅製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.09%
漆器	2	0.95%	3	1.36%	1	0.41%	0	0.00%	0	0.00%	34	1.02%
木製品	34	16.11%	32	14.55%	28	11.62%	12	9.68%	14	16.28%	976	29.20%
加工木材	0	0.00%	2	0.91%	3	1.24%	0	0.00%	0	0.00%	36	1.08%
石製品	1	0.47%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	19	0.57%
骨角製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.09%
骨	1	0.47%	2	0.91%	5	2.07%	2	1.61%	0	0.00%	20	0.60%
貝	0	0.00%	0	0.00%	1	0.41%	1	0.81%	0	0.00%	8	0.24%
総計	211	100%	220	100%	241	100%	124	100%	86	100%	3343	100%

第四章 まとめと考察

1. 遺構の変遷と年代

本調査の遺構群は、I面からVI面まで大きく6期に区分される。しかし、これらのうちいくつかにおいてはさらに細分することが可能で、総面数は11枚におよぶ。これは整理段階で切合い関係等によって新旧を区分した結果ではなく、実際に現地で調査した面の数である。ここではそのすべてをそれぞれに独立した時期として提示し、変化を追う(図22・23)。また、北側隣地の二階堂字会下351番3で近年行われた発掘調査の成果も併せて位置を突き合わせ(伊丹まどか2010「覚園寺旧境内遺跡(No.435)二階堂字会下351番3外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』26)、考察材料に供したい(図24)。

第1期—VI面

西側1区¹の山裾近くの岩盤上に、やや不安定な並びながら、掘立柱建物とおぼしい柱穴がある(建物2・3)。東側は調査範囲が限られているせいもあり、建物は検出されなかった。西側の岩盤面は削平により形成され、東側低位部分を削平した土砂で埋めた可能性がある。面の年代は13世紀中葉～第3四半期で、それ以前の遺物は含まれていない。この谷の開発は、鎌倉時代前期の建保六年(1218)、北条義時が堂(大倉薬師堂)を営んだことに始まると考えてよいとすれば、あるいは安全性への配慮から掘削の及ばなかった東側の深いところに、開発当初の面が埋もれている可能性もある。

すなわち、当初の生活面はより谷中央部の川に近い低位面にあったのが、鎌倉時代中期の13世紀中葉頃山裾を削って平場を拡張しVI面を作り出した、という可能性を視野に入れておきたい。

第2期—Vb面

この段階では東側に段が形成され(「段2」)、西の若干の高位面には囲炉裏の痕跡とも見える杭群が現れる。町人の住居^{まちびと}の可能性があろう。面の年代は、13世紀半ば以前に属する手づくね成形の土師器を含むものの、前代VI期との相対的な関係から、この面の年代も同じく13世紀中葉～後半とみて大過あるまい。このころから薬師堂ヶ谷の中に町場的な状況が形成され始めたというべきだろう。

第3期—Va面

西側には山裾からいくらか谷中央部に寄ったところに段が現れる(「段1」)。段の高位面には泥岩が敷かれて平坦に整地され、前代に西向きの段のあった東側には柱穴様の円形小穴(P.27～31)や木製品を多く含む穴(「土坑6」)が出現し、段の高位面にも大きめの穴(「土坑9」)が掘られる。土師器皿や中国産食器などの生活遺物も増加し、この頃から谷内部の人的営為は一層活発になったと想像できる。

年代はこれも13世紀中葉～第3四半期頃とみる。

第4期—IVb面

東側の低位域が埋められて全体に平坦な面となる。このとき、おそらく谷の中心を流れる川まで平坦部が確保されたと推測できる。この面は層位や海拔などから北側隣地の調査成果(伊丹2010—図1地点1)と連結することが可能で、それを図24に示した。地点1側では北から南に流れる浅い溝が検出されているが、本地点には続かず、延長線上にはそれに代わり板や角材などがほぼ並行して残っている。これが溝の痕跡である可能性もあるが、断面からは観察できなかった。したがって両調査地点間の未掘部分中で消滅した可能性もある。

地点1では西側に多数の小孔、東側に土坑等が見られ、人の営為が濃厚に観察される。本地点でも3基

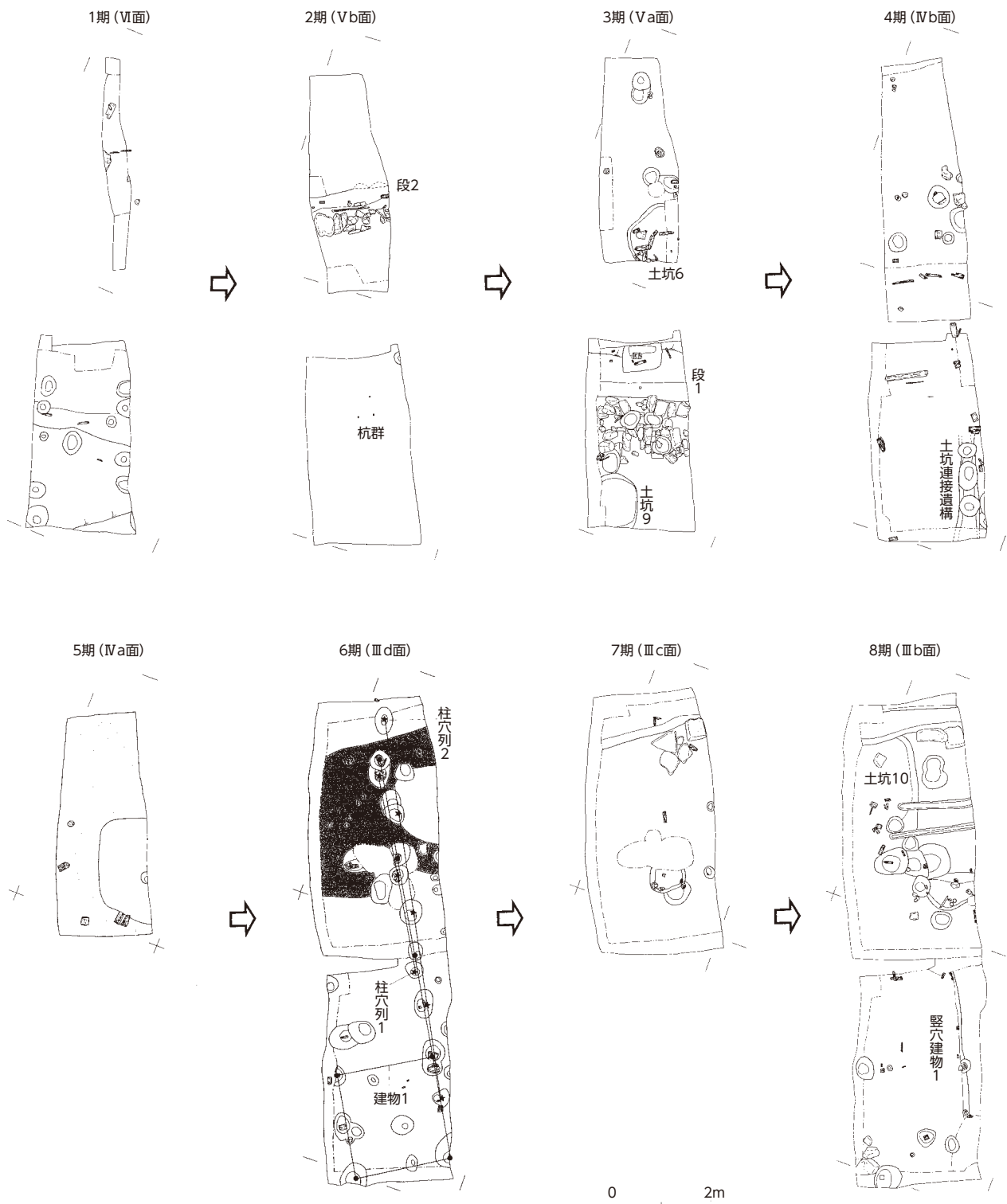


図22 遺構変遷図(1)

の土坑を1本の溝中に短い間隔で配置した遺構(「土坑连接遺構」)があるが、これはやはり陶器甕等の大型貯蔵容器を安定的に据えるためのものと考えるのが妥当であろう。現在までこの種の遺構は、寺院址や町屋など場の種類を問わず発見されている。どこで多く発見されるか、といえば、統計資料がなく不明といわねばならない。

年代は依然として13世紀中葉から、同後半をも含む。この時期、人の活動はきわめて活発だったといえてよい。

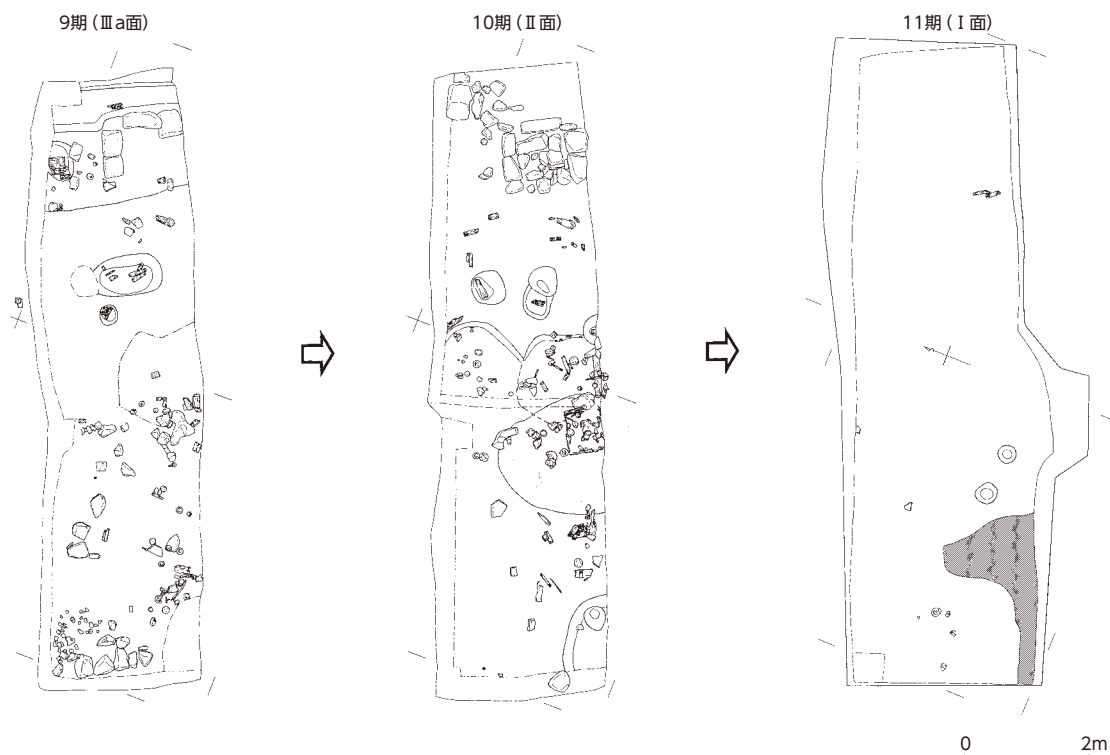


図23 遺構変遷図(2)

第5期—Ⅳa面

東半部だけで検出された面で、表面を炭化物の層が覆う。Ⅳb面と同じとみていいが、上面に遺物の出土が認められるので、いちおう一時期の生活面として提示した。年代は13世紀中葉～同第3四半期。炭化層が火災の痕跡であるのは明らかだが、これが『吾妻鏡』にみえる13世紀中葉の二つの火事、すなわち寛元元年(1243)2月2日の薬師堂火災、あるいは建長三年(1251)10月7日の薬師堂ヶ谷焼亡に相当するのだろうか。とくに後者は二階堂大路南辺まで延焼したとあるので、調査地点が罹災したのは間違いない。第6期のⅢd面を構成する大型泥岩層とあわせ、別項で検討を加えてみたい。

第6期—Ⅲd面

火災の後、谷は厚い泥岩地形層に覆われ、今度は掘立柱建物が建つ空間となる。火災を契機にそれまでとはまったく異なる空間利用が出現したのであり、ここにこの谷における大きな画期を見出せよう。このうち建物1の柱通りの延長線上には、北側隣地の地点1(二階堂字会下351番3外地点、伊丹2010)「第3面」で発見された「遺構30」・「同31」・「同47」が、良好に載ることがわかった(図24)。この3基の遺構はいずれも礎板を持つ直径30～50cmの円形柱穴で、本地点建物1と形状・大きさが共通する。おそらく同一の建物である可能性が高い。そうであればここには少なくとも東西4間×南北4間の建物が建っていたことになる。ただし、東方向への広がりについては、調査区内では見つかっていない溝がすぐ先にあることが確実なので、考えにくい。道路に面して西側山裾に建物が建っていたのだろう。また4×4間以上という大きさからいって、これは例えば若宮大路西側一帯に検出される都市民の平地住居ではなく、武士の住宅、もしくは寺の施設の一部とみたい。谷の入口に近い地点3(二階堂字会下331番3外地点、降矢ほか2005)でも同様の厚い泥岩地形層があり、その上にはいくつかの小孔と溝が検出されている。

要するに、まずⅣa面の時代に谷の中が広範囲に焼ける火事があった。火災の後、谷は大型破碎泥岩によって整地され、本地点付近には武士住居、または寺に関連する建物が建ったということになる。本地点

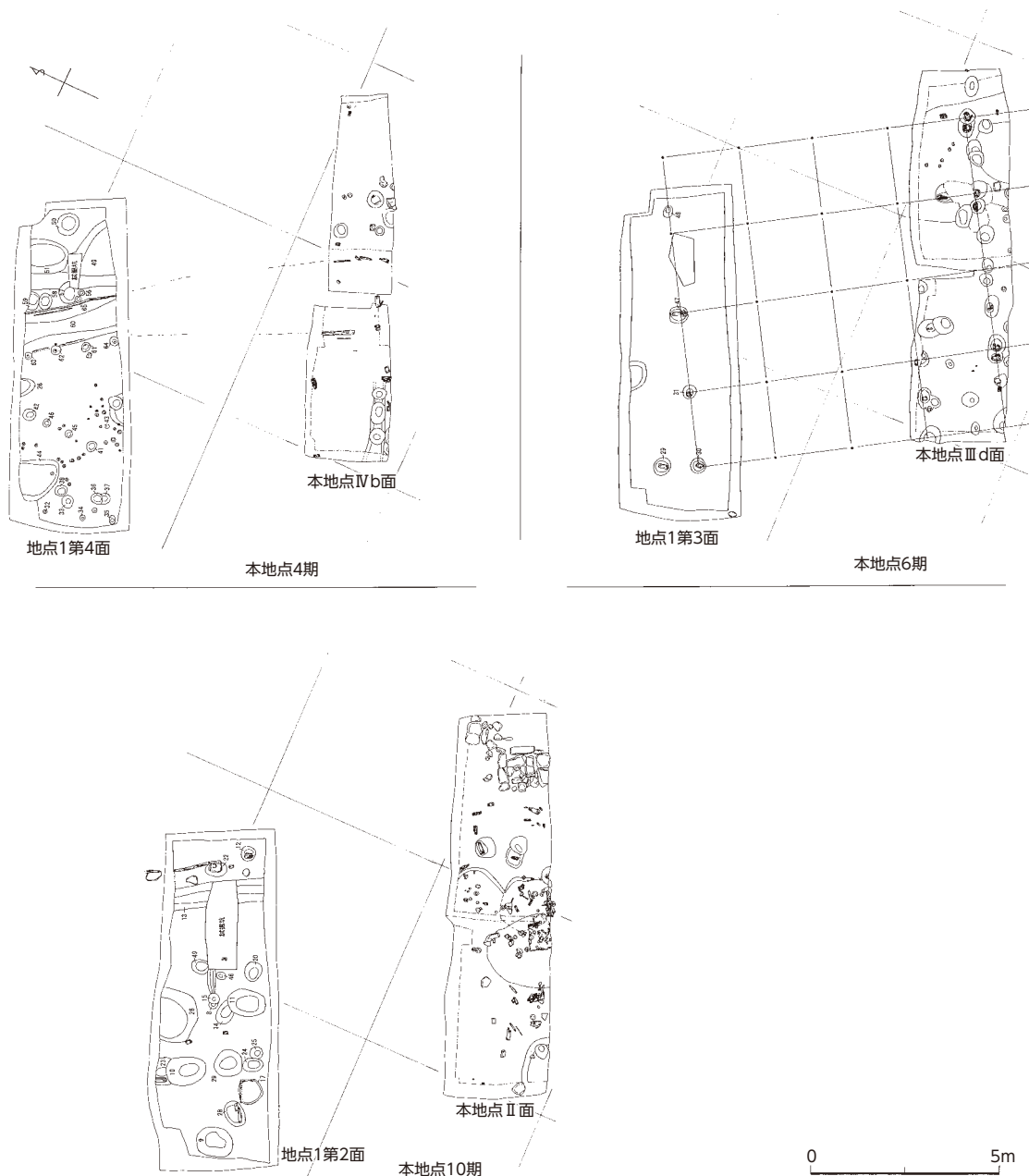


図 24 近隣調査地点対応図

の辺りは、原本が永享十一年（1439）以後成立の「覚園寺境内絵図」に「二条殿跡」とある場所の北隣であり、また「門」の西脇でもある。これらに関連する施設かもしれない。

年代は13世紀中葉の要素を依然として含み、同後半にいたる。

第7期—Ⅲc面

調査区東半部に検出された面。東端に再び明瞭な溝が現れ、前代の掘立柱建物は失われる。しかし浅い穴の中に漆器椀がいくつか見え、人的営為は明瞭なので、武家屋敷的あるいは寺院的空間から別の空間に移行したといえる。性格はわからない。

年代は13世紀後半。

第8期—Ⅲb面

13世紀後半のあるとき建物が失われ、その後、性格不明瞭な前代7期を経て、都市民の居住施設とみられる浅い堅穴形式の建物が出現する。このとき再び場の性格が大きく変わったことがわかる。寺院の門前に町人の住居が並んだのだろうか。

第9期—Ⅲa面

東半部に炭化物の層が広がり、西の山裾には石が並べられておそらく溝が掘られる。面上には遺物が散乱しており、一時期生活面であったのは明らかである。東端の切石を敷いた出っ張り部分が橋の一部だとすれば、場に新たな要素が加わったことになる。13世紀後半～同末期のことである。

第10期—Ⅱ面

面上中央から西半部に囲炉裏や礎板があり、また全体的にも多量の遺物が出土している。おそらくこれも都市住宅の中であろう。すると第6期以降、鎌倉時代も終わりに近い時代になってもこの地には武家屋敷的状况は戻らず、ずっと都市住民の居住域になっていたことになる。覚園寺門前に彼らの蟻集する空間が形成されていたのである。13世紀後半～鎌倉時代末期の14世紀第2四半期を含む。

第11期—Ⅰ面

本遺跡最末期の面である。このあと地形層が重ねられることはなく、13世紀代から15世紀の遺物までがここで混在している。長く生活面の更新がないまま近代を迎え、削平を受けた可能性が高い。その意味は、要するにこの地に地割の改変がなかったということであり、それはすなわち政治上・宗教上の権力の弱体化を示していると考ええる。

2. 火災と泥岩地形層の年代的位置づけについて

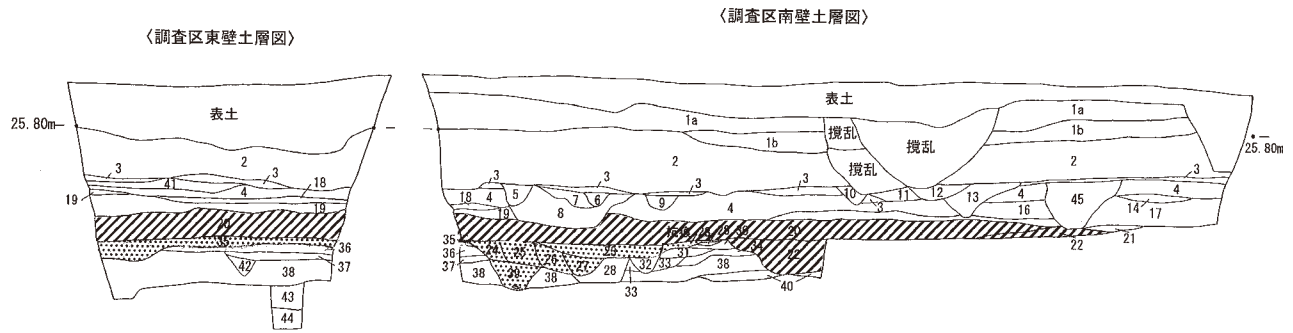
薬師堂ヶ谷の火事と本地点の火災層

図5の調査区南壁土層断面を見ると、Ⅳa面を構成する土（土層番号22・25）の上面には火事とおぼしい炭の層が広がっており、その上は厚さ30～40cmの大型破碎泥岩地形層^{じぎょう}で覆われている。火災後に広範な整地（「地形」）によって生活面が更新されるのは、市内の遺跡でしばしば観察される現象である。火事を機に生活空間を新たにするのだろう。さて、記録に残る薬師堂と薬師堂ヶ谷の火事は3回ある。あらためて次に挙げる。

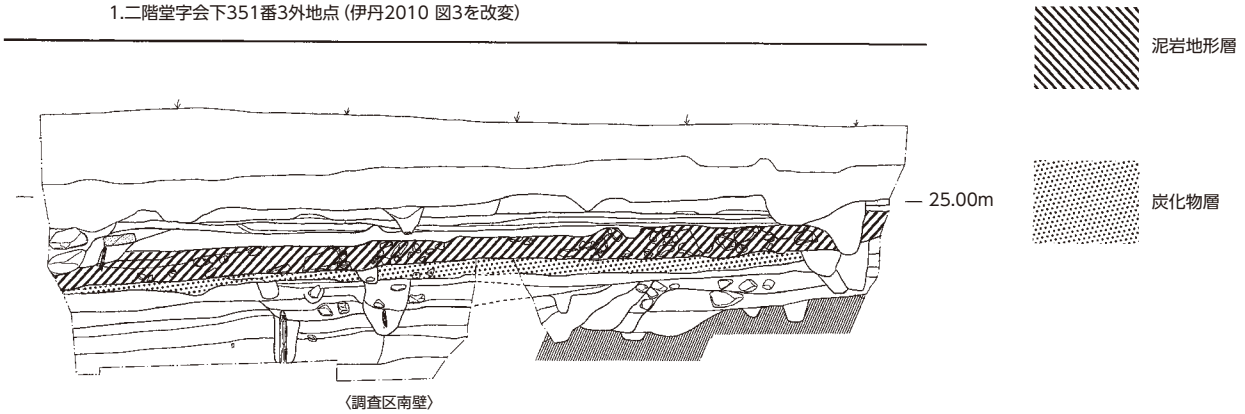
1. 寛元元年（1243）2月2日 大倉薬師堂失火、本尊は取り出した。
2. 建長三年（1251）10月7日 薬師堂ヶ谷焼亡、二階堂大路辺まで焼ける。
3. 建武四年（1337）2月10日 火事で諸堂を失う。

以上のうち1と3では調査地点まで火が及んだかどうかはわからない。しかし2の表現は谷全体が焼失したと取れ、さらに「二階堂大路」は谷を出た先なので、調査地点が罹災したことは間違いない。とすると必ずや痕跡があるはずである。

本地点の火災痕跡は5期(Ⅳa面)に顕著に存在する。このほか6期(Ⅲd面)・9期(Ⅲa面)・11期(Ⅰ面)の各期に痕をとどめる。このうち建長年間に最も近いのは層位的に一番早い5期で、13世紀中葉～後半という遺物年代観を与えることができる。他の火災痕はこれよりもすべて後代であり、遺物年代も13世紀中葉を含まない。したがって、もしこのうちから選ぶとすれば5期しかない。では問題はそれが正しいかどうかである。



1.二階堂字会下351番3外地点 (伊丹2010 図3を改変)



2.本地点

※標高の高いものから並べた
※縮尺不同

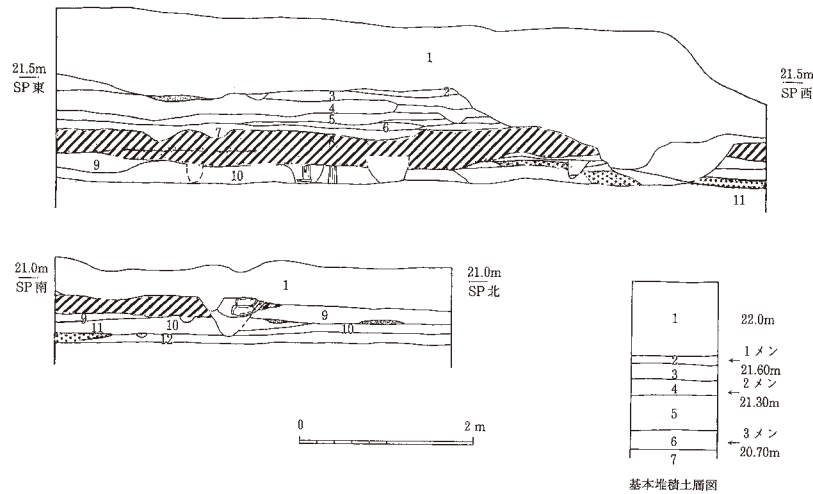


図3

3.二階堂字会下331番3外地点 (降矢ほか2005 図3を改変)

図25 泥岩地形層・炭化物層対比図

火災層上面の大型破碎泥岩層

建長三年の火事は薬師堂ヶ谷全体の焼けた大火であり、そうであれば谷の中の他の場所にも痕跡がなければならぬ。そこでこれまでに調査された2地点、すなわち、図5地点1(二階堂字会下351番3外地点、伊丹2010) および同地点3(二階堂字会下331番3外地点、降矢ほか2005) に火事の痕跡を探してみた。すると、いずれも本地点とほぼ同一と推測される層位に、炭化物層が存在することがわかった。どの地点においても炭化物層はいくつも存在するにもかかわらず、なぜそのうちの一つを特定して本地点のそれと同一

と見なしうるのか。その理由は、いずれの地点においても共通して大型破碎泥岩の厚い地形層があり、その下にこれも共通して確認できる炭の層が存在するからである。

図25は、本地点と他の2地点における炭化物層と泥岩地形層の層位的状況を対比したものである。3地点いずれにおいても、大きくみて表土を除いたほぼ3群目の面として(いずれも細かくはもっと分けられる)厚さ30～40cmの大型破碎泥岩地形層があり、その下に炭化物層があることがわかる。そして注意すべきは、少なくとも本地点一帯の泥岩地形層の上には、それまでのいわば雑然とした状況が失せて、4×4間以上の規模を持つ掘立柱の大ぶりの建物が建つことである。地点3については、泥岩層上の遺構は不明瞭ではあるが、それでもその下の層に見える町屋の建物とは明らかに異なる小穴群が検出されている。以上の考古学的所見は次のように説明できよう。

鎌倉時代のあるとき、町場的情景の広がるこの谷の全体を嘗め尽くす火事があった。罹災後、谷の中は広範に整地され、生活面は一新された。そして本地点一帯には、それまでとはまったく異なって、武士の住居か寺の施設とおぼしい掘立柱建物が建てられた。

火災層の年代

繰り返すが、この火災層とその上の泥岩地形層は谷の中の広い範囲に及んでいる。この層から出土した土師器を見てみると、13世紀第3四半期以降盛んになる薄手で深い器種の前段階をなす、厚手で低い器高のものが主体となっている。これらは、大きく13世紀中葉頃とみて大過ない。

一方、13世紀第2四半期の後半、すなわち寛元～宝治年間頃(1240年代)に終焉を迎える京都系の手づくねのものは、ほとんど含まれていない。この事実は、この炭化層がまさしく13世紀中葉の建長年間(1249～1256)前後のものであることを示している。ところで、薬師堂ヶ谷内での記録に現われた火事は先述の通りであり、なかでも建長三年のそれでは谷全体が焼けている。とすれば、IVa面の火災層かこのときのものである可能性は、きわめて高いと考える。

3. まとめ

前項の年代的定点の比定が私見でよければ、1項に述べた歴史の変遷とあわせ、本地点調査結果を次のように概括できる。

一、鎌倉時代中期の13世紀半ばに近いあるとき、この場所での人的営為が始まる(1期)。調査区内では北条義時による建保六年(1218)の大倉薬師堂創建時の様子うかがえない。ただしこのことは、創定期から谷内に人が住み始めていた可能性を否定するものではない。それがあったとすれば、調査区のさらに東側の低位部分においてであろう(図5土層番号53以下)。

この状況はIV期まで続く。

二、建長三年(1251)、谷全体を焼く火事があった(5期—IVa面)。ほどなく泥岩地形によって谷の生活面は改められ、そこには掘立柱建物が建てられた(6期—Ⅲd面)。火事を契機にこの谷の様子は一変したことになる。「境内絵図」の「二条殿跡」に関連する建物の可能性もあろう。

三、鎌倉時代も後期の13世紀後半、掘立柱建物は消え(7期—Ⅲc面)、鎌倉中心部西側によくみられる町場の住宅が出現する。すなわち軽便な板壁を持つ都市住居が建つ(8期Ⅲb面)。この状況は14世紀半ばまで続き、その後は徐々に頽勢となって15世紀前半頃には遺跡地から賑わいは消える。

なお、北条貞時が薬師堂を覚園寺と改め泉涌寺系北京律寺院としたのは永仁四年(1296)であり、7期から10期にいたるところかでそれは起きたはずだが、検出遺構にそのことの顕著な影響うかがえない。

(馬淵)



1-1 薬師堂ヶ谷入口から谷奥(北)を望む



1-2 調査地点付近の薬師堂ヶ谷(北から、右手の白い家の向こう側)



1-3 調査地点近景(東から)



2-1

1区I面全景(東から)

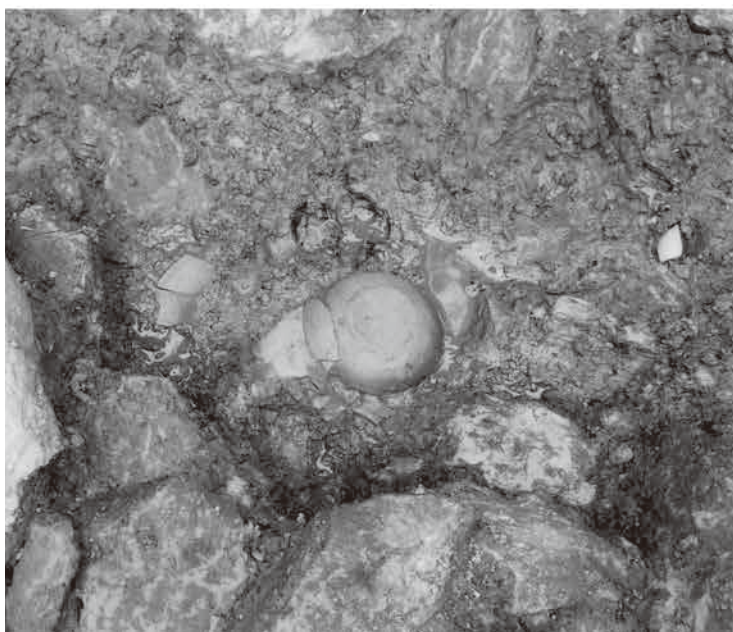
2-2

1区I面全景(西から)



2-3

1区I面土師器皿(図6-1-2)出土状況(東から)





3-1 1区Ⅱ面全景 (東から)



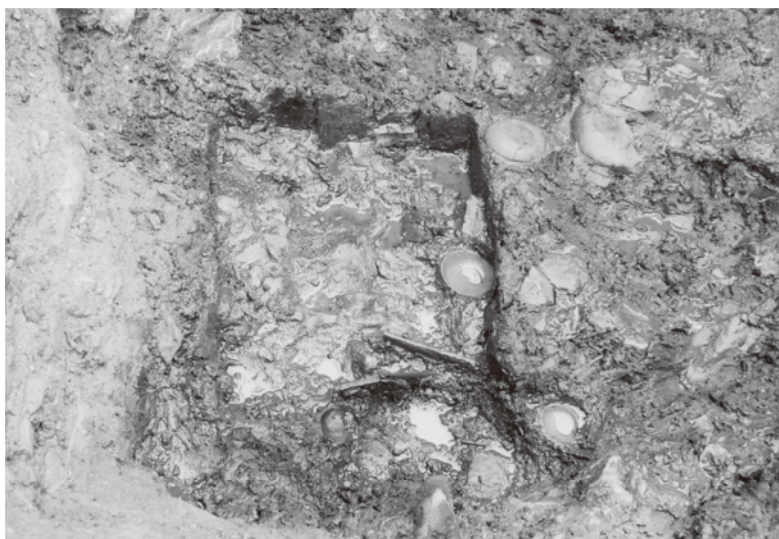
3-2 1区Ⅱ面全景 (西から)



3-3 2区Ⅱ面全景 (東から)



3-3 2区Ⅱ面全景 (西から)



4-1
II面囲炉裏(東から)



4-2
II面土坑2と4
遺物出土状況(南から)

4-3 II面石組遺構(南から)



4-4 II面漆器椀(図8-39)出土状況(南から)



4-5 II面囲炉裏周辺遺物出土状況(東から)



5-1 1区Ⅲa面全景(東から)



5-2 1区Ⅲa面全景(西から)



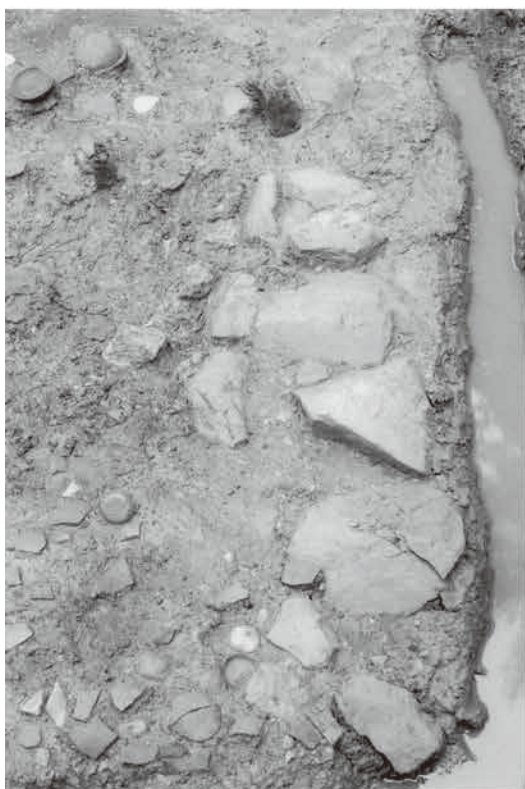
5-3 2区Ⅲa面全景(東から)



5-4 2区Ⅲa面全景(西から)



6-1
Ⅲ a
面1区南壁寄り遺物出土状況(南から、一部Ⅱ面遺物含む)



6-2 Ⅲ a面西端の石列(北から)

6-3 Ⅲ a面溝4と右岸(西岸)の石組(北から)





7-1 1区Ⅲb面全景(東から)



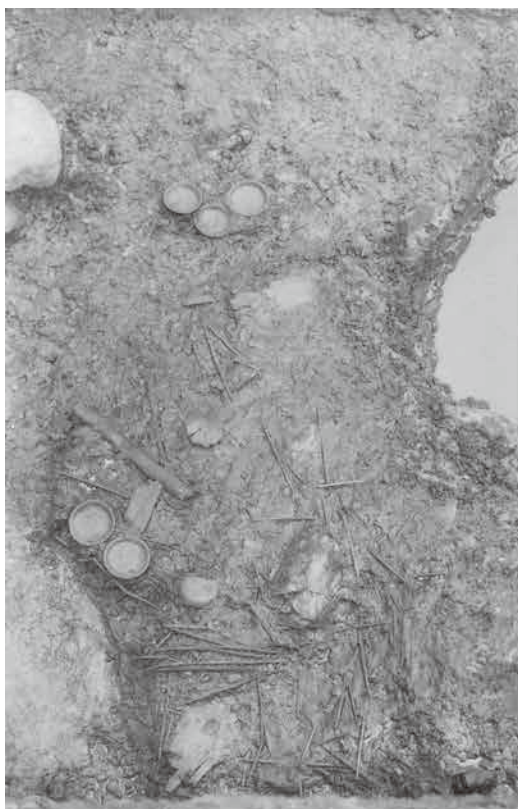
7-2 1区Ⅲb面全景(西から)



7-3 2区Ⅲb面全景(東から)



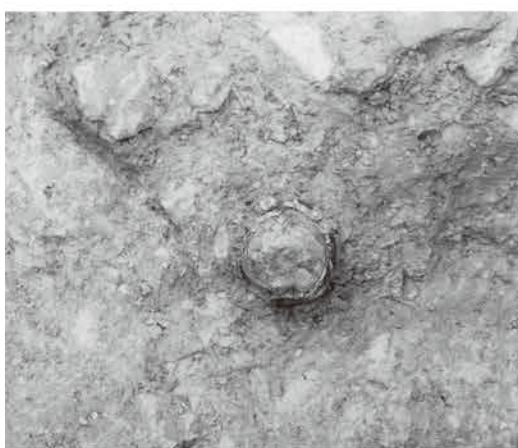
7-4 2区Ⅲb面全景(西から)



8-1
Ⅲ b
面土坑5(南から)



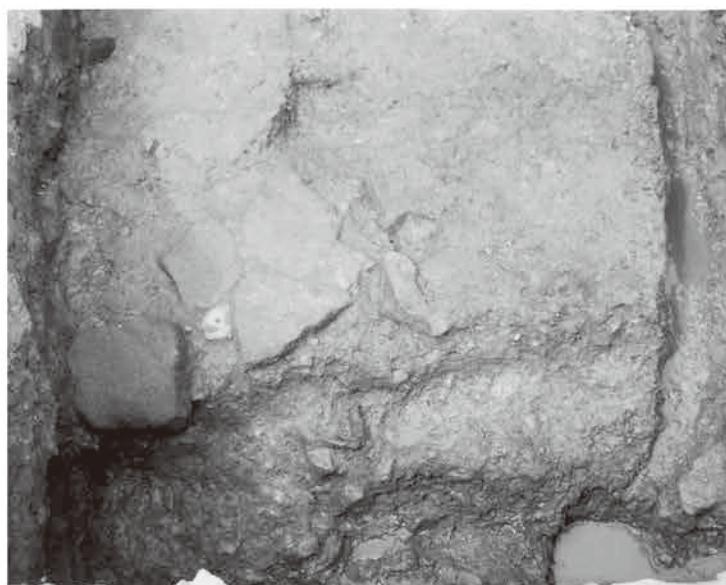
8-2
Ⅲ b
面竪穴建物1(東から)



8-3 Ⅲ b面漆器皿(図13-22)出土状況
(西から)



8-4 Ⅲ c面P.18合わせ口漆器皿(図14-5・7・8)出土状況





9-1 1区Ⅲd面全景(東から)



9-2 1区Ⅲd面全景(西から)



9-3 2区Ⅲd面全景(東から)



9-4 2区Ⅲd面全景(西から)



10-1 2区Ⅲd下部面全景(東から)



10-2 2区Ⅲd下部面全景(西から)



10-3 1区Ⅳa面全景(東から)



10-4 1区Ⅳa面全景(西から)



11-1 1区IVb面全景 (東から)



11-2 1区IVb面全景 (西から)



11-3 IVb面土師器皿 (図17-15・同-16, 奥から)
出土状況 (北から)

11-4 IVb面土師器皿 (図17-10) 出土状況 (西から)





12-1
1区Va面全景(東から)

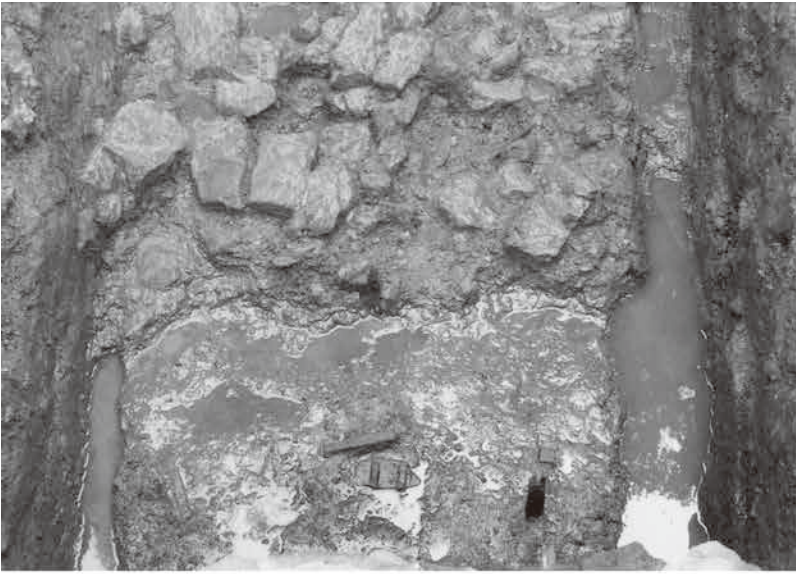


12-2 2区Va面全景(東から)



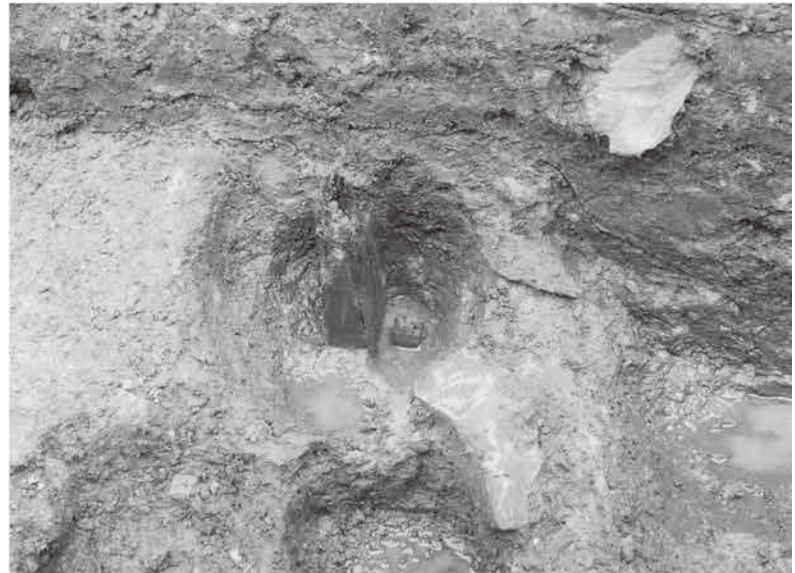
12-3 2区Va面全景(西から)

図版13

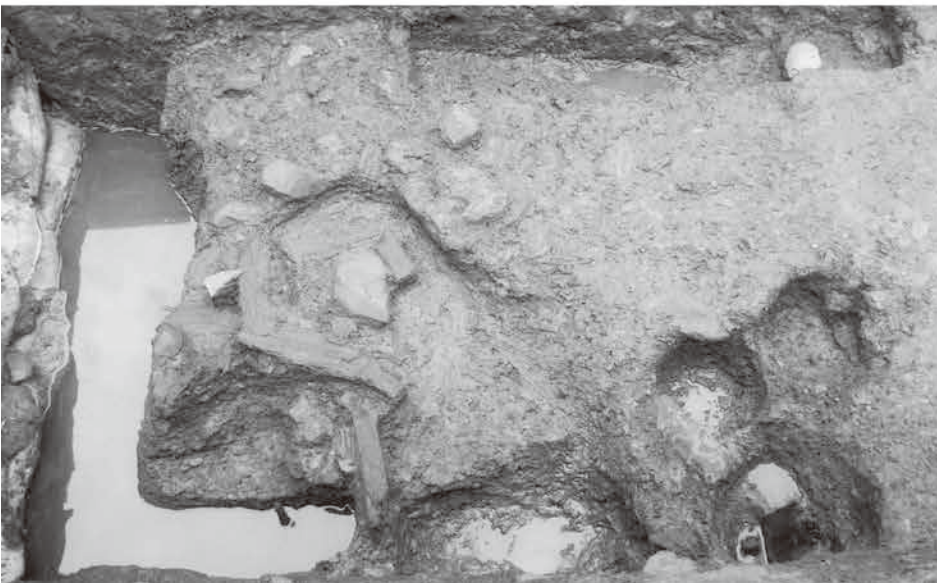


13-1 Va面段1下駄(図19-1)出土状況(東から)

13-2 Va面角柱出土状況(北から)



13-3 Va面P.29・P.30・土坑6検出状況(南から)





14-1 1区Vb面全景 (東から)



14-2 1区Vb面全景 (西から)

14-3 Vb面段2 (南から)





15-1 1区Ⅵ面全景(東から)



15-2 1区Ⅵ面全景(西から)



15-3 2区南壁際深掘り(東から)



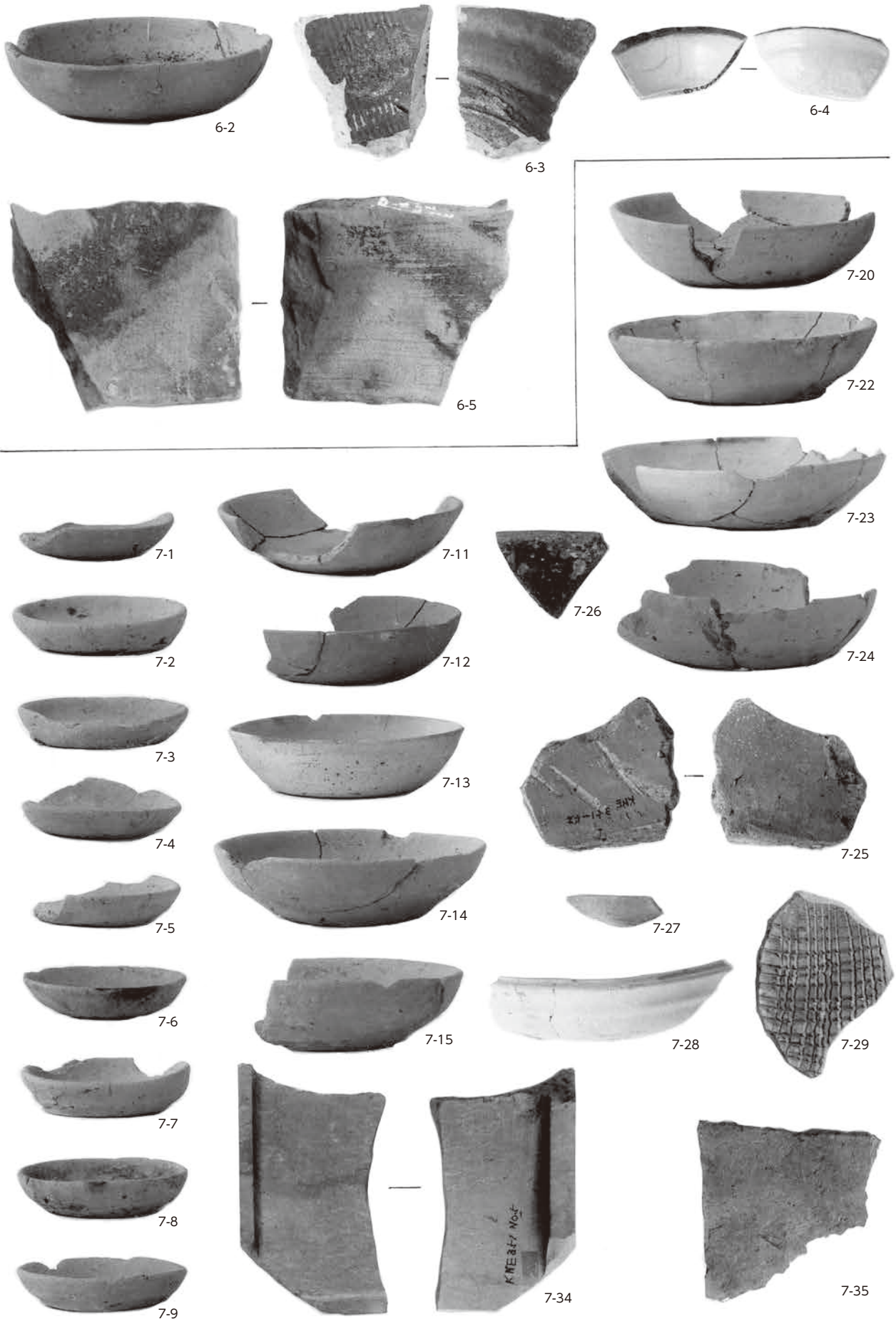
15-4 Ⅵ面青磁碗(図20-6)出土状況(南から)



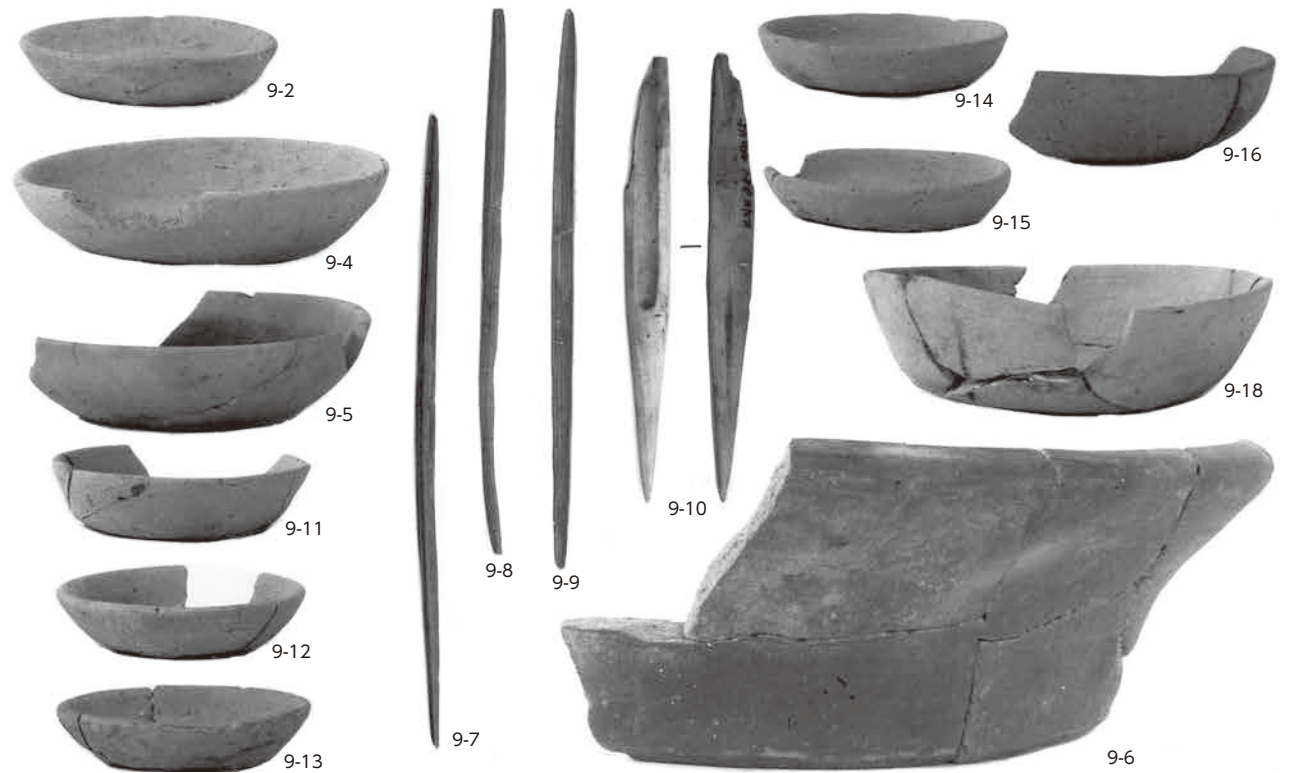
16-1 1区南壁中央部土层断面



16-2 2区南壁土层断面



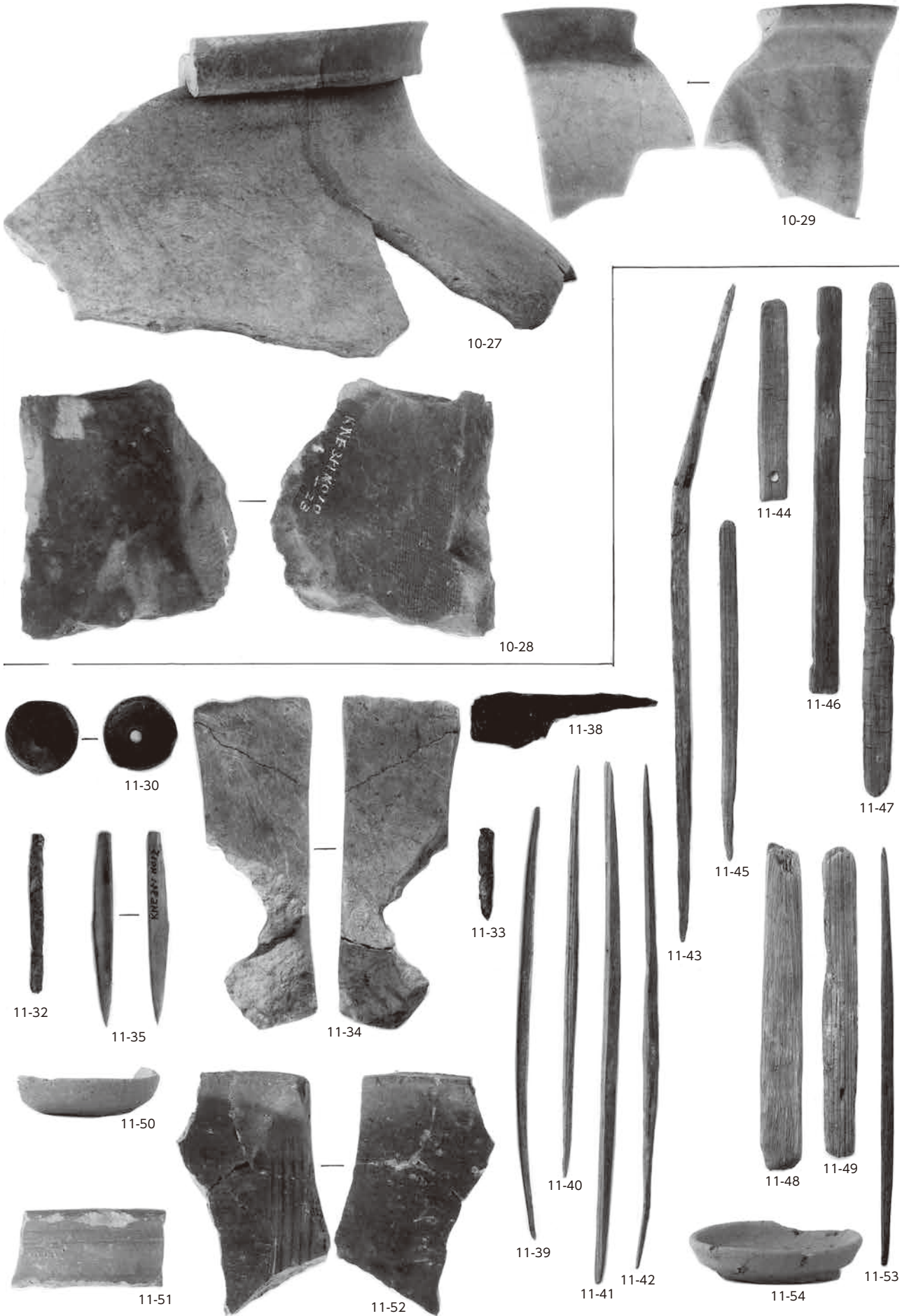
出土遺物 1



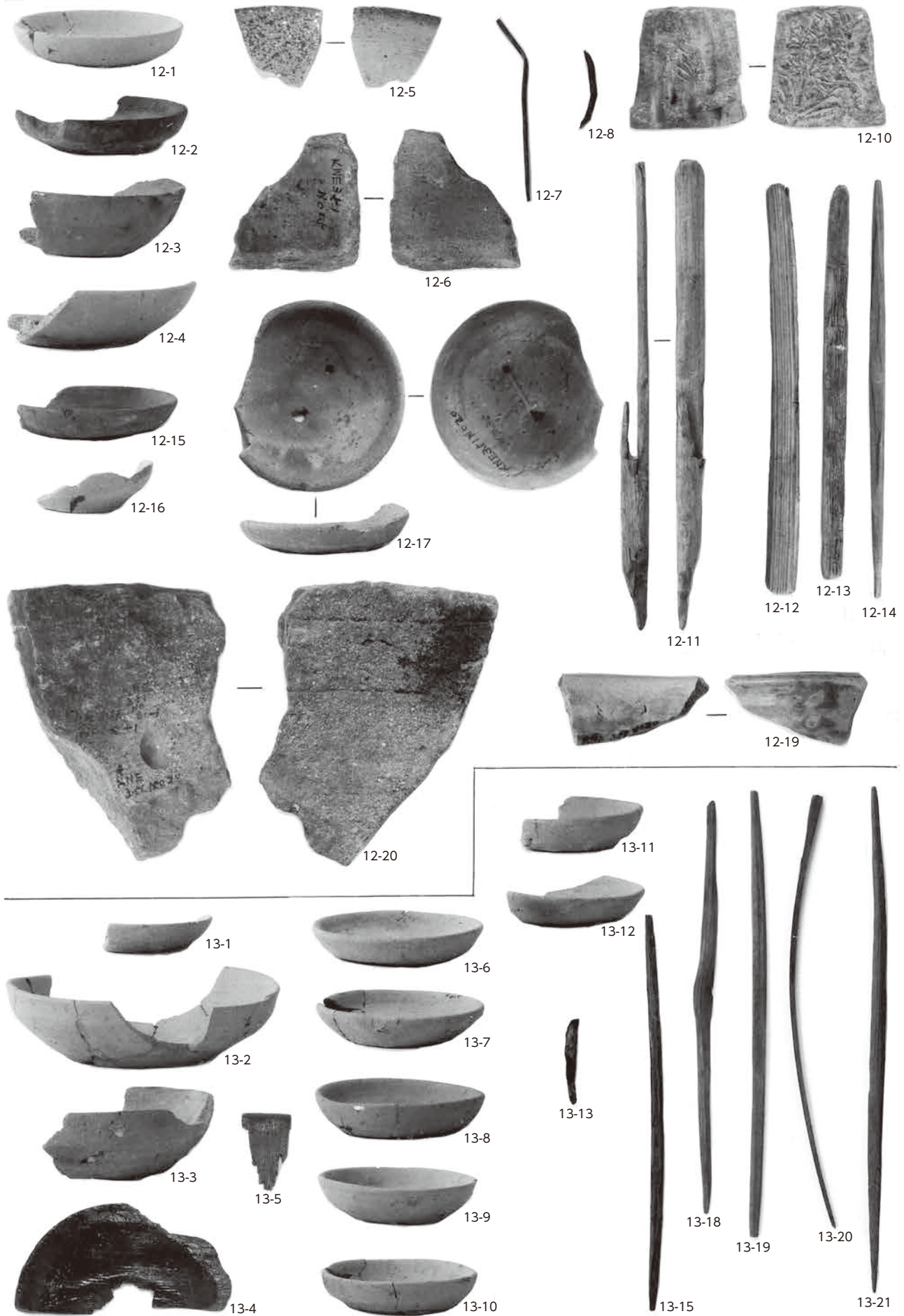
出土遺物 2



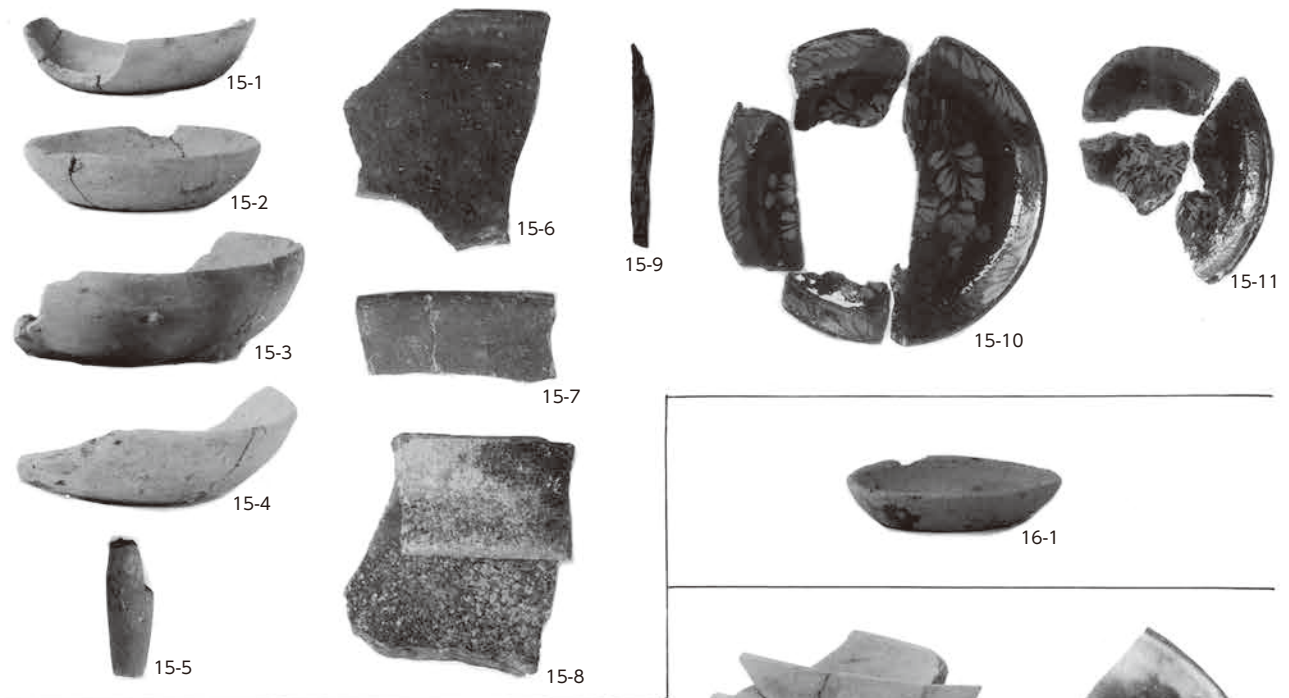
出土遺物 3



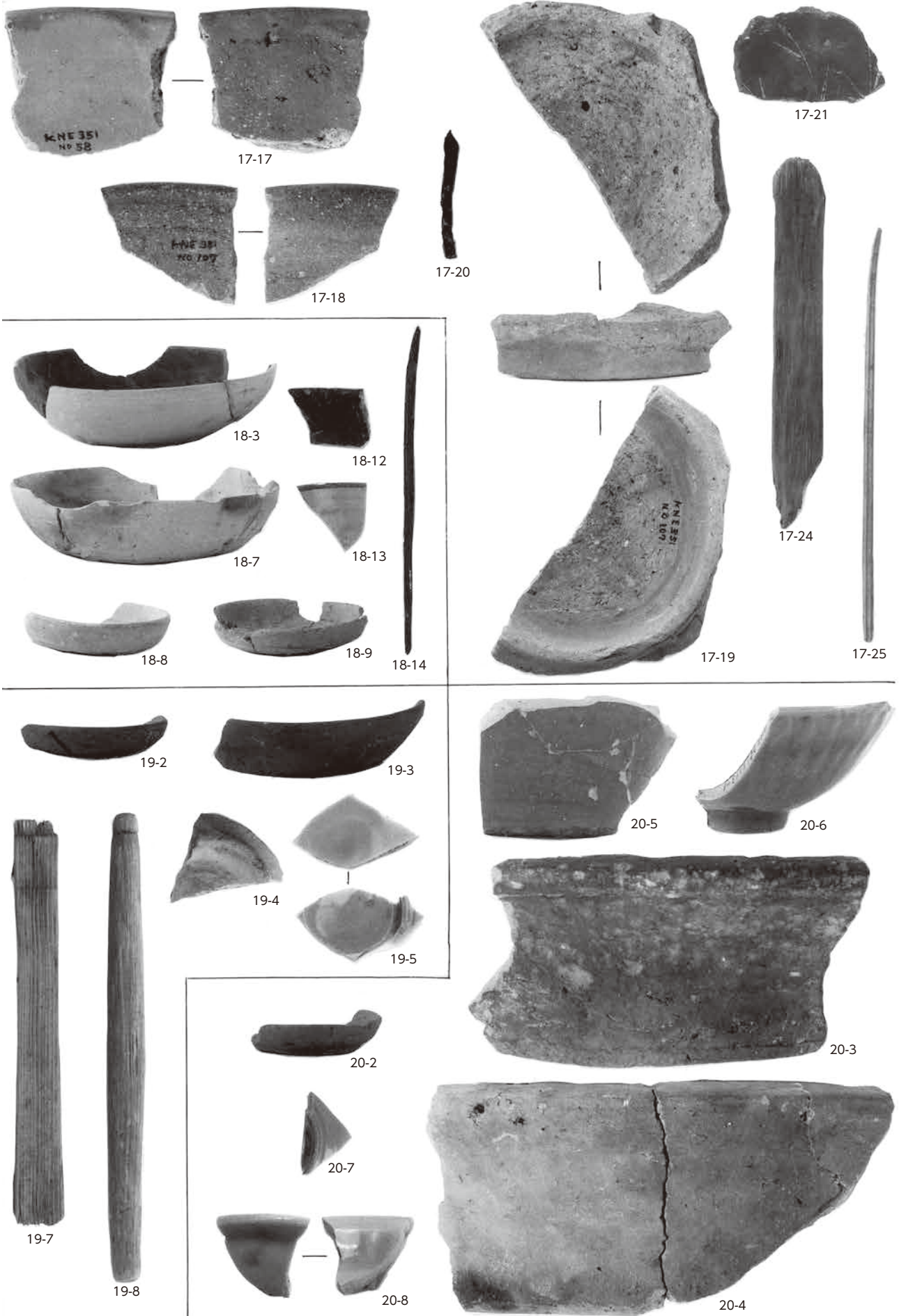
出土遺物4



出土遺物 5



出土遺物6



出土遺物 7

若宮大路周辺遺跡群 (No.242)

小町二丁目 11 番 2

例 言

1. 本報は、鎌倉市小町二丁目11番2における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急調査発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。
調査期間は平成17年7月12日～同年8月31日にかけて実施され、調査対象面積は44㎡である。出土遺物に関しては鎌倉市教育委員会がこれを保管している。
3. 調査団編成は以下のとおりである。
調査の主体 鎌倉市教育委員会
調査担当 森孝子
調査員 渡辺美佐子 下江秀信
調査協力者 倉沢六郎 田島道夫 秋田公佑（以上、社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本書の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。
遺構図 1 / 80・1 / 40（遺構図の水糸高は海拔高を示す。）
遺物実測図 1 / 3・1 / 6・1 / 1・1 / 1(銭)
5. 遺物実測図には次の記号が使用されている。
釉の限界線—・—・— 使用痕の範囲 ←————→
調整の変化点 — — — 加工痕の範囲← — — — →
6. 本書の執筆は第4章の古代以前の出土遺物を赤堀、他は森が行なった。
7. 本書の図版作成及び写真撮影、図版作成は次の者が分担した。
遺構図版 森孝子 吉田桂子
遺物図版 岩崎卓治 松原康子 赤堀祐子 森孝子 根本志保 平山千絵
平井里永子 石元道子
遺構写真 森孝子
遺物写真 赤堀祐子
写真図版 赤堀祐子
8. 現地調査及び資料整理においては、以下の方々からご助言、ご協力を賜った。お名前を記して感謝の意を表したい。(敬称略・順不同)
福田誠 馬淵和雄 原廣志 汐見一夫 松尾宣方 沖元道

目次

本文目次

第一章 調査の経緯	239
第二章 遺跡の位置と歴史的環境	239
第三章 調査経過	247
第1節 調査の経過	
第2節 調査区配置図 グリッド設定図 世界測地系による座標表示	
第3節 基本層序	
第四章 検出遺構と出土遺物	250
第1節 中世第1面	
第2節 中世第2面	
第3節 中世第3面	
第4節 中世第4面	
第五章 まとめ	296

挿 図 目 次

図1 本調査地点と周辺遺跡	240	図16 方形土坑1・土坑3(2)・ 土坑4・10～14出土遺物	262
図2 遺跡位置図	248	図17 2面出土遺物(1)	265
図3 グリッド配置と国土座標	249	図18 2面出土遺物(2)	266
図4 基本層序	249	図19 3面遺構配置図	268
図5 1面遺構配置図	250	図20 溝1・2・溝状遺構2・3	268
図6 溝状遺構1	250	図21 溝1(1)出土遺物	269
図7 土坑1・2・9・方形土坑2・4	251	図22 溝1(2)・溝2出土遺物	270
図8 土坑1・2・方形土坑2出土遺物	253	図23 方形竪穴1	271
図9 表土層・攪乱層・試掘坑出土遺物	254	図24 方形竪穴1出土遺物	273
図10 1面出土遺物	255	図25 掘立柱建物2	273
図11 2面遺構配置図	257	図26 井戸1	274
図12 溝状遺構4	257	図27 井戸1出土遺物	275
図13 掘立柱建物1	258	図28 土坑5・6・15～18・20～23	276
図14 方形土坑1・土坑3・4・10～14	259	図29 土坑5・6・15～17出土遺物	278
図15 方形土坑1・方形土坑1・ 土坑3出土遺物(1)	261	図30 土坑18・21・22出土遺物	280

図31 土坑23出土遺物	281	図37 井戸2出土遺物	290
図32 3面出土遺物(1)	284	図38 方形土坑3・土坑7・24・25	291
図33 3面出土遺物(2)	285	図39 土坑24出土遺物	291
図34 4面遺構配置図	287	図40 4面出土遺物	294
図35 掘立柱建物3～8	288	図41 古代以前の遺物	295
図36 井戸2	290		

図版目次

図版1	314	図版6	319
A. 調査地点(東から)		A. 4面東半(東から)	
B. 1面西半(南から)		B. 4面Pす(東南から)	
C. 1面東半(南から)		C. 4面井戸2(北から)	
D. 2面覆土出土獣骨(北西から)		D. 南壁土層	
図版2	315	図版7	320
A. 2面西半(南から)		出土遺物(1)	
B. 2面東半(南から)		図版8	321
C. 2面土坑3・方形土坑3(南から)		出土遺物(2)	
図版3	316	図版9	322
A. 3面西半(東南から)		出土遺物(3)	
B. 3面西半(北から)		図版10	323
図版4	317	出土遺物(4)	
A. 3面東半(南から)		図版11	324
B. 3面東半(東から)		出土遺物(5)	
C. 3面土23(南から)			
D. 3面Pあ・r(南西から)			
図版5	318		
A. 4面西半(北から)			
B. 4面東半(南から)			

第一章 調査の経緯

本調査地点は鎌倉市小町二丁目11番2に所在する。本地点は神奈川県遺跡台帳NO.242に掲載されている若宮大路周辺遺跡群内に含まれる。当地点における鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人住宅建設工事計画に関する申請がなされた。過去における近辺の発掘事例から、この工事計画が埋蔵文化財に影響を与えると判断した鎌倉市教育委員会は本調査が必要であると決定した。以後、鎌倉市教育委員会と事業者との協議、事業者の文化財保護法第57条の2の届出と続き、施工者と発掘調査主体者との協議をへて本調査を実施するに至った。当地点の発掘調査は平成17年7月11日の表土掘削後、本調査は同年7月12日～8月31日まで実施された。調査面積は44㎡である。

第二章 遺跡の位置と歴史的環境

本調査地点は鎌倉市小町二丁目11番2地点に所在する。JR鎌倉駅東口より北方向125m、現在、小町通りといわれている商店街の一角が調査地点である。本遺跡地は名称の示すとおり若宮大路の周辺遺跡群である。本遺跡地の名称ともなっている若宮大路は鶴岡八幡宮の参道である。鎌倉時代は神聖域とされ、そこに隣接出来たのは鎌倉幕府の中枢部に位置する機関、及び有力者であった。伝承では若宮大路の東側、鶴岡八幡宮に南接して①「北条小町邸」、若宮大路を挟んでその向い西側には②「北条時房・顕時邸」があったとされる。また、鶴岡八幡宮東側に、政所、前述の小町邸南側（小町邸内）に大倉から御所が移り③「宇津宮辻子幕府」のち④「若宮大路幕府」が存在したといわれている。本遺跡地はその①～④地点を除いた東西約550m、南北1000m余りが範囲となっている。本遺跡内では過去に多くの発掘調査が実施され古代から近世期までの様相が解明されつつある。下記に示したのは今回の調査地付近の29地点の調査成果である。2地点、4地点、19地点、22地点、24地点では扇川の旧河道を検出している。河川覆土には近世期の肥前の陶磁器が多く含まれており近世期までには存在した河道であることが確認されている。本遺跡地の遺構群は概ね遺跡地の中央を南北に貫通する若宮大路に軸を合わせて検出される傾向にあるが、11地点は遺跡の北側を流れている扇川に規制された軸線であるとの調査結果が得られている。検出された道路、及び溝等はおおよそ13世紀の中頃の様相であり、整然とした地割の様相が7地点、9地点、25地点、27地点に見られる。また、今回示した29地点は御家人の屋敷地の主体部分ではなく、その一角に供与された被官、下人クラスの居住区であったことが確認されている。

7地点、10地点、16地点、17地点からは古代の遺構が検出されており、出土遺物から遺跡地南西方向400mに発見された郡衙と平行する時期に存在したと判断されている。

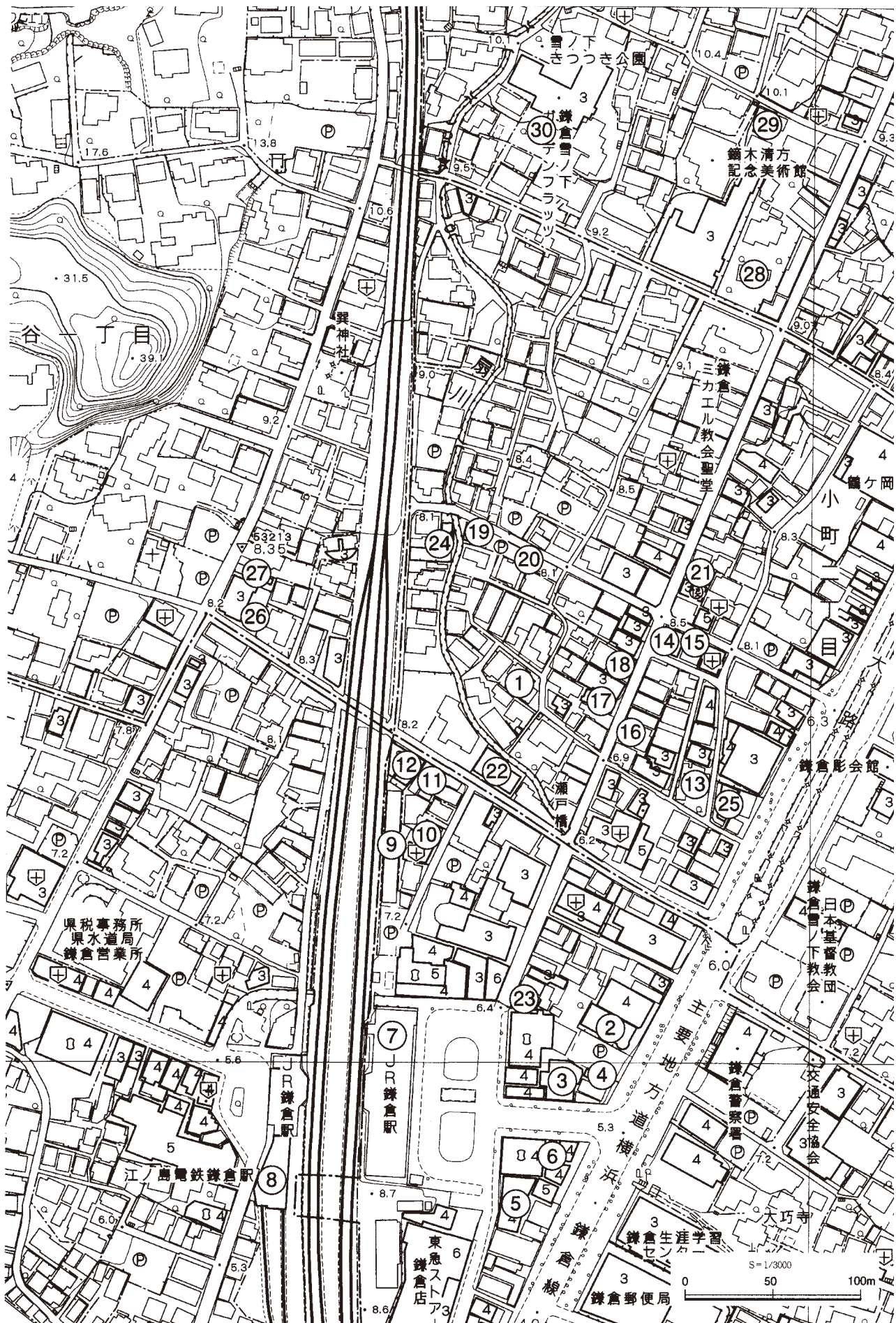


図1 本調査地点と周辺遺跡

NO	調査地点	報告書名	開発原因	調査期間	調査面積	
1	本調査地点	森孝子「若宮大路周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書28』鎌倉市教育委員会平成23年	個人住宅	平成17年7月12日～8月31日	44㎡	
2	小町1丁目67番地2地点	福田誠『若宮大路周辺遺跡群』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団1994年	(仮称)小町ビル	昭和62年3月23～5月2日	約335㎡	5地点の南北方向の旧河道(旧扇川)の南側を確認17世紀前半に存在したことを確認。13世紀前半の遺構群を検出。
3	小町1丁目75番地1号地点	河野真知郎・斎木秀雄「小町1丁目75番地1号地点(カトレアビル用地内)」『鎌倉考古学研究所調査研究報告第1集』鎌倉考古学研究所1982年	カトレアビル建設	昭和54年9月20～22日		井戸1基を検出。14世紀前半期に比定される平均人の屋敷の一角を検出
4	小町丁目75番地21号地点	河野真知郎・斎木秀雄「小町1丁目75番地1号地点(今川酒店用地内)」『鎌倉考古学研究所調査研究報告第1集』鎌倉考古学研究所1983年	今川酒店新店舗	昭和54年4月14日、27日	トレンチ	南北方向の旧河道(旧扇川)の確認
5	小町一丁目81番8地点	木村美代治・森孝子『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』若宮大路周辺遺跡発掘調査団1995年	大和証券鎌倉支店改築	平成3年2月14日～3月12日、7月25日～8月30日	320㎡	褐色砂層の地山で検出された。13世紀中頃～14世紀前葉の遺構群で、若宮大路を軸とした地割であると推定。

6	小町一丁目81番18地点	高野昌巳「若宮大路周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16』鎌倉市教育委員会平成12年	店舗併用住宅	平成10年5月11日～28日	48㎡	13世紀前半～14世紀前葉の様相を地山面で検出。若宮大路に平行する溝を確認
7	小町一丁目103番7	小川裕久他『葺屋敷遺跡』鎌倉駅舎改築にかかわる遺跡調査会1984年	駅舎新築工事	昭和57年8月2日～12月7日	650.5㎡	奈良～平安時代の溝状遺構群、中世期では13世紀前半から15世紀遺構群が検出され、鎌倉時代は御家人クラスの邸宅ではなかったかと推察し、また、建物群と直交関係をもち、若宮大路と平行する13世紀代の溝が検出されており、13世紀代には若宮大路を主軸とする地割が整っていたと推定している。
8	御成町822番2	手塚直樹他「葺屋敷東遺跡」江ノ電鎌倉ビル発掘調査団1983年	鎌倉江ノ電ビル改築工事	昭和56年9月26日～12月28日		溝、建物址、井戸、土坑等13世紀～14世紀前半に渡る3面の遺構群が検出された。
9	小町一丁目106番1他地点(第一次) ・小町11丁目116番4他地点(第2次)	手塚直樹『若宮大路周辺遺跡群』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団1999年	ビル建設 駐輪場	昭和62年2月20日～7月30日 平成元年11月6日～平成2年2月5日	1次900㎡ 2次400㎡	1次調査：中世1面で中世最古の14世紀中頃の石組井戸を検出。2面は大型建物の検出、多量の中国陶磁器、或いは職人の道具が出土しており武家屋敷或いはその屋敷内の手工業者の居住区であった可能性を指摘。13世第2～3四半期。3面は武家屋敷の一角を検出。12世紀第4四半期～13世紀第1四半期。2次調査：鎌倉で発見された最大幅6mの道路が検出された。1次調査、或いは秋月医院の調査成果から、道路の東側は武家屋敷、西側は武家と商人の混在地になるだろうと想定している。遺跡の年代は12世紀第4四半期～15世紀第1四半期。
10	小町一丁目116番地点	馬淵和雄「若宮大路周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書2』鎌倉市教育委員会昭和61年	事務所併用住宅	昭和60年5月13日～7月1日	230㎡	中世：掘立柱建物4棟を含む柱穴250口、溝2条 井戸3基 土坑24基、13世紀～14世紀前半。 古代：住居址4棟を検出。8世紀前半～10世紀中葉。

11	小町1丁目 117-3外筆 地点	宮田真他『若宮 大路周辺遺跡 群』鎌倉遺跡 調査会報告書第 48集 株式会社 鎌倉遺跡調査会 2006年	集合住 宅・診療 所のビル 新築	平成17 年9月 20日～ 11月30 日	140㎡	1面覆土に東西3.4m以上、南北16m以上の大規模なかわらけ溜りが検出された。4時期の13世紀代の中世遺構面が検出され、北側を流れる扇川の影響を受けた軸方向であり、また、それ以降の生活面は近世以降に削平されたと推定。
12	小町一丁目 120番1地点	手塚直樹『小町 一丁目120番 一1地点遺跡一 風門社ビル建設 に伴う発掘調査 報告書』風門社 ビル発掘調査団 1989年	風門社ビ ル建設	1986年 7月24 日～8月 31日	約72㎡	旧扇ガ谷川とその川筋道路と想定される遺構を検出。13世紀初頭～13世紀後半
13	小町二丁目4 番1地点	菊川英政『若 宮大路周辺遺 跡群』株式会 社斉藤建設 2006年	店舗新築 工事	平成17 年11月 28日～ 平成18 年1月 25日	145㎡	13世紀代の3時期の生活面が検出されており、若宮大路に沿った地割をもつ屋敷跡が確認された。遺跡地内は主屋ではなく付属的な建物域であった様相を示している。
14	小町2丁目5 番8地点	福田誠「若宮大 路周辺遺跡群」 『鎌倉市埋蔵 文化財緊急調査 報告書15』 鎌倉市教育委員 会平成11年	店舗併用 住宅	平成9年 4月28 日～7月 15日	149.36 ㎡	12世紀末～13世紀前半（鎌倉時代初期）は水田地帯で、以後、13世紀中頃には方形竪穴建物が廃絶された痕跡を確認し、最初の文化面が発見された。この時期を含めて13世紀中頃～14世紀前葉の4面の生活面が検出される。鎌倉での方形竪穴建物の事例の初見である。3面期以降は若宮大路を機軸とした土地利用の様相を検出。
15	小町2丁目5 番8地点（事業 者負担分）	福田誠『若宮大 路周辺遺跡群発 掘調査報告書』 若宮大路周辺遺 跡発掘調査団 1998年	店舗併用 住宅	平成9年 4月28 日～7月 15日	149.36 ㎡	14地点における中世第4面の検出遺構と出土遺物を掲載。土坑3基、方形竪穴1軒、柱穴列2

16	小町2丁目5番23外地点	福田誠「若宮大路周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6』鎌倉市教育委員会平成2年	店舗併用住宅	平成元年4月21日～6月20日	77㎡	古代のV字型南北溝を検出。中世は4面の生活面が検出され13世紀前半～14世紀に比定。武家屋敷の一角の被官、下人クラスの居住区であろうと推定。
17	小町2丁目12番15地点	菊川英政「若宮大路周辺遺跡群」若宮大路周辺遺跡群発掘調査団1998年平成2年 菊川英政「若宮大路周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8』鎌倉市教育委員会平成4年	店舗併用住宅工事	平成2年11月2日～平成3年3月30日	150㎡	13世紀前葉から14世紀前葉の中世3面の生活面が検出され、武家屋敷の一角を、与えられた被官或いは所従、下人クラスの居住域であると推定。また、9世紀第1四半期の井戸と付随する竪穴遺構を検出。
18	小町2丁目12番18地点	馬淵和雄「若宮大路周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5』鎌倉市教育委員会平成元年	自己用店舗	昭和62年5月22日～7月10日	130㎡	13世紀前葉から14世紀中葉の中世3面の生活面が検出された。小町二丁目12番15地点に南接しており、中世期は同様の様相。古代の遺構の検出はない。
19	小町二丁目28番3・5地点	原廣志「若宮大路周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14』鎌倉市教育委員会平成10年	個人住宅	平成8年2月14日～3月12日、7月25日～8月31日	トレンチ	鎌倉後期～南北朝時代 旧扇川河道検出
20	小町二丁目39番6地点	原廣志「若宮大路周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5』鎌倉市教育委員会平成元年	個人住宅	昭和62年11月16日～昭和63年2月20日	130㎡	13世紀末～14世紀中頃の2面の生活面が検出され、若宮大路を主軸とした遺構の展開を検出。

21	小町二丁目48番10外	原廣志「若宮大路周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書25(第1分冊)』鎌倉市教育委員会平成21年	自己用店舗併用住宅	平成15年8月21日～10月23日	81.66㎡	中世期の13世紀前半～14世紀前半を主体とした4面の生活面を検出。遺跡地が若宮大路に隣接していたこともあり、遺跡の存続中有力者の武家屋敷の一角であり様相は空閑地裏手の状況を検出。
22	小町二丁目63番3地点	斎木秀雄「若宮大路周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9(第3分冊)』鎌倉市教育委員会平成5年	店舗併用住宅	平成4年4月1日～5月23日	60㎡	近世旧扇谷川の河道検出。中世は12世紀末～14世紀前半の遺構群で2期に区分。後期(13世紀第4四半期～14世紀前半)は方形竪穴、前期(12世紀末～13世紀前半)は溝、柱穴等。中世以前は遺物のみ出土。
23	小町2丁目65番地21号地点	河野眞知郎・斎木秀雄「小町2丁目65番地21号地点(松秀ビル用地内)」『鎌倉考古学研究所調査研究報告第1集』鎌倉考古学研究所1982年	松秀ビル建設	昭和54年12月16～18日 昭和55年2月15日～18日 3月10～13日	7箇所のトレンチ調査	13世紀中頃～14世紀代の御家人層の屋敷裏の様相
24	小町二丁目69番6外地点	田代郁夫「若宮大路周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7』鎌倉市教育委員会平成3年	事務所併用住宅	平成元年7月24日～31日	120㎡	扇川旧河道(近世期)
25	小町二丁目283番の1部地点	滝沢晶子「若宮大路周辺遺跡群」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23(第一冊分)』鎌倉市教育委員会平成19年	個人住宅	平成15年4月14日～6月11日	150.16㎡	律令期以降と推定される東西方向の河川を検出。中世期は13世紀前半の若宮大路を軸とした地割、及びそれに伴う遺構群を検出。

26	扇ガ谷一丁目 74番8外地点	菊川英政「若宮 大路周辺遺跡 群」『鎌倉市埋 蔵文化財緊急調 査報告書6』 鎌倉市教育委員 会 平成2年	個人住宅	昭 和63 年11月 4日～ 12月10 日	70㎡	14世紀中頃～15世紀初頭の生活面で、 基壇状遺構とその南側の鎌倉石切石を敷 いた東西通路を検出。基壇は小規模な堂 の基礎と推定、また、通路は今小路へ通 じることを確認。
27	扇ガ谷一丁目 74番9外地点	菊川英政「若宮 大路周辺遺跡 群」『鎌倉市埋 蔵文化財緊急調 査報告書10(2 分冊)』 鎌倉市 教育委員会 平 成3年	個人住宅	平成5年 2月8日 ～3月3 日	100㎡	13世紀末から15世紀初頭にわたる4時 期の遺構群を検出。1面(14世紀後葉か ら15世紀初頭)に検出された東西道路 は今小路西遺跡、千葉地遺跡と同軸、等 間隔であり地割の手がかりとなりそうで あるが、時期差の問題点を残す。また、 74番8外地点の基壇状遺構の残存部分 が検出されている。
28	雪ノ下一丁目 198番6地点	小林重子「若宮 大路周辺遺跡 群」『鎌倉市埋 蔵文化財緊急調 査報告書16(第 1分冊)』 鎌倉 市教育委員会 平成12年	個人住宅	平 成10 年6月8 日～9月 14日	120㎡	13世紀中葉～14世紀中葉に比定される 7面の生活面を検出。東西溝が時代が下 るのに並行し南方向に移動し、地割の変 化の様子を確認。
29	雪ノ下一丁目 200番3ほか 地点	宗臺秀明「若宮 大路周辺遺跡 群」『鎌倉市埋 蔵文化財緊急調 査報告書19』 鎌倉市教育委員 会 平成15年	個人住宅	平 成13 年2月 19日～ 4月27 日	80㎡	13世紀後半から14世紀代の6時期の遺 構群を確認。3面から5面は13世紀後半 ～14世紀前葉に比定され、南北道路と 側溝、またその南北道路に交差する東西 方向の路地と側溝を検出し、路地の側溝 の排水が若宮大路側溝ではなく旧扇ガ谷 川に流下していたことが判明。
30	雪ノ下一丁目 210番地点他	馬淵和雄「若宮 大路周辺遺跡 群」『鎌倉市埋 蔵文化財緊急調 査報告書6』 鎌倉市教育委員 会 平成2	集合住宅 建設に伴 う個人住 宅部分	昭 和63 年10月 1日～平 成元年1 月16日	443㎡	13世紀後半～14世紀前半期に比定され る2時期の遺構群が検出され、武家屋敷 の主屋域～庶民の住宅+作業場に変化し た様相であると推察。

第三章 調査経過

第1節 調査の経過

本調査は平成17年7月11日に表土部分50cmをはぎ取り、翌12日から調査員2名、作業員3名の5人体制で実施された。調査面積は44㎡である。調査は廃土を場内処理することが決められていたため、置き場を確保するため調査区を2分して半分ずつ調査を実施することとし、西側をⅠ区、東側をⅡ区としⅠ区から調査を開始した。中世の遺構面は4面検出され、検出遺構は溝状遺構4、溝2条、井戸2基、土坑25基、方形竪穴建物1、掘立柱建物8軒、柱穴61口で、出土遺物は整理箱13箱である。

以下、作業経過は下記のとおりである。

2005年7月11日 重機による表土掘削。

7月12日 Ⅰ区1面の調査開始。

7月13日 溝状遺構1、土坑1,2掘り上げ。

7月14日 1面全景撮影、及び平面図作成。2面へ掘り下げ開始。

7月15日 2面、井戸1、土坑3、ピット群検出。

7月20日 2面の全景撮影、及び平面図作成。

7月21日 3面への掘り下げ開始。土坑4、5、柱穴群の検出。

7月25日 井戸2(土坑6)、溝1,2検出

7月27日 3面全景撮影、及び平面図作成。

7月28日 4面へ掘り下げ開始。土坑7、ピット群検出。

7月29日 4面全景撮影、平面図作成。

8月1日 南壁、西壁土層測量。Ⅰ区終了。

8月2日 テント移動。鎌倉市3級基準点移動。

8月5日 Ⅰ区埋め戻し。

8月6日 Ⅱ区表土掘削。

8月8日 Ⅱ区1面調査開始。

8月9日 1面土坑8、9、ピット群検出。

8月11日 2面へ掘り下げ開始。

8月15日 土坑10,11、柱穴群検出。

8月16日 土坑12～14検出。

8月17日 2面全景撮影、平面図作成。

8月18日 3面へ掘り下げ開始。調査開始。方形竪穴建物1、土坑15～17検出。

8月22日 土坑18～23、ピット群検出。

8月24日 3面全景撮影、平面図作成。

8月26日 4面へ掘り下げ開始。

8月29日 土坑24,25、ピット群検出。

8月30日 井戸2検出。

8月31日 4面全景撮影、平面図作成。北壁、南壁土層図作成。4級基準点の移動。調査終了。
器材撤収。

第2節 調査区配置図 グリッド設定図 世界測地系による座標表示
(図2・3)

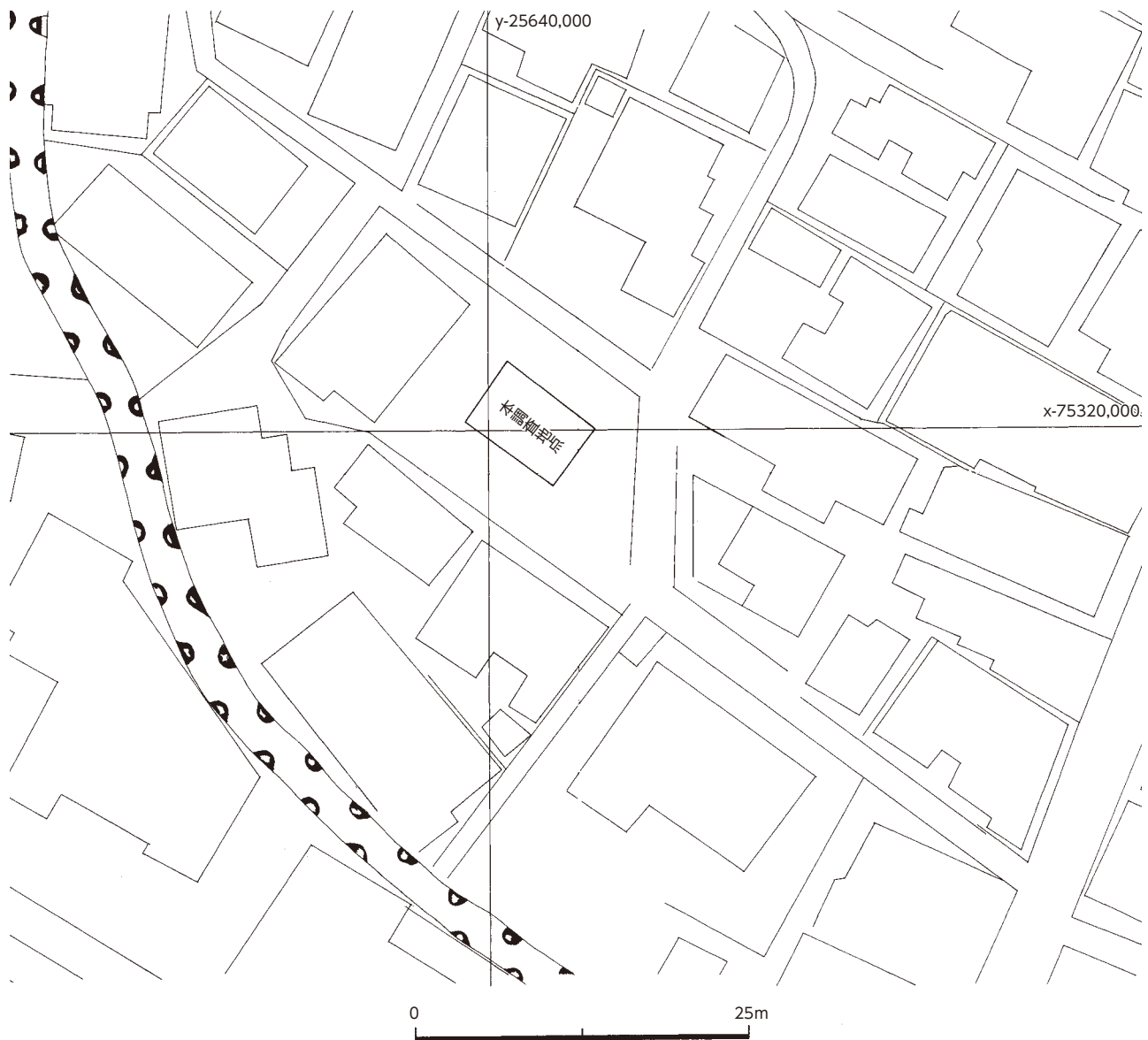


図2 遺跡位置図

測量のためのグリッドは調査区に平行に任意の2点をきめ、それを基準として、東西方向をx軸とし、西から東にx 0、x 1、x 2・・・と増え、南北方向をY軸とし、北から南にy 0、y 1、y 2・・・と増え北西角をおx 0、y 0とし測量の基準点とした。また、x軸は磁北より東に40°東に傾く。

また、旧世界測地系座標X-75680.000、Y-25340.870を用いて国土座標と合成した。

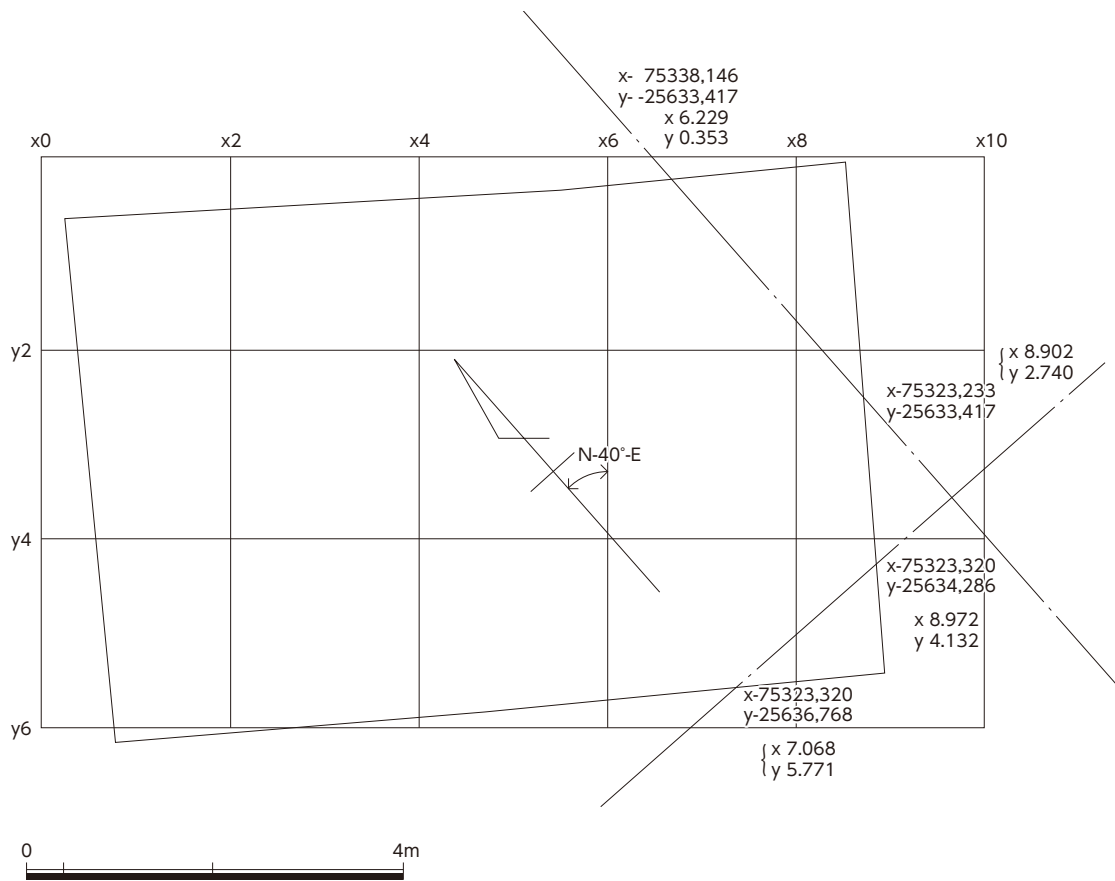


図3 グリッド配置と国土座標

第3節 基本層序 (図4)

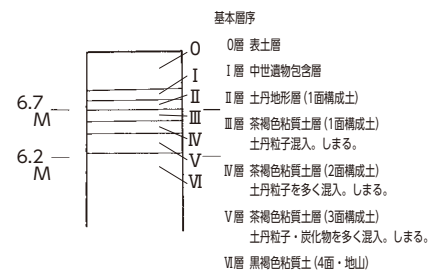


図4 基本層序

第四章 検出遺構と出土遺物

第1節 中世第1面（図5）

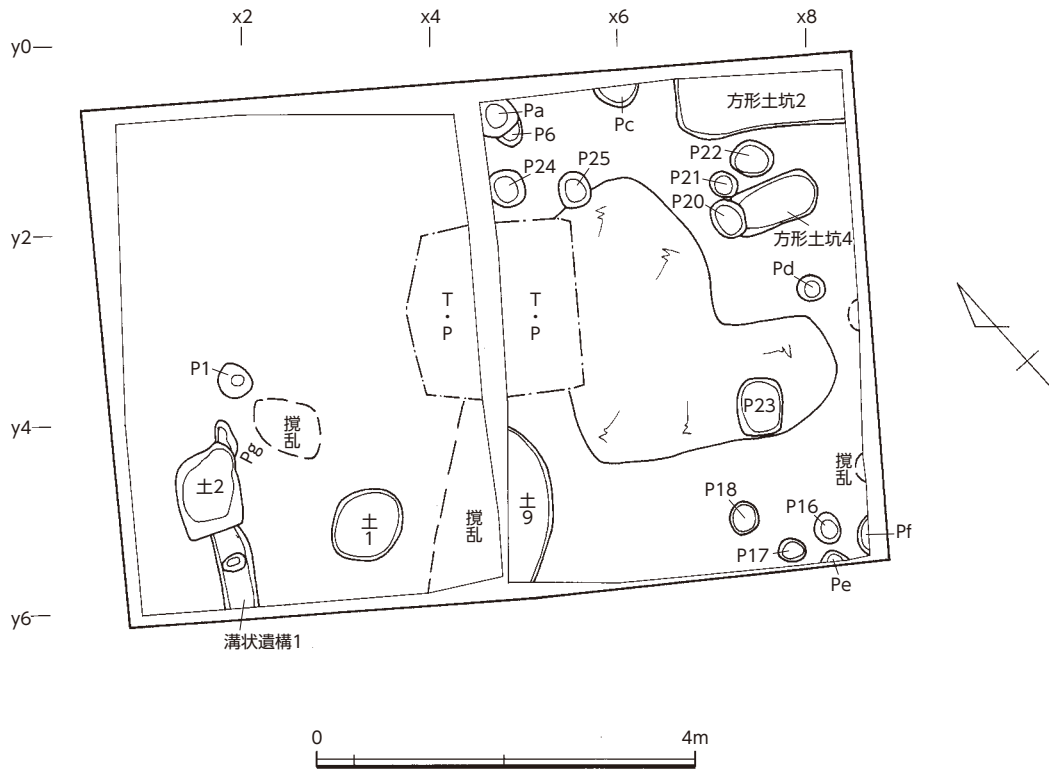


図5 1面遺構配置図

1面は海拔6.79～6.83m前後で検出された。調査区はほぼ平坦である。40cmの客土、及び10cmの堆積が遺存した中世遺物包含層の直下、現地表から50cm下で中世第1面が検出された。土丹による強固な版築がなされた地形面である。検出遺構は溝状遺構1条、土坑3基、方形土坑2基、柱穴16口である。溝状遺構は遺存部分がわずかであり、また、性格を特定出来る出土遺物もなく、役割等は不明といわねばならない。柱穴群、方形土坑は調査区東側に、土坑群は西側に集中するといった展開が示された。掘立柱建物裏手にゴミ穴(土坑)を掘るといった様相が想定される。1面は生活空間としての色合いの濃い様相を呈していた。以下、各遺構の詳細を述べる。

溝状遺構1(図6)

x1・y5グリッドに海拔6.79mで検出された南北方向の溝状の遺構である。北側を土坑2に切られる。検出された掘り方規模は南北95cm、幅は最大で36cm、深さは確認面より6.4cmを測る。断面は逆台形で、真直ぐに走る様相である。中央に17×24×12.9cmの柱穴様の落ち込みを有する。南北の軸方向はN-32°-Eである。覆土

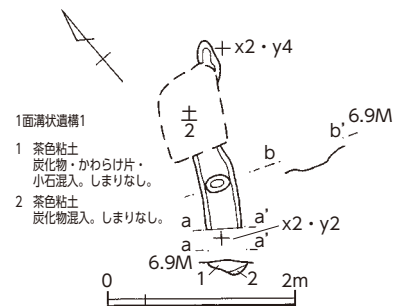


図6 溝状遺構1

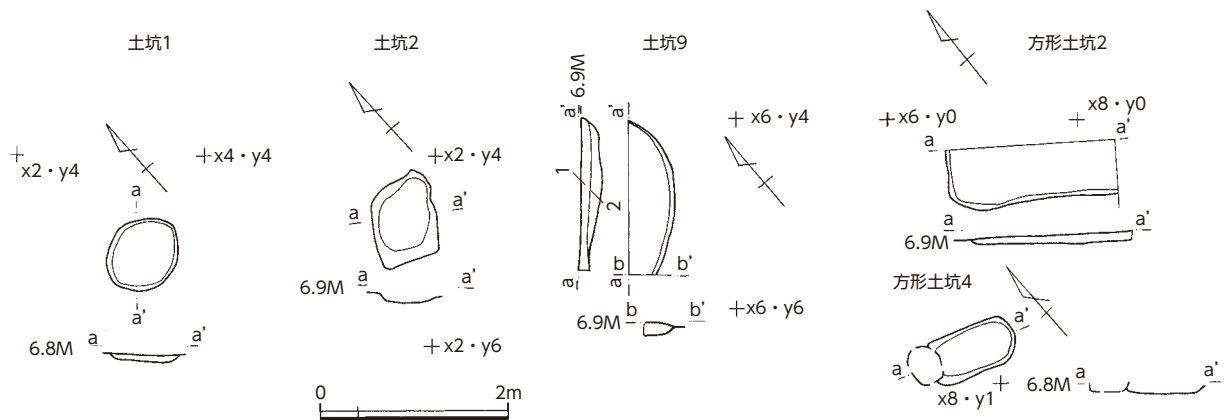


図7 土坑1・2・9・方形土坑2・4

は茶色粘土で、炭化物・かわらけ片、小石を含みしまりが無い。

出土遺物はかわらけ、白かわらけ、獣骨のそれぞれの小片である。

土坑1・2・9・方形土坑2・4(図7)

土坑1

x2～3・Y4グリッドにおいて海拔6.73mで検出された。検出された掘り方規模は72×75cmで、平面形はほぼ円形を呈する。深さは確認面より10.1cmを測る。覆土は暗褐色砂で炭化物を混入しまりは無い。出土遺物はかわらけ、常滑、獣骨である。

土坑2

x1・Y4グリッドにおいて海拔6.79mで検出された。検出された掘り方規模は90×68cmで平面形は隅丸方形を呈する。深さは確認面より22.5cmを測る。出土遺物はかわらけ、常滑、磁器である。

土坑9

x4～5・Y4～5グリッドにおいて海拔6.77mで検出された。当址の大半は攪乱を受ける。検出された掘り方規模は165×46cmを測り、現状で半円形を呈する。深さは確認面より27.4cmである。覆土は茶褐色粘質土でかわらけ片、炭化物を含みさほどしまらない。

方形土坑2

x6～8・Y0グリッドにおいて海拔6.75mで検出された。当址の大半は調査区外北にある。検出された掘り方規模は178×58cmで、平面形は方形になると想定される。深さは確認面より12.6cmを測る。覆土は茶色砂質土で褐鉄分を多く含む。

方形土坑4

x7・Y1グリッドにおいて海拔6.76mで検出された。当址はP 20に切られる。検出された掘り方規模は80×47cmで、平面形は方形になると想定される。深さは確認面より6.7cmを測る。

柱穴群(図5)

調査区東側に展開しており重複関係はほとんどなく、また、底部の海拔レベルは6.65m～6.66mでほぼ一定であり、複数の同規模建物の柱穴群と想定される。また、柱穴間のスパンから鑑みると改築の痕跡であることも考えられる。しかし、検出状況から構築物を復元することは出来なかった。1面で検出された柱穴群の寸法表は下表のとおりである。また、算用数字を付したものは出土遺物があったもの、アルファベットを付したものは出土遺物がなかったものである。

1面柱穴寸法表

柱穴名	規模cm	深さcm	底部の海拔m	平面形	備考	柱穴名	規模cm	深さcm	底部の海拔m	平面形	備考
P 1	37×33	12.0	6.70	楕円形		Pa	40×45	22.3	6.51		北肩西肩は調査区外
P 16	32×30	23.5	6.51	円形		Pb	15×28	17.6	6.61		Paに切られる
P 17	28×25	13	6.62	楕円形		Pc	50×21	9.9	6.66		大半は調査区外
P 18	35×30	6	6.69	楕円形		Pd	29×29	3.4	6.74	円形	
P 20	40×34	13	6.62	楕円形		Pe	25×13	21	6.54		大半は調査区外
P 21	29×28	10	6.67	円形		Pf	40×12	18.5	6.55		大半は調査区外
P 22	45×40	11.3	6.67	楕円形							
P 23	62×48	6.7	6.62	隅丸方形							
P 24	38×40	22.8	6.49	隅丸方形							
P 25	34×40	29	6.46	隅丸方形							

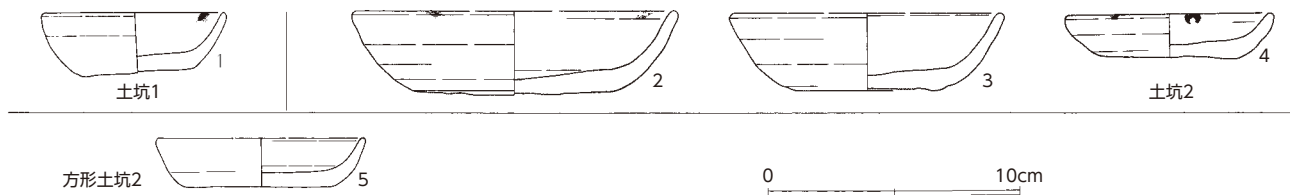


図8 土坑1・2・方形土坑2出土遺物

土坑1出土遺物(図8-1)

1はロクロ成形のかわらけの小皿である。胎土は極めて精良で焼成良好な薄手丸深タイプの器形である。灯明皿である。

土坑2出土遺物(図8-2～4)

2～4はロクロ成形のかわらけで2は大皿、3は中皿、4は小皿で大中小とそろそろ。概ね胎土は粉質が強く薄手、焼成は良好である。2、4は灯明皿である。

方形土坑2出土遺物(図8-5)

5はロクロ成形のかわらけの小皿である。体部中位に明瞭な稜線を有する。

表土層出土遺物(図9-1～9)

1～4はロクロ成形のかわらけである。1は大皿、2は中皿、3、4は小皿である。1の胎土は淡橙色を呈し、大粒泥岩粒を含み粗く、成形は雑である。また、体部に穿孔を有する。2～4は器肉が薄く、焼成は概ね良好である。2は白褐色を呈する非常に精緻な胎土である。3の小皿は器高の低い皿型、2、4は薄手丸深の器形である。5は白磁口兀皿の口縁部の小片である。胎土は白色を呈し精緻である。透明釉で光沢は良好である。6は常滑窯の片口鉢Ⅱ類の底部の小片である。胎土は褐灰色を呈し小石を多く含み粗い。内面の磨滅は顕著である。外部底面は砂底である。7は研磨痕のある常滑の甕の体部の小片である。8は瓦質の浅鉢型手焙りの口縁部の小片である。胎土は灰桃色を呈し白色粒子を含み粗い。内面体部に煤が濃く付着する。外面は被災し器表が爆ぜる。9はかわらけの底部片を再利用した円盤である。

攪乱出土遺物(図9-10～1)

現代の層位、及びゴミ穴から出土した遺物を一括して掲載した。10～12はロクロ成形のかわらけの小皿で、3点共に器高の低い皿状を呈する。10は淡橙色を呈し、泥岩粒子を混入する粗い胎土で器肉は厚い。11、12は白褐色を呈する精良土である。12は厚手で直立気味に立ち上げた体部から口縁端部外反させる。12は器肉が均質な薄手タイプである。13、14は瀬戸窯の製品である。13は灰釉卸皿の口縁部の小片である。胎土は灰白色を呈し、黒色粒子を含み粗い。釉は刷毛塗りである。14は輪花型の入子である。胎土は灰色を呈し、長石粒子を含む。内面に降灰がある。15は平瓦の側面部分の小片である。胎土は灰白色を呈し、小石を多く含む。両面に離砂が多量に付着しており器表の叩き目、布目の圧痕等の様相は不明瞭である。

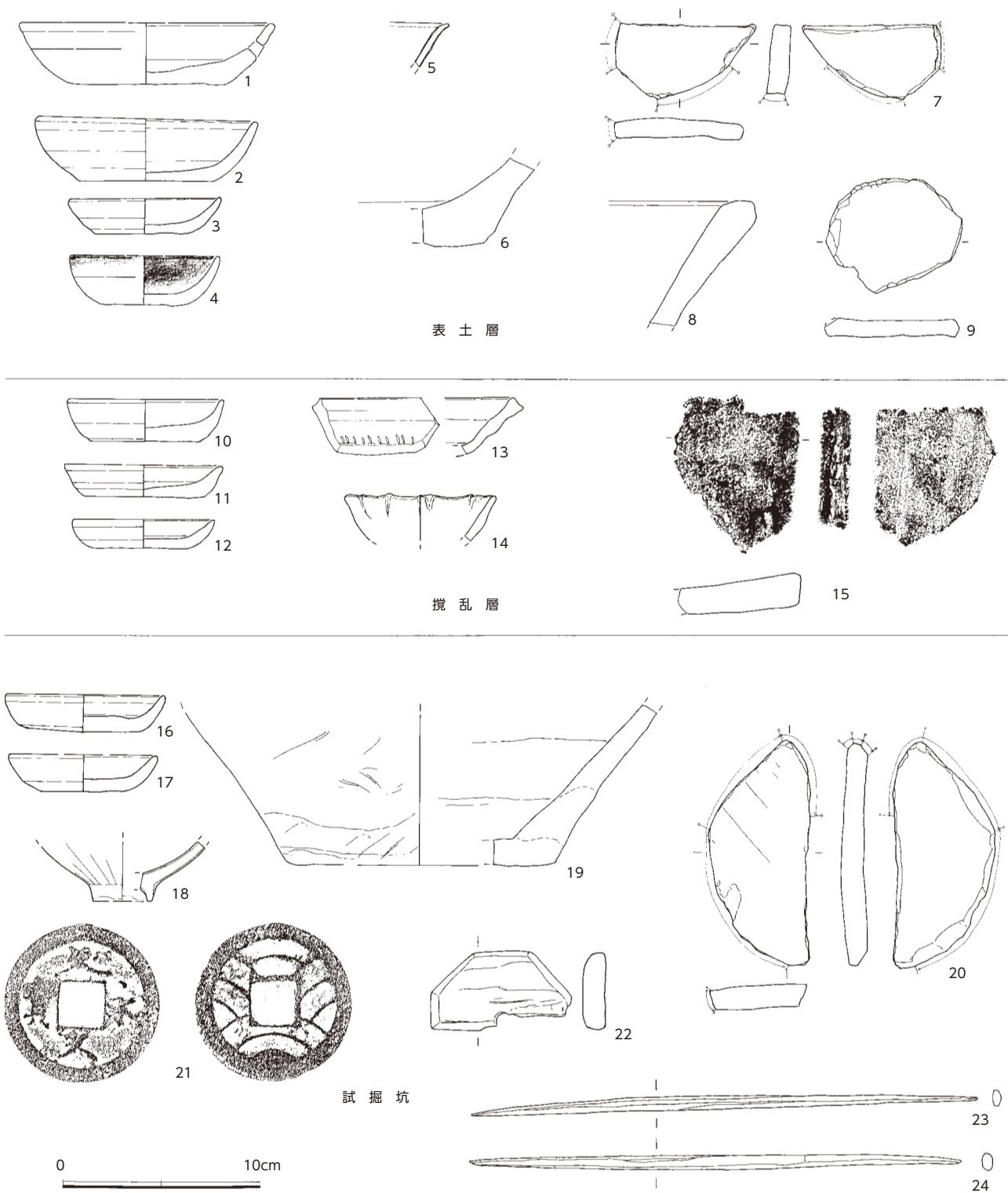


図9 表土層・攪乱層・試掘坑出土遺物

試掘坑出土遺物(図9-16~24)

ここに掲載したのは確認調査時に出土した層位不明な遺物である。16、17はロクロ成形のかわらけの小皿である。16の胎土は白褐色を呈し、泥岩粒を多く含む粉質な精良土である。厚手で口径、底径比の小さいタイプである。7は橙色を呈し、赤色粒子を含む粗胎で薄手となる器形である。18は龍泉窯青磁鎬蓮弁文碗皿類の底部である。胎土は灰白色を呈し、黒色粒子を多く含む。釉調は青緑色、光沢は良好で

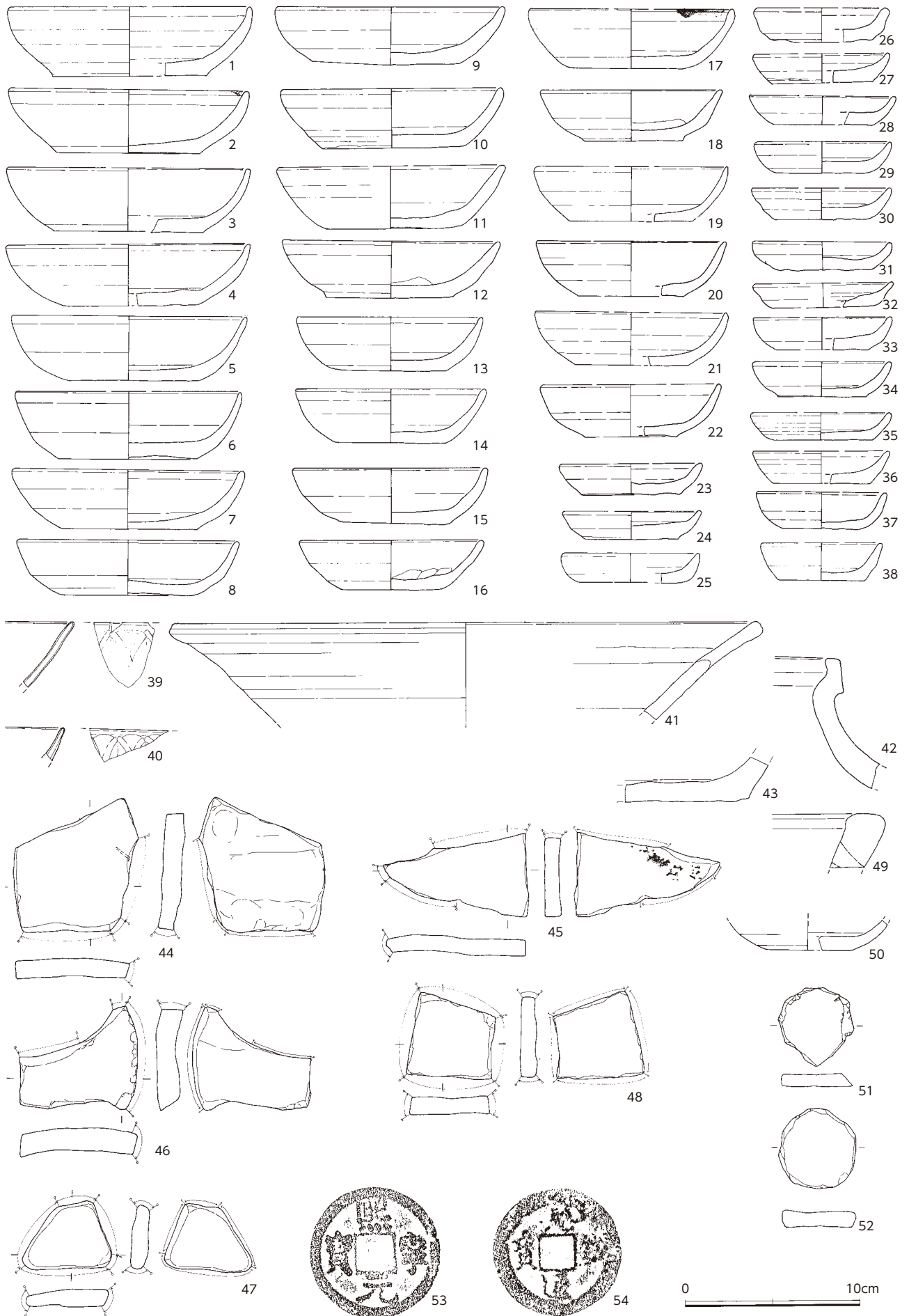


图10 1面出土遺物

ある。器表は粗く貫入する。高台畳付きは露胎である。19は常滑窯の甕の底部である。胎土は灰色を呈し、白色粒子、小石を多く含み粗い。内面に厚く降灰している。外面底部は露胎である。20は研磨痕のある陶片で、常滑の甕の胴部の破片を再利用したものである。21は近世の銭、「文久永宝」、文字は板倉周防守の書である。22～24は木製品である。22は7.1×4.0×1.1cmを測り、六角形を半分に分けた形状である。織具の手押木の可能性がある。23、24は箸である。

1面出土遺物(図10)

1～38はロクロ成形のかわらけである。1～12は大皿、13～22は中皿、23～38は小皿で3器種になる。1～7、19～22、37、38の胎土は淡橙色を呈し、砂粒を若干含む精良土で、焼成が良好な薄手丸深の器形である。8～18、23～36の胎土は白味の強い橙色を呈し、粉質である。大皿は器高がやや低く、中皿は薄手丸深で、小皿は概ね器高が低く口径、底径比の小さい皿型である。39、40は龍泉窯の青磁鎗蓮弁文碗皿類の口縁部の小片である。39の胎土は黄灰色を呈し、精良である。釉調は緑茶褐色、光沢は良好である。器表に細かい貫入がある。40の胎土は灰色を呈し、釉調は緑青色、光沢は良好である。41は常滑窯の片口鉢Ⅰ類5型式である。胎土は灰色を呈し、長石粒子を多く含む。内外面全体に降灰している。42は常滑窯の甕6a型式である。胎土は灰褐色を呈し、白色粒子を含む。口縁部が縁帯になる形態で縁帯幅は2cmを測る。43は常滑窯片口鉢Ⅱ類の底部である。胎土は灰色を呈し、白色粒子を含む。内面の磨滅が顕著で、使い込まれた様相を呈する。44～48は研磨痕を有する破片である。47は常滑窯片口鉢Ⅰ類の体部の破片、他は常滑窯の甕の体部片である。49は瓦質浅鉢型手焙りの口縁部の小片である。胎土は灰桃色を呈し、白色粒子を多く含む。口縁下に直径1cmの貫通孔がある。50は白かわらけの底部である。胎土は灰白色を呈し、白色粒子を含み精良である。糸切り成形である。51、52はかわらけの底部を転用した円盤である。53、54は北宋銭、熙寧元寶、元祐通寶である。出土遺物の様相から14世紀前半に比定されられると思われる。

第2節 中世第2面

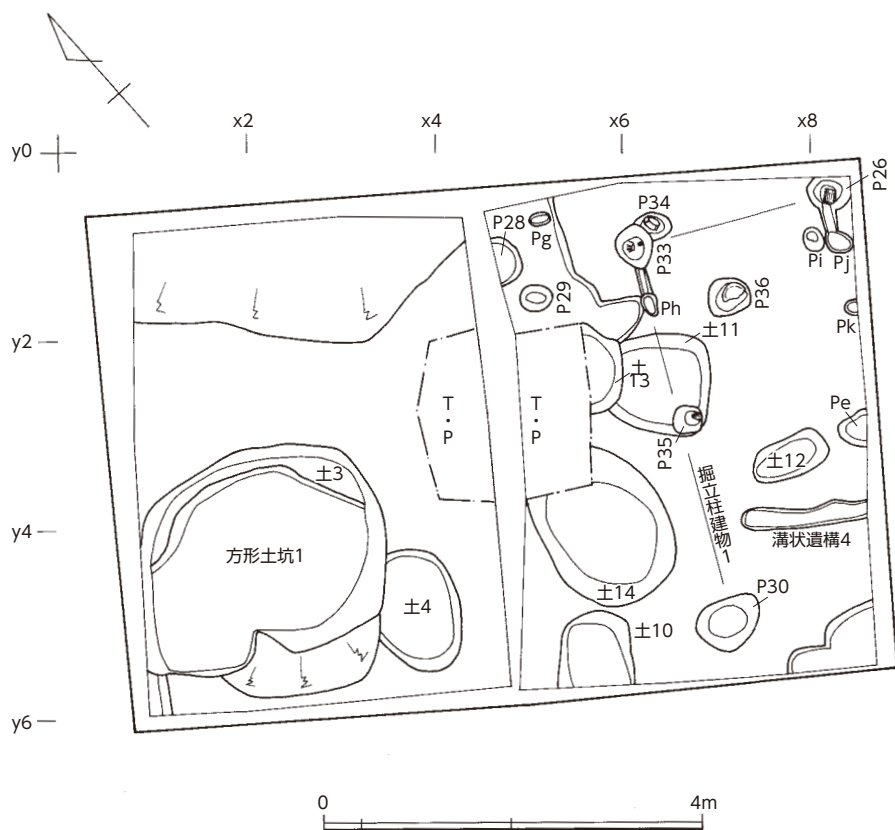


図11 2面遺構配置図

2面は海拔6.61～6.73m前後で検出された。調査区は東から南西方向に向かって緩やかに傾斜をしている。その比高差は12cmを測る。中世第1面下20cmで中世第2面が検出された。2面は茶褐色粘質土層で土丹粒子を多く含んだ地形層である。検出遺構は溝状遺構1条、掘立柱建物1軒、土坑7基、方形土坑1基、柱穴14口である。溝状遺構4は主体が調査区外東にあるため性格、役割等は不明といわねばならないが、掘り方規模が小さく、区画溝ではなく排水路のようなものかもしれない。2面に関しても、建物域は東側である。また、土坑を切って建物が建てられており、建物空間を広げていった様相である。さらに、2面の柱穴群は1面時より規模が大きく建物は1面より大型になると考えられる。

各遺構の詳細を述べる。

溝状遺構4(図12)

X7～8・y3グリッドに海拔6.67mで検出された東西方向の溝状の遺構である。東側は調査区外東にある。検出された掘り方規模は東西135cm、幅は最大で23cm、深さは確認面より8.3cmを測る。断面はU字形で、真直ぐに走る様相を呈する。東西の軸方向はN-52°-Wである。

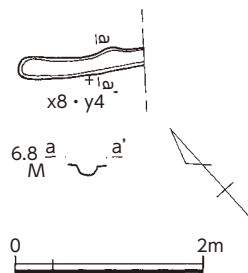


図12 溝状遺構4

掘立柱建物1(図13)

X6 ~ 8・y0 ~ 5グリッドに海拔6.7mで検出された。建物の北西角にあたる部分で、南北2間—東西1間までが検出された。心金は200cm、底部の海拔は6.51m ~ 6.19と幅があるが、礎板等で底部の高さを一定にして水平をたもったものと想定される。軸方向はN-24°-Eである

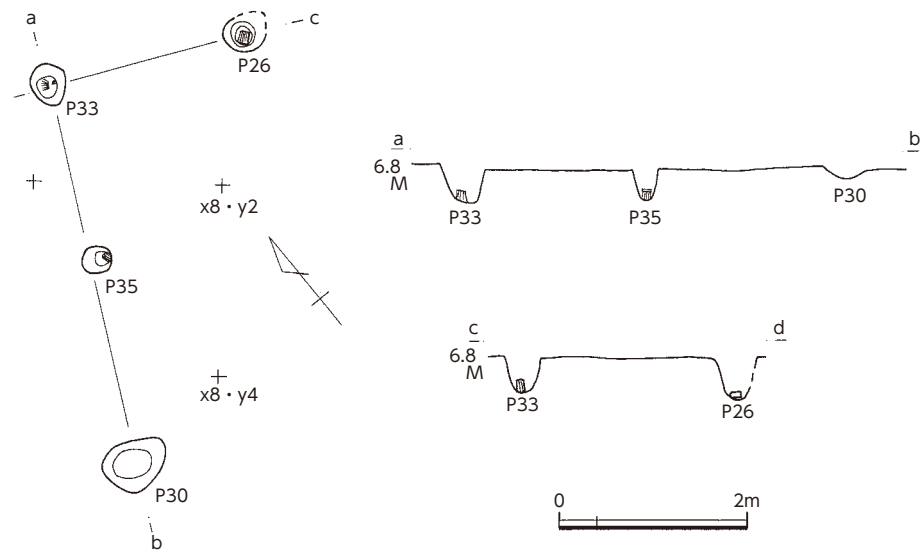


図13 掘立柱建物1

方形土坑1・土坑3・4・10~14 (図14)

方形土坑1・土坑3

平面プランでは切り合い関係がつかめなかったため1つの遺構として半載し掘

り上げ後、土層断面図より判別した遺構群である。そのため遺構別に出土遺物を分類出来なかった。図15、16で分類して掲載したのは確実に所属がわかった遺物である。当遺構群はx0 ~ 3・y3 ~ 5グリッドにおいて海拔6.60mで検出された。方形土坑1が土坑3を切る。検出された掘り方規模は東255cm、南北277cm、深さは確認面より方形土1は30cm、土坑3は52cmを測る。方形土坑1の覆土は上層が炭層で、多量のかもらけを含む。下層は茶褐色粘質土で炭化物、木片を含みしまりが無い。土坑3の覆土は茶色粘質土で中層に黒灰色粘質土を挟み炭化物、木器を含む。粘性が強く、しまりは無い。

柱穴名	規模cm	深さcm	底部の海拔m	平面形	備考
P 26	50 × 40	43.7	6.19	楕円形	15 × 10 × 3の礎板有り
P 33	40 × 45	44.1	6.23	楕円形	10 × 2 × 12、6 × 4 × 10の杭有り
P 35	30 × 29	34.5	6.28	隅丸方形	12 × 10 × 3の杭有り
P 30	65 × 52	18.8	6.51	楕円形	

土坑4

x3 ~ 4・y4 ~ 5グリッドにおいて海拔6.49mで検出された。当址の西肩は土坑3に切られる。検出された掘り方規模は南北130cm、東西85cmで、平面形は楕円形になると想定される。深さは確認面より36.5cmを測る。覆土は暗茶色粘質土でかわらけ片を含み、その上層に多量の土丹を投棄して埋めている。

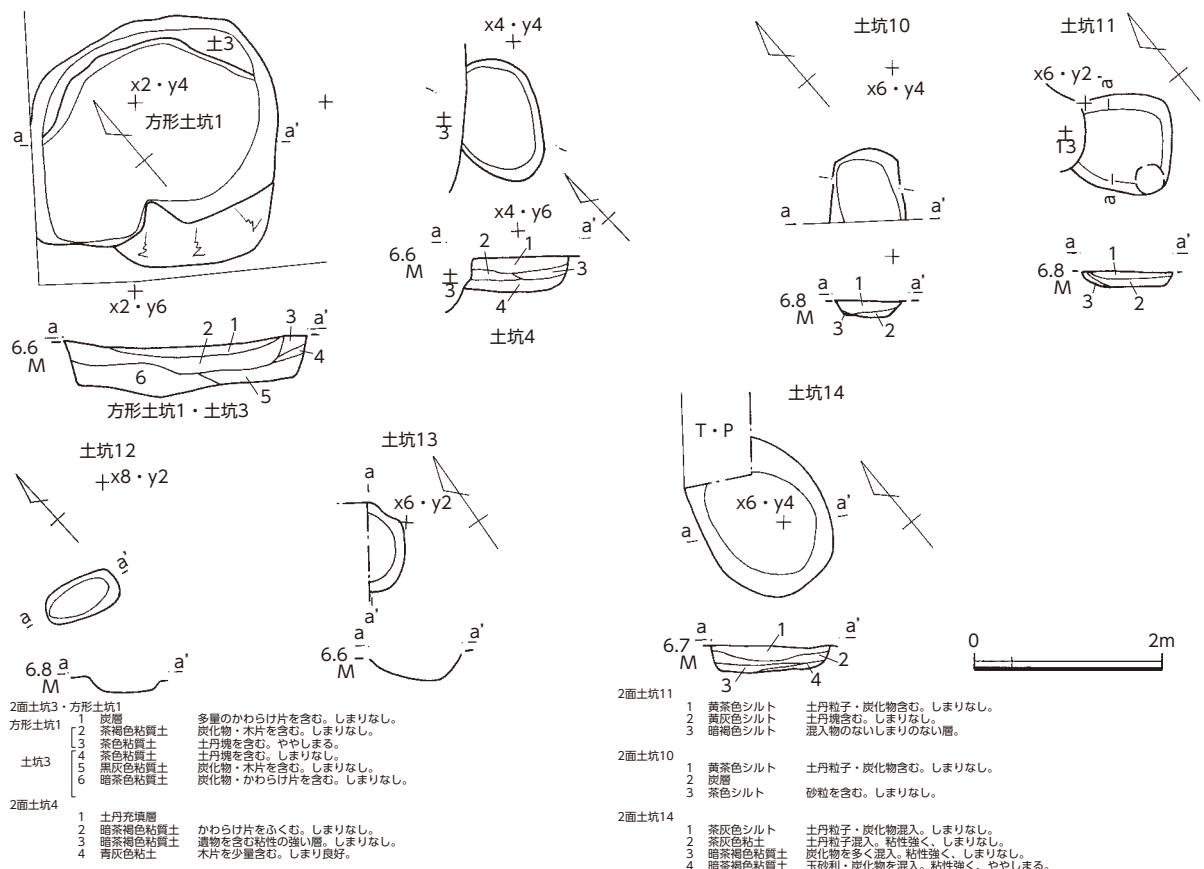


図14 方形土坑1・土坑3・4・10～14

土坑10

X5・Y5グリッドにおいて海拔6.57mで検出された。当址の南側は調査区外南にある。検出された掘り方規模は南北77cm、東西70cmで、深さは確認面より10cmを測る。覆土は茶色シルト層の中間に炭層を挟む。土丹粒子、炭化物を含みしまりはない。

土坑11

X6・Y2グリッドにおいて海拔6.60mで検出された。当址の西側は土坑13に切られる。検出された掘り方規模は南北105cm、東西94cmで、深さは確認面より10.3cmを測る。覆土は黄色味を帯びた茶色シルト層で土丹粒子、炭化物を含みしまりはない。

土坑12

x7・Y3グリッドにおいて海拔6.64mで検出された。当址の大半は攪乱を受ける。検出された掘り方規模は南北38cm、東西86cmで、平面形は楕円形を呈する。深さは確認面より9cmを測る。

土坑13

x5・Y1～2グリッドにおいて海拔6.48mで検出された。当址の西大半は攪乱を受ける。検出された掘り方規模は南北95cm、東西36cmで深さは確認面より27.5cmを測る。

土坑14

X5～6・Y3～4グリッドにおいて海拔6.54mで検出された。当址の南角はT・Pに切られる。検出された掘り方規模は南北165cm、東西132cmで、深さは確認面より29.2cmを測る。覆土は上層が茶灰色シルト層、下層が茶褐色粘質土で土丹粒子、炭化物を含み、しまりはあまりない。

方形土坑1出土遺物(図15-1、2)

1はロクロ成形のかわらけの小皿である。胎土は白褐色を呈する粉質の精良土である。口縁端部は三角形に打ち欠かされている。灯明皿である。2は渥美の壺の体下部である。胎土は灰色を呈し白色粒子を含む。焼成は良好で堅く焼しまる。

方形土坑1・土坑3出土遺物(図15-3～36、図16-1～4)

3～27はロクロ成形のかわらけで、3～9は大皿、10～27は小皿である。大皿の6、9は胎土が精良で薄手の丸深の器形で、他はやや粗く粉質が強く厚手のものである。5、7は灯明皿である。小皿の胎土は概ね淡橙色を呈し、粉質が強く精良である。10～17は体部が直立して立ち上がり器肉が厚い。18～24の体部は丸味を持って立ち上がりやや薄手となりまた、これらは比較的器高が低く、皿状を呈する。25～27の小皿は胎土が精良で、薄手丸深となる。18は灯明皿である。28は青磁で龍泉窯の鎬蓮弁文碗の口縁部の小片である。胎土は灰色を呈し、黒色粒子を含み精良である。釉調は灰緑色、透明度、光沢は良好である。29は常滑窯の甕の口縁部である。5型式である。胎土は灰色を呈し、長石粒子混入しやや粘性を帯びる。口縁部から外面頸部に厚く降灰する。30～36は研磨痕を有するもので、常滑の甕の胴部片を転用したものである。図16-1は平瓦の側面あたりの破片である。胎土は黒灰色を呈し、白色粒子を多く含み硬質である。凹面には砂粒が多く付着している。2は北宋銭、至和元寶である。3は砥石である。凝灰岩、産地不明の中砥である。1面が破損しており砥面は3面である。4は黒漆椀。内面及び外面に朱漆で三つ巴のスタンプを押印する。

土坑4出土遺物(図16-5、6)

2点共に研磨痕を有する陶片である。常滑の甕の体部片を転用している。

土坑10出土遺物(図16-7、8)

7、8は常滑窯の製品で、7は甕の口縁部で3型式、8は底部で片口鉢Ⅱ類である。7の胎土は暗灰色を呈し、白色粒子、黒色粒子を含む。破片全体に降灰を受ける。8の胎土は橙色を呈し、白色粒子を含む。外面はヘラによる調整で外面底部は砂底である。

土坑11出土遺物(図16-9、10)

9はロクロ成形のかわらけの小皿である。胎土は橙色を呈し、黒砂をやや多く含む。体部が直立して立ち上がり器高が低い。堅く焼締まる。10は鉄製品、釘である。頭部と先端部を欠く。

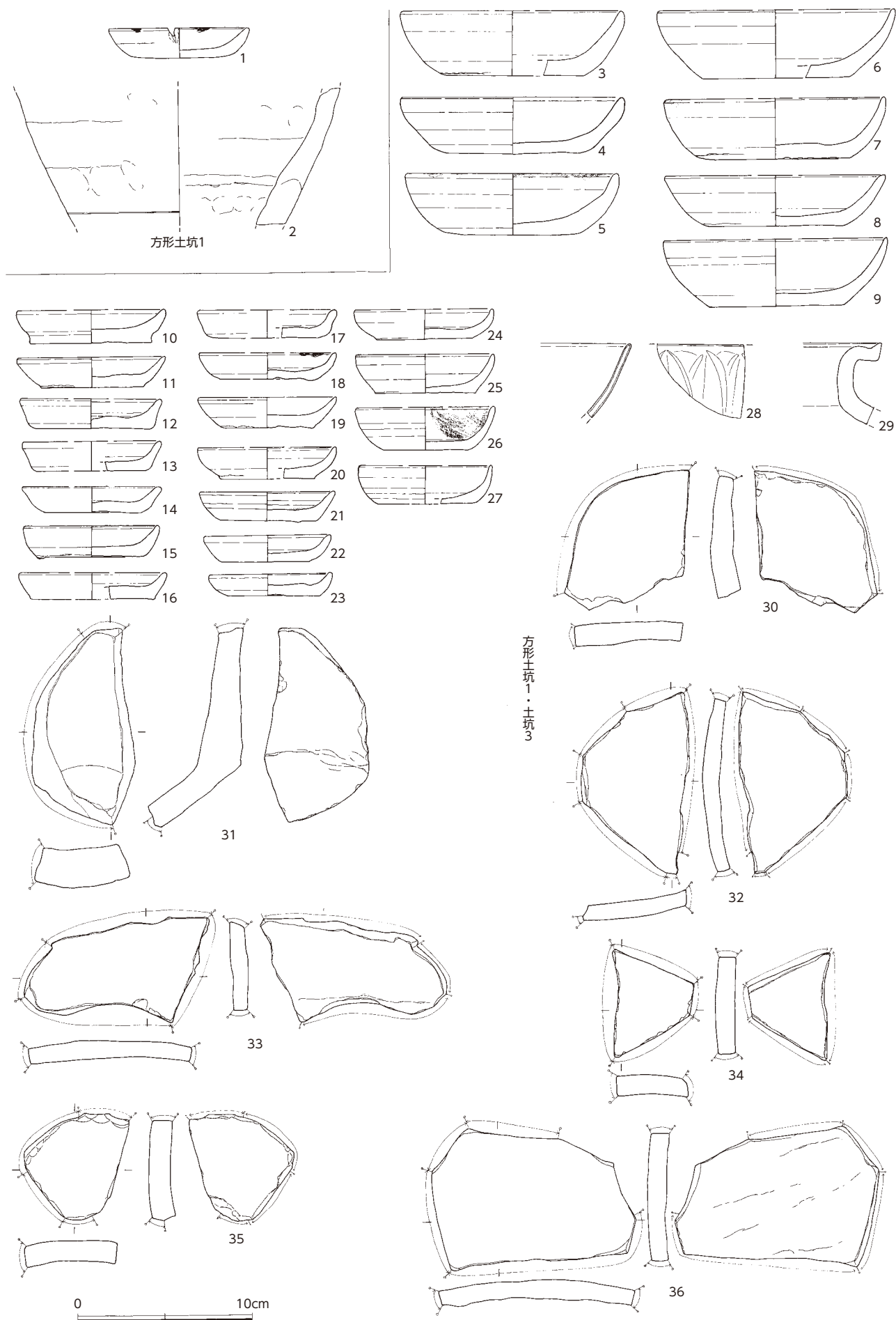
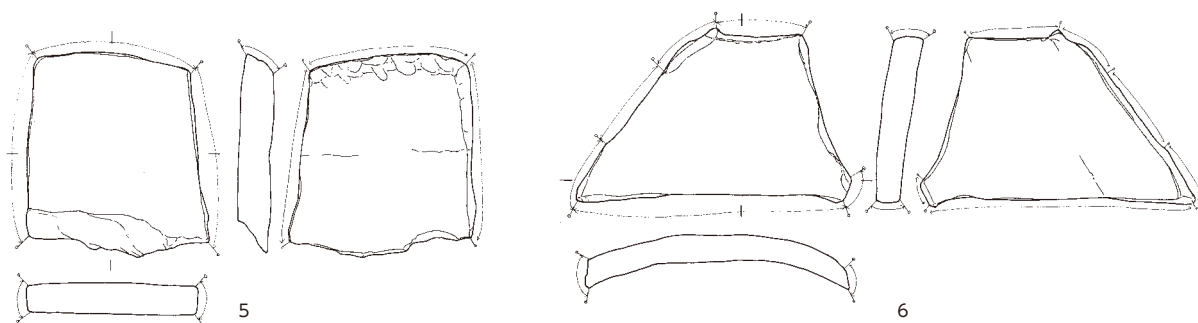


图15 方形土坑1·方形土坑1·土坑3出土遗物(1)



方形土坑1·土坑3



土坑4



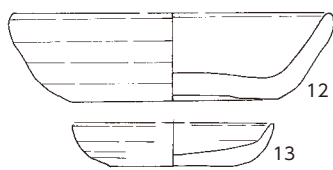
土坑10

土坑10

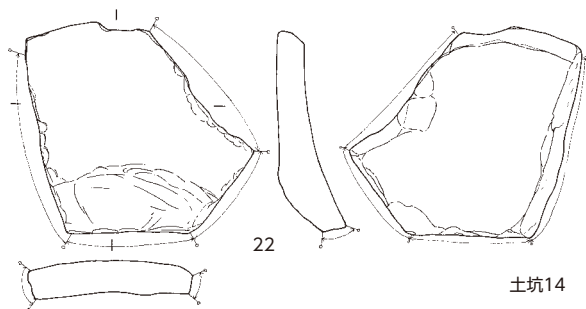
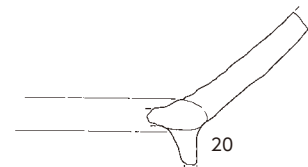
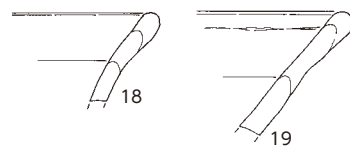
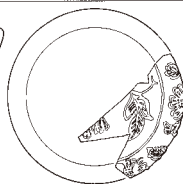
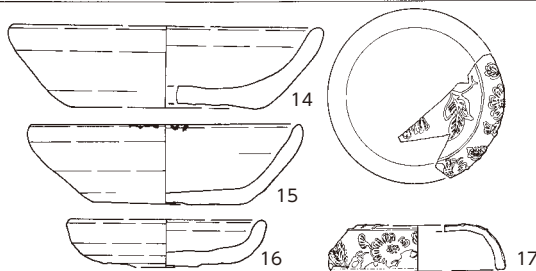


土坑11

土坑12



土坑13



土坑14



0 10cm

图16 方形土坑1·土坑3(2)·土坑4·10~14出土遗物

土坑12出土遺物(図16-11)

11はロクロ成形のかわらけの小皿である。胎土は淡橙色を呈し、黒砂をやや多く含む。体部が直立して立ち上がり器高が低い。

土坑13出土遺物(図16-12、13)

かわらけの12は大皿、13は小皿である。胎土は橙色を呈し、赤褐色粒子、泥岩粒を多く含みやや粗い。大皿は器肉が厚く、また口縁部を直口気味に上に引き上げる。小皿は薄手で口唇部は薄く尖る。口径、底径比が小さい。

土坑14出土遺物(図16-14～23)

14～16はロクロ成形のかわらけで14は大皿、15は中皿、16は小皿で、大中小の3種である。大皿の胎土は橙色を呈し、黒砂を多く含みやや粗い。外反しながら真直ぐ体部を立ち上げ、口唇端部を直口させる。中皿の胎土は淡橙色の精良土で、薄手丸深の器形である。小皿は粉質の精良な胎土で、体部は丸味を持たせ立ち上げる。17は青白磁印花文合子の蓋である。胎土は白色を呈し、精緻である。釉調は水青色、透明度、光沢共に良好である。合わせ口外面は釉剥ぎ、内面は天井部のみ露胎である。牡丹文である。18～20は常滑窯片口鉢Ⅰ類である。18、19は口縁部、6a型式、20は底部の小片である。18の胎土は暗灰色で長石粒子、砂粒を多く含む。口唇端部は肥厚する。19の胎土は灰色を呈し長石粒子、小石を多く含む粗胎である。口縁部に薄く降灰する。20の胎土は灰色を呈し、長石粒子、小石を多く含む雑把である。高台は外向きに貼付される。内面の磨滅が顕著で使用頻度を物語る。21は南部系山茶碗の底部の破片である。尾張型(?)の5型式である。胎土は茶褐色を呈し、長石粒子を多く含む。焼成は不良である。高台の断面は逆台形を呈する。23、24は常滑の研磨痕のある破片で、23は片口鉢Ⅱ類の底部片、23は甕の体部片である。

柱穴群

柱穴群は検出状況、底部の海拔から2時期以上はあると想定されるが建物を構築するまでにはいたらなかった。

2面柱穴寸法表

柱穴名	規模cm	深さcm	底部の海拔m	平面形	備考
P28	50×25以上	29	6.13		西壁は調査区外
P29	36×30	37.6	6.06	楕円形	
P34	29×25	38.5	6.29		礎石(伊豆石20×10×8.5)P33に切られる
P36	35×36	43.5	6.19	隅丸方形	礎石(伊豆石25×14×35)
Pg	25×10	15.7	6.24	楕円形	

P h	25 × 15	24	6.32	楕円形	
P i	25 × 20	19.7	6.46	楕円形	
P j	25 × 25	22.9	6.4	楕円形	
P k	15 × 15	20.2	6.39		東壁は調査区外
P l	45 × 31	10.3	6.61		東壁は調査区外

2面出土遺物(図17、18)

1～42はかわらけで、1～13は大皿、14～41は小皿、42は内折れのミニかわらけである。大皿は概ね胎土が橙色及び淡橙色を呈し、粉質の厚手で丁寧な作りである。6、8は精良な胎土で薄手丸深に近いが、器高がさほど高くない。10～13は胎土が橙色を呈し、粗く、また作りが雑である。13は灯明皿である。小皿の胎土は橙色、淡橙色、白褐色と概ね3種類に分類される。砂質の強いものは橙色系、粉質の強いのは白褐色になる傾向にあり、後者がやや多く出土している。口径は7.6～7.8cm、器高1.6～1.8cmあたりが主体となる。14は口径9.2cmと大きく前代の混入品と思われる。40、41は薄手丸深の器形である。

43～58は磁器である。43～45は龍泉窯の青磁である。43は劃画文碗の口縁部の小片である。胎土は白色を呈し、釉調は灰緑色、光沢は良好である。器表貫入がみられる。44は鎬蓮弁文碗で内面に文様を有する。胎土は灰色を呈し精緻である。釉調は灰緑色、光沢は良好である。45は蓮弁文の折縁皿である。胎土は灰白色を呈し釉調は灰緑色、光沢は悪い。46～48は白磁口元皿の破片である。胎土は白色を呈し黒色粒子を含み精良である。透明釉で光沢は劣る。49～54は青白磁で、49～52は梅瓶の体部の破片、53、54は輪花型印花文合子の蓋である。梅瓶の胎土は白色を呈し、黒色粒子を含み精緻である。釉調は水青色、光沢は良好である。文様は渦文である。49は被災し器表が肌荒れしている。合子の胎土は白色を呈し、精良である。合わせ口は釉を搔取り、内面は露胎である。53は水青色釉で光沢は良好である。上面に牡丹文を意匠し、また輪花は幅広である。54は被災して器表にゴマ状の斑点が見られる。55～58は高麗青磁で、壺或いは瓶子の小片と推定される。文様の種類は不明であるが、57は黒色土の象嵌、他は白色土の象嵌である。58は線刻が微かに残る。

59は瀬戸の入れ子の底部片である。胎土は灰色を呈し黒色粒子を含み精良である。外底面にヘラケズリの調整痕がのこる。60は北部系山茶碗、東濃型・明和(1260～1310)7型式か。胎土は白色を呈し、精良である。遺存部内面全体に降灰し、また、窯滓が付着している。

61、62は常滑窯片口鉢Ⅰ類である。61は口縁部の小片、6a型式である。胎土は灰白色を呈し長石粒子を多く混入し粗い。口縁部が肥厚する。降灰は内面全体である。

62は底部である。胎土は長石粒子が大粒で61よりさらに粗い。内面は磨滅が顕著で、また、被災し黒色に変色している。63、64は常滑窯の甕で6a型式、65は片口鉢Ⅱ類で6b型式である。63の胎土は長石粒子を多く含み比較的細かい。幅1.6cmの縁帯を持つ。外面肩部に降灰を受ける。64の胎土は長石大粒が含まれ粗い。縁帯幅は2.2cmで63より幅が広い。破片全体に降灰を受ける。65の胎土は暗灰色を呈し、黒色粒子を多く含み精緻で粘性をもつ。内面に薄い降灰を受ける。66～67、図18-1～10は研磨痕を有する常滑の甕の体部片である。11は瓦質浅鉢型手焙り口縁部の破片である。胎土は灰色を呈し黒色粒子、雲母を含み暗灰色の胎芯を残す。内面は縦調整後に横方向のナデ調整を施す。外面体部には煤が付着して

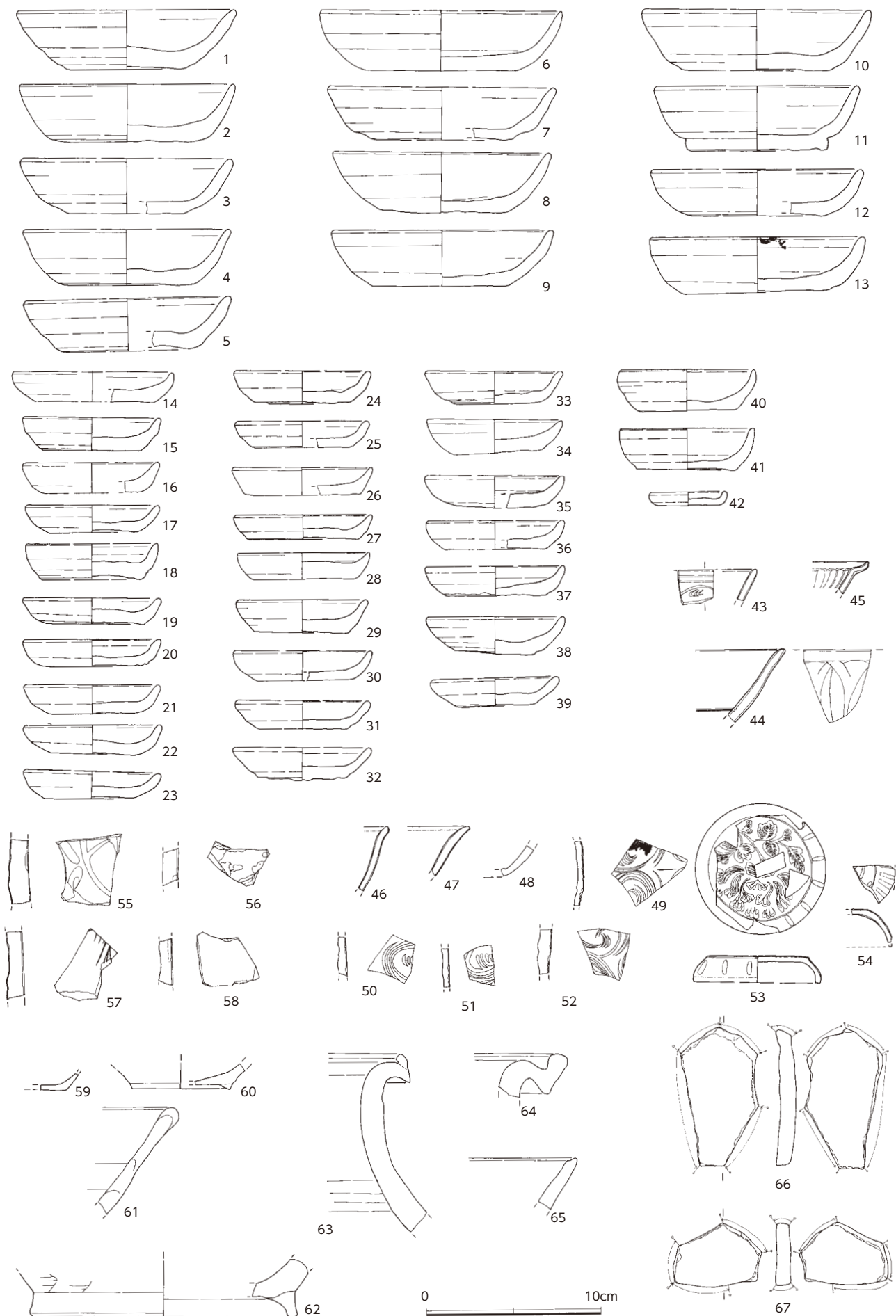


图17 2面出土遺物(1)

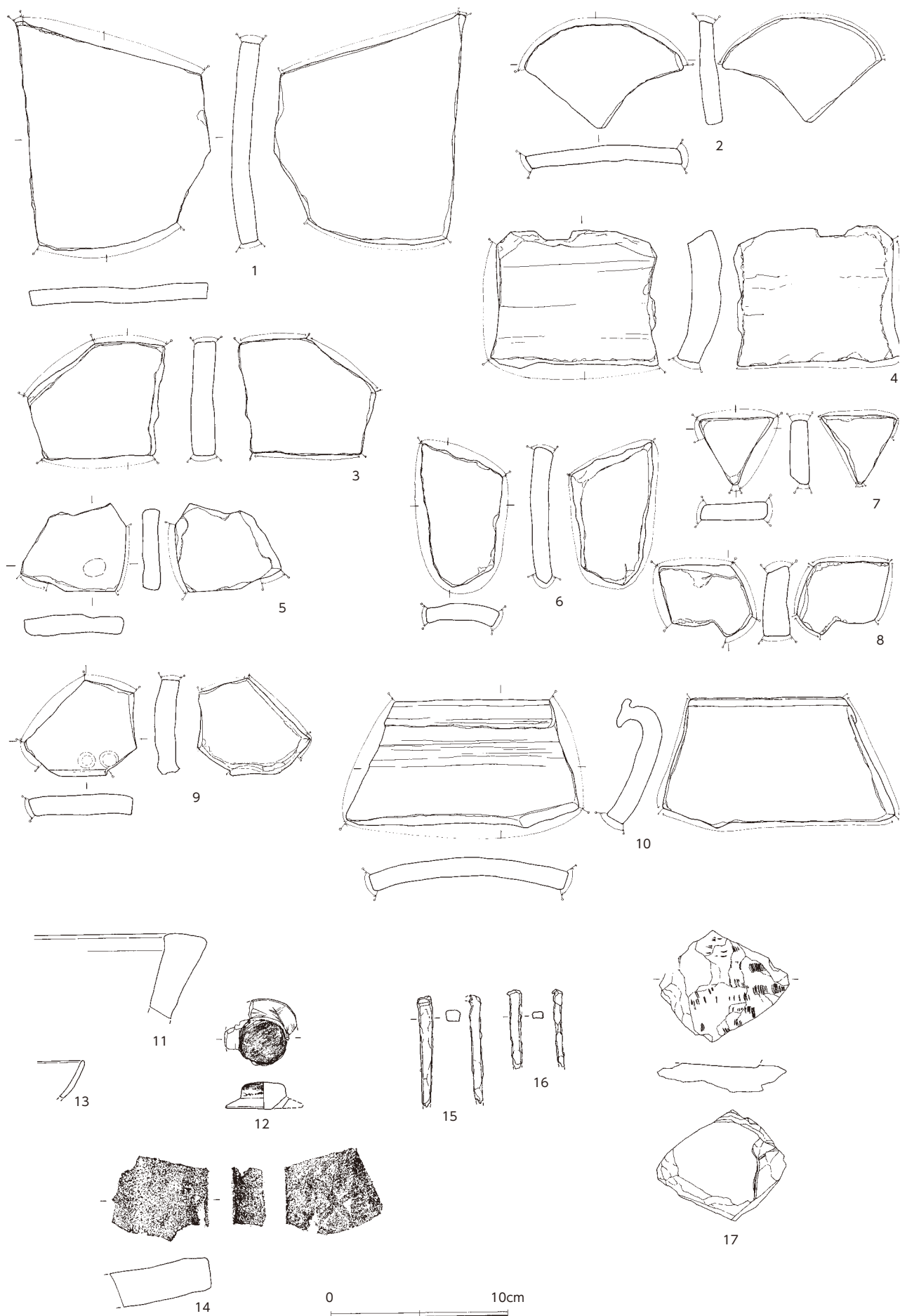


图18 2面出土遺物(2)

いる。12は滑石製品である。穿孔3足滑石鍋の1足を転用して蓋(?)として利用したのであろうか。摘み部分は煤が付着、穿孔は鍋を造る際加工したもので転用時の加工ではない。13は瀬戸内東部系の瓦器である。胎土は白色及び灰色を呈し、白色粒子を含む。口縁部が黒色に変化しており重ね焼きの痕跡を留める。14は平瓦。胎土は黒灰色を呈し白色粒子を多く含む。凸凹面に離れ砂が多く付着しており、また凸面には斜め格子の叩き文が残る。15, 16は鉄製品、釘である。共に先端部が欠損しており全長は不明である。17は硯、頁岩質の赤間ヶ石(紫雲石)で側足の付く方硯である。陸を鑿状工具で再加工した痕跡がある。出土遺物の様相から13世紀末から14世紀中葉に比定されると思われる。

第3節 中世第3面

中世第3面は海拔6.4m前後で検出された。中世第2面下20cm、茶褐色粘質土層で土丹粒子を多く含んだ地形層である。遺構面は東から西方向に向かって緩やかに傾斜をしており、その比高差は10cmを測る。遺構面全体に柱穴が展開しており該期は家屋を主体とした生活空間であった様相を呈する。検出遺構は溝2条、溝状遺構2条、方形竪穴1件、掘立柱建物1軒、井戸1基、土坑10基、柱穴37口である。溝は東西溝が1条、東から南方向に走る溝が1条である。東西溝は途中で消えており、また、遺存部分が少なく性格は不明である。溝状遺構2条は切り合い関係を持ち、また井戸に切られる。更に方形竪穴と掘立柱建物も切り合い関係にあり、方形竪穴を放棄した後に掘立柱建物を構築している。さらに掘立柱建物は土坑、溝等に切られている。以上の様相を鑑みると3面は前期同様に2時期はあると考えられる。各遺構の詳細を述べる。

溝1(図20)

調査区南東隅X8・y4グリッドに海拔6.30mで検出された東から南方向に走る溝である。両端は共に調査区外にある。検出された掘り方規模は長さ130cm、幅は最大で70cm、深さは確認面より37.7cmを測る。側壁は開いて立ち上がり断面形はU字型を呈する。また、5×3cmの縦杭が計6本、横杭33×4×3cmが1本遺存する。土留めに使用されたと思われる。覆土は暗褐色粘質土で、炭化物を若干含みしまりはない。軸方向はN-85°-Eである。

溝2(図20)

X7～8・y1～2グリッドに海拔6.40mで検出された東西方向の溝である。東側は調査区外東、西側は土坑20、23に切られる。検出された掘り方規模は長さ100cm、幅は最大で109cm、深さは確認面より15cmを測る。側壁は開いて立ち上がり断面形はU字型を呈する。また、覆土は茶色粘土で、土丹粒子、炭化物を含みしまりはない。軸方向はN-135°-Eである。

溝状遺構2・3(図20)

X2～3・y1～3グリッドに海拔6.39mで検出された。溝状遺構2が溝状遺構3を切る。また北側は大きく井戸1に切られる。検出された掘り方規模は南北205cm、東西104cm、深さは確認面より溝状遺構2は33.5cm、溝状遺構3は27.5cmを測る。側壁は開いて立ち上がり断面形はU字型を呈する。また溝状

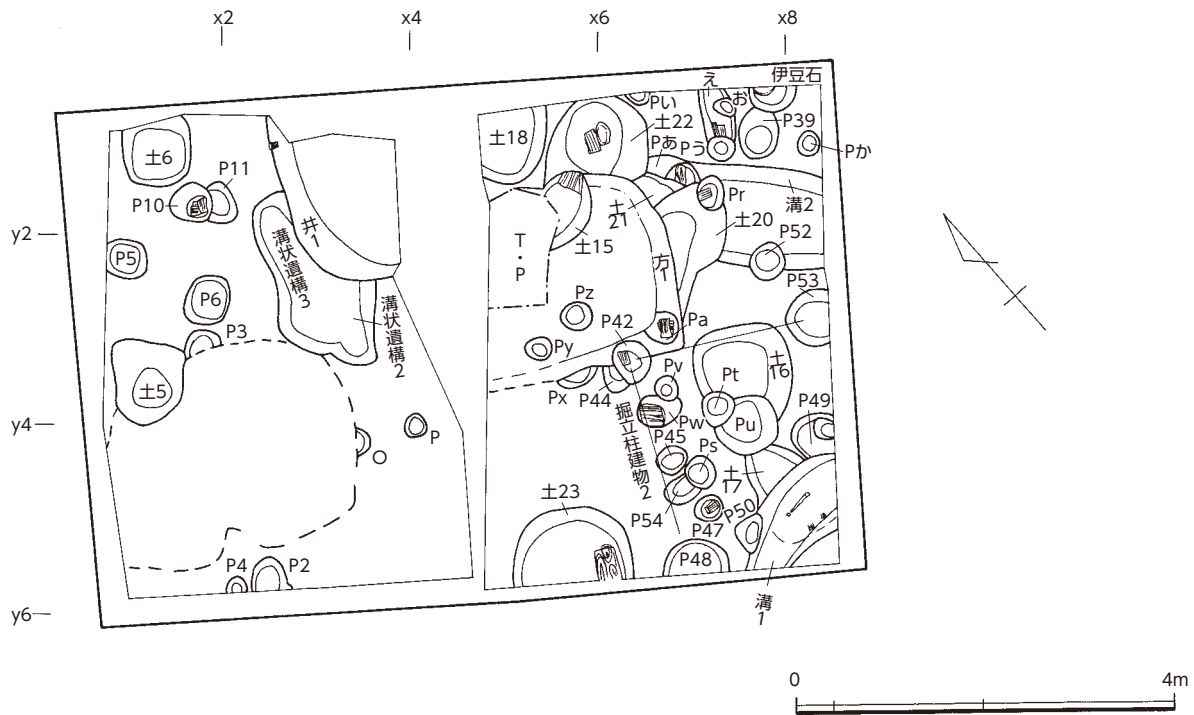


図19 3面遺構配置図

遺構2の覆土は暗茶褐色粘質土で、木片を若干を含みしまりはない。軸方向はN-36°-Eである。溝状遺構3の覆土は暗茶褐色粘質土で、炭化物、小石、腐植土、木片を含み粘性弱く、しまりはない。軸方向はN-26°-Eである。

溝1出土遺物(図21、22-1~7)

図21-1、2はロクロ成形のかわらけの小皿である。胎土は淡橙色を呈し、砂粒を多く含みやや粗く、器高の低い皿型の形態である。口唇端部は尖って成形される。3~8は常滑窯の製品である。3は5型式、4~8は6a型式である。3の胎土は灰色を呈し、黒色粒子を多く含み比較的精良である。内面口縁部に

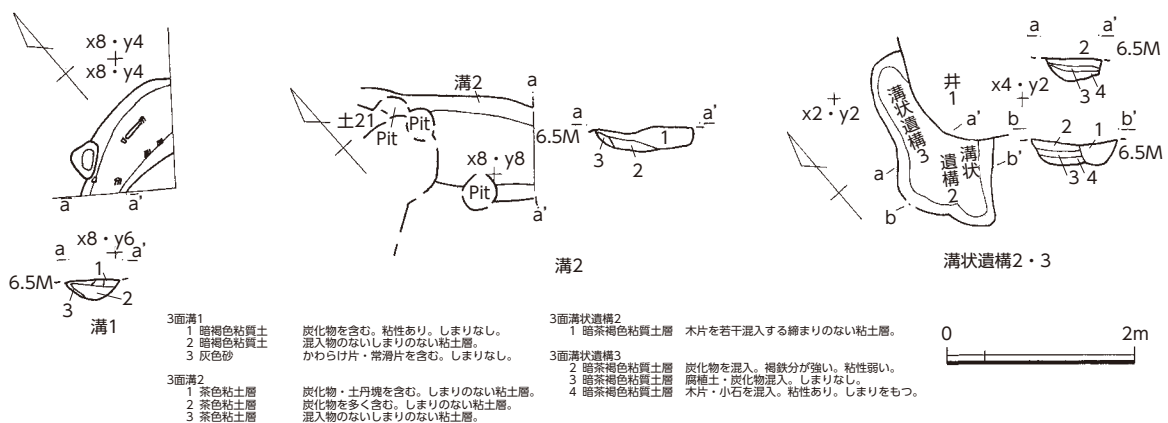


図20 溝1・2・溝状遺構2・3

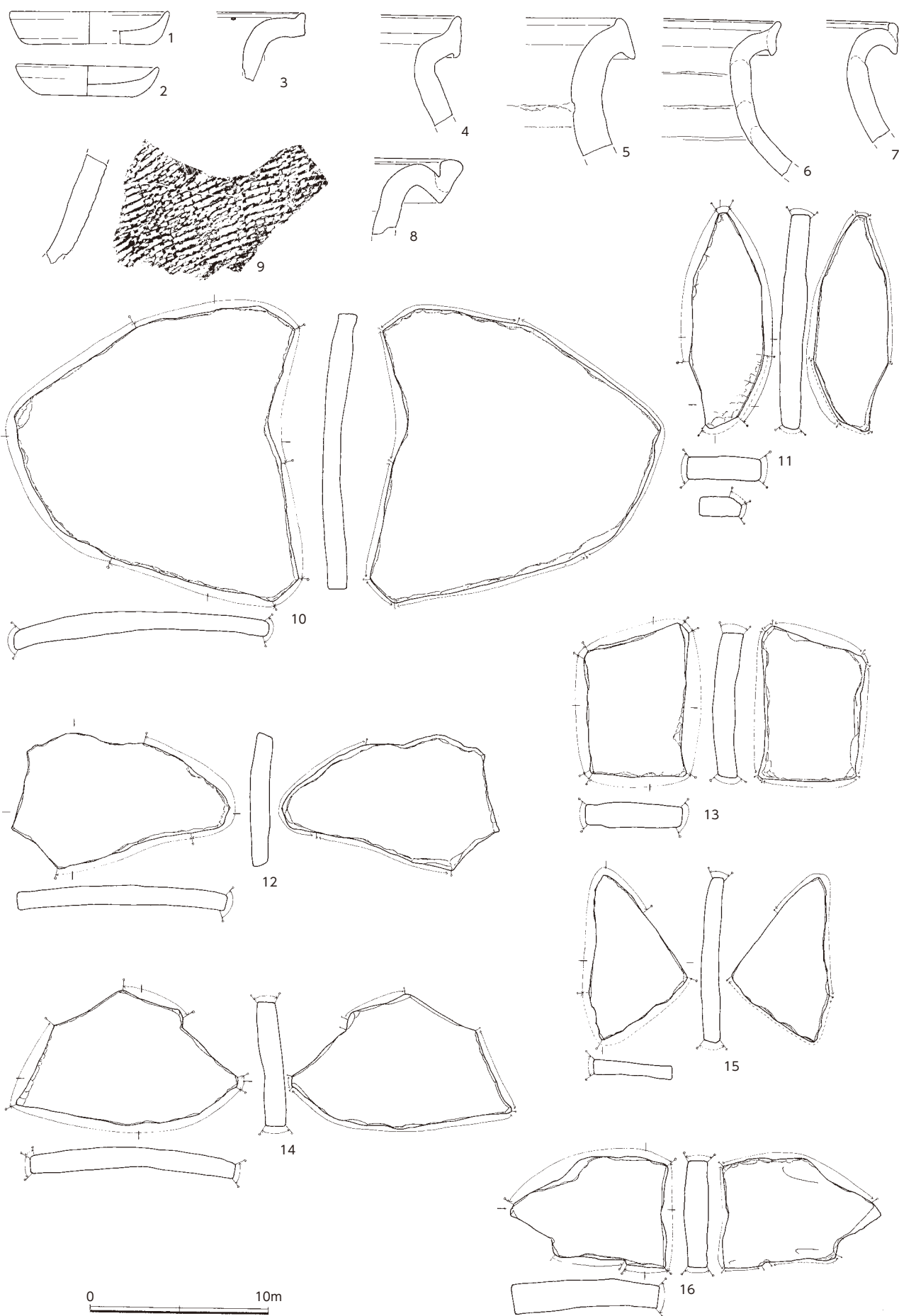


图21 溝1(1)出土遺物

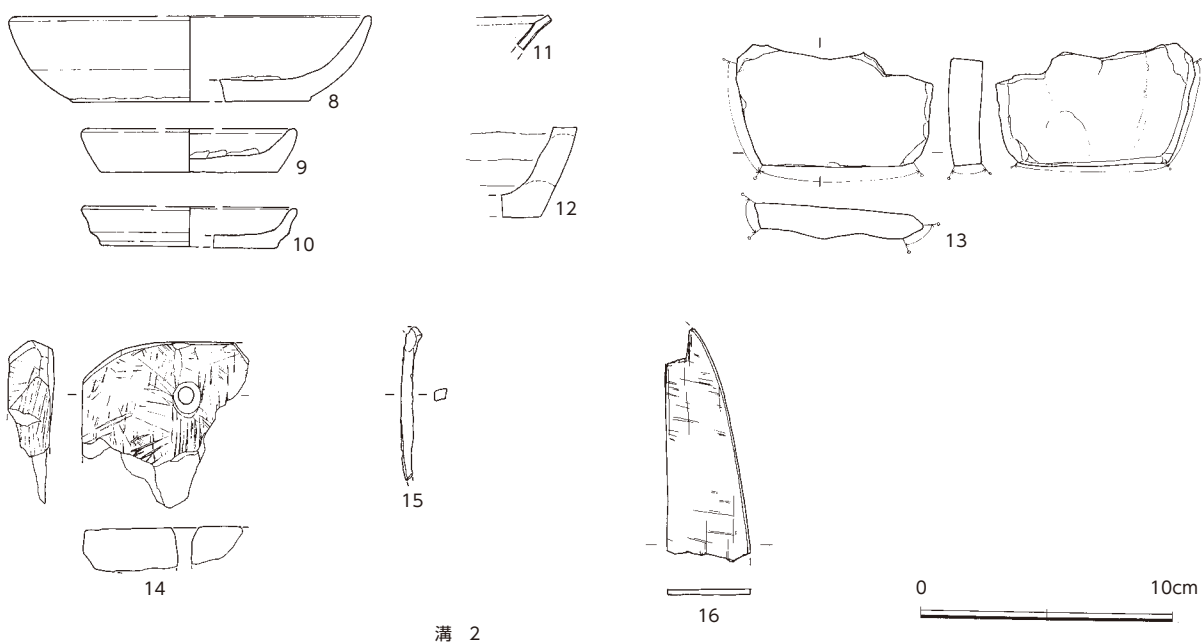
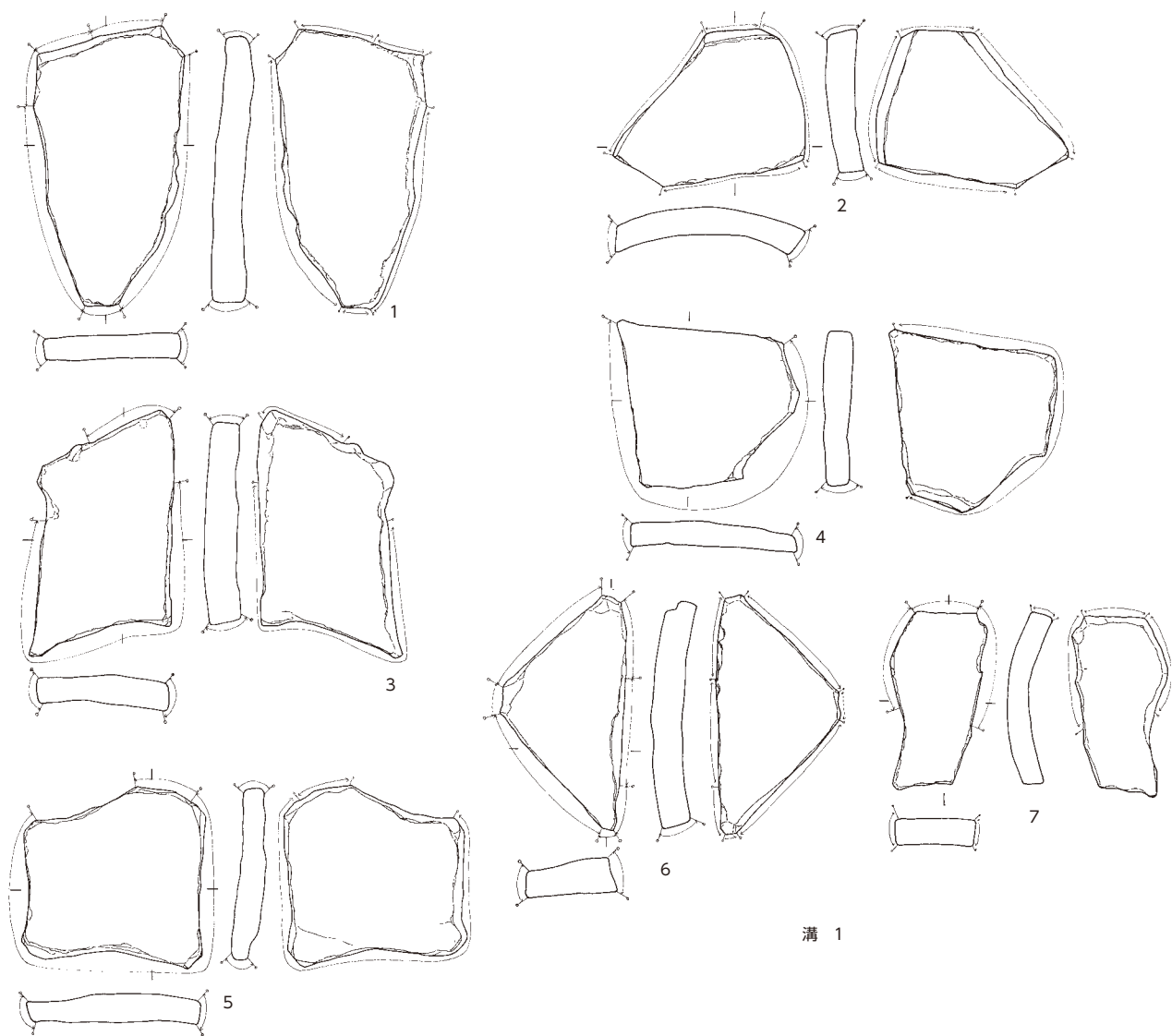


图22 溝 1 (2) · 溝 2 出土遺物

貫通していない直径4mmの孔が有る。外面に降灰を受ける。4の胎土は長石粒子を含み精良で粘性がある。口縁内部に薄く降灰を受ける。5の胎土は黒色粒子を含み粗い。口縁内部及び外面肩部に厚く降灰を受ける。6の胎土は灰色を呈し、混入物の粒子が大きい粗胎である。口縁内部及び肩部に降灰を受ける。7の胎土は灰色を呈し、細かい黒色粒子及び白色粒子を若干含み精良である。口縁内部及び肩部に降灰を受ける。8の胎土は灰色を呈し、小石、長石粒子を含み粗い。口縁内部及び肩部に降灰を軽く受ける。9は亀山窯の甕の体部片である。胎土は灰色を呈し、白色粒子を若干含み粘性が有る。外面は格子叩き目、内面の叩き目は消されている。

10～16、図22、1～7は研磨痕を有する常滑の甕の体部片である。

溝2出土遺物(図22、8～16)

8～10はロクロ成形のかわらけで、8は大皿、9、10は小皿である。大皿の胎土は橙色を呈し、黒色粒子を多く含み粗い。体部が丸味を持って立ち上がる大型品である。9、10の胎土は白褐色を呈し、黒色砂粒を多く含みやや粗い。口径、底径比の小さく、体部が直立して立ち上がる器形である。11は白磁口兀皿の口縁部の小片である。胎土は白色を呈し精緻である。釉調は灰白色、半透明釉である。12は常滑窯の鳶口の壺の底部の破片である。胎土は黒灰色を呈し、白色粒子を含みやや精良である。体部は斜め方向のなで調整で、外底部は砂底である。13は研磨痕を有する常滑の体部の破片で。14は滑石製品、温石である。滑石鍋の底部を転用して制作したものである。端部に直径1cmの貫通孔を開ける。15は鉄製品、釘である。16は木製品、草履芯の上端部の小片である

方形竪穴1(図23)

X6～7・y1～3グリッドに海拔6.38mで検出された。当址の大半は調査区外西にあり、また、北側は土坑15に切られる。後世の攪乱を受け、掘り方が削平された箇所もあり、その全容を把握出来ない。検出された掘り方規模は南北200cm、東西206cm、深さは確認面より41cmを測る。側壁の立ち上がりは45.6cm、床面積は2.95㎡が遺存した。壁際に柱穴が3口検出された。Pあ、Pくは壁の土留め施設の痕跡と想定される。Pzは上屋構造の一部であろうと思われる。覆土は上層が土丹を含むしまりのない粘土層、下層が腐植土層である。軸方向はN-36°-Eである。

方形竪穴1出土遺物(図24)

図24-1、2はロクロ成形のかわらけの小皿である。胎土は橙色を呈し黒砂を含む。器高が低く、体部

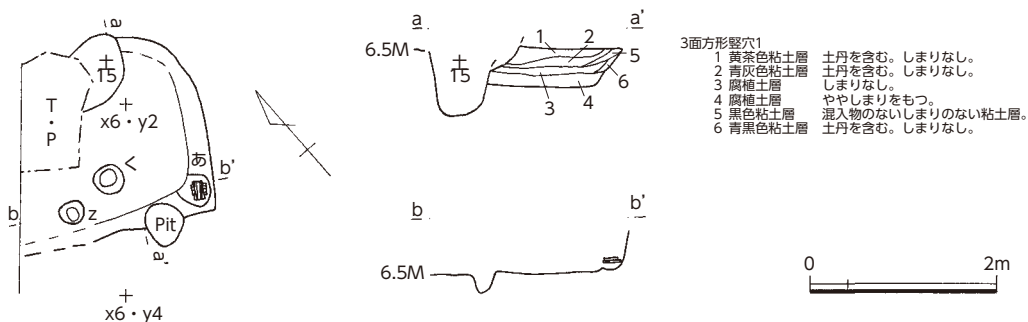


図23 方形竪穴1

は僅かに外反して立ち上がり、口唇部は丸味を持つ器形である。3～5は常滑窯の片口鉢Ⅰ類で、3、4は口縁部、5は底部である。3、4は6a型式である。3の胎土は灰色を呈し、小石、大粒長石粒子を含み粗い。外面の回転ヘラケズリの調整痕の凸凹が顕著である。口唇端部は肥厚し、丸く収める。内面の磨滅は顕著である。4の胎土は長石粒子を含

方形竪穴1柱穴寸法表

柱穴名	規模cm	深さcm	底部の海拔m	平面形	備考
Pあ	30×33	12.1	5.97	楕円形	20×12×5cm、13×14×4cmの2重礎板あり
Pく	35×30	7.5	5.8	円形	
Pz	31×25	20.8	5.71	楕円形	

み精良である。内面に厚く降灰を受ける。5の胎土は3と同様で粗い。底部の高台は剥離しており、剥離部分を研磨し平坦にして再使用したようである。6は南部系山茶碗である。尾張型6～7型式(?)。胎土は灰色を呈し黒色粒子、白色粒子、を含み比較的精良である。器肉は上方に向かい薄くなる。7は常滑窯の甕の底部である。胎土は橙色を呈し大粒長石粒子を含み粗い。内面はヘラ及び指頭による調整、底部外面は砂底である。底部に煤が多く付着している。8、9は研磨痕を有する陶片である。8は常滑窯片口鉢Ⅰ類の高台部分に研磨痕を有する。9は常滑窯甕の胴部片である。破片には漆(黒色で図示)が付着している。10、11は木製品である。10は草履芯、11は箸である。

掘立柱建物2(図25)

X6～8・y2～4グリッドに海拔6.37mで検出された。建物の北西角にあたる部分で南北1間一東西1間までが検出された。心心は210cm、底部の海拔は5.82～6.18mと幅がるが、礎板等で底部の高さを一定にして水平をたもったものと想定される。軸方向はN-25°-Eである。

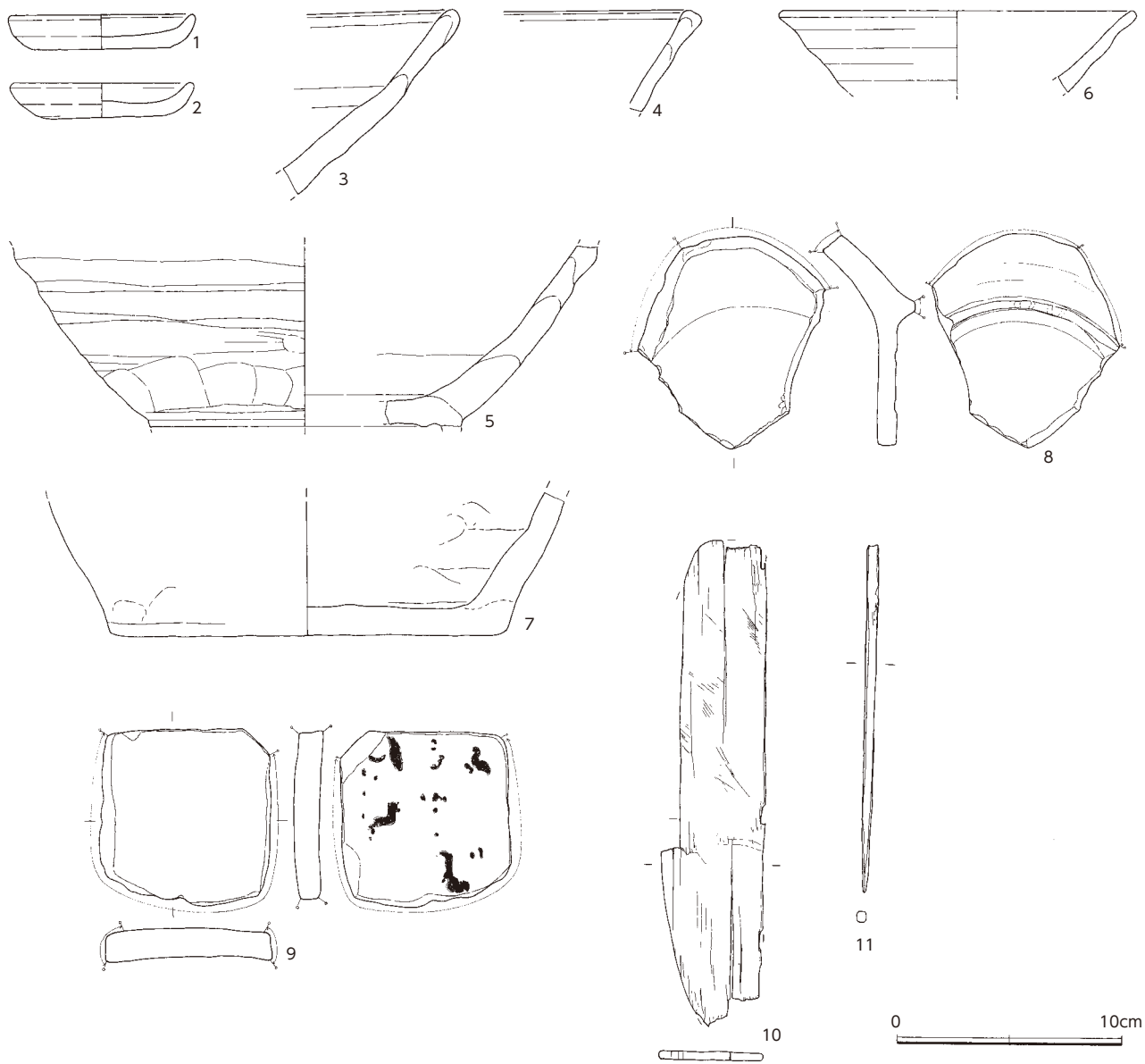


図24 方形竪穴1出土遺物

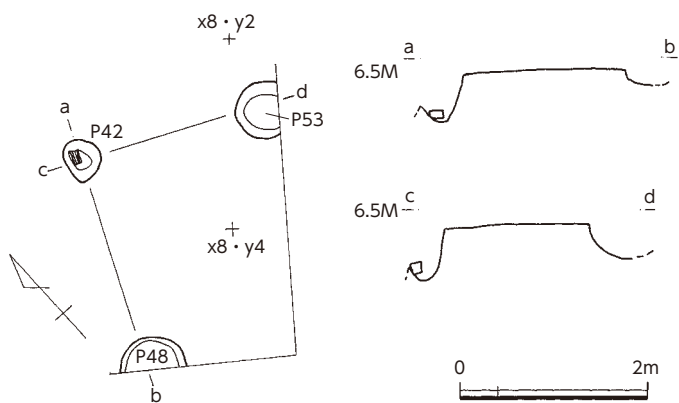


図25 掘立柱建物2

掘立柱建物2柱穴寸法表

柱穴名	規模cm	深さcm	底部の 海拔m	平面形	備考
P 42	46×38	54.7	5.82	楕円形	15×10×10cm の礎板あり
P48	35×70	12.9	6.18		南壁は調査区外
P53	50×48	38.7	5.98	楕円形	東壁は調査区外

井戸1(図26)

X2・Y1～2グリッドに海拔6.39mで検出された。井戸1の南西角にあたる部分が検出された。検出された掘り方規模は130×124cm、深さは確認面より65.5cm、底部の海拔は5.73mである。当址の中心部分は調査区外東にあると想定される。井枠等の材は検出されなかったが、おそらく抜き取られたであろうと想定される。覆土は上層が暗褐色粘質土で、土丹粒子、炭化物、かわらけ片を混入し、しまりはない。下層は黒色粘土で、木片、炭化物を含みしまらない。最下層には腐植土がたまる。

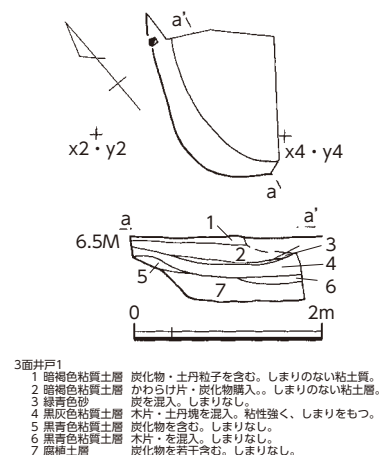


図26 井戸1

井戸1出土遺物(図27)

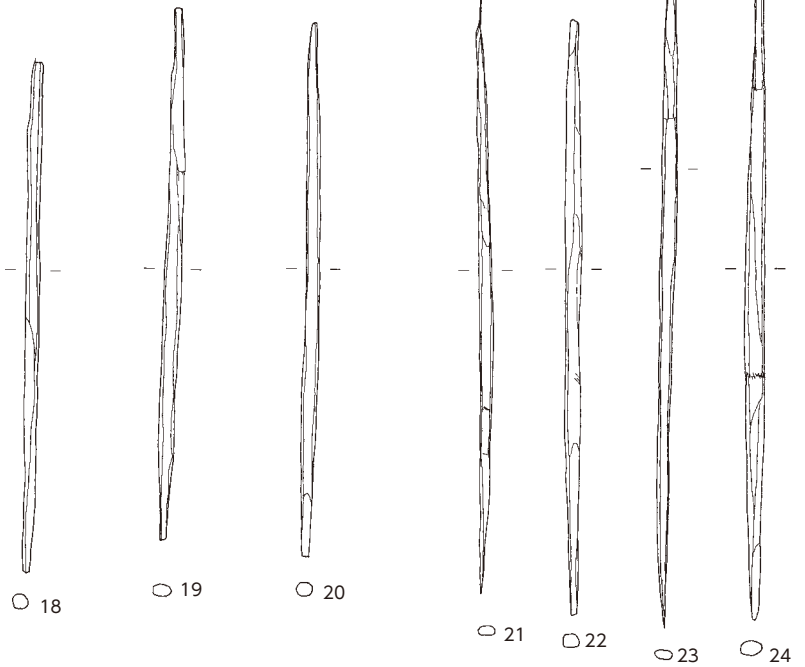
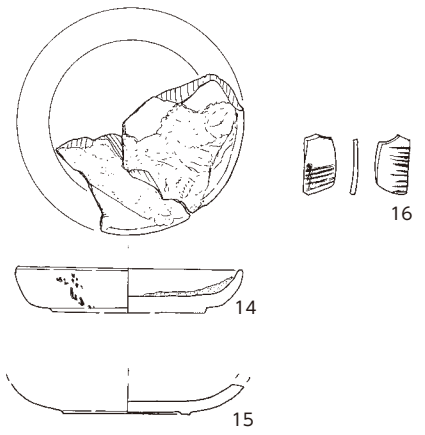
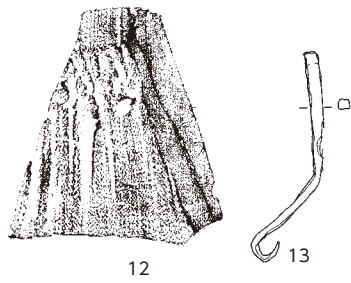
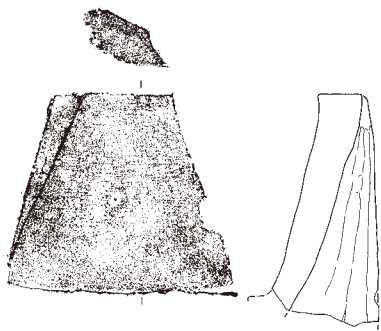
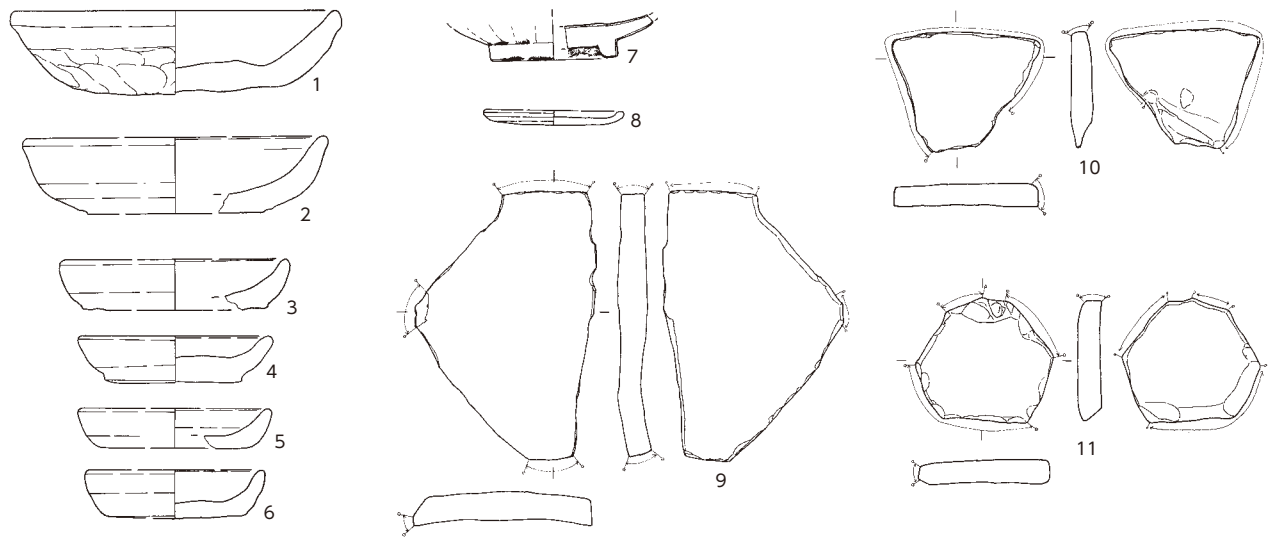
1～6はかわらけである。1、2は大皿、1は手づくね成形、2はロクロ成形である。3～6はロクロ成形のかわらけの小皿である。1の胎土は粉質であり精良ではない。外面底部の指頭の痕跡は撫でられ平底状を呈する。内底面の見込みの横ナデが明瞭である。2のかわらけの胎土は大粒粒子を交え粗い。口縁部を直口させ口唇端部を厚く丸く成形する。3は2と同様の成形方法であるが胎土は橙色を呈し精良である。4の胎土は橙色を呈し、砂粒を多く含み粗い。厚手で、体部は外反して立ち上がる。5、6の胎土は白褐色を呈し、粉質が強い。薄手で、体部は丸味を有しながら立ち上がる。7は龍泉窯鎬蓮弁文碗の底部である。胎土は灰白色を呈し、黒色粒子を含み粘性があり精緻である。釉調は灰緑色、透明度、光沢は良好である。高台内は鉄砂の塗布がある。8は瓦器質の手づくね成形の内折れの小皿である。瀬戸内東部系の産である。胎土は白色を呈し、微砂を交え精良である。9～11は研磨痕を有する陶片である。9、10は常滑甕の体部片、11は常滑片口鉢I類の体部片である。12は丸瓦の玉縁部である。胎土は暗灰色を呈する精良土で焼締まる。側縁は丁寧に面取りがなされている。13は鉄製品である。頭頂部が釘の形状をしているが、先端部が釣針状を呈する。釘を再加工したものであろうか。14～16は漆器製品である。14～15は皿、16は椀である。14は輪高台が付く。内面の漆塊はパレットとして使用した痕跡であろうか。17～24は木製品である。17は刀子の鞘の片割れで、幅3.2cm、厚さ5mm、長さは29.5cmを遺存する。18～24は箸である。全長20～26.5cmを測る。

土坑5(図28)

X1・Y3グリッドにおいて海拔6.37mで検出された。検出された掘り方規模は南北90cm、東西72cmで平面形は楕円形になる。深さは確認面より50.0cmを測る。覆土は上層が茶色粘土で炭化物を含みしまりはない。下層は灰褐色粘質土層で木片を含む。

土坑6(図28)

X1・Y1グリッドにおいて海拔6.41mで検出された。当址の北側は調査区外北にある。検出された掘り方規模は南北67cm、東西70cmで、深さは確認面より16.8cmを測る。平面形は隅丸方形になると想定される。



0 10cm

图27 井戸1出土遺物

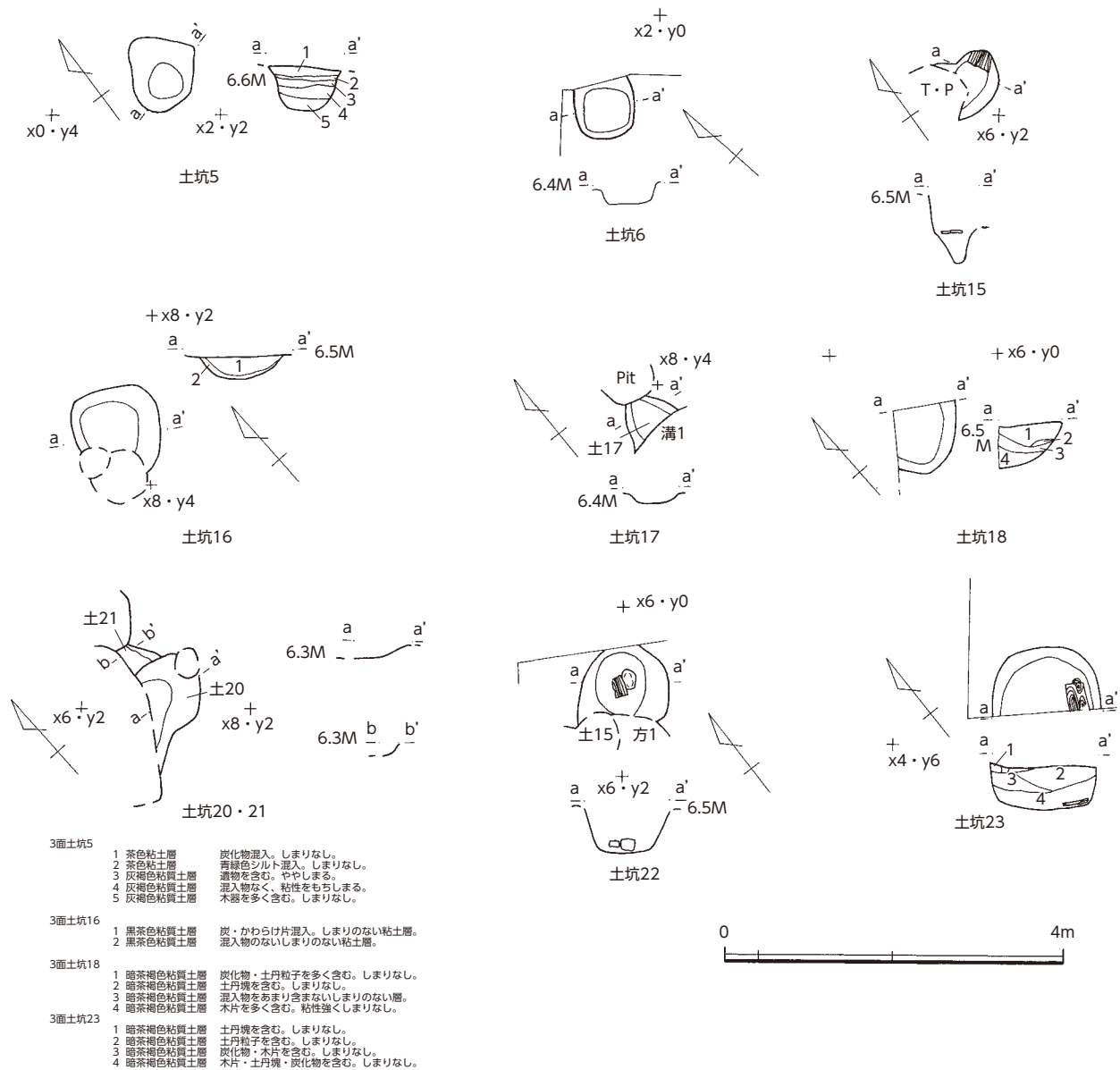


図28 土坑5・6・15～18・20～23

土坑15(図28)

X5・Y1グリッドにおいて海拔6.40mで検出された。当址の西側はT・Pに切られる。検出された掘り方規模は南北90cm、東西52cmで、深さは確認面より64.3cmを測る。北壁に2枚の板が遺存した。17×12×2.7cm、21×18×3.4cmである。

土坑16(図28)

X7・Y3グリッドにおいて海拔6.39mで検出された。当址の西側はP t、及びP uに切られる。検出された掘り方規模は南北75cm、東西105cmで深さは確認面より23.5cmを測る。覆土は黒茶色粘質土層で、炭、かわらけ片を含み粘性強くしまりはない。

土坑17(図28)

X7・Y4グリッドにおいて海拔6.34mで検出された。当址の南側は溝1、北側はP uに切られる。検出

された掘り方規模は南北35cm、東西47cmで深さは確認面より16.1cmを測る。

土坑18(図28)

X4～5・Y0～1グリッドにおいて海拔6.40mで検出された。当址は調査区北西角に検出されたため、その主体は調査区外にある。検出された掘り方規模は南北43cm、東西35cm深さは確認面より43.6cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土層で、炭化物、土丹粒子を含み粘性強くしまりはない。下層には木片が多く含まれる。

土坑20(図28)

X6・Y1グリッドにおいて海拔6.32mで検出された。当址の東側は溝2、北側は土坑21、西側は方形竪穴1に切られる。検出された掘り方規模は南北35cm、東西27cmで深さは確認面より17cmを測る。

土坑21(図28)

X6～7・Y1～2グリッドにおいて海拔6.26mで検出された。当址の西側は方形竪穴1に切られる。検出された掘り方規模は南北140cm、東西65cmで、深さは確認面より19.6cmを測る。

土坑22(図28)

X5～6・Y0～1グリッドにおいて海拔6.39mで検出された。当址の南側は土坑15、及び方形竪穴1に切られる。北壁は僅かに調査区外北側にある。検出された掘り方規模は南北85cm、東西105cmで深さは確認面より48.8cmを測る。底部に伊豆石(24×14×12.7cm)、板材(24×12×3.5cm)が検出された。

土坑23(図28)

X5～6・Y4～5グリッドにおいて海拔6.41mで検出された。当址の主体は調査区外南にある。検出された掘り方規模は南北77cm、東西107cmで深さは確認面より53.0cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土層で、炭化物、土丹塊、木片を含み、粘性強くしまりはない。

土坑5出土遺物(図29-1、2)

1はロクロ成形のかわらけの大皿である。大粒泥岩粒を含む粗胎である。内面の見込みの横ナデが非常に強い。また、外底面は板の圧痕が強く残る。2は常滑窯の片口鉢I類である。6a型式である。胎土は灰色を呈し長石粒子を多く混入し粗い。内面に薄く降灰する。

土坑6出土遺物(図29-3)

3はロクロ成形のかわらけの小皿である。胎土は微砂を多く含み精良である。体部を真直ぐ立ち上げる器高の低い皿型を呈する。

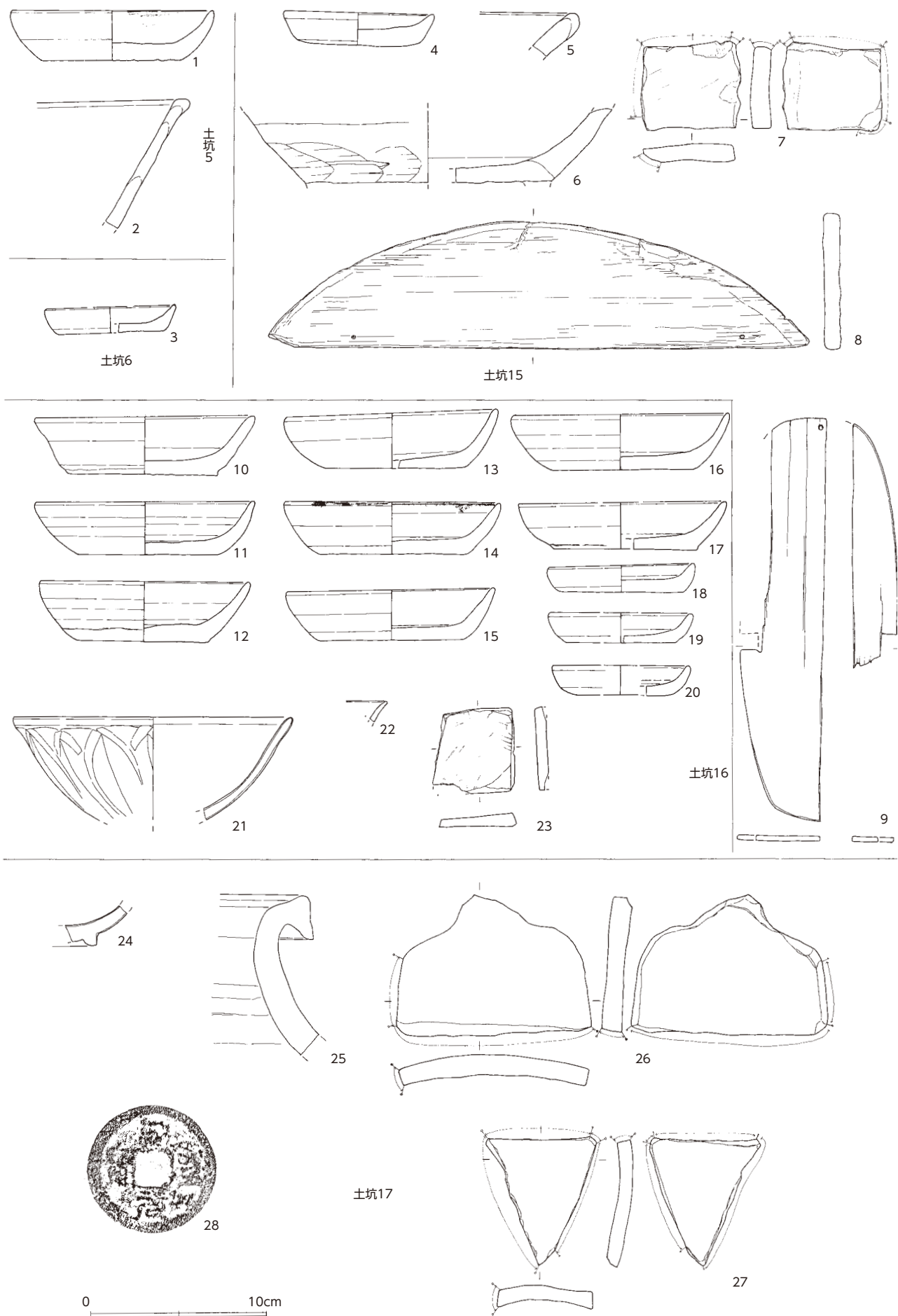


图29 土坑5·6·15~17出土遗物

土坑15出土遺物(図29-4~9)

4はロクロ成形のかわらけの小皿である。胎土は黒色粒子を多く含む粉質土である。器肉が厚く、体部を僅かに底部から立ち上げる。5、6は常滑窯片口鉢Ⅰ類である。5は口縁部で6a型式である。胎土は灰色を呈し、長石粒子、小石を多く含む。6は底部である。胎土は灰色を呈し長石粒子を含み比較的精良である。高台が剥がれた状態である。内面は滑らかで、重ね焼き痕が環状に残る。内面全体に降灰を受ける。7は研磨痕を有する常滑の甕体部片である。8、9は木製品で8は蓋、9は草履芯である。8の厚さは均一であり、直径3mm、4mmの孔が2つある。また周囲に分まわしの切り印が残る。9の全長は22.8cmを測る。

土坑16出土遺物(図29-10~23)

10~20はロクロ成形のかわらけである。10~17は大皿、18~20は小皿である。大皿の胎土は概ね橙色を呈し、粉質、薄手である。体部は丸味を有するもの、直線的なものと両様ある。10の胎土は砂粒を多く交える。体部は外反して直線的に立ち上げ、厚手である。14は灯明皿である。小皿の胎土は白褐色を呈し粉質、また薄手である。体部は底部から丸味を持って短く立ち上がる。18は器肉が厚く、直線的な体部であり、若干様相が異なる。21、22は磁器、21は龍泉窯青磁鎚蓮弁文碗、22は青白磁の小皿の口縁部である。21の胎土は灰色を呈し、黒色粒子を含み精緻である。釉調は灰緑色、光沢は良好である。22の胎土は白色を呈し、精良である。釉調は水青色、透明度、光沢は良好である。23は砥石で鳴滝産の頁岩、仕上砥である。板状摂理されたもので断面に鉄分が付着している。

土坑17出土遺物(図29-24~28)

24は龍泉窯青磁鎚蓮弁文碗の底部である。胎土は灰白色を呈し黒色粒子を含み精緻である。釉調は灰緑色、透明度、光沢は良好である。高台内は露胎である。25は常滑窯の甕、6b型式である。胎土は暗灰褐色を呈し長石粒子を多く含む。外面全体に厚く降灰している。26、27は研磨痕を有する常滑の甕の体部の破片である。28は北宋銭、紹聖元寶である。

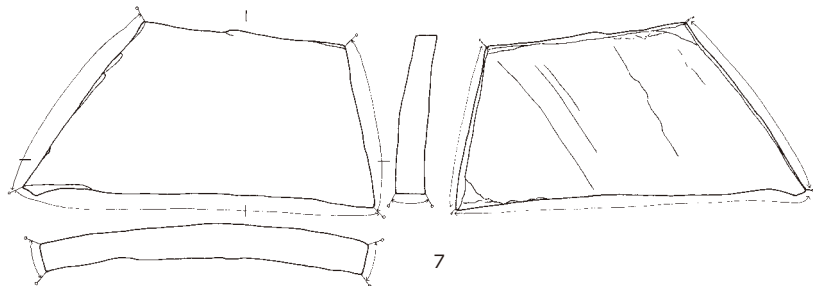
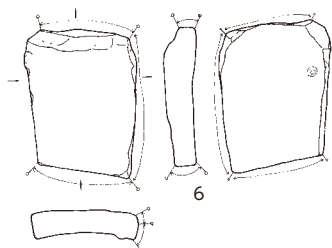
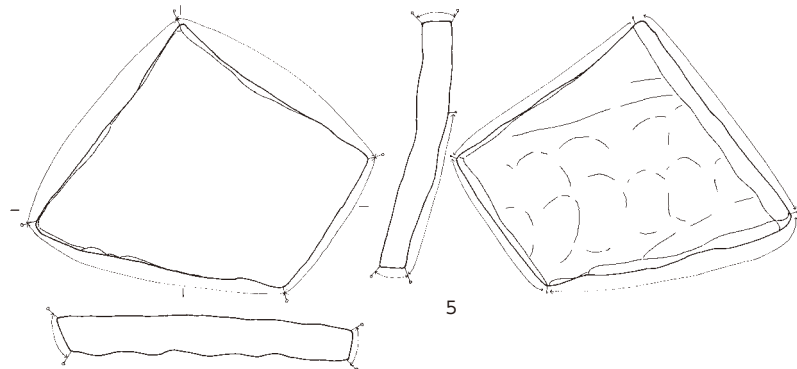
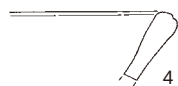
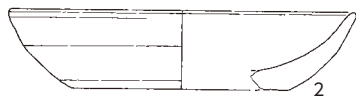
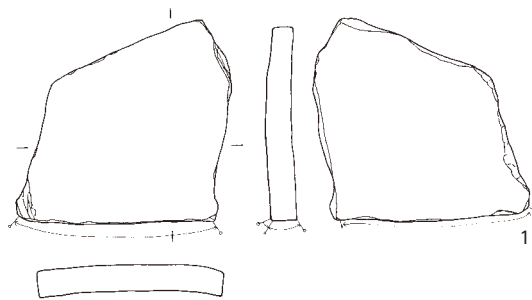
土坑18出土遺物(図30-1)

1は研磨痕を有する常滑の甕の体部の破片である。

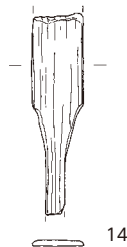
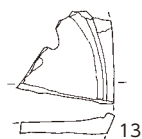
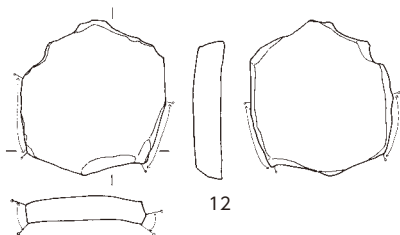
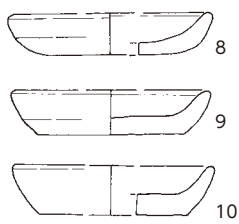
土坑21出土遺物(図30-2~7)

2、3はかわらけである。2はロクロ成形のかわらけの大皿である。胎土に大粒泥岩粒を混入し器表が荒れる。また、炭化物の付着、肌荒れが見られ被災したと思われる。3は手づくね成形のかわらけの小皿である。胎土は橙色を呈し、粉質で精良である。丁寧なナデ成形である。4は常滑窯片口鉢Ⅰ類の口縁部、6a型式である。胎土は灰色を呈し長石粒子、小石を多く含む。口縁端部に少し降灰を受ける。5~7は研磨痕を有する陶片である。5、6は常滑窯の甕の体部片、7は渥美の甕の体部片である。

土坑



土坑21



0 10cm

土坑22

图30 土坑18·21·22出土遺物

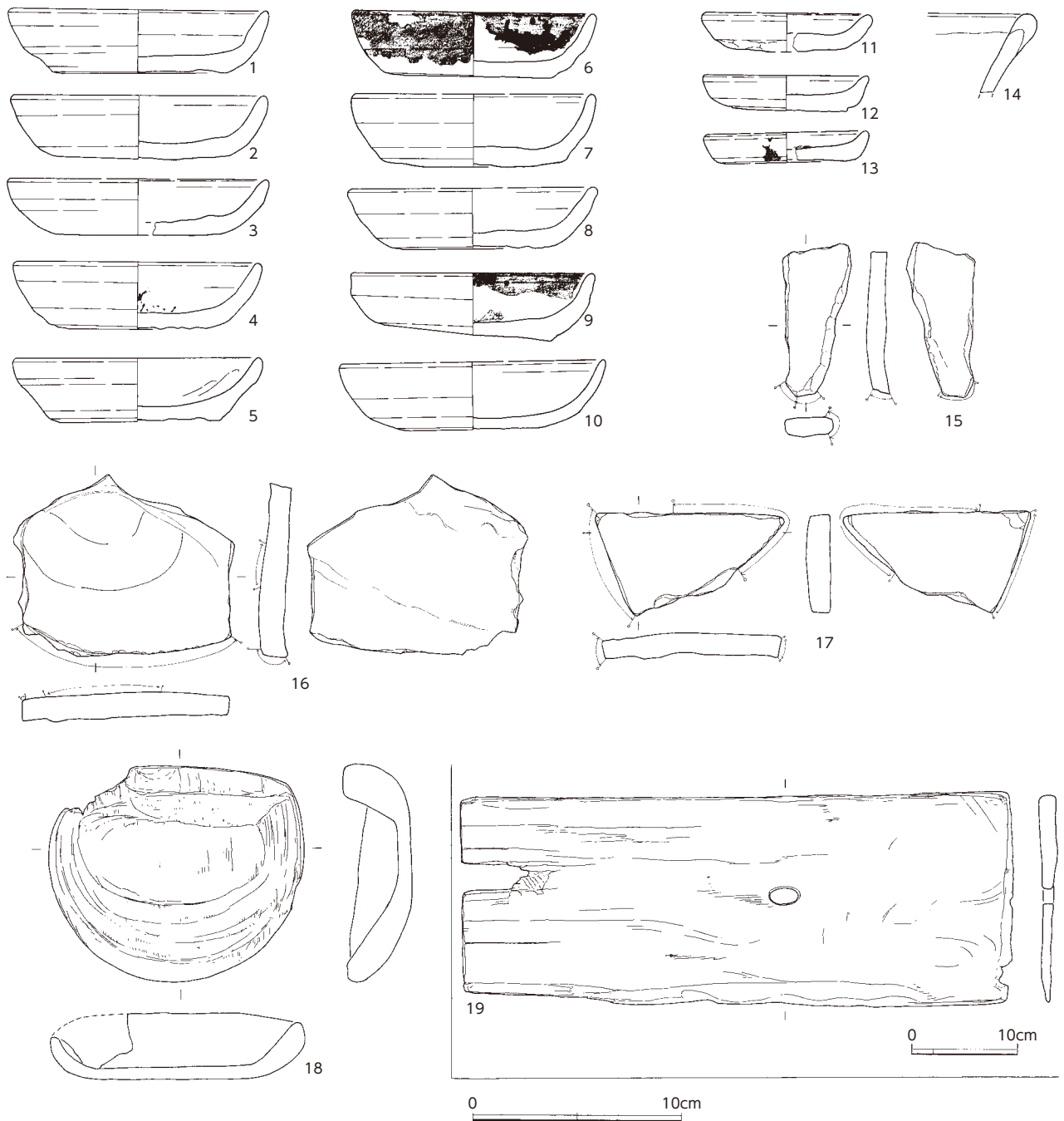


図31 土坑23出土遺物

土坑22出土遺物(図30-8~16)

8、9、10はロクロ成形のかわらけの小皿である。胎土は白褐色及び淡橙色を呈し、微砂を交えるが粉質で比較的精良である。焼成は概ね良好である。口径は8cmに満たない。11は手づくね成形の白かわらけである。胎土は白色を呈し精緻である。器表は滑らかで焼成は非常に良好である。灯明皿である。12は研磨痕を有する常滑の甕の体部片である。13は硯、頁岩、雄勝玄昌石製である。非常に粘性があり黒光りをしている。四葉硯で、硯頭に近い右側面の部分である。14~16は木製品である。14は形代、羽子板、15は杓文字、16は箸である。

土坑23出土遺物(図31)

1～13はかわらけである。1～10はロクロ成形の大皿である。11～13は小皿である。1～7の胎土は概ね橙色を呈し砂粒を多く交える。8～10の胎土は粉質で精良である。大皿は概ね器肉が厚く器高は概ね3cm前後にまとまる。10は非常に精緻な胎土で薄手丸深である。小皿の胎土は白褐色を呈し砂質で精良である。11は手づくね成形である。外面底部の指頭痕はナデ消されている。12、13はロクロ成形である。器肉の厚い底部から体部を低く直立して立ち上げる。6、9、13は灯明皿である。14は常滑窯片口鉢Ⅰ類、6a型式である。胎土は灰色を呈し、長石粒子を多く含み粗い。口唇部に若干降灰を受ける。15～17は研磨痕を有する常滑の甕の体部である。18、19は木製品である。18は下を平らに成形して底部を造り出し、割りぬいて容器状にしている。用途は不明である。19は長さが57.2cmと長く俎板状であるが中央に穴を穿っている。用途不明品である。

3面柱穴寸法表：単位cm

柱穴名	規模cm	深さcm	底部の海拔m	平面形	備考	柱穴名	規模cm	深さcm	底部の海拔m	平面形	備考
P2	40×40以上	30	6.05		南壁調査区外	P52	35×40	28.1	6.08	隅丸方形	
P3	35×20以上	15.5	6.25		2面の遺構に切られる	P54	30×30	30.6	6.05		P sに切られる
P5	40×40以上	10.5	6.27	隅丸方形		P r	25×35	10.5	6.13	楕円形	
P6	50×45	25.5	6.16	隅丸方形		P s	33×38	40	5.94	楕円形	
P10	45×42	51.5	5.84	楕円形	礎板(20×12×2、17×12×2.5、12×4×4)有り	P t	35×38	45.1	5.91	楕円形	
P11	45×25以上	12.5	6.24		P 10に切られる	P u	65×65	32.6	6.02		P tに切られる
P o	30×15	24.2	6.11		2面の遺構に切られる	P v	22×25	27.3	6.09	円形	
P p	22×22	37.8	5.99	円形		P x	45×17以上	25	6.11		方1に切られる
P 39	45×50以上	52.4	5.83		P おに切られる	P あ	25以上×30以上	20.2	6.16		土 21、20に切られる 杓文字出土
P 44	35×23以上	20.1	6.16		P 42に切られる	P い	30×15以上	8.7	6.32		北壁は調査区外
P45	33×30	26.1	6.11	楕円形		P う	30×25	15.5	6.18	楕円形	

P47	30×25	15.4	6.16	楕円形	礎板(13×8×5)あり	Pえ	20×20	27.2	6.08	楕円形	
P49	45以上 ×45以上	26	6.07		東壁調査区 外溝1に 切られる	Pお	25×13 以上	2.8	6.32		礎石(伊豆 石20×8 ×7.4)北壁 は調査区外
P50	40×30	21.1	6.12	三角形		Pか	27×25	18.6	6.2	円形	

柱穴群

28口検出された。出土遺物があったものを算用数字、遺物が出土しなかったものをアルファベット、及びひらがなで名称とした。

柱穴の寸法は概ね35cm～45cm前後で、平面形が楕円形を呈するものが主体である。底部の海拔は6.2m前後、6.0m前後、5.8前後と3種類に分別される。3面で検出された掘立柱建物2の軸、及び底部のレベルを基準として柱穴の組み合わせを試行してみたが構築物を発見することは出来なかった。

3面出土遺物(図32、33)

1～18はロクロ成形のかわらけである。1～6は大皿、7～18は小皿である。胎土は概ね粉質で、若干砂を交える精良土である。1、6は腰のすぼまった器形、2～4は器壁が厚く、体部に丸味を持って立ち上がる器形、5は器壁が薄く外反して真直ぐ立ちあがっている。小皿の口径は7～9cmあたりと幅がひろいが、8cm以上のものが主流である。19～21は龍泉窯の青磁である。19は鎚蓮弁文碗である。胎土は灰色を呈し黒色粒子を含み精緻である。釉調は緑茶褐色透明度、光沢は良好である。器表は粗く貫入する。20は無文碗である。胎土は灰色を呈し黒色粒子を含む。釉調は緑灰褐色、透明度は良好であるが、被災のため光沢はない。器表の貫入が顕著である。21は折腰皿。胎土は暗緑色を呈し精良である。釉調は不透明な暗緑色で光沢は良好である。22は白磁の口兀皿の小片である。胎土は白色を呈し黒色粒子を含む。光沢、透明度は良好である。23は青白磁印花文合子の蓋である。胎土は白色を呈し僅かに黒色粒子を含み精緻である。釉調は水青色、光沢、透明度良好である。合わせ口は釉を搔く。文様は不明であるが、口縁部に珠文が巡る。24は象嵌の高麗青磁である。器種は不明であるが体部の小片と思われる。胎土は灰色を呈し、精緻でやや粘性を帯びる。鶴文が確認され、白色土で羽、黒色土で足を表現している。25は黒褐釉の小壺、又は肩衝の茶入れである。産地は不明である。胎土は茶褐色を呈し非常に精緻で焼成は良好である。薄作りで、光沢のある黒褐釉を施釉している。26は泉州窯、鉄絵の黄釉の盤である。胎土は灰色を呈し砂粒を含みやや粗い。内面底部の文様は小片のため不明である。

27は瀬戸窯の灰釉水注の口縁部の小片である。胎土は灰白色を呈し黒色粒子を含み粗い。裏側は露胎である。28～30は常滑窯片口鉢Ⅰ類、6a型式である。概ね胎土は灰色を呈し長石粒子を多く混入しざっくりと粗い。内面に降灰を受ける。31、32は山茶碗である。31は南部系、第7型式である。胎土は灰色を呈し長石粒子を含む。体部の稜線は撫でられ不明である。32は東遠型13世紀初頭である。胎土は灰色を呈し非常に精緻である。内面の体部の立ち上がりは丸味を帯びる。外面全体に降灰を受ける。33～36は常滑窯の製品である。33、34は甕の口縁部、35は片口鉢Ⅱ類の口縁部である。3点共に5型式である。33の胎土は灰色を呈し長石粒子を多く含む。内面全体に厚く降灰を受ける。34の胎土は灰褐色を呈し微長石粒子を多く含む。外面に降灰を受ける。35の胎土は橙色を呈し微長石粒子を含み比較的精良である。

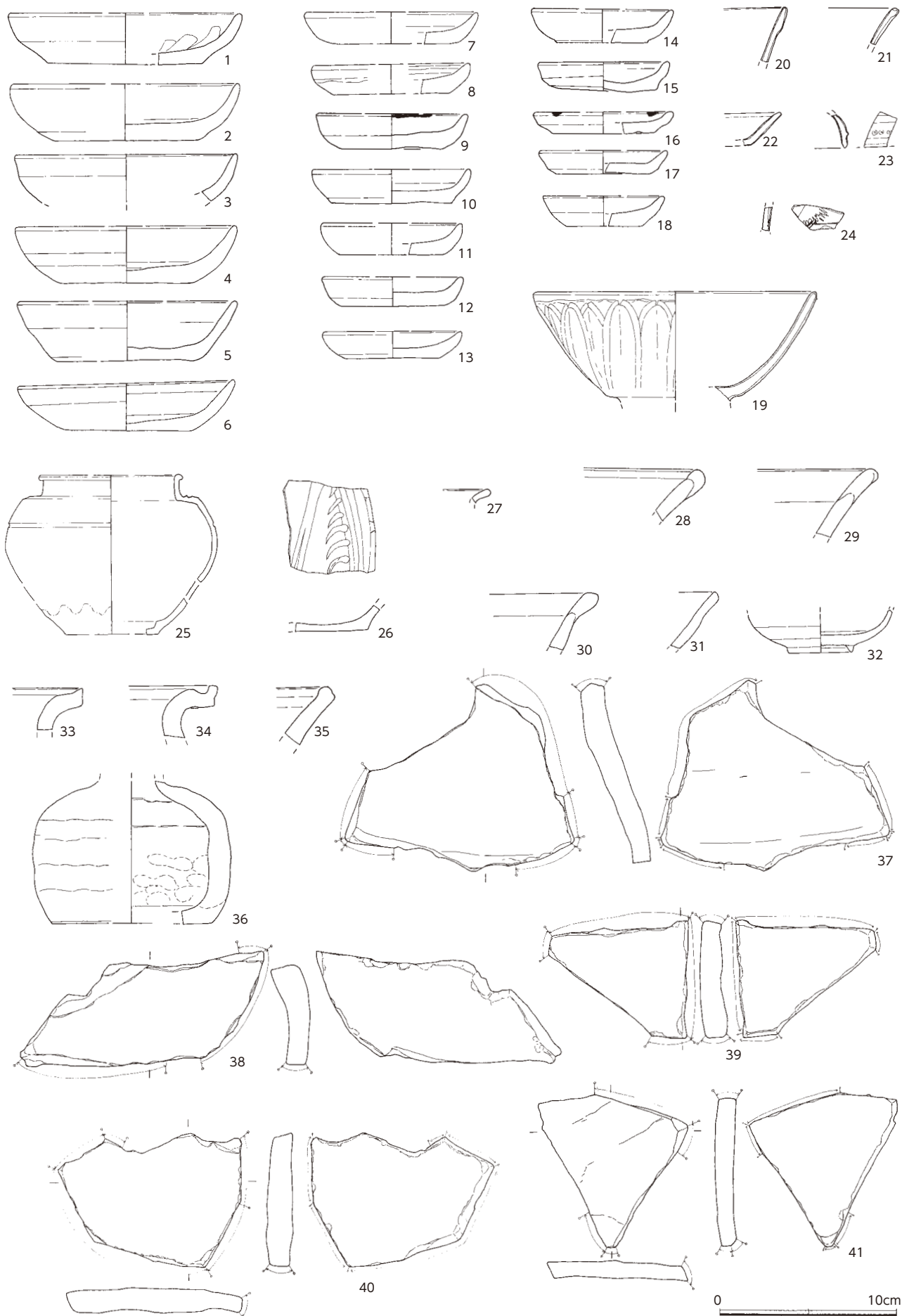


图32 3面出土遺物(1)

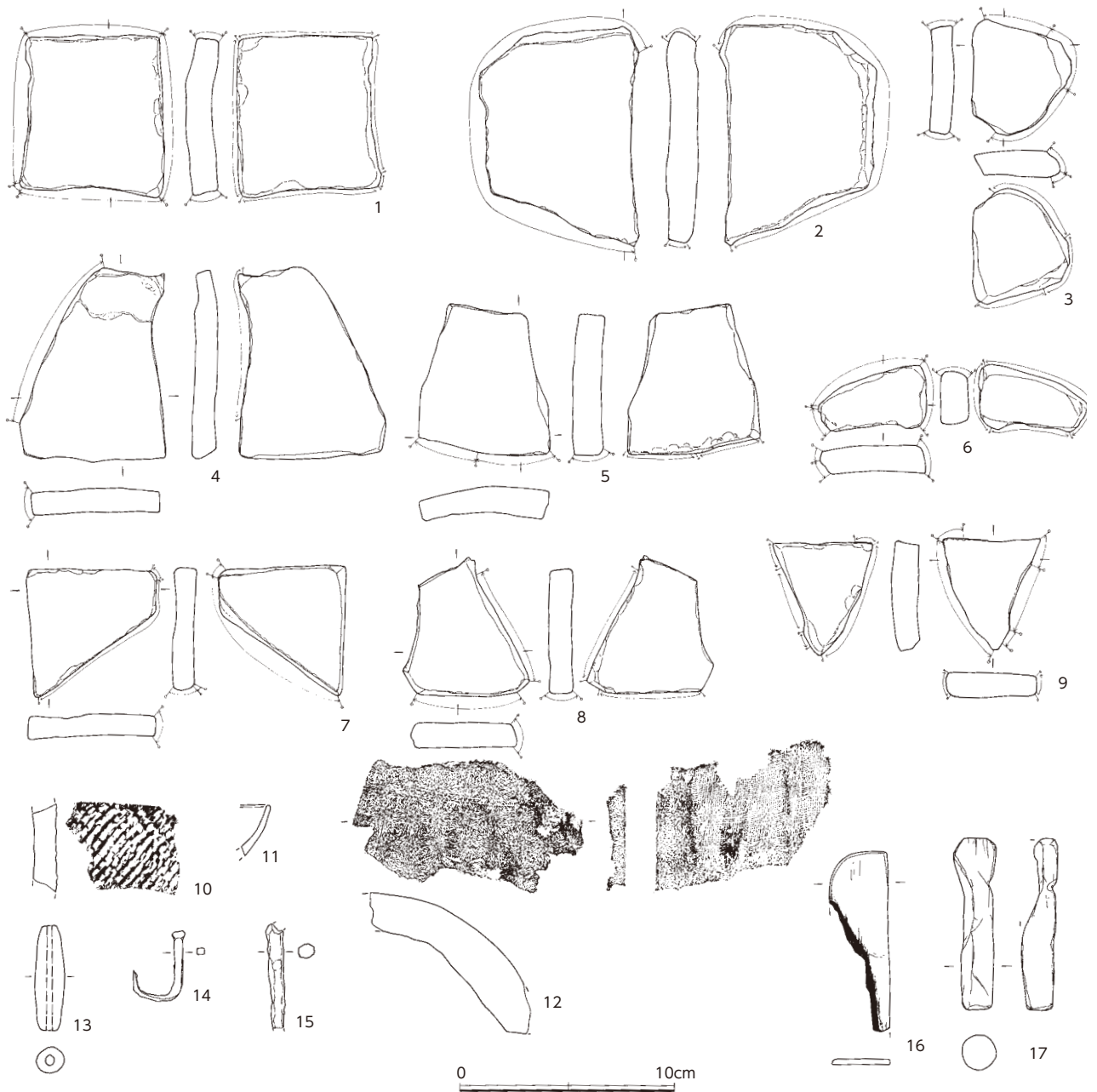


図33 3面出土遺物(2)

内面に薄い降灰を受ける。36は鳶口壺で口縁部を欠損する体部である。胎土は黒灰色を呈し小石、長石粒子を含み粗い。体部の調整はヘラなどで、外底面はへらけずり調整である。内面上方に煤の付着がある。また、肩部に降灰している。37～41、図33-1～9は研磨痕を有する常滑の甕の体部片である。10は亀山窯の甕の体部片である。胎土は灰色を呈し白色粒子を含み軟質である。体部外面は格子叩き目、内面の叩きは撫でられている。11はロクロ成形の白かわらけの口縁部の小破片である。胎土は白色を呈する。12は丸瓦である。胎土は灰色を呈し、砂粒を多く含む。凸面の叩きは撫でられるが、凹面には布目の圧痕がある。13は土錘である。かわらけ質の胎土で橙色を呈し、焼成は良好で非常に焼しめる。14、15は鉄製品、釘である。14は先端が曲がっているが完形品である。全長7.4cm、太さ0.4×0.5cmを測る。16、17は木製品である。16はミニチュアの杓文字、その半分が欠損しており、また周囲が焦げている。17は形代で人形である。頭部と体部からなる。出土遺物の様相から13世紀後半～末葉の様相であると想定される。

第4節 中世第4面（図34）

中世第4面は海拔6.08～6.16m前後で検出された。中世第3面下20cm、黒褐色粘質土層上の生活面である。また中世の基盤層となる層位である。遺構面は平坦であり3面同様に遺構面全体に柱穴が拡がりをみせる。それは数次に及んで建て替えた居住空間の主体部をなす建物であった様相を呈する。検出遺構は掘立柱建物6軒、井戸1基、土坑4基、柱穴67口である。掘立柱建物はほぼ同位置に建て替えられており、切り合い関係から3時期あった模様である。井戸は調査区北東角に検出されたため、その大半は調査区外にある。

以下、各遺構の詳細を述べる。

掘立柱建物3(図35)

X1～6・y1～4グリッドに海拔6.12mで検出された。建物の東西、南北のそれぞれの2間分(16㎡)が検出された。掘立柱建物4、掘立柱建物6と切り合い関係を持ち、当址が一番あたらしい。心心は200cm、底部の海拔は5.97～6.12mで15cmの比高差を持つが礎板により十分調整可能である。

南北の軸方向はN-27°-Eで、3面時とほぼ同方向を示す。

掘立柱建物3 N-27°-E

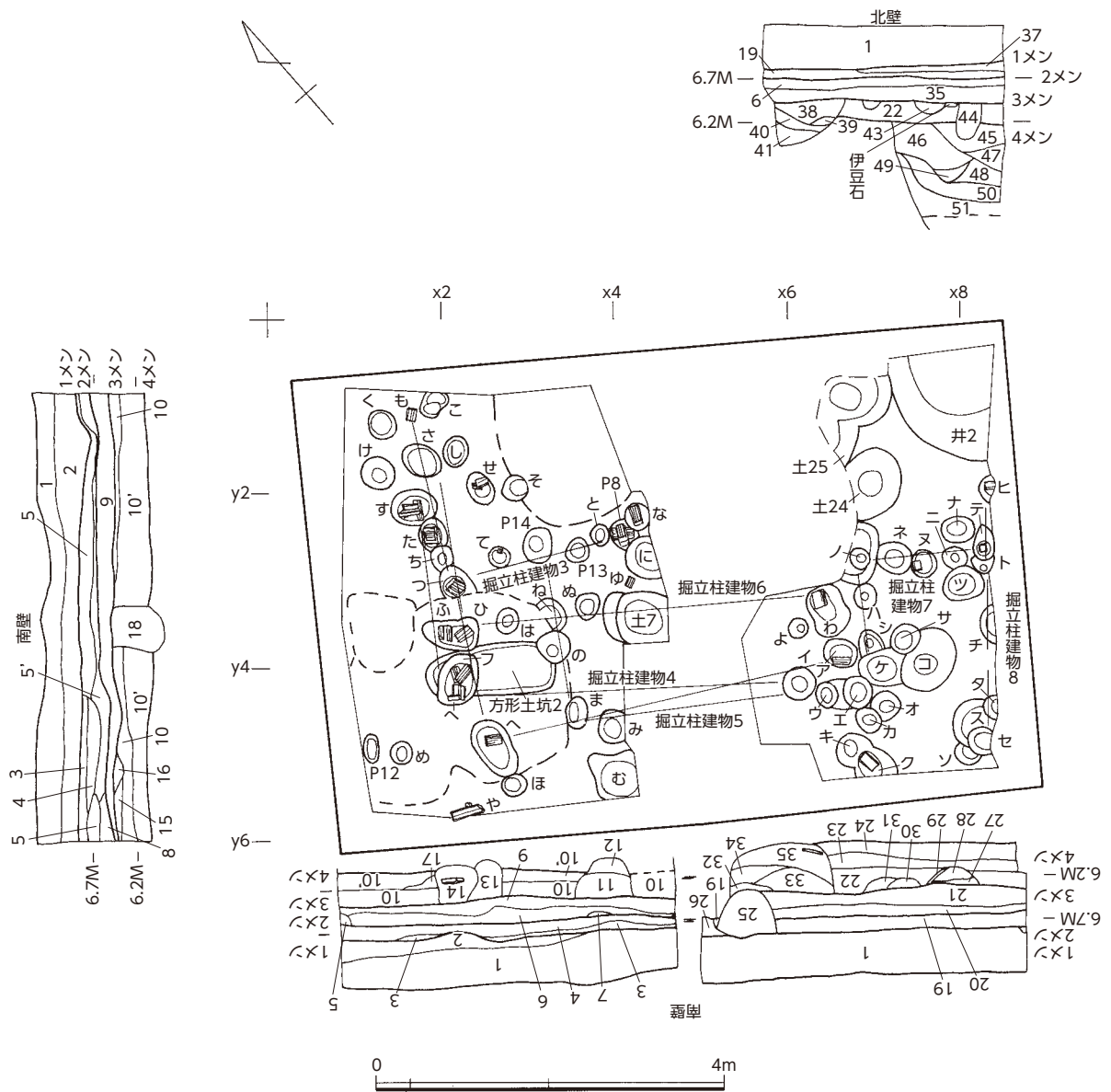
柱穴名	規模cm	深さcm	底部の海拔m	平面形	備考
Pも			6.12		礎板 15×9.3×2.9
Pつ	35×35以上	7.5	6.03, 6.09(礎板)	楕円形	礎板 12.3×7.0×5.0
Pへ	70×40	12.5	5.8	楕円形	礎板 21.9×7.3×3.3
Pと	24×20	13.5	5.92	楕円形	
Pア	39×25	19.5	5.93, 5.97(礎板上)	楕円形	礎板 22×8.3×7.9

掘立柱建物4(図35)

X1～4・y2～4グリッドに海拔6.09mで検出された。建物の東西2間一、南北1間分(8㎡)が検出された。掘立柱建物3、掘立柱建物6と切り合い関係を持ち掘立柱建物3に切られる。心心は210cm、底部の海拔は5.71～5.97mで26cmの幅を持つが礎板により調整したと想定される。南北の軸方向はN-38°-Eで、3面時、及び掘立柱建物3より10°近く東の方向にずれる。

掘立柱建4 N-38°-E

柱穴名	規模cm	深さcm	底部の海拔m	平面形	備考
Pす	52×40	21.0	5.88, 5.97(礎板上)	楕円形	礎板 20×7.9×3.8, 20×6.5×1.0, 5.0×12.6×6.0
Pへ	45×22	14.0	5.71, 5.76(礎板上)	円形	Pつと切り合う礎板 17.5×10.4×3.3 17.5×10.5×3.5
Pイ	37×40	19.8	5.88	円形	



調査区壁土層注記

- | | | |
|--|---|--|
| <p>1 表土層
2 中世遺物包含層
3 土丹地形層(1面構成土)
4 茶褐色粘質土層(1面構成土)
5 茶褐色粘質土層(1面構成土)
5' 茶褐色粘質土層(1面構成土)
6 土丹地形層21面構成土)
7 茶褐色粘質土層(2面柱穴)
8 黒茶色粘質土層(1面構成土)
9 茶褐色粘質土層(2面構成土)
10 茶褐色粘質土層(3面構成土)
10' 茶褐色粘質土層(3面構成土)
11 黒褐色粘質層(3面土坑)
12 黒褐色粘質層(3面土坑)
13 茶褐色粘質土層(3面土坑)
14 茶褐色粘質土層(3面土坑)
15 茶褐色粘質土層(3面土坑)
16 茶褐色粘質土層(3面柱穴)
17 茶褐色粘質土層(3面構成土))
18 茶褐色粘質土層(3面土坑5)
19 茶黄色砂質土層(1面構成土)
20 明茶色粘土層(2面構成土)
21 明茶色粘土層(2面構成土)
22 明茶褐色粘質土層(3面構成土)
23 明茶褐色粘質土層(3面構成土)
24 明茶褐色粘質土層(3面構成土)
25 茶色粘土層(1面柱穴)</p> | <p>26 茶色粘土層(1面柱穴)
27 暗褐色粘質土層(3面溝1)
28 暗褐色粘質土層(3面溝1)
29 灰色砂(3面溝1)
30 茶褐色粘質土層(3面柱穴)
31 茶褐色粘質土層(3面柱穴)
32 暗褐色粘質土層(3面土坑23)
33 暗褐色粘質土層(3面土坑23)
34 暗褐色粘質土層(3面土坑23)
35 暗褐色粘質土層(3面土坑23)
36 暗褐色粘質土層(3面土坑23)
37 茶色砂質土層(1面方形堅穴遺構)
38 暗茶褐色粘質土層(3面土坑22)
39 暗茶褐色粘質土層(3面土坑22)
40 暗茶褐色粘質土層(3面土坑22)
41 暗茶褐色粘質土層(3面土坑22)
42 明茶褐色粘質土層(3面柱穴)
43 明茶褐色粘質土層(3面柱穴)
44 黒茶色粘質土層(3面柱穴)
45 黒褐色粘質土層(4面井戸2)
46 黒褐色粘質土層(4面井戸2)
47 黒褐色粘質土層(4面井戸2)
48 黒褐色粘質土層(4面井戸2)
49 黒色粘質土層(4面井戸2)
50 黒褐色粘質土層(4面井戸2)
51 黒褐色粘質土層(4面井戸2)</p> | <p>1~2cm大の土丹を含む。しまる。
炭化物混入。粘性強くしまりなし。
混入物のないしまりのない粘土層。
かわらけ片・常滑片混入。しまりなし。
混入物のないしまりのない粘土層。
土丹塊を含む。しまりなし。
土丹塊を含む。しまりなし。
炭化物・木片を含む。しまりなし。
炭化物・木片・土丹塊を含む。しまりなし。
炭化物・土丹粒子を含む。粘性あり。ややしまる。
褐鉄分が多い。しまり良好。
炭化物・土丹粒子を含む。粘性あり。ややしまる。
土丹塊を含む。しまりなし。
混入物のないしまりのない粘土層。
炭化物混入。しまりなし。
混入物のないしまりのない粘土層。
炭化物を多く含む。しまりなし。
炭化物を含む。しまりなし。
炭化物・土丹粒子を含む。粘性あり。ややしまる。
木片を含む。しまりなし。
土丹粒子・貝片を含む。
黒色粘土を含む。しまりなし。
粘性強くしまる。
木片を含む。しまりなし。
炭化物混入。しまりなし。</p> |
|--|---|--|

図 34 4面遺構配置図

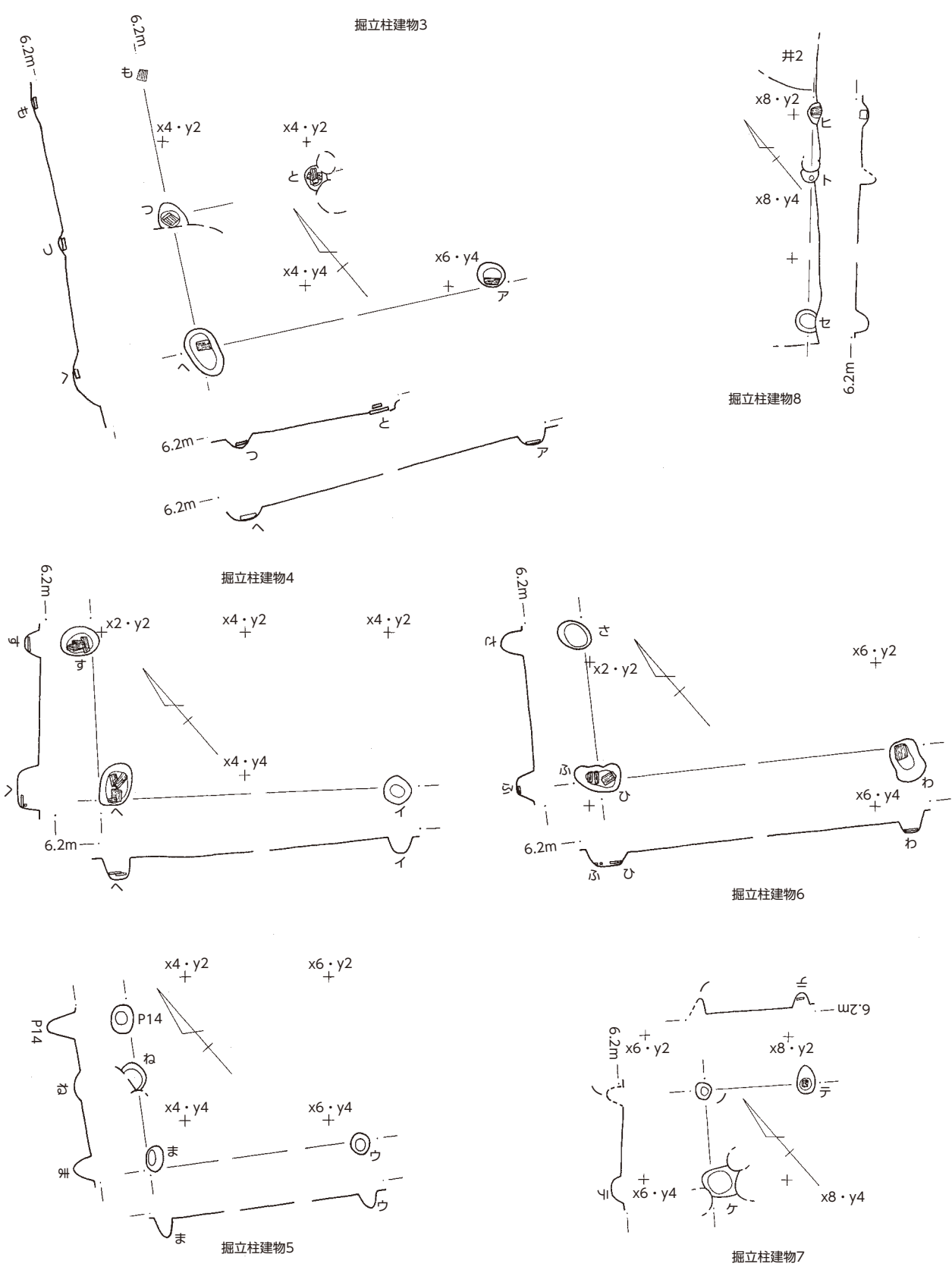


図35 掘立柱建物3～8

掘立柱建物5(図35)

X4～6・y2～4グリッドに海拔6.11mで検出された。建物の東西3間一、南北2間分(6㎡)が検出された。心心は100cm、底部の海拔は5.75～6.03mで28cmの比高差を持つが礎板により調整したと想定される。南北の軸方向はN-33°-Eである。

掘立柱建物5 N-33°-E

柱穴名	規模cm	深さcm	底部の海拔m	平面形	備考
P14	39×34	36.0	5.75	隅丸方形	
Pね	45×25以上	11.0	6.03		3面の遺構に壊される
Pま	40×25	27.5	5.84	楕円形	
Pウ	24×30	26.1	5.83	楕円形	

掘立柱建物6(図35)

X1～6・y1～3グリッドに海拔6.11mで検出された。建物の東西2間一、南北2間分(8㎡)が検出された。心心は200cm、底部の海拔は5.80～5.92mで12cmの比高差を持つが礎板により調整可能な数値である。

南北の軸方向はN-34°-Eである。

掘立柱建物6 N-34°-E

柱穴名	規模cm	深さcm	底部の海拔m	平面形	備考
Pさ	45×40	30.8	5.8	楕円形	
Pふ	35×32	3.0	5.85、5.87(礎板上)	楕円形	Pひと切り合う、礎板18×5.5×3.3 16×4.9×3.2
Pひ	30×40	16.0	5.82、5.92(礎板上)		Pふと切り合う、礎板18×10×3.2
Pわ	60×45	17.8	5.80、5.88(礎板上)	楕円形	礎板 20×14.3×3.7

掘立柱建物7(図35)

X6～8・y2～4グリッドに海拔6.07mで検出された。建物の東西1間一、南北1間分(1㎡)が検出された。心心は100cm、底部の海拔は5.89～6.01mで12cmの比高差を持つが礎板により調整可能な数値である。

南北の軸方向はN-36°-Eである。

掘立柱建物7 N-36°-E

柱穴名	規模cm	深さcm	底部の海拔m	平面形	備考
Pノ	23×21以上	6.7	5.89	円形	
Pケ	40×45	15.0	6.00	隅丸方形	Pサ、Pコに切られる
Pテ	40×25	11.0	6.01	楕円形	

掘立柱建物8(図35)

X8・y2～4グリッドに海拔6.12mで検出された。建物の南北3間分が検出された。心心は100cm、底部の海拔は5.95～6.00mで5cmの比高差を持つ。

南北の軸方向はN-42°-Eである

掘立柱建物8 N-42°-E

柱穴名	規模cm	深さcm	底部の海拔m	平面形	備考
Pヒ	27×25	18.6	6.00	円形	礎板 10×11.7×5.3
Pト	27×25	16.7	5.91、6.01(礎板)	円形	礎板 9×12.3×7
Pセ	30以上×30以上	19.3	5.95		主体は調査区外

井戸2(図36)

X7～8・y0～1グリッドに海拔6.14mで検出された。当地の北東角にあたる部分が検出された。調査区壁際に検出され、危険を伴うため底部は完掘していない。検出された掘り方規模は135×120cm、深さは確認面より114cm、底部の海拔は5.00mである。当地の中心部分は調査区外北東にあると想定され、井枠等の材は検出されなかった。覆土は上層が黒褐色粘質土で、土丹粒子、炭化物、木片を含みまらしない。

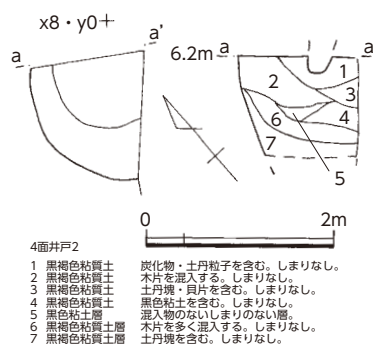


図36 井戸2

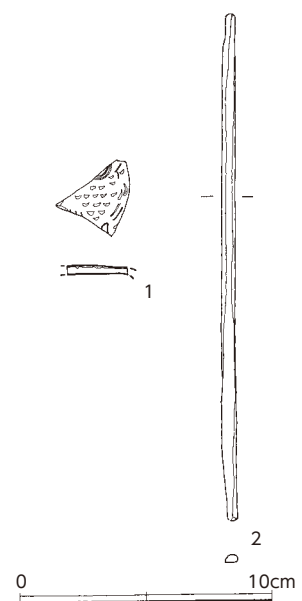


図37 井戸2出土遺物

井戸2出土遺物(図37)

1は白磁の印花文合子の蓋の小片である。胎土は白色を呈し、精緻である。釉調は透明な淡い灰緑色を呈する。光沢は良好である。釉中に気泡が多く観察される。2は木製品、箸である。全長20cm、太さは0.5×0.3cmである。

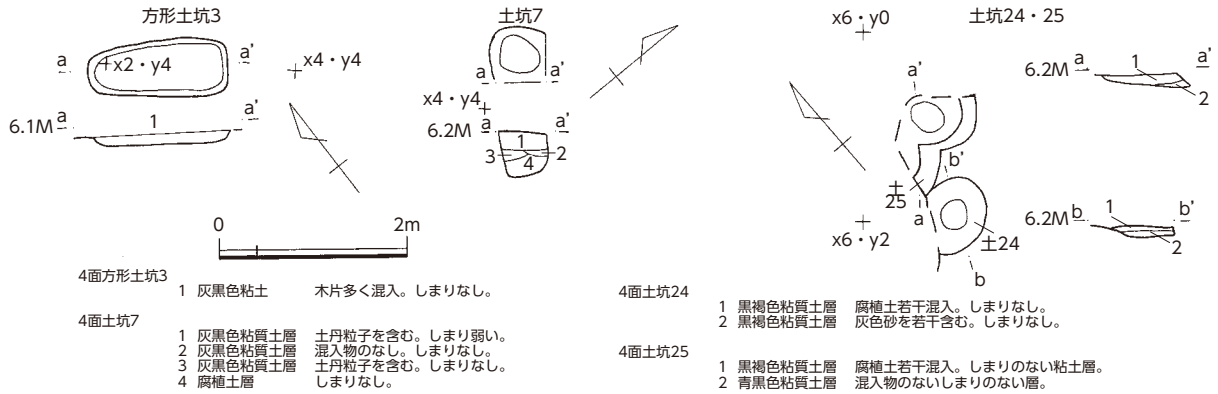


図38 方形土坑3・土坑7・24・25

方形土坑3(図38)

X1～3・Y3～4グリッドにおいて海拔5.97mで検出された。検出された掘り方規模は南北58cm、東西148cmで、深さは確認面より11.1cmを測る。覆土は灰黒色粘質土層で木片を多く含み粘性強くしまりは無い。

土坑7(図38)

X4・Y3グリッドにおいて海拔6.17mで検出された。検出された掘り方規模は南北56cm、東西60cmで、深さは確認面より41cmを測る。覆土は灰黒色粘質土層で土丹を多く含みしまりは無い。

土坑24(図38)

X6～7・Y1～2グリッドにおいて海拔6.15mで検出された。検出された掘り方規模は南北70cm、東西60cmで深さは確認面より17.4cmを測る。覆土は黒褐色粘質土層で腐植土、灰色砂を含みしまりは無い。

土坑25(図38)

X6～7・Y0～1グリッドにおいて海拔6.15mで検出された。検出された掘り方規模は南北110cm、東西70cmで深さは確認面より38.1cmを測る。覆土は黒褐色粘質土層で腐植土を若干含みしまりは無い。

土坑24出土遺物(図39)

1～3は木製品、箸である。1は先端部が欠損しているが2、3は完形品である。

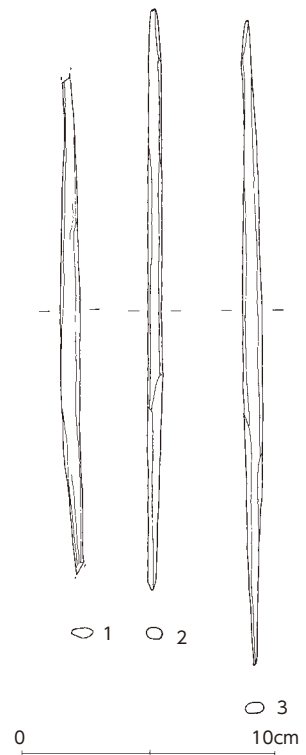


図39 土坑24出土遺物

柱穴群

掘立柱建物は6軒検出されたが、建物は構築出来ず、面上に検出された柱穴は42口である。以下、下記に寸法を明記する。

柱穴名	規模	深さ	底部の 海拔	平面形	備考	柱穴名	規模	深さ	底部の 海拔	平面形	備考
P8	33×30 以上	15.0	5.92	隅丸方 形	礎板 19×13.6×6、 11×21.9×5.9	Pや			6.2		礎板 29×10×4.8
P12	17×35	24.5	5.76	楕円形		Pゆ			6.02		礎板 7×12.3×5
P13	25×30	13.2	5.96	楕円形		Pよ	23×23	3.1	5.99	円形	
Pく	31×23	34.7	5.77	楕円形		Pオ	35×33 以上	24.3	5.90		
Pけ	40×35	13.0	5.97	楕円形		Pカ	25×26	21.5	5.94	隅丸方 形	Pかに切られる
Pこ	30×26	25.1	5.86	楕円形		Pキ	30×40	49.5	5.66	隅丸方 形	
Pし	35×30	34.2	5.77	楕円形		Pク	45×35 以上	21.0	5.96、 6.01 (礎板上)		
Pせ	38×28	19.8	5.87、 5.99(礎 板上)	楕円形	礎板 15×9.5×6.2、 13×6×1.9	Pコ	25×38	14.2	5.97	楕円形	Pサ、Pコに切 られる
Pそ	30×35	27.7	5.77	楕円形		Pサ	35×32	19.6	5.98	隅丸方 形	Pサに切られる
Pた	30×33 以上	15.0	5.96、 6.07(礎 板上)	楕円形	礎板 13×17×4.3	Pシ	28×28	16.3	5.95		
Pち	25×30 以上	14.5	5.95	楕円形		Pス	60以上× 47以上	10.5	6.03	円形	Pケに切られる
Pて	25×23	11.5	5.99	隅丸方 形	杭3×4×6	Pソ	18以上× 30	15.1	6.00		主体は調査区外
Pな	32× 30	14.0	5.92、 5.95(礎 板)	楕円形	礎板 11×21.3×5.4	Pタ	25×20 以上	20.5	5.92		Pスにきられる
Pに	48×34 以上	16.0	5.85	楕円形		Pチ	40×20 以上	7.6	6.05		主体は調査区外

Pぬ	24×30	9.8	6.02	楕円形		Pツ	40×50	11.0	6.01	楕円形	主体は調査区外
Pの	35×36	31.2	5.79	楕円形		Pナ	39×30	18.4	5.91	楕円形	礎板 9×12.3×7
Pは	30×25	18.8	5.85	楕円形		P二	28×24	17.4	5.85		
Pみ	40×30	10.0	6.01			Pネ	38×35	18.2	5.94	隅丸方形	礎板 9×8.7×6.6
Pむ	50×50	15.5	5.96			Pハ	27×25	18.6	6.00	円形	
Pめ	25×25	12.0	5.87	円形		Pフ	25×25	10.7	5.71, 5.75 (礎板上)		礎板 10×11.7×5.3

4面出土遺物(図40)

1、2はロクロ成形のかわらけの大皿、と小皿である。胎土は淡橙色を呈し、大皿は粉質、小皿は砂粒が多く含まれるが、共に精良土である。体部はやや開いて真直ぐ立ち上げる。1は灯明皿である。3～8は青磁で、3～7は龍泉窯、8は高麗青磁である。3は無文碗である。胎土は灰白色を呈し、釉調は灰緑色、光沢は良好である。4、5は劃花文碗である。胎土は灰色を呈し黒色粒子を含み精良である。釉調は透明な緑茶褐色光沢は良好である。4の内面には無数の横方向の擦過痕が認められる。5は貫入が顕著である。6は鎬蓮弁文碗の口縁部小片である。胎土は灰色を呈し黒色粒子を含み精緻である。釉調は灰緑色、被災しており光沢は無い。7は内面底部に陰刻草花文を有する碗である。胎土は灰色を呈し、黒色粒子を多く含み精緻である。釉調は透明な灰緑色を呈する。器表の貫入は顕著である。8は瓶子の頸部の破片である。白色土と黒色土の象嵌により頸部を廻る文様を配する。外面には緩い貫入、内面には細かい貫入が顕著である。9～11は渥美窯の製品である。9、10は口縁部、11は片口鉢の底部である。9の胎土は灰色を呈し、長石粒子を多く含み砂質であるが、10は黒灰色を呈し硬質である。11の胎土は白灰色を呈し、小石を若干含み砂質である。12～20は研磨痕を有する陶片である。12、16は渥美の甕の体部片、他は常滑の甕の体部片である。21は土製品、円盤である。かわらけの底部を転用している。22、23は石製品である。22赤間ヶ石(紫雲石)硯で、頁岩である。側面以外は全面剥離しており全容は不明であるが、側足の付く方硯である。23は滑石鍋の体部を細長く切り取って転用した加工品である。片面に鑿で長方形を陰刻している。加工途中品であろうか。用途は不明である。24、25は木製品、箸である。遺物は混入品も有ると思われるが凡その出土状況から13世紀後半期であると想定される。

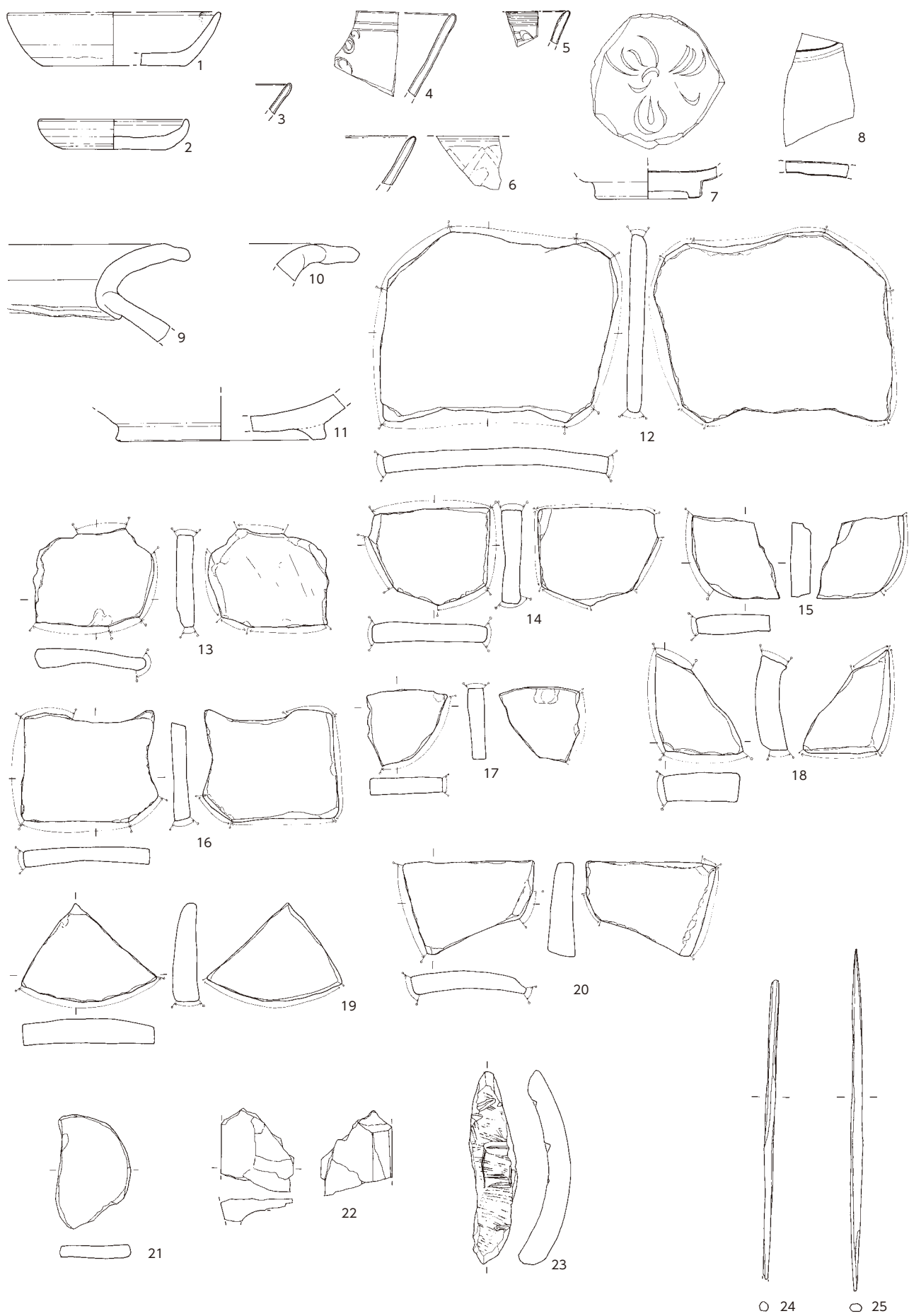


图40 4面出土遺物

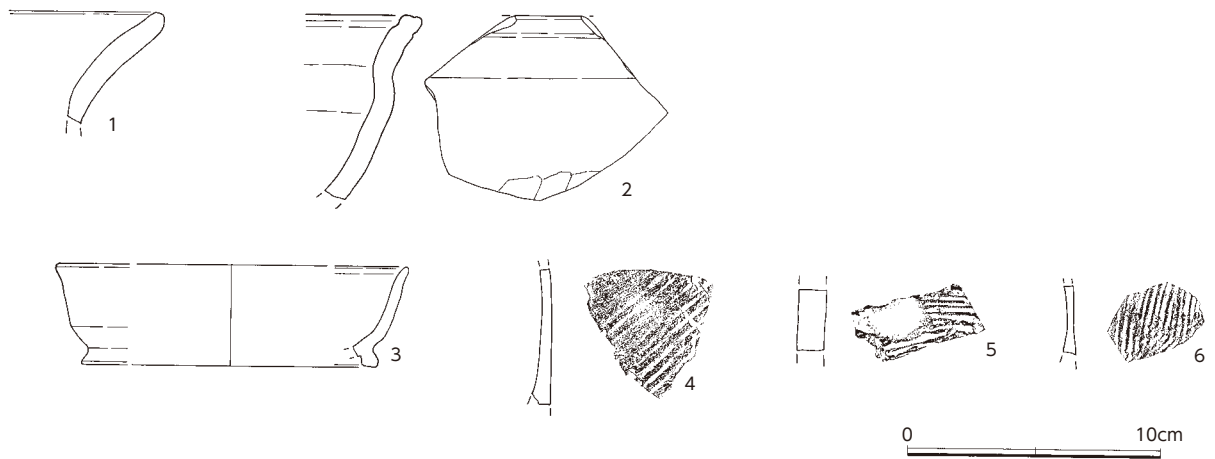


図41 古代以前の遺物

古代以前の遺物 (図41)

1は相模型甕で内外面ナデ。2は器種を明らかに出来なかった。比較的丁寧な作りで、内外の口縁直下を明瞭な沈線が巡っている。口唇部にも浅い沈線を観察出来るが、摩耗しており意図して作り出されたものかどうかは不明。口径は25cmを超えるものになるかもしれない。3は須恵器高台付坏で湖西窯産。底部が高台内に突き出る形態になるものと思われる。小片からの復元のため法量には不安がある。4～6は須恵器甕類ないし壺類の胴部片である。東海地方で生産されたものと思われる。いずれも外面に平行タタキ目が残る。

第五章 まとめ

今回の調査では13世紀中葉～14世紀中葉ころまでの4面の生活面が検出された。ほぼ1世紀の間に3回の造成を行ない連綿と生活を営んでいる様相が確認された。本調査地点は若宮大路の170m西側という至近距離にあり当該期にはその影響下にあったものと予想されたが、本遺跡地に検出された初期の段階の遺構群は軸方向が若宮大路の南北軸方向と異なり、4面後期以後、若宮大路の軸線と同方向を示して検出された。この辺りから若宮大路に沿った地割りが明確になったものと想定される。出土遺物は整理箱13箱でその70%がかわらけでその主体を占めた。古代以前では遺構の検出はないものの若干の遺物が出土している。その中に相模型甕、湖西産の高台付坏などが出土している。第2章で述べたとおり、本調査地点の近隣に所在する図1-10地点からは平行期の遺構が検出されており、また、当該期には500mほどの場所に鎌倉群家が存在する。造成土に混入して搬入されたものと思われる。

以下、中世第4面の古い時代から遺跡の変遷をまとめる。

中世4面

柱穴群が調査区全体に展開している。北東角に井戸が1基検出されたことから建物の表面が東側にはならないと思われる。若宮大路周辺の屋敷地は若宮大路に向かって門を開かないといわれており、当遺跡地もまた、検出遺構の様相から本調査地点の東方向を走っている若宮大路に背を向けていたと想定される。出土遺物から13世紀中葉から後半期の様相である。掘立柱建物は6軒検出された。掘立柱建物3～6の4軒は並存するものではなく建て替えの痕跡と考えられる。柱間から推察すると心心7間の掘立柱建物4が初見と予想され、また、切り合い関係から掘立柱建物3が最終末の建物となると思われる。掘立柱建物4と並存出来得る可能性があるのは掘立柱建物7、もしくは掘立柱建物8であるが、建物の軸方向から建物7と並存すると推定される。規模から考えて母屋と作事場といった関係であろうか。また、最後に構築された掘立柱建物3のみが若宮大路の軸方向と同方向を示し、それ以前の建物は同方向を示さない。門を開いた方向にある道筋等の基軸線に基づいた構築であったらとおもわれる。最末期の掘立柱建物3以降からは方向軸を若宮大路に沿った地割りに基づくものに変えたのであると想定される。

中世3面

調査区中央に井戸が掘られ、井戸を囲むように建物群が検出された。また、それを境として、東側と西側では様相を異にする。2面時に構築された掘り込の深い遺構により該期の遺構群が大きく攪乱を受けたことを鑑みても明らかに土地の使用法に変化が見られる。調査区全体に拡がりを見せた柱穴群は東側、すなわち若宮大路側に集中し頻繁な建て替えをした様相である。検出された掘立柱建物2、方形竪穴1等の大型建物群の軸方向は若宮大路と軸方向が合うが、溝群は若宮大路とは軸線が異なっている。これはこの溝群が区画溝等の地割りに関係するものではなく溜め水や、排水のために掘られたからだと考えられる。西側は4面時に居住空間であった場所に土坑が掘られ柱穴がやや希薄となり、また建て替えた痕跡がさほどみられない。柱穴群は調査西壁よりに検出され、建物域が西方向になる様相を示し、調査地点内の中心部から西寄りにかけては徐々に空間的様相が変わってゆく。出土遺物から13世紀後半～末葉の年代に比定される。

中世2面

3面時の居住空間は東側には依然として遺存し、西側は調査区外に移動したようで建物域はなく閑散とした様相を呈する。また、東側の建物は3面時のような頻繁な建て替えの様相はなく西側から土坑群が建物域を壊して展開してゆく様相である。建物の軸方向は若宮大路と同軸方向を示し整然とした様相を呈する。出土遺物から13世紀末～14世紀前葉と想定される。

中世1面

調査区内の柱穴群は2面時に比べ調査区北壁際、及び南壁際に検出され、遺構群の主体は調査区外北、及び南になり本遺跡地内は屋敷地内の空間地帯へと大きく変化し、土地の様相は一変するが、柱穴群の検出状況から軸方向等は2面時を踏襲していると思われる。柱穴群は小さく、建物がかかなり小規模となってゆく様相を呈する。出土遺物からは14世紀中葉の様相である。

本遺跡地は鎌倉の基幹をなす若宮大路の至近距離にあるという地理上の視点から御家人の屋敷地の一角に当たると想定される。本調査地点の検出遺構の様相からは所従、下人クラスの居住空間であると考えられる。この遺跡の最盛期は4面に相当する13世紀中葉～後半期で、この時期は鎌倉が政權都市として確立してゆく時期である。4面時の画期はまさにそうしたものの一環であったろうと思われる。また、中世1面時は鎌倉幕府滅亡前後という激変の世相である。本調査地点は若宮大路沿いといえるほどの近隣に所在した、遺跡地内には若干炭化層も検出されていることから戦火を被ったことは想像に難くない。

単位cm (復元値) [残存値]		単位cm (復元値) [残存値]		単位cm (復元値) [残存値]		単位cm (復元値) [残存値]		単位cm (復元値) [残存値]		単位cm (復元値) [残存値]		単位cm (復元値) [残存値]		単位cm (復元値) [残存値]		単位cm (復元値) [残存値]		単位cm (復元値) [残存値]	
図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長さ	底径 /幅	器高 /厚さ	胎土		色調	成形	備考							
8	1	1面	土坑1	かわらけ	7.2	4.7	2.3	淡橙色/黒色粒多く、赤褐色粒・泥岩粒・雲母を含む。精良		器表は灰橙色	ロクロ	灯明皿							
8	2	1面	土坑2	かわらけ	(12.6)	8.1	3.4	淡橙色/黒色粒・赤褐色粒・雲母を含む			ロクロ	灯明皿							
8	3	1面	土坑2	かわらけ	(10.6)	6.0	3.1	淡橙色/黒色粒・赤褐色粒・雲母を含む。精良		器表は灰橙色	ロクロ								
8	4	1面	土坑2	かわらけ	8.0	5.1	1.8	黄褐色/黒色粒・赤褐色粒・泥岩粒を含む			ロクロ	灯明皿							
8	5	1面	方形土坑2	かわらけ	(8.2)	5.6	1.9	淡橙色/黒色粒・赤褐色粒・泥岩粒を含む			ロクロ								
9	1	表土層		かわらけ	(12.8)	8.0	3.1	淡橙色/黒色粒・赤褐色粒・泥岩粒を含む			ロクロ	側面にφ0.6cmの貫通孔がある							
9	2	表土層		かわらけ	11.2	6.9	3.1	白褐色/黒色粒・赤褐色粒・白色粒を含む。精良		器表は灰橙色	ロクロ								
9	3	表土層		かわらけ	7.6	4.8	1.8	淡橙色/黒色粒・赤褐色粒・白針・雲母を含む			ロクロ								
9	4	表土層		かわらけ	(7.6)	4.5	2.5	橙色/輝粒が多く、黒色粒・赤褐色粒・雲母・白針を含む			ロクロ	灯明皿 遺存部内面全体に油煙痕							
9	5	表土層		白磁 口几皿	口縁部小片		白色/精良		薄い透明釉										
9	6	表土層		常滑窯 片口鉢Ⅱ類	底部小片		褐灰色/小石粒多く、白色粒・赤褐色粒・白針を含む		黄褐色			砂底							
9	7	表土層		研磨製品	3.8	6.8	1.0	灰褐色/白色粒多く緻密		赤褐色			常滑裏胴部片転用						
9	8	表土層		瓦質手焙り	口縁部小片		灰桃色/黒色粒・赤褐色粒・雲母・白針を含む		赤褐色			鉢型。外側面火を受けたか荒れる							
9	9	表土層		土製品 円盤	5.8	6.8	0.95	橙色/黒色粒・赤褐色粒・雲母・白針を含む		橙色			かわらけ底部転用						
9	10	攪乱		かわらけ	7.8	5.6	2.1	淡橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・泥岩粒・白色粒・白針を含む		黄褐色	ロクロ								
9	11	攪乱		かわらけ	(7.6)	6.1	1.6	白褐色/白色粒を含む。			ロクロ								
9	12	攪乱		かわらけ	7.2	4.8	1.4	白褐色/泥岩粒・白色粒・白針を含む。			ロクロ								
9	13	攪乱		瀬戸窯 卸皿	口縁部小片		黄灰色/精良		薄い黄緑色の灰釉で透明度がある			釉は刷毛塗り							
9	14	攪乱		瀬戸窯 入子	(7.5)			灰色		灰色			輪花型。内面に降灰						
9	15	攪乱		瓦 平瓦	(7.6)	(6.6)	1.7	灰白色/小石粒多く砂っぽい。		灰白色			両面に離れ砂						
9	16	試掘坑		かわらけ	8.0	5.8	1.9	白褐色/赤褐色粒多く、黒色粒・泥岩粒・白色粒・白針を含む			ロクロ								
9	17	試掘坑		かわらけ	(7.9)	(4.2)	1.9	橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・雲母・白針を含む			ロクロ								
9	18	試掘坑		龍泉窯 青磁 鎗蓮弁文碗		(3.0)		灰白色/黒色粒が多い		青緑色			高台豊付は無釉。釉は厚い。器表に緩い貫入						
9	19	試掘坑		常滑窯 甕		(13.7)		灰色/白色粒・小石粒を含む		赤褐色			遺存部内面一面に黄緑色の降灰砂底						
9	20	試掘坑		研磨製品	(11.4)	(5.0)	(1.2)	灰褐色/白色粒多く緻密		橙赤色			常滑裏胴部転用						
9	21	試掘坑		銭 文久永宝	2.6	2.6							初鑄年1863年 背文(波文)						
9	22	試掘坑		木製品 織具	[7.1]	[4.0]	1.1						手押木?						
9	23	試掘坑		木製品 箸	25.7	0.7	0.4												
9	24	試掘坑		木製品 箸	25.0	0.8	0.5												
10	1	1面		かわらけ	(13.6)	(8.8)	3.9	淡橙色/赤褐色粒多く、黒色粒を含む。精良			ロクロ								
10	2	1面		かわらけ	13.6	8.2	3.6	淡橙色/黒砂・赤褐色粒・白色粒を含む。精良			ロクロ	灯明皿							

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長さ	底径 /幅	器高 /厚さ	胎土	色調	成形	備考
10	3	1面		かわらけ	(13.6)	(8.5)	3.6	淡橙色/黒色粒・赤褐色粒・白色粒を含む。精良		ロクロ	
10	4	1面		かわらけ	(13.8)	(8.1)	3.5	淡橙色/黒色粒・赤褐色粒・白色粒を含む。精良		ロクロ	
10	5	1面		かわらけ	13.4	7.6	3.7	淡橙色/赤褐色粒多く、黒色粒を含む。精良		ロクロ	
10	6	1面		かわらけ	(12.8)	(8.0)	3.9	淡橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・雲母を含む。精良	器表は灰橙色	ロクロ	
10	7	1面		かわらけ	13.2	7.8	3.4	淡橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・雲母を含む		ロクロ	
10	8	1面		かわらけ	(12.5)	7.3	3.15	白橙色/黒色粒・赤褐色粒・白色粒・白針を含む。精良		ロクロ	
10	9	1面		かわらけ	12.8	8.6	3.2	白橙色/黒色粒・赤褐色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
10	10	1面		かわらけ	12.4	8.1	3.4	白橙色/黒色粒・泥岩粒・赤褐色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
10	11	1面		かわらけ	(12.8)	(8.1)	3.6	白橙色/黒砂・泥岩粒・雲母を含む		ロクロ	
10	12	1面		かわらけ	12.2	7.2	3.3	白橙色/泥岩粒多く、黒色粒・赤褐色粒・雲母を含む		ロクロ	
10	13	1面		かわらけ	10.4	6.2	3.1	淡橙色/黒色粒・赤褐色粒・雲母を含む。精良	器表は灰橙色	ロクロ	
10	14	1面		かわらけ	10.8	6.4	3.1	黄橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・白針・雲母を含む。精良		ロクロ	
10	15	1面		かわらけ	11.3	6.4	3.2	橙色/泥岩粒多く、黒色粒・赤褐色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
10	16	1面		かわらけ	10.3	5.7	2.8	橙色/泥岩粒多く、黒色粒・赤褐色粒・白色粒を含む		ロクロ	
10	17	1面		かわらけ	(11.6)	(7.0)	3.4	淡橙色/黒色粒・赤褐色粒・白色粒・雲母を含む。精良	器表は灰橙色	ロクロ	灯明皿
10	18	1面		かわらけ	10.2	5.6	2.9	黄橙色/赤褐色粒・黒色粒・泥岩粒・白色粒・雲母を含む。精良		ロクロ	
10	19	1面		かわらけ	(11.0)	(7.0)	3.2	淡橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・雲母を含む。精良		ロクロ	
10	20	1面		かわらけ	(10.8)	(6.0)	3.1	淡橙色/黒色粒・赤褐色粒・白針・雲母を含む。精良		ロクロ	
10	21	1面		かわらけ	(10.8)	(6.5)	3.0	橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・雲母を含む。精良		ロクロ	
10	22	1面		かわらけ	(10.4)	(7.2)	3.0	淡橙色/黒色粒・赤褐色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
10	23	1面		かわらけ	(8.0)	5.3	1.8	白橙色/黒色粒・赤褐色粒・泥岩粒・雲母を含む		ロクロ	
10	24	1面		かわらけ	(7.8)	5.4	1.6	白橙色/黒色粒・赤褐色粒・泥岩粒を含む		ロクロ	
10	25	1面		かわらけ	(7.6)	(5.9)	1.7	白橙色/黒色粒・赤褐色粒・白色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
10	26	1面		かわらけ	(7.4)	(6.0)	1.9	橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	
10	27	1面		かわらけ	(7.6)	(5.8)	1.7	白橙色/黒色粒・赤褐色粒・泥岩粒・白針を含む		ロクロ	
10	28	1面		かわらけ	(8.3)	(5.5)	(1.7)	橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・白色粒を含む		ロクロ	
10	29	1面		かわらけ	(7.8)	5.0	1.8	白橙色/黒砂・赤褐色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
10	30	1面		かわらけ	(7.8)	(5.5)	1.8	白橙色/赤褐色粒多く、黒砂・泥岩粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
10	31	1面		かわらけ	7.6	5.8	1.6	白橙色/黒砂・赤褐色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
10	32	1面		かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.4	黄橙色/黒砂・赤褐色粒を含む。精良		ロクロ	
10	33	1面		かわらけ	(7.8)	(5.2)	1.9	白橙色/黒砂・赤褐色粒・泥岩粒・白針を含む		ロクロ	
10	34	1面		かわらけ	(7.6)	(5.0)	2.0	黄橙色/黒砂・赤褐色粒・泥岩粒・白針を含む		ロクロ	

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長さ	底径 /幅	器高 /厚さ	胎土	色調	成形	備考
10	35	1面		かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.6	白褐色/黒砂・赤褐色粒・雲母を含む。精良		ロクロ	
10	36	1面		かわらけ	(7.9)	(5.5)	1.9	黄褐色/黒砂・赤褐色粒・泥岩粒を含む。		ロクロ	
10	37	1面		かわらけ	(7.4)	4.5	2.1	淡褐色/赤褐色粒多く、黒砂・雲母を含む		ロクロ	
10	38	1面		かわらけ	(6.8)	(5.0)	2.2	淡褐色/黒砂・赤褐色粒・雲母を含む。精良		ロクロ	
10	39	1面		龍泉窯 青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部小片			黄灰色/精良	透明な 緑茶褐色		釉は薄い 緩く貫入
10	40	1面		龍泉窯 青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部小片			灰色/精良	青緑色	器壁薄い	釉は厚くやや濁る
10	41	1面		常滑窯 片口鉢Ⅰ類	(3.3.2)			灰色/白色粒多く、砂質	灰色	口縁上部に沈線	5型式
10	42	1面		常滑窯 甕	口縁部小片			灰褐色/白色粒・小石粒を含む	緑褐色		6a型式
10	43	1面		常滑窯 片口鉢Ⅱ類	底部小片			灰色/白色粒多く、小石粒を含む	灰褐色		磨滅が強いが内底面周囲は磨滅が少ない
10	44	1面		研磨製品	7.6	7.0	1.0	灰色/白色粒多く、砂質	灰緑色		常滑甕胴部転用
10	45	1面		研磨製品	4.8	8.2	0.9	灰色/白色粒多く、砂質	黄褐色		常滑甕胴部転用
10	46	1面		研磨製品	5.9	6.6	1.3	灰色/黒色粒多い	茶褐色		常滑甕胴部転用
10	47	1面		研磨製品	3.8	5.2	1.0	黄灰色	黄灰色		常滑片口鉢Ⅰ類胴部片転用
10	48	1面		研磨製品	4.7	4.9	1.0	黄灰色/白色粒多く、やや砂質	茶灰色		常滑甕胴部片転用
10	49	1面		瓦質手焙り	口縁部小片			灰褐色/白色粒多く、砂質	灰褐色		胴部に貫通孔有り
10	50	1面		白かわらけ		(4.6)		灰白色/白色粒を含み、精良	灰白色	ロクロ	
10	51	1面		土製品 円盤	4.5	4.3	0.8	橙色/黒砂・赤褐色粒・白粒を含む	橙色	ロクロ	かわらけ底部を打欠け転用。
10	52	1面		土製品 円盤	4.6	4.3	1.0	淡褐色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・泥岩粒・雲母を含む	淡褐色	ロクロ	かわらけ底部を打欠け転用。
10	53	1面		銭 熙寧元寶	2.5	2.5					初鑄年 北宋 1068年 真書
10	54	1面		銭 元祐通寶	2.4	2.4					初鑄年 北宋 1086年 行書
15	1	2面	方形土坑1	かわらけ	7.9	5.5	1.7	白褐色を呈する色/黒砂・赤褐色粒・白針・雲母・石粒を含む	白褐色	ロクロ	灯明皿
15	2	2面	方形土坑1	渥美窯 壺	底部に近い胴部小片			灰色/白色粒を多く含み、精良焼締まる	黒色～灰緑色	外側面へう調整	
15	3	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	(12.6)	(8.2)	3.7	淡褐色/赤褐色粒多く、黒砂・白色粒・白針を含む。		ロクロ	
15	4	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	(12.4)	(8.8)	3.3	橙色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・泥岩粒・雲母を含む		ロクロ	
15	5	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	12.0	7.7	3.5	白褐色/黒砂・赤褐色粒・泥岩粒・白針・雲母を含む		ロクロ	灯明皿
15	6	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	(13.4)	(8.4)	3.9	白褐色/黒砂・赤褐色粒・白色粒を含む精良		ロクロ	
15	7	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	(12.4)	(8.6)	3.5	橙色/泥岩粒多く、黒砂・赤褐色粒・白針を含む		ロクロ	灯明皿
15	8	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	(12.4)	(7.8)	2.9	橙色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	
15	9	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	(12.6)	(7.8)	3.8	白褐色/赤褐色粒多く、黒砂・白色を含む 精良		ロクロ	
15	10	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	(8.2)	(7.0)	1.9	白褐色/泥岩粒多く、黒砂・赤褐色粒を含む		ロクロ	
15	11	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	(8.4)	(5.9)	1.8	白褐色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
15	12	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	(7.8)	(6.4)	1.7	白褐色/白色粒、黒砂多く、赤褐色粒を含む		ロクロ	胎芯黒
15	13	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	(7.8)	(6.3)	1.7	淡褐色/赤褐色粒多く、黒砂・白色粒を含む		ロクロ	

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長さ	底径 /幅	器高 /厚さ	胎土	色調	成形	備考
15	14	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.5	濃橙色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・雲母を含む。精良		ロクロ	
15	15	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	7.6	6.1	1.8	淡橙色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・雲母を含む		ロクロ	
15	16	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	(8.4)	(7.0)	1.5	淡橙色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・泥岩粒・雲母を含む		ロクロ	
15	17	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.6	淡橙色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
15	18	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.5	淡橙色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・泥岩粒・雲母を含む		ロクロ	灯明皿
15	19	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.7	白褐色/赤褐色粒多く、黒砂・白針・雲母・石粒を含む		ロクロ	
15	20	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	(7.8)	(5.3)	1.8	白褐色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・泥岩粒・雲母を含む		ロクロ	
15	21	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	7.6	5.5	1.7	淡橙色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・泥岩粒・雲母を含む		ロクロ	灯明皿
15	22	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	7.2	5.0	1.5	色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・泥岩粒・雲母を含む		ロクロ	
15	23	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	7.0	5.3	1.2	淡橙色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・泥岩粒・雲母を含む		ロクロ	
15	24	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	(7.8)	(5.5)	1.7	白褐色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・雲母を含む。精良	器表は灰褐色	ロクロ	
15	25	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	(7.8)	(5.8)	2.3	淡橙色/赤褐色粒多く、黒砂・白色粒・雲母を含む。精良		ロクロ	
15	26	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	(7.8)	4.9	2.4	淡橙色/赤褐色粒多く、黒砂・白色粒・雲母を含む。精良		ロクロ	灯明皿
15	27	2面	方形土坑1 +土坑3	かわらけ	(7.6)	(6.0)	2.2	淡橙色/赤褐色粒多く、黒砂・白色粒・雲母を含む。精良		ロクロ	
15	28	2面	方形土坑1 +土坑3	龍泉窯 青磁 鎗蓮弁文碗	(15.5)			灰色/黒色粒含み、精良	透明な灰緑色		器壁薄く釉厚い
15	29	2面	方形土坑1 +土坑3	常滑窯 甕	口縁部小片			灰色/白色粒多い	茶灰色		第5型式
15	30	2面	方形土坑1 +土坑3	研磨製品	7.0	6.5	1.4	灰色/白色粒含む。焼締まる	灰白釉		常滑甕胴部片転用
15	31	2面	方形土坑1 +土坑3	研磨製品	11.6	6.0	1.3~ 2.1	灰色/白色粒含む。やや砂質	淡橙色		常滑甕底部を含む小片転用
15	32	2面	方形土坑1 +土坑3	研磨製品	10.3	6.0	1.0	灰色/白色粒含む	茶褐色		常滑甕胴部片転用
15	33	2面	方形土坑1 +土坑3	研磨製品	6.0	9.5	1.0	灰色/白色粒含む。焼締まる	灰褐色		常滑甕胴部片転用
15	34	2面	方形土坑1 +土坑3	研磨製品	6.2	4.4	1.1	灰褐色/白色粒含む。焼締まる	赤褐色		常滑甕胴部片転用
15	35	2面	方形土坑1 +土坑3	研磨製品	6.2	6.0	1.4	灰色/白色粒含む。焼締まる	赤褐色		常滑甕胴部片転用
15	36	2面	方形土坑1 +土坑3	研磨製品	7.8	11.3	1.1	灰色/白色粒含む。焼締まる	灰色		常滑甕胴部片転用
16	1	2面	方形土坑1 +土坑3	瓦 平瓦	[8.3]	[4.0]	1.9	黒灰色/白色粒多く、焼締まる	暗灰色		
16	2	2面	方形土坑1 +土坑3	銭 至和元宝	2.4	2.4					初鑄年 北宋 1054年 篆書
16	3	2面	方形土坑1 +土坑3	石製品 砥石	[9.2]	[4.2]	[3.6]		灰色		産地不明中砥 凝灰岩
16	4	2面	方形土坑1 +土坑3	漆製品 椀	胴部小片						内外面に赤色漆の三つ巴スタンプ文
16	5	2面	土坑4	研磨製品	7.9	7.2	1.3	暗灰色/白色粒含むが少量	灰緑色		常滑甕胴部片転用
16	6	2面	土坑4	研磨製品	6.9	11.0	1.3	灰色/白色粒含むが少量	暗灰色		常滑甕胴部片転用
16	7	2面	土坑10	常滑窯 甕	口縁部小片			暗灰色/黒色粒・白色粒含む	茶褐色		3型式
16	8	2面	土坑10	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	底部小片			橙色/白色粒を含む	赤褐色		
16	9	2面	土坑11	かわらけ	(8.3)	(7.15)	(1.5)	橙色/黒砂・赤褐色粒・白色粒を含む		ロクロ	
16	10	2面	土坑11	鉄製品 釘	[5.2]	0.9	0.9				

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長さ	底径 /幅	器高 /厚さ	胎土	色調	成形	備考
16	11	2面	土坑12	かわらけ	(8.1)	(7.0)	(1.4)	淡橙色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	
16	12	2面	土坑13	かわらけ	12.6	8.2	3.5	橙色/赤褐色粒多く黒砂・白色粒・泥岩粒を含む		ロクロ	
16	13	2面	土坑13	かわらけ	(8.0)	(5.9)	1.7	淡橙色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	
16	14	2面	土坑14	かわらけ	(12.2)	(7.9)	3.2	橙色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	灯明皿
16	15	2面	土坑14	かわらけ	10.6	6.1	3.2	淡橙色/黒砂・赤褐色粒・雲母を含む。精良	器表は灰橙色	ロクロ	灯明皿
16	16	2面	土坑14	かわらけ	(7.8)	(5.0)	1.9	白褐色/小石多く、黒砂・赤褐色粒・白色粒・泥岩粒・雲母を含む		ロクロ	
16	17	2面	土坑14	青白磁 印花文 合子蓋	(6.9)	(4・5)	(1.8)	白色/精良	水青色釉	合わせ口外面は釉を削り無釉。内面は天井部に釉が残るが他は露胎	菊花文
16	18	2面	土坑14	常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片			暗灰色/白色粒多く、砂質	暗灰色		6a型式
16	19	2面	土坑14	常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片			灰色/白色粒・小石粒多く、砂質	灰色		6a型式
16	20	2面	土坑14	常滑窯 片口鉢Ⅰ類	底部小片			灰色/白色粒・小石粒多く、砂質	灰色		内面は火を受けた痕跡あり
16	21	2面	土坑14	南部系 山茶碗	底部小片			赤褐色/白色粒・白針を含む	にぶい赤褐色		尾張型か5型式(12c中～13c初)。生焼け
16	22	2面	土坑14	研磨製品	8.5	8.5	1.5	黄灰色/白色粒・小石粒を含む	黄灰色		常滑片口鉢Ⅱ類底部を含む小片転用
16	23	2面	土坑14	研磨製品	5.8	7.5	1.1	暗灰色/黒色粒・白色粒を含む	灰色		常滑甕胴部片転用
17	1	2面		かわらけ	(12.2)	7.0	3.0	白褐色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	
17	2	2面		かわらけ	12.2	8.9	3.3	白褐色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	
17	3	2面		かわらけ	(11.9)	(6.7)	3.2	白褐色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	
17	4	2面		かわらけ	(11.8)	8.0	3.2	淡橙色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	
17	5	2面		かわらけ	(11.6)	(7.6)	3.0	淡橙色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	
17	6	2面		かわらけ	(13.8)	(8.8)	3.4	淡橙色/赤褐色粒多く、黒砂・白色粒・白針を含む。精良		ロクロ	
17	7	2面		かわらけ	(12.9)	(8.2)	3.0	淡橙色/泥岩粒多く、黒砂・赤褐色粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	
17	8	2面		かわらけ	12.4	7.4	3.5	橙色/白針多く、黒砂・赤褐色粒・白色粒を含む		ロクロ	
17	9	2面		かわらけ	12.6	7.9	3.2	白褐色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	
17	10	2面		かわらけ	(12.8)	(8.4)	3.5	橙色/赤褐色粒・泥岩粒多く、黒砂・白色粒を含む		ロクロ	
17	11	2面		かわらけ	(11.4)	(8.0)	3.7	橙色/黒砂・赤褐色粒・泥岩粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	
17	12	2面		かわらけ	(11.8)	(8.0)	2.7	橙色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	
17	13	2面		かわらけ	12.2	8.1	3.3	橙色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	灯明皿
17	14	2面		かわらけ	7.8	5.6	1.9	白褐色/黒砂・白色粒・白針を含む		ロクロ	
17	15	2面		かわらけ	(9.2)	(7.0)	1.7	白褐色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	
17	16	2面		かわらけ	(7.6)	(5.5)	1.7	橙色/赤褐色粒多く、黒色・白色粒・白針を含む		ロクロ	
17	17	2面		かわらけ	7.6	5.1	1.6	橙色/赤褐色粒多く、黒色・白色粒・白針を含む		ロクロ	灯明皿
17	18	2面		かわらけ	(7.4)	(6.1)	2.1	橙色/赤褐色粒多く、黒色・白色粒・白針を含む		ロクロ	

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長さ	底径 /幅	器高 /厚さ	胎土	色調	成形	備考
17	19	2面		かわらけ	7.8	3.1	1.5	橙色/赤褐色粒多く、黒色・白色粒・白針を含む		ロクロ	
17	20	2面		かわらけ	(7.8)	5.9	1.6	橙色/赤褐色粒多く、黒色・白色粒・白針を含む		ロクロ	
17	21	2面		かわらけ	7.6	4.8	1.8	橙色/赤褐色粒多く、黒色・白色粒・白針を含む		ロクロ	
17	22	2面		かわらけ	7.6	4.9	1.6	橙色/赤褐色粒多く、黒色・白色粒・白針を含む		ロクロ	
17	23	2面		かわらけ	7.6	5.3	1.6	橙色/赤褐色粒多く、黒色・白色粒・白針を含む		ロクロ	
17	24	2面		かわらけ	(7.6)	(5.5)	1.9	白褐色/黒砂・泥岩粒・白色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
17	25	2面		かわらけ	(7.4)	(5.8)	1.5	白褐色/赤褐色粒多く、黒色・白色粒・雲母を含む		ロクロ	
17	26	2面		かわらけ	(8.0)	(6.5)	1.6	白褐色/黒砂・泥岩粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	
17	27	2面		かわらけ	7.8	6.3	1.4	橙色/黒砂・赤褐色粒・泥岩粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	
17	28	2面		かわらけ	7.6	5.8	1.5	白褐色/黒砂・泥岩粒・白色粒を含む		ロクロ	
17	29	2面		かわらけ	7.2	5.5	1.9	白褐色/黒砂・赤褐色粒・泥岩粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	
17	30	2面		かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.7	淡橙色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・白針を含む。精良		ロクロ	
17	31	2面		かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.7	白褐色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
17	32	2面		かわらけ	(7.6)	4.9	1.9	白褐色/泥岩粒多く、黒砂・白色粒・雲母を含む		ロクロ	
17	33	2面		かわらけ	7.6	5.2	1.9	淡橙色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・雲母を含む		ロクロ	
17	34	2面		かわらけ	7.8	5.0	1.8	白褐色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
17	35	2面		かわらけ	(8.0)	(4.8)	1.8	橙色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
17	36	2面		かわらけ	(7.8)	(5.9)	1.6	白褐色/黒砂・泥岩粒・白色粒・雲母を含む		ロクロ	
17	37	2面		かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.7	白褐色/黒砂・赤褐色粒・泥岩粒・白色粒を含む		ロクロ	灯明皿
17	38	2面		かわらけ	7.8	4.6	2.2	白褐色/黒砂・泥岩粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	
17	39	2面		かわらけ	(7.0)	(4.5)	1.6	白褐色/黒砂・泥岩粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	
17	40	2面		かわらけ	7.6	5.6	2.4	橙色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・白針を含む。精良		ロクロ	
17	41	2面		かわらけ	7.6	5.7	2.4	橙色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・白針を含む。精良		ロクロ	
17	42	2面		かわらけ	4.2	3.5	7.5	白褐色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・雲母を含む。精良		ロクロ	内折れミニかわらけ
17	43	2面		龍泉窯 青磁 劃花文碗	口縁部小片			白色/黒色粒を含む。精良	灰緑色		
17	44	2面		龍泉窯 青磁 鎚蓮弁文碗	(16.0)			灰色/黒色粒を含む。精良	灰緑色		内面に文様あり
17	45	2面		龍泉窯 青磁 蓮弁文折縁 皿	口縁部小片			灰白色/黒色粒を含む。精良	灰緑色	口縁端部は上に引き上げられている	内面蓮弁文、外面無文
17	46	2面		白磁 口几皿	口縁部小片			白色/精良。やや砂質	薄い透明釉		
17	47	2面		白磁 口几皿	(11.0)			白色/黒色粒を含む。精良	薄い透明釉		
17	48	2面		白磁 口几皿	底部小片			白色/黒色粒を含む。精良	薄い透明釉		
17	49	2面		青白磁 梅瓶	胴部小片			白色/黒色粒を含む。精良	水青色釉。内面は薄い透明釉		外面一部が黒く変色

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長さ	底径 /幅	器高 /高さ	胎土	色調	成形	備考
17	50	2面		青白磁 梅瓶	胴部小片			白色/黒色粒を含む。精良	水青色釉。内面は薄い透明釉		
17	51	2面		青白磁 梅瓶	胴部小片			白色/黒色粒を含む。精良	水青色釉。内面は薄い透明釉		
17	52	2面		青白磁 梅瓶	胴部小片			白色/黒色粒を含む。精良	水青色釉。内面は薄い透明釉		
17	53	2面		青白磁 印花文 合子蓋	(7.2)		1.5	白色/精良	水青色釉	合わせ口外面は釉を削り無釉。内面は無釉	釉薄く牡丹文で幅の広い輪花型
17	54	2面		青白磁 印花文 合子蓋	蓋小片			白色/黒色粒を含む。精良	水青色釉だが釉変して黒ゴマ状の点になっている	合わせ口外面は釉を削り無釉。内面は無釉	釉薄く輪花型
17	55	2面		高麗青磁 瓶子	胴部小片			灰色/精良	灰緑色の釉で透明度がある	陰刻に白土の象嵌	模様不明。内面にも薄い透明釉がかかる
17	56	2面		高麗青磁 瓶子	胴部小片			灰茶色/精良	灰茶色の釉でやや濁る	陰刻に白土の象嵌	模様不明。内面にも薄い透明釉がかかる
17	57	2面		高麗青磁 瓶子	胴部小片			灰色/精良	灰色の釉でやや濁る	陰刻に黒土の象嵌	模様不明。内面にも薄い透明釉がかかる
17	58	2面		高麗青磁 瓶子	胴部小片			灰色/精良	黄緑色で濁る	陰刻に白土の象嵌	模様不明。外面は二次被熱を受け白濁している。内面にも薄い透明釉がかかる
17	59	2面		瀬戸窯 入子	底部小片			灰色/黒色粒を含む。精良	灰色	外底はヘラ削り	
17	60	2面		北部系 山茶碗	(5.6)			白色/精良	灰白色		東濃型か明和(1260~1310)。遺存部内面一面に降灰と窯くそ
17	61	2面		常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片			灰白色/白色粒・長石を含む。砂質	灰白色		6a型式
17	62	2面		常滑窯 片口鉢Ⅰ類		(15.0)		灰白色/白色粒・長石を含む。砂質	灰白色		内面こげ跡あり
17	63	2面		常滑窯 甕	口縁部小片			暗灰色/黒色粒・白色粒・長石を含む	茶褐色		6a型式
17	64	2面		常滑窯 甕	口縁部小片			灰色/黒色粒・白色粒・長石を含む	赤褐色		6a型式
17	65	2面		常滑窯 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片			暗灰色/黒色粒・白色粒・長石を含む	暗褐色		6b型式
17	66	2面		研磨製品	7.8	4.5	1.0	灰色/黒色粒・白色粒・長石を含む	茶褐色		常滑甕胴部片転用
17	67	2面		研磨製品	7.6	9.2	1.7	黄灰色/白色粒多く、長石を含む。砂質	黄灰色		常滑甕胴部片転用
18	1	2面		研磨製品	13.0	10.2	1.1	灰白色/白色粒・長石を含む	茶褐色		常滑甕胴部片転用
18	2	2面		研磨製品	5.8	9.0	1.0	胎芯橙色/白色粒・長石を含む	茶褐色		常滑甕胴部片転用
18	3	2面		研磨製品	5.6	7.7	1.3	灰色/黒色粒・白色粒・長石を含む	茶褐色		常滑甕胴部片転用
18	4	2面		研磨製品	7.6	9.2	1.7	灰色/黒色粒・白色粒・長石を含む	茶褐色		常滑甕胴部片転用
18	5	2面		研磨製品	5.1	5.8	1.0	黄灰色/白色粒多く、長石を含む。砂質	茶褐色		常滑甕胴部片転用
18	6	2面		研磨製品	4.2	7.6	1.0	灰色/黒色粒・白色粒・長石を含む	茶褐色		常滑甕胴部片転用
18	7	2面		研磨製品	3.7	4.2	1.0	橙色/白色粒多く、長石を含む。砂質	赤褐色		常滑甕胴部片転用
18	8	2面		研磨製品	4.1	5.3	1.5	灰色/黒色粒・白色粒・長石を含む	茶褐色		常滑甕胴部片転用
18	9	2面		研磨製品	5.5	6.2	1.0	橙色/白色粒多く、長石を含む。砂質	茶褐色		常滑片口鉢Ⅱ類胴部転用
18	10	2面		研磨製品	6.3	13.3	1.1	橙色/白色粒多く、長石を含む。砂質	暗褐色		常滑甕口縁~頸部片転用
18	11	2面		瓦質手焙り	口縁部小片			灰色/黒色粒・雲母を含む	黒灰色		鉢型

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長さ	底径 /幅	器高 /厚さ	胎土	色調	成形	備考
18	12	2面		不明 滑石製品	頂部 φ2.4	底面 φ(4.4)	1.5		銀白色		滑石鍋の底部に付く 三足の部分を転用。 容器の蓋として再利用 か。つまみ状頂部 は煤付着。
18	13	2面		瓦器碗	口縁部小片			白～灰色/砂が少なく、精 良緻密	白～黒灰色	ロクロ	遺存部には口縁と内 面にやや薄い炭素吸 着が回る
18	14	2面		瓦 平瓦	[5.2]	[5.6]	2.0	黒灰色/白色粒多く、やや 砂質。焼締まる。	黒灰色		斜め格子の叩き目
18	15	2面		鉄製品 釘	[6.2]	0.8	0.6				
18	16	2面		鉄製品 釘	[4.5]	0.4	0.7				
18	17	2面		石製品 硯	[6.3]	[7.4]	[1.5]		赤紫		頁岩。赤間石(紫雲 石)。側足の付く方 硯。陸を鑿状工具で 再加工した痕有り
21	1	3面	溝1	かわらけ	(8.8)	(7.0)	1.9	淡橙色/黒色粒・赤褐色粒・ 泥岩粒・白色粒を含む		ロクロ	
21	2	3面	溝1	かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.17	淡橙色/黒色粒・赤褐色粒・ 泥岩粒・白色粒を含む		ロクロ	
21	3	3面	溝1	常滑窯 甕	口縁部小片			灰色/黒色粒・白色粒・長 石を含む	赤褐色		5型式
21	4	3面	溝1	常滑窯 甕	口縁部小片			暗灰色/黒色粒・白色粒・ 長石を含む	暗褐色		6a型式
21	5	3面	溝1	常滑窯 甕	口縁部小片			灰色/黒色粒・白色粒・長石・ 小石粒を含む	赤褐色		6a型式
21	6	3面	溝1	常滑窯 甕	口縁部小片			灰色/黒色粒・白色粒・長 石を含む。やや砂質	茶褐色		6a型式
21	7	3面	溝1	常滑窯 甕	口縁部小片			灰色/黒色粒・白色粒・長 石を含む	暗褐色		6a型式
21	8	3面	溝1	常滑窯 甕	口縁部小片			暗灰色/黒色粒・白色粒・ 長石を含む。やや砂質	茶褐色		6a型式
21	9	3面	溝1	亀山窯 甕	胴部小片			灰色/白色粒を含む。やや 粘性あり	暗灰色		外面は格子叩目。内 面の叩目は無い
21	10	3面	溝1	研磨製品	16.2	16.5	0.9	暗灰色/黒色粒・白色粒・ 長石を含む。やや砂質	暗褐色		常滑甕胴部片転用
21	11	3面	溝1	研磨製品	12.2	4.2	1.3	暗灰色/黒色粒・白色粒・ 長石を含む。やや砂質	暗褐色		常滑甕胴部片転用
21	12	3面	溝1	研磨製品	7.7	12.5	1.0	暗灰色/黒色粒・白色粒・ 長石を含む。やや砂質	黒灰色		常滑甕胴部片転用
21	13	3面	溝1	研磨製品	8.6	5.7	1.3	暗灰色/黒色粒・白色粒・ 長石を含む。やや砂質	茶褐色		常滑甕胴部片転用
21	14	3面	溝1	研磨製品	7.6	12.5	1.2	暗灰色/黒色粒・白色粒・ 長石を含む。やや砂質	暗褐色		常滑甕胴部片転用
21	15	3面	溝1	研磨製品	9.3	5.5	1.0	暗灰色/黒色粒・白色粒・ 長石を含む。やや砂質	黒灰色		常滑甕胴部片転用
21	16	3面	溝1	研磨製品	6.0	8.5	8.8	暗灰色/黒色粒・白色粒・ 長石を含む。やや砂質	茶褐色		常滑甕胴部片転用
22	1	3面	溝1	研磨製品	12.0	6.3	1.6	暗灰色/黒色粒・白色粒・ 長石を含む。やや砂質	灰色		常滑甕胴部片転用
22	2	3面	溝1	研磨製品	6.2	8.3	1.3	暗灰色/黒色粒・白色粒・ 長石を含む。やや砂質	暗褐色		常滑甕胴部片転用
22	3	3面	溝1	研磨製品	9.4	6.0	1.5	暗灰色/黒色粒・白色粒・ 長石を含む。やや砂質	暗褐色		常滑甕胴部片転用
22	4	3面	溝1	研磨製品	7.2	7.8	1.3	暗灰色/黒色粒・白色粒・ 長石を含む。やや砂質	暗褐色		常滑甕胴部片転用
22	5	3面	溝1	研磨製品	8.0	8.0	1.2	黄灰色/白色粒多く、長石 を含む。やや砂質	茶褐色		常滑甕胴部片転用
22	6	3面	溝1	研磨製品	10.2	5.4	1.5	暗灰色/黒色粒・白色粒・ 長石を含む。やや砂質	暗灰色		常滑甕胴部片転用
22	7	3面	溝1	研磨製品	7.3	4.0	1.0	暗灰色/黒色粒・白色粒・ 長石を含む。やや砂質	赤褐色		常滑壺胴部片転用
22	8	3面	溝2	かわらけ	(14.1)	(9.4)	3.4	橙色/黒色粒・赤褐色粒・白 色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
22	9	3面	溝2	かわらけ	(8.2)	(7.1)	1.7	白褐色/黒色粒・泥岩粒・白 色粒・雲母を含む		ロクロ	

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長さ	底径 /幅	器高 /厚さ	胎土	色調	成形	備考
2.2	10	3面	溝2	かわらけ	(8.3)	(7.0)	1.6	白褐色/赤褐色粒多く、黒色粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	
2.2	11	3面	溝2	白磁 口兀皿	(10.4)			灰白色/精良	淡青灰色 半透明		遺存部は口唇部を除き全釉
2.2	12	3面	溝2	常滑窯 鷹口壺	底部小片			黒灰色/白色粒多く、焼締まる	暗褐色		外底部は砂底
2.2	13	3面	溝2	研磨製品	4.85	7.8	0.9 ~1.3	暗灰色/黒色粒・白色粒・長石を含む。気泡が多い	茶褐色		常滑甕胴部片転用
2.2	14	3面	溝2	滑石製品 温石	[6.3]	[6.6]	[1.7]		銀白色		φ約1cmの貫通孔。滑石鍋底部転用か
2.2	15	3面	溝2	鉄製品 釘	[5.2]	0.5	0.4				
2.2	16	3面	溝2	木製品 草履芯	[9.3]	[3.3]	0.3				
2.4	1	3面	方形竪穴1	かわらけ	8.4	6.0	1.65	橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	
2.4	2	3面	方形竪穴1	かわらけ	8.2	5.0	1.5	橙色/黒色粒・赤褐色粒・泥岩粒・白色粒・小石粒を含む		ロクロ	
2.4	3	3面	方形竪穴1	常滑窯 片口鉢I類	口縁部小片			灰色/白色粒・小石粒多く、砂質	灰色		6a型式
2.4	4	3面	方形竪穴1	常滑窯 片口鉢I類	口縁部小片			灰色/白色粒・小石粒多く、やや砂質	灰色		6a型式
2.4	5	3面	方形竪穴1	常滑窯 片口鉢I類		(13.9)		灰色/白色粒・小石粒多く、砂質	灰色		高台が取れた後、安定させるために削り加工している
2.4	6	3面	方形竪穴1	南部系 山茶碗	(15.6)			灰色/白色粒を含み、砂質	灰色		尾張型か6~7型式(13c第2~第3)
2.4	7	3面	方形竪穴1	常滑窯 甕		(17.6)		橙色/黒色粒・赤褐色粒・白色粒を含む	赤褐色		内外底部付近に煤痕あり
2.4	8	3面	方形竪穴1	研磨製品	9.5	8.3	0.8 ~1.5	灰色/白色粒を含み、砂質	灰色		常滑片口鉢I類底部片転用
2.4	9	3面	方形竪穴1	研磨製品	7.5	7.5	1.2	暗灰色/黒色粒・白色粒・長石を含む。やや砂質	暗灰色		常滑甕胴部片転用
2.4	10	3面	方形竪穴1	木製品 草履芯	[21.5]	4.5	0.4				
2.4	11	3面	方形竪穴1	木製品 箸	[15.5]	0.5	0.5				
2.7	1	3面	井戸1	かわらけ	12.8		3.3	淡褐色/黒色粒・白色粒を含む。精良		手づくね	
2.7	2	3面	井戸1	かわらけ	(11.8)	(7.0)	3.0	淡褐色/黒色粒・赤褐色粒・泥岩粒・白色粒・白針・小石粒を含む		ロクロ	
2.7	3	3面	井戸1	かわらけ	(8.8)	(7.3)	2.0	橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・白色粒・雲母を含む		ロクロ	
2.7	4	3面	井戸1	かわらけ	(7.6)	5.5	1.9	橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・白色粒・雲母を含む		ロクロ	
2.7	5	3面	井戸1	かわらけ	(7.6)	(6.1)	2.6	白褐色/泥岩粒多く、黒色粒・白色粒を含む		ロクロ	
2.7	6	3面	井戸1	かわらけ	(7.0)	(5.6)	2.0	白褐色/黒色粒・泥岩粒・白色粒を含む		ロクロ	
2.7	7	3面	井戸1	龍泉窯 青磁 鑄蓮弁文碗		(4.9)		灰白色/黒色粒含み、精良	透明な灰緑色		遺存部は全釉で高台内に鉄砂が均等に付着している
2.7	8	3面	井戸1	瓦器皿	(5.3)		0.6	白~灰色/雲母多く、精良だがやや砂質	白~黒灰色	手づくねで内折れ	一部炭素吸着して黒くなっている
2.7	9	3面	井戸1	研磨製品	10.8	7.2	0.9 ~1.2	暗灰色/白色粒多く、黒色粒・長石を含む。やや砂質	茶褐色	菊花形の叩き目有り	常滑甕胴部片転用
2.7	10	3面	井戸1	研磨製品	4.6	6.0	0.7 ~0.9	灰褐色/白色粒多く、黒色粒・長石を含む。やや砂質	茶褐色		常滑甕胴部片転用
2.7	11	3面	井戸1	研磨製品	4.9	5.5	0.8	灰色/白色粒・小石粒多く、砂質	灰色		常滑片口鉢I類胴部転用
2.7	12	3面	井戸1	瓦 丸瓦	[9.4]	[8.1]	1.7	暗灰色/白色粒多く、黒色粒を含み、焼締まる	暗灰色		玉緑部
2.7	13	3面	井戸1	鉄製品	10.5	0.5	0.4				釘の転用品?

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長さ	底径 /幅	器高 /厚さ	胎土	色調	成形	備考
27	14	3面	井戸1	漆製品 皿	(8.8)	(6.0)	1.8				遺存部外側に赤色 漆文の不明文様あり。 内面に黒色漆箔 が付着。外底は削り とられたのか木地が 出ている
27	15	3面	井戸1	漆製品 皿		5.0					遺存部には文様無し
27	16	3面	井戸1	漆製品 椀	胴部小片						内外に赤色漆の不明 文様あり
27	17	3面	井戸1	木製品 刀子の鞘	29.5	3.2	0.5				吞入式の形状ではあ るが刀身のための削 り込みがないタイプ
27	18	3面	井戸1	木製品 箸	20.3	0.5	0.6				
27	19	3面	井戸1	木製品 箸	21.2	0.7	0.5				
27	20	3面	井戸1	木製品 箸	21.2	0.6	0.5				
27	21	3面	井戸1	木製品 箸	23.4	0.5	0.4				
27	22	3面	井戸1	木製品 箸	23.6	0.6	0.5				
27	23	3面	井戸1	木製品 箸	25.8	0.6	0.4				
27	24	3面	井戸1	木製品 箸	26.7	0.8	0.6				
29	1	3面	土坑5	かわらけ	(11.4)	(7.9)	2.9	橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・ 白色粒・雲母を含む		ロクロ	灯明皿
29	2	3面	土坑5	常滑窯 片口鉢I類	口縁~胴部小片			灰色/白色粒・小石粒多く、 砂質	灰色		6a型式
29	3	3面	土坑6	かわらけ	(7.2)	(6.0)	1.5	淡橙色/黒色粒・赤褐色粒・ 白色粒・雲母を含む。精良		ロクロ	
29	4	3面	土坑6	かわらけ	8.4	6.8	1.9	淡橙色/、黒色粒・赤褐色粒・ 白色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
29	5	3面	土坑15	常滑窯 片口鉢I類	口縁部小片			灰色/白色粒・小石粒多く、 砂質	灰色		6a型式
29	6	3面	土坑15	常滑窯 片口鉢I類		[14.2]		灰色/白色粒多く、砂質	灰色		高台が剥がれてしま っている。重ね焼き の跡有り
29	7	3面	土坑15	研磨製品	5.0	5.7	1.0	胎芯黄橙色/白色粒・長石 を含む	茶褐色		常滑甕胴部片転用
29	8	3面	土坑15	木製品 蓋	[30.7]	[7.2]	1.0				2カ所にφ0.2~ 0.4の貫通孔有り。 分まわしの切り印が 残る
29	9	3面	土坑15	木製品 草履芯	22.8	(9.0)	0.3				
29	10	3面	土坑16	かわらけ	12.4	8.5	3.3	橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・ 泥岩粒・白色粒・白針・雲 母を含む		ロクロ	
29	11	3面	土坑16	かわらけ	12.4	7.8	3.0	橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・ 泥岩粒・白色粒・雲母を含 む		ロクロ	
29	12	3面	土坑16	かわらけ	11.8	7.4	3.4	橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・ 泥岩粒・白色粒・白針・雲 母を含む		ロクロ	
29	13	3面	土坑16	かわらけ	11.8	8.1	3.1	淡橙色/黒色粒・赤褐色粒・ 白色粒・泥岩粒・雲母を含 む		ロクロ	
29	14	3面	土坑16	かわらけ	12.2	8.3	3.0	淡橙色/黒色粒・赤褐色粒・ 白色粒・泥岩粒・雲母を含 む		ロクロ	灯明皿
29	15	3面	土坑16	かわらけ	11.8	8.4	2.9	淡橙色/黒色粒・赤褐色粒・ 白色粒・泥岩粒・雲母を含 む		ロクロ	
29	16	3面	土坑16	かわらけ	12.2	8.1	3.1	淡橙色/黒色粒・赤褐色粒・ 白色粒・泥岩粒・雲母を含 む		ロクロ	

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長さ	底径 /幅	器高 /厚さ	胎土	色調	成形	備考
29	17	3面	土坑16	かわらけ	11.8	8.2	2.7	白褐色/泥岩粒多く、黒色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
29	18	3面	土坑16	かわらけ	8.2	7.1	1.5	白褐色/泥岩粒多く、黒色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
29	19	3面	土坑16	かわらけ	(8.0)	(6.2)	1.7	白褐色/泥岩粒多く、黒色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
29	20	3面	土坑16	かわらけ	(7.8)	(5.5)	1.7	白褐色/泥岩粒多く、黒色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
29	21	3面	土坑16	龍泉窯 青磁 鍋蓮弁文碗	(15.8)			灰色/黒色粒を含む。精良	灰緑色		
29	22	3面	土坑16	青白磁 小皿	口縁部小片			白色/精良	水青色釉。 内外面は薄い 透明釉		
29	23	3面	土坑16	石製品 砥石	4.6	4.8	0.7		黄灰色		鳴滝産仕上砥 頁岩
29	24	3面	土坑17	龍泉窯 青磁 鍋蓮弁文碗		(6.5)		白灰色/黒色粒を含む。精良	透明な灰緑色		遺存部高台内無釉
29	25	3面	土坑17	常滑窯 甕	口縁部小片			暗灰褐色/白色粒多く、黒色粒・長石を含む	暗褐色		6b型式
29	26	3面	土坑17	研磨製品	8.0	11.1	10.2	暗灰色/黒色粒・白色粒多く、長石を含む。やや砂質	茶褐色		常滑甕胴部片転用
29	27	3面	土坑17	研磨製品	7.3	6.2	0.8	灰色/黒色粒・白色粒・長石を含む。焼締まる	茶褐色		常滑甕胴部片転用
29	28	3面	土坑17	銭 紹聖元宝	2.4	2.4					初鑄年 北条 1094年 篆書
30	1	3面	土坑18	研磨製品	8.0	8.0	1.0	灰色/黒色粒・白色粒・長石を含む。焼締まる	灰色		常滑甕胴部片転用。
30	2	3面	土坑21	かわらけ	(13.7)	(8.7)	3.1	淡褐色/黒色粒・白色粒・泥岩粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
30	3	3面	土坑21	かわらけ	(8.5)			橙色/黒色粒・白色粒を含む。精良		手づくね	
30	4	3面	土坑21	常滑窯 片口鉢1類	口縁部小片			灰色/白色粒・小石粒多く、砂質	灰色		6a型式
30	5	3面	土坑21	研磨製品	10.5	13.3	1.3	暗灰色/白色粒多く、黒色粒・長石を含む	暗褐色		常滑甕胴部片転用
30	6	3面	土坑21	研磨製品	5.5	4.3	0.8 ~1.2	黄灰色/白色粒多く、長石を含む。砂質	茶褐色		常滑甕胴部片転用。 二次焼成を受ける
30	7	3面	土坑21	研磨製品	7.0	14.0	1.4	灰色/黒色粒・白色粒を含み、精良。焼締まる	光沢のある 灰色		渥美甕胴部片転用
30	8	3面	土坑22	かわらけ	(7.75)	(5.0)	(1.2)	白褐色/泥岩粒多く、黒色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
30	9	3面	土坑22	かわらけ	(7.6)	(5.3)	1.8	白褐色/泥岩粒多く、黒色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
30	10	3面	土坑22	かわらけ	(6.9)	(4.9)	2.0	淡褐色/黒色粒・白色粒・泥岩粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
30	11	3面	土坑22	白かわらけ	(12.0)			白/精良	白~黒灰色	手づくね	灯明皿。表面滑らか
30	12	3面	土坑22	研磨製品	6.3	5.7	1.0	黄灰色/白色粒多く、長石を含む。砂質	茶褐色		常滑甕胴部片転用
30	13	3面	土坑22	石製品 硯	[3.6]	[3.6]	[0.8]		粘性の有る黒		頁岩。雄勝玄昌石製。 四葉硯で硯頭に近い 右側面
30	14	3面	土坑22	木製品 形代	[7.9]	2.0	0.2				羽子板
30	15	3面	土坑22	木製品 杓文字	23.8	6.8	1.0				
30	16	3面	土坑22	木製品 箸	20.2	0.8	0.5				
31	1	3面	土坑23	かわらけ	12.2	8.4	3.1	白褐色/泥岩粒多く、黒色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
31	2	3面	土坑23	かわらけ	12.0	8.2	3.0	橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・白色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
31	3	3面	土坑23	かわらけ	(12.4)	(8.0)	2.7	橙色/赤褐色粒多く、黒色・泥岩粒・白色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	

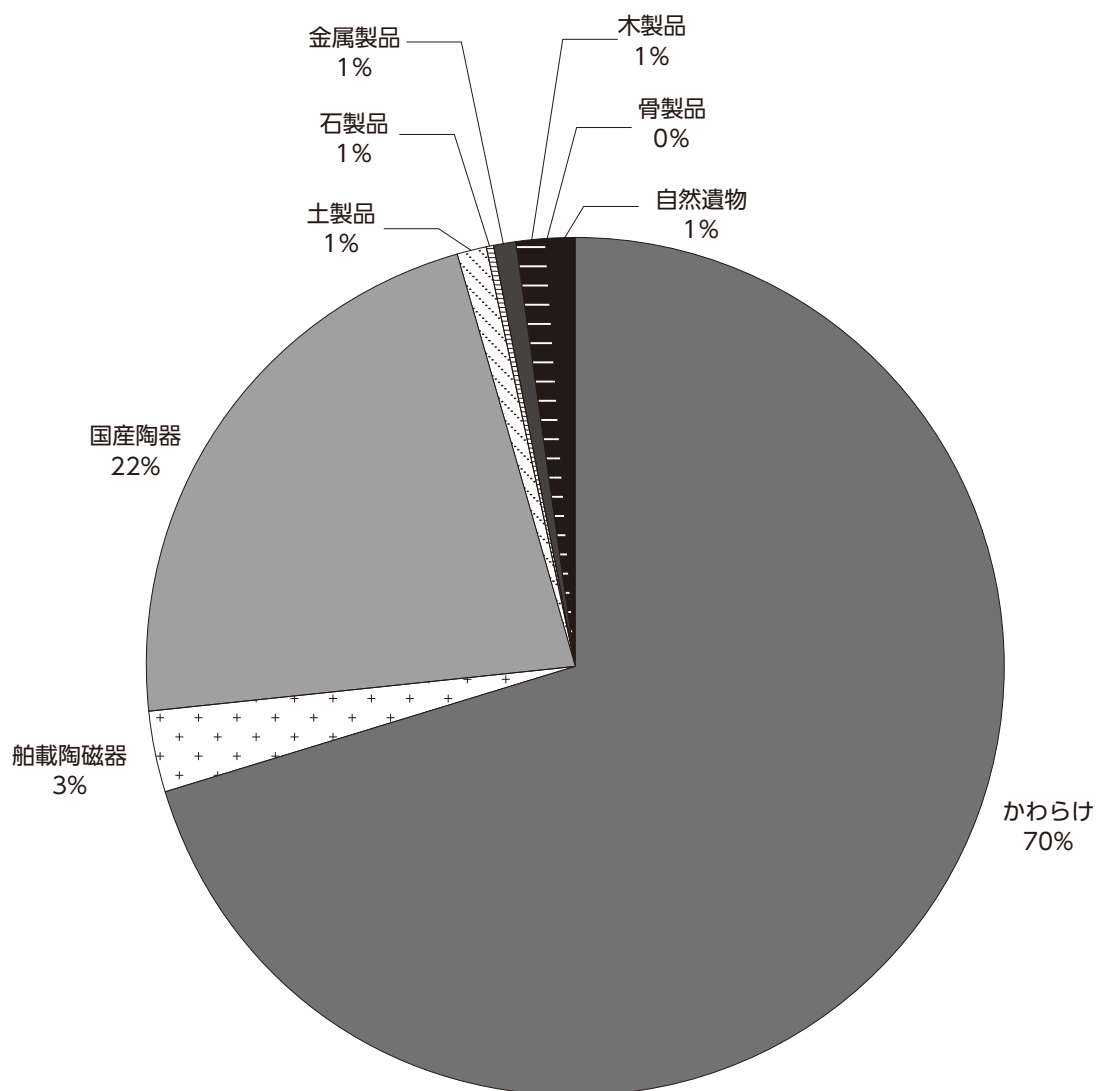
図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長さ	底径 /幅	器高 /厚さ	胎土	色調	成形	備考
3 1	4	3面	土坑2 3	かわらけ	1 1. 6	7. 6	3. 2	橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・泥岩粒・白色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
3 1	5	3面	土坑2 3	かわらけ	1 1. 6	8. 3	3. 1	橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・泥岩粒・白色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
3 1	6	3面	土坑2 3	かわらけ	1 1. 4	8. 0	3. 1	淡橙色/黒色粒・赤褐色粒・白色粒・泥岩粒・白針・雲母を含む		ロクロ	灯明皿
3 1	7	3面	土坑2 3	かわらけ	(1 1. 8)	9. 0	3. 5	淡褐色/黒色粒・赤褐色粒・白色粒・泥岩粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
3 1	8	3面	土坑2 3	かわらけ	(1 1. 6)	7. 8	2. 9	淡褐色/黒色粒・赤褐色粒・白色粒・泥岩粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
3 1	9	3面	土坑2 3	かわらけ	1 1. 4	8. 0	3. 3	白褐色/泥岩多く、黒色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	灯明皿
3 1	10	3面	土坑2 3	かわらけ	(1 2. 6)	7. 2	3. 0	淡褐色/黒色粒・赤褐色粒・白色粒・雲母を含む		ロクロ	
3 1	11	3面	土坑2 3	かわらけ	(7. 8)		1. 9	白褐色/3mm大の泥岩粒多く、黒色粒・白色粒・白針・雲母を含む		手づくね	
3 1	12	3面	土坑2 3	かわらけ	7. 8	5. 9	1. 7	白褐色/黒色粒・赤褐色粒・白色粒・泥岩粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
3 1	13	3面	土坑2 3	かわらけ	(7. 6)	(6. 7)	1. 4	白褐色/黒色粒・白色粒・泥岩粒・白針・雲母を含む		ロクロ	灯明皿
3 1	14	3面	土坑2 3	常滑窯片口鉢I類	口縁部小片			灰色/白色粒・小石粒多く、砂質	灰色		6a型式
3 1	15	3面	土坑2 3	研磨製品	7. 5	3. 3	0. 9	胎芯黄褐色/白色粒多く、長石を含む	茶褐色		常滑甕胴部片転用
3 1	16	3面	土坑2 3	研磨製品	8. 3	9. 9	1. 2	胎芯橙色/白色粒・長石を含む	茶褐色		常滑甕胴部片転用
3 1	17	3面	土坑2 3	研磨製品	5. 0	9. 1	1. 1	胎芯橙色/白色粒・長石を含む	茶褐色		常滑甕胴部片転用
3 1	18	3面	土坑2 3	不明木製品	1 2. 2	1 0. 3	3. 2				割り物
3 1	19	3面	土坑2 3	不明木製品	5 7. 2	2 0. 4	1. 8				3cm×2cmの長円形穿孔・釘穴有り
3 2	1	3面		かわらけ	(1 3. 0)	(8. 8)	(2. 9)	白褐色/泥岩粒多く、黒色粒・赤褐色粒・白色粒を含む		ロクロ	
3 2	2	3面		かわらけ	(1 2. 8)	8. 2	3. 2	淡褐色/黒色粒・赤褐色粒・白色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
3 2	3	3面		かわらけ	(1 2. 4)			淡褐色/黒砂・赤褐色粒・白色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
3 2	4	3面		かわらけ	(1 2. 4)	7. 5	3. 2	橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・泥岩粒・白色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
3 2	5	3面		かわらけ	(1 2. 6)	(7. 8)	3. 4	淡褐色/黒色粒・赤褐色粒・白色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
3 2	6	3面		かわらけ	1 2. 2	7. 4	2. 7	淡褐色/赤褐色粒多く、黒色粒・白色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
3 2	7	3面		かわらけ	(9. 6)	(7. 3)	1. 8	黄褐色/黒色粒・赤褐色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
3 2	8	3面		かわらけ	(8. 6)	5. 7	1. 9 5	淡褐色/黒色粒・赤褐色粒・白色粒・雲母を含む		ロクロ	灯明皿
3 2	9	3面		かわらけ	(7. 8)	(5. 9)	(1. 7)	橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・泥岩粒・白色粒・雲母を含む		ロクロ	
3 2	10	3面		かわらけ	(7. 8)	(5. 9)	1. 8	橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・泥岩粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	
3 2	11	3面		かわらけ	(7. 6)	(5. 5)	1. 5	橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・白色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
3 2	12	3面		かわらけ	(7. 1)	(5. 3)	(1. 3)	黄褐色/黒砂・泥岩粒・白針を含む		ロクロ	
3 2	13	3面		かわらけ	(6. 8)	(4. 3)	1. 7	橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・泥岩粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長さ	底径 /幅	器高 /高さ	胎土	色調	成形	備考
3 2	14	3面		かわらけ	(8.8)	(7.0)	1.9	黄橙色/泥岩粒多く、黒色粒・赤褐色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
3 2	15	3面		かわらけ	(8.8)	(6.7)	1.7	黄橙色/黒色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
3 2	16	3面		かわらけ	(7.8)	(5.2)	(1.9)	黄橙色/泥岩粒多く、黒色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	
3 2	17	3面		かわらけ	7.4	(1.9)	1.7	黄橙色/泥岩粒多く、黒色粒・雲母を含む		ロクロ	
3 2	18	3面		かわらけ	(7.7)	(5.7)	(1.2)	橙色/赤褐色粒多く、黒色粒・白色粒・白針・雲母を含む		ロクロ	灯明皿
3 2	19	3面		龍泉窯 青磁 鎚蓮弁文碗	(15.8)			灰色/精良	透明な 緑茶褐色		
3 2	20	3面		龍泉窯 青磁 無文碗	口縁部小片			灰色/精良	透明な 緑灰褐色		釉は薄い
3 2	21	3面		龍泉窯 青磁 折腰皿	口縁部小片			暗灰色/精良	不透明な 暗緑色		
3 2	22	3面		白磁 口兀皿	口縁部小片			白色/精良。やや砂質	薄い透明釉		
3 2	23	3面		青白磁 合子蓋	合わせ口小片			白色/精良	内外面 水青色釉	合わせ口は釉を 搔く	印花文
3 2	24	3面		高麗青磁 器種不明	胴部小片			灰色/精良	灰緑色の釉で 透明度がある	象嵌	鶴文で鶴の足は黒。 内面にも薄い透明釉 がかかる
3 2	25	3面		舶載品 黒褐釉小壺	(7.6)	(5.2)	(9.0)	茶褐色/精良	黒褐色	肩・胴部に一条 の沈線有り。口 縁は玉緑様	産地不明。光沢のある 釉で浸け掛け
3 2	26	3面		泉州窯 黄釉盤	底部小片			灰黄色/砂粒混じりやや砂 質	黄褐色		内面に鉄絵の不明文 様あり。鉄釉は白濁 している。外底は微 細砂底
3 2	27	3面		瀬戸窯 水注	口縁部小片			灰白色/黒色粒含み、精良	灰白色		
3 2	28	3面		常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片			灰色/白色粒多く、砂質	灰色		6a型式
3 2	29	3面		常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片			灰色/白色粒多く、砂質	灰色		6a型式
3 2	30	3面		常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部小片			灰色/白色粒多く、砂質	灰色		6a型式
3 2	31	3面		南部系 山茶碗	口縁部小片			灰色/白色粒を含み、砂質	灰色		常滑窯か13c中
3 2	32	3面		東遠型 山茶碗		3.6		灰白色/精良	緑灰色		13c初頭
3 2	33	3面		常滑窯 甕	口縁部小片			灰色/白色粒多い	茶褐色		5型式
3 2	34	3面		常滑窯 甕	口縁部小片			灰色/白色粒多い	赤褐色		5型式
3 2	35	3面		常滑窯 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片			橙色/白色粒多く、赤褐色 粒を含む	赤褐色		5型式
3 2	36	3面		常滑窯 鳶口壺		(9.0)		黒灰色/白色粒多い	赤褐色	外底上は へら削り	内面上部に煤痕
3 2	37	3面		研磨製品	10.5	12.8	1.5	暗灰色/白色粒多く、黒色粒・ 長石を含む	茶褐色		常滑甕胴部片転用
3 2	38	3面		研磨製品	6.5	13.7	1.2	暗灰色/白色粒・黒色粒多 く、砂質	緑灰色		常滑甕頸部片転用
3 2	39	3面		研磨製品	6.5	8.0	1.4	暗灰色/白色粒多く、黒色粒・ 長石を含む	緑灰色		常滑甕胴部片転用
3 2	40	3面		研磨製品	6.5	10.5	1.3	暗灰色/白色粒多く、黒色粒・ 長石を含む	茶褐色		常滑甕胴部片転用
3 2	41	3面		研磨製品	8.7	8.4	1.1	暗褐色	灰色		常滑甕胴部片転用
3 3	1	3面		研磨製品	7.5	6.6	1.2	暗灰色/白色粒・黒色粒多 く、砂質	緑灰色		常滑甕胴部片転用
3 3	2	3面		研磨製品	10.2	7.4	1.4	暗灰色/白色粒・黒色粒多 く、砂質	緑灰色		常滑甕胴部片転用

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長さ	底径 /幅	器高 /厚さ	胎土	色調	成形	備考
33	3	3面		研磨製品	4.5	5.4	1.2	灰黄色/黄白粒多く、やや砂質	緑灰色		常滑甗胴部片転用
33	4	3面		研磨製品	9.0	6.7	1.1	暗灰色/白色粒・黒色粒多く、やや砂質	暗褐色		常滑甗胴部片転用
33	5	3面		研磨製品	7.0	6.1	1.3	暗褐色/白色粒・黒色粒多く、やや砂質	緑灰色		常滑甗胴部片転用
33	6	3面		研磨製品	2.8	5.1	1.3	灰黄色/白色粒多く、黒色粒・長石を含む	茶褐色		常滑甗胴部片転用
33	7	3面		研磨製品	6.0	6.1	1.0	暗灰色/白色粒・黒色粒多く、やや砂質	赤褐色		常滑甗胴部片転用
33	8	3面		研磨製品	6.5	6.0	1.2	暗灰色/白色粒・黒色粒多く、やや砂質	暗灰色		常滑甗胴部片転用
33	9	3面		研磨製品	5.0	4.7	1.2	暗褐色/精良でやや砂質	赤褐色		常滑甗胴部片転用
33	10	3面		亀山窯 甗	胴部小片			灰色/白色粒含み、やや軟質	暗灰色		外面は格子印目。内面の印目は無い
33	11	3面		白かわらけ	口縁部小片			白色/白色粒を含み、砂質	灰白色	ロクロ	
33	12	3面		瓦 丸瓦	(6.5)	(10.0)	2.1	灰色/白色粒・雲母を含み、砂質	灰色		凸面は叩き目残らず、凹面に布目痕残る
33	13	3面		土製品 錘	4.9	1.4	0.4	橙色/精良	橙色		
33	14	3面		鉄製品 釘	[7.4]	0.4	0.5				
33	15	3面		鉄製品 釘	[5.0]	[0.7]	[0.8]				
33	16	3面		木製品 杓文字	[8.5]	[2.7]	0.2				
33	17	3面		木製品 人形	8.0	1.7					
37	1	4面	井戸2	白磁 合子蓋	小片			白色/精良	透明釉	内面に施釉残るが、合わせ口にかけては露胎	
37	2	4面	井戸2	木製品 箸	20.0	0.5	0.3				
39	1	4面	土坑24	木製品 箸	[19.7]	0.8	0.4				
39	2	4面	土坑24	木製品 箸	22.8	0.6	0.5				
39	3	4面	土坑24	木製品 箸	25.4	0.8	0.4				
40	1	4面		かわらけ	(11.8)	(8.2)	3.0	淡橙色/黒色粒・赤褐色粒・白色粒・白針を含む		ロクロ	灯明皿
40	2	4面		かわらけ	8.2	5.8	1.7	淡橙色/黒色粒・赤褐色粒・白色粒・雲母を含む		ロクロ	
40	3	4面		龍泉窯 青磁 無文碗	(9.0)			灰白色/精良	灰緑色		
40	4	4面		龍泉窯 青磁 劃花文碗	(14.0)			灰色/精良	透明な 緑茶褐色		
40	5	4面		龍泉窯 青磁 劃花文碗	口縁部小片			灰色/精良	透明な 緑茶褐色		
40	6	4面		龍泉窯 青磁 劃花文碗		(5.7)		灰色/精良	透明な 緑茶褐色		内底面に蓮華文
40	7	4面		龍泉窯 青磁 鎚蓮弁文碗	口縁部小片			灰色/精良	灰緑色		
40	8	4面		高麗青磁 瓶子	頸部小片			灰色/精良	灰緑色	白土及び黒土の象嵌	模様不明。内面にも施釉
40	9	4面		渥美窯 甗	口縁部～頸部小片			灰色/白色粒を多く含み、精良。やや砂質	黒色～灰黄色		口縁部内外刷毛塗り
40	10	4面		渥美窯 甗	口縁部小片			黒灰色/白色粒を多く含み、精良。やや砂質	黒色～灰色		口縁部内側刷毛塗り
40	11	4面		渥美窯 片口鉢		(11.0)		白灰色/白色粒・雲母を含み、精良。やや砂質	灰橙色～灰色		生焼け。二次被熱の為赤みがる

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長さ	底径 /幅	器高 /厚さ	胎土	色調	成形	備考
40	12	4面		研磨製品	10.2	12.8	1.0	灰色/黒色粒を多く含み、 精良。やや砂質	暗灰色		渥美養胴部片
40	13	4面		研磨製品	6.5	6.8	1.0	灰黄色/白色粒多く含み、 焼締まる	暗赤褐色		常滑養胴部片
40	14	4面		研磨製品	5.5	6.7	1.1	灰色/白色粒を多く含み、 精良。やや砂質	赤褐色		常滑養胴部片
40	15	4面		研磨製品	4.6	4.2	1.0	灰色/白色粒多く含み、焼 締まる	白・茶褐色 降灰釉		常滑養胴部片
40	16	4面		研磨製品	6.1	7.8	0.9	灰色/黒色粒を多く含み、 精良。やや砂質	暗灰色		渥美養胴部片
40	17	4面		研磨製品	4.1	4.5	0.9	灰黄色/白色粒多く含み、 焼締まる	白・茶褐色 降灰釉		常滑養胴部片
40	18	4面		研磨製品	5.5	4.4	1.4	灰色/黒色粒・白色粒を多 く含む。焼締まる	緑灰色の 降灰釉		常滑養胴部片
40	19	4面		研磨製品	5.5	7.5	1.2	暗灰色/白色粒・黒色粒多 く、やや砂質	暗赤褐色		常滑養胴部片
40	20	4面		研磨製品	5.2	7.3	0.9 ~1.4	灰色/黒色粒を含み、精良。 やや砂質	暗灰色		渥美片口鉢胴部片転 用
40	21	4面		かわらけ 加工品 円盤		径(3.3)		灰白色/黒色粒・赤褐色粒・ 白色粒・雲母を含む			かわらけ底部を打ち 欠き円盤に加工
40	22	4面		石製品 硯	[1.3]	[4.0]	[4.1]		灰紫色		側足付き方硯。赤間 ヶ石産(紫雲石)。 側足部遺存
40	23	4面		滑石加工品	2.5	10.9	1.9		光沢のある 灰色		滑石鍋転用。加工品 の破片かV字型の鑿 跡が残る
40	24	4面		木製品 箸	[16.8]	0.5	0.5				
40	25	4面		木製品 箸	19.3	0.6	0.5				
41	1	古代 以前	4面	土師器 甕	口縁部小片			橙色/砂粒多い。雲母含む	外面黄橙色		
41	2		4面	土師器 鉢?	口縁部小片			淡橙色/微砂少量、赤褐色粒・ 雲母含む			
41	3		1面まで	須恵器 高台付坏	(14.0)	(11.7)	(4.0)	灰白色/白色粒含みやや砂 質			
41	4		4面	須恵器 甕	胴部小片			灰白色/砂粒少なく、よく 焼き締まる			
41	5		1面まで	須恵器 甕	胴部小片			胎芯暗灰色/砂粒少なく、 よく焼き締まる	外面灰白色		
41	6		4面まで	須恵器 壺?	胴部小片			灰色/黒色粒・白色粒を多 く、やや砂質			

若宮大路周辺遺跡群出土遺物比率



図版1

調査地点 (東から) A. ▶

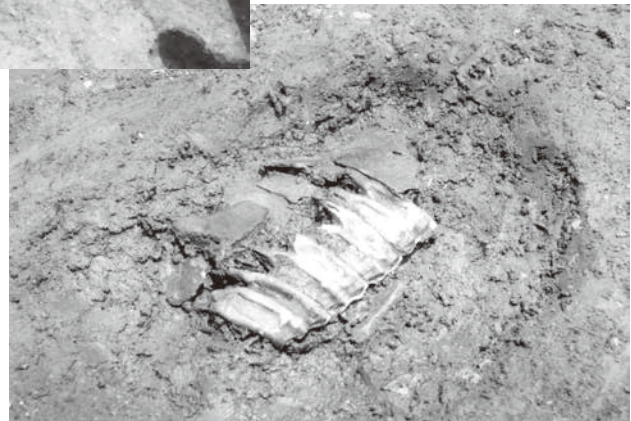


▼ B. 1面西半 (南から)



▲ C. 1面東半 (南から)

2面覆土出土獣骨 (北西から) D. ▶



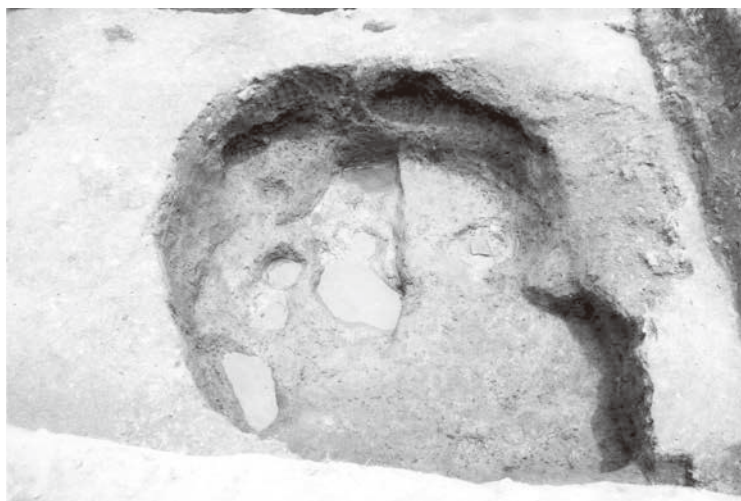
◀ A. 2面西半 (南から)



2面東半 (南から) B. ▶

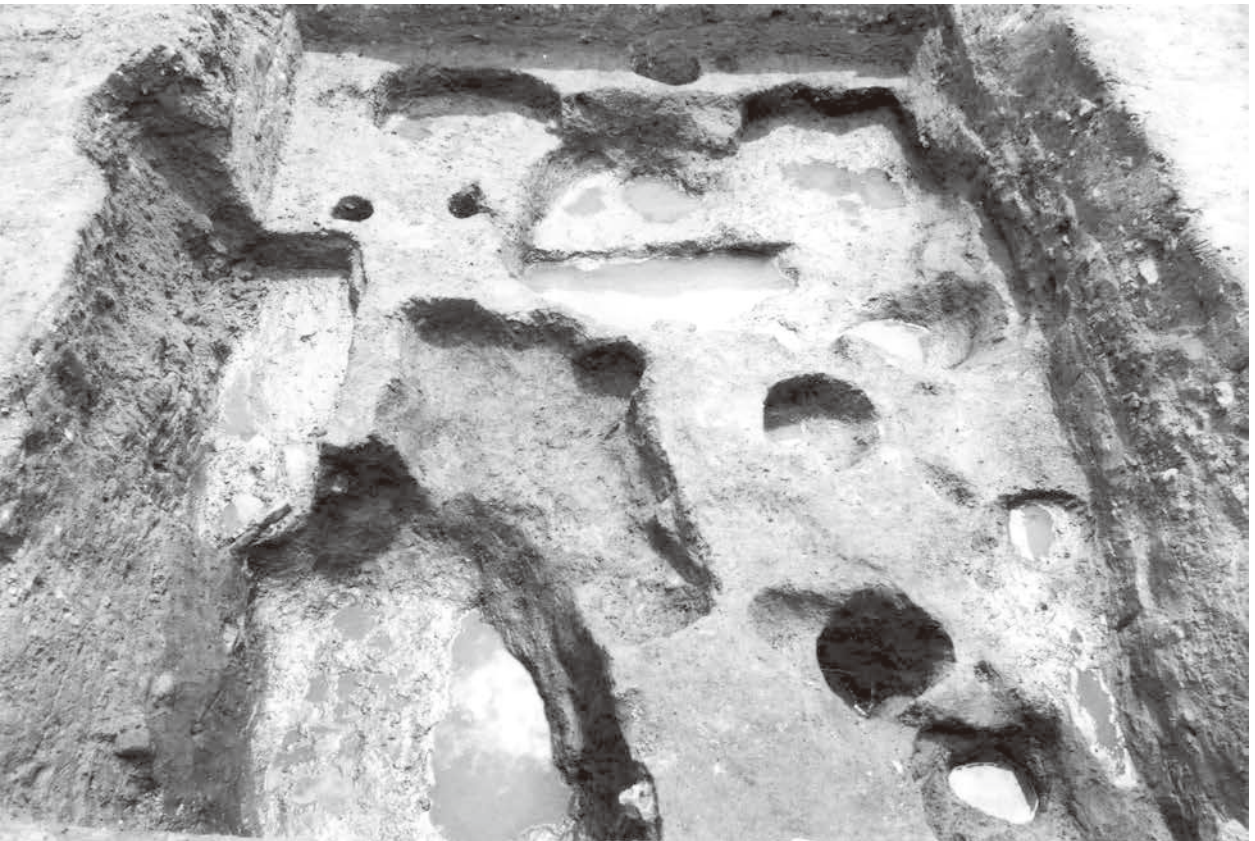


2面土坑3・方形土坑3 (南から) C. ▶





▲ A. 3面西半 (東南から)



▲ B. 3面西半 (北から)

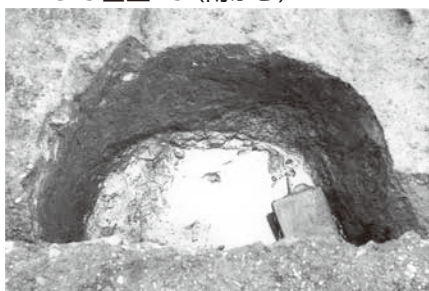


▲ A. 3面東半 (南から)

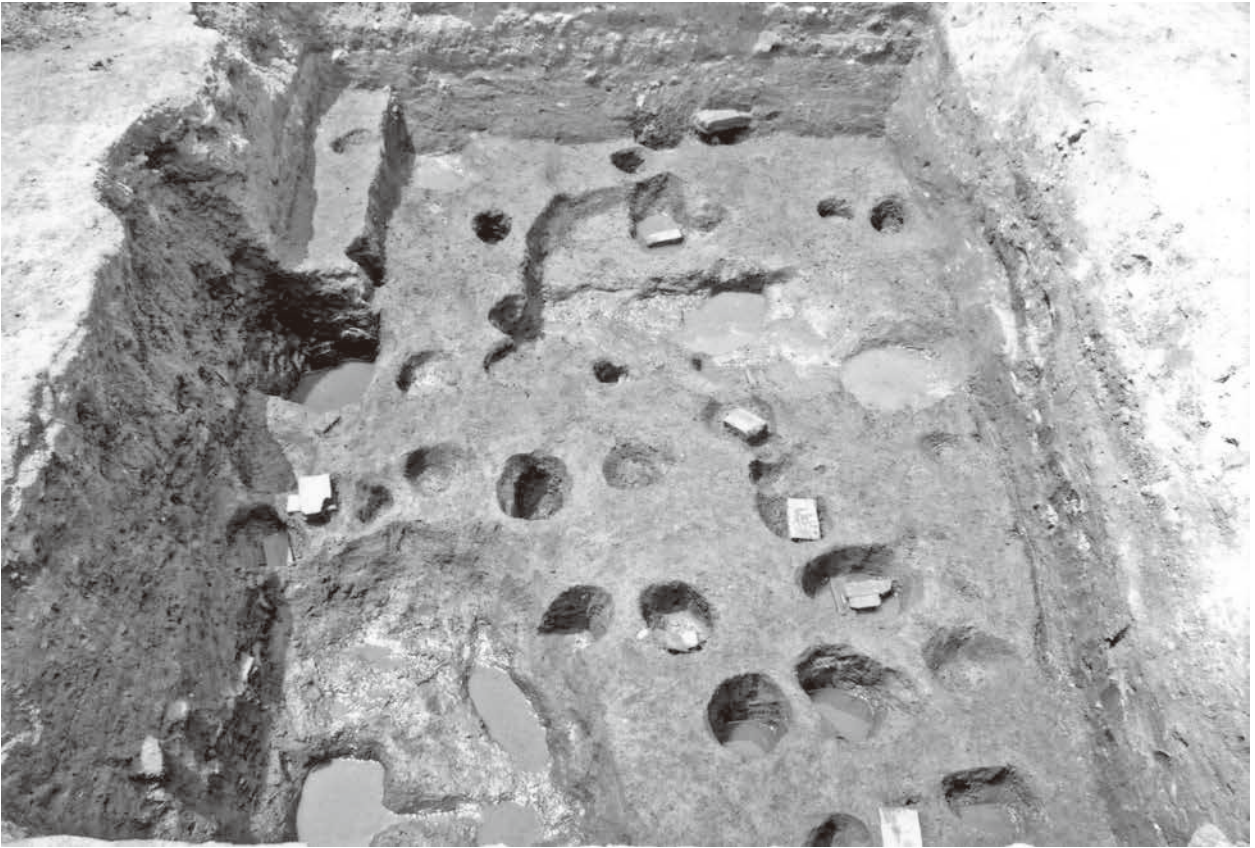


▲ B. 3面東半 (東から)

▼ C. 3面土23 (南から)



◀ D. 3面Pあ・r
(南西から)



▲ A. 4面西半 (北から)



▲ B. 4面東半 (南から)

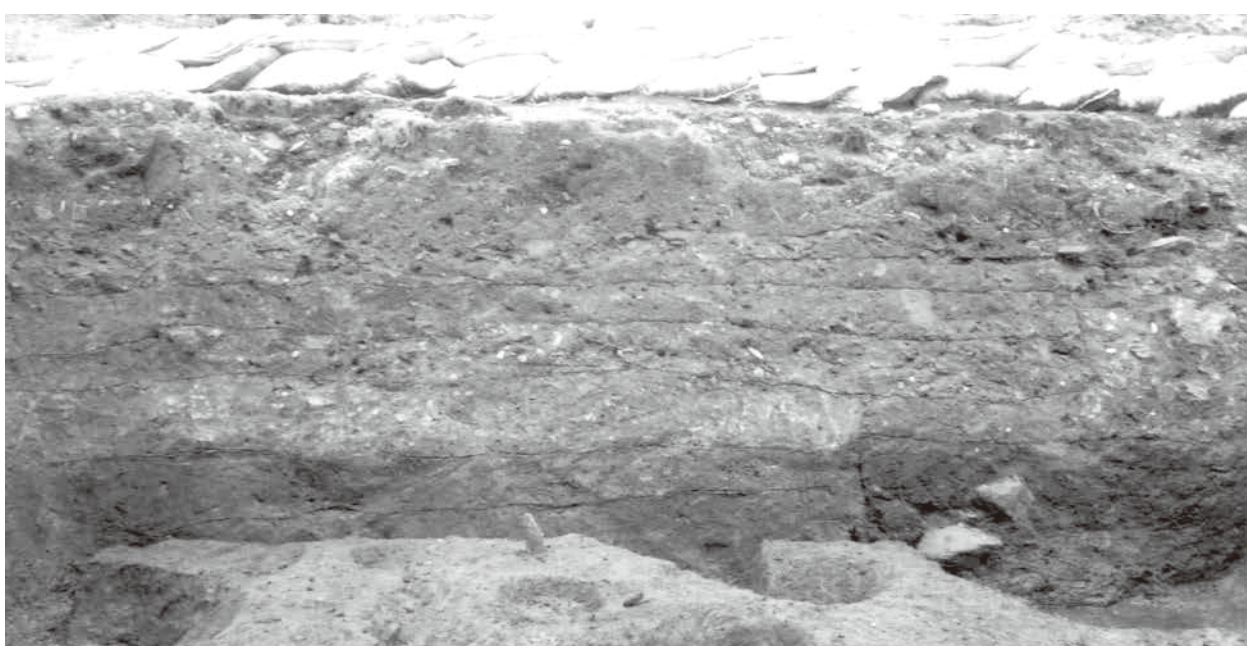
◀ A. 4面東半 (東から)



▲ B. 4面Pす (東南から)



▲ C. 4面井戸2 (北から)



▲ D. 南壁土層

图版 7

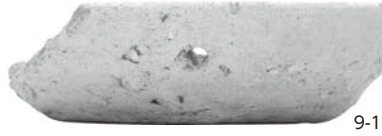
土坑 1



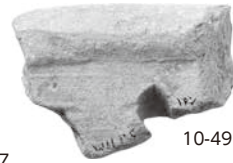
土坑 2



表土层



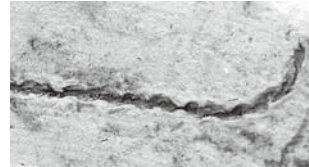
1 面



方形土坑 1



方形土坑 1 · 土坑 3



土坑 13



16-12

土坑 14



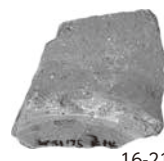
16-15



16-16



16-17



16-21

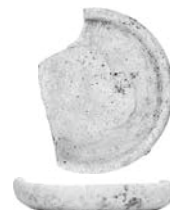
2 面



17-2



17-15



17-42



17-8



17-23



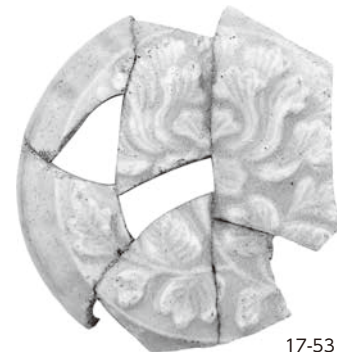
17-27



17-9



17-29



17-53



17-13



17-38



17-41



17-55



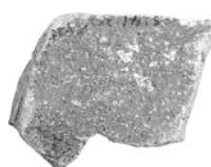
17-61



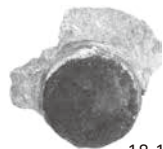
17-63



18-4



18-8



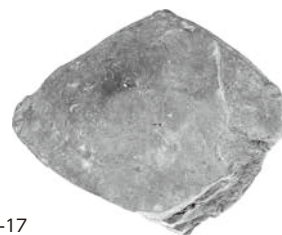
18-12



18-15

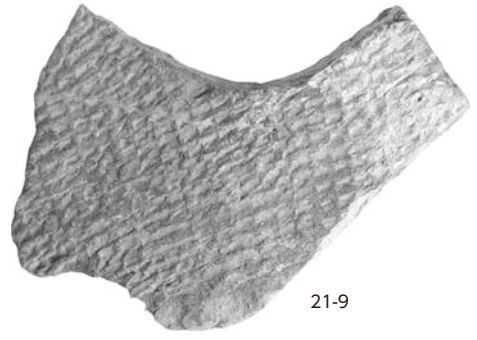
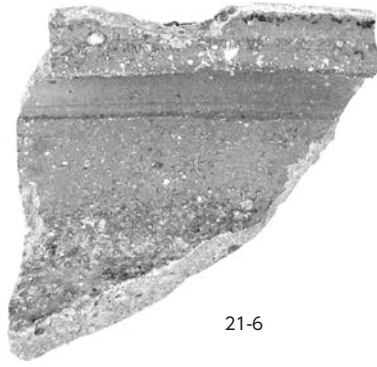


18-17

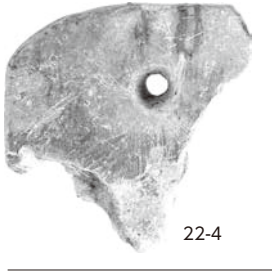


図版9

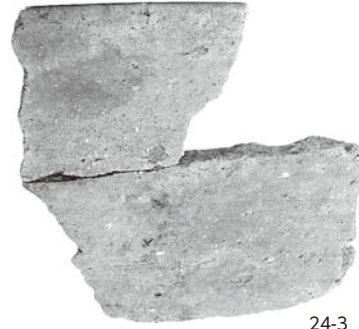
溝 1



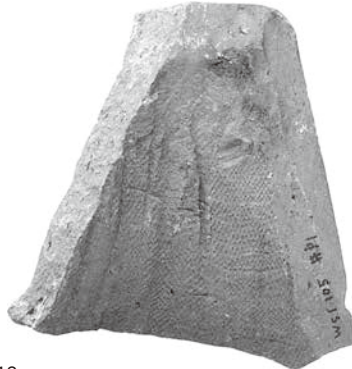
溝 2



方形竪穴 1



井戸 1



土坑 15



29-4

土坑 16



29-10



29-11



29-13



29-18



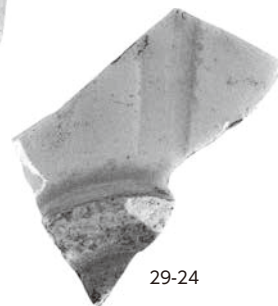
29-23



29-15



29-21



29-24

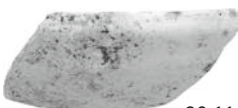


29-16

土坑 22



30-10



30-11



30-13



30-14



30-15

土坑 23



31-1



31-12



31-2



31-13



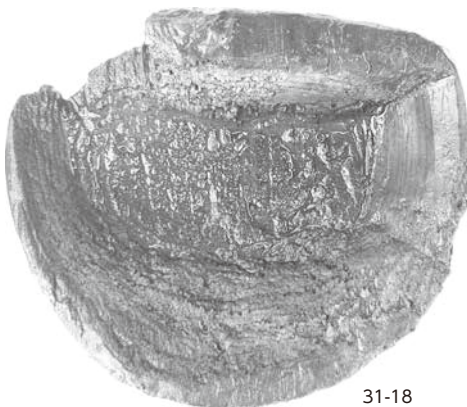
31-5



31-9



31-10



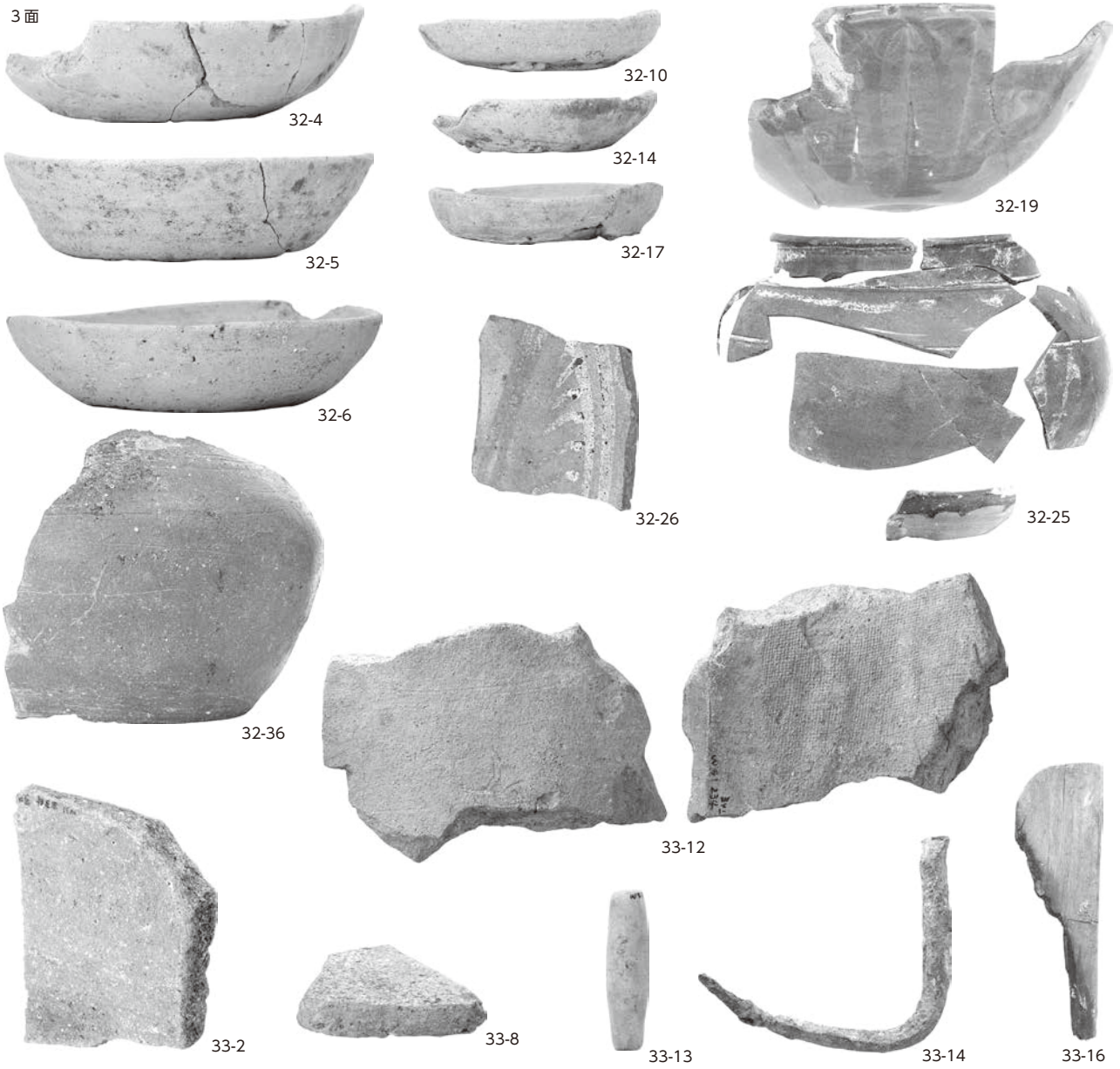
31-18



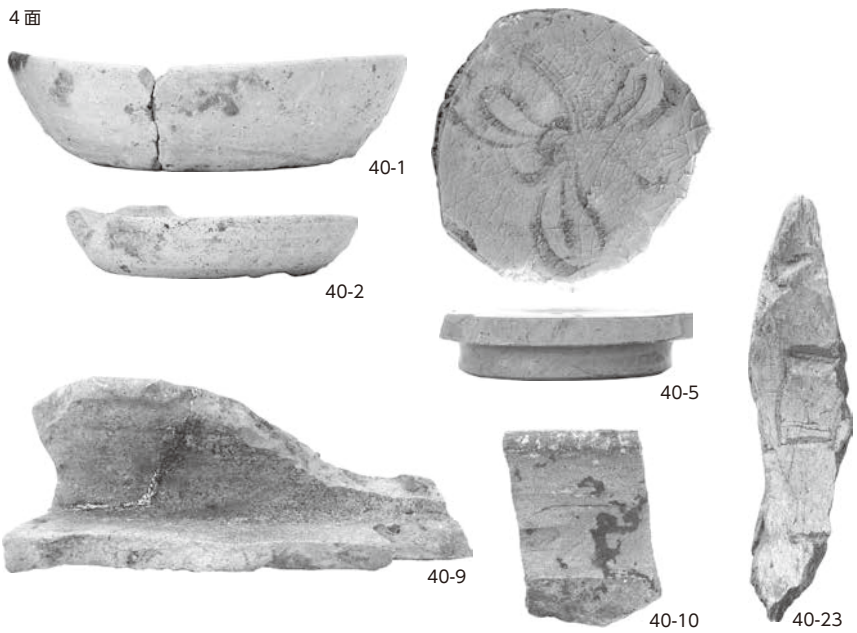
31-19

图版 11

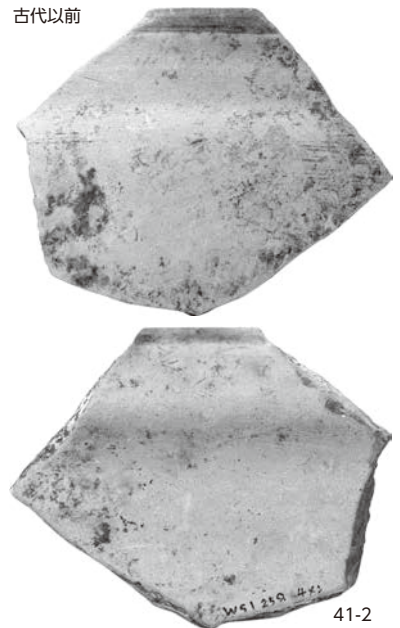
3面



4面



古代以前



由比方浜中世集団墓地遺跡 (No.372)

由比方浜四丁目 1107 番 32

例 言

1. 本報は、鎌倉市由比ガ浜1107番32における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急調査発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。
調査期間は平成17年9月14日～同年10月25日にかけて実施され、調査対象面積は73.5㎡である。出土遺物に関しては鎌倉市教育委員会がこれを保管している。
3. 調査団編成は以下のとおりである。
調査の主体 鎌倉市教育委員会
調査担当 森孝子
調査員 渡辺美佐子 下江秀信 倉方尚子
調査協力者 秋田公佑 倉沢六郎 佐藤美隆 片山昭 鈴木順治（以上、社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
4. 本書の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。
遺構図 1 / 80・1 / 40（遺構図の水糸高は海拔高を示す。）
遺物実測図 1 / 3・1 / 6・1 / 1（銭）
5. 遺物実測図には次の記号が使用されている。
軸の限界線 —・—・—・— 使用痕の範囲 <—————>
調整の変化点 — — — 加工痕の範囲 <— — — —>
6. 本書の執筆は古代の遺物を赤堀、他は森が行なった。
7. 本書の図版作成及び写真撮影、図版作成は次の者が分担した。
遺構図版 森孝子
遺物図版 松原康子 岩崎卓治 石元道子 森孝子
遺構写真 森孝子
遺物写真 赤堀祐子
写真図版 赤堀祐子
8. 現地調査及び資料整理においては、以下の方々からご助言、ご協力を賜った。お名前を記して感謝の意を表したい。（敬称略・順不同）
福田誠 馬淵和雄 原廣志 汐見一夫 瀬田哲夫 沖元道 押木弘己 菊川英政

目次

本文目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	329
第二章 調査経過	334
第1節 調査の経過	
第2節 調査区位置図・グリッド設定図 世界測地系による座標表示	
第3節 基本層序	
第三章 検出遺構と出土遺物	338
第1節 中世第1面	
第2節 中世第2面	
第四章 まとめ	357
遺物観察表	
貝分類表	

挿図目次

図1 本調査地点と周辺遺跡	330	図16 方形竪穴6出土遺物	345
図2 遺跡位置図	335	図17 方形土坑1	346
図3 グリッド配置図	336	図18 土坑1～7・溝状遺構1	347
図4 基本層序	337	図19 土坑1・2・5出土遺物	347
図5 1面遺構配置図	338	図20 表土層・攪乱層・1面出土遺物	348
図6 方形竪穴1	338	図21 2面遺構配置図	350
図7 方形竪穴1出土遺物	339	図22 方形竪穴7	351
図8 方形竪穴2	339	図23 方形竪穴8	352
図9 方形竪穴2出土遺物	340	図24 方形竪穴9	353
図10 方形竪穴3	340	図25 柱穴列	354
図11 方形竪穴3出土遺物	342	図26 方形土坑2	354
図12 方形竪穴4	342	図27 土坑8	354
図14 方形竪穴5出土遺物	343	図28 2面出土遺物	355
図13 方形竪穴5	343	図29 古代以前出土遺物	356
図15 方形竪穴6	344		

表 目 次

表 1 方形竪穴 1 概要表	339	表 9 方形竪穴 7 概要表	351
表 2 方形竪穴 2 概要表	339	表 10 方形竪穴 8 概要表	352
表 3 方形竪穴 3 概要表	341	表 11 方形竪穴 9 概要表	353
表 4 方形竪穴 4 概要表	341	表 12 柱穴列概要表	353
表 5 方形竪穴 5 概要表	343	表 13 方形土坑 2 概要表	354
表 6 方形竪穴 6 概要表	344	表 14 土坑 8 概要表	354
表 7 方形土坑 1 概要表	346	表 15 2面柱穴概要表	354
表 8 土坑 1～7・溝状遺構 1 概要表	347		

図 版 目 次

図版 1	369	図版 5	373
A. 調査地点 (北西から)		A. 2面方形竪穴 7 (西から)	
B. 1面北半 (南から)		B. 2面方形竪穴 7 北壁際柱穴群 (西から)	
C. 1面南半 (北から)		C. 2面方形竪穴 7・方形土坑 2 (南から)	
図版 2	370	図版 6	374
A. 1面方形竪穴 1 (北から)		A. 2面方形竪穴 8 (北から)	
B. 1面方形竪穴 2・4 (東から)		B. I区北壁土層	
C. 1面方形竪穴 3 南北セクション (東から)		C. II区東壁土層	
D. 1面方形竪穴 6 (北から)		図版 7	375
E. 1面方形竪穴 6 出土にぎりばさみ (北から)		出土遺物 (1)	
図版 3	371	図版 8	376
A. 1面溝状遺構 1・土坑 5・方形土坑 1 (北東から)		出土遺物 (2)	
B. 1面溝状遺構 1・土坑 5 (東から)		図版 9	377
C. 2面覆土出土常滑片口鉢 I 類		出土遺物 (3)	
図版 4	372		
A. 2面北半 (南から)			
B. 2面南半 (東から)			

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

本調査地点は鎌倉市由比ガ浜四丁目1107番32（遺跡番号NO.372）に所在する。由比ヶ浜より北に210m、鎌倉市街地を貫通する若宮大路の西側50mの場所である。本遺跡地が所在しているこの地域一帯は中世期には前浜と呼ばれており、過去の発掘調査において多数の人骨が出土しており「葬地」であったことが確認されている。人骨は土壙墓、或いは集積骨土坑、散乱骨等として検出され、この埋葬形態の多種多様に及ぶさまは該期の異質性を物語っている。また、同時に多数の方形竪穴建物群が検出され、この混在した様相が浜地の特異な性格であると特徴づけられている。また、検出された方形竪穴建物群は倉庫としての用途も想定されており、海岸近辺に荷揚げされた多量の物資等を搬入するための大倉庫群が浜辺一帯に形成され壮観な景観を成し、且つ繁華な様相であったろうと推測されている。

古代に遡ると住居跡、傾斜面の地形、溝、祭祀遺構、瓦溜り等の生活空間が確認出来、近世期には遺構の痕跡は希薄であるものの宝永の火山灰の堆積は多く認められる。しかし、本遺跡地内では15世紀以降から近世期の時間帯は空白地帯と言っていいほど遺構が発見出来ないのが現在の発掘成果の状況である。

以下、今回の調査地点近辺の18地点の個々の調査成果を下記の一覧に示した。

若宮大路東側に位置する由比ガ浜二丁目地域では概ね、13世紀～14世紀代を主体とする遺構群、及び、近世江戸期の宝永の火山灰が確認されている。鎌倉時代は一大葬地であり、土壙墓、集積人骨土坑、遊離人骨等の多数の人骨、及び埋葬形態が確認出来る。また、4地点ではその墓域を破壊して居住区としての生活空間に変え、再度、葬地に変換してゆくといった土地の利用方法のめまぐるしい変化の様相が見て取れる。全般的に南北朝期以降は生活の痕跡がさほど認められず閑散とした様相であったことが調査成果から理解されている。また、古代以前では3地点では土壙墓、6地点では古代の祭祀遺構が検出されている。

若宮大路西側に位置する四丁目付近域では中世期では墓跡、及び整然とした地割を基軸とした建物、主に方形竪穴群を主体とした建物群及び掘立柱建物が多数検出されている。15地点では方形竪穴で構成した倉庫域内に区画を設けて職人集団の工房域を形成し並存させ、居住域と倉庫が混在した繁華な様相であったろうと想像している。その後は、閑散とした漁村の様相に大きく様変わりをする。12地点、15地点では塩田に使用されたような方形の区画が確認されており、大きく土地の利用方法を変えたようであるが、検出遺構が少なくあまり解明されていない。古代の遺構は9地点からは9世紀後半の遺構群、11地点からは住居址、炉跡、ピット、土坑等が検出されている。また、多量に投棄された古代瓦が出土している。瓦を載せるべき寺院は本遺跡地内には存在せず、どのような経緯で投棄されたのかは不明である。

また、遺跡の名称は異なるが16地点の「由比ヶ浜南遺跡」では中世期の膨大な数に上る埋葬骨、及び散乱骨が出土しており、中世の墓域は浜地においてかなり広い範囲に及んでいたものと想像される。

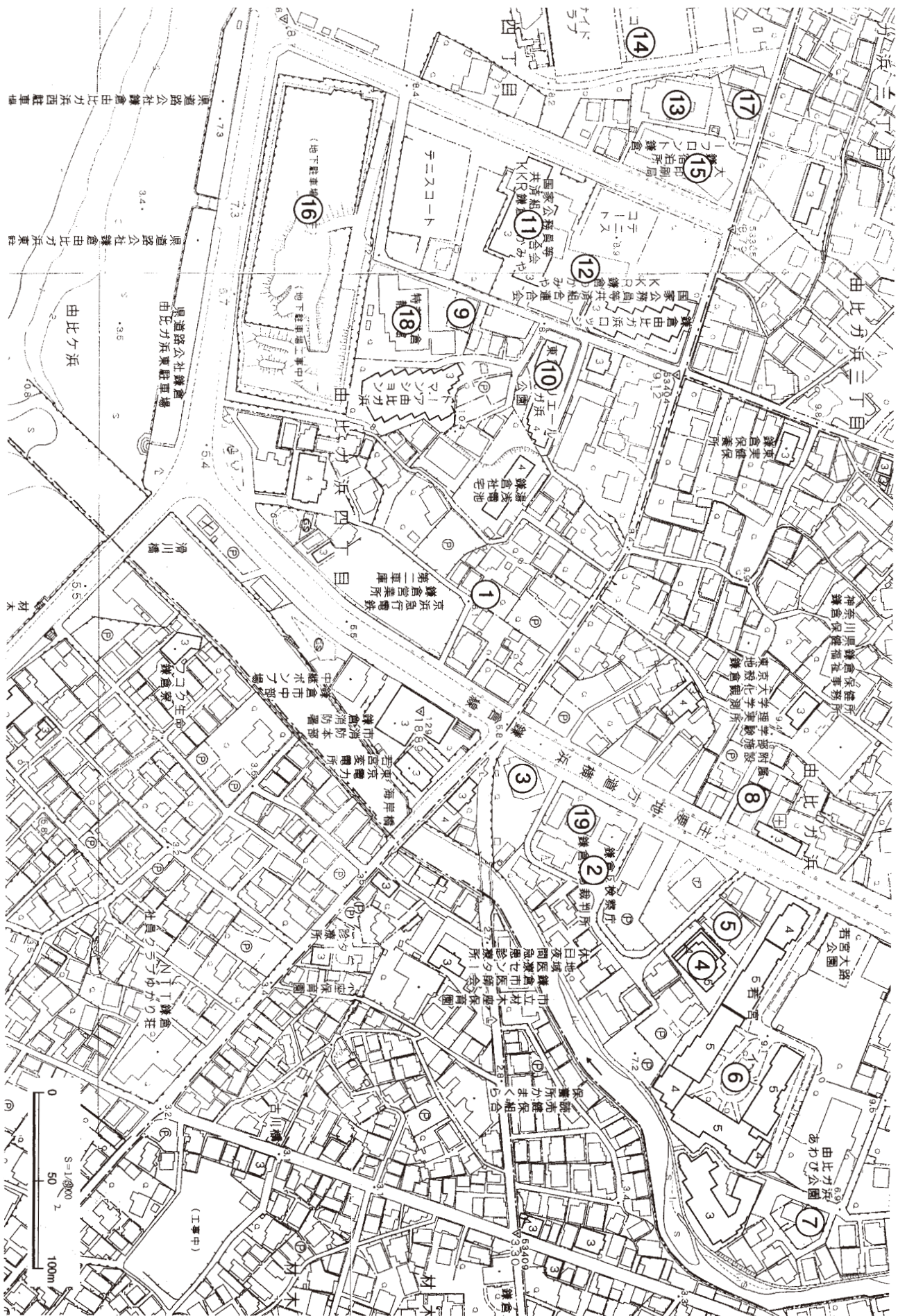


図1 本調査地点と周辺遺跡

NO	調査地点	報告書名	調査原因	調査期間	調査面積	調査の概要
1	由比ガ浜四丁目 (本調査地点)	森孝子「由比ガ浜中世集団墓地遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書26』鎌倉市教育委員会平成22年	個人住宅	平成17年9月15日～10月25日		本報記載
2	由比ガ浜二丁目 1014 - 17 地点	由比ガ浜中世集団墓地遺跡	宅地造成 基礎工事	平成18年2月18日～21日		基礎工事の残土よりの遺物採取。整理箱5箱で、大部分が人骨、獣骨
3	由比ガ浜二丁目 1015 - 1 他 地点	瀬田哲夫「由比ガ浜中世集団墓地遺跡」有限会社鎌倉遺跡調査会2009年	集合住宅 建設	平成17年11月14日～平成18年1月31日	899㎡	宝永の火山灰。14世紀以降の自然流路及び水成堆積でそれ以前の生活面をほぼ消失したため中世の検出遺構は自然流路、陶器埋納土坑、集積骨土坑、散乱骨、中世以前の土壌墓。
4	由比ガ浜二丁目 1015 - 23 地点	戸田哲也他「由比ガ浜中世集団墓地遺跡」玉川文化財研究所2005年	集合住宅 建設	平成12年7月31日～平成13年3月31日	1000㎡	13世紀から14世紀の5時期の変遷。埋葬地(集積人骨土坑12基、単独埋葬人骨土坑21基)→市街地(方形竪穴96基)→埋葬地(頭蓋骨集積土坑1基、単独埋葬人骨土坑4基)と土地利用の変化の様相。
5	由比ガ浜二丁目 1015番29地点	大河内勉「由比ガ浜中世集団墓地遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7』鎌倉市教育委員会平成3年	専用住宅 建設	平成元年10月11日～11月15日	130㎡	14世紀代の5面の生活面、土坑、柱穴、布掘り遺構、動物遺骸が検出されたが様相は不明。布掘り遺構は柵列の可能性あり。
6	由比ガ浜二丁目 1034番1外地点	原廣志他「由比ガ浜中世集団墓地遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9(1分冊)』鎌倉市教育委員会平成11年	集合住宅 建設	平成2年10月5日～1991年9月15日	3800㎡	鎌倉時代から南北朝期(13世紀～14世紀)の2時期の遺構群を確認。後半期には190軒以上の方形竪穴群、土坑、墓址(土壌墓22基、集積人骨土坑1基、遊離人骨3カ所)等、道路、前半期では馬場とそれを囲む棧敷が復元出来る様相を検出。文永9(1272)年九月十八日銘の木製品が出土。古代は7世紀中頃の祭祀遺構
7	由比ガ浜二丁目 1037番1外地点	原廣志「由比ガ浜中世集団墓地遺跡」県埋蔵報告35	共同住宅 建設	平成4年2月3日～6月22日	600㎡	中世一方形竪穴8軒 井戸4基 土坑20基 溝 旧河川(滑川)西岸 投げ込み人骨1体 動物遺体 木製品 古代-井戸状遺構1基 ピット 溝4条 遺物包含層

8	由比ガ浜二丁目 1 2 0 3 番20 地点	原廣志「由比ガ浜 中世集団墓地遺 跡」『鎌倉市埋蔵文 化財緊急調査報告 書16(2分冊)』鎌 倉市教育委員会平 成11年	自己用診 療所・併 用住宅	平成10年11 月26日～ 12月11日	111.58 ㎡	風成砂層中の宝永火山灰層直下から15世紀 ～16世紀に渡る2時期の遺構群を検出。土 坑、溝状土坑、柱穴、遺物溜り等。
9	由比ガ浜四丁目 4番30地点	宮田眞他「由比ガ 浜中世集団墓地遺 跡」由比ガ浜中世 集団墓地遺跡発掘 調査団 1996年	静養館施 設増設	平成6年12 月5日～平 成7年2月 27日	250㎡	9世紀後半の遺構群、及び14世紀前葉～中 葉の方形竪穴群、14世紀後半以降の埋納骨、 礎石建物?等を検出。
10	由比ガ浜四丁目 1134番1地点	大河内勉「由比ガ 浜中世集団墓地遺 跡」由比ガ浜中世 集団墓地遺跡発掘 調査団 県埋蔵報告30	集合住宅 建設	昭和61年8 月4日～12 月31日	900㎡	古代・中世
11	由比ガ浜四丁目 1136番地点	大河内勉「由比ガ 浜中世集団墓地遺 跡」<一次調査> 由比ガ浜中世集団 墓地遺跡発掘調査 団 1997年	保養所改 築工事	平成3年8月 1日～1992 年7月7日	160.5 ㎡	13世紀後半から14世紀代の2時期の中世面 を確認。道路、方形竪穴、井戸、墓址、土坑 等。古代では7世紀から10世紀前半に渡る 竪穴住居址、土坑、ピット、炉跡を検出。ま た、古代瓦が392点出土している。
12	由比ガ浜四丁目 1136番地点	齋木秀雄他「由比 ガ浜中世集団墓地 遺跡」<二次調査 >由比ガ浜中世集 団墓地遺跡発掘調 査団 1997年	若宮荘プ ール建設	平成5年1月 5日～3月	605㎡	中世期の3時期の生活面を検出。13世紀後 半の葬地の様相、14世紀前半～15世紀初頭 の短冊型方形竪穴建物の短期間の作り変えの 変遷、15世紀前半～後半の或いは塩田の可 能性を含んだ方形区画の検出。
13	由比ガ浜四丁目 1179番1他地点	齋木秀雄・大河内 勉「由比ガ浜中世 集団墓地遺跡」5 地点一次・二次調 査>由比ガ浜中世 集団墓地遺跡発掘 調査団 鎌倉遺跡 調査会調査報告書 第22集1996年	マンション 建設	昭和61年7 月～11月 2000年5月	900㎡ +605 ㎡	13世紀後葉から14世紀前半の2時期の東西 道路、溝状土坑、方形竪穴群。道路は幕府等 大規模人数を動員出来る機関が造作したと推 量。

14	由比ガ浜四丁目 1181番他地点	鎌倉市埋蔵文化財 年報Ⅰ（昭和46年 度～52年度）鎌倉 市教育委員会	テニスコ ート造成	昭和52年度 10月		人骨出土。年代不明
15	由比ガ浜四丁目 6番9地点	斎木秀雄「由比ガ 浜中世集団墓地遺 跡」由比ガ浜中世 集団墓地遺跡発掘 調査団1994年	大蔵省印 刷局鎌倉 宿泊所建 設	平成4年12 月～平成5 年5月	800㎡	1期から4期に大別される13世紀中頃から 18世紀までの掘立柱建物、方形竪穴建物、 道路等が検出。浜地の倉庫域に時期を経て区 画された土地に職人集団の工房或いは居住区 と商人の倉庫域が混在した繁華な時期にな り、その後塩田?等の農村化した様相になっ た状況を推定。
16	由比ヶ浜四丁目 1102番2外 由 比ヶ浜南遺跡	斎木秀雄「由比ガ 浜南遺跡」由比ガ 浜南遺跡発掘調査 団2002年3月	地下駐車 場建設に 伴う事前 調査	平成7年4月 ～平成9年6 月	9750 ㎡	中世期の膨大な数の埋葬遺構、屋敷跡、方形 竪穴、溝、土坑、井戸、河川等
17	由比ヶ浜四丁目 1171番3外	斎木秀雄「由比ガ 浜中世集団墓地遺 跡」由比ガ浜中世 集団墓地遺跡発掘 調査団 県埋蔵報告30	保養所改 築工事	昭和61年7 月7日～10 月25日	1200 ㎡	道路、井戸、墓跡、溝状土坑、土坑、柱穴、 方形竪穴検出。道路等に区画された遺構群の 検出
18	由比ガ浜四丁目 1142番地点	田代郁夫・玉林美 男「由比ガ浜中世 集団墓地遺跡(特 殊養護老人ホーム 鎌倉静養館建設予 定地)発掘調査報 告書」東国考古学 歴史研究所・鎌 倉市教育委員会 1984年3月	特殊養護 老人ホー ム鎌倉静 養館建設 予定地	昭和57年8 月2日～8 月25日		室町時代(14世紀)の土壙墓
19	簡易裁判所地点	日本人類学会編 『鎌倉材木座発見 の中世遺跡とその 人骨』1956年				1953年と1956年との2回の調査で910体 以上の人骨が出土

第二章 調査経過

第1節 調査の経過

鎌倉市教育委員会は平成17年6月1日に確認調査を実施した。その結果、現地表下140cmまでが近現代層、その直下の黄褐色砂質土層中に中世遺構及び遺物が確認され、その地点を中世第1面と判断した。さらに、50cm前後掘り下げて、次の生活面を確認した。確認調査の結果、本調査地点において2時期にわたる中世期の生活面が確認されたため鎌倉市教育委員会は埋蔵文化財への影響が避けられないことを確認し本調査が必要であると決定した。調査面積は73.5㎡、調査期間は平成17年9月16日～10月25日までである。

調査は廃土を場内処理することが決められていたため、置き場を確保するため調査区を2分して半分ずつ調査を実施することに決め、北側をⅠ区、南側をⅡ区としⅠ区から調査を開始した。確認調査の結果に基づき近現代層110cm前後を重機により掘削し、以下を人力による作業とした。中世の遺構面は2面検出され、検出遺構は溝状遺構1基、方形土坑2基、土坑8基、方形竪穴建物9、柱穴列1、柱穴28口で、出土遺物は整理箱5箱である。

以下、作業経過は下記のとおりである。

- 平成17年9月15日 重機による表土掘削。
- 9月16日 Ⅰ区1面の調査開始。
- 9月20日 1面攪乱掘り上げ。
- 9月21日 方形土坑1、土坑1、2、3、方形竪穴建物1～4検出。
- 9月26日 1面全景撮影。1面平面図。
- 9月27日 2面へ掘り下げ。検出、土坑4検出。
- 9月28日 2面全景撮影及び平面実測。
- 9月29日 土層図作成。Ⅱ区調査の準備。
- 9月30日 鎌倉市3級基準点、4級基準点の移動。
- 10月5日 Ⅰ区埋め戻し。
- 10月6日 Ⅱ区表土掘削。
- 10月11日 Ⅱ区調査開始。
- 10月12日 土坑5、方形竪穴建物5、6検出。
- 10月19日 Ⅱ区1面全景撮影及び平面図。
- 10月20日 Ⅱ区2面へ掘り下げ開始。
- 10月21日 方形竪穴建物7、柱穴群検出。全景撮影、及び平面図。
- 10月24日 古代面(黒褐色粘土)の調査。遺構はなし。南壁、東壁の土層図作成。
- 10月25日 器材撤収。調査終了。

第2節 調査区位置図 (図2)・
 グリッド設定図 世界測地系による座標表示 (図3)



図2 遺跡位置図

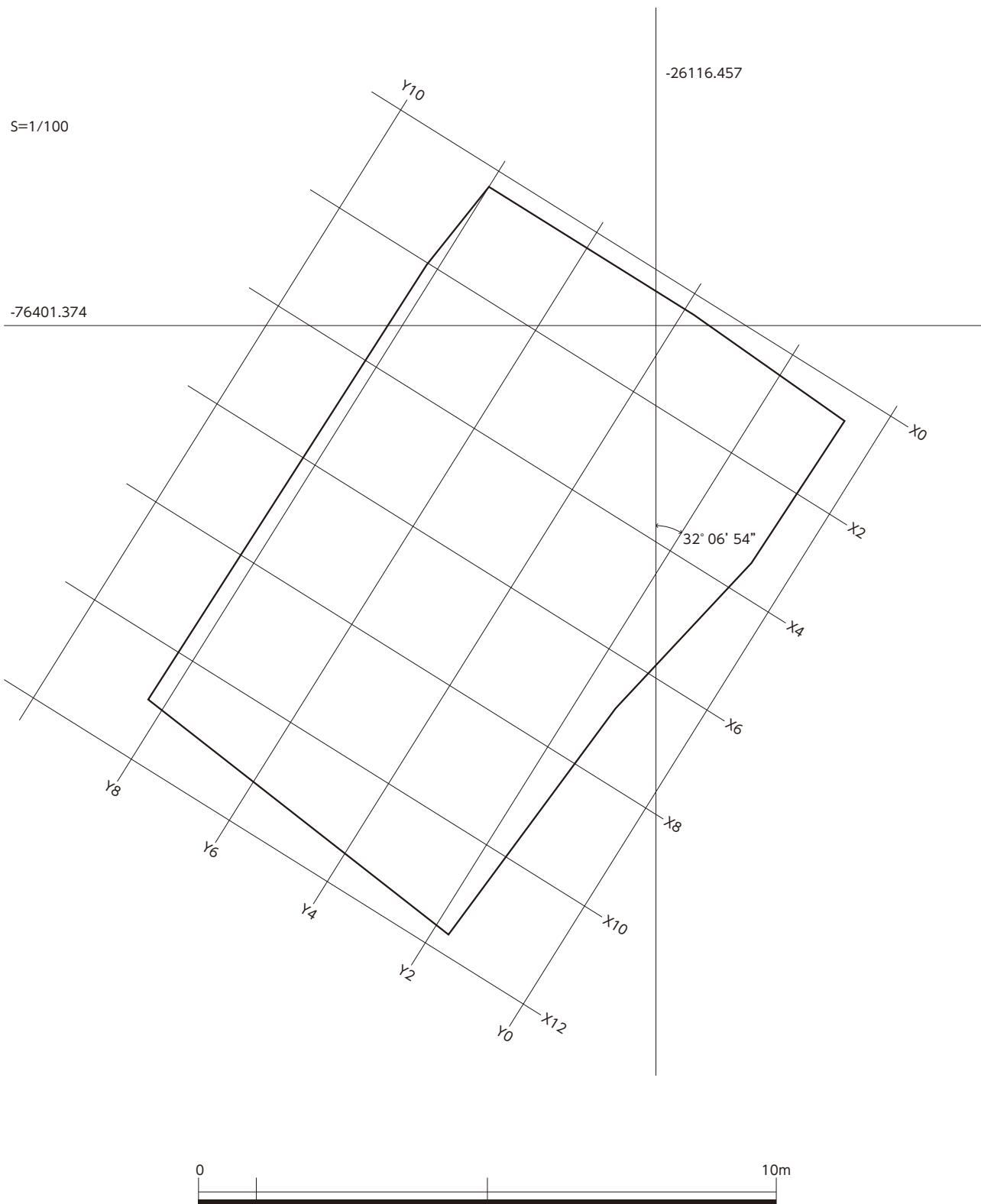
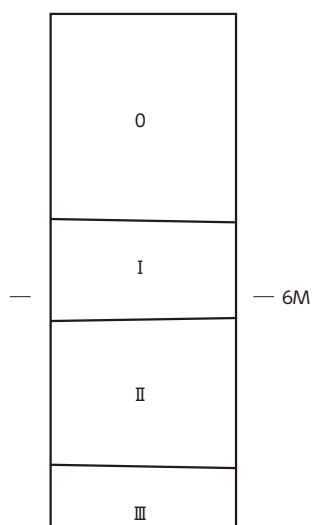


図3 グリッド配置図

測量のためのグリッドは調査区に平行に任意の2点をきめ、それを基準として、南北方向をX軸とし、北から南にx 0、x 1、x 2・・・と増え、東西方向をY軸とし、東から西にy 0、y 1、y 2・・・と増え北東角をx 0、y 0とし測量の基準点とした。また、X軸は磁北より東に 32°06'54"東に傾く。また、座標X-76401.374、Y-26116.457を用いて国土座標と合成した。

第3節 基本層序

中世第1面はGL-160cm(海拔5.9m)、中世第2面はGL-240cm(海拔5.1m)で確認された。基本層序は図4に示す通りである。



基本層序

- 0層 表土層
- I層 茶黄色砂質土 中世遺物包含層
- II層 黄褐色細砂 1面構成土。貝粒子を含みしめる。
- III層 黒褐色粘質土 2面/地山

図4 基本層序

第三章 検出遺構と出土遺物

第1節 中世第1面(図5)

本遺跡地の現地表の海拔は7.3～7.4mである。現代の盛土80～150cmが堆積していたが、盛土直下に25～45cmの遺物包含層の堆積が検出された地域もある。中世第1面は現地表下135cm～150cmで検出された。海拔は5.9m～6mである。遺構面はほぼ平坦で黄色細砂層である。溝状遺構1条、方形竪穴6軒、土坑7基である。現在までの発掘成果と同様に浜地に方形竪穴群が展開するといった様相である。以下、各遺構別の詳細を述べる。

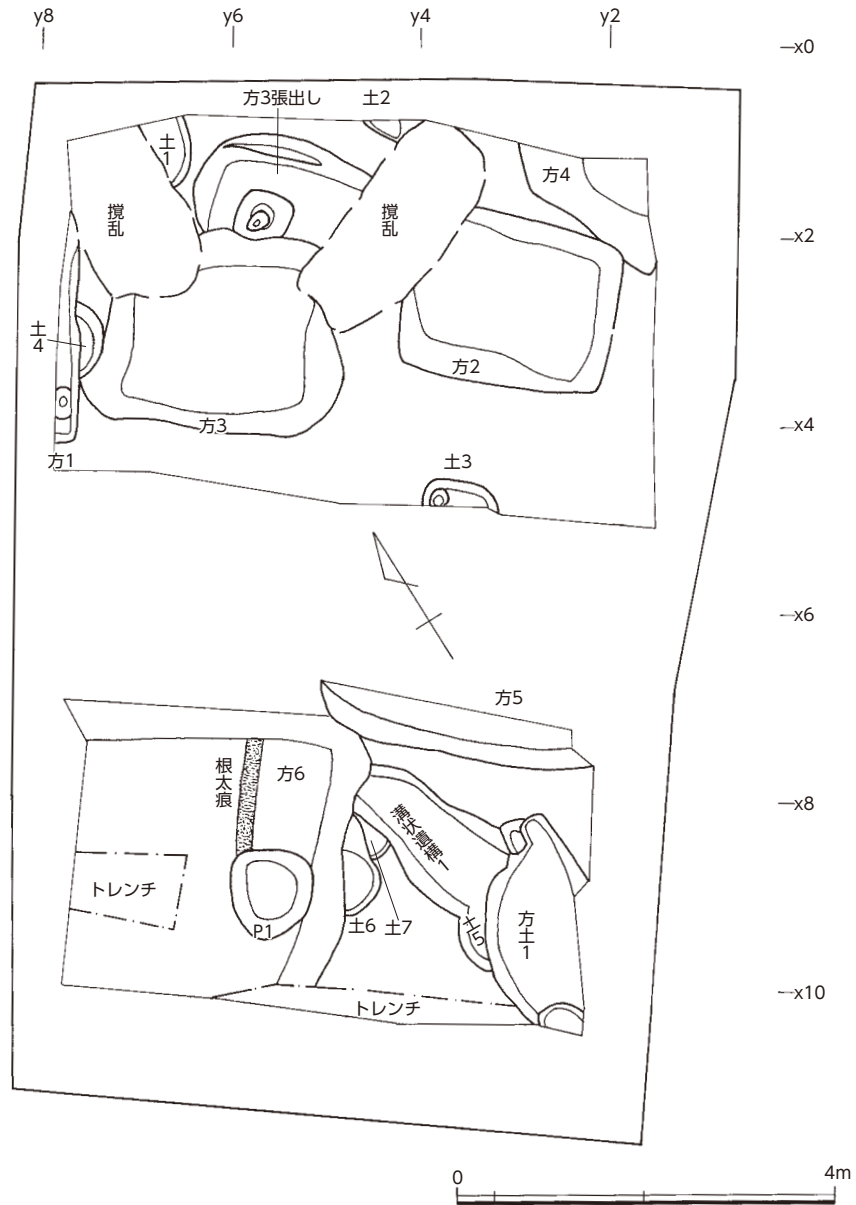


図5 1面遺構配置図

方形竪穴1(図6)

X1～4・Y7グリッドで海拔5.9mで検出された。当址の大半は調査区外西側にある。検出された掘り方規模は南北250cm、東西25cm、深さは確認面より31cmを測る。床面の海拔は5.56mである。南東角に柱穴がある。検出された掘り方規模は35×17cm、深さは床面より20cmを測る。4隅に杭を打ち込んで壁板を支えた痕跡であると想定される。覆土は暗黄茶色砂質土で炭化物、貝殻を含む。当址の南北の軸方向はN-32°-Eである。

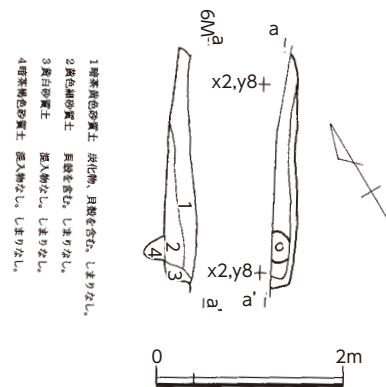


図6 方形竪穴1

表1 方形竪穴1概要表

	規模cm	深さcm	標高m	平面形
掘り方	25以上×250以上	31	5.90	長方形(推定)
床面	18以上×238以上		5.56	
竪穴内P1	17以上×35以上	20	5.36	楕円形
備考	大半は調査区外			

方形竪穴1出土遺物(図7)

1～3は鉄製品、釘である。先端が欠損しており全長は不明である。太さは6mm前後の方形である。

4、5は骨製品である。4は筭の先端部。丁寧な細工である。5は加工骨である。両端が刃物により切断されており、加工途上のものであると想定される。

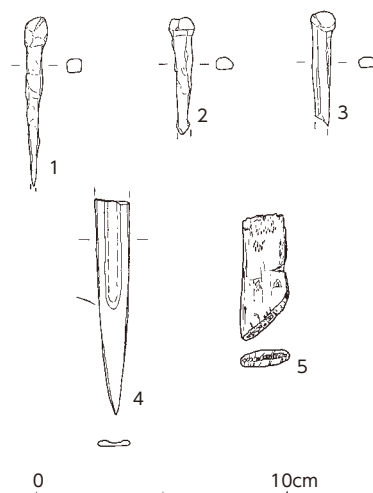


図7 方形竪穴1出土遺物

方形竪穴2(図8)

X1～3・Y1～4グリッドにおいて海拔5.9mで検出された。当址の北西角は現代の攪乱にあう。検出された掘り方規模は南北178cm、東西202cmで平面形は長方形になると思われる。深さは確認面より48cmを測り、床面の海拔は5.25mである。床面からは当址の構造を想定出来る遺構等は検出出来なかった。覆土は暗茶褐色砂質土で貝殻、貝粒子、土丹粒子、かわらけ片を含みしまりはない。当址の南北の軸方向はN-41°-Eである。

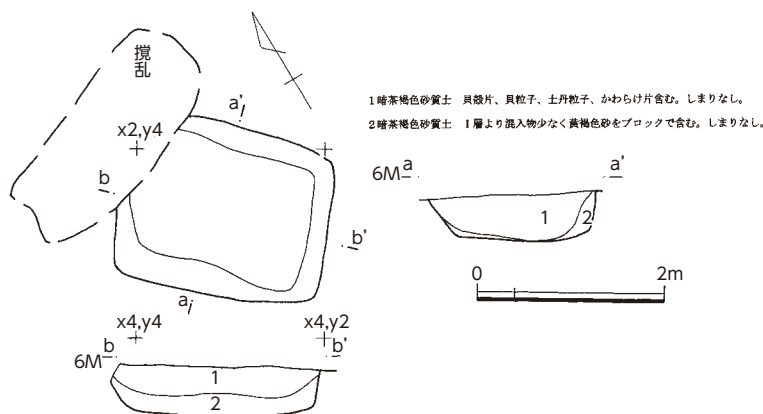


図8 方形竪穴2

表2 方形竪穴2概要表

	規模cm	深さcm	標高m	平面形
掘り方	202以上×178	48	5.90	長方形
床面	180以上×120	48	5.25	長方形
備考	西側は現代攪乱に切られる			

方形竪穴2出土遺物(図9)

1～4はロクロ成形のかわらけで、1、2は中皿、3、4は小皿である。大、中、小の3器種に分類される中小のセットである。器肉が薄く、底径と口径比が小さく体部の開く皿型であるが4は丸深タイプである。5は龍泉窯の無文碗の底部の小片である。胎土は白色を呈し、釉調は淡灰緑色で半透明で光沢は無い。器表に粗い貫入がみられる。6、7は瀬戸窯の製品である。6は灰釉折縁皿の底部である。底部には焼台が付着している。外面には糸切り痕が明瞭である。7は入れ子である。胎土は褐白色を呈し、軟質である。全体に薄く降灰している。8、9は常滑窯片口鉢I類である。8は6a型式の口縁部である。胎土は灰色を呈し、長石、石英を混入する。口唇部は肥厚する。9は底部の破片である。胎土は灰色を呈し長石、小石を含み粗い。外面底部際の回転ヘラケズリ調整痕が明瞭であり、また内面の磨滅は顕著でよく使用された痕跡を

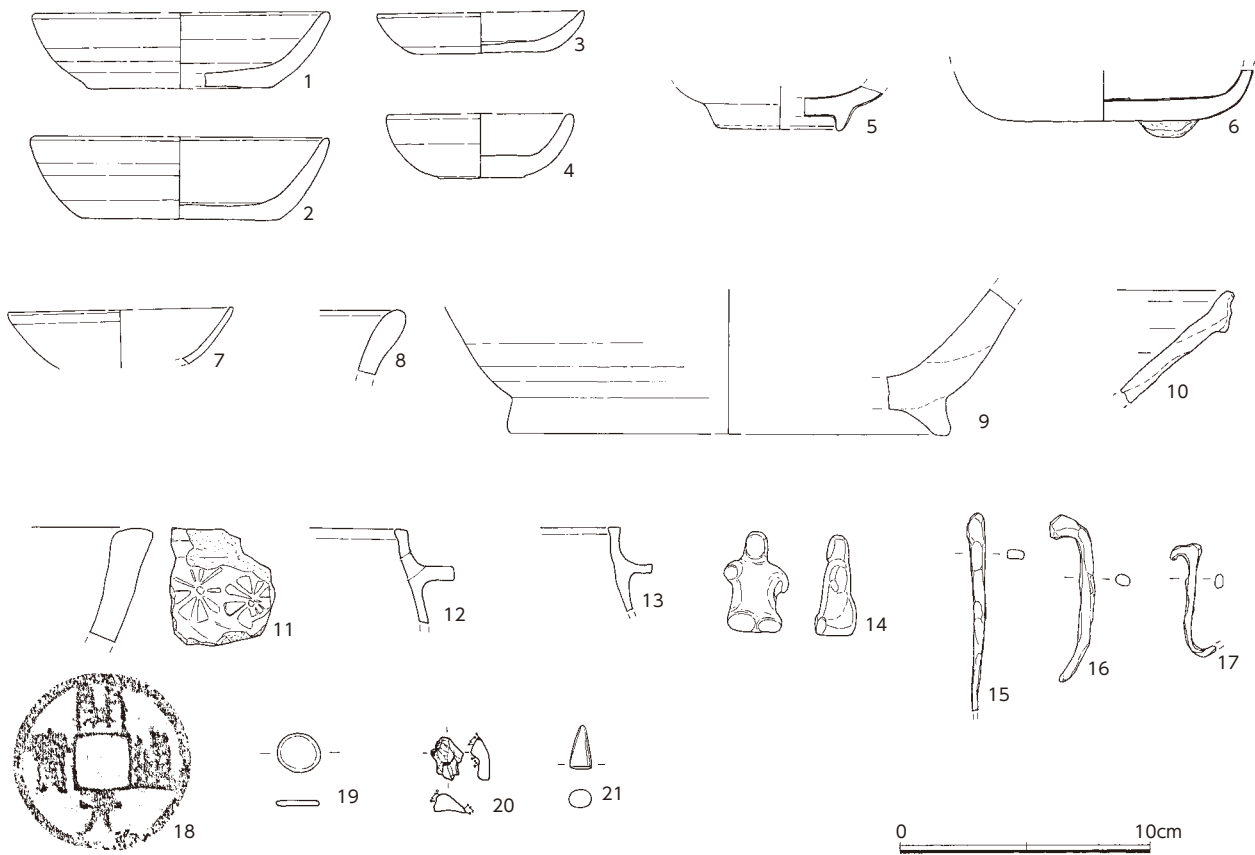
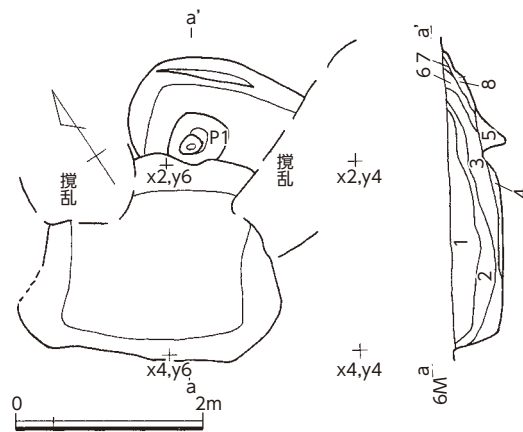


図9 方形竪穴2出土遺物

示す。10は魚住窯の片口鉢の口縁部である。胎土は暗灰色を呈し、長石、小石を含み粗い。口縁部は黒色である。11は瓦質の手焙りの口縁部の小片である。外面口縁下に8弁の菊花のスタンプ文を押印する。12、13は伊勢系鍔釜の口縁部である。共に黒灰色の胎芯を残す。12の器表は淡橙色、鍔下から外体部には煤が付着している。また、鍔部に直径9mmの穿孔がある。13は白色系の色調で、器表に砂粒が浮く。14はかわらけ質の人形である。両手と脚部は欠損しており形態は不明であるが、頭部に被り物をしているようにも思われ女形であろうか。座位である。15～17は鉄製品、釘である。16は完形品である。全長7cm、太さ0.6×0.5cmの方形である。18は南唐銭、開元通寶である。19は貝殻を加工して制作された基石である。20は石英質の火打石である。敲打痕が白濁して残る。21は円錐形を呈する骨製品である。用途は不明である。



- 1暗茶褐色砂質土 1cm 大の貝殻片、炭化物、貝粒子、骨片、かわらけ片含む。黄褐色砂をブロックで混入、ややしまる。
- 2暗茶褐色砂質土 1層より黄褐色砂ブロック、貝粒子を多く含む、若干の炭化物を含む。ややしまる。
- 3暗茶褐色砂質土 2層より貝粒子が少ない。しまり良好。
- 4暗茶褐色砂質土 黒褐色土、貝粒子を含む。粘性あり、しまり良好。
- 5暗茶褐色砂質土 2層より炭化物が少ない。しまり弱い。
- 6暗茶褐色砂質土 2層より黄褐色砂ブロックを多く含む。しまり弱い。
- 7暗茶褐色砂質土 6層より黄褐色砂を多く含む。しまり弱い。
- 8黄褐色砂質土 貝殻片、貝粒子、かわらけ片を含む。しまり良好。

方形竪穴3(図10)

X0～4・Y4～7グリッドにおいて海拔5.9mで検出された。当址は北側に大規模な張り出しが付く。また、北西角は現代の攪乱にあう。検出された床面の掘り方規模は南北210cm、東西260cmで平面形

図10 方形竪穴3

は長方形になると思われる。深さは確認面より51cmを測り、床面の海拔は5.26mである。張り出し部の床面の掘り方規模は南北119cm、東西159cmで平面形は長方形になると思われる。深さは確認面より29cmを測り、海拔は

5.61mである。また、張り出し床面からは大型の掘り込が検出され、当址の構造上の遺構であると思われるが不明である。掘り方規模は55×57cmで平面形は隅丸方形になると思われる。深さは確認面より36cmを測り、底部の海拔は5.20mである。覆土は暗茶褐色砂質土で貝殻、貝粒子、炭化物、骨片、かわらけ片を含みしまりはない。当址の南北の軸方向はN-39°-Eである。

表3 方形竪穴3概要表

	規模cm	深さcm	標高m	平面形
掘り方	260×210	51	5.26	長方形
床面	182×155		5.26	長方形
張り出し掘り方	159×119			長方形
張り出し床面	130以上×80以上	29	5.61	長方形
張り出しP1	55×57	36	5.20	隅丸方形
備考	西側は現代攪乱に切られる			

方形竪穴3出土遺物(図11)

1～11はロクロ成形のかわらけ、1,2は大皿、3～5は中皿、6～11は小皿で大中小のセット関係である。概ね胎土は橙色を呈し粉質である。1～3、6は薄手丸深、4、5、7～11は器高の低い皿状であり、セット関係を成すが形は異なる。12は舶載の天目茶碗である。胎土は白色粒子を含み黒灰色を呈し、緻密である。器表には気孔が多く観察される。13は瀬戸窯の鉄軸柄付片口の口縁部の小片である。胎土は橙色を呈し、軟質である。口縁端部を若干上方に折り曲げている。14～18常滑窯の製品である。14～16は片口鉢Ⅰ類である。14、15は6a型式の口縁部の小片である。14は器肉の薄い小型の片口鉢になると想定される。胎土は長石を含み比較的精良で硬質である。15は小石を含んだ粉質の胎土で、口縁部が若干開く。16は底部片である。粘土紐を貼り付けて低い高台を造る。底部際は回転ヘラケズリ調整である。内面は磨られ滑らかである。17は鶯口壺の底部の小片である。胎土は橙灰色を呈し長石を多く含む。内面は指頭による調整、外面はヘラによるナデ調整である。断面が炭化しており、破損後被災したと思われる。18は片口鉢Ⅱ類の口縁部の小片である。6b型式である。胎土は橙灰色を呈し長石粒子を含む。19は伊勢系土鍋の口縁部の小片である。白色系の色調で器表には砂粒が浮く。外側口唇部に煤が付着している。20は研磨陶片である。かわらけの底部片の転用である。形状は三角形で、その周囲全体に研磨痕がある。21～23は鉄製品、釘である。21は端部が板状である。用途不明。22、23は頭部が四角い釘で、23は全長6.3cm、0.5mm四方である。

24～32は銭である。24～26は開元通寶である。この銅銭の初鑄年は621年、845年、960年と3回あるが出土銭の銭貨名が明瞭でないため各々の初鑄年は不明といわねばならない。27～32は解読不明である。33、34は軽石である。磨滅は非常に顕著である。

方形竪穴4(図12)

調査区北東角、X1～2・Y1～2グリッドにおいて海拔5.8mで検出された。当址の大半は調査区外北東にある。検出された掘り方規模は南北119cm、東西132cmで平面形は長方形になると思われる。深さは確認面より45cmを測り、床面の海拔は5.36mである。床面からは当址の構造を想定出来る遺構等は検出出来なかった。覆土は暗茶褐色砂質土で貝殻、炭化物、かわらけ片を含みしまりはない。当址の南北の軸方向は検出範囲が少なくN-22～30°-Wであろうか。

表4 方形竪穴4概要表

	規模cm	深さcm	標高m	平面形
掘り方	132以上×119以上	45	5.8	方形
床面	60以上×62以上		5.36	方形
備考	大半が調査区外			

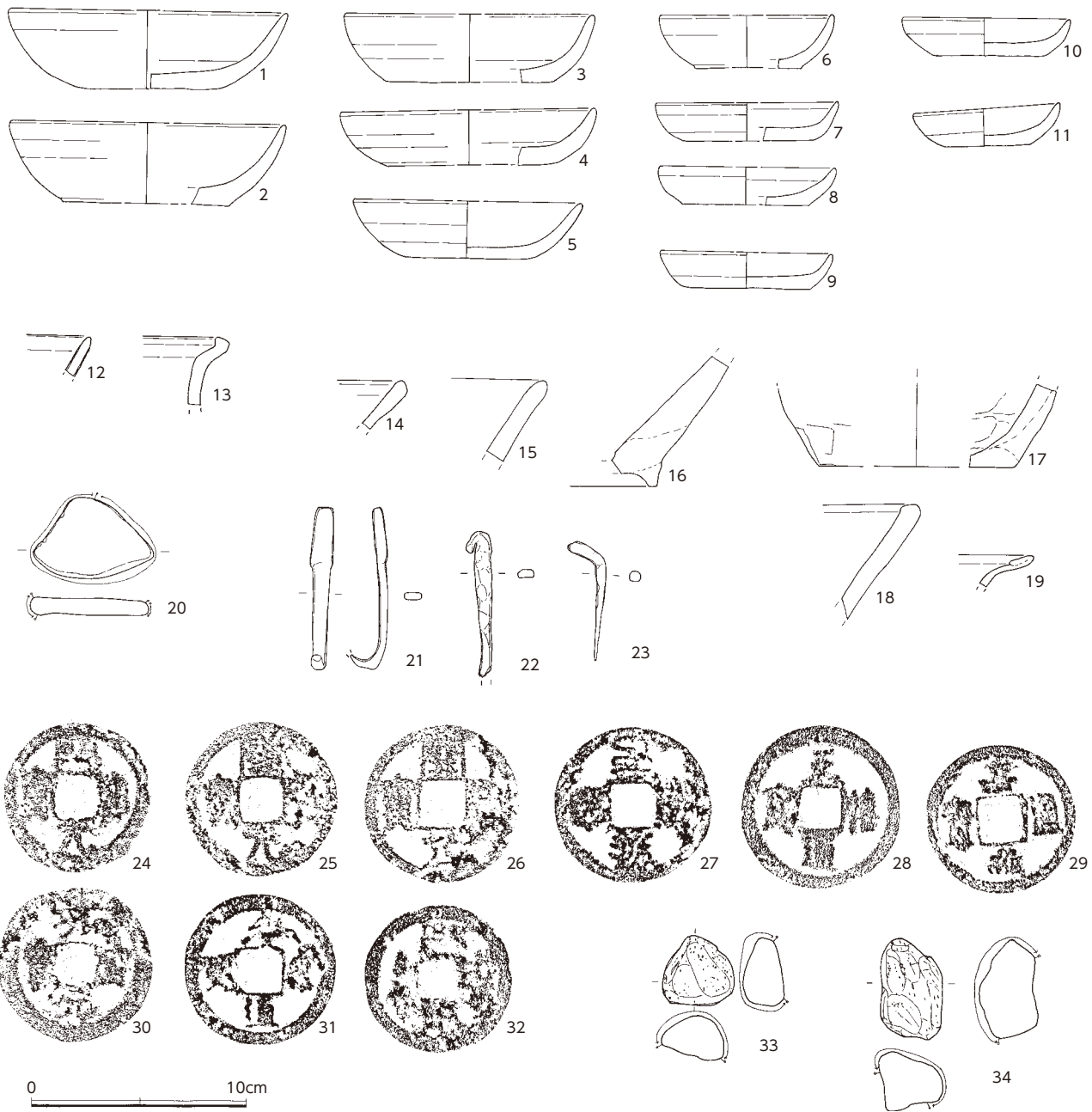


図11 方形竪穴3出土遺物

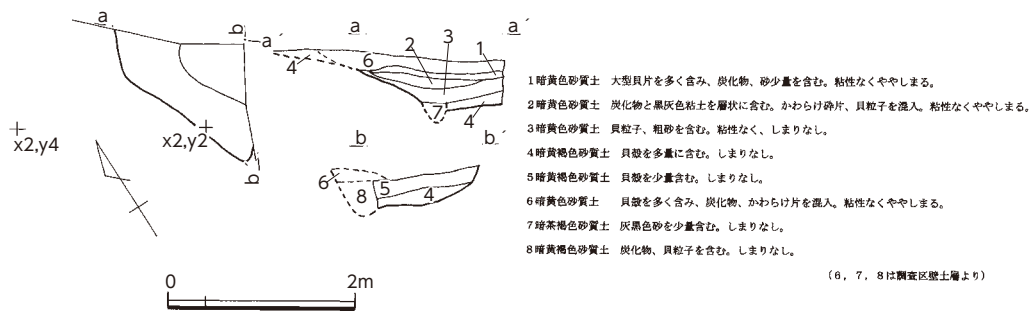


図12 方形竪穴4

方形竪穴5(図13)

調査区北東角、X6～7・Y2～3グリッドにおいて海拔5.9mで検出された。当址の大半は調査区外北東にある。検出された掘り方規模は南北51cm、東西267cmで平面形は長方形になると思われる。深さは確認面より66cmを測り、床面の海拔は5.25mである。床面からは当址の構造を想定出来る遺構等は検出出来なかった。覆土は暗黄色砂質土で貝殻、炭化物を含みしまりはない。当址の南北の軸方向はN-43°-Eである。

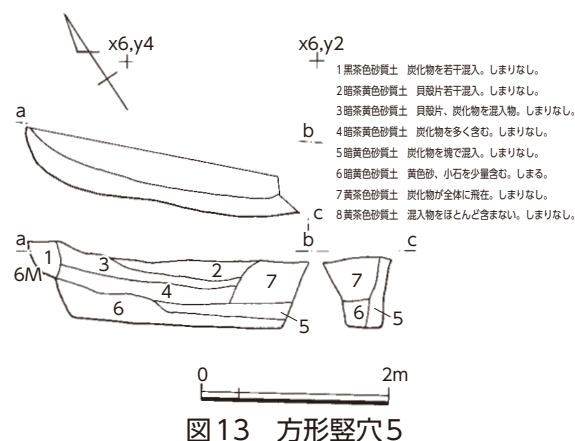


図13 方形竪穴5

表5 方形竪穴5概要表

	規模cm	深さcm	標高m	平面形
掘り方	270以上×51以上	66	5.90	長方形
床面	270以上×30以上		5.25	長方形
備考	大半が調査区外			

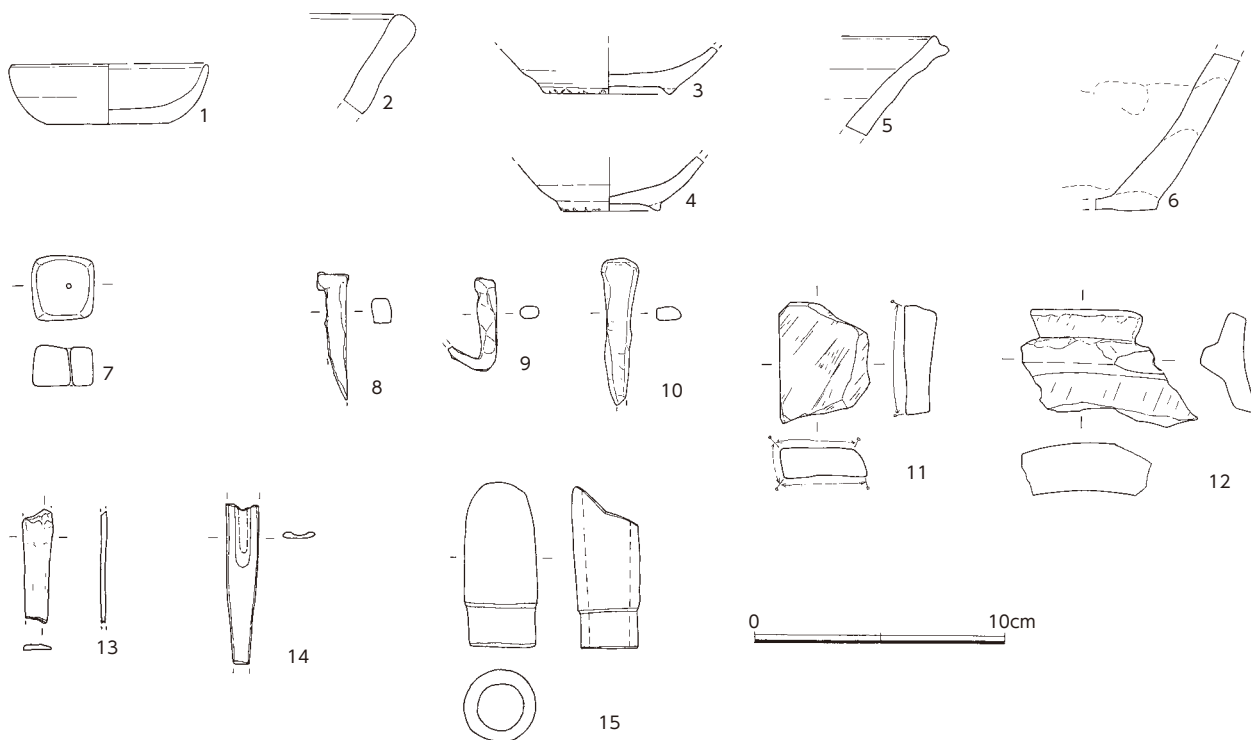


図14 方形竪穴5出土遺物

方形竪穴5出土遺物(図14)

1はロクロ成形のかわらけの小皿である。胎土は橙色を呈し粉質で精良である。薄手丸深の形態である。2は常滑窯片口鉢Ⅰ類の口縁部である。6a型式である。胎土は暗灰色を呈し長石が非常に多い。3、4は北部系山茶碗、東濃型、多治見編年の明和(1260～1310年)である。内底部中心のナデが強く共に高台端部の粗殻痕が明瞭である。3は器表に煤が付着している。4は鮮やかな灰白色を呈する。5、6は常滑窯片口鉢Ⅱ類である。5は口縁部6b型式の小片である。内面に厚く降灰している。6は底部の破片である。底部の器肉は薄く、外面は砂底である。体部の調整はヘラナデ成形である。7は用途不明の土製品である。かわらけ質で、形状は立方体で、直径2mmの貫通孔

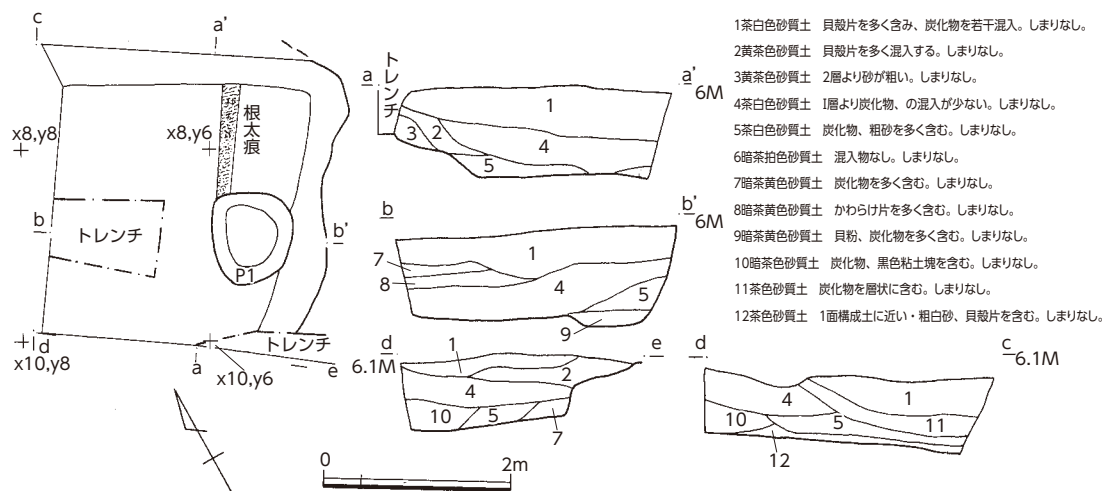


図15 方形竪穴6

表6 方形竪穴6概要表

	規模cm	深さcm	標高m	平面形
掘り方	292以上×301以上	78	6.00	方形
床面	263以上×264以上	78	5.10	方形
根太痕	17×119	2	5.08	
P1	85×96	17	4.94	隅丸方形
備考	大半が調査区外			

が1か所にある。胎土に金雲母が含まれており近世の可能性もある。8～10は鉄製品、釘である。全て先端部が欠損している。11は砥石、頁岩の鳴滝産の仕上げ砥である。砥面は2面である。12は滑石製品、滑石鍋の口縁部を切り取ったものである。口縁部分に2ヶ所穿孔があり、加工途上のものか、或いは失敗作品の残骸か。13～15は骨角製品である。13、14は筭の先端部である。15は用途不明である。鹿角を磨いており、器表には模様のように凸凹が残る。上方は輪花様に2ヶ所に切り込みをいれ、下方ははめ込み式か割りがある。

方形竪穴6(図15)

調査区北東角、X6～10・Y4～7グリッドにおいて海拔6mで検出された。当址の大半は調査区外南、及び西にある。検出された掘り方規模は南北292cm、東西301cmで平面形は方形になると思われる。深さは確認面より78cmを測り、床面の海拔は5.10mである。床面からは根太痕が検出された。長さ119cm、幅17cm、深さは2cmを測る。また、P1が検出された。85×96cm、深さは17cmを測る。様相から柱穴とは思わず不明である。方形竪穴の覆土は茶白色砂質土で貝殻、炭化物を含みしまりはない。当址の南北の軸方向はN-45°-Eである。

方形竪穴6出土遺物(図16)

1～5はロクロ成形のかわらけ、1、2は大皿、3～5は小皿である。1及び3～5の小皿はやや砂粒が多いが粉質の精良土で丁寧な作りで、器高の低い皿状である。2は薄手丸深の器形で、底部に穴を穿つ。明るい橙色の精良土で焼成は良好である。6～12は常滑窯の製品である。6は6a型式の片口鉢I類の口縁部の小片である。内面及び口縁部に厚く降灰している。7は6a型式の甕の口縁部である。灰紫色を呈する粘性のある精緻な胎土である。内面と口縁部に厚く降灰している。8は壺の底部である。外面底部の

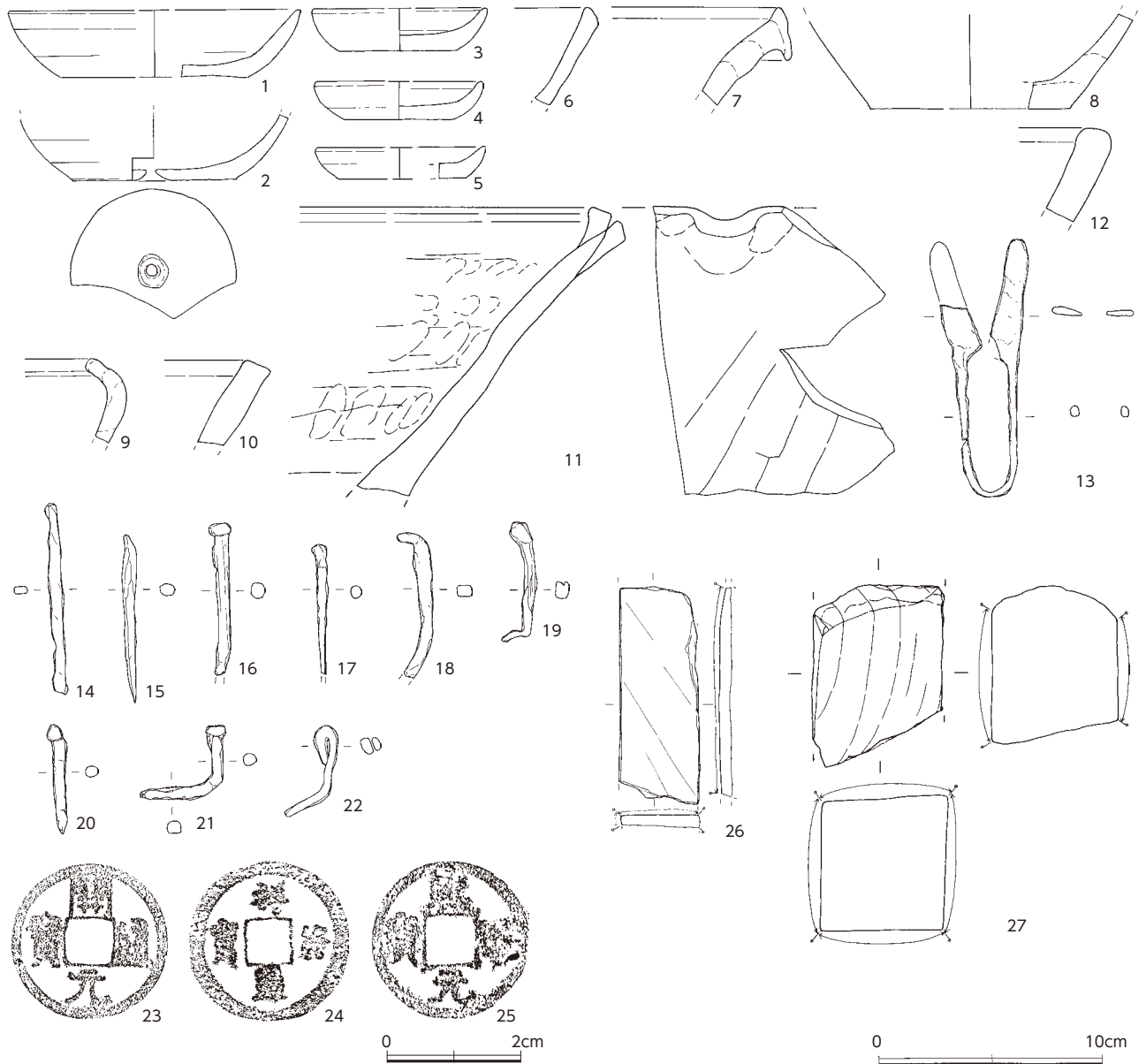


図16 方形竪穴6出土遺物

糸切り痕は明瞭であり、内面は全体に降灰しており、広口壺、或いは無頸壺の底部片かと思われる。9は無頸壺の口縁部の小片である。遺存部分から推定して径が小さく、小壺になるかと思われる。外面口縁部付近に降灰している。10、11は片口鉢Ⅱ類である。10は6b型式の口縁部の小片である。胎土は灰色で粘性があり精緻である。11は6a型式である。注口を有する部位の口縁部から底部際までが検出された。胎土は橙褐色を呈し粘性があり精緻である。外面は斜め方向のなで上げ調整、内面は指頭よる調整である。12は土器質浅鉢型手焙りの口縁部の小片である。胎土には白針が非常に多く含まれる。13～22は鉄製品である。13は握り鋏である。完形品で検出された。全長11.5cmを測り刃部5.5cm、握り部6cmで、その比率は凡そ1：1で等分に鑄造されている。14～21は釘である。凡そ完形品が出土した。全長5～8.7cm、太さ4～7mm四方である。22は環状掛け金具の止め金の部分である。環部1.8cm、5～7mm四方である。23～25は銭、23は南唐銭、開元通寶である。24、25は北宋銭、24は祥符通寶、25は熙寧元寶である。26、27は砥石である。26は頁岩の鳴滝産仕上げ砥である。片面は剥離しており砥面は1面である。27は流紋岩質凝灰岩、伊予産の中砥である。砥面は4面ある。

方形土坑1 (図17)

調査区南東角、X8～10・Y2～3グリッドにおいて海拔5.9mで検出された。当址の大半は調査区外南、及び東にある。検出された掘り方規模は南北240cm、東西99cmを測る。底部は高低差を持ち3段になる。深さは確認面より北から9cm、25cm、51cmを測り、海拔は5.8m、5.6m、5.3mである。当址の南北の軸方向はN-17°-Eである

表7 方形土坑1 概要表

規模cm	深さcm	底部標高m	備考
99×240	9	5.8	大半は調査区外
	25	5.6	
	51	5.3	

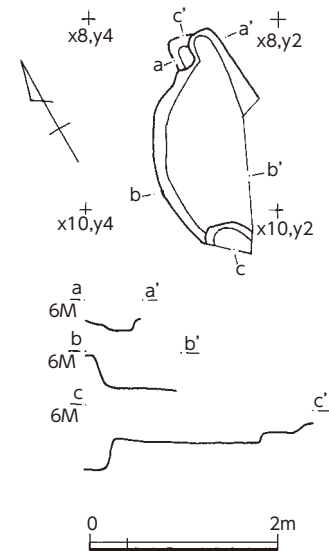


図17 方形土坑1

土坑1～7・溝状遺構1 (図18)

土坑1

調査区北西角、X8～10・Y2～3グリッドにおいて海拔5.93mで検出された。当址は現代の攪乱を受ける。また、その主体は調査区外北西にある。検出された掘り方規模は南北66cm、東西48cm、深さは確認面より13cmを測り、底部の海拔は5.81mである。覆土は暗黄色砂質土で、炭化物、かわらけ片を含みややしまる。

土坑2

調査区北壁、X0・Y4グリッドにおいて海拔5.94mで検出された。当址の東側は大きく現代の攪乱を受ける。また、その主体は調査区外北にある。検出された掘り方規模は南北15cm、東西60cm、深さは確認面より11cmを測り、底部の海拔は5.83mである。覆土は暗黄色砂質土で、炭化物、かわらけ片、貝殻片を含みしまりはしない。

土坑3

調査区南東、X3・Y4グリッドにおいて海拔5.72mで検出された。当址の主体は調査区外南東にある。検出された掘り方規模は南北25cm、東西90cm、深さは確認面より27cmを測り、底部の海拔は5.45mである。また、南西角に柱穴状の小穴を有す。現状で18×19cm、深さは底部より8.4cmを測る。当址付近一帯は後世の攪乱を受け遺構面が削平されたため他地域に比して低くなっている。

土坑4

調査区西、X2～3・Y8グリッドにおいて海拔5.84mで検出された。当址は方形竪穴1と切り合い関係にある。検出された掘り方規模は南北90cm、東西20cm、深さは確認面より14.1cmを測り、底部の海拔は5.69mである。

土坑6・7

X8・Y7グリッドにおいて海拔5.95mで検出された。土坑6が土坑7をきる。

土坑6は方形竪穴6と切り合い関係にあり全容を確認できない。検出された掘り方規模は南北70cm、東西42cm、深さは確認面より34cmを測り、底部の海拔は5.63mである。

また、土坑7も溝状遺構1と切り合い関係にある。検出された掘り方規模は南北50cm、東西26cm、深さは確認面より6cmを測り、底部の海拔は5.89mである。

溝状遺構1・土坑5

X7～9・Y4～5グリッドにおいて海拔5.95mで検出された。当遺構群は切り合い関係を持つ。

土坑5の南側は方形土坑1と切り合う。検出された掘り方規模は南北70cm、東西27cm、深さは確認面より15cmを測り、底部の海拔は5.82mである。

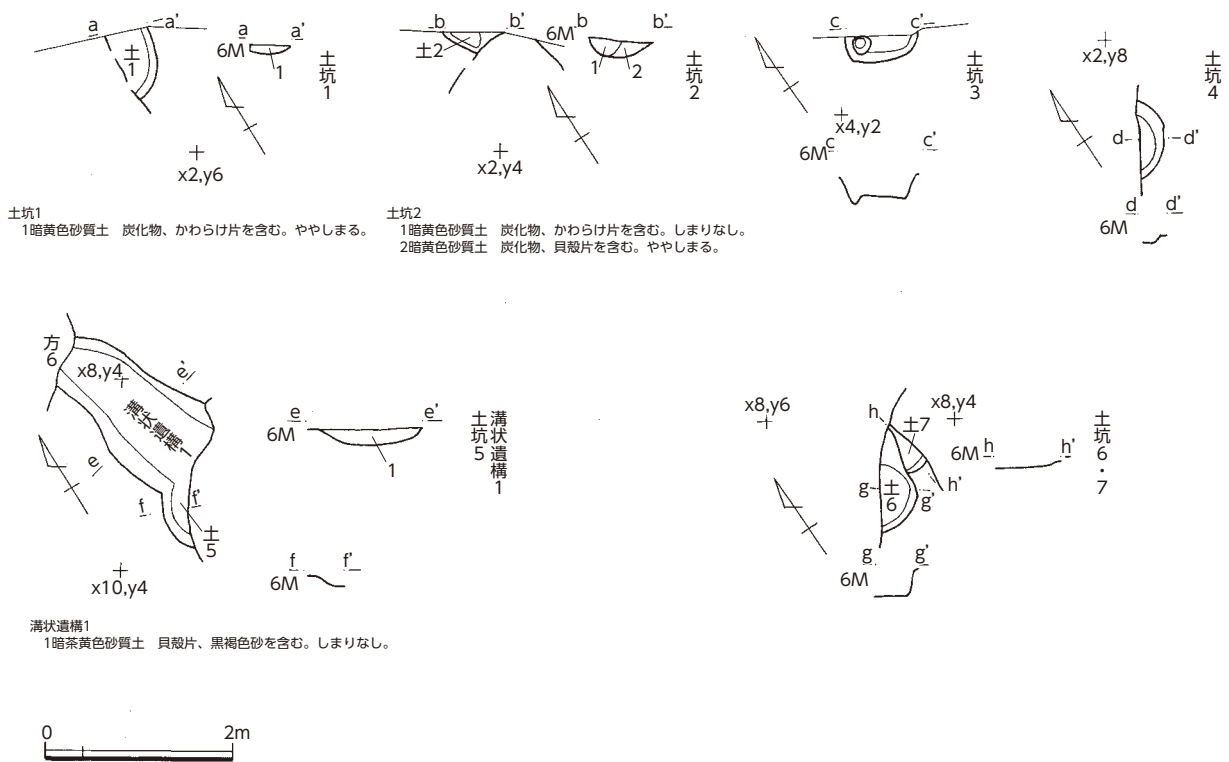


図18 土坑1～7・溝状遺構1

溝状遺構1は土坑7、方形竖穴6、方形土坑1と切り合い関係にある。検出された掘り方規模は南北の長さ170cm、東西85cm、深さは確認面より13cmを測り、底部の海拔は5.78mである。底部は平坦で、断面はU字型を呈する。南北の軸方向はN-19°-Wである。

表8 土坑1～7・溝状遺構1 概要表

	規模cm	深さcm	底面標高m	平面形	備考
土坑1	48以上×66以上	13	5.81	楕円形(推定)	
土坑2	60以上×15以上	11	5.83		
土坑3	90×25以上	27	5.45		
土坑4	90以上×25以上	14.1	5.69		
土坑5	27以上×70以上	15	5.82		
土坑6	42×70	34	5.63		
土坑7	26×50	7	5.89		
溝状遺構1	85×170以上	13	5.78		

土坑1出土遺物(図19-1)

1は鉄製品、釘である。先端は欠損しており遺存部分は長さ6.3cm、太さは3mm四方である。

土坑2出土遺物(図19-2)

2は伊勢系鋳付き土鍋である。胎土は黒灰色を呈し砂粒を多く含む。器表は白色を呈し砂粒が浮く。

3は石英質の火打石である。稜線に明瞭な敲打痕があり、また煤の付着も有る。

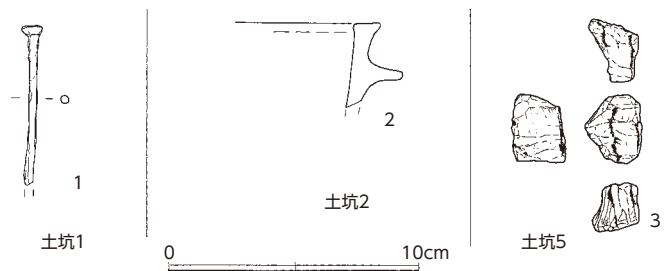


図19 土坑1・2・5出土遺物

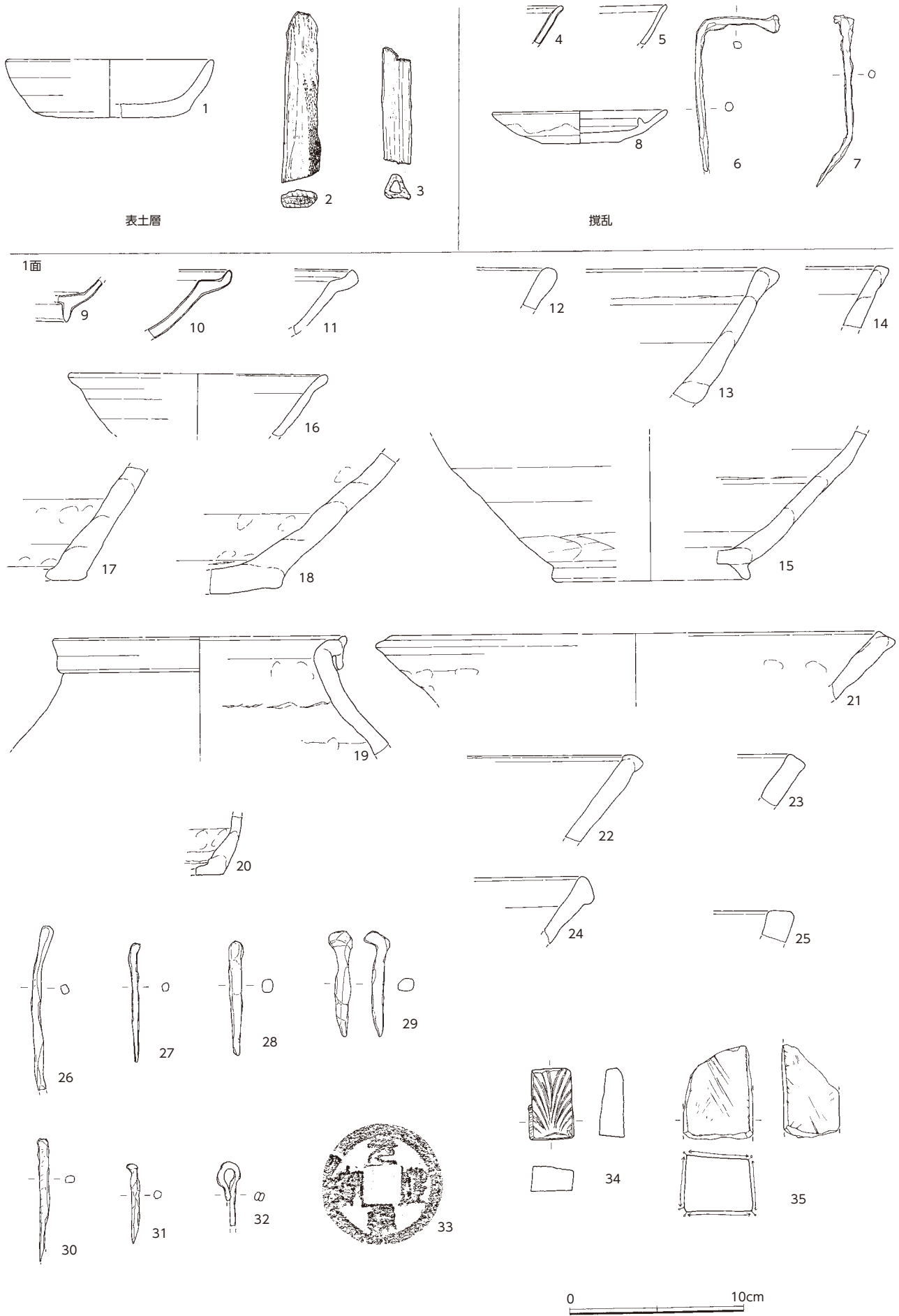


图20 表土層・攪乱層・1面出土遺物

表土層出土遺物(図20-1~3)

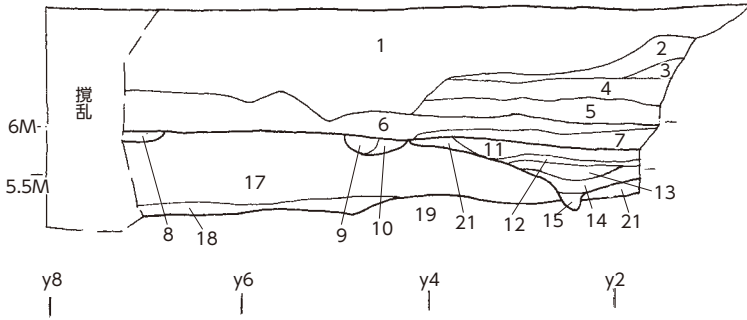
1はロクロ成形のかわらけの大皿である。胎土は明るい橙色を呈し粉質が強い。口縁部を直口して立ち上げ口唇端部を摘み上げている。2、3は加工骨である。片方の端部に刃物による切断痕がある。

攪乱出土遺物(図20-4~8)

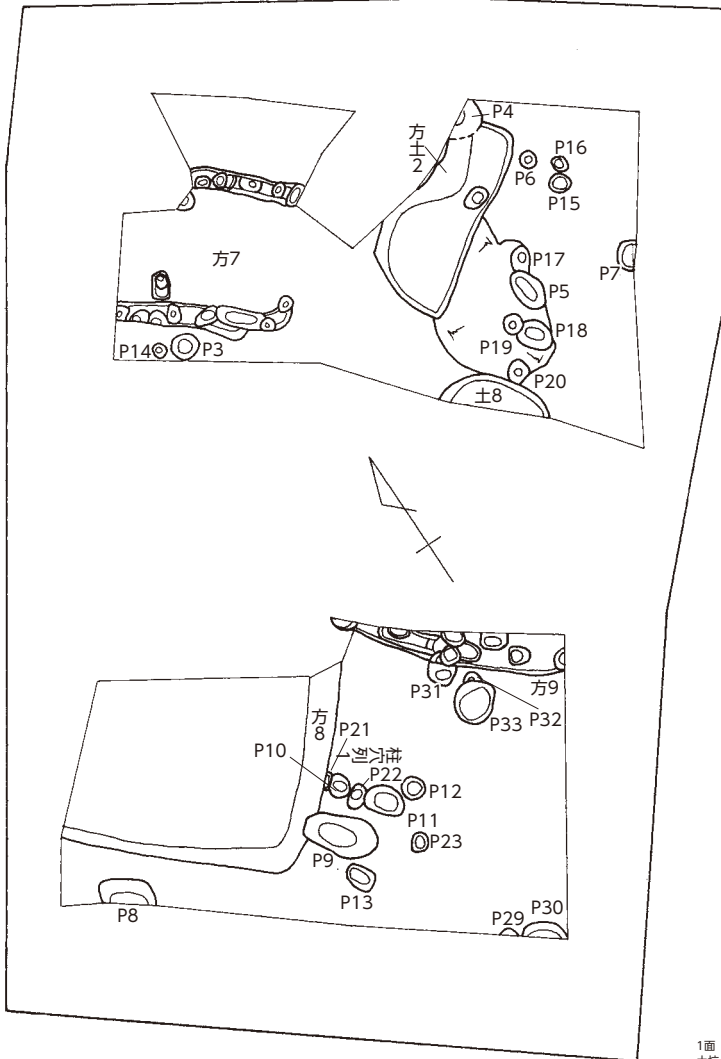
4は白磁の口元皿の口縁部の小片である。胎土は灰白色を呈し、釉調は淡青灰色、半透明で光沢は無い。5は南部系東遠型山茶碗である。胎土は暗灰色を呈し、器肉は均一である。器表は黒灰色を呈し堅く焼しまる。6、7は鉄製品、釘である。7は完形品である。全長12.7cm、4mm四方である。8は近世瀬戸美濃窯の灯明皿の皿受けである。内面及び外面に鉄釉を浸け掛けしている。体部外面に環状の重ね焼きの痕跡がある。

1面出土遺物(図20-9~35)

9、10は龍泉窯の青磁である。9は蓮弁文碗の底部の小片である。釉調はオリーブ色、半透明で光沢は無い。高台畳付きは露胎、器表は細かく貫入している。10は無文の折縁鉢の口縁部の小片である。釉調は灰緑色、半透明で光沢は良好である。口縁部の施釉は薄い。11は瀬戸窯灰釉折縁皿の口縁部の小片である。胎土は黄白色を呈し、大粒泥岩粒を混入する。被災し器表は肌荒れしている。12~15は常滑窯片口鉢Ⅰ類である。12、14は6a型式、13は5型式の口縁部である。12の胎土は淡灰色を呈し、長石、黒色粒子を多く含む。口唇部は肥厚し、僅かに降灰している。13は片口部位付近で、注口部制作のための凹凸が顕著である。また、口縁部は粘土紐の雑な貼り付けで作られている。14の胎土は灰色を呈し長石粒子多く含む。口縁部から内面に厚く降灰している。15は底部である。胎土は灰色を呈し長石を含み精緻である。体部外面下の回転へらけずり調整痕は明瞭で、また内面の磨滅も顕著である。16は南部系山茶碗の口縁部で尾張型6~7型式である。胎土は褐白色を呈し長石粒子を多く含む。器肉は比較的均一でやや精良である。外面口縁下のなでが強い凹む。口唇部に厚く降灰している。17~23は常滑窯の製品である。17、18は甕の底部である。17の胎土には長石粒子が多く含まれ粗い。底部際はへらによる横ナデ調整、底部外面は砂底である。18の胎土は褐灰色を呈し、長石大粒、石英を含む。内面には薄い降灰が有る。また、磨滅しており鉢に転用した可能性がある。19は広口壺である。6b型式である。縁帯は頸部に着いており、縁帯幅は2cmと狭い。胎土は黒灰色を呈し、長石を多く含む。口縁部から頸部にかけて厚く降灰している。20は小壺の底部である。胎土は淡灰褐色を呈し、精緻である。内面は指頭による調整、外面はナデ調整である。底部外面は砂底、内面には降灰がある。21~23は片口鉢Ⅱ類で6b型式である。21の胎土は長石を含み粘性があり精緻である。口唇部中央はナデのため窪み、また口縁下部は火ぶくれしている。22の胎土は長石、若干の砂粒を含む。外面口縁下は強い指ナデのため窪む。23の胎土は淡橙色を呈し、焼成は不良である。24は魚住窯の鉢の口縁部である。胎土は淡灰褐色を呈し、砂粒を多く含む精良である。内面の磨滅が顕著である。25は瓦質手焙りの口縁部の小片である。器表には磨きの痕跡が僅かに認められる。26~32は鉄製品である。26~31は釘である。全長3.5~7cm、太さは4~8mmである。32は環状掛け金具の止め金の部分である。環部2.2cm、孔径5mmを測る。33は北宋銭、元豊通寶である。34、35は石製品である。34は滑石のスタンプである。植物文(?)が陽刻されている。35は砥石である。流紋岩質凝灰岩の伊予産の中砥である。砥面は4面ある。



- 表土層
 1 現代盛土
 2 白粗砂
 3 白細砂
 4 茶黄色砂質土 貝殻細片多く、炭化物少量含む。粘性なくしまりなし。
 5 茶黄色砂質土 貝殻、細砂僅かに含む。粘性なくしまりなし。
 23 白粗砂 ややしりをもつ。
 中世遺物包層
 6 茶黄色砂質土 かわらけ片、炭化物、貝殻片含む。粘性なく、しりり良好。
 7 茶黄色砂質土 かわらけ破片を多く含む。貝殻片、細砂を含む。堅くしりり。
 24 茶色砂質土 かわらけ片、炭化物、貝殻片含む。しりりなし。



— x0

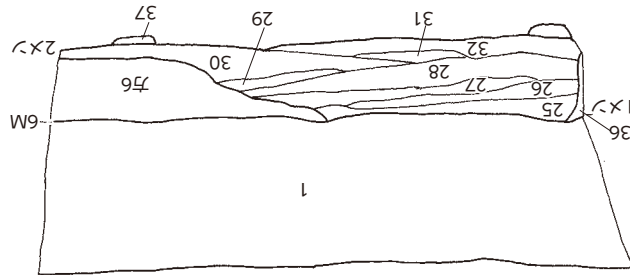
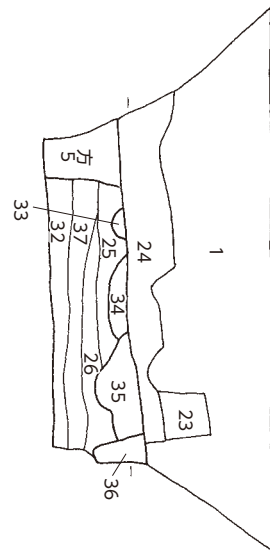
— x2

— x4

— x6

— x8

— x10



- 1面
 土坑1
 8 暗黄色砂質土炭化物、かわらけ片混入、粘性なくしりりしない。
 17 黄色細砂(1面構成土) 貝殻子を含むしりりのある層。
 18 黄色細砂(1面構成土) 貝殻子、黒色粘土を含むしりりのある層。
 25 暗白色砂質土(1面構成土) 白粗砂、貝殻片を多く含む。茶赤色粘土が混入する。しりり。
 26 暗黄色砂質土(1面構成土) 白灰細砂、貝殻片を少量含む。茶赤色粘土が混入する。しりり。
 27 暗白色砂質土(1面構成土) 白粗砂、炭化物、貝殻片を少量含む。しりりなし。
 28 暗黄色砂質土(1面構成土) 27層より白粗砂多い。しりりなし。
 29 暗白色砂質土(1面構成土) 白細砂に少量の白粗砂を含んだ層。しりりなし。
 30 暗白色砂質土(1面構成土) 29層より白粗砂が多い層。しりり。
 31 暗白色砂質土(1面構成土) 黒色粘土を全体に含む。しりり。
 32 暗白色砂質土(1面構成土) 31層より黒色粘土を全体に含む。しりり。
 土坑2
 9 暗黄色砂質土 炭化物、かわらけ片混入、粘性なくやしりり。
 10 暗黄色砂質土 炭化物、貝殻片含む。粘性なくやしりり。
 方形竪穴4
 11 暗黄色砂質土 炭化物、かわらけ片混入、貝殻多く含む。粘性なくやしりり。
 12 暗黄色砂質土 大型貝殻を多く含む。炭化物、石片少量混入。粘性なくやしりり。
 13 暗黄色砂質土 炭化物と黒灰色粘土を層状に含む。かわらけ破片、貝殻子を混入する。粘性なくやしりり。
 14 暗黄色砂質土 貝殻子、粗砂を含む。粘性なくしりりなし。
 15 暗黄色褐色粗砂(柱穴) 灰黒色砂を少量含む。しりりなし。
 16 暗黄色褐色粗砂(柱穴) 炭化物、貝殻子を含む。しりりなし。
 20 暗黄色砂質土 貝殻を少量含む。しりりなし。
 21 暗黄色褐色砂質土 貝殻を多量に含む。しりりなし。
 33 暗茶色細砂(柱穴) 炭化物、貝殻片、骨片混入。しりりなし。
 34 暗茶色細砂(土坑) 炭化物、貝殻片混入。しりりなし。
 35 暗茶色細砂(土坑) 炭化物、かわらけ片混入。しりりなし。
 36 暗茶色細砂(柱穴) 炭化物、貝殻片、混入。しりりなし。
 2面
 19 暗褐色粘質土(2面) 堅くしまった層。古代遺物を少量含む。
 22 暗白色粗砂(柱穴) 混入物なし。しりりなし。
 37 暗白色砂質土(柱穴) やや黄色砂を含む。しりりなし。

図21 2面遺構配置図

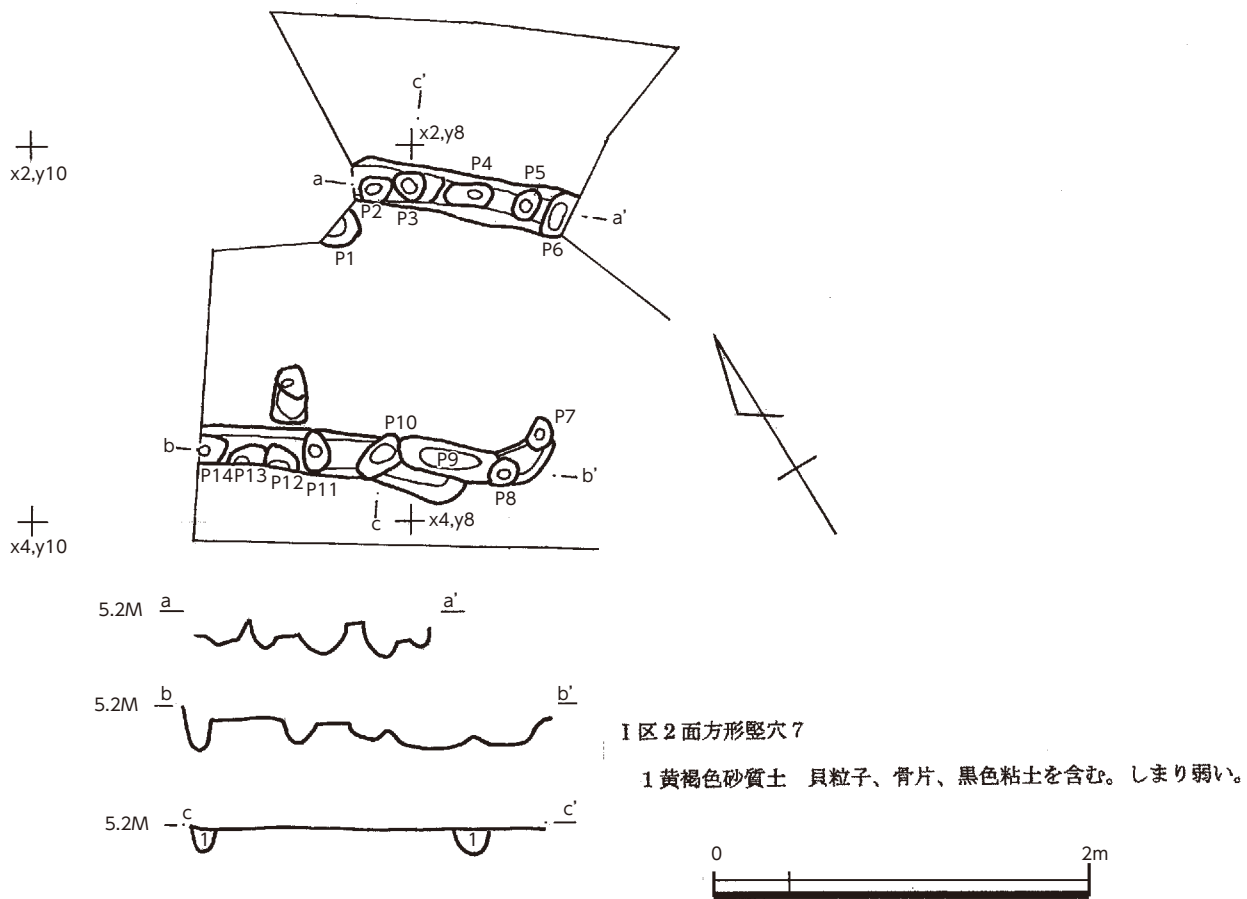


図22 方形竪穴7

第2節 中世第2面

中世第2面は1面直下70～80cm、海拔5.2m前後で検出された。1面の砂層とは一変して黒褐色粘質土の粘土層である。検出された遺構は方形竪穴3軒、方形土坑1基、土坑1基である。遺構群は検出状況から、おおよそ2時期の様相を検出したと想定される。また、この層中には中世遺物に混入して古代遺物が出土した。本遺跡地では該期の遺構群は検出されていないが、中世期の遺構の掘り込が深いために破壊された可能性も否定出来ない。

方形竪穴7(図22)

調査区北西部、X2～3・Y6～8グリッドにおいて海拔5.12mで検出された。検出されたのは床面及び、床面の四周を廻る柱穴群である。当址は壁板を押さえるために所謂床面に杭を打ち付けるタイプのものであり、その痕跡が柱穴状になって検出されたものである。壁面はすでに完全に削平されており遺存したのは床面のみである。検出された掘り方規模は南北167cm、東西177cmで平面形は長方形になると思われる。床面の海拔は5.12mである。床面からは15口の柱穴が検出された。平面形が凡そが楕円を呈し、深さは7～16cmを測る。覆土は黄褐色砂質土で貝粒子、骨片、黒色粘土を含みしまりは無い。当址の南北の軸方向はN-41°-Eである。

表9 方形竪穴7概要表

NO	規模cm	深さcm	底部標高m	平面形	備考
床面	167×177以上	0	5.14	長方形(推定)	壁の検出はなし

NO	規模cm	深さcm	底部標高m	平面形	備考
竪穴内P1	14×21	7	5.03	半円形	半分が遺存
竪穴内P2	15×13	12	5.02	楕円形	
竪穴内P3	18×14	15	5.01	円形	
竪穴内P4	24×13	13	5.03	楕円形	
竪穴内P5	15×15	16	4.99	円形	
竪穴内P6	12×24	10	5.02	楕円形	
竪穴内P7	13×17	13	5.01	楕円形	
竪穴内P8	16×15	15	5.00	円形	
竪穴内P9	35×13	18	4.97	楕円形	
竪穴内P10	17×13	14	5.03	楕円形	
竪穴内P11	12×16	19	5.00	楕円形	
竪穴内P12	18×15	14	5.07	楕円形	
竪穴内P13	20×13	7	5.03	楕円形	
竪穴内P14	15×17	26	4.96	楕円形	
竪穴内P15	20×30	18	5.01	楕円形	

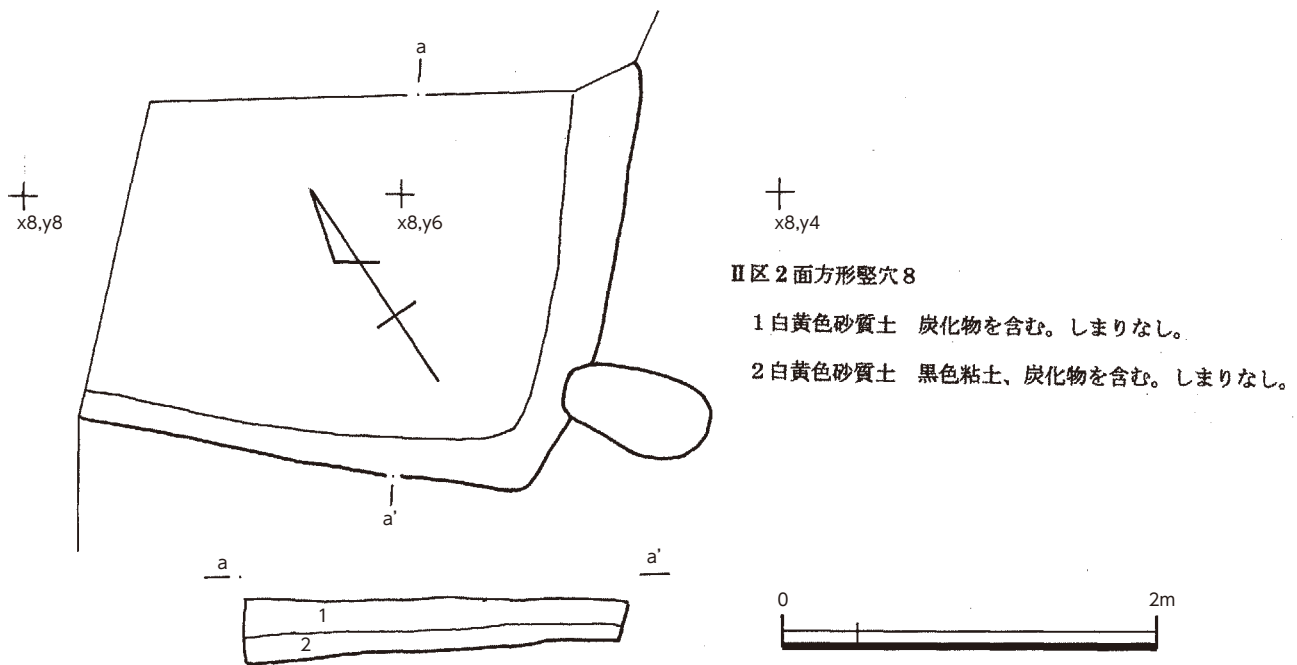


図23 方形竪穴8

方形竪穴8(図23)

調査区西部、X5～8・Y7～9グリッドにおいて海拔5.28mで検出された。当址の西側、及び北側は調査区外北、及び西にある。検出された掘り方規模は南北192cm、東西258cmで平面形は長方形になると思われる。床面は南北184cm、東西228cmを測り、海拔は4.79mである。床面はきれいに掃除されており上屋、及び床面の構造を想定出来る痕跡は検出されなかった。覆土は白黄色砂質土で炭化物、黒色粘土を含みしまりはない。当址の南北の軸方向はN-43°-Eである。

表10 方形竪穴8概要表

	規模cm	深さcm	底面標高m	平面形	備考
掘り方	192以上×25以上	50		長方形(推定)	西側北側は調査区外
床面	184以上×228以上	50	4.79	長方形(推定)	

方形竪穴9(図24)

調査区北西部、X6～7・Y3～5グリッドにおいて海拔5.28mで検出された。検出されたのは床面及び、床面の四周を廻る柱穴群で、その西側床面の一角である。当址は壁板を押さえる杭の痕跡で壁面はすでに削平されていた。検出された掘り方規模は南北43cm、東西250cmを測り、床面の海拔は5.17mである。床面からは8口の柱穴が検出された。平面形

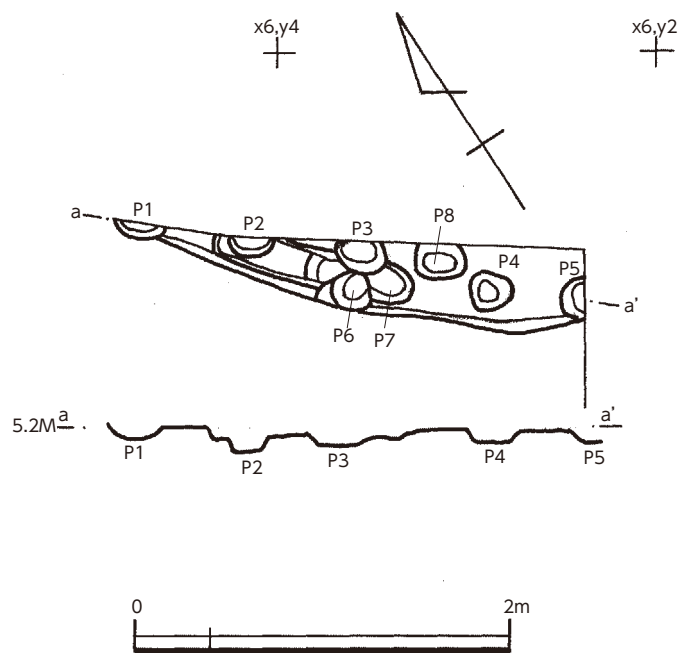


図24 方形竪穴9

は円形及び楕円を呈し、深さは5～34cmを測る。当址の南北の軸方向はN-46°-Eである。

表11 方形竪穴9概要表

NO	規模cm	深さcm	底面標高m	平面形	備考
床面	250以上×43以上	14	5.17	長方形(推定)	大部分は調査区外
竪穴内P1	30×10	16	5.12	半円形	半分が遺存
竪穴内P2	25×12	34	4.96	楕円形	
竪穴内P3	25×15	22	5.02	楕円形	
竪穴内P4	20×19	7	5.13	楕円形	
竪穴内P5	20×11	6	5.12	円形	
竪穴内P6	15×20	13	5.02	円形	
竪穴内P7	19×47	5	5.15	楕円形	
竪穴内P8	17×28	13	5.06	楕円形	

柱穴列(図25)

調査区北西部、X5・Y8グリッドにおいて海拔5.30mで検出された4口の柱穴群である。当址の西側は方形竪穴8に切られている。検出された掘り方規模は東西の長さ89cmを測る。柱穴の平面形は楕円を呈し、深さは6～16cm、底部の海拔は5.14～5.23である。柵跡であろうか。当址の南北の軸方向はN-45°-Eである

表12 柱穴列概要表

NO	規模cm	深さcm	底面標高m	平面形	備考
P21	20×8	6	5.23	楕円形	半分が遺存
P10	23×24	15	5.14	楕円形	
P22	28×17	11	5.19	楕円形	
P11	32×41	16	5.15	楕円形	

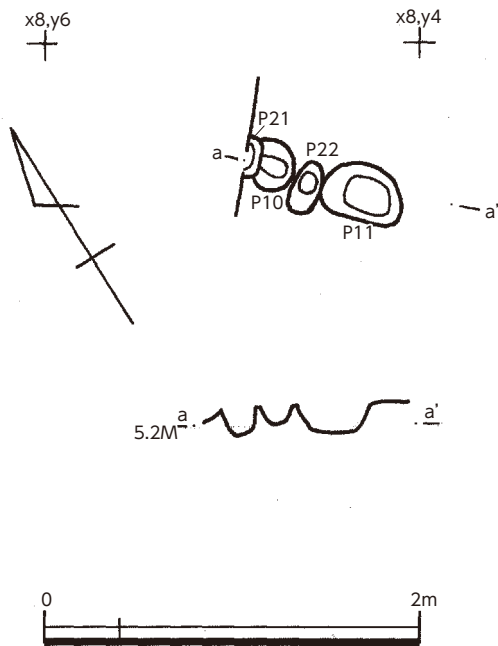
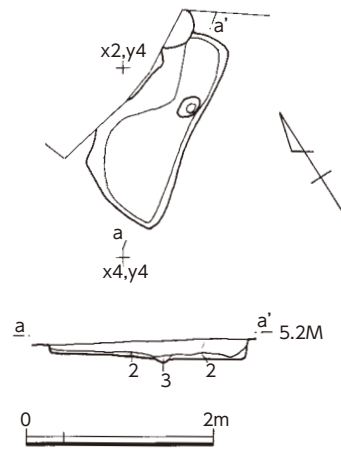


図25 柱穴列



Ⅱ区2面方形土坑2

- 1 黄褐色砂質土 貝粒子、骨片、黒色粘土を含む。しまりまし。
- 2 黒色粘質土 貝粒子、土器を含む。しまりなし。
- 3 暗黄褐色砂質土 貝粒子、かわらけ細片含む。しまりなし。

図26 方形土坑2

方形土坑2(図26)

調査区北西部、X1～3・Y3～5グリッドにおいて海拔5.15mで検出された。検出された掘り方規模は南北299cm東西103cmを測る。深さは確認面より22cm、底部の海拔は4.94mである。南壁際には28×22cmの楕円形を呈する小穴が検出された。深さは9.2cmを測る。

表13 方形土坑2概要表

規模cm	深さcm	底面標高m	平面形	備考
299×103	22	4.94	長方形	

土坑8(図27)

調査区南西部、X4・Y3～4グリッドにおいて海拔5.20mで検出された。当址の主体は調査区外南西にある。検出された掘り方規模は南北34cm東西120cmを測る。深さは確認面より24cm、底部の海拔は4.97mである。

表14 土坑8概要表

規模cm	深さcm	底面標高m	平面形	備考
120×34	24	4.97	半円形	半分が遺存

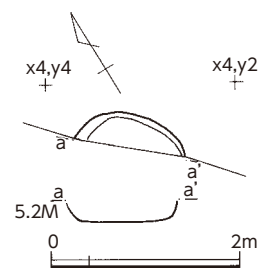


図27 土坑8

柱穴群

2面において検出された柱穴は20口であった。遺構面全体に散在しており、また、調査区際のため展開の状況が掴めないものもあり、性格は不明といわねばならない。P5、P17、P18は南北方向に整然と並んでおり或いは柵の痕跡が想定されるが現状では不明といわねばならない。以下、検出された柱穴を下記の表にまとめてみた。

表15 2面柱穴概要表

NO	規模cm	深さcm	底面標高m	平面形	備考
P3	30×28	10	5.10	円形	
P4	24×40	29	4.85	半円形	半分が遺存
P5	30×54	13	4.91		
P6	18×17	14	5.03	円形	

NO	規模cm	深さcm	底面標高m	平面形	備考
P7	22×32	13	5.05	半円形	半分が遺存
P14	32×34	8	5.15	円形	
P15	14×16	15	5.07	円形	
P16	20×20	12	5.12	円形	
P17	20×30	16	5.05	楕円形	P5に切られる
P18	38×30	22	4.95	楕円形	P19に切られる
P19	19×27	8	4.97	楕円形	
P20	23×27	3	5.09	円形	
P8	26×60	7	5.13	楕円形	半分が遺存
P9	40×80	33	4.97	楕円形	
P13	20×34	14	5.16	楕円形	
P24	8×18	5	5.17	円形	
P25	16×48	13	5.05	半円形	半分が遺存
P26	22×32	23	5.06	円形	
P27	14×16	15	5.07	円形	
P28	45×45	5	5.11	円形	
P29	20×8	5.1	5.16	半円形	上場遺存
P30	48×18	14.7	5.08	半円形	半分が遺存
P31	27×20	23.2	5.05	楕円形	方9に切られる
P32	16×20	7.4	5.20	楕円形	P33を切る
P33	40×43	5	5.11	隅丸方形	

2面出土遺物(図28)

1、2はロクロ成形のかわらけの大皿と小皿である。胎土は橙色で赤色粒子、白色粒子、白針を含む。丁寧な作りである。大皿は口縁を直口して立ち上げ、小皿は丸深の形態である。3は龍泉窯の青磁蓮弁文碗の口縁部の小片である。胎土は褐色味白色を呈し、釉調は緑灰色、半透明で光沢はさほど良くない。器表には貫入が顕著である。4～6は常滑窯片口鉢Ⅰ類である。4、5はⅠ類の最末期の6a型式である。6は13世紀中期以降に比定される。4は口縁部である。胎土は暗灰色を呈し、長石、小石を含む。内面及び口縁部に降灰している。5の胎土中には長石粒子が多く含まれ粗い。高台は粘土紐を幅広に貼る。内面の磨滅は顕著である。6の胎土は灰色を呈し、若干の長石粒を含み精緻である。高台を外向きに貼りつける。内面に降灰する。7は南部系山茶碗である。尾張型7型式。胎土は灰色を呈し精良で器肉は均一で薄手であり、北部系山茶碗に酷似する。内面及び口縁部に降灰している。8は常滑窯片口鉢Ⅱ類、5型式である。胎土は灰橙色を呈し、粗い。内面に薄く降灰している。内底面が若干磨滅している。9、10は土製品、9は鏝釜、10は土錘である。9の胎土は淡橙色を呈し、精緻である。内面はささら状の工具による横

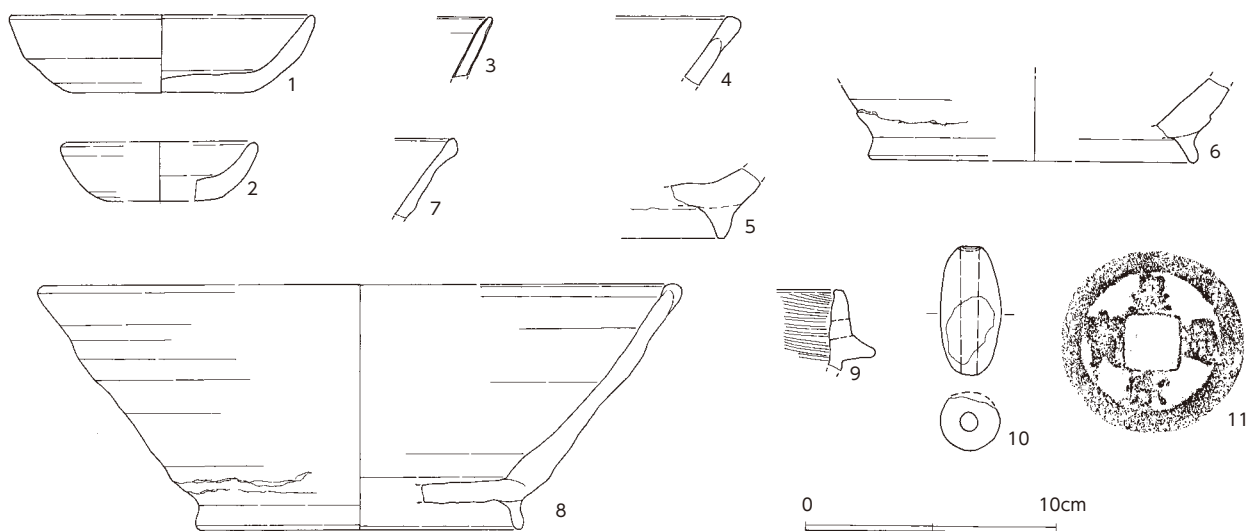


図28 2面出土遺物

ナデの調整痕がある。口縁部に直径6mmの穴を穿つ、鏝下全体に煤が付着している。10はかわらけ質の胎土である。全長5.15cm、最大直径2.4cm、孔径6mmである。11は北宋銭、皇宋通寶である。

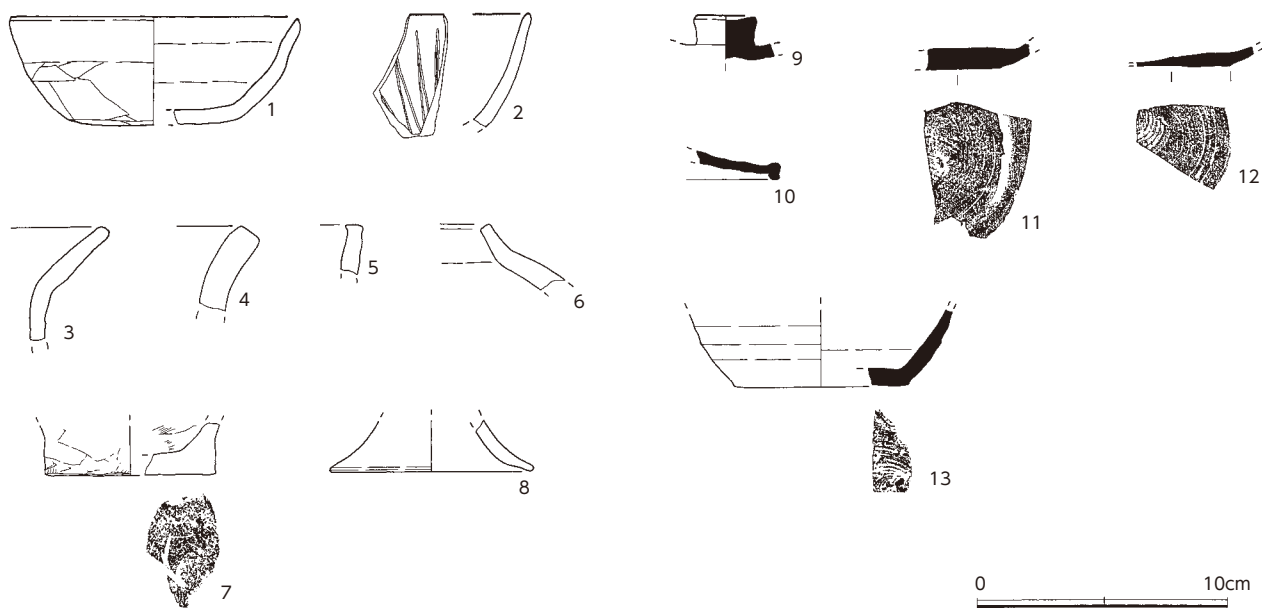


図29 古代以前出土遺物

古代以前出土遺物(図29)

本遺跡で出土した古代以前の遺物はテン箱にして約1 / 2箱で、その大半は古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての遺物である。

1・2は土師器坏である。1は相模型坏で口縁部1 / 4からの復元。内面から口縁部にかけてナデ、外面体部・底部はケズリ調整が施される。2は甲斐型坏である。ロクロ成形ののち外面体部下半にケズリ調整が施され、内面に山形暗文を配する。3～8は土師器甕である。3は相模型甕で内外面ヘラナデ。外面頸部は強く横ナデされる。4は胎土に砂粒を多く含んでいる。面取りされた口唇部に5・6との共通点を見いだせる。内外面ナデ。5・6は三浦型甕で内外面ナデ、口唇部は面取りされる。7は相模型甕で底部1 / 4からの復元。外面ヘラナデ、内面ナデ調整が施され、部分的にハケメが残る。底部は木葉痕の上に離れ砂かと思われる砂が付着している。8は武蔵型台付甕の脚台部。脚裾1 / 4からの復元で内外面ナデ調整。9・10は須恵器蓋で9はボタン状の摘み部分のみ遺存する。10は復元がかなわなかったが、径15cmを超えるものかもしれない。11～13は須恵器坏である。11・12は胎土に白色針状物質を含んでいる。11は静止糸切り後底部外周から体部下半に回転ヘラケズリが施される。底径は8cm程度か。12は回転糸切り後底部外周に回転ヘラケズリが施される。13は底部1 / 5からの復元。底部は回転糸切り無調整である。

土師器坏は1に代表される相模型や扁平な丸底形態をなすと思われる有稜坏が多く出土しているほか、ロクロ土師器、ロクロ成形で体部下半に回転ヘラケズリが施されるものが少量含まれる。甲斐型坏は実測し得たものの他に底部の小片が1点である。土師器甕はナデ調整ないし僅かにハケが認められるものが主体で、ケズリ調整を施されるものが客体的に加わる。須恵器は実測し得たものの他、体部下半に丸みをもって立ち上がる坏、口縁部が外反する坏、壺類・甕類の小片がある。灰釉陶器は小片が2点出土している。これらの遺物は7世紀末葉から10世紀代の所産と思われる。

その他、器種・時期不明の須恵器2点、弥生時代後期から古墳時代前期頃と思われる台付甕の接合部3点、弥生時代中期後半・宮ノ台式期の甕の口縁部が1点出土しているが、小片のため図示することが出来なかった。

第四章 まとめ

今回の調査では13世紀末葉～14世紀中葉に比定される2面の生活面とそれに伴った方形竪穴群を中心とした遺構群が検出された。生活面は2面検出され、出土遺物から1面が14世紀前葉～14世紀中葉、2面が13世紀末葉～14世紀前葉の様相に比定される。1面は黄褐色細砂の砂層で厚く地形されており、現状においても80cm前後の砂層が確認出来た。元来はもっと厚かったとも想定され1面の地形は掘り込の深い構築物(竪穴建物)を建造することを意図していたものであると予想される。2面は黒褐色粘質土の地山面で検出され、この基盤層を利用して生活空間としていた。この面は現在の地表からGL-240cmを測る。また、本調査地点は現在の由比ヶ浜から200mの距離である。これは当時この辺りが入り海ではなく人々の生活基盤面として地盤があったことを示している。この地は該期に浜地を生業とした人々の居住地として息づいていたのである。また、この面からは中世以前の遺物が整理箱にして1/2箱出土している。古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての遺物である。今回の調査では残念ながら該期の遺構の検出はなかったが、近隣には該期に並行した遺構群が確認されており、本遺跡地の古代以前の遺構は掘り込の深い中世遺構に破壊されその存在が消失した可能性もあり、該期に他の遺跡地と同様に本調査地点を生活面として使用していた可能性はある。海から200mほどという至近距離の海岸線沿いの海岸線一帯で中世以前より連綿と生活を続けていた様相を若干ながらも確認できたと思われる。

以下、今回検出された中世の2時期の様相を述べまとめとする。

中世第2面

2面からは3軒の方形竪穴が検出された。方形竪穴7、9はいわゆる壁の四周に柱穴を廻らせるタイプのもので、柱穴群は壁板を留めるために使用した杭の痕跡である。方形竪穴8の床面はきれいにその痕跡が消されており現状では構造等は不明である。また、方形竪穴群の南北軸方向はN-41～43°-Eで、ほぼ同方向を示し、また平行な位置関係にある。積極的根拠ではないが地割りに沿って方形竪穴を建てた様相である。本調査地点は若宮大路から西に50mの距離にあり、それを基本軸に据えた地割りであると思われたが、軸方向が同方向を示さずその様子はない。他遺跡地には道路も検出されており、それに沿った基本軸の遺跡が確認されていることから当調査地点の軸方向も同様に他の調査地点近辺の道路等に方向軸を合わせたのではないかと考えられる。出土遺物、及び切り合い関係もなく、方形竪穴群の前後関係は不明であるが、検出状況から判断して共存していたと考えてもよさそうである。

中世第1面

この面からは方形竪穴が6軒検出された。2面と同様にほぼ平行な位置関係に構築され、さらにこの方形竪穴群が重複関係を持つことから建て替えた様相であると考えられる。検出された方形竪穴群の床面は廃棄時にきれいにされており上屋、床面構造を示す手掛かりはほとんど得られなかった。方形竪穴6は僅かに根太痕が認められ、根太の上に床板を載せたことが理解され、また、方形竪穴1の隅の柱穴は壁板を留めた杭跡と思われるが遺存部分がわずかであり想像の域である。また、方形竪穴群の南北軸方向は大まかに2分類され、方形竪穴1、4が示すN-30°-E前後と方形竪穴2、3、5、6が示すN-39～45°-Eである。前者は共に遺存部分が少なく正確さを欠き、後者は若干ばらつきがめだつが、遺構の検出状況、様相、2面時と同軸方向であることを考え合わせると後者が前出である。2面の軸方向を踏襲して後者の方形竪穴群を構築する。切り合い関係から方形竪穴6を破棄して方形竪穴5を造ったと考えられ、また、出土遺物からは方形竪穴2、3、5は平行時期であり、3軒は同時期に存在した可能性を示す。その後方形竪穴2、3を破棄して、方形竪穴1、4が造られるといった状況である。また、方形竪穴1、4は軸方向が前出の方

竪群より10°以上ずれ、若宮大路のそれに近づき、基本軸を変えた可能性がある。出土遺物からは14世紀中葉の様相を呈しており、それは鎌倉幕府最終焉期に相当するが、この世情の変化と本遺跡地の基本軸の変化とを直接結び付ける要因は無い。しかし、大枠内での鎌倉内での変化の一端が本遺跡地内に示されたのではないかと思われる。

第1章で述べたように本遺跡地内に所在する遺跡地の方形竪穴群は短冊型の区画内で繰り返し建て替えられた様相を呈している。今回の調査は調査面積が狭く地割りを示す、溝、道路等の検出もなく区画に関する考察は出来ないが、今回検出された方形竪穴群の検出状況は本遺跡地内に検出されたそれと同様な様相を示すことから考えて他遺跡同様に、当遺跡地近辺の地割りに沿った短冊型の区画内に構築されたと考えられそうである。

遺物観察表 単位 cm (復元径) [遺存値]

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長	底径 /幅	器高 /厚	胎土	色調	成形	備考
7	1	1面	方形竪穴1	鉄製品 釘	[6.8]	[0.6]	[0.6]				
	2			鉄製品 釘	[4.6]	[0.6]	[0.5]				
	3			鉄製品 釘	[4.5]	[0.7]	[0.5]				
	4			骨製品 筭	[8.5]	1.4	0.25				
	5			骨加工品	4.8	1.8	0.7				刃物による切断面有り
9	1	1面	方形竪穴2	かわらけ	(11.6)	(7.4)	3.0	淡橙色/白色粒・雲母を含む		ロクロ	
	2			かわらけ	(11.6)	8.0	3.3	橙色/白色粒・雲母を含む		ロクロ	
	3			かわらけ	(8.2)	(5.6)	1.6	淡橙色/白色粒・赤色粒を含む		ロクロ	
	4			かわらけ	(7.2)	(3.4)	2.6	橙色/白針・白色粒・赤色粒を含む		ロクロ	
	5			龍泉窯 青磁碗		(5.0)		白色	淡灰緑色		
	6			瀬戸窯 折縁皿		7.9		灰白色	灰釉		底部釉なし。焼台付着。外面釉の剥落が顕著
	7			瀬戸窯 入れ子	(9.0)			褐色をおびた白色	黄灰色	ロクロ	生焼け様
	8			常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部 小片				灰色		6a型式
	9			常滑窯 片口鉢Ⅰ類		(17.6)			灰色		
	10			魚住窯 片口鉢	口縁部 小片			暗灰色/白色粒多く、小石粒含む。砂質	暗灰色	口縁端部をくの字	
	11			瓦質 手焙り	口縁部 小片			灰白色/砂粒・白色粒を含む	淡灰白色		菊花文スタンプ
	12			土製品 伊勢系 罽釜	口縁部 小片			胎芯黒灰色/砂粒多、く白色粒を含む	淡橙色		φ0.9cmの貫通穴あり
	13			土製品 伊勢系 罽釜	口縁部 小片			胎芯黒灰色/白色粒・白針を含む	黄灰色		
	14			土製品 人形	4.0	2.5	1.3		橙色	焼成良好	座位
	15			鉄製品 釘	[8.0]	[0.7]	[0.4]				
	16			鉄製品 釘	7.0	0.6	0.5				
	17			鉄製品 釘	[5.5]	[0.3]	[0.5]				
	18			銭 開元通寶	2.4	2.4					初鑄年960年 隸書
	19			貝製品 基石	1.6	1.8	0.2		乳白色		

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長	底径 /幅	器高 /厚	胎土	色調	成形	備考
	20			火打石	1.7	1.6	0.4				石英質
	21			不明骨製品	1.7	0.9	0.7		白色		円錐状
11	1	1面	方形竪穴3	かわらけ	(13.0)	(7.0)	3.6	橙色/白針・黒色微砂・ 白針を含む		ロクロ	
	2			かわらけ	(12.6)	(7.8)	3.8	橙色/赤色粒、黒色微砂 を含む		ロクロ	
	3			かわらけ	(11.4)	(7.8)	3.1	橙褐色/黒色微砂・白針・ 雲母を含む		ロクロ	
	4			かわらけ	(11.6)	(7.6)	2.6	橙色/白針・黒色微砂・ 白針を含む		ロクロ	
	5			かわらけ	(10.6)	5.8	2.7	橙色/赤色粒・白針含む		ロクロ	
	6			かわらけ	(7.8)	(5.0)	2.4	淡橙色/黒色微砂・赤色 粒・白色粒子を含む		ロクロ	
	7			かわらけ	(8.4)	(6.0)	1.8	淡橙色/赤色粒・雲母を 含む		ロクロ	
	8			かわらけ	(8.2)	(6.0)	1.8	淡橙色/白針・黒色微砂 を含む		ロクロ	
	9			かわらけ	(8.0)	6.0	1.7	淡橙色/赤色粒・白色粒 子・雲母を含む		ロクロ	
	10			かわらけ	7.8	5.2	1.7	淡橙色/赤色粒・白針を 含む		ロクロ	
	11			かわらけ	7.0	3.0	1.7	淡橙色/黒色粒子・白針 を含む		ロクロ	
	12			舶載 天目茶碗	口縁部 小片			黒灰色/精良	鉄釉		
	13			瀬戸窯 柄付片口	口縁部 小片			橙色	鉄釉		
	14			常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部 小片			灰色/白色粒を含む	灰色		6a型式
	15			常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部 小片			灰色/白色粒を含む	灰色		6a型式
	16			常滑窯 片口鉢Ⅰ類	底部 小片			灰色/白色粒多く含む	灰色		
	17			常滑窯 鹿口壺		(9.2)		橙灰色/長石多く、小石 粒を含む	淡赤色	指頭、ヘラケズリ、 なで	二次的に火を受け煤痕が残る
	18			常滑窯 片口鉢Ⅱ類	口縁部 小片			橙灰色/白色粒を含む	灰橙色		6b型式
	19			伊勢系土鍋	口縁部 小片			胎芯黒灰色/白色粒・雲 母を含む	黄灰色		
	20			研磨製品	3.8	5.5	0.8	淡橙色/白色粒・雲母を 含む			かわらけ底部片転用
	21			鉄製品 釘	[9.0]	[1.0]	[0.3]				
	22			鉄製品 釘	[6.8]	[0.8]	[0.4]				

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長	底径 /幅	器高 /厚	胎土	色調	成形	備考
	23			鉄製品 釘	6.3	0.5	0.5				
	24			銭 開元通寶	2.4	2.3					初鑄年不明
	25			銭 開元通寶	2.4	2.4					初鑄年不明
	26			銭 開元通寶	2.5	2.5					初鑄年不明
11	27			銭 不明	2.5	2.5					
	28			銭 〇〇通寶	2.6	2.5					
	29			銭 〇〇通寶	2.4	2.3					
	30			銭 不明	2.5	2.5					
	31			銭 〇〇通寶	2.4	2.4					
	32			銭 不明	2.4	2.3					
	33			軽石	3.1	2.9	1.9		灰白色		
	34			軽石	4.6	2.8	2.5		灰色		
14	1	1面	方形竪穴5	かわらけ	(8.0)	4.8	2.4	橙色/赤色粒・白針含む		ロクロ	
	2			常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部 小片			暗灰色/長石多く、小石 粒を含む	暗灰色		6a型式
	3			北部系 山茶碗		(5.0)		灰色/精良	灰色		東濃型。多治見編年 明和。内底 中心のナデが強い。高台にモミ ガラ痕
	4			北部系 山茶碗		(4.0)		灰白色/精良	灰白色		東濃型。多治見編年 明和。内底 中心のナデが強い。高台にモミ ガラ痕
	5			常滑窯 片口鉢Ⅱ類か	口縁部 小片			暗灰色/白色粒・石粒を 含む	赤褐色	口縁部が横ナデの 為へこむ。外側面 に強いナデ	6b型式 内面にあつい降灰
	6			常滑窯 片口鉢Ⅱ類	底部 小片			暗灰色/白色粒多く石粒 を含む	赤褐色		
	7			不明土製品	2.5	2.5	1.6	淡橙色/白色粒・雲母を 含む。精良	橙褐色		かわらけ質の立方体でφ0.2cm の貫通孔あり
	8			鉄製品 釘	[5.0]	0.8	1.0				
	9			鉄製品 釘	[5.0]	0.8	0.5				
	10			鉄製品 釘	[5.7]	1.0	0.6				
	11			石製品 砥石	[4.5]	[3.5]	1.1		淡黄褐色		鳴滝産仕上砥 頁岩
	12			滑石製品	口縁部 小片				銀銅の灰橙色		鍋の転用品刃物による切断面有 り

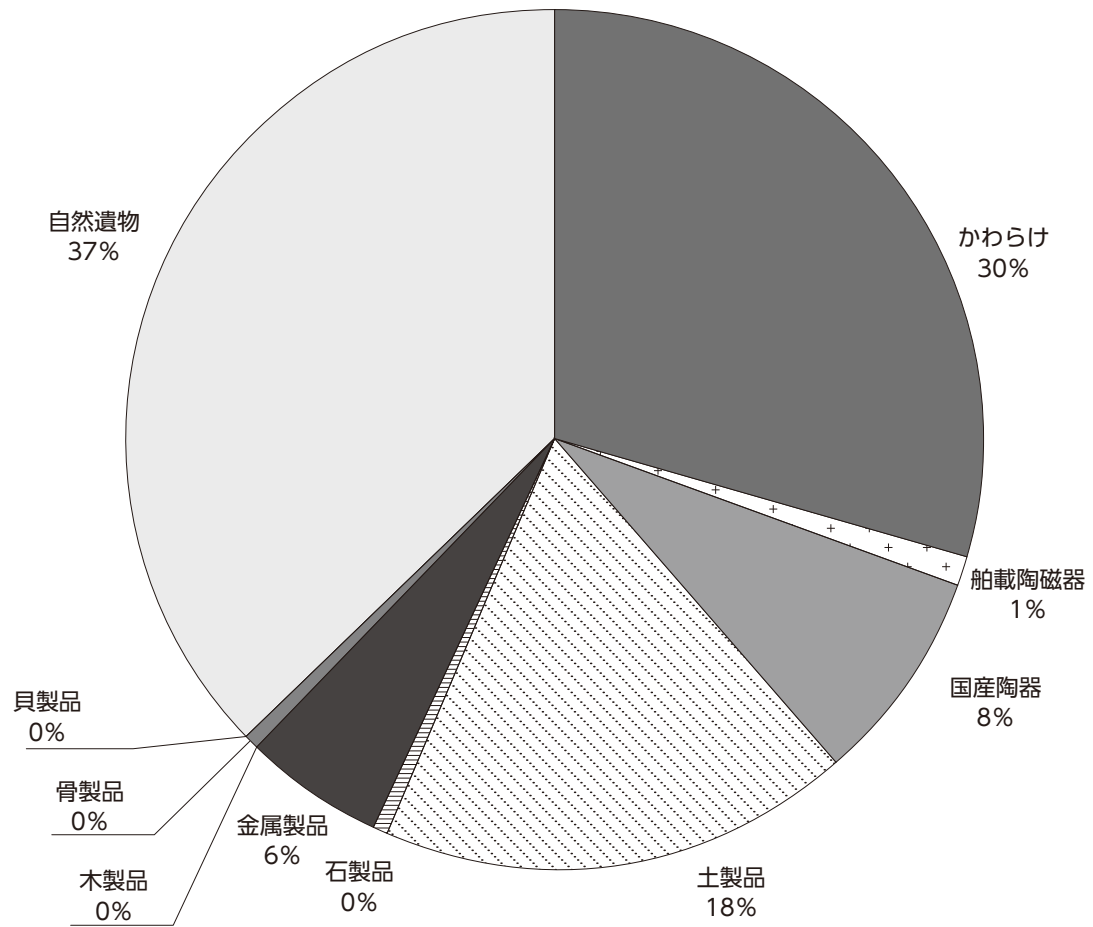
図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長	底径 /幅	器高 /厚	胎土	色調	成形	備考
	13			骨製品 筭	[4.5]	1.2	0.2				
	14			骨製品 筭	[6.3]	1.3	0.2				
14	15			不明骨製品	6.4	直径 2.9					鹿角製 完形 はめ込み式か削ってある。器表には研磨後の凸凹が残る
16	1	1面	方形竪穴6	かわらけ	(13.6)	(8.4)	3.0	橙色/黒色微砂・赤色粒・白色粒・泥岩粒を含む		ロクロ	
	2			かわらけ			7.4	橙色/白色粒・白針を多く含む		ロクロ	ほぼ中央部に外底から穿孔。内面径0.4cm、外面径1.5cm
	3			かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.9	橙色/白色粒・黒色微砂を含む		ロクロ	
	4			かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.7	橙褐色/黒色微砂・赤色粒を含む		ロクロ	
	5			かわらけ	(7.8)	(4.9)	1.4	淡橙色/白色粒・黒色微砂を含む		ロクロ	
	6			常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部 小片			灰色/白色粒多い。精良	暗灰色		6 a 型式
	7			常滑窯 甃	口縁部 小片			灰紫色/ガラス質鉱物粒多く、白色粒を含む	緑褐色		6 a 型式
	8			常滑窯 壺			(9.0)	暗灰色/白色粒・石粒を含む	暗紫褐色	外底面糸切り	内面全体に灰釉 無頸壺・広口壺か？
	9			常滑窯 無頸壺	口縁部 小片			暗肌色/白色粒・微砂を含む	茶色、口縁部～肩部に降灰による自然釉		
	10			常滑窯 片口鉢Ⅱ類	口縁部 小片			灰色/白色粒・黒色小石を含む	赤茶褐色		6 b 型式
	11			常滑窯 片口鉢Ⅱ類	口縁部 注ぎ口 小片			胎芯橙褐色/白色粒多く、焼締まる			6 b 型式
	12			土器質 手焙り	口縁部 小片			胎芯黒灰色/白色粒・白針多く含む	黄灰色		
	13			鉄製品 握り鉢	11.5	0.4	0.5				
	14			鉄製品 釘	8.7	0.6	0.4				
	15			鉄製品 釘	7.6	0.7	0.6				
	16			鉄製品 釘	[6.8]	0.6	0.7				
	17			鉄製品 釘	[5.8]	0.5	0.6				
	18			鉄製品 釘	[7.0]	0.6	0.5				
	19			鉄製品 釘	6.2	0.6	0.7				
	20			鉄製品 釘	5.0	0.5	0.4				
	21			鉄製品 釘	6.0	0.6	0.6				

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長	底径 /幅	器高 /厚	胎土	色調	成形	備考
	22			鉄製品 環状掛金具	5.0	0.5	0.7				止金具部
16	23			銭 開元通寶	2.4	2.4					初鑄年960年 隸書
	24			銭 祥符通寶	2.5	2.5					初鑄年1008年 真書
	25			銭 熙寧元寶	2.4	2.4					初鑄年1068年 真書
	26			石製品 砥石	[9.5]	3.5	0.5		灰黄色		鳴滝産仕上砥 頁岩
	27			石製品 砥石	[6.7]	5.6	5.5		乳白色に 赤褐色のしま		伊予産中砥 流紋岩質凝灰岩
19	1		土坑1	鉄製品 釘	[6.3]	0.3	0.3				
	2		土坑2	伊勢系 鈔付土鍋	口縁部 小片			黒灰色/砂粒・白色粒・ 雲母を含む	黄灰色		
	3		土坑5	火打石	2.6	1.5	1.8				石英質
20	1	表土 層		かわらけ	(11.6)	(7.3)	3.3	橙色/赤色粒・白針・泥 岩粒を含む		ロクロ	
	2			加工骨		[2.1]	1.0				刃物による切断面有り
	3			加工骨	6.7	1.6	1.4				刃物による切断面有り
	4		攪乱	白磁 口元皿	口縁部 小片			灰白色	淡青灰色 半透明		
	5			東遠型 山茶碗	口縁部 小片			暗灰色/精良。焼締まる	黒灰色		
	6			鉄製品 釘	[12.7]	0.5	0.5				
	7			鉄製品 釘	10.4	0.4	0.4				
	8			瀬戸美濃窯 灯明皿	(10.0)	(4.4)	1.9	淡灰褐色	鉄釉浸け掛け	糸切り	近世灯明皿
	9	1面		龍泉窯 青磁蓮弁文碗	底部小 片			灰白色~桃灰色	オリーブ色 不透明	削り出し高台	
	10			龍泉窯 青磁折縁鉢	口縁部 小片			灰白色	灰緑色 半透明		
	11			瀬戸窯 折縁皿	口縁部 小片			黄白色/泥岩粒を含む	灰釉白っぽくザ ラつく		火を受けたのか釉剥落
	12			常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部 小片			淡灰色/長石・黒色粒を 含む	淡色粒		6a型式
	13			常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部 小片			灰色/長石を含む	灰色		5型式
	15			常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部 小片			灰色/長石・赤色粒を含 む	灰色		6a型式
	14			常滑窯 片口鉢Ⅰ類		(11.0)		灰色/長石を含む	褐灰色		

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長	底径 /幅	器高 /厚	胎土	色調	成形	備考
	16			南部系 山茶碗	(14.6)			灰色／白色粒・黒色粒含 む。やや砂質	灰色		尾張型6～7型式
	17			常滑窯 甃	底部 小片			暗灰色／長石・石英粒多 い	灰褐色		
	18			常滑窯 甃	底部 小片			褐灰色／長石大粒・石英 粒含む	茶褐色		
20	19			常滑窯 広口壺	(16.8)			黒灰色／長石・石英含む	褐色		6 b 型式
	20			常滑窯 小壺	底部小 片			淡灰褐色／黒・白微粒子 を含む	茶色		外底部は砂底
	21			常滑窯 片口鉢Ⅱ類	(28.2)			灰褐色／長石・石英粒・ 黒色粒含む	茶色		6 b 型式。火ぶくれ有り
	22			常滑窯 片口鉢Ⅱ類	口縁部 小片			灰褐色／長石・砂粒を含 む	灰橙色		
	23			常滑窯 片口鉢Ⅱ類	口縁部 小片			淡橙色／石英粒多く、白 色粒を含みガサつく	内面淡橙色 外面 は黄灰色		6 b 型式。生焼け
	24			魚住窯 片口鉢	口縁部 小片			淡灰褐色／白色粒を含む。 砂質	灰褐色 ～灰黄色	口縁端部をくの字	
	25			瓦質 手焙り	口縁部 小片			灰桃色／砂粒・赤色粒を 含む	灰橙色		
	26			鉄製品 釘	[9.5]	0.4	0.5				
	27			鉄製品 釘	6.8	0.4	0.5				
	28			鉄製品 釘	6.5	[0.6]	0.7				
	29			鉄製品 釘	6.5	[0.8]	0.7				
	30			鉄製品 釘	[7.0]	0.6	0.4				
	31			鉄製品 釘	[4.5]	[0.4]	[0.4]				
	32			鉄製品 環状掛金具	3.5	0.3	0.5				孔の内径は約0.5cm
	33			錢 元豊通寶	2.3	2.4					初鑄年1078年篆書
	34			滑石製品 スタンプ	4.0	2.6	1.5		銀灰色		植物文?
	35			石製品 砥石	[5.4]	4.0	3.3		乳白色に 赤褐色のしま		伊予産中砥 流紋岩質凝灰岩
28	1	2面		かわらけ	(12.0)	7.3	3.0	橙色／赤色粒・白色粒・ 白針を含む		ロクロ	
	2			かわらけ	(7.6)	(4.8)	2.3	橙色／赤色粒・白色粒・ 白針を含む		ロクロ	
	3			龍泉窯 青磁蓮弁文碗	口縁部 小片			褐色をおびた白色	淡緑灰色 半透明		
	4			常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部 小片			暗灰色／長石・小石を含 む	灰褐色		6 a 型式

図	番号	層位	遺構	遺物名	口径 /長	底径 /幅	器高 /厚	胎土	色調	成形	備考
	5			常滑窯 片口鉢Ⅰ類	底部 小片			灰色/白色粒多く・長石・ 気泡含む	灰色		6a型式
	6			常滑窯 片口鉢Ⅰ類		(12.9)		灰色/白色粒含む	灰色		
	7			南部系 山茶碗	口縁部 小片			灰色/気泡含む。精良	灰色		尾張型7型式
	8			常滑窯 片口鉢Ⅱ類	(25.4)	(12.9)	9.8	灰褐色/大粒長石・石英 粒を含む	橙褐色～茶色		5型式
	9			土製品 罌釜	口縁部 小片			淡橙色/赤粒・砂粒・金 雲母を含む			内面にささら状のナデ。φ0.6cm の貫通孔があり、罌上面に煤痕 が残る
	10			土製品 土錘	5.15	最大径 2.4		淡赤橙色/白針・白粒・ 砂粒・雲母を含む	淡赤橙色		かわらけ質。孔の内径は0.6cm
	11			銭 皇宋通寶	2.5	2.5					初鑄年1038年 真書
29	1	古代 以前		土師器 坏	(11.4)	(6.9)	(3.9)	淡橙色/長石粒多い。雲 母を含む	淡橙色		
	2			土師器 坏	口縁部 片			橙色/白色粒・橙色粒を 少量含む精良	橙色		内面 山形暗文
	3			土師器 甗	口縁部 片			淡褐色/黒色粒多い	淡褐色		
	4			土師器 甗	口縁部 片			灰色/粗砂多く砂質	淡橙色		
	5			土師器 甗	口縁部 片			暗褐色/砂粒多い	暗褐色		
	6			土師器 甗	口縁部 片			淡褐色/黒色粒多い	橙色		
	7			土師器 甗		(6.8)		淡橙色/白針含む	橙褐色		底部 木葉痕
	8			土師器 甗		(8.2)		暗褐色/細砂含む	暗褐色		
	9			須恵器 蓋				灰色/長石粒多い	灰色		
	10			須恵器 蓋	口縁部 片			灰褐色/白色粒含む。軟 質	灰褐色		
	11			須恵器 坏	底部片			灰色/白色粒・白針含む	灰色		
	12			須恵器 坏	底部片			灰色/白針含む	灰色		
	13			須恵器 坏		(7.0)		灰色/チャート含む	灰色		

由比ヶ浜中世集団墓地遺跡群出土遺物比率



貝分類表

	バテイラ	サザエ 有棘	サザエ無 棘	サザエ蓋	オニ サザエ	コシダカ サザエ	マダカ アワビ	バイ	イタヤ ガイ	イボ キサゴ	ダンベイ キサゴ	キサゴ	チョウセン ハマグリ	ハマグリ	ウスバ ハマグリ	イソ ハマグリ	アカニシ	ホソ ウミニナ	カガミ ガイ	ツメタ ガイ	
1面		7	1		1			2		6	1		5	4			4				
カクラン								1		13		3	2	11	2		1	1			
表土								1					1								
方形竪穴1	1							4		53	9			5			1	2			1
方形竪穴2		1	1	14				6		33	19		1	38			2				
方形竪穴3		3	3	1			2	7		66	40		3	34			1	4			2
方形竪穴3張出し		1	1								1			4							1
方形竪穴4							2	1			1			1	1						1
方形竪穴6	1	1	1			1	1	3		1	5	11	2	12		6	1	3	1		
方形竪穴8		1	1				6						3	34		1	2	2	3		2
土坑2														1				1			
土坑3														2							
2面	1	3	1	5			3			49	1	4	7	14		2	3				2
2面P13																				1	
2面方形土坑2	1									5	2			1							
合計	4	17	9	21	1	1	14	25	1	226	79	18	25	161	3	9	21	13	5		9

	アサリ	バカ ガイ	マガキ	ゲッコ ウガキ	カニモ リガイ	キヌカ ツギイ モガイ	サトウ ガイ	シオブキ ガイ	コシダ カガン カラ	ツノガ イ	イタヤ ガイ	スダシ ガイ	ツノマ タナガ ニシ	コマキ アガエ ビスガ イ	テング ニシ	ウチム ラサキ ガイ	コウホネ ガイ	マテ ガイ	スガイ	オオトリ ガイ	合計
1面		8	4			1	2											1			47
カケラン		1						1													36
表土																				1	3
方形整穴1	1															1					78
方形整穴2	3						1								1		2				122
方形整穴3	3				1									19							189
方形整穴3張出し																					8
方形整穴4		1																			15
方形整穴6	1	6		1				7	1	1	1	2						2			124
方形整穴8	3						1						1								8
土坑2																					3
土坑3																					1
2面	1				2		1	7	1												108
2面P13																					1
2面方形土坑2																					10
合計	12	16	4	1	3	1	5	15	2	1	1	2	1	19	1	1	2	2	1	1	753



◀ A. 調査地点 (北西から)



◀ B. 1面北半(南から)



◀ C. 1面南半(北から)



▲ A. 1面方形竪穴1 (北から)



▲ B. 1面方形竪穴2・4 (東から)



◀ C. 1面方形竪穴3南北セクション(東から)

▼ D. 1面方形竪穴6 (北から)



▼ E. 1面方形竪穴6出土にぎりばさみ (北から)





◀ A. 1面溝状遺構1
・土坑5・方形土坑1
(北東から)



◀ B. 1面溝状遺構1
・土坑5(東から)

2面覆土出土常滑片口鉢I類 C. ▶

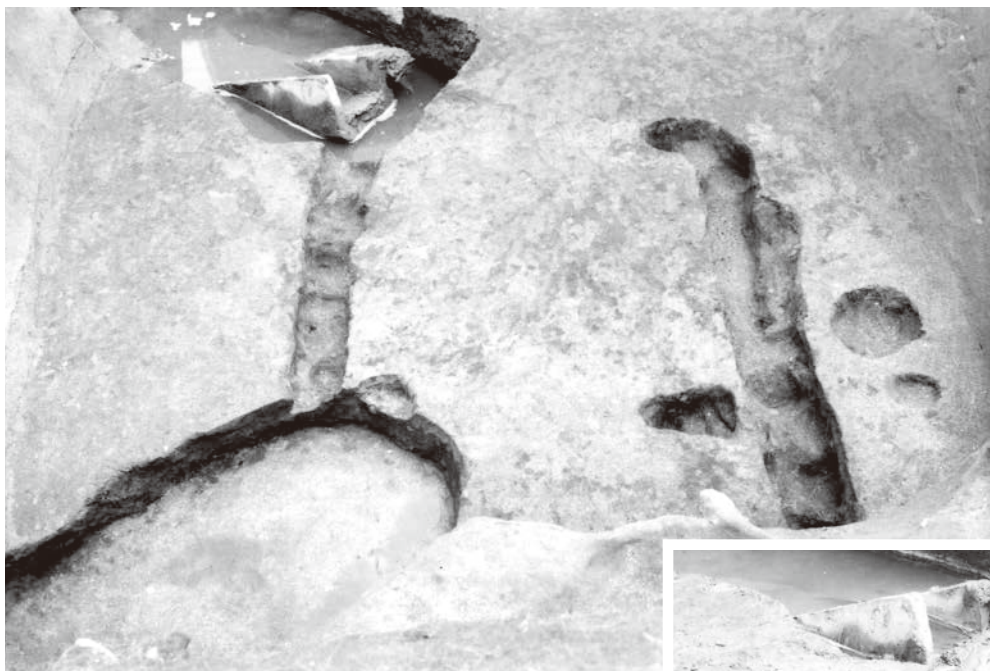




▲ A. 2面北半 (南から)



▲ B. 2面南半 (東から)



▲ A. 2面方形竪穴7 (西から)



2面方形竪穴7 北壁際柱穴群 (西から) B. ▶

▼ C. 2面方形竪穴7・方形土坑2 (南から)





▲ A. 2面方形竪穴8 (北から)

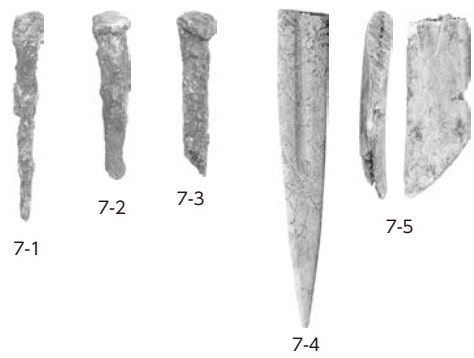


▲ B. I区北壁土層

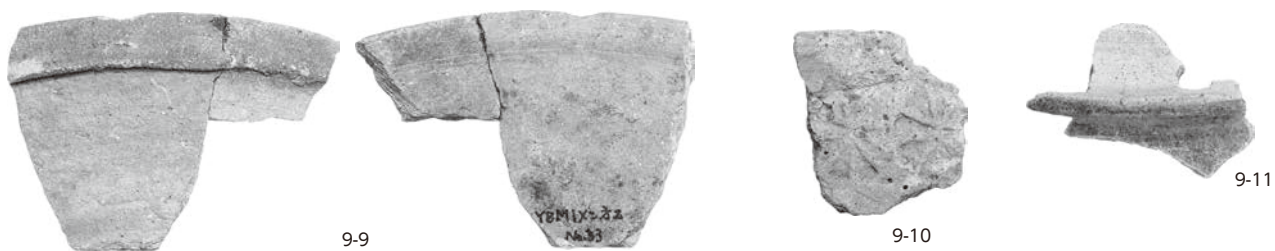
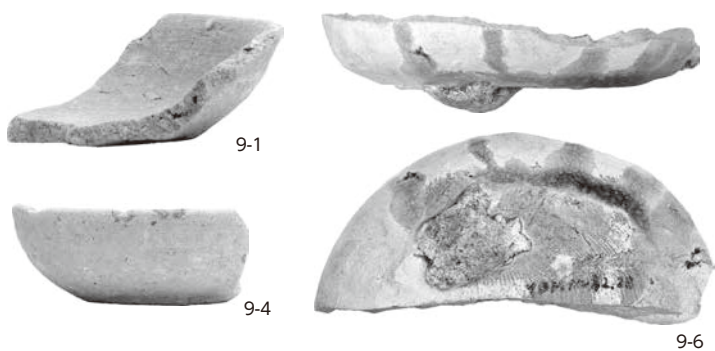


▲ C. II区東壁土層

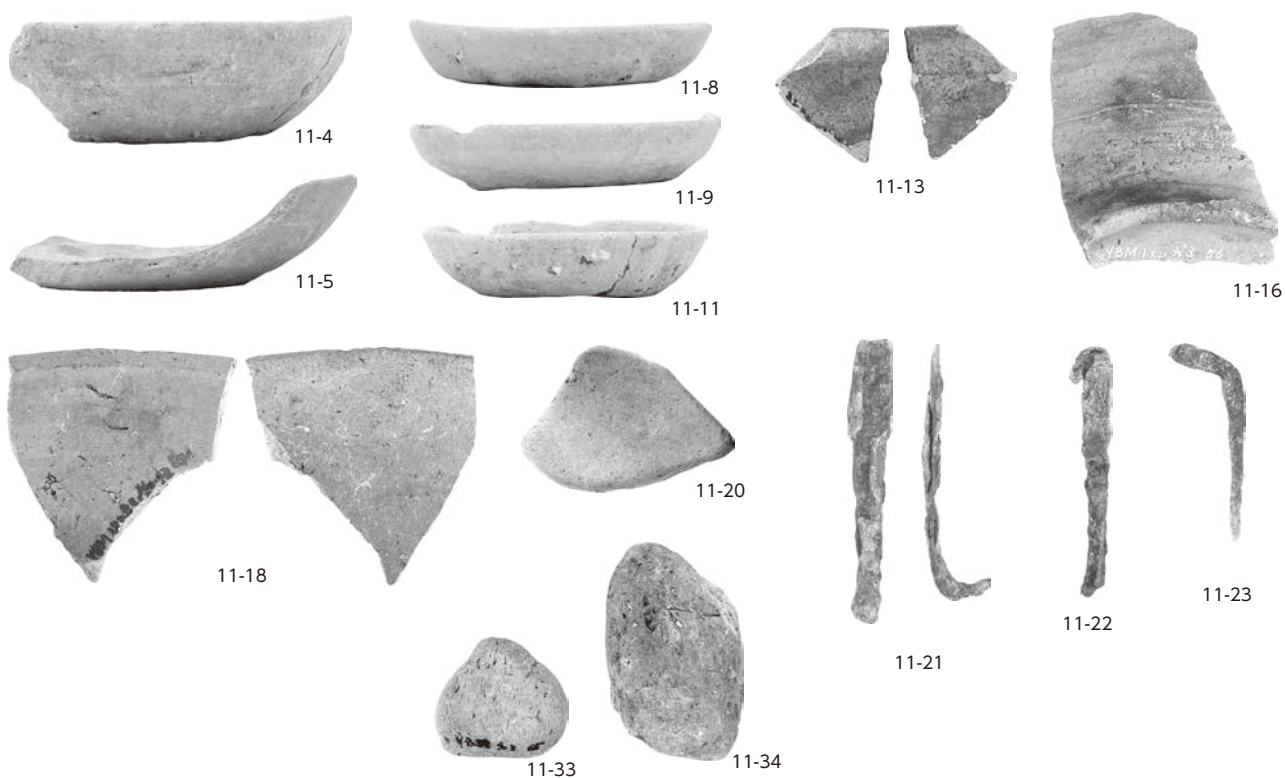
方形竖穴 1



方形竖穴 2

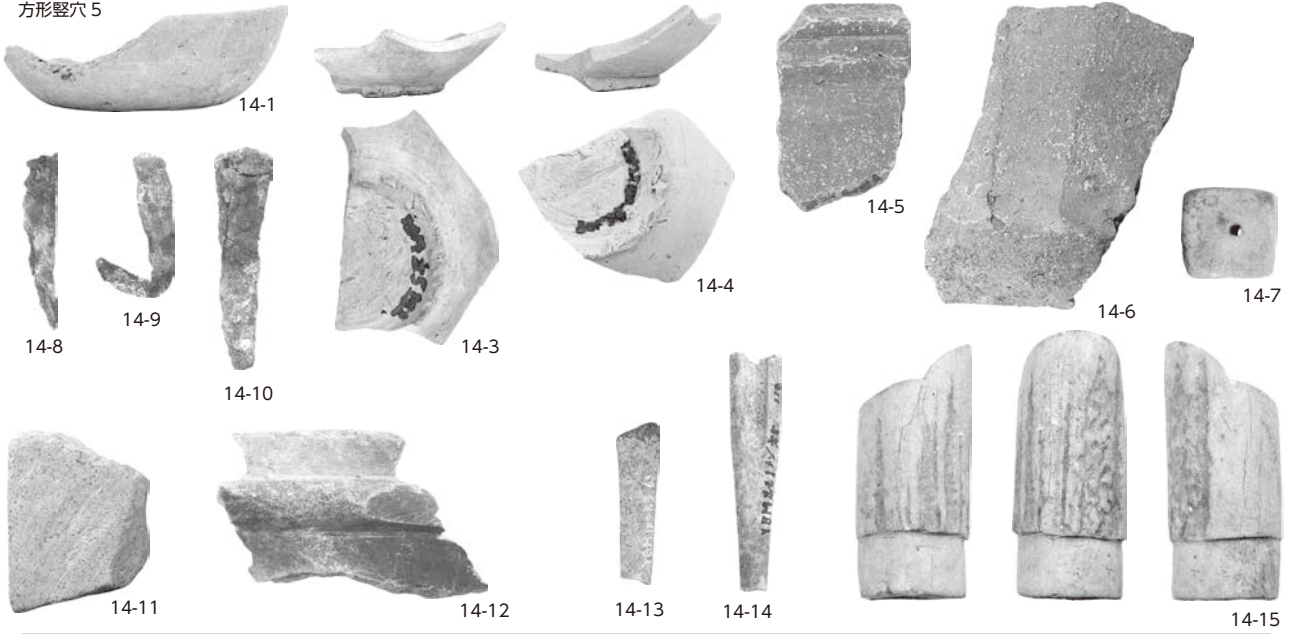


方形竖穴 3

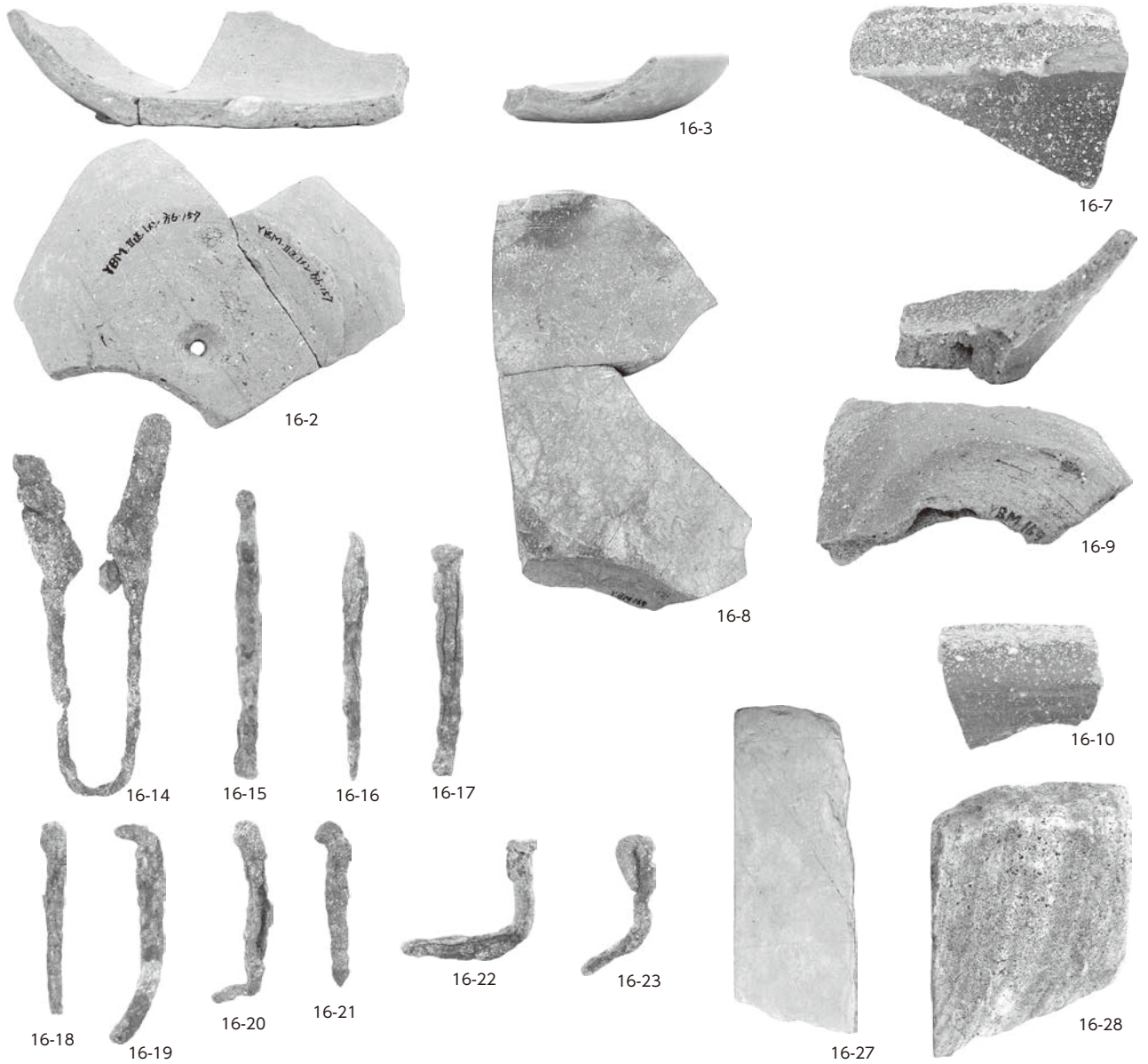


图版 8

方形竖穴 5



方形竖穴 6



表土层



20-2

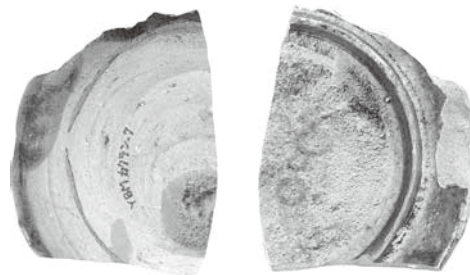
攪乱



20-6



20-7



20-8

1 面



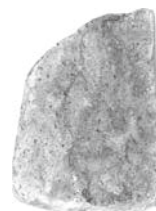
20-14



20-19



20-35



20-36

2 面



28-1



28-3



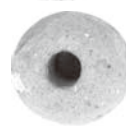
28-5



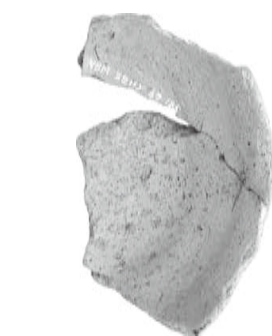
28-6



28-10



古代以前



29-1

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいぎんきゅうちようさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成23年度調査報告							
巻次	28 (第1分冊)							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者	原 廣志・宇都洋平/馬淵和雄・沖元道/原・宇都/馬淵/森 孝子・赤堀祐子							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2012年3月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 小町三丁目 425番1	14204	242	35° 32' 207"	139° 55' 72"	20050125 ～ 20050129	28.00	個人専用 住宅 (地盤の柱状改良)
ごくらくじきゅうけいだいせいせき 極楽寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 極楽寺二丁目 948番8	14204	291	35° 31' 333"	139° 52' 964"	20050407 ～ 20050520	50.50	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
ほうれんじあと 宝蓮寺跡	神奈川県鎌倉市 佐助二丁目 905番3	14204	374	35° 32' 398"	139° 54' 448"	20050407 ～ 20050708	72.99	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
かくおんじきゅうけいだいせいせき 覚園寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 二階堂字会下 351番1	14204	435	35° 32' 907"	139° 56' 454"	20050622 ～ 20050831	30.00	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 小町二丁目 11番2	14204	242	35° 32' 075"	139° 55' 138"	20050712 ～ 20050831	44.00	個人専用 住宅 (杭基礎構造)
ゆいがはまちゅうせいしゅうだんぼちせいせき 由比ガ浜中世集団墓地遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜四丁目 1107番32	14204	372	35° 31' 095"	139° 54' 611"	20050916 ～ 20051025	73.50	個人専用 住宅 (杭基礎構造)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	都市	中世	土坑、柱穴、 柱穴列、溝	かわらけ、貿易陶磁器、 国産陶器、瓦質製品、 石製品、金属製品、 木製品 等	
ごくらくじきゅうけいだいせいせき 極楽寺旧境内遺跡	社寺	中世	柱穴、土坑、溝、 基壇状遺構	かわらけ、貿易陶磁器、 国産陶器、瓦質製品、 石製品、木製品 等	
ほうれんじあと 宝蓮寺跡	社寺	中世	溝、柱穴、 土塁状遺構	かわらけ、貿易陶磁器、 国産陶器、石塔片、瓦 等	
かくおんじきゅうけいだいせいせき 覚園寺旧境内遺跡	社寺	中世	掘立柱建物跡、 土坑、柱穴	かわらけ、貿易陶磁器、 国産陶器 等	
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	都市	中世	道路状遺構、 竪穴建物	かわらけ、貿易陶磁器、 国産陶器 等	
ゆいがはまちゅうせいしゅうだんぼちせいせき 由比ガ浜中世集団墓地遺跡	都市	中世	方形竪穴建築址、 土坑、柱穴、溝	かわらけ、貿易陶磁器、 染付、国産陶器 等	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 28

平成23年度発掘調査報告

(第1分冊)

発行日 平成24年3月30日

編集・発行 鎌倉市教育委員会

印刷 芝浦エンジニアリング株式会社